

ロシア諸年代記に於ける

『過ぎし年月の物語』研究

植野修司

まえがき

『過ぎし年月の物語』《Повесть временных лет》は、ロシアにキリスト教が輸入され、文字が創られてから、初めての文献として出現した『オストロミー^vの福音書』《Остромирово Евангелие》と並ぶロシア最古の文献である。福音書が訳されたのは1056年から翌年にかけてであつたが、おそらく『過ぎし年月の物語』は既にその頃には出来上つていたと思われる。この『物語』を含む種々のロシア年代記の記述から考え合わせると、1037年から1039年に至る頃に、最も古いロシア年代記が創られたもののように思われるからである。一般に最古のキーエフの年代記集と考えられるこの文献は、残念ながら現存してはいない。

ところが、十一世紀の60年代に、キーエフ・ペテエルスキー修道院《Киево-печерский монастырь》の修道院長《игумен》＝コン《Никон》が、その最古のものを引きついで、1073年の記事まで書きつゞけたのであつた。そして、それから二十年ほどの後、即ち1093年から95年にかけて同じこの修道院で再び書き写され、書き加えられた。そして、これを原初の年代記集と呼んだのである。この両者の書物或はその写本もまた現在には伝えられていない。

ところが、今度は十二世紀のはじめ、正確には1112年か1113年に再び同じ修道院で修道士《монах》のネストル《Нестор》がもう一度編集して書きとめた。現在に残る『過ぎし年月の物語』の原型である。また1116年頃にもこの『物語』をミハイロフスキー修道院《Михайловский монастырь》の修道院長シリウエストル《Силвестр》が編集して、1110年の記事まで書き加えたのであつた。『ロシア原初年代記』と言われ、或は『過ぎし

年月の物語』とも言われるこれらの写本もまた、残念ながら現在には伝わっていない。然し、この年代記の仕事は、全く聖なるものとして引きつがれてきたために、その後の渾大なロシア諸年代記に見事な定着を示したのであつた。その様な諸年代記の写本は現在二百以上を数えることができるが、そのうちでも、最も古い写本である1377年のラヴレンチー年代記《Лаврентиевская летопись》を素心にすえて、その他のものを横に置きつゝ、『過ぎし年月の物語』を見つめてゆくことにしたい。其処には非常に古い古代ロシア語が文字化された十一世紀初頭には、既に高い表現力を持ち得ていたことも認められるであろうし、それ以前の遙かに遠い過去からの伝承文学の美しい投影もまた読み取ることができると思われる。或はまた十一世紀初頭の輸入キリスト教の摂取の面白さも掘り出し得るかも知れない。そして、何よりも、古代ロシア語の姿を、その話し言葉にまで及んで追求し得るであろう。

— A —

『過ぎし年月の物語』が初めて書きとめられた時期を1037年であつたとすれば、此処に書きとめられたその年以前の出来事の物語は、一体、何に由来するものなのであろうか。ビザンチンから持ち込まれた文献を除外するとすれば、文字をもたなかつたロシアにとつてはその由来を文字以前の口頭伝承に求めなければならぬであろう。まして、その出来事の物語に明確な年号が設定される以前の記述に関しては、なおさらのことである。民族の歴史の深い深い過去を映し出す口頭伝承に、どれほどの歴史事実が反映しているものなのか、此処でそれを問おうとするのではない。むしろ、その伝承をおのれの民族の霧深い過去の姿と感じて、其処に物語を組み立てたその基盤からほぐし出してみようとするの

である。

さて、ラヴレンチー年代記には、ロシア最古の都キーエフ《
Киев》の建設について、次の様な物語が読み取られる。

Полянном же живущем особе и володеющем роды своими,
иже и до сее братье бяху Поляне, и живяху кождо
с своим родом и на своих местех, владеюще кождо
родом своим. Быша 3 братья, единому имя Кий, а дру-
гому Щек, а Третьему Хорив, сестра их Лыбедь. Се-
дяще Кий на горе, где же ныне увоз Боричев, а Щек
сediaше на горе, где ныне зовется Щековица, а Хо-
рив на третьей горе, от него же прозвася Хориви-
ца; и створиша град, во имя брата своего старей-
шаго, и нарекоша имя ему Киев. Бяше около града лес
и бор велик, и бяху ловяша зверь; бяху мужи мудри
и смыслени, нарицахуся Поляне, от них же есть По-
ляне в Киеве и до сего дне. Ини же сведуще рекоша,
яко Кий есть перевозник был; у Киева бо бяше пере-
воз тогда с оной стороны Днепра, тем глаголаху: на
перевоз на Киев. Аще бо бы перевозник Кий, то не
бы ходил Царьгороду; но се Кий княжаше в роде своем;
приходившу ему ко царю, якоже скажутъ, яко велику
честь приял от царя, при котором приходив цари.
Идущу же ему опять, приде к Дунаеви, възлюби место
и срубил градок мал, хотяше сести с родом своим,
и не даша ему ту близъ живущии; еже и донныне нари-
чють Дунайци городище Киевецъ. Киеви же пришедшу в
свой град Киев, ту живот свой сконча; а брат его
Щек и Хорив и сестра их Лыбедь ту скончашася.

イパーチー年代記, トロイツキー年代記も大体同じ文章である。

意味は、

『ポリヤネが別々に住んでいたとき、そして自分の氏族を支配していたとき、それらは、これらの兄弟たち以前にもまたポリヤネであつた。そして、おのおの自分の氏族を支配しながら自分の氏族と共に、そして自分の場所においておのおの住んでいた。三人の兄弟がいた。一人の名前はキー、もう一人はシチエク、三人目はホリフで、彼等の妹はルイベジであつた。現在ポリチエフの坂がある山に、キーが住んでいた。ところが現在シチエコウイツアと呼ばれている山にシチエクが住んでいた。ところでホリフは三番目の山に。彼の故にホレヴイツアと名づけられた。そして最年長の兄弟の名において町をつくり、そしてその名をキエフ（「キーの」という意味である）と呼んだ。町のまわりに森と大きな森林があつた。そして（彼等は）獣の狩猟を事としていた。（彼等は）賢明で思慮深い人物たちであつた。（彼等は）ポリヤネと名づけられた。彼等から今日に至るまでもキエフにはポリヤネがいるのである。あるものは知りもせずにキーが渡し守であつたと言つた。というのはキエフのそばには当時ドニエブル（河）の対岸からの渡しがあつた。それによつて、キエフへの渡しへと言つたものである。もしもキーが渡し守であつたならば、彼は、ツアリゴロドへは行かなかつたであらう。しかし見られる通り、キーは自分の氏族の中で公であつたのである。彼が皇帝の所へ来たとき、人びとの言うところによれば、彼が着いたときその皇帝からおおいなる名譽を受けたと言う。彼がもどるとき、ドウナイに來たり、その地を特に愛し小さい町を建て自分の氏族と共に住もうと欲していたが、そのそばに住んでいたものたちが彼に許さなかつた。そのとりでの町を今なおドウナイの人びとはキエヴエツイと呼んでいる。キーが自分の町キエフについたとき、そこで自分の一生を終つた。ところが、彼の兄弟シチエクとホリフおよび彼等の妹ルイベジもそこでなくなつた』

というのである。この記事の中から、「現在それは何々と言われている」という註記的部分を取り去り、且つ、渡し守ではなかつたという註記的部分をも取り去つて見るがよい。そして、其処に残つたものの中で、極端なまでに目立つ絶対与格の非常に古い使用法を冒頭に組み出してみたらどうなるであろうか。まさに、古いブイリーナ《Былина》的の傳承物を思わせるのである。

そして、それよりもなお面白い傍証があることを述べよう。その手がかりは先づこの文章の用語である。一例をあげてみよう。渡し守ではなかつたという個所を註記的部分と考えずに、既に当時、この傳承にバリエーションがあつた証拠だと考えて、『ツアリゴロドへは行かなかつたはずである』《не бы ходил Царю—городу》という一節を取りあげて見よう。裏から言えば、キーはツアリゴロド（ビザンチン）へ『行つた』《ходил》のである。だから続いて『彼が皇帝（ビザンチンの）のところに着いた時』《приходи вшо ему ко царю》と述べられたのである。用語というのは、此処で使われた『行く』《ходить》，或は『着く』《приходить》なのである。特にこの二語を便宜上取りあげてみる。キーがビザンチンへ行つた、皇帝のところへ着いたとは一体、何を意味するのか。《(при-)ходить》という古代ロシア語は余りにその内容があいまいで、全く、やつかいである。その才一の意味は『歩行する』、才二には『動く』、才三には『歩き廻る』、才四には『歩き着く』、才五には『抜け出る』、才六には『通り抜ける』、才七には『旅行する』、才八には『出頭する』、才九には『出現する』、才十には『着く』、才十一には『対面する』、才十二には『存在する』、才十三には『生きている』、才十四には『行動する』、才十五には『実行する』、才十六には『処致する』、才十七には『衣服をつけている』、等々の内容を蔵し、且つ、この動詞の後に《на》という対格支配の前置詞を付した時にのみ、『軍勢を進める』、『攻撃する』、『進

軍する』等という軍事的意味をになうのであつた。軍事的意味において、軍勢を進めることを、多くのその後の年代記にみられる古代ロシア語では、必ず«ити на...»で表現しているではないか。

それにもかかわらず、この物語が書きとめられて後も、その源であつた伝承は、なお、口頭で語り伝えられ、然も、「行く」«ходити»を英雄叙事詩的に進軍するという意味に染めぬかれてしまつていた証拠がある。他の諸年代記のこの個所を比較してみるのがいい。

(1) Софийская Первая Летопись:

Аще бы Кий перевозник был, то не бы ходил Царю-граду; но сей Кий княжаше в роде своем, и приходи-вшу убо ему ко царю...

(2) Новгородская Первая Летопись младшего извода:

его же нарицають тако перевозника бывша; инеи же: ловы деяше около города.

(3) Троицкий список новгородской летописи:

егоже нарицают древле перевозника бывша; инии же, яко ловы деяше около града своего.

(4) Воскресенская летопись:

Аще бы Кий перевозник был, то не бы ходил к Царюграду; но се Кий княжаше в роде своем, и приходившу бо ему к царю...

(5) Патриаршая или Никоновская Летопись:

Аще бы был Кий перевозник, не бы ходил к Царюграду с силою ратью;

(6) Тверская Летопись:

Аще бы Кий прьвозникъ былъ, то не бы ходил ко (царю); но сей Кий княжаше в роде своем, и приходявшу (бо) (ему) ко царю...

(7) Львовская Летопись:

Аще бы Киев перевозник был, то не бы ходил ко Царюграду; но сей Кий княжаше в роде своем. Приходившу бо ему ко царю...

(8) Сокращенный летописный свод 1495г.

Аще бо бы Кии перевозник, то не бы ходил к Царюграду; но сей Кий княжаше в роде своем, приходившу ему и к царю...

(9) Сокращенный летописный свод 1493 г.

Тоже самое, как в своде 1493 г.

(10) Вологодско-пермская Летопись:

Аще бы Кии перевозник был, то не ходил ко Царюграду, но сии Кии княжаше в роде своем и ходившюся ему ко царю...

(11) Московский летописный свод конца 15 века:

Аще бо Кьи перевозник был, то не бы ходил Царюграду; но сей Кьи княжаше в роде своем, и приходившу бо ему к Царю...

僅かに(5)として上にあげたニコン年代記にのみ、『軍勢を連れて』«с силою ратью»と書きとめられているに過ぎないではないか。これによれば、キーのツアリグラード行きは、旅行の如きものではない。進軍なのであつた。にもかゝらず、其処には、いまだに『歩く』«ходить»という動詞が同いられ、然も、その直後には«к... (与格)»という形が用いられたのみで、攻撃することを意味した«на... (対格)»は、やはり用いられていない。とすれば、この一節は、「ходить»だけで進軍を現した非常に古い叙事詩的用語の精一杯の援用であつたと思わざるを得ない。

他の年代記にあつては、総て、この伝承英雄叙事詩的な全く古いまゝの語法を完全にそのまま踏襲したのであつた。そして、ニコン年代記だけが、内容をより明確ならしめんとして、精一杯の援用によつて、年代記の聖なる仕事を守りつゝ、なお、より民衆的な伝承叙事詩ブイリーナにみられるような、「с силою ратью・・・」正確には、「力なる軍勢を伴いて」という全く庶民的な表現を組み入れる努力を見せたのだと思われる。

では、年代記にのみ影をおとして、今は消え去つたそんな英雄叙事詩が、いつの頃からロシアの祖先たちにあつたのであろうか。十世紀以後にしか文字を持ち得なかつたこの民族に、それを尋ねる可能性はほとんどない。たゞ一つだけ、次の様な事実があげられる。

即ち、七世紀のアルメニアの歴史家ゼノブ・グラク《Зеноб Глак》が書きとめた面白い話がある。カウル《Каур》という町がボルニ《полунь》の国に建てられた。その町の創建者の名は、ゼノブによればカウル《Каур》、メンチエイ《Ментей》、ヘレアン《Хереан》であつた。カウル《Каур》 \longleftrightarrow キエフ《Киев》、キー《Кий》；メンチエイ《Ментей》 \longleftrightarrow シチエク《Щек》；ヘレアン《Хереан》 \longleftrightarrow ホリフ《Хорив》；国名ボルニ《Полунь》 \longleftrightarrow ポリヤネ《Поляне》と対応させて見て、この七世紀アルメニアにおける他国の町の建設の物語が、もしも、ロシアの先祖たちの英雄叙事詩の投影であつたとしたら面白い。たしかに、その頃にはスラヴ民族の氏族的軍勢即ちドルジーナ《дружина》がハザル人《хазар》と共に外コーカサス《Закавказье》を戦い取つていたし、また、北コーカサスにいたスラヴ民族の進取的な連中がアルメニアにも入り込んでいた。その様な連中がアルメニアに持ちこんだ叙事詩であつたとすれば、それは、たしかに、農民的な平民叙事詩でなくて、むしろ、親兵団的な軍事英雄詩であつたであらう。だからこそ、キーというキーエフの創建者をビザン

ナン戦争の英雄にも仕立てあげていたのであろう。『歩く』《ходити》や『着く』《приходити》を以て単にそれだけで軍事行動を意味させた用法も、うなづかれる話である。

その様な親兵団的な軍事英雄詩は、『過ぎし年月の物語』が書きはじめられる十一世紀初頭には、既に鮮やかな原型をくづして、一方は農民的な渡し守の物語詩へ、または、狩獵者の物語へとバリエーションを生み出してしまつていたのであろう。その様にして、親兵団的な本来の内容へ、その記録を近づけようとした努力の跡が、先にあげたニコン年代記の表現努力の手法にみとめられるのである。

ちなみに『歩く』《ходити》が始めて《на・・・(対格)》を伴つて、『進撃する』という意味に用いられたのは、年代記ではプスコフオ一年代記6538年(西曆1030)年の項に

«Ходил Ярослав Володимеричъ изъ Новагорода на Чюдъ»

『ヴラジミルの子ヤロスラフはノヴゴロドを出でてチユージュに進撃した』

とあるのと、もう一個、同じ年代記にその後434年あとの6972年の項に

«им есми ходити на вас не велел»

『彼等には、汝等を攻めるように(我は)命じてはいなかつた』とあるのが認められる。そして、それ以外はほとんどすべて《ити на・・・(対格)》という形で記述されているのが年代記の姿である。

《на・・・(対格)》を伴つてさえ、《ходити》はその様にしか機能しなかつた。裏から言えば、プスコフオ一年代記の6583年の項にみられる記述も、キーの場合と同様に英雄叙事詩の一節かその投影(《на対格》をつけたと考えると)であろう。そして、同じ年代記の6972年の項は、記述用語ではなくて、生きた当時の話し

言葉であつたと思われる。英雄叙事詩的な言葉の用法が、後の少し手を加えられて公や支配者たちの公式的な話し言葉に生れ変つていた面白い現象が、此処に一つみとめられるとしておこう。

— B —

英雄叙事詩や民間歴史歌謡やブイリーナのようなもの以外に、『過ぎし年月の物語』は、非常に多くの伝説を利用したものである。ある人物の記述の後に付け加えられた『その墓は……に今日までもある』というような個所は、その多くの場合が大きな塚にまつわる伝説であつたか或は伝説の組み合わせであつただろう。或はその人物が滞在したり、利用したような遠跡にまつわる話もまたそのようなものと考えてよいであろう。叙事詩にしる、語り物の伝説にしる、そのようなものを『過ぎし年月の物語』の作者——編者たち——がその全部を知つていた筈はない。むしろ、日本における古事記の話のような、非常にすぐれて言い伝えの憶え手が十一世紀や十二世紀初頭のロシアにも居たものと思われる。年代記の中には、それらの物語の語り手がいたことを示す明確な個所がある。『過ぎし年月の物語』の作者——編者——が、珍らしく『我は』«аз»という一人称主格の形で正面に顔を出して、自己を語る個所を調べてみるがよい。その様な個所は非常に少ないが、その中でも6614年の項、即ち西暦で言えば1106年の項の一節は絶対に見落してはならないであろう。

即ち、ラヴレンター、イパーチー、トロイツキー、等の年代記には大体同一文章で次の様な一節がみとめられる。

В се же лето преставися Ян, старецъ добрый, жив лет 90, в старости мастите; жив по закону Божью, не хужий бе первых праведник, от него же и аз многа словеса слышах, еже и вписах в летописаньи сем

『この同じ年にヤンが亡くなつた。立派な長老で、九十年生き、大した老令であつた。神のおきてに従つて生き、古の義の人たちに劣らなかつた。その彼から我は多くの物語を聞いた。彼から我が聞いたそれを年代記の中に書き入れもした。』

この言葉はニコン年代記にも同年の項にほぼ同じような意味で次のように記録されている。

Того же лета преставися Ань, добрый старецъ, жив лет 90, в старости мастите, по закону Божию, не хуже бе пръвых праведников, от негоже и аз многа словеса слышах;

此処には、ヤンから聞いたものを年代記に書き込みもしたという一節は見当らないが、同じ意味にとつて、さしつかえない。この他の多くの年代記の、この項の記事に就て引用することは、もう省略しておこう。

少くとも『過ぎし年月の物語』の作者——編者——がヤンの口から聞いた多くの物語を書き入れたことには間違いない。ではそのヤンと言う人物は一体如何なる人物であつたのだろう。半ば職業的な説話や伝説の語り手であつたのだろうか。

再び、ラヴレンチー年代記、イバーチー年代記、トロイツキー年代記等に立ち戻つてみよう。ヤンの父 «Вышата Остромилович» ヴイシャタ・オストロミーロヴィチを書きとめた記事が見出される。即ちヤンの死の五十三年前、西暦1043年、ロシア年代記年号6551年の項に、ヤン自身の父の姿が書きとめられている。おそらく、そのほとんどはヤン自身が語つたそのままの内容であり、言葉であつたであろう。

В лето 6551.



Посла Ярослав сына своего Володимера на Гръкы, и вда ему вой мног, а воеводство поручи Вышате,

отцу Яневу. И поиде Володимер в лодьях, и придоша в Дунай, поидоша ко Царюграду; и бысть буря велика, и разби корабли Руси, и князь корабль разби ветр, и взя князя в корабль Иван Творимичь, воевода Ярославль. Прочии же вои Володимери ввержени быша на брег, числом 6000, и хотяче поити в Русь, и не иде с ними никтоже от дружины княжее. И рече Вышата: "аз пойду с ними"; и выседе из корабля к ним, рек: "аще жив буду, то с ними, аще погыну, то с дружиною" и поидоша хотяче в Русь. И бысть весть Грьком, яко избило море Русь, и посла царь, именем Мономах, по Руси олядий 14; володимер же виде с дружиною, яко идуть по них, въспятився изби оляди Гречьския, и възвратися в Русь, оседавшися в корабле свое. Вышату же яша с извержёнными на брег, и приведоша я Царюграду, и слепиша Руси много; по трех же летех миру бывшю, пущен бысть Вышата в Русь к Ярославу. В си же времена вдасть Ярослав сестру свою за Казимира, и вдасть Казимир за вено людей 8 сот, еже бе полонил Болеслав, победив Ярослава.

『6551年。

ヤロスラフはおのれの息子ヴオロジメルをグレキに派遣した。しかして、彼に多くの軍勢を与え、また司令職をヤンの父ヴィシヤタにまかせた。しかしてヴオロジメルは舟で出かけ、(人々は)ドナイに着き、ツアリグラードへ出かけた。しかして大いなる嵐があり、ルシの舟を打ちくだいた。しかして嵐が公の舟を打ちくだいた。ヤロスラフの軍司令のイヴァン・トヴォリミチが公を舟に引き取つた。ところでヴオロジメルの他の軍勢は崖に投げ出さ

れていた。その数六千である。しかして、(彼等は)ルシに戻ろうと欲した。しかして公の親兵団のうちには誰一人として彼等と一諾には行かなかつた。しかしてヴァシヤタは言つた。「我は彼等と共に行くであらう」と。しかして舟から彼等の方へ上陸して言つた。「もしも(我が)生きているとすれば、彼等と共にであらうし、もし、倒れるのなら、親兵団と共にであらう」と。しかして、ルシへと欲して(人々は)出かけた。しかして、海がルシを打ち破つたという知らせが、グレキたちにあつた。しかしてモノマフという名の皇帝がルシを追つて十四隻の舟を派遣した。ところで、自分たちを(グレキが)追つて来るのを親兵団と共にヴォロジメルが見て、引き返してグレキの舟を打ち破つた。しかして、おのれの舟に乗つてルシに帰還した。ところで岸べ打ちあげられた人々と共にヴァシヤタを(グレキは)捕え、それらをツアリグラドに連れて来た。しかして多くのルシを盲目にした。三年後に和睦ができた時、ヴァシヤタはルシのヤロスラフのもとへ放免された。この同じ頃にヤロスラフはおのれの妹をカジミルに与えた。しかしてカジミルは結納としてボレスラフがヤロスラフを打ち負かして捕虜にしていた八百人を贈つた』

ヤンの父は、その父称から直ちに分る通り、ロシア最古の文献であるオストロミー  の福音書の筆者オストロミー  の子であり、上に引用した年代記の記述によれば、公の側近の武人であつた。いや、むしろ、公の最も信望厚い文人であつたかも知れない。戦や危急の折には余り役に立たず、むしろ、知性の高い人物で筋の通つた行為には勇気を持ち、耐えしのおべきは耐え抜くだけの意志の人であつたことが、この記述から読み取られるであらう。

ヤン自身がおのれの父をどれほどかでも粉飾して年代記者に語つたものだとしても、むしろ、その粉飾を読み取ることの方が困難な文章であるかも知れない。他の諸年代記もまたほぼ同じ記述

を持つているに過ぎないからである。

では、おのれの父をその様に本質に迫つて立派に語り得たヤン自身は、その活動期に如何なる人物であつただろうか。

再び『過ぎし年月の物語』に立ち戻り、ラヴレンチー、イパーチー、トロイツキの各年代記に種々同一の形で記述される彼自身の話を求めてみよう。年代記者がヤンから聞いたヤン自身の物語にふさわしく、その一節は非常に具体的で長い。その具体性を示すためにも、此処に引用しておかなければなるまい。即ち、彼が年代記に示される通り、1106年に九十才で死んだとすれば、その年をさかのぼること三十五年前、即ち彼が五十五才の時の出来事である。西暦1071年、年代記年号6579年の項の記述である。

В лето 6579.

Боеваша Половци у Ростовыця и у Неятина. В се же лето выгна Всеслав Святополка из Полотыска. В се же лето победи Ярополк Бсеслава у Голотичьска. В си времена приде волхв, прелщен бесом; пришед бо Киеву глаголаше сиче, поведи людем, яко на пятое лето Днепру потещи вспячь и землям преступати на ина места, яко стати Гречьскы земли на Руской, а Русьскей на Гречьской, и прочим землям изменитися; его же невегласи послушаху, вернии же насмежаются, глаголюще: "бес тобою играетъ на пагубу тебе". Се же и бысть ему: в едину бо ночь бысть без вести. Беси бо подытокше на зло вводятъ, посем же насмисаються, ввергыше и в пропасть смертную, научивше глаголати; якоже се скажем бесовское наущенье и действо. Бывши бо единою скудости в Ростовьстей области, всташа два волхва от Ярославля, глаголюща: "яко

вѣ свеве, кто обилье держить"; и поидоста по Волзе, кде придуть в погосте, ту же нарицаху лучьшиє жены, глаголюща, яко си жито держить, а ся мед, а си рыбы, а си скору. И привожаху к нима сестры своя, матере и жены своя; она же в мечте прорезавше за плечем, выимаєта любо жито, любо рыбу, и убивашета многы жены, именье их отымашеста себе. И придоста на Белоозеро; и бе у нее людей не 300. В се же время приключися прити от Святослава дань емлющу Яневи, сыну Вышатину; поведаша ему Белозерци, яко два кудесника избила уже многы по Волзе и по Шексне, и пришла еста семо. Ян же испытав, чья еста смерда, и ведав, яко своего князя, послав к ним иже около ея суть, рече им: "выдайте волхва та семо, яко смерда еста моего князя", они же сего не послуша. Ян же поиде сам без оружья, и реша ему отроци его: "не ходи без оружья, осоромятъ тя"; он же повеле взяти оружья отроком, и беста 12 отрока с ним, и поиде к ним по лесу. Они же сташа исполчившеся противу, Яневи же идущу с топорцем, выступиша от них 3 мужи, придоша к Яневи, ркуще ему; "вида идеши на смерть, не ходи; оному повелевшю обити я, к прочим же поиде. Они же сунушася на Яня, един грешися Яня топором, Ян же оборота топор удари и тыльем, повеле отроком сеци я; они же бежаша в лес. Убиша же ту попина Янева. Ян же вшед в град к Белозерцем, рече им: "аще не имете волхву сею, не иду от вас и за лето". Белозерци же шедше яша я, и приведоша к

человек?" Она же рекшема: "яко ти держать об-
илье, да аще истребиве сих, будеть гобино; аще
ли хоцещи, то перед тобою вынемеве жито, ли ры-
бу, ли ино что". Ян же рече: "по истине лжа:
створил Бог человека от земле, еоставлен костьми
и жылами от крове, несть в нем ничтоже; и не
весть ничтоже, но токмо един Бог весть". Она же
рекоста: "ве веде, како есть человек створен".
Он же рече: "како?" Она же рекоста: "Бог мывься
в мовници и вспотився, отерься ветьхом, и верже
с небесе на землю; и распреса сотона с Богом,
кому в нем створити человека? И створи дьявол
человека, а Бог душу в не вложи; темже аще ум-
реть человек, в землю идеть тело, а душа к Богу".
Рече има Ян: "по истине прельстил вас есть бес;
коему Богу веруета?" Она же рекоста: "антихристу".
Он же рече има: "то где есть?" Она же рекоста:
седить в бездне". Рече има Ян: "какий то бог,
седя в бездне? то есть бес, а Бог есть на небеси,
седя на престоле, славим от ангел, иже предсто-
ать ему со страхом, не могуще на нь зрети; сих бо
ангел свержен бысть, егоже вы глаголета антихре-
ст, за величанье его низвержен бысть с небес,
и есть в бездне, якоже то вы глаголета, жда, егда
придеть Бог с небес, сего им антириста, свяже-
ть узами и посадить и, ем его с слугами его и
иже к нему веруютъ: вама же и zde муку прияти от
мене, и по смерти тамо". Она же рекшема: "нама
бози поведають: не можещи нама створити ничтоже".
Он же рече има: "лжють вама бози". Она же реко-
ста: "нама стати пред ¹⁷Святославом, а ты не може-

ши створити ничтоже". Ян же повеле бити я, и потергати браде ею. Сима же тепенома и браде ею поторгане проскепом, рече има Ян: "что вама бози молвять?" Онема же рекшема: "стати нам пред Свято-славом". И повеле Ян вложити рубль в уста има, и привязати я к упругу, и пусти пред собою лодье, и сам по них иде. Сташа на Шексины, рече има Ян: "что вам бози молвять?" Она же реста. "сиде нама бози молвять, не быти нама живым от тебе". И рече има Ян: "то ти вама право поведали". Она же рекоста: "но аще наю пустиши, много ти добра будеть; аще ли наю погубиши, многу печаль примеш и зло". Он же рече има: "аще ваю пуцю, то зло ми будеть от Бога". И рече Ян повозником: "ци кому вас кто родин убьен от сею?" Они же реста: "мне мати, другому сестра, иному роженье". Он же рече им: "мьстите своих". Они же поимше, убиша я и повесиша е на дубе: отмьстье приемша от Бога по правде. Яневи же идуцю домови, в другую ноць медведь възлез, угрыз ею и снесть; и тако погубуста наученьем бесовьским, инем ведуща, а своее нагубы не ведуча. Аще ли быста ведала, то не быста пришла на место се, идеже ятома има быти; аще ли и ята быста, то почто голаголаста: "не умрети нама", оному мысляцю убити я? Но се есть бесовьское наученье; беси бо не ведять мысли человекьское, но влагають помысл в человека, тайны не сведуще. Бог един свесть помышленья человекьская, беси же не сведають ничтоже; суть бо немощни и худи взором. Яко и се скажем о взоре их и о мраченьи их. В си бо времена, в лета си, при-

клучися некоему Новгородцю прити в Чюдь, и приде к кудеснику, хотя волхвованья от него; он же, по обычаю своему, нача призывати бесы в храмину свою. Новгородцю же седящу на пороге тоя же храмины, кудесник же лежаше оцепев, и шибе им бес; кудесник же встав рече Новгородцю: "бози не смеють прити, нешто имаша на собе, его же боятся". Он же помянув на собе крест, и отшед постави кроме храмина тое; он же нача опять призывати бесы, беси же метавше им, поведаша, что ради пришел есть. Посем же поча прашати его: "что ради боятся его, его же се носим на собе креста?" Он же рече: "то есть знаменье небеснаго Бога, его же наши бози боятся". Он же рече: "то каци суть бози ваши, кде живут?" Он же рече: "в безднах; суть же образом черни, крилаты, хвосты имуще, всходятъ же и под небо, слушающе ваших богом; ваши бо ангели на небеси суть, аще кто умреть от ваших людей, то възносим есть на небо; аще ли от наших умираеть, то носим к нашим богом в бездну". Якоже и есть: грешници бо в аде суть, ждуще муки вечныя, а праведници в небеснем жилище водваряются со ангелы. Сиця ти есть бесовская сила, и лепота, и немощь; тем же прелщяють человеки, веляще им глаголати виденья, являющеса им несвершеным верою, являющеса во сне, имен в мечте, и тако волхвуютъ наученьем бесовским. Паче же женами бесовская вольшвенья бывають, искони бо бес жену прелести, си же мужа; тако в си роди много волхвуютъ жены чародейством, и отравою, и имени бесовскими козньми. Но и мужи прелщени бывають от бесов

невернии; яко се в первыя роды при апостолах бо бысть Симон волхв, иже творяще волшьством псом глаголати челоувечьскы, и сам прменяше, ово стар, ово молод, ово ли и иного прменяше во иного образ, в мечтаны сиче творяше; Анни и Мамврий волшвенем чюдеса творящеть противу Моисиови, по вскоре не възсогоста противу Моисиови; но и Коноб творяше мечтанье бесовьско, яко и по водам ходити, ина мечтанья творяше, бесом лстим, на пагубу себе и инем. Сиче бе волхв встал при Глеб Нове-городе; глаголеть бо людем, творяся акы Бог, многы прельсти, мало не всего града: глаголашеть бо, яко "все ведаю", и хули веру хрестьянскую, глаголашеть бо: "яко переиду по Волхову пред всеми". И бысть мятежь в граде, и вси яша ему веру, и хотяху погубити епископа; епископ же взем крест и облекься в ризы, ста рек: "иже хочеть веру яти волхву, то да идеть за нь; аще ли веруеть кто, то ко кресту да идеть". И разделишася надвое: князь бо Глеб и дружина его идоша и сташа у епископа, а людьє вси идоша за волхва; и бысть мятежь велик межи ими. Глеб же возма топор под skutом, приде к волхву и рече ему: "то веси ли, что утро хочеть быти, и что ли до вечера?" Он же рече: "все ведаю". И рече Глеб: "то веси ли, что хочеть быти днесь?" "Чюдеса велика створю" рече. Глеб же вынем топор, ростя и, и паде мертв, и людьє разидошася; он же погыбе телом и душею, предавься дьяволу.

『 6579 年 .

ロストヴエツのほどり , およびネヤチンのほつりをボロヴエツたちが攻めた . この同じ年にフセスラフがボロツクからスヴイヤトボルクを追い出した . またこの同じ年に , ヤロボルクがゴロチチエスクのほつりでフセスラフを打ち負かした .

この頃に , 悪魔にまどわされたよう術師が来たつた . (彼は) キエフに来たり , 人々につたえて次のように言つた . 五年目にはドニエプル河が逆流して , 国々は別の所に動くはずである . グレキの国はルシの (国に) , ルシのはグレキの (国になり) , しかして他の国々も変るはずであると . 無知なものたちは彼の言うことを聞いたが , 信仰ある人々は笑つて彼に言つた . 『悪魔が汝を , 汝の破滅に向つてもてあそんでいるのである』と . たしかに彼はその通りであつた . 即ちある夜 , (彼は) , 音沙汰なくなつた . というのは悪魔たちは , (人々を) そそのかして , 悪にみちびき込み , しかる後に , 彼らを死の淵に投げ込み , 物を言わせるように教え込んで , あざけり笑うものなのである . 即ちそのことについて , ここで (我々は) 悪魔のまどわしと所業を物語つてみよう .

ロストフの地方に , 或る時 , 飢えがあつて , 二人のよう術師がヤロスラフから立ち現れて言つた . 『我々 (二人) は誰が豊かな富を (かくし) 持つているのかを知つている』と . しかして (二人は) , ヴォルガに沿つて出かけた . (人々が) 貢税納付所に来たつた折に , 其処で , (人々は) 美しい女たちを名指して , この (女) は , 裸麦を , この (女) は蜜酒を , ところで , この (女) は魚を , またこの (女) は獣皮をかくし持つていると言つた . しかして (人々は) 二人のところへおのれの姉妹 , 母及びおのれの妻を連れ来たつた . 二人 (のよう術師) は , 幻覚のうちに (彼女等の) 肩の後を斬り , あるいは裸麦を , あるいは魚を取り出した . しかして (二人は) 多くの女達を殺し , 彼女等の財産をおのれのために取りあげてしまつた . しかして二人 (のよう術師) はペロ

オゼロに来たつた。しかして彼等二人のもとには人々が三百人と
言わず居た。

ところで、この時、ヴィンヤタの息子ヤンがスヴィヤトスラフ
から（派遣されて）貢税を集めに来るようなことが起つた。ペロ
オゼロの人々は彼に、二人の魔法使いが既にヴォルガ河及びシエ
クナ河に沿つて多くの女たちを殺し、しかして、（その二人が）
此処へ来たつたことを告げた。そこでヤンは、それが誰の奴隷（
スメルド）であるかを調べて、それがおのれの公の（もの）であ
ることを知つた。（ヤンは）その二人の傍にいるものたちに使者
を送つて、彼等に言つた。『その二人のよう術使いをこちらに引
き渡せ。（二人は）我が公の奴隷であるから』と。ところで彼等
はこれをきかなかつた。そこでヤンは自から武器なしで出かけた。
しかして彼の下級従士たちは彼に言つた。『武器なしでは行くな。
汝を（人々は）はづかしめるであらうから』と。そこで彼は下級
従士たちに武器をとるように命じた。しかして彼と共に十二人の
下級従士たちがいた。しかして、彼等のいる森へ出かけた。とこ
ろで彼等は武装して対抗した。ヤンがおのをもつて進んだ時、彼
等から三人の男が進み出て、ヤンのところに至り、彼に言つた。
『明らかに汝は死にに來ているのだ。行くな』と。（ヤンは）彼
等を或る者に打つように命じ、残りのものたちに向つて出かけた。
そこで彼等はヤンに向つて、おそいかゝつた。或る者がヤンをお
ので打ち損じた。そこでヤンはその男へおのをかえして、みね打
ちにし、下級従士たちに彼等を斬り殺すように命じた。ところで
彼等は森の中へ逃げた。そこで（彼等は）ヤンの一人の僧侶を殺
した。

そこでヤンは、ペロオゼロ人たちの町に入り、彼等に言つた。
『もしも汝等がこれら二人のよう術使いをとらえないならば、（
我は）汝等から一年間でも去らないであらう』と。ペロオゼロの
人々は、行つて、彼等をとらえ、ヤンのもとに連れ来たつた。

(ヤンは)彼等二人に言つた。『何故、(汝等二人は)かくも多くの人々を滅ぼしたのか?』と。彼等二人が『何となれば、彼等は富をかくしもつている、もしも我々二人がこれらの者たちを打ちほろぼすなら、その富が出て来るであろう、もしも(汝が)欲するならば、汝の前で、我々二人は、裸麦、或は魚、或はその他何なりと引き出すであろう』と言つた時、ヤンは言つた。『本当に、それはうそである。神は人間を土から創り給うた。人間は骨及び血の筋から成るのであつて、人間の中には何もない、しかして、何も知るものはなく、たゞ神のみが知り給うのである』と。そこで彼等二人は言つた。『我等二人は、如何に人間が創られたものであるかを知つている』と。そこで彼は言つた。『如何に?』と。そこで彼等二人は言つた。『神がむし風呂で体を洗い、汗をかき、ボロ布でふいた。しかして、(それを)天から地上に投げた。しかして、悪魔(サタン)は神と、いづれが人間をその中に創るべきかを争つた。しかして、悪魔が人間を創り、一方、神はその中へ魂を入れた。それ故に、もしも人間が死ねば、肉体は地の中へ行き、一方、魂は神の方へ(行く)』と。彼等二人にヤンは言つた。『本当に、悪魔が汝等をまどわしてしまつた。汝等二人は如何なる神を信じているのか?』と。彼等二人は言つた。『反キリストを』と。そこで彼は二人に言つた。『しからば、(その神は)どこにいるのか?』と。彼等二人は言つた。『奈落の中に坐つている』と。ヤンは二人に言つた。『奈落の中に坐つているのは、いかなる神であるか?それこそ悪魔である。ところで神は天上に王座に坐つて、天使たちからたゞえられて居給う。その天使たちは恐れをもつて神の前に立ち、神を見ることもできない。ところでそれらの天使たちの(一人)が引きおろされた。その天使を汝等は反キリストと名づけたのだ。彼(その天使)の傲慢さの故に天上から(その天使は)引きおろされ、しかして(今)奈落の中にいる。汝等が言つた通りである。神が天から降り来たり』

給い、この反キリストを捕え給い、鎖でしばり給い、引きすえ給い、その下僕と共に彼、及び彼を信ずるものたちを捕え給うのを（それは）待つてゐるのである。ところで、汝二人は、此処においても、我から苦しみを受けるべきであり、且つ、死後にも、あの世において」と。ところで彼等二人が『神々は、汝は我々二人に何も出来ないと、我等に言つてゐる』と言つた時、彼（ヤン）は二人に言つた。『神々は汝二人にうそを吐いてゐるのだ』と。そこで、二人は言つた。『我々二人はスヴィヤトスラフの前に立つべきであるが、汝は（我等に）何もなし得ない』と。そこでヤンは彼等を打ちのめし、二人のあごひげを引き抜くように命じた。ところで、これら二人が打ちすえられ、しかして二人のあごひげがそぎ抜かれた時、ヤンは二人に言つた。『汝等二人に神々は何を言つてゐるのか？』と。彼等二人は答えた。『我々はスヴィヤトスラフの前に立つべきであると』と。

ヤンは彼等二人の口の中へ棒切れぐつわをはめ、マストに彼等をしばるように命じた。しかして、おのれの面前で舟に乗せて放ち、しかして自からは彼等の後から進んだ。シエリスナの河口にとどまつた。しかして二人にヤンは言つた。『汝等二人に神々は何と言つてゐるか？』と。二人は言つた。『神々は我々二人に、我等は汝の故に生きてはおれないと言つてゐる』と。しかしてヤンは彼等二人に言つた。『それこそ、それら（神々）が汝等二人に真実を伝えたのである』と。そこで二人は言つた。『しかし、もしも、汝が我等二人を放免すれば、汝には多くの善きことがあるであらう。もしも我等二人を滅ぼすならば、多くの悲しみを災を受けるであらう』と。そこで彼は二人に言つた。『もしも汝等二人を放免すれば、我には神から災が起るであらう』と。しかしてヤンは、漕ぎ手たちに言つた。『汝等のうちの誰のところで、親族の誰がこの者等のために殺されたか？』と。そこで彼等は言つた。『我には母が、他の者には妹が、また或るものには娘が』

と、そこで彼は彼等に言つた。『おのれの者たちのあだをむくいよ』と。彼等は二人をとらえて殺した。しかして、それをカシの木につり下げた。譏によつて、(彼等二人は)神から罰を受けたのであつた。ヤンが家に帰りつゝあつた時、その翌日の夜に熊が這い登つて、二人をかみさき、しかして喰べてしまつた。しかして、他の人たちには教えながら、一方では、おのれの破滅を知らずに、(彼等二人は)悪魔のそそのかしによつて、この様に滅んだ。もしも(二人が)(自己の破滅を)知つていたら、彼等二人が捕えられるべき所である此処へは来なかつたはずである。また(ヤンが)、彼等を殺そうと考えていた時、(二人は)何故に『我々二人は死ぬべきではない』と言つたのか? 然し、これこそ悪魔の教えなのである。というのは、悪魔たちは人間の考えを知らないのに、(人間の)秘密を知らなくて、人間の中に企みを吹き込むのである。神一人のみが人間の考えを知り給ひ、悪魔たちは何も知らないのである。というのは、(悪魔たちは)無力であり、醜いからである。

さて、今度は、悪魔たちの外見について、及び彼等の迷言について物語ろう。

さて、この頃、この時期に、或るノウゴロド人がチュジへ行くことになつた。しかして彼は魔法使いからの魔法を求めて、そのもとへ来たつた。彼(魔法使い)は、おのれの習慣に従つて、おのれの家に悪魔どもを呼び寄せはじめた。ノウゴロド人がその家のシキイの上に坐つていた時、魔法使いの方は硬直して横たわつていた。しかして悪魔が彼を打つたのである。そこで、魔法使いは起きあがつて、ノウゴロド人に言つた。『神々は来たることができな。い。(神々が)恐れるものを何か(汝は)おのれ(の身)につけて持つてゐる』と。そこで彼はおのれの上にある十字架を思い起し、しかして、離れて、(それを)その家の外に置いた。そこで彼は再び悪魔たちを呼び寄せはじめた。悪魔たちは彼をま

どわし、何のために（ノヴゴロド人が）来ているのかと言つた。この後、（ノヴゴロド人は）彼（魔法使い）に尋ねはじめた。『何のために（悪魔たちは）（我が）このようにおのれの身につけているその十字架をおそれているのか』と。そこで彼は言つた。『それは天なる神のしるしである。それを我々の神々は恐れているのだ』と。彼は言つた。『しからば汝等の神々はいかなるものであるか。何処に住んでいるのか？』と。彼は言つた。『奈落に。ところで外見は黒く、翼があり、尾をもつていて、また、汝等の神々の言うことを聞いて天にもまた登るのである。というのは、汝等の天使たちは天におり、もしも汝等の人々のうちの誰かゝ死ねば、天へ運びあげられるし、あるいは、また、もし、我々の（人々の誰か）が死んで行く時には、我々の神々のいる奈落へ運ばれるものだからである』と。事柄は即ち次の如くである。即ち、たしかに罪あるものたちは、永遠の苦しみを待ちつゝ地獄にいたのであり；正しい者たちは天上の住み家に天使たちと共に定住しているのである。

悪魔の力と美しさと、しかして無力さはかくの如くである。信仰の完全でない者には、時には夢の中に現れ、また時にはまどろみの中に現れ出で来て、幻影を物語るように人々に命じたりすることで悪魔は人々をまどわすのである。しかして、かくして、悪魔のそそのかしによつて魔法使いを（彼等は）使うのである。悪魔の魔法は女たちによりしばしば現れて来る。というのは、太古、悪魔は妻をたぶらかし、彼女の方が夫を（たぶらかした）。同じく、この時代の人々の中においても、女達は、よう術によつて、また、薬草によつて、またその他の悪魔のたくらみによつて、魔法をおこなつていたのである。しかして、また、信仰なき男たちも、悪魔たちからたぶらかされているのである。丁度、これは、太古の時代に使徒たちの頃、シモンが居り、よう術によつてオス犬に人語を語らせた。しかして自分は或は老人に、或は若者に、

身を変え、また、他人をも他の形に変えていたが、幻覚を利用してそんなことを行つていたのと同じである。アヌは、しかしマムヴリイも、モイセイに対してよう術をしかけた。然し、二人は間もなく既にモイセイに対して何も為し得なかつた。しかし、コノブもまた、あたかも水面上をも歩くような悪魔の幻覚を（人に）行い、その他の幻覚を行つた。悪魔にたぶらかされ、おのれ及び他の人たちの破滅に至つた。

かくの如きよう術師がグレブの時代にノヴゴロドに現れたのである。神の如くよそおつて、人々に話しかけ、多くの（人々）をたぶらかし、ほとんど町全体を（たぶらかした）。彼は、あたかも、『あらゆることを知つている』如くに語るのである。しかし、キリスト教の信仰をそしり、『総ての人々の眼前でヴォルホフ（河）を（我は）渡つてみよう』と言うのである。しかし、町に反乱が起つた。しかし総ての人々は彼を信じて、主教を殺そうと欲した。主教は十字架を取り、法衣をまとい、立ち上つて言つた。『よう術師を信じようとするものは、彼に従つて行け。もしも、誰か信ずるものがあるれば、十字架のもとに来たるべし』と。しかし、（人々は）二つに分かれた。というのは、グレブと彼の親兵団は来たりて主教の傍に立ち、人々は総てよう術師に従つて行つた。しかし人々の間に大きな反乱があつた。そこでグレブは、おのを着物のすその下にかくして、よう術師のもとに来たり、彼に言つた。『（汝は）知つているか。朝に何が起るか。何が夕方までに（起るか）』と。彼（よう術師）は言つた。『総てを知つている』と。しかしグレブは言つた。『しからは、（汝は）知つているか。昼間に何が起ろうとしているか』と。『おおいなる奇蹟を（我は）行ひである』と（よう術師は）言つた。そこでグレブはおのを抜いて彼を打ち割つた。しかし、（彼は）死んで倒れ、しかし人々は四散した。彼（よう術師）は、悪魔に身をゆだねて、肉体も魂も滅んだ』

その後、しばらくヤンの名の記事は出ないが、その後十八年して、即ち 6597 (1089) 年の項に次の様に見られる。

В лето 6597.

Священа бысть церкви Печерьска святыя Богородица монастыря Феодосьева, Иоаном митрополитом, и Лукою Белогородьским епископом, и Исаием епископом Ростовским, и Иваном Черниговским епископом, и Антоньем Гурьговским, при благороднем князя Всеволоде державному Русьския земля, и чадома его Володимера и Ростислава, воеводство держащу Киевския тысяща Яневи, игуменьство держащу Иану.

『 6597 年 .

フエオドシーのベチエルスキー修道院の聖母教会に、府主教ヨアン、ベルゴロドの主教ルカ、ロストフの主教イサヤ、チエルニゴフの主教ヨアン、及び、ユリエフの修道院長アントニーによつて、ルンの国を治める尊い公フセヴォロド、彼の子等ヴォロジメルとロスチスラフの臨席のもとで浄めの式が行われた。キエフの千人長管区をヤンが治め、修道院長の職をヨアンが持つていた時であつた』

そして、その翌々年即ち 6599 (1091) 年の項の中程に再びヤンの名が出て来る。今度は妻の名も書きとられている。即ち、その一節は、

В лето 6599.

..... Се же повем мало нечто, еже събысть пророчесенье Феодосьево: игуменьство бо Феодосью держащу, в животе своем правящу стадо, порученое ему Богом, черноризци, нетокмо бо си едины, но и мирьскими печашеся о душах их, како быша спаслися, паче же о духовных сынех своих, утешая.

и наказая приходящая к нему, другоица в дома их приходя и благословленье им подавая. Единою бо ему пришедшу в дом Янев к Яневи и к подружью его Марьи, Феодосий бо бе любя я, занеже живяста по заповеди Господеви и в любви межи собою пребывааста; единою же ему пришедшу к нима, и участь я о милостыни к убогым, о царствии небеснем, еже прияти праведником, а грешником муку, о смернем часе. И се ему глаголющу о положении тела в гробе има, рече ему: "кто весть, где си мя положить?" Рече же ей Феодосий: "по истине идеже лягу аз, ту и ты положена будеши". Се же събысться. Игумену же бо преставльшюся преже, о 18 лето се събысться: в се бо лето преставися Яневая, именем Марья, месяца августа 16 день, и пришедше черноризъци, певше обычныя песни, и принесше и положиша ю в церкви святыя Богородицы, противу гробу Феодосьеву, на швей стране. Феодосий бо положен бысть в 14, а си и в 16.

『さて、此処で、フエオドシイの予言が如何に実現されたかといふことを少し物語らう。フエオドシイが修道院長職にあり、生きていて、神によつて自分に托された僧の群を治めていた時に、これらの僧達のみならず、俗世の（人々たち）についても、彼等の魂に心をくわけていた。どうしたら彼等が救われるべきであるかを、特におのれの宗門の子等については、なおさらであつた。彼のもとにやつて来るものたちを慰め、教え導くのであつた。時には彼等の家にも出向いて行つて祝福を与えるのであつた。ある時、ヤンの家へ、ヤンとその妻マリヤのもとへ彼（フエオドシ

イ) が来たつた時、というのはフエオドシイは、彼等が主の戒律に従つて生き、相互間の愛情の中にあつたからであるが、或る時、この二人のもとへ来たつた時、(フエオドシイは)二人に、貧しき者たちへの慈悲と、罪あるものが苦しみを受けるのに、義しき者たちが受け入れうることになつている天国について、死の時に ついて教えた。しかして、彼が棺の中に二人の死体が入られる話をした時、ヤンの妻は彼に言つた。「(人々が)この私を何処に安置するか、誰が知つているだろう?」と。そこでフエオドシイは彼女に言つた。「まことに、我が横たわるところ、其処に汝もまた安置されるであらう」と。ところで、このことは実現した。というのは、修道院長が先に死去した時、十八年目にこれが実現した。この年に、マリヤという名のヤンの妻が死去した。八月十六日である。しかして僧たちが来たり、例の如き聖歌をうたい、彼女を運び来たり、聖母教会に、フエオドシイの棺に相對して、左側に安置した。フエオドシイは、十四日に安置され、この女は十六日に安置されたのであつた』

最後に、なお、それより二年後、6601(1093)年の項にも、その中程に次の様に読み取られる記事が『過ぎし年月の物語』にはみとめられる。侵入して来たボロヴェツ人に対する戦いを始めようとするくだりである。

В лето 6601.

.....Володимер хотяше мира, Святополк же хотяше рати; и поиде Святополк, и Володимер, и Ростислав к Треполю. Придоша к Стугне. Святополк же, и Володимер, и Ростислав созваша дружину свою на съвет, хотяче поступити через реку, и начаша думати. Глаголаше Володимер: "яко сдестояче через реку, в грозе сей, створим мир с ними"; и пристояху совету сему смыслении мужи,

Ян и прочии. Кияне же не всхотеша, но рекоша;
"хочем ся быти; поступим на ону сторону реки".
възлюбиша съвет ось, и преидоша Стугну реку; бе
бо наводнилася волми тогда.

『ヴオロジメルは平和を欲していた。ところがスヴィヤトボルクは戦いを欲していた。しかしてスヴィヤトボルクは出かけた。ヴオロジメルもロスチスラフもトレポリに（出かけた）。（彼等は）ストウグナ（河）に来たつた。そこで、スヴィヤトボルクは、ヴオロジメルも、ロスチスラフも、おのれの親兵団を会議に呼びよせた。河を渡るうと欲してゝある。しかして、人々は合議しはじめた。ヴオロジメルは言つた。『此処にこの恐怖の中にあつて河をはさんで対峙している間に、彼等と和睦しよう』と。しかして、この発言に思慮ある家臣、ヤン及びその他の者たちが同調した。ところがキエフ人たちは（それを）欲せず言つた。『戦うことを望む。河の向う側に渡るう』と。しかしてこの発言を（人々は）、より良しとした。しかして、（人々は）ストウグナ河を渡つた。河はこの時、非常に増水していたのである』

以上が、ラヴレンチー、イバーチー、トロイツキー各年代記の『過ぎし年月の物語』の中に見られるヤンの名の記述された総ての個所である。その後、七年して、ヤンは死んだことになる。ノヴゴロド年代記（オー）には1071年の記事だけがみとめられるだけで、その他の年代の項にみられる個所は出て来ない。ニコンの年代記には、ヤンの父に就ての記事をはじめとして、上に引用した総ての記事が多少補足されながら全部集録されている。リヴオフ年代記にはよう術師を引き合いに出した悪魔談義の6597年の項だけがみとめられる。

この様に少くとも、その取り扱い記事に省略や時に補足がみられるにしても、ヤンの名前は、ロシアの多くの年代記に鮮やかな影をおとしつゝけている。

それらの記事を通じて、このヤンという人物の正体は求められなければならない。

これらの記事によれば、ヤンはキーエヌの国で1089年に千人長として、軍司令職にあつた。ソロヴィヨフによれば (История России; 才一巻, р.232; Москва, 1959), 『千人長 (Тысяцкий) は、公が親兵団の中から選び出した人物で、地方や町の軍隊の軍司令官であつた』 «Тысяцкий — был воеводою земских, гражданских полков, выбравшийся князем из дружины».

とすれば、『親兵団の中から選び出される』以上、彼は親兵団の一員であつたにちがいない。もし、ヤンの父も同様の身分であつたとすれば、この父に関する年代記の記録は、一層、面白く読まれる。父は、親兵団員の中でも、ずば抜けて公の信頼が厚く、同時に、それにふさわしい責任ある行動と、部下の兵卒たちへの庇護を唯一人最後まで果した人物であつた。然もそれは、ロシアに初めて福音書を訳したというオストロミールの子であつた。ヤンとはこの父の子であり、オストロミールの孫なのである。公の近側に位置した名門の武人であり、然も、代々、その高い知性と豊かな知識と、正しい信仰とを誇つた一族であつたと思われる。

そして、ヤンは、その一族の知識と知性と信仰の頂点をなした人物であつたと思われる。

だからこそ、『過ぎし年月の物語』が、悪魔談義をおこなう時、先づ著れ高い武人としてのヤンを引き合いに出して、よう術師と対決せしめ、且つそれを征伐させたのであろう。然も、その武人であるヤンに、よう術師たちとの信仰論を受けもたせた。当代随一の正義の論客でもあつたからである。この信仰論に、本来、修道僧であつた年代記者が、その代表者であるべき高僧を誰一人論陣に立てずに、むしろ、寺院外の人物であつたヤンにそれを引き受けさせるという話の設定は、一体、何を物語るものであろう。

当時の僧たちの知性や信仰の深さや正しさと、宮廷の名門側近者のそれらとを比較して、当時の寺院僧たちの程度を此処で問いつめてみようとするのではない。むしろ、それよりも、年代記者が素直に物語つたように、これらの記事は、おそらく、ヤン自身がその記者に物語つたものとして、大きな変更を加えられずに書きとめられたのであろう。そのことの証拠こそが、この悪魔談義へのヤンの名の登場であつたと見るべきであらう。

少くとも、ほとんど総ての年代記が、この談義の記事だけは書きもらしていない以上、それは、同時に、寺院内での知性や信仰の水準を抜いていたことはたしかであらう。或は正しき信仰の姿の典型をヤンの言動にみつめることができたからであらう。

『過ぎし年月の物語』には、この様に宮廷側近貴族の、すぐれた武人・文人の直接の物語が口から耳を通して書きとめられ、その記事の源の一つをなしているにちがいない。

— B —

では、ヤンの語つた物語は、たしかに事実をふんまえたヤン自身の創作になる話であつただらうか。或はヤン自身が物語つた話であつたにしても、既にその物語には、それに先行する物語文学作品の伝承の影がおちていないであらうか。其処にはロシア民族の古い伝説のモチーフや伝承文学の色合いがみとめられないであらうか。ヤン自身がそれを語つたものであるにしろ、既にそのヤンを圧倒する古い伝承文学の力が、もう一段奥にある源としてみとめられないであらうか。先に引用した『過ぎし年月の物語』の一節を再びふり返つてみるがよい。そして、この記事以前の多くの古い年代記記事を思い起してみるがよい。

其処には、多くの類似した話が認められる。例えば、ヤン自身及びその父ヴィンヤタの功績が述べられているくだりを取りあげて

見よう。二人とも司令官として軍勢を伴つて出征し、先にあげた引用個所におけるような誉れ高い行動を示した。一族の範ともなすべき高き誉れにほかならなかつた。

その戦いの相手が時には、異民族であり、時にはより術師であるというのは、非常に古い英雄叙事の戦いの相を思わせはしないか。舟が嵐のために打ちくだかれ、幾年か後に捕虜の境涯から免ぜられて帰国する話や、その折に多くの人々が盲目にさせられたという話は、ロシア民族の叙事詩ではなくて、遙かにホメーロスの詩に似ていないとは言えない。

また、ヤンの父ヴァインヤタがツアリグラードに進軍をはじめたのも、ヤンがペロオゼロに軍を進めたのも、実は、もとをただせば、貢税を要求してであつた。貢税獲得を目的とする遠征の物語は、これまた、非常に多くの古い源をもつものであつた。年代記には、それが度々書きとゞめられた。先づツアリグラード或はツアリゴロド(コンスタンチノーブル——ビザンチン)への遠征は、ロシアの最も古い英雄詩のテーマであつたと思われる。即ち、既に我々が古代ロシア研究会の仕事として訳出したところからも、それが拾いあげられる。『過ぎし年月の物語』の既に引用したキエフの町の創設者キーの物語に、当のキーがツアリゴロドへ征つたという物語があつた。そして面白いのは、その物語のすぐ前の所に、キー等三人を評して、彼等は『賢明で思慮深い人物たちであつた』«бяху мужи мудри и смыслени»という言葉がある。ヤンの父及びヤン自身についても、これと同じ形容詞の評がみとめられたではないか。この同じ形容詞用語の使用の物語る所は注意しておく価値がある。

西暦862年の項(即ち6370年の項)には、『その二人は自分の一族を伴つて、ツアリゴロドへ(行く)許しを得た』«та испросистася ко Царю городу с родом своим» (古代ロシア研究; 才二号; p. 18~19) という記録があり、

866年(6371年)の項にもツアリゴロド進攻の物語がみとめられる(古代ロシア研究;オ二号;p.21~23)のである。これは有名なアスコルド《Аскольдъ》とジル《Дир》の遠征物語である。

「古代ロシア研究」誌オ二号に既に我々はそれを訳出したが念のため再び日本語訳と原文テキストをここにあげておこう。舟が嵐に打ちくだかれ、ルシが苦難に見舞われ、故里へ帰ることのできた者が少なかつたという物語の内容まで、ヤンの父ヴィンヤタの折の話と全く類似していることを認めるであろう。その一節とは
В лето 6374.

иде Асколд и Дир на Греци, и придоша в 14 лето Михаила царя. Царю же отшедю на Огаряны, дошедю же ему Черные реки, весть епарх посла к нему, яко Русь на Царьгород идетъ, и вратися царь. Си же внутрь Суду вшедше, много убийство крестьяном створиша, и в двою корабль Царьграда оступиса. Царь же едва в град вниде; с патреярком с Фотьем к сущей церкви святей Богородице Влажерне всю ночь молитву створиша, таже божественную святы Богородица ризу с песньми изнесъше, в реку омоча. Тишине сущи, морю укротившюся, абье буря въста с ветром, и волнами вельям въставшем засобь, безбожных Руси корабль смяте, к берегу приверже, и изби я, яко мало их от таковыя беды избегнути, въсвоися възвратишася.

『アスコルドとジルがグレキに進攻し、ミハイル帝の十四年に到着した。皇帝はオガリヤネに対して遠征中であり、黒い川に至つたとき、市長が彼に、ルシがツアリゴロドに進攻して来ると報せをつかわした。そこで皇帝は引返したのである。これらはスード(灣)の中へ入つて来て、キリスト教徒に多くの殺りくをなし、

二百隻の舟を連らねて、ツアリグラドを包圍した。皇帝は、ようやく町へ入り、総主教フオチイと共にグラヘルンにある聖母教会に夜を徹して祈禱した。靈驗あるけさを歌と共に運び出し、川に浸した。静かであり、海はないでいたが、突然、嵐が風を伴つて起り、大きな波が特に起り、それら異教徒のルシの舟を吹き乱し、岸に打ちつけ、うちこわしたので、それらのうち、かゝる災難からのがれるものは少なかつた。(助かつたものは)家郷へ歸つたのである』

此処には、その記述の立場が、よりギリシアの側に寄つていたことを除けば、ヤンの父についての物語の場合と同じような話が組み込まれている。ヤンの物語の背後に、おそらく、ヤンが下敷にして物語を進められたような素材があつた。そして、その素材は、この6374年の物語そのものに近い、同じように下敷役をつとめる何等かの英雄受難の叙事詩か、英雄遠征の詩的物語であつたにちがいない。そして、おそらく、その最も根底にかくされた詩的伝説は、キーのツアリゴロド遠征物語とは別の、むしろ、それよりも新しいものであつたであらう。というのは、もう其処では、進攻、遠征、出陣を意味する動詞は《ИТИ НА... (対格)》であつて、キーの物語の場合のように《ХОДИТИ》ではないからである。そのことはまた、同じように、6370年の項の場合についても言えそりである。其処では、キーの物語の場合に用いられた『行く』《ХОДИТИ》は全く消え失せてしまつてゐるからである。但し、其処には、いまだ『進攻する』《ИТИ НА... (対格)》という明確な動詞は現れてゐない。動詞は全く省略された形で見失われてしまつてゐる。過渡的表現であつたとも考えられる。このようなことから、年代記者が記録しはじめた当時に伝承されてゐた多くの類型的な英雄物語詩にも既に、いくつもの古さの層が出来あがつてゐたのかも知れない。そして、おそらくは、その層のうち、最も古いもので、然も同時に最も庶民の伝承によつたもの

から、フイリーナの幾つかと今日まで詠じつとけられて来たのであろう。フイリーナ作品におけるツアリグラード遠征の投影は、いづれ後述するとして、年代記になお、この影を求めて見ることにしよう。

西暦907年即ち6415年の項には、各年代記に次の様に見られる。詳しくは（「古代ロシア研究」才三号，p.4～p.17）

В лето 6415.

Иде Олег на Греки. Игоря оставив Кыеве; пол же множество Варяг, и Словен, и Чюди, и Кривичи, и Мерю, и Поляны, и Северо, и Деревляны, и Радими-чи, и Хорваты, и Дулебы, и Тиверци, яже суть Толковины: си вси звахуться Великая Скуфь. И с семи всеми поиде Олег на конех и в кораблех, и бе числом кораблий 2000. И приде к Царюграду, и Греци замкоша Суд, а город затвориша. И вылезе Олег на берег, и повеле воем изъволочити корабля на берег, и повоева около города, и много убийство створи Греком, и полаты многы разбиша, а церкви пожьгоша, а их же имяху полоняники, овех посекаху, другыя же мучаху, иныя же разстреляху, а другыя в море вметаша, и ина многа зла творяху Русь Греком, елико же ратнии творять. И повеле Олег своим колеса изъделати и въставити корабля на колеса; и бывшю покосну ветру, успяша пре с поля, и идяше к городу. Видевше же Греце убояшася и ркоша, вы-славше ко Ольгови: "не погубляй город, имемься по дань, якоже хочеши". И стави Олег вой, и вынесоша ему брашна и вино, и не прия его; бе бо устроено с отравою. И убояша-

ся Греце и ркоша: "несть се Олег, но святыи Дми-
трий, послан на ны от Бога". И заоведа Олег дань
даяти на 2000 кораблей, по 12 гривне на человека,
а в корабли по 40 мужь; няшася Греци по се, и
почаша Греци мира просити, дабы не воевал Грець-
ской земли, Олег же мало отступив от города, на-
ча мир створити с царема Грецьскыма, с Леоном и
с Александром, посла к нима в город Карла, Фа-
рлофа, Велмуда, Рулава и Стемида, глаголя: "им-
ете ми ся по дань". И ркоша Греце: "что хочете
и дамы ти". И заоведа Олег дати воем 2000
кораблей, по двенадцать гривне на ключь, и по-
том даяти уклады на Руские города: первое на
Киев, таже и на Чернигов, и на Переяслав, и на
Польтеск, и на Ростов, и на Любечь, и на прочая
города; по тем бо городом седяху князья под
Ольгом суще. "Да приходять Русь, хлебное емлють,
елико хотять, и иже придуть гостье, да емлють
месячину на 6 месяц, и хлеб и вино, и мяса, и
рыбы, и оwoцем, и да творять им мов, елико хотя-
ть; и поидуть же Русь домови, да емлють у царя
вашего на путь брашно, и якоря, и ужа, и пре, и
елико надобе". И яшася Греци, и ркоша царя и боя-
рство все: "аще приидуть Русь без купли да не
взимають месячины; да запретити князь словом сво-
им, приходящим Руси, да не творять пакости
в селех в стране нашей: приходящи Русь да ви-
тають у святаго Мамы, и послеть царство наше, да
испишють имена их, и тогда возмутъ месячное свое,
первое от города Киева, и пакы из Чернигова, и

Переяславля, и прочии города; и да входятъ в город одиными вороты, с царевым мужем, без оружья, мужь 50, и да творять куплю якоже им надобе, не платяче мыта ни в чем же". Царь же Леон с Олександром мир створиста с Ольгом, имъшеся по дань и роте заходивше сами крест, а Ольга водиша и мужий сего на роту; по Рускому закону кляшася оружием своим, и Перуном богом своим, и Волосом скотым богом, и утвердиша мир. И рече Олег: "ишпийте пре паволочиты Руси, а Словеном кропийныя, и бысть тако; и повесиша щиты своя в вратех, показующе победу, и поиде от Царяграда. И въспяша Русь пре паволочиты, а Словене кропийныя; и раздра я ветер; и ркоша Словен; имемъся своим тольстинам, не даны суть Словеном пре кропийныя". И приде Олег к Киеву, неся золото, и паволокы, и овощи, и вина, и всяко узолочье; и прозваша Ольга вещей: бяху бо людие погани и невеголоси.

『6415(907)年。』

オレグはイゴリをキエフに残してグレキを攻撃した。(彼は)多数のヴァリヤギ, スロヴエネ, チュヅおよび, クリヴイチ, メリヤ, ボリヤネ, セヴエロ, ジエレヴリヤネ, ラジミチ, ホルヴァト, ドウレフ, 通訳であるチベルツイを引き具した。これらすべては大スクフイと呼ばれていたのである。しかして, これらすべてと共に, オレグは馬および舟にて出発した。しかして数において二千隻であつた。しかしてツアリグラドに到着した。グレキはスト(灣)を閉鎖し, 町(の門)をとざした。しかして, オレグは岸に上陸し, 軍勢に舟を岸に引き上げるように命じて, 町のみ

わりで戦い、グレキに多くの殺りくをなし、多くの宮殿を破滅し、教会をもやした。ところで彼等（のうち）から捕虜をとらえ、あるものは切り殺し、他のものは苦しめ、別のもは投げ込み、敵軍が（通常）行いかぎりの、その他の多くの悪事をルンはなしていたのである。しかして、オレグはおのれの軍勢に、車輪を作り舟を車輪の上にのせるように命じた。順風であつたので野原から帆を張つて町へ進んで行つた。グレキは見ておそれ、オレグのもとに（使者を）遣わして言つた。『町を破滅させるな、（汝の）欲するだけの貢物を支払おう』と。しかして、オレグは軍勢をとどめた。そこで彼に（グレキは）食物と酒を運びだした。しかし（彼は）それを受け取らなかつた。というのは毒が仕込んであつたからである。しかして、グレキはおそれて言つた。『これはオレグではなくて、聖ドミトリーが神から我々につかわされたのである』と。しかしてオレグは二千隻の舟に対し、一人につき十二グリヴナづつを貢物として支払うように命じた。ところで、（一隻の舟には四十人づつ（のつていたのである））。グレキはこれに同意し、グレキはグレキの地において戦いをしないようにと、和平を求めはじめた。オレグは町から幾とんど引きさがらずに、グレキの皇帝レオン及びアレクサンドルと和平を講じはじめ、彼等二人のところへ、町へ、カルル、ファルロフ、ヴェルムド、ルラフおよびステミドをつかわして言つた。『我に貢物を支払え』と。しかしてグレキは言つた。『（汝らが）欲するものを（我々は）汝に与えよう』と。しかして、オレグは二千隻の舟の軍勢に、かいの座に対して十二グリヴナづつ与えることを命じ、その後ルンの町々に貢物を支払うように命じた。まずキエフに、同じくまたチエルニゴフに、またベレヤスラフに、またポロチエスクに、またロストフに、またリュベチに、しかして、その他の町々に。というのは、それらの町々にはオレグの配下にある公たちが座していたからである。『ルンをして来さしめ、欲するだけの穀料を

とらしめよ。商人として来るものは六ヶ月に（対して）月決め糧目即ち穀物もブドウ酒も、肉も、魚も、果物をも取らしめよ。また欲するだけ入浴を彼等におこなわしめよ。しかしてルシが帰途につくときには、汝らの皇帝のもとにて、旅に対する食糧ならびに錨も、つなも、帆も、および必要なだけ（のもの）も取らしめよ』と。そこで、グレキは引き受けた。しかして、（二人の）皇帝と、すべての貴族は言つた。『もしもルシが商用なしに来ることがあれば、月極め糧目を取り立てるべし。公はおのれの言葉をもつて、ここに来るルシに禁令すべきである。わが国の村落において（ルシたちは）害をなさざるべしと。到来するルシは聖母（教会）のそばに居住すべし。わが帝国は使者を送り彼等の名を書きあげせしむべし。しかして、その時、おのれの月極め糧目をとらしむべし。まずキエフの町の（出身者）、ついで、チエルニゴフの、またベレヤスラヴリの（出身者）、および、その他の町々（の出身者）に。しかして一つの門より皇帝の家臣を伴い、武器をたずさえず、（一度に）五十人を町へ入らしむべし。しかして何事によらず取引税を支払わずして、彼等の必要に応じて商用をおこなわしむべし』と。レオン帝はオレクサンドルと共に貢税を支払い。相互に誓をなし、自から十字架に口づけして、オレグと和を講じた。またオレグおよび彼の家臣に誓いをなさしめた。ルシの法に従つて、おのれの武器にかけ、おのれの神ベルンに、および家畜の神なるヴォロスにかけて誓い、和平を確立した。しかして、オレグは言つた。『ルシのためにはにしきの、スロヴェネのためには絹の帆を縫え』と。しかして、そのようになつた。しかして、（彼等は）勝利を誇示しておのれのたてを門にかけた。しかして、ツアリグラドから出発した。ルシはにしきの帆を、スロヴェネは絹の帆をあげた。しかして、それらを風が裂いた。しかして、スロヴェネは言つた。『我らはおのれの粗布を取り出せり。スロヴェネには絹の帆は不相応である』と。しかして、オレ

グは金およびにしき，および果物，およびブドウ酒，およびあらゆるかぎりのものをたずさえてキエフに到着した。しかして（人々は）オレグを靈驗あるものと呼んだ。というのは人々は異教徒で無学なものであつたからである。」

此処には，貢物を求める遠征のテーマとも重り合つた古い伝承の下敷が読みとれるだろう。この物語の記述された項は前述したように，907年(6415年)であるが，それから五年後，912年(6420年)の項に，グレキとルソの条約が書き取られている。その条約の下地或は前書きにも当るような内容が，このオレグのツアリグラド遠征物語には織り込められている。その部分を除外してこの物語を読めば，明らかに，それがツアリグラド遠征テーマによる物語であつたことが推察される。そして，既に其処には，『進む』，『攻撃する』，『進軍する』というような意味では，もう絶対に«ХОДЯТИ»という動詞は見当らない。すべて«ИТИ»という動詞に様々な接頭詞を加えて，然も，進む目標表現には，これまた前置詞を多彩に用い，或は格用法を変えている。そして，実用には向かない絹の帆を張らしたという物語が，なお，それに花をそえて，嘗つて存在したと思われるきらびやかな英雄叙事詩を思わせるのである。ラヴレンチャー，トロイツキー，イバーチャーの各年代記に限らず，この物語は，ほぼ同一の形で非常に多くの年代記にみとめられる。それらを此処に引用することは省略しておこう。

ツアリグラド遠征テーマの物語は，その後，三十年近く時が過ぎて，941年(6449年)に今度はイゴリという英雄を介して格段に立派な花を咲かせている。その花はつゞいて943年(6451年)の記事にも見られる。おそらく，年代記中にみられる外国遠征記事のうち最も立派なものであるろう。其処に働いていた英雄叙事詩的な伝承物語が，この年の記事ほどに鮮やかにすかしまられる個所は他にはないであろう。ラヴレンチャー，イバーチャー，トロイツ

キーの各年代記，或はその他諸々の年代記は，この年の記事を非常に詳しく伝えている．一応上記の三つの年代記から，それをまとめて次に引用してみることにしよう．この個所の異本考証その他の詳しい考察は，同じく「古代ロシア研究」才四号 p. 6~p. 15 にある．

В лето 6449.

Иде Игорь на Греки; яко послаша Болгаре вестъ ко царю, яко идуть Русь на Царьград скедий 10 тысяць. Иже поидоша и приплуша, и почаша воевати Вифаньския страны, и воеваху по Понту до Ираклия и до Фафлогоньски земли, и всю страну Никомдийскую попленивше, и Суд весь пожьгоша. Их же емше, овец растинаху, другия аки странъ поставляюще и стреляху в ня, изимахуть, опаки руже съвязывахуть, гвозди железным посреди главы в бивахуть их; много же святых церквий огневи предаша, монастыре и села пожьгоша, и именья не мало обою страну взяша. Потом же придешьшем воем от вьстока, Памьфир деместик с 40-ми тысяць, Фока же патрекий с Макидоны, Федор же стратилат с Фраки, с ними же и сановьници боярьет и обидоша Русь около. Съвещаша Русь, изидоша вьружившеса на Греки, и брани межу ими бывши зли, одва одолеша Грьци; Русь же вьзратилася к дружине своей к вечеру, на ночь влезоша в лодью и отбегоша. Феофан же устрете я в лядех со огнем, и пуцати нача трубами огонь на лодье Руския, и бысть видети страшно чюдод. Русь же видящи пламянь, вметахуся в воду морьскую, хотяще убрести, и тако прочий вьзвратилася вьсвоаси. Темже пришедшим в землю свою, и

поведаху кождо своим о бывшем и о ляднем огни: "якрже молонья", рече, "иже на небесех, Гръци имуть у собе, и сию пуцающа жежаху нас; сего ради не одолехом". Игорь же пришед нача совокупляти вое многи, и посла по Варяги многи за море, вабя е на Греки, паки хоте пойти на ня. В лето 6452.

Игорь же совокупив вое многи, Варяги, Русь, и Поляны, Словени, и Кривичи, и Тверьце, и Печенеги, и тали у них поля; поиде на Греки в лодьях и на конех, хотя мьстити себе. Се слышавше Корсунци, послаша к Роману глаголюще: "се идуць Русь без числа корабль, покрыли суть море корабли". Такоже и Болгаре послаша весть, глаголюще: "идуць Русь, и наяли суть к собе Печенеги". Се слышав царь, посла к Игорю лучие боляре, моля и глаголя: "не ходи, но возьми дань, кже имал Олег, придам и еще к той дани". Таже и к Печенегом посла паволоки и злато много. Игорь же дошед Дуная, созва дружину и нача думати, поведа им речь цареву. Реша же дружина Игорева: "да аще сиче глаголеть царь, то что хочем боле того, не бившися имати злато, и сребро, и паволоки? егда кто весть, кто одолеет, мы ли, оне ли? ли с морем кто светен? се бо не по земли ходим, но по глубине морьстей; обьча смерть всем". Послуша их Игорь, и повеле Печенегом воевати Болгарьску землю; а сам взем у Грек злато и паволоки и на вся воя, и възвратися възспять, и приде к Киеву възвосяси.

『6449(941)年』

イゴリがグレキに向つて進攻した。ボルガルが皇帝に報せを送つたところによれば、一萬隻のルシがツアリグラドに向つて進攻しつゝあるという。それらは出発し航し来たり、ウイフアニアの国々を荒しはじめた。しかして、ボントに沿つてイラクリイまで、およびフアフゴニアの地まで荒し、しかしてニコムジアの国全土を押え、しかしてスド全部を焼いた。彼らをつかまえて、あるものたちをはりつけにしたり、他のものたちを的のよりに立たせて、彼等に矢を射かけたり、引きだして、うしろ手にしばり、鉄釘を彼らの頭の中央にうち込んだりした。また多くの聖なる教会に火をかけ、修道院や村々を焼き、(スドの)両側の少からざる財産をうばつた。その後、東から軍勢が来たつたとき、デメスチクのバムフィルが四萬人をひきいて、また、パトレキーのフオカがマキドニア(人)をひきい、また、ストラチラトのフェドルがフラキア人をひきい、また彼等と共に貴族の高官たちもルシをとり囲んだ。ルシは相談して、グレキに対して武装して出撃し、しかして、彼等の間には、はげしい戦いがあり、かろうじてグレキが勝つた。一方ルシは夕方近くおのれの親兵団のもとにもどり、夜中に舟にのり込んで逃げ去つた。またフエオファンは火をそなえた舟に乗つて彼らをむかえ、しかして筒で火をルシの舟に放ちはじめた。しかして、おそろしい奇蹟がみられた。ところでルシは炎を見て、逃げようとして海の水の中へとび込んだ。かくして、他のものたちは、おのれの国へ帰つた。……

『6452(944)年』

ところで、イゴリは、ヴァリヤギ、ルシおよびポリヤネ、スロヴェネおよびクリグイチ、およびテヴェリツイおよびベチエネギなど多くの軍勢をあつめ、彼らから人質をとつた。おのれの仇をうとうとして舟及び馬でグレキに向つて出発した。これをコルスニ人が聞いて、ロマンに使者をつかわして言つた。『みよ、無数の

ルンが進攻しつゝあり、海を舟でおおつた』と、また同様に、ボルガルも知らせを送つて言つた。『ルンが進攻しつゝある。しかして、自分の方にベチエネギをやつている』と、皇帝はこれを聞き、イゴリに身分の高い貴族をつかわし、懇願して言つた。『来たるな。しかして、オレグがとつた貢税をとれ。(我々は)この貢税をさらにまた(もつと)付け加えよう』と、同様にまたベチエネギにも絹織物と多くの黄金を送つた。ところで、イゴリはドナイまで来たり、親兵団を呼びあつめて考えはじめ、彼らに皇帝の言葉を知らせた。ところで、イゴリの親兵団は言つた。『もしも皇帝がかく言うのであれば、戦わずして黄金および銀および絹織物をとること以上の何を(我々は)欲することがあろう。誰が勝つか、我々か、彼らか、誰が知ろうというのに。誰が海と味方であるというのか?というのには、みよ、(我々は)陸地に行くのではなく、海の深みに行くのであるから。死はすべてのものに共通である』と、イゴリは彼ら(のいうこと)を聞き、しかして、ベチエネギたちにボルガルの国を改めるよう命じた。ところが、みづからは、グレキから黄金と絹織物を、全軍のためにも取り、再びもどつて、おのれの国キエフへ帰り来たつた』

此処で再び『行く』、『進む』、『攻撃する』という意味に用いられた言葉に注意を向けよう。それらの意味で用いられたのは、総て«ИТИ»であつた。ところが、此処には突然、ギーの物語の時にだけ見られた«ХОДИТИ»が二度も顔を出している。一つはギリシア皇帝の口上として、『来たるな』«не ходи»然し代わりに貢物を取れという個所であり、もう一つは、親兵団の一員が、海の深みに行くのであつて、『陸地に行くのではない』«не по земли ходим»という個所である。前にも一度述べたように、この二個の«ХОДИТИ»は、その両方とも””印に入れるべき口上や発言の内容である。明らかに、喋り言葉の書き取られたものである。そのことに就ては既にのべたが、此処で面白いのは、用いら

れたこの二個の《ходити》が、ともに喋り言葉である以上に、否定表現であるということである。一方は直接の、他方は間接のだから、明らかに、これらは、《йти》も《ходити》も、現代ロシア語に見られる定態、不定態の区別は見とめられない。むしろ、最も古いキーの物語は、《ходити》を用いて、口頭の物語であつたことを、一層明確にする証拠をなしていると言えよう。そして、《ходити》が用いられるのは、だから、より喋り言葉への傾きの激しい折に限られたと言えるであろう。

扱て、ギリシアへの古い遠征物語が『過ぎし年月の物語』に書きとめられているのは、以上の他に、たゞもう一個認められるにすぎない。イゴリのギリシア遠征物語は、貢税取りの物語とからみ合つたものであつたが、次にみられる遠征物語はどんなものであろうか。イゴリの物語から三十年を経た後の話である。即ち、971年(6479年)の項に書きとられた物語は、どんな内容のものであろうか。前の場合と同じく三つの年代記に見られるものを次に引用しておこう。この物語は上述のいづれよりも詳しく、然も長い。既に詳しくは『古代ロシア研究』才五号の56ページ以下に異本照合を含めて訳出されたところである。

В лето 6479.

Поиде Святослав в Переяславецъ, и затворишася Болгаре в граде. И излезоша Болгаре на сечю противу Святославу, и бысть сеча велика, и одоляху Болъгаре; и рече Святослав воем своим: "уже нам сде пасти; потягнем мужьски, братья и дружино!" И к вечеру одоле Святослав, и взя град копьем, и послав Греком, глаголя: "хочю на вы ити, взяти град вашъ, яко и сей". И реша Гръци: "мы недужи противу вам стати, но возми дань на нас, и на дружину свою, и повежьте ны колько вас, да вда-

мы по числу на главы". Се же реша Гръци, лъстяче под Русью; суть бо Греци лъстиви и до сего дни. И рече им Святослав: "есть нас 20 тысящ", и прирече 10 тысящ, бе бо Руси 10 тысящ только. И пристроиша Гръци 100 тысящ на Святослава, и не даша дани; и поиде Святослав на Греки, и изидоша противу Руси. Видевше же Русь убояшася зело множества вой, и рече Святослав: —уже нам некамо ся дети, волею и неволею стати противу: да не посраим земле Руские, но ляжем костьми, мертвыи бо срама не имам, аще ли побегнем, срам имам, ни имам убежати; но станем крепко, аз же пред вами поиду, аще моя глава ляжетъ, то промыслите собою; и реша вой: "идеже глава твоя, ту и своя главы сложим". И исполчидася Русь, и бысть сеча велика, и одоле Святослав, и бежаша Гръци; и поиде Святослав ко граду, воюя и грады разбивая, яже стоят и до днешняго дне пусты. И созва царь боляре своя в полату, и рече им: "что створим, яко не можем противу ему стати?" И реша ему боляре: "посли к нему дабы, искусим и, любезнив ли есть злату, ли паволокам?" И посла к нему злато, и паволоки, и мужа мудра; реша ему: "глядай взора, и лица его, и смысла его", он же взем дары, приде к Святославу. Поведаша Святославу, яко придоша Гръци с поклоном, и рече: "въведете я семо". Придоша и поклонидася ему, положиша преди им злато и паволоки; и рече Святослав, кроме зря, отроком своим: "схороните". Они же придоша ко царю, и созва царь боляры, реша же

послании: "яко придохом к нему и вдахом дары, и не зре на ня, и повеле схоронити". И рече един: "искуси и еще, послѣ ему оружье". Они же послушаша его, и послаша ему мечь и ино оружье, и принесоша к нему; он же примѣ, нача хвалити и любити, и целова царя. Придоша опять ко царю, и поведаша ему вся бывшая, и рѣша боляре: "лют се мужь хоче быти, яко именья не брежетъ, а оружье емлетъ; имися по дань". И посла царь, глаголя сице: "не ходи к граду, возми дань, еже хочещи", за малом бо бе не дошел Царяграда. И въдаша ему дань; имашеть же и за убьенныя, глаголя: "яко род его возметъ". Взя же и дары многы, възратися в Переяславецъ с похвалою великою. Видев же мало дружины своея, рече в себе: "еда како прельстивше изъбьютъ дружину мою и мене", беша бо многи погибли на полку; и рече: "пойду в Русь, приведу боле дружины". И посла слы ко царевѣ в Деревьстр, бе бо ту царь, рѣка сице: "хочю имети мир с тобою тверд и любовь". Се же слышав царь, рад бысть и посла к нему дары больша первых. Святослав же прия дары и поча думати с дружиною своею, рѣка сице: "аще не створим мира со царем, а увестъ царь, яко мало нас есть, пришедше оступать ны в граде; а Руска земля далека, а Печенези с нами ратьни, а кто ны поможетъ? но створим мир со царем, се бо ны ся по дань яли, и то буди доволно нам; аще ли почнетъ не управляти дани, да изнова из Руси, совкупивше вои, умноживши, поидем Царюгороду". Люба бы-

сть речь си дружине, и послаша лепшие мужи ко царю. Царю же поведаша царевичи. Царь же наутрия призва я, и рече царь: "даже глаголють сли Рустий". Они же реша: "такое глаголет князь наш, хочю иметь любовь со царем Гречским свершену прочая свя лета". Царь же рад бысть, повеле писцю писати вся речи Святославле на харатью; нача глаголати сол вся речи, и нача писець писати.

『6479(971)年。』

スヴィヤトスラフがベレヤスラヴエツに着いた。しかしてボルガルは町にたてこもつた。しかして、ボルガルはスヴィヤトスラフに対する戦いをしかけに出て来た。しかして大なる戦闘があり、ボルガルが勝ちそうになつた。しかして、スヴィヤトスラフは、おのれの軍勢に言つた。『すでに我々はこゝに倒れるべきである。勇敢に進もう、兄弟たちおよび親兵団よ！』と。しかして夕方近く、スヴィヤトスラフが勝つた。しかして町を槍で占領した。しかして、グレキへ使者を遣わして言つた。『（我々は）汝らに進攻し、この（町の）ごとく、汝等の都を占領せんと欲する』と。しかして、グレキは言つた。『我らは汝らに対して立つには弱い。しかして我らおよび我が親兵団に貢税を課せ。しかして我らに汝らが如何ほどいるかを知らせよ。頭数だけ（我々が貢税を）納めるために』と。ルシをあざむいてグレキは、かく言つたのである。というのは、グレキは今日にいたるまでも狡猾だからである。しかしてスヴィヤトスラフは彼らに言つた。『我々は二萬人である』と。（彼は）一萬人を増しをした。というのは、ルシは一萬人だけしかいなかつたからである。しかしてグレキはスヴィヤトスラフに向つて十萬（の軍勢）をととのえ、しかして、貢税を支払わなかつた。しかして、スヴィヤトスラフはグレキに進攻した。しか

して、ルンに向つて（グレキが）出撃した。ルンは（これを）見
て多数の軍勢に非常におそれをなした。しかして、スヴィヤトス
ラフは言つた。『すでに我らには身をかくすべき所はない。欲し
ようが欲しまいが迎え撃たねばならない。ルンの国をはずかしめ
ないよりにはしよう。しかし骨を横たえよう。死ねば（我々は）辱
かじめを受けないからである。もしも（我々が）逃げるならば、
辱かじめを受けるであろう。（我々は）逃げずに、ほげしく戦おう。
我は汝らにさきがけて進もう。もし我が頭が倒れたら、自分たち
で考えよ』と。しかして軍勢は言つた。『汝の頭の（横たわる）
ところ、そこにおのれの頭を（我らも）横たえよう』と。しかして
ルンは武装し、しかして大なる戦闘があつた。しかして、ス
ヴィヤトスラフが勝ち、グレキが敗走した。しかして、スヴィヤ
トスラフは戦い、町々を破壊しながら都へ進んだ。それら（の町
々は）今日にいたるまでも荒れはてたまゝである。しかして皇帝
は、おのれの貴族たちを宮殿へ呼びあつめ、しかして彼らに言つ
た。『（我々が）彼らに敵対することができない以上、（我々は）
何をなそうか』と。しかして、彼に貴族たちは言つた。『彼に贈
物をおくれ。彼をためしてみよう、（彼が）黄金や絹織物がすき
であるかどうかを』と。しかして（皇帝は）彼に黄金および絹織
物および賢明な家臣を（一人）送つた。（人々は）彼に言つた。
『彼の眼差し、および顔付き、および彼の考えを見よ』と。そこ
で、彼は贈物を持ち、スヴィヤトスラフのもとへ着いた。グレキ
が礼をつくして来たつたと（人々が）スヴィヤトスラフに伝えた。
しかして（彼は）言つた。『彼らをこゝへ連れて来たれ』と。
（彼らは）来たつて、彼に礼をし、彼の前に黄金および絹織物を
おいた。しかして、スヴィヤトスラフは横を向いたまゝおのれの
下級従士たちに言つた。『しまつておけ』と。ところが、彼等は
皇帝のもとへ帰り来たつた。しかして皇帝は貴族たちを呼びあつ
めた。そこで使者たちは言つた。『彼のもとに着き、贈物を渡し

た。しかして（彼は）それを見ずに、しまい込むように命じた』と。しかして、ある者が言つた。『さらに彼をためせ。彼に武器をおくれ』と。そこで彼らは、彼のいうことを聞いた。しかして彼（スヴィヤトスラフ）に剣および他の武器を（人々は）送つた。そこで彼はうけとり、ほめ、見とれはじめた。しかして（彼は）皇帝に感謝した。彼らはふたたび皇帝のもとへもどり、彼にすべてのありしことどもを物語つた。しかして貴族たちは言つた。『みよ。（彼は）猛き男となるであろう。財物に関心をもたないで、武器をうけとるからである。貢税を払え』と。しかして皇帝は使者を立ててかく言つた。『都へ来たるな、欲するだけの貢税をとれ』と。というのは（彼は）ツアリゴロドに殆んど達せんばかりであつたからである。しかして（彼らは）彼に貢税を払つた。ところで（彼は）戦死者に対しても、『彼の一族がとるであろう』と言つて、（貢税を）とろうとしていた。しかして（彼は）多くの贈物をも取り、ベレヤスラベツイに大なる賞讃につつまれて歸つた。おのれの親兵団が少いのを見て（彼は）独り言をいつた。『あざむいて、（彼らは）我が親兵団および我をも殺さないであろうか』と。というのは、戦で多くのものたちが倒れてしまつていたからである。しかして（彼は）言つた。『ルシへもどり、より多くの親兵団をつれて来よう』と。しかして使者を皇帝のもとデレヴストルへ送り——というのは皇帝はそこにいたからである——かく言つた。『（我は）汝と堅い和平と友好を保ちたい』と。皇帝はこれを聞いて喜んで、彼にはじめよりも多くの贈物をおくつた。ところで、スヴィヤトスラフは贈物をうけとり、おのれの親兵団と共に考えはじめてかく言つた。『もしも皇帝と和平を（我々が）結ばず、我々が少いことを皇帝が知つたら、（彼等は）やつて来て、町の中で我々を取り囲むであろう。ところでルシの国は遠く、ベチエネギは我々と戦つている。誰が我々を助けるであろうか。そうではなくて、（我々は）皇帝と和平を講じ

よ。』というのは、我に（彼らは）貢税を約したのではないか。それで我々は充分であるとせよ、もし（彼が）貢税をまもらなくなれば、軍勢をあつめ、多勢になつて再びルンからツアリグラドに進もう』と。この言葉は親兵団の気に入つた。しかして（人々は）主だつた家臣たちを皇帝のもとへつかわした。しかして（彼らは）デレヴストルへ到着し、皇帝に伝えた。そこで皇帝は翌朝、彼らを呼び寄せ、しかして皇帝は言つた。『ルンの使節たちに述べしめよ』と。そこで彼らは言つた。『我らの公はかく言つている。グレキの皇帝と今後すべての年月にわたり、完全なる和平を（我は保ちたい』と。そこで皇帝は喜び、書記にスウイヤトスラのすべての言葉を羊皮紙に書くように命じた。使者はすべての言葉をのべはじめ、書記は書きはじめた』。

以上の如くである。そして、この後には、ギリシアとの条約文が書き取られているのである。

先に引用した数個の物語と非常に似ていなかつたか？

例えば、ギリシアの皇帝が使者をたて、ロシア人に言つた口上に、先の引用例と全く同一の言葉があつたではないか。即ち、先の場合には『来たるな、しかして貢税をとれ』《не ходи, но возьми дань》、今度の場合には『都へ来たるな、しかして貢税を取れ』《не ходи к граду, возьми дань》である。口上の場合にふさわしく、ともに《ходить》が用いられて、《йти》は使われていないではないか。然も、その内容は全くうり二つではないか。完全に型通りの伝承物語の一寸した展開であつたと考えるのは決して無理ではない。そして、その展開を行つた人こそ、或はヤンであつた。上の引用文を少し注意してよめば、ヤンが註釈的に説明を入れたとおぼしき個所がみとめられる。例えば、軍司令として嘗つてギリシアに捕われた父をもち、自からもギリシア遠征の司令をつとめたヤンでしか言えない註釈部分がある。『というのは、グレキは今日にいたるまでも狡猾であるからである』

«суть бо Греци лстиви и до сего дни»とは、その
よりなものの最たるものであろう。

勿論、年代記者がヤンの言葉を『過ぎし年月の物語』に口うつし
のまゝ書き取つた訳ではない。年代記者特有の表現乃至記述のタ
イプが此処には見出される。『しかして大いなる戦闘があつた』
«и бысть сеча велика»という一節である。上の引用文に
は面白いことにその同じ一節が二度も繰り返して用いられている。
同じこの言葉は、年代記のきまり文句の様に数え切れぬほど出
現して来るのである。ヤンの物語に年代記者の手が加えられて書
きとられたものであつても、そのヤンと年代記者の二重の層の下
に、やはり、英雄伝承物語の存在がまざまざと浮び上つて来るで
はないか。

例えば、今度の場合に、スヴィヤトスラフは『おのれの親兵団
と考えはじめた』«поча думати с дружиною своєю»とい
う一節があつた。ところが面白いのは、その前の以用例にみられ
たイゴリの二度目のグレキ遠征にこれと同じ言葉が見られるので
ある。即ち、『親兵団を呼びあつめて考えはじめた』«созва
дружину и нача думати»という一節である。『考える』
«думати»という動詞の使い方のこの一致が物語るものも、や
はり、非常に明瞭な下敷の存在なのではないか。『考える』«
думати»という動詞が、今後の取るべき方策や、戦術の相談を
意味したことは明らかである。しかも、この言葉が年代記に現れ
る個所は、多くの場合、これらの場合と同じような戦記的な、或
は英雄的なものが多い。下敷であつた筈の言葉が、遂に上ににじ
み出して、年代記の古代ロシア語に固つてしまつたもののように
考えられる。『過ぎし年月の物語』にも、この固定化がみとめら
れる。年代記年号のまゝそれを次にあけてみよう。

①先づ『というのは、ウオロジメルは親兵団を愛していたからで
ある。しかして彼等と共に考えていた』«Бе бо Володимер

любя дружину, и с ними думая…»(6504年の項)

②『しかして、ラチボルの親兵団はヴオロジメル公と共に考えはじめた』《И начаша думати дружина Ратибора со князем Володимером…»(6603年の項)

③『しかしてスヴィヤトボルクの親兵団は考えはじめ、言いはじめた』《И почаша думати и глаголати дружина Святополча…»(6611年の項)

この他にも、トロイツキー年代記に④『公たちは考えはじめた』《И начаша думати князи》等にとあげればきりがないであろう。

また、イゴリの遠征の場合も、スヴィヤトスラフの遠征の場合も、その貢税の品物は、一致して、黄金《злато》と絹織物《пароволоки》であつた。それは或程度まで本当に歴史的な事実であつたかも知れない。然し、もし、歴史事実だけであつたとすれば、何故、せいぜい羊皮紙の裏表にして数枚のちがいのところに、こうまで同じような事実を書きとめなければならなかつたのか、決して、イゴリの場合と同じく貢税を取つたという記事だけにとどめなかつたのか。イゴリの場合には絹の帆に仕立てさせて物語を華やかにし、スヴィヤトスラフの場合には、同じ貢税に武器を加えて彼の武者風格を引き立てようとしているのではないか。其処には幾度にも亘る度々の歴史事実が重なつていたにちがひなくても、或はヤンの口から聞いたかも知れない年代記者が書きとめる時には、既に伝承物語の手法に乗つかつてしまつていたと見るべきであろう。だから、此処には、たゞけば、幾らでも黄金と絹の出る豊かなグレキの国、その都ツアリグラド、遠征の獲物の目標、というギリシアの国のイメージが完全に説話的世界と現実の世界とに亘つてひろがつてしまつていた。この説話的世界のギリシアへのイメージを現実の世界にかぶせた張本人は、年代記者ではなくて、おそらく、ヤンであつたであろう。というのは、ツアリグラド

遠征物語は、この物語を最後にして、ヤンの死の記録以後には、もう絶対に出てこないからである。勿論、その遠征は歴史的にも存在しなかつたとすれば、『過ぎし年月の物語』に書きとられる筈もなかつたと言ふことにもなるかも知れない。ヤンが語つたとおぼしきギリシア遠征の最後の物語を引き合いに出したところで、次の話に移ろう。

英雄叙事詩的な物語の、ギリシア遠征以後のもう一つのテーマは貢税集めの物語である。『過ぎし年月の物語』に果してこの下敷が見出されるであろうか。

ギリシア遠征の場合にも、貢税取りのテーマは同時に組み込まれてしまつていた。此処では単なる貢税取りの場合だけを調べあげてみよう。『過ぎし年月の物語』が年代を設定し得なかつたほど非常に古い時代の話として、ツアリゴロードにキーが『行つた』という物語があつたように、貢税取りのテーマについても、年代設定以前の古い物語が見出される。

即ち、数個の年代記に大体同じ文章で次の様にある。（『古代ロシア研究』オ一号；p. 59~p. 61に異本照合も含めて詳しく訳出ずみである）

По сих же летех, по смерти братье сея, быша обидимы Древлями, инеми околними, и наидоша я Козаре седящая на горах сих в лесех, и реша Козари: "платите нам дань". Съдумавше Поляне и вдаша ото дыма мечь, и несоша Козари ко князю своему и к старийшинам, и реша им: "се налезохом дань нову". Они же реша им: "откуда?" Они же реша: " в лесе на горах, над рекою Днепрскою". Они же реша: "что суть въдали?" Они же показаша мечь. Реша старци Козарьстии: "недобра дань, княже. Мы ся доискахом оружием одиною стороною, рекше саблями,

а сих оружье обоуду остро, рекше мечь; си имуть
имати дань на нас и на инех странах".

『これらの年の後、これらの兄弟たちの死後、(ポリヤネは)ドレヴリヤネその他の周辺の(民族)によつて、はづかしめられた。そして、これらの山々の上の森に住んでいる彼らを、コザリが攻撃した。そしてコザリは言つた。『我らに貢物を支払え』と。ポリヤネは相談して一戸から(一本の)剣を差し出した。そこでコザリは(それを)おのれの公と長老たちのもとへ運び、そして彼らに言つた。『この通り(我らは)新しい貢物を見つけた』と。そこで、彼らは彼らに言つた。『どこからか?』と。彼らはそこで言つた。『山の上なる森の中、ドニエブルの川のほとりで』と。彼らはそこで言つた。『何を人びとは差し出したか?』と。そこで彼等は剣を示した。コザリの長老たちは言つた。『善からぬ貢物である。公よ。我らは片刃の武器、すなわちサーベルによつておのれのために貢物をえた。ところが、これらの者の武器は両側が鋭い。すなわち剣である。これら(の者)は我らおよび他の国々に対して貢物を課すであらう』と。

年代設定以前の古い物語でありながら、キーのツアリグラード遠征の物語にくらべて、こちらは格段に詳しいではないか。特に会話体の部分だけを取りあげて見るがよい。そして、一般に叙事詩の書き取られるように、横に行を分けて書き並べて見たら、ますます、この一節がキーの遠征物語よりもなお古い、然も、より完全な形で当時に保存されていた叙事詩であることが判明しよう。勿論、その話の内容も非常に古い。公や長老が軍勢をひきいて行つた遠征に対して、この貢税取りの内容の物語は、むしろ、公や長老をさし置いて、血気のものたちが、勝手に相手を屈服させて獲物を集めて来たということではないか。年代記者が、この物語の記録に当つて、わざわざ、その冒頭に『これらの兄弟の死後』

«по смерти братье сея」と、ことわり書きを附け加えて、この物語がキー、シチエク、ホリフの三人兄弟の物語よりも、後代の出来事であると決め込んでいても、或はまた、この物語の直後に、年代記者らしく、宗教的な議論を展開して、この物語を正当化しようとして努力していても、彼自身が書き取ったこの貢税取りの伝承の古さは、おおいかくせていない。むしろ、その伝承の書き取りに、つじつまを合せたい気持ちが先走つて却つて、当時に伝えられていた非常に古い口碑が、むしろ生のまゝで定着してしまつたのかも知れない。

貢税取りとは名が良いだろうが、民間説話における古い宝物取りの物語ではなかつたのか。キーの物語の場合に、彼が渡し守であつたという説話のバリエーションが存在したと説いたが、おそらく、そのバリエーションの方を伝える民衆層が、この宝物取りの口碑をも持ちつゞけていたのであろう。そして、遠征の主人公が軍勢を指揮する公であつたような物語は、民衆層の伝承によるものではなくて、親兵団層の伝承によるものなのであつたと思われる。親兵団層の語り手が、最も古い宝物取りの民衆説話或は民間叙事詩を取りあげて、おのれたちの層の武勇説話に仕立てあげようとした時、宝物取りの民衆説話は、公や親兵団の行なり武勇や遠征の物語と重ねられて行つた。そして、その結果が、先にあげたイゴリヤスグイヤトスラフの面白い物語になつたものだと考えられる。然し、この宝物取りの口碑が、親兵団の語り手の手腕によつて取りあげられ、遠征物語と重ねられて行くまでには、まだまだ過渡的な貢税取りだけの物語を経過しなければならなかつたらしい。

その様な過渡的な貢税取りだけの物語にも、既にその主人公は、公に置き代えられることが多かつた。時代が設定されるようになってからも、この過渡的な貢税取りの物語は、おそらく、親兵団層の手によつて、歴史事実と混合されながら、民衆層の多くの伝承を吸いあげて、長い面白い武勇的な物語としてつくり出して行

つたようである。そして、そのうちの重要なものが、ヤンのような人物の口から、年代記者を通じて『過ぎし年月の物語』に定着したものだと考えられる。

882年(6390年)の項にみられるオレグ《Олег》の物語(既に『古代ロシア研究』才二号p.25にて照合訳出済みである)、それにつゞくオスコリド《Осколд》とジル《Дир》の物語(同じく同誌同号p.26~27)を^も頭とする885年(6393年)の項までの物語には、まだまだ竹に木をつないだような、ぎこちなさが見られる。むしろ、無理に説話を拾いあげて組み込もうとしたようにも思われる。

この貢税取りの話が立派に英雄物語のようにまとまるまでには、ギリシア遠征の場合と同じように、イゴリヤスヴィヤトスラフの登場を待たなければならなかつた。スヴィヤトスラフがギリシア遠征を挙行するまでの、前奏的な物語として、この貢税取りの話が立派な形に成長して組み込まれたのであつた。964年(6472年)以下の記事が即ちそのようなものである。(『古代ロシア研究』才五号p.37以下参照) 念のため、ラヴレンチー、イパーチー、トロイツキー各年代記にみられる『過ぎし年月の物語』の同一の文章を引用しておこう。

В лето 6472.

Князю Святославу възрастѣшю и възмужавшю, нача вои совкупляти многи и храбры, и легко ходя аки пардус, войны многи творяше. Ходя воз по собе не возяше, ни котыла, ни мяс варя, но потонку изрезав конину ли, зверину ли, или говядину, на углех испек ядяше, ни шатра имяше, но подъклад поставляв и седло в головах; такоже и прочии вои его вси бяху. Посылалаше к странам глаголя: "хочю на вы ити". И иде на Оку реку и на Волгу, и нале-

зе Вятичи, и рече Вятичем: "кому дань даете?" Они же рече: "Козаром по шьлягу от рала даем".

В лето 6473.

Иде Святослав на Козары. Слышавше же Козари, изидоша противу с князем своим Каганом, и съступишася бити; и бывши брани, одоле Святослав Козаром и град их Белувежу взя. Ясы победи и Кастогы.

В лето 6474.

Вятичи победи Святослав, и дань на них възложи.

В лето 6475.

Иде Святослав на Дунай на Болгары. Бившемся обом, одоле Святослав Болгаром, и взя город 80 по Дунаеви; седе княжа ту в Переяславци, емля дань на Грыцех

〔6472(964)年〕

スバイヤトスラフ公が一人前になり成年に達したとき、多くの、しかして勇敢なる軍勢を集めはじめた。しかして、ひよりの如く身軽にめぐりあるき、多くの戦争を行つていた。自分の(軍の)うしろに輜重車をつれず、大なべも(もたず)、肉も煮ずに、馬肉であれ、けものの肉であれ、あるいは牛肉であれ、細かく切り刻んで炭火の上で焼いて喰べたものであつた。天幕ももたずに、あんじよくをひろげ、くらを枕にしていた。彼の他の軍勢も同様であつた。諸国に使者を立てて言つた。『汝らに向つて進攻したいと思ふ』と。しかしてオカ(河)およびウオルガ(河)に向つて進攻し、ウイヤチチに遭遇し、しかして、ウイヤチチに言つた。『(汝らは)誰に貢税を納めているのか』と。そこで彼らは言つた。『(我々は)コザリに、スキどとに一シチリヤグ納めている』と。

6473(965)年.

スヴィヤトスラフはコザリに向つて進攻した。ところで、コザリは(これを)聞いておのれの公カガンと共に(これに)対して出撃した。しかして(彼らは)戦いはじめた。しかして、戦闘があつてスヴィヤトスラフがコザリに勝ち、しかして、彼らの町ベラベジヤを占領した。ヤスイをうちまかし、しかしてカソギをも(うちまかした)。

6474(966)年.

グイヤチチをスヴィヤトスラフが打ち負かし、しかして彼らに貢税を課した。

6475(967)年.

スヴィヤトスラフはドウナイのボルガルに向つて進攻した。両軍が戦つたとき、スヴィヤトスラフはボルガルを打ち負かし、しかしてドナイに沿つた町八十を占領した。(彼は)グレキから貢税をとり立てながら(公として)君臨しつゝ、その地ベレヤスラヴェツにとどまつた」。

以上のうち、特に前半の6472年の項に注目したい。貢税取りをテーマとした物語が、ギリシア遠征をテーマにしたものより、より民衆的な口碑であつたことが、此処に、鮮かに映し出されているのではないか。如何にそれを、ギリシア遠征の予備行動的なものとして、親兵団的物語に組み替えようとしても、その本質はかくしきれなかつた。オ一その題材内容からして、最も古いブイリーナとそつくりではないか。ヴォリガ《Вольга》やスヴィヤトゴル《Святого́р》を詠じた最古のブイリーナのもつふんいきと瓜二つではないか。

同時に、それは、その用語の上からも指摘し得るところである。

例えば、しばしば取りあげた「行く」ことを意味する《йти》と《ходить》の用法だけを此処に取りあげてもよい。叙述語としては、キーの説話の時にしか用いられていなかつた《ходить》が

此処では、こんなにキーよりも後代の出来事としてのべながら、二度も重ねて用いられている。「豹のように軽々と進んだ」

《легко ходя аки пардусъ》、「自分のうしろに轡重車をつれずに行つた」《Ходя воз по себе не возяше》の二個所である。勿論、この言葉の使い方の余りにも民衆口碑的な古さに気づいた年代記者は、この動詞をキーの場合のように、アオリスト形としては用いなかつた。キーとは全く時代が新しいこととして書きとめようとした以上、精一杯の努力であつたかも知れない。その努力は、アオリスト形のみならず、過去形のパーフェクトとしてもインパーフェクトとしても使用することを避けしめ、ついに、両方とも同じ副動詞現在形に変えさせてしまつている。

然も、面白いことに、この記事以前に、盛んに口上の言葉として、喋り言葉の形で数回利用した《ХОДИТИ》を、年代記者は此処では忘れたのかも知れない。おそらく、それほどに、生の伝承からの圧力が強かつたのであらうと思われる。即ち、スワイヤトスラフが諸国に送つた口上の言葉は、以前の様に《ХОДИТИ》であつて然るべきだと思われるのに、此処では、《ИТИ》と反対の言葉が用いられている。「汝等に向つて進みたい」《ХОЧЮ НА ВЫ ИТИ》となつているのである。《ХОДИТИ》と《ИТИ》の納めどころが、こんな時代まで下がつて来てから混乱を示しているのは、おそらく、古い形のまゝで生きつゞけて来た口碑伝承を此処に組み込んで話を合わそうとした時の馬脚であつたと思われる。

民衆ベースのものであるにしろ、或は、親兵団的ベースのものであるにしろ、年代記の大きな源の一つをなしたと思われる叙事詩のような伝承は、残念ながら、ロシアでは現代にはほとんど伝えられていない。たゞ、最後まで民衆ベースでの伝承として、プイリーナだけが巨大な数量にのぼつて現代に伝えられているのみである。もしも、其処に、ツアリグラド遠征や、貢税取りや、スワイヤトスラフの前半の物語のような内容のものが、いまだに伝

承されているとしたらどうであろう。現在集録された限りのブイリーナに就ては、既にその全部の語彙調査に至るまでの仕事を終つたが、其処に、今のようなテーマや内容のものがあつたとしたら、話はなおさら面白いであろう。それを求めて見ることにしよう。

- Г -

ブイリーナは以下引用するように、民間庶民——むしろ、草深い田園——の中に伝承されて来たために、書きとめられることもなく、現在では、もうほとんど、現代ロシア語になりきつている。年代記のような、古代ロシア語の姿は全くない。その内容と言葉使いの調子を比較して見る以外に手がない。

スヴィヤトスラフの貢税取りとして6472年の頃の冒頭に出た一節『スヴィヤトスラフ公が一人前になり、成年に達したとき、多くの、しかして勇敢なる軍勢を集めはじめた』《Князю Святославу възрастѣшю и възмужавшю, нача воинсовкупляти многи и храбры》をロシア最古のブイリーナである『ヴォルフ・フセスラヴィエヴィチ』《Волх Всеславъевич》^①と題する197行に及ぶ作品の43行目以下の次の一節と比較してみるがよい。

А и будет Волх во двенадцать лет,
Стал себе Волх он дружину прибирать.
Дружину прибирать в три годы,
Он набрал дружины себе семь тысячей;

.....
.....

Со всею дружиною хороброю
Ко славному царству Индейскому

Тут же с ними во поход пошел.

『しかしてヴォルフ十二才になると
ヴォルフは自からに親兵団を集めはじめた。
親兵団を三年がかりで集めはじめた)。
彼は自分に七千の親兵団を集めてしまつた。

.....

..... (この間八行省略)

.....

総ての勇敢なる親兵団と共に
栄えあるインドの王国へ
そこで彼等と共に遠征に出かけた』

成長して親兵を集め始める話の一致は面白いではないか：然もその親兵団に付けられた形容詞は共は『勇敢なる』〈храбрый〉〈хоробрый〉であつた。『過ぎし年月の物語』の場合は、この形容詞の形が古代教会スラヴ語に傾き、ブイリーナの場合がより民衆的な東スラヴ方言の形であるにすぎない。

このブイリーナには、もつと面白い例が見当る。『過ぎし年月の物語』が非常に古い時代の物語として、年代設定以前に織り込んだ貢税取りの物語に、公や長老がその貢物を何処から取つて来たかと尋ねた場面があつた。それに対する答えが『山の上なる森の中』〈в лесе на горах〉であつた。このブイリーナの76行目には『彼(ヴォルフ)は暗き森を針葉樹の森を走り廻り飛び走つた』〈Бегал, скакал по темным по лесам, и по раменью〉とあるではないか。

また、イゴリの遠征を受ける側の皇帝が、その遠征し来りつゝあるこの報らせを受けるといふ年代記の物語と、このブイリーナの113行目以下の数行とはどうであろうか。『インドの皇帝』〈Индийский царь〉をツアリグラドの皇帝と置き替へるだけ

で充分のように思われる。

А и го́й еси ты, славный Индейский царь!
Изволишь ты наряжаться на Русь воевать,
Про то не знаешь, но ведаешь, ---
А и на небе просвета светел месяц,
А в Киеве родился могуч богатырь,
Тебе царю сопротивничек".

『あゝ、汝、栄えあるインドの皇帝よ！

汝よ、ルシに対して戦いの武装をせよ。

(汝は)それを知らないだろうが

空には明るき月が輝き渡つて

キエフで強き勇士が

皇帝なる汝の敵対者が生まれたのだ』

しかも、バイリーナにおけるヴォルフが遠征先で獲得した貢物はやはり『黄金』〈злато〉であつた。たゞ、ギリシア遠征の物語とはちがつて、この古いバイリーナでは絹の代りに『銀』〈сребро〉が加えられている。

同じく、キーエフ圏の古いバイリーナ『ヴォリガ』〈Вольга〉^②を取りあげてみよう。其処にも、年代記におけるスヴィヤトスラフの如く、バイリーナにおけるヴォルフの場合の如く、成人して親兵団を集める一節が出て来る。才十六行目から二十行目にかけて次の様にある。

А прожил двенадцать лет,
Обучался хитростям-мудростям,
Всяких языков разных.
Собирал дружину себе добрую,
Добрую дружину, хоробрую,

『ところで(ヴォリガは)十二年すどした

さまざまの武芸を習つた。

さまざまの言葉をも。

おのれのために良き親兵団を集めた。

良き親兵団を、勇敢なるを。」

然も、このブイリーナでも、ヴォリガが親兵団と共に活躍し獲物を捕える場所は森なのであつた。然も面白いことに、此処には、海を舟でギリシアへ押し渡つたイゴリヤスヴィヤトスラフを思わせ、なお、絹の帆の話やさえ想記させる一節がある。自分の親兵団にヴォリガが命ずる言葉で、75行目から79行目にかけて、次の様に詠まれるのである。

Возьмите топоры дроворубное,

Стройте суденышко дубовое,

Вяжите путевья шелковые,

Вьезжайте вы на сине море,

『カシの木を切るおのを取れ、

カシの木の舟を造れ、

絹の綱を結べ、

汝等、青海原に乗り出せ』

イゴリの場合の絹の帆にしる、この場合の絹の綱にしる、それが舟の話であつてみれば、いかほどの差異もないではないか。

『考える』〈думати〉という言葉が、相談協議するという意味で『過ぎし年月の物語』の中に用いられていたことは既に用例を引いて述べたが、このブイリーナで、同じような場面と用例の影が出て来る。102行目から103行目にかけて、〈Проведати про думу про царскую, И что царь думы думает〉『皇帝の考えを知るために、しかして皇帝が如何に物を考えているかをも』とある。民間に伝承され、詠じられるブイリーナは『考える』〈думати〉に同じ語幹の『考え』〈дума〉を補語として持ち出しているにすぎない。このブイリーナのすぐその数行後

に詠じられる文句からも、この『考える』〈думати〉は、決して物思いにふけることではなくて、協議することを意味したことが分る。即ちこの場合の協議の相棒は王妃〈царица〉であつた。このブイリーナでヴオリガが戦利品を親兵団と山分けする最後の節は、特に年代記の最も古い貢税取りの場面を思わせる。同じサーベル〈сабля〉という言葉さえ使われて、193行目以下に次の様に詠まれている。

Дружина моя добрая, хоробран!
Станемте теперь полону поделять.
Что было на делу дорого,
Что было на делу дешево?
А добрые кони по семи рублей,
А вострые сабли по пяти рублей,
А оружие булатное по шести рублей,
Палицы булатные по три рубля,

『我がうるわしき勇敢なる親兵団よ！

今や、獲物を分けようではないか。

事に當つて何が価高く。

事に當つて何が価安かりしか？

良き馬は七ルーブリとし

鋭きサーベルは五ルーブリとし

鋼の武器は六ルーブリとし

鋼のこん棒は三ルーブリとせん。』

此処でルーブリという貨幣単位は、勿論、伝承の間に新しく差し替えられたものである。

以上二個のブイリーナに竝んで、最古のものだと考えられるものに、スヴイャトゴール〈Святогор〉を主人公にしたブイリーナがいくつがある。『過ぎし年月の物語』の中に見られた最も古い、年代設定以前の貢税取りの物語は、山の上の森に住む者たち

からの獲物の話であつた。この、攻撃や征伐の相手が山の土の森に
いるという話の筋が、どれほど古いロシアの英雄叙事詩のテー
マであつたかと、此処で明瞭に証明されそうである。スヴァトゴ
ールをその地位から追い出す新しい英雄イリヤ《Илья》が、彼を
見出した場所はどこであつたか？

『スヴァトゴールが棺を測る』《Святогор примеряет
гроб》と題するブイリーナ^③には、イリヤの言葉によつて、
その場面が描き出されている。6行目以下にそれが次の様に詠じ
られている。

" Поеду я еще во святы горы,
Проведаю ведь я про богатырей,
Про того ли я Егора-Святогора ведь.
Есть матерой богатырь да великих,
Есть он, был на горных,
Его-то я ведь силушки не попробовал".
Заехал-то Илюшенька Муромец
На ты ль тут горы на высокие,
Под ущелья бы ли да плотные.
Как едет чудовище, чудо ведь,
Сидит-то он еще на добром кони,
Такого чуда он да ведь не видал,
Такого ведь чуда он не слышал.
Как тут разъехался на добром кони,
Ударил своей палицей богатырской
Прямо тут ему буйну голову.
А как то ведь чудовище да идет-то,
На кони сидит да подремливат,
Назад-то ведь чудо не оглянется,
Вперед-то ведь он колыбается.

『なお我は聖なる山々に行き、
勇士たちを我は良く知るものなり。
かのイエゴール・スヴィヤトゴールをも。
彼は強大にしておおいなる勇士なり、
彼は山々の勇士なりき。
されど彼の力をば我はいまだためさず』
イリヤ・ムーロメツは、その高き
山々に馬をかり行きぬ。
その時、不思議なる魔物の乗り進むあり。
よき馬にそれはまたがりてありぬ。
彼はいまだかゝる不思議を見ず、
かゝる不思議を耳にせしこともなし。
その良き馬を乗り廻し
勇士の如くこん棒にて
あらき馬の頭を打ちつ進みぬ。
この魔物は進み行けども
馬にまたがりて、まどろむに似て、
うしろもふりむかず
前方に揺れ動くのみに似たり』

英雄イリヤは、この巨大なスヴィヤトゴールに勝ち、その力を
引きついで、新しき時代の英雄になるのである。

遠い原始の世界から文明の夜明けへの境目、深い森と野の境目
が、そして、その境目を行き来する勇者たちの姿が、このブイリ
ーナにも、先に述べた年代記の貢税取りの物語にも映し出されて
いる。

貢税〈дань〉や、ツアリグラード〈Царьград〉などという言
葉が、明らかに組み込まれているブイリーナは、これら、ヴォル
フ、ヴォリガ、スヴィヤトゴール等を詠じた最古のブイリーナよ
りも、むしろ、多少新しい。年代記が書かれたころ、勿論、それ

らの多少新しいバイリーナは生き生きと存在していたであろうが、それに立ちまじつて、ほとんど原始から引きつがれたこの様な最古のバイリーナもまた生きていたと思われる。この最古のバイリーナの物語のような伝承から、年代記者(達)が引き写し、或は構成したものが『過ぎし年月の物語』における年代設定以前の多くの物語であつたであろう。

バイリーナ作品の全体に亘る語彙調査の結果から、『貢税』〈дань〉、『ツアリグラード』〈Царьград〉などという言葉の登場するものに眼を通してみよう。

怪物的なスヴィヤトゴールヤヴオリガというバイリーナの主人公たちから抜け出して、真に人間らしい主人公が活躍するバイリーナができたのは、原始から文明への境目を渡る時代のことであつたであろう。そういうバイリーナの代表的なものに、比較的長い作品で『ドーブлуйニヤと蛇』〈Добрыня и Змей〉^④と題するものがある。其処には、明瞭に『貢税』〈дань〉という言葉が初めて用いられる。即ち、公〈князь〉が、それぞれの勇士に貢税を取りに行く命令を下す個所で、例えばミハイロ〈Михайло〉には244行目から247行目にかけて、イリヤ・ムーロメツには250行目から254行目にかけて、各々その貢税取りの命令の言葉が見られるのである。その様にして、貢税取りに出かけた人物たちのうちで、主人公ドーブлуйニヤの相手として設定された蛇どもを踏み散らしながら、その本陣に迫る姿は、いかにも『過ぎし年月の物語』におけるギリシア遠征の物語の原型に仕立て上げられそうではないか。数多いバイリーナ作品の中にあつて、この一節は特にその勇壮さと戦気の充実とにおいて抜群である。古い時代の戦いが庶民伝承の鏡に反映した最も典型的なものであるかも知れない。377行目から次に引用しておきたい。

Его добрый конь да богатырский

По чисту полю он стал поскакивать,

По целой версте он стал помахивать,
По колену стал в землю погрязывать,
Из земли стал ножек он выхватывать,
По сеной копне земляки он вывертывал,
За три выстрела он камешки откидывал.
И он скакал-то по чисту полю, помахивал,
И он от ног своих змеенышей отряхивал,
Потоптал всех малых змеенышей.
Подъезжал он ко норам да ко змеиным,
Становал коня он богатырского,
Да й сходил Добрыня со добра коня
Он на матушку да на сыру землю,
Облачался-то молоденький Добрынюшка
Во доспехи он да в свои крепкие:
Во-первых, брал саблю свою вострую,
На белы груди копье клал мурзамецкое,
Он под левую да и под правую
Полагал он паличку булатную,
Под кушак он клал шальгу подорожную
И он пошел во ты во норы во змеиные.
Приходил он ко норам да ко змеиным,
Там затворами затворено-то медныма,
Да подпорами-то подперто железныма,
Так нельзя войти во норы во змеиные.
То молоденьский Добрынюшка Микитинец
А подпоры он железные откидывал,
Да й затворы-то он медные отдвигивал,
Он прошел во горы во змеиные,
Посмотрел-то он на норы на змеиные;
А й тех норах да во змеиных
Много множество да полонов сидит,

Полона сидят да все расейские,
А й сидят-то там да князи, бояра,
Сидят русские могучие богатыря.
Похотелось-то молодому Добрынюшке,
Похотелось-то Добрыне полона считать,
Й он пошел как по норам да по змеиным,
Насчитал-то полонов он много множество,
Да й дошел он до змеинища Горынища;
А й у той-то у змеища у проклятой
Да й сидит Забавушка Путятична.
Говорил Добрыня таковы слова:
"Ай же ты, Забавушка Путятична!
Да ставай скоренько на резвы ноги,
Выходил-тко ты со нор да со змеиных,
Мы поедем-ка с тобой да в стольно-Киев-град,
.....

『彼の良き勇士の馬は
広き野を走りはじめた。
馬は遠く尾を振りはじめた。
膝まで泥によごしつゝ
泥より足を抜いては走つた。
干草の山に土をはねかけ
三露里の彼方まで小石を飛ばした。
馬は尾を振りて野を走り、
まつわる蛇をふりおとし、
ことごとくそれらを踏みつけた。
蛇の穴にたどりつき
彼は勇士の馬をとらめた。
しかして馬よりドープルイニヤは

母なる大地におり立つた。
勇ましきドーブルイニヤは
おのれの堅きよろいをつけ
まず、鋭いサーベルを持ち、
胸には勇士のヤリを抱いた。
彼は左のふところに
綱のこん棒をもち
皮帯の下には旅のムチを入れ
しかして、彼は蛇の穴に向つた。
彼は蛇の穴に着いた。
其処には銅のかんぬきが閉められ
鉄の支柱が閉め込まれ
蛇の穴へは入れない。
そこで勇ましきドーブルイニヤ・ミキチネツは
鉄の支柱をはねとばし
銅のかんぬきを動かしのけて
彼は蛇の穴へと通つた。
蛇の穴をば彼がみつめたら
それらの蛇の穴には
数多くの捕虜が坐つていた。
坐つているのは全部ロシアの捕虜。
其処には公も貴族も
ロシアの強き勇士もいた。
勇しきドーブルイニヤは
ドーブルイニヤは捕虜を数えようとした。
しかして彼は蛇の穴から穴へと進んだ。
彼は数多くの捕虜を数えあげた。
しかして彼はゴルイニシチエ蛇に至り、
見ればこの呪わしき蛇のそばに

ザバヴシカ・ブチャチナの坐つていた。

ドーブルイニヤはこう言つた。

『さあ、汝、ザバヴシカ・ブチャチナよ、

さあ早くしつかりと立ちあがれ、

我と共にこの蛇の穴より出でて、

二人して都なるキエフに戻るのだ』と。

.....

この作品には、非常に時代がさがつてから組み込まれた言葉がある。例えば、『勇士のヤリ』と訳しておいた《копье мурза-мецкое》のмурзамецкоеなどという形容はその一つである。《мурза》とは実はタタールの小貴族のことである。だから、タタールの侵入以前に、この言葉があつた筈がないからである。伝承途上に、それぞれの詠誦者によつて、次々に組み替えられて行つたにしても、此処には『過ぎし年月の物語』の中から先に引用した物語部分の下敷の原型が見出せそうである。例えば、ルシの者たちが捕虜になつた話、ギリシヤ人が防衛のためにスト（湾）を閉鎖した話などである。然も、このブイリーナには、蛇が火を吹いて勇士に立ち向う一節があつて、ルシが夜中に海上で火打に会う年代記の物語に通じ、なお、この作品には、『行く』《холод-ити》という動詞まで数回用いられているのである。

この様なブイリーナは、勿論、主として農民を中心とする庶民の間に生きていた伝承物であるから、そのまゝの形で、年代記^をの書き始め~~を~~にいた知識人たちの間に存在していたとは言えないであろう。今は既に失われて無いが、ブイリーナの庶民的作品の上に、親兵団の、宮廷の、或は教会の、それぞれ向きの古い勇士物語があつたことであろう。それらの伝承作品から再構成されたものが『過ぎし年月の物語』に定着した一部の物語であつたにはちがいない。

然し、今、こゝでは、もうしばらく、遠征、（特にツアリグラ-

ドへの)、貢税取りを話にした古いブイリーナが、いまなお、如何に多く伝えられているかを見ておくことにしよう。そうすれば、年代記の物語の下敷が如何に広く深く強固なものであつたか分かるであろう。

その様な話や言葉の出現する古いブイリーナの各節の引用は省略して、その主なものの作品題名だけを次に列挙するためにとどめる。(冒頭番号は註と参照のため)

⑤『ドープルニヤ・ニキーチチとヴァシリイ・カジロヴィチ』

〈Добрыня Никитич и Василий Казимирович〉

⑥上と同一の題名の後に『出陣のドープルニヤ』〈Добрыня в отъезде〉が付けられた作品。

⑦『イリヤ・ムーロメツの病氣治癒』〈Исцеление Ильи Муромца〉；(このイリヤを主人公とした他の多くのブイリーナも同様である)

⑧『イリヤ・ムーロメツとキーエフの怪物』〈Илья Муромец и идолище в Киеве〉

⑨『出陣のドープルニヤとアリヨージャの失敗した結婚』
〈Добрыня в отъезде и неудавшаяся женитьба Алеши〉

.....以下省略。

年代記において、ロシアの公は、十五世紀にならなければ皇帝〈царь〉と言われることはなかつた。〈царь〉と言えば、特に『過ぎし年月の物語』のように古い年代記では必ずギリシアビザンチンの皇帝であつた。もしも、〈царь〉、〈царский〉、〈царевна〉、〈царевич〉等々の言葉をブイリーナに求めるなら、キーエフ及びノヴゴードで活躍する主人公を持つ古いブイリーナのほとんど総てが、それをもつていゝと言わなければならないであろう。

(註)

- ①キルシア・ダニローフ〈Кирша Данилов〉が集録して、その第六歌として公にしたものである。1901年の出版による。
- ②ギリフェルジング〈Гильфердинг〉が集録したバイリーナで、レリコヴォ〈Леликово〉村で八十才の盲目の農民クジマ・ロマノフ〈Кузьма Романов〉が詠ずる作品であつた。彼のバイリーナ十集第二巻の91歌である。
- ③ソコロフ〈Соколов〉とチエロフ〈Чичеров〉が集録したバイリーナ第一号である。63才であつたグリゴリー・アレクセーエヴィチ・ヤクシヨフ〈Григория Алексеевича Якушов〉の詠じたものである。十九世紀のバイリーナ詠誦者の代表的人物であつたという。彼は貧しい、然し勤勉な農民で背の低い肩巾の広い男であつたとチチエロフは伝えている。
- ④ギリフェルジングのバイリーナ集第二巻に納められた第七十九歌である。
- ⑤グリアエフ〈Гуляев〉が南部シベリアで集録したバイリーナの第十歌である。1871年にバルナウル〈Барнаул〉でレオンチイ・ガヴリロヴィチ・トウピツイン〈Леонтий Гаврилович Тупицын〉の詠ずるものであつた。この詠誦者は、非常に貧しい盲目の老人であつたという。彼は二十個ほどのバイリーナを記憶していた。然し、残念ながら、南シベリアにまで流れたバイリーナで、彼から集録されたものは、この一作品にすぎない。この作品には原型の上へ後代のタタール支配期の影が色濃くしみ込んでいる。
- ⑥アスタホヴァ〈Астахова〉の北方バイリーナ集第二巻134番にあるもの。有名な詠誦者リャビニン〈Рябинин〉の詠ずる作品であつた。この詠誦者はその叙詩伝承の功によつて、ソヴェト作家同盟の会員におされた。このバイリーナにはずつと後代のタタール時代の反映が色濃いが、その貢税取り立ての物語は、原初年代記によりもはるかに古いだろう。
- ⑦ソコロフ及びチチエロフの集録したバイリーナ第70号で、当時58才であつたミロノフ〈Миронов〉なる人物から聞き取つたものである。二人の集録者の伝えるところによれば、この詠誦者は非常に物静かに、美しく詠じたものであつたという。このバイリーナは、非常に多くの人々が各地で聞き取つているので、おそらく、最も愛好され、最も広まつたバイリーナ作品の一つであつたであろう。

- ⑧ギリフェルジングのバイリーナ集第二巻の四号歌。ペョートル・カリーニン〈Петр Калинин〉という人物からプドージュ山〈Пудожская гора〉のリーム〈Рим〉村で聞きとつたものである。
- ⑨ルイブニコフ〈Рыбников〉の歌謡集第一巻に第26号として出されているものでボグエネツキー郡ゴールカ村〈Горка Повенецкого уезда〉のすぐれた詠誦者アヴラム・チユーコフ〈Абрам Чуков〉から集録したものである。

— D —

バイリーナではイリヤ、アリヨーンヤ、ドープルイニヤ等々の英雄が活躍するのに対して、彼等の公〈князь〉は、もつばらキエフの都に坐しているだけで、ほとんど動かない。むしろ、これらの英雄たちの総元締として、却つて、英雄たちによりかゝつている。多くの危機に際しては、英雄たちの判断に待ち、結婚の仲介さえも、これら勇士にしてもらうのである。これらのバイリーナにも示された伝承物語の素材——家臣に結婚の仲介をしてもらい、戦いにあつてはその判断を英雄たちに仰ぐという——は、『過ぎし年月の物語』の中に取り入れられて織り込まれた跡が歴然と残つている。公が勇士の判断に従わなかつた場合と、反対に従つた場合との結果までを年代記は述べあげているのである。そのうち、二、三の場合を例として次に述べてみよう。

バイリーナの勇士にも当る老練な軍司令の助言を聞かずに破滅におちた場合の物語。ラヴレンチー、以下三つの年代記に見られる文章は、971(6479年)の項の最後の部分から翌年の項に亘つて、次の様にある。

Створив же мир Святослав с Греки, поиде в лодьях к пороюм, и рече ему воевода отень Свендел: "поиди, княже, на конех около, стоять бо Печенези в порозех". И не послуша его, поиде в лодьях, и послаша Переяславци к Печенегом, глаголюще: "се идеть вы Святослав в Русь, взем имение много у Грек

и полон безчислен, с малыми дружины". Слышавше же се Печенези, заступиша пороги, и приде Святослав к порогом, и не бе льзе проити порог; и ста зимовати в Белобережьи, и не бе у них брашна уже, и бе глад велик, яко по полугривне глава коняча, и зимова Святослав ту. Весне же приспевъши, В лето 6480,

поиде Святослав в пороги, и нападе на нь Куря князь Печенежский, и убиша Святослава. Взяха главу его и во лбе его съделаша чашю, оковавше лоб его, и пяху по нем. Свеналд же приде Киеву к Ярополку.....

『そこで、スヴィヤトスラフはグレキと和平を講じ、舟に乗つて浅瀬へ出発した。しかして彼に父の軍司令官スヴェンデルが言つた。『公よ、馬に乗つて迂回せよ、というのは、ベチエネギが浅瀬に布陣しているから』と。しかして（スヴィヤトスラフは）彼のいうことを聞かず、舟ででかけた。しかしてベレヤスラヴェツ人たちがベチエネギに使者を送つて言つた。『見よ、汝の方にスヴィヤトスラフがルシへ向つて進んでいる。グレキから多くの財物と無数の捕虜をとめない、少数の従士団を引きつれて』と。そこでベチエネギはこれを知り、浅瀬を占拠した。しかして、スヴィヤトスラフは浅瀬に着いたが、浅瀬を通り抜けることができなかつた。しかして、（彼は）ペロベレジエで越冬するためにとどまつた。しかして、彼等のところにはもはや食糧がなく、馬の頭が半グリヴナするほどの大いなる飢がおこつた。しかしてスヴィヤトスラフはそこで越冬した。春が来た時。

6480(972)年。

スヴィヤトスラフは浅瀬へ進んだ。しかしてベチエネギの公ク

リヤは彼におそいかゝり、しかして（彼らは）スヴィヤトスラフを殺した。（人々は）彼の頭をとり、彼の頭蓋骨に金を張り、彼の頭蓋骨で杯を作つた。しかして、それで（人々は）呑んだものであつた。ところでスヴェナルドはキエフへ、ヤロボルクのもとへもどつた』（古代ロシア研究；オ五号；p.73～p.75参照）

これと同じような例は980(6488)年の項の冒頭より少し進んだところに、軍司令の忠告を聞かずに敵方に出かけて殺されてしまうヤロボルク《Ярополк》の物語がある。軍司令の名はヴァリヤジコ《Варяжько》であつた。

反対に、軍司令の助言によつて種々の成功を納めた話が多いが、その中でも、同じ980(6488)年の冒頭のヴォロジメル《Володимир》は、それにつづく記事に登場するドーブルニヤ《Добрыня》の助言によつてログネダ《Рогнеда》という妻を手に入れたように思える話は面白いし、その子ヤロスラフ《Ярослав》の成功の物語もまたそうである。ヤロスラフがよりかゝつた軍司令官の話はいくつかあるが、1016(6524)年の項にみられる物語とその翌年の記事に見られるものが面白い。即ち、この年(1016年)に、年代記によれば彼は二十八才であつた。親兵団と共にドニエブル河の氷上でスヴィヤトボルクの軍勢を破り、父祖伝来のキエフの王座についたのであつた。この戦いには、勿論、親兵団とその軍司令官の果たした役割が大きかつたでつろう。特にそのことが面白く物語られるのは、むしろ、その翌々年の1018(6526)年の項である。ラヴレンチーをはじめとする多くの年代記の『過ぎし年月の物語』には、面白く次の様に書きとめられている。軍司令官の実戦におけるかけ引きが注目される。

В лето 6526.

Приде Болеслав с Святополком на Ярослава с Ляхы; Ярослав же совокупив Русь, и Варягы, и Словене, поиде противу Болеславу и Святославу, приде Во-

лыню, и стаха оба пол реки Буга. И бе у Ярослава кормилець и воевода, именован Будый; нача укарят Болеслава, глаголя: "да то ти прободем трескою череве твое толъстое". Бе бо Болеслав велик и тяжек, яко и на кони не могли седети, но бяше смыслен; и рече Болеслав к дружине своей: "аще вы сего укора не жаль, аз един погыну". Всед на конь, вбресе в реку и по нем вои его, Ярослав же не утягну исполчитися, и победи Болеслав Ярослава; Ярослав же убежа с 4-ми мужи Новугороду, Болеслав же вниде в Киев с Святополком. И рече Болеслав: "разведете дружину мою по городом на покоръм", и бысть тако. Ярославу же прибежю Новугороду, и хотяше бежати за море, и посадник Коснятин, сын Добрынь, с Новгородьци разсекоша лодье Ярославле, рекуще: "хочем ся и еще бити с Болеславом и съ Святополком". Начаша скот сбирати от мужа по 4 куны, а от старост по 10 гривен, а от бояр по 18 гривен; и приведоша Варягы, вдаша им скот, и совокупи Ярослав воя многы. Болеслав же бе в Киеве седя, оканьный же Святополк рече: "елико же Ляхом по городу, избивайте я", и избива Ляхы. Болеслав же побеже из Киева, възма именье и бояры Ярославле и сестре его, и Настаса пристави Десятиньнаго ко именю, бе бо ся ему вверил лестью, и людей множество веде с собою, и города Червеньскыя зая себе, и приде в свою землю. Святополк же нача княжити в Киеве, и поиде Ярослав на Святополка, и бежа Святополк в Печенеги.

『6526(1018)年。

ボレスラフはスヴィヤトボルクと共にリヤヒをひきいてヤロスラフに攻め来たつた。ところで、ヤロスラフはルシ及びヴアリヤギ、及びスロヴェネを集めて、ボレスラフ及びスヴィヤトボルクに対して出撃した。ヴォルニに着き、しかして、ブーグ河の両側にとどまつた。しかして、ヤロスラフにはブードウイという名の養育係兼軍司令官がいた。しかして(彼は)ボレスラフを非難しはじめた。『見よ、今、(我々は)くいで汝の肥えた腹を突きさしてやるぞ』と。というのは、ボレスラフは大男で重く、馬にも乗れないほどであつた。然し、賢かつた。しかして、ボレスラフはおのれの親兵団に言つた。『もしも、汝らが、この様な非難を残念に思わないならば、我は一人で死地にゆくであろう』と。馬に乗つて(彼は)河に入つた。彼の軍勢が彼に(つどいた)。ところでヤロスラフは武装する暇もなく、ボレスラフはヤロスラフを打ち負かした。そこで、ヤロスラフは四人の家臣と共にノヴゴロドに逃げた。そこで、ボレスラフはスヴィヤトボルクと共にキエフに入つた。しかして、ボレスラフは言つた。『我が親兵団を食を得させるために町々に導き分けよ』と。しかして、その通りになされた。ところで、ヤロスラフはノヴゴロドにのがれ来たり、海の向うへ逃げようと欲したが、ドーブルニヤの子である代官のコスニヤチンがノヴゴロドの人々と共にヤロスラフの舟を破壊して、言つた。『(我々は)もう一度、ボレスラフ及びスヴィヤトボルクと戦い合ふことを欲する』と。しかして(人々は)家臣から四クナづゝを、また、長老からは十グリヴナづつを、また貴族からは十八グリヴナづつを集めはじめた。しかして、(人々は)ヴアリヤグを連れ来たり、彼らに金銭を与えた。しかして、ヤロスラフは多くの軍勢を集めた。一方、ボレスラフはキエフに坐していた。呪われたスヴィヤトボルクは言つた。『町にいる限りのリヤヒを、打ち殺せ』と。しかして(人々は)リヤヒを殺し

た。そこで、ボレスラフはキエフから逃げ、ヤロスラフの財産及び貴族及び彼の姉妹たちをとらえた。しかして、十人頭のナスタスを財産につけた。というのは、虚言をいつて彼に従つていたからである。しかして、多くの人々をおのれと共に連れ、しかして、チエルヴェンの町々を自分のものとして取り、しかして、おのれの国へ帰りついた。そこで、スヴィヤトボルクはキエフに君臨しはじめた。しかしてヤロスラフはスヴィヤトボルクを攻めた。しかして、スヴィヤトボルクはペチエネギへ逃げた』

これらの他にも、貢税取りの物語と重なつて、オリガ< Ольга > 女帝の物語の項には、その軍司令官の物語が出て来る。(古代ロシア研究；才五号；p. 4 以下参照)。

ところで、公に貢献し、公の勝利を導いた軍司令官の場合だけを取りあげてみると、面白いことに気づくであろう。ヴォロジメルがその軍司令官に負う所が多かつた場合の当の軍司令官はドープルニヤ< Добрыня >であつた。そして時代がさがつて、ヤロスラフがキエフの王座につく場合に貢献したのは、上に引用したようにブードウイ< Будуй >であつたが、実はもう一人、引用文の中には重要な助言者がいた。即ち、ドープルニヤの息子に当るコスニヤチン< Коснятин >である。

年代記者がヤン< Ян > から多くの物語を聞いて、『過ぎし年月の物語』に書き込んだ当のヤンが、父ヴィンヤタ< Вышата > から二代に及ぶ軍司令経験者であるように、ドープルニヤとコスニヤチンもまた父子二代に及ぶ公の側近であつた。

これは何を物語るのであろう。一家の血統と名門のほまれを、年代記者への語り手であつたヤンが思わず表面へ押し出そうとした結果ではなかつたのか。少くとも、父ヴィンヤタとヤン自身の物語の中には、この様なヤンの一門自慢の裝飾があつたと思はなければならぬ。

ところが、血統や名門であることの自慢話は、或る場合には、

その一門が順調に伸びている時よりも、むしろ、左前になつて逆境におちる時により多く、なされるものである。ではヤンの場合は、どうであつたであろうか。『過ぎし年月の物語』の中には、ていねいにそれを読むことによつて、読み取れる手がかりが伏在している。

ヤンが年代記者に物語るような年令——それは、人の常として決して若い壮年時代のことではなかつた筈である。おそらく老境か或は老境が近づいてからのことである。では、その頃、ヤンは、誇り高い順風の中にあり得たかどうか？ その年代頃の記事には、一つ、注目すべき文章が見当るのである。即ち、1093 (6601)年の項に、ヴオロジメルの孫、ヤロスラフの子、フセヴオロド《Всеволод》大公が死んだとあり、それにつづいて、彼の生涯を讚美的にふり返る文章の一節に次の様な個所がみられる。ラヴレンテーをはじめとする年代記に «и нача любити смысл уных, съвет створя с ними; си же начаша заводити и негодовати дружны своя первая,» 『しかして(フセヴオロド大公は)若き者らの知恵を愛し彼等と合議しはじめた。これら(若き者ら)は、彼をあやつりはじめ、おのれの以前の親兵団の不満をかいはじめた』とある。

嘗つては、その親兵団の光輝ある名門の一員で、然も、その最右翼であつたヤンが、相当の不满と、義憤をもつて、過去の栄光を語る時、おのれの一門の自慢話と、過ぎし年月の勇壮果敢さを以て、当世風の幣害にいどもうとしたのは当然であつたかも知れない。

自分も、その父も、そして、また、昔の人々がそうであつた如く、遠い国への遠征や、貢税取りや、捕虜の獲得の如き仕事を物語ることによつて、もう既にその行われなくなつた——ひいては、既に自分が過去の不用な人間になつた——時代への、やり場のない怒りと悲しみがヤンの物語には燃えていたものと思わ

れる。

このヤンの気概のようなものに、年代記者は心から同調していたもののように思われる。当世風の不始末の記事に及ぶと、ヤン亡き後の記事には、世間の物語として、年代記者は、必ず良き時代の勇壮さを昔話として織り込むからなのである。事実また、そう言う世直しの気概にみちた昔物語が、その時代には世間一般に多く好み伝えられていたのかも知れない。賢明な年代記者はそれを見落さなかつたのであろう。そして、その様な昔話を年代記者はうまく書きとめて行つた。

ヤンの死後二十二年目の記事、即ち1128(6636)年の項にボロツクのログヴオロドの孫たちと、ヤロスラフの孫たちとの間の血統的な敵意を説明するために用いられた昔話もその一つである。ラヴレンチーヤトロイツキ年代記には次のように書かれている。

сказаша ведущи, преже: яко Роговолоду держащу и владеющу и княжашу Полотъскую землю, а Володимеру сущу Новегороде детьску сущу еще и погану, и бе у него Добрына воевода, и храбор и наряден мужь, и съ посла к Роговолоду и проси у него дщере за Володимера. Он же рече дщери своей: "хочеш ли за Володимера?" Она же рече: "не хочю розути робиича, но Ярополка хочю". Бе бо Роговолод перешел из заморья, имеяше волость свою Потеск. Слышав же Володимер, разгневался о той речи, оже рече: "не хочю я за робиича"; пожалися Добрына и исполнися ярости, и поемша вои идоша на Полтеск и победиста Роговолода. Роговолод же вбеже в город, и приступивъше к городу, и взяша город, и самого яша, и жену его и дщерь его; и Добрына поноси ему и дщери его, нарек ей робиича, и повеле Володимер быти с нею пред

отцем ея и матерью. Потом отца ея уби, а саму
поя жене, и нарекоша ей имя Горислава; и роди
Изяслава. Поя же пакы ины жены многы, и нача ей
негодovati. Неколи же ему пришедшу к ней и ус-
нувшю, хоте и зарезати ножем; и ключися ему
убудитися, и я ю за руку. Она же рече: "сжа-
лилася бях, зане отца моего уби и землю его
полони, мене деля; и се ныне не любиши мене и
с младенцем сим." И повеле ея устроитися во всю
тварь царьскую, якоже в день посяга ея, и сести
на постели светле в храмине, да пришед потнетъ
ю. Она же тако створи, и давши мечь сынови сво-
ему Изяславу в руку нагу, и рече: "яко видеть
ти отецъ, рци выступа: отче еда един мнишися
ходя?" Володимер же рече: "а хто тя мнел сде?"
и поверг мечь свой, и созва боляры, и поведа им.
Они же рекоша: "уже не убий ея детяти деля сего,
но въздвигни отчину ея и дай ей сыном". Володи-
мер же устрои город, и да има, и нарече имя го-
роду тому Изяславль. И оттоле мечь взимають Рог-
оволожи внуци противу Ярославлим внуком.

『物識りたちは言つた。以前，ロゴヴオロドがボロチエスクの
國を治め支配し公としてあつた時，また，ヴオロジメルが，ノヴ
ゴロドにいて，幼少であり，いまだ異教徒であつた時，彼には軍
司令のドーブルナがいた。しかして（ドーブルナは）勇敢で優秀
な家臣であつた。しかしてこれ（ドーブルナ）は，ロゴヴオロド
のもとに使者をおくり，彼の娘をヴオロジメルのために（妻とし
て）乞うた。ところで彼は，おのれの娘に言つた。『ヴオロジメ
ルに（嫁ぐを）欲するや？』と。そこで彼女は言つた。『奴隸の

子のはき物をぬがせることは欲しない。然し、ヤロボルクを望む』と。というのは、ロゴヴオロドは海の向うから移り来たつていたもので、ポロチエスクのおのれの権力を持つていたからである。ところでヴオロジメルは聞き知つて、(彼女が)言つた『奴隷の子には嫁ぎたくない』という言葉に立腹した。ドーブルナは、不満やる方なく、怒りにみちた。しかして、軍勢をととのえ、ポロチエスクへ進攻した。(二人は)ロゴヴオロドを破つた。ところでロゴヴオロドは、町の中へ逃げこみ、しかして、(人々は)町に攻め来たり、町を、(彼)自身をも、彼の妻をも、彼の娘をも捕えた。しかしてドーブルナは彼(ヴオロジメル)のところへ奴隷の子と言つたその娘を連れ来たつた。しかして、彼女の父及び母の前で彼女と共にあるようにヴオロジメルに命じた。その後、彼女の父を殺し、彼女自身を妻にとつた。しかして(人々は)彼女の名をゴリスラヴァと呼んだ。しかして(彼女は)イジャスラフを生んだ。ところが再び別の多くの妻を(彼は)めとつた。しかして彼女は不満になりはじめた。ところで、或る時、彼が彼女のところへ来たつて、寝入つた時、(彼女は)刀で彼を斬ろうと思つた。しかして、彼は偶然覺さぬ、しかして彼女の片手をつかんだ。そこで彼女は言つた。『(我は)悲しんでいた。というのは(汝は)我故に我が父を殺し、しかして、見よ、今は(汝は)我を愛していないではないか。この幼き児があるのに』と。しかして、(ヴオロジメルは)彼女の結婚の日の如くに、あらゆる皇帝流の裝飾を装おうように命じ、しかして部屋の中の美しい寢床に坐するように(彼女に)命じた。(おのれが)来たつて、彼女を殺さんがためであつた。そこで彼女は、そのよになした。しかして、おのれの息子のイジャスラフに裸のままの劔を手に渡し、しかして言つた。『汝の父が入つて来たら、進み出て言え。父よ、一人で行動しようと考えているか?』と。そこでヴオロジメルは言つた。『ところで誰が此処で汝を(殺そうと)思うか?』と。

しかして、おのれの劔を取りおとし、しかして貴族たちを呼びあつめた。しかして彼等に物語つた。そこで彼等は言つた。『この故に、もう、彼女の子供を殺すな。しかして、彼女の領地を再興し、おのれの息子と共に彼女に与えよ』と。そこでヴォロジメルは町をととのえ、しかして、二人に与えた。しかして、その町の名をイジヤスラヴリと言つた。しかして、このことから、ロゴヴォロドの孫たちはヤロスラフの孫たちに対して劔を取つてゐるのである』

この様に十二世紀初頭に物識の人々に語られていた昔話は、それよりも二十数年前にヤンが年代記者に物語つたと思われるものとは、その物語性の成長度において、既に大きく変つていた。年代記者が、このヴォロジメルのりやく奪的な結婚をドープルナの助力によつて成し得た直接の記事は、おそらく、ヤンの口に依つたか、そうでなければ、もつと古い時代の物語であつた筈である。この古い物語の方を直接に記事として書き込んだのは、各年代記における『過ぎし年月の物語』の980(6488)年の項であつた。其処には、全く骨組みだけの形で、次のように読まれるにすぎない。(ラヴレンター、イパーチー、トロイツキー各年代記)

В лето 6488.

Приде Володимер с Баяги Новугороду, и рече посадником Ярополчим: "идете к брату моему и рцете ему: Володимер ти иде на тя, пристраивайся противу биться". И седе в Новегороде, и посла ко Рогьволоду Полотьску, глаголя: "хочю пояти дъчерь собе жене". Он же рече дъчери своей: "хочеши ли за Володимера?" она же рече: "не хочю розути робиича, но Ярополка хочю". Бе бо Рогьволод пришел из заморья, имяше власть свою в Полотьске, а Тур Турове, от него же и

Туровци прозвашася. И придоша отроци Володимерови, и поведаша ему всю речь Рогънедину, дъчери Рогъволожь, князя Полотъскаго; Володимер же собра вои многи, Варяги и Словени, Чюдъ и Кривичи, и поиде на Рогъволода. В се же время хотяху Рогънедь вести за Ярополка; и приде Володимер на Полотеск, и уби Рогъволода и сына его два, и дъчерь его поя жене, и поиде на Ярополка.

『6488(980)年。』

ヴオロジメルはヴアリヤギと共にノヴゴロドに来たつこ。しかして、ヤロ波尔クの代官に言つた。『我が兄弟のところに行き、彼に言え。ヴオロジメルが汝に向つて進攻した。抗して戦うために準備せよ』と。しかして(彼は)ノヴゴロドに坐した。しかして、ポロチエスクのログヴオロドに使者をおくり、言つた。『汝の娘をおのれの妻にとろうと欲する』と。彼(ログヴオロド)はそこでおのれの娘に言つた。『ヴオロジメルに(嫁ぐことを)欲するや』と。ところで彼女は言つた。『奴隷の子の履物を脱がしたくはない。ヤロ波尔クを欲する』と。というのは、ログヴオロドは海の彼方から到来していて、ポロチスクにおいておのれの権力を持つていたからである。しかして、トゥールはトゥーロフにおいて、ところで彼からトゥーロフ人たちがその名をえた。しかして、ヴオロジメルの下級従士たちが来たり、彼(ヴオロジメル)に、ポロチエスクの公ログヴオロドの娘であるログネダの総ての言葉を伝えた。そこでヴオロジメルは多くの軍勢ヴアリヤギ及びスロヴエネ、チュージ及びクリヴィチを集め、しかしてログヴオロドを進攻した』。

この記事に就ては、他の諸々のロシアの年代記の文章を既に『古代ロシア研究』才六号において総て紹介しておいた。

この古い記事から、既に十二世紀の初頭には、先にあげたような詳しく面白い物語が巷に成長して拡がっていたことが推察される。然も、その新しい巷間の物語には、ドールイニヤ、(ドールイナ)《Добрыня》《Добрына》の助力と協力の物語が強く表面に押し出されてしまっている。

何故であるか。

我々は再びロシアのバイリーナに立ちもどつて、それが好んで登場させる同名の英雄ドールニヤ《Добрыня》の姿に、注目してみなければならぬ。バイリーナのにない手であつた巷間の庶民や農民のイメージが、同名の英雄を通じて如何に色濃く年代記の物語にも持ち込まれているか或はその反対に年代記の物語がバイリーナにどれほど流れ込んでいるかが分かると思うからである。

ドールニヤに関するバイリーナは実に多数にのほつて既に集録されている。然し、ここでは、それらをまとめて取りあげて見よう。それだけで話は充分だと思ふからである。バイリーナのドールニヤはその公ヴラジミルに戦いの功績と獲物を総てささげている。公はそれに酒宴を催してむくいるのであつた。年代記ではコザリ《Козарь》、即ち、ハザール人《хазар》に嘗つて貢税をささげていたのに、ヴオロジメルの頃から、今度は逆に、ハザール人に貢税を納めさせるようになっていた。ドールニヤというバイリーナの主人公の戦い——多くは蛇を中心とする怪物たちを相手にした——が、成功を納めてヴラジミル公に幸いを数多くもたらすという話の筋は、全く年代記と相通じているではないか。筆者の集録したバイリーナの数の中には見出されなかつたが、1950年版リハチヨフ《Лихачев》の『過ぎし年月の物語』序文では、ドールニヤをバイリーナではヴラジミルのオイ《племянник》としたものと伝えている。もし、そうだとすれば、年代記では、ドールニヤは、ヴオロジメルの伯父

とされているから、その血縁関係にまで類似点が見出されると言えるであろう。

年代記における『過ぎし年月の物語』は、このように、古いブイリーナと呼応した物語を、数多く記事として組み入れていた。

然し、『過ぎし年月の物語』の種々の記事の源には、ブイリーナ以外の多くの古い口碑や伝承詩があつたこともまた事実である。(ビザンチンから持ちこまれた文献が大きな一つの源であつたことを除いて。)ブイリーナ以外の古いロシアの文字以前の伝承物語のうち、では次に、源をつとめたものは、何であつただろうか。

— E —

歴史を物語つた口頭伝承作品の中で、ブイリーナ以外に、もう一つ、親兵団の中に伝えられて愛好された伝承詩が、『過ぎし年月の物語』の中には反映されていると考えられる。

ロシアの公〈князь〉たちを取りまいていた親兵団或は高級従士団〈дружина〉は、本来、その任務が軍事行動であつただけに、過ぎし日々の先祖や英雄たちの軍事的な功績のほまれを、おそらく、どの社会層にもまして尊重し、念頭に詳しく保有しつづけていたにちがいない。親兵団たちの保有しつづけていたその伝承物語は、同時にまた、彼等の行動や道德の規範をなしていたことであろう。その規範によつて、彼等は公を中心とした支配階級を形成していたと思われる。『過ぎし年月の物語』にはその間の事情が美しく反映した個所がある。即ち、各年代記における955(6463)年の項の後半である。ラヴレンチーその他の年代記には次の様に読まれる。(古代ロシア研究；オ五号；p. 32~p. 35参照)。

В лето 6463.

..... Живяше же Ольга с сыном своим Свя-

тославом, и учашеть и мати креститися, и не брешаше того ни во уши приимати; но аще кто хотяше креститися, не браняху, но ругахуся тому.....

..... Ольга часто глаголаше: "аз, сыну мой, Бога познах и радуюся; аще ты познаеши, и радоватися почнешь". Он же не внимаше того, глаголя: "како аз хочю ин закон прияти? а дружина сему смеяться начнуть". Она же рече ему: "аще ты креститися, вси имуть тоже створити". Он же не послуша матере, творяше норovy поганьския,

『6463(955)年』

.....ところで、オリガはおのれの息子のスヴィヤトスラフと共に暮しており、しかして彼に母は洗礼をうけることを教えた。しかして(彼は)そのことを気にもかけず、耳に入れようとしなかつた。しかして、もしもだれかが洗礼を受けようと欲するものがあれば(人々は)妨害しなかつたが、その人を嘲笑したものであつた。.....オリガはしばしばかく言つていたものである。『我が児よ。我は神を知つて悦んでいる。もしも汝が(神を)知れば、(汝は)悦ぶことになる』と。ところで、彼はそれを聞かずに言つた。『どうして我のみが異國のおきてをうけ入れられようか。そりすれば、親兵團はこのことを嘲るであろう』と。ところで、彼女は彼に言つた。『もしも、汝が洗礼を受けるならば、すべてのものが同じようになすであろう』と。彼は母のいうことを聞かず、異教のならわしを行つていた』

ノヴゴロドオ一年代記その他にも、大体同じ様な文章がみとめられる。

スヴィヤトスラフはおのれを取りまく親兵團の保有する古い伝統を破ることができなかつた。むしろ、親兵團の保有する武勇一

本の半ば原始的で素朴な武者風習の前で文弱に流れることを避けたかつたのであろう。反対から言えば、その母オリガが女帝であつたからこそ、彼女だけが、まだこの古い時代にキリスト教を攝取することを許されたのかも知れない。だから、この場合の親兵団には、おそらく、非常に古い武勇伝の多くが、(いまだ文字のほとんどない時代であつたために)口碑として伝えられていたにちがいない。

その様な、文字及びキリスト教の攝取以前の古いルシ〈Русь〉の英雄伝承の内容を『過ぎし年月の物語』はその内容に数多く反映しているはずである。前述したツアリゴード(コンスタンチノーブル)遠征の物語——アスコリド〈Аскольд〉、ジュール〈Дир〉、オレグ〈Олег〉、イゴリ〈Игорь〉、スヴイャトスラフ〈Святослав〉などの——は、フィリーナよりも、或は親兵団英雄物語に近いものであつたかも知れない。フィリーナの方が、むしろ、その親兵団英雄物語から庶民の側へ持ち出されて創られたものと言つてもよいであらう。先には引用しなかつたものの中から、この種のものであると思われる年代記の記事を取りあげておこう。ラヴレンチー年代記をはじめとする種々の年代記に、912(6420)年の項として、その中程に次の様な一節が読みとられるのである。(古代ロシア研究; 才三号; p. 52~p. 55. 参照)

И приспе осень, и помяну Олег конь свой, иже бе поставил кормити, не сведа на нь. Бе бо преже въпрошал вольхвов кудесник: "от чего ми есть умьрети?" И рече ему один кудесник: "княже! конь, его же любиши и ездиси на нем, от того ти умрети". Олег же прим в уме, си рече: "николи же всяду на конь, ни вию его боле того"; и повеле кормити и и не водити его к нему, и пребыв неколко лет не дея его, дондеже и на Греки иде. И пришедшу ему к Киеву, и пребысть 4 лета,

на 5 лето помяну конь свой, от него же бяху рекли волъстви умрети Ольгови, и призва старейшину конюхом, ркя: "где есть конь мой, его же бех поставил кормити и блюсти его?" Он же рече: "умерл есть". Олег же посмеяся и укори кудесника, ркя: "то ть неправо молвять волъсви, но все то льжа есть; конь умерл, а я жив". И повеле оседлати конь: "да ть вижю кости его". И приеха на место, идеже бяху лежаще кости его голы и лоб гол; и слез с коня, посмеяся ркя: "от сего ли льба смерть мне взяти?" и вьступи ногою на лоб; и выникнучи змея, и уклону и в ногу, и с того разболевся умьре. И плакашася по нем вси людие плачем великом, и несоша и, и погребоша и на горе, иже глаголеться Щековица; есть же могила его до сего дни, словеть могила Ольгова.

『しかして秋が来た。しかしてオレグは、それに乗らずに飼育させておいたおのれの馬を思い出した。(オレグは)占やよう術を行うものたちに聞いて見たことがあつた。『何がもとで我は死ぬことになるか?』と。しかして彼に一人のよう術師が言つた。『公よ。馬である。それを汝が愛し、それを乗り廻している。その(馬の)ために、汝は死ぬことになつている』と。オレグは心にとめて、独り言を言つた。『決して(その)馬には乗るまい。これ以上、それを見るまい』と。しかして、それを飼育し、それを彼らのもとに連れ来たらぬように命じ、しかしてグレキに行くまでそれに触れずに数年すごした。しかして彼がキエフに(帰り)来たつたとき、四年間(そのままに)過し、五年目に、それによつてオレグが死ぬことになつていると占師たちが言つたこと

のあるおのれの馬をおもい出した。しかして馬丁たちの長を呼びよせて言つた。「我が馬はどこにいるか。それを飼育し、それを世話するように（我は）命じておいたが」と。彼は言つた。「死んでしまつた」と。オレグは笑い、よう術師を非難して言つた。「それは占師たちが正しくないことを言つているのであつて、すべて、これはうそである。馬は死んでしまつたが、我は生きてゐるではないか」と。しかして馬にくらを置くように命じた。「その（馬の）骨を見ようではないか」。しかして、その（馬の）むきだしの骨と、むきだしの頭蓋骨が横たわつていた場所に乗り来つた。しかして馬から降りて、笑いながら言つた。「この頭蓋骨のために我が死を受けるといふのであるか？」と。しかして足で頭蓋骨を踏んだ。しかして蛇が出て来て彼の足をかんだ。しかして、それがもとで病みつき、死んだ。しかして、すべての人々は彼を悼んで激しく泣き、彼を運んでシチエコヴイツアと呼ばれる山に彼を葬つた。今日に至るまでも彼の墓があり、オレグの墓と称せられている」。

ところが、この記事をなした物語にも、既にバリエントがその頃存在していたことを思わせる証拠がある。この記事が、はめ込まれている912(6420)年から丁度十年後即ち922(6430)年の項まで時代をさげて、ノウゴーロドオ一年代記は、次の様に伝えているのである。ギリシア遠征より戦利品をもつて父のもとに帰るイゴリを述べた個所である。（この記事は他の年代記の何処にも見当らない）

Прииде Олег к Киеву и ко Игорю, несши злато и паволокы и вино и овоць. И прозваша и Ольга вешии; и бяху людие погани и невегласи. Иде Олег к Новугороду, и оттуда в Ладогу. Друзии же сказуютъ, яко идущю ему за море, и уклону змиа в ногу, и с того умре; есть могила его в Ладозе.

『オレグはキエフへ、イゴリのもとに（帰り）来たつた。黄金及び絹及びブドー酒及び果実をもつて。しかして（人々は）オレグを賢明なものと呼んだ。しかして人々は異教徒であり、文盲であつた。オレグはノヴゴロドに進み、しかして其処からラドガに（進んだ）。他の者たちの語るところによれば、彼が海の彼方へ進んでいた時、彼の足を蛇がかみ、しかして、そのために（彼は）死んだ。彼の墓はラドガにある』。

おそらく、これは、ラドガ《Ладoga》という土地に本来伝えられていた英雄伝説であつたかも知れない。その土地にある古い塚にまつわる話であつたにちがいない。

この様な霧の彼方にその出所が埋没してしまいそんな古い古い伝説ではなくて、もう少し、新しく、もう少し、親兵団的生活を直接、にじみ出させた物語がある筈である。プイリーナにも、公《князь》をとりまく、英雄主人公たちが、遠征から立ち戻つては公の催す酒宴で自慢話をし、功績を誇る物語が数多くあつたのだから、それに似た親兵団の生活があり、その伝承が生まれ、そして、年代記に反映しない筈はないと思われるからである。プイリーナの公が常にウラジーミル《Владимир》であつたことに暗示を置いて、年代記では同名のヴォロジメル《Володимир》に就ての記事中から、そのようなものを求めてみるがよい。ラヴレンター、イバーター、トロイツキー各年代記の996(6504)年の項の後半には、次の様に、勇士の集り公の酒宴の様子が反映されている。（その他の総ての年代記のこの項に関する記事は「古代ロシア研究」才六号及び七号に全部を集録しておいた）。

В лето 6504.

....., и створи праздник велик, варя 300 проваро меду, и съзываше боляры своя, и посадники, старейшины по всем градом, и люди многы, и раздавая убогим 300 гривен.

.....повеле всякому нищему и убог-
ому приходити на двор княжь и взимати всяку
потребу, питье и яденье, и от скотъницъ кунами.
Устрой же и се, рек: "яко немощнии и болнии не
могутъ долезти двора моего". Повеле пристроити
кола; въскладше хлебы, мяса, рыбы, овоць раз-
количный, мед в бчелках, а в других квас, во-
зйти по городу, въпрашающим: "где болнии и ниць,
не могли ходити?" тем раздаваху на потребу. Се
же пакы творяше людем своим по вся неделя, у-
стави на дворе гридьнице пир творити и при-
ходити боляром, и гридем, и съцьским, и наро-
читым мужем, при князи и без князя: бываше мно-
жество от мяс, от скота и от зверины, бяше по
изобилью от всего. Егда же подьняхуться, на-
чньяхуть роптати на князя, глаголюще: "зло есть
нашим головам! да нам ясти деревянными лъжицами,
а не серебряными". Се слышав Володимер, повеле
исковати лжице серебряны ясти дружине, рек
сице: "яко серебром и златом не имам налезти дру-
жины, а дружиною налезу серебро и злато, якоже
дед мой и отець мой доискася дружиною злата и
сребра". Бе бо Володимер любя дружину, и с ними
думая о строи земленем, и о ратех, и утсаве зем-
ленем,.....

〔 6504(996)年・

.....しかして大いなる祭典を行い、蜜酒三百ブロダ
グロを沸かした。すべての町々に及んでおのれの貴族たち、しか
して代官たち、長老たち、及び多くの人々を召集し、貧しき者た

ちに三百グリヴナづつを分け与えた。……（彼は）あらゆる乞食及び貧しきものに命じ、公の屋敷に来たらしめ、あらゆる必要なもの、飲み物及び食べ物を、しかして、金蔵から金銭でも受け取らしめた。ところで、この様に定めて、（彼は）言つた。「力なく、しかして病気のものは我が屋敷まで這い來たることはできない」と。しかして彼は荷馬車を準備するように命じた。パン、肉、魚、種々の果物、たるに入れた蜜酒、また別のたるに（入れた）クロスを積みあげて、町中を引き廻すように命じ、尋ねさせた。「歩くことのできない病人や乞食は何処にいるか？」と。それら（のものたち）に必要なに応じて分け与えた。ところで、また、このことを一週間中おのれの家臣たちに行つた。屋敷の従士集會場に酒宴を行うように定め、貴族たちにしかして衛兵たちにも、百人頭にも、身分高き家臣たちにも來たるように——公のいる時及び公の不在の時も——定めた。家畜の、及び野獸の肉が多くあつた。あらゆる材料からのものがあるばかりであつた。ところで（人々が）充分飲んだ時（彼等は）公に対して不平を言いはじめて、言つた。「我々の頭には災難があるぞ。我々は木製のサジで食うので、銀製ののではないからである」と。ヴォロジメルはこれを聞いて、親兵團の食べるべき銀のサジを鑄造するように命じた。（彼は）かく言つた。「銀と黄金を以て親兵團を（我々は）手に入れることはないであろうが、親兵團によつて（我々は）銀と黄金を手に入れよう。我が祖父及び我が父が親兵團によつて黄金と銀を獲た如く」と。というのは、ヴォロジメルは、親兵團を愛し、彼等と共に國の建て方について、及び戦いについて、及び國の法規についても、合議していたからである」。

半ば武骨で、半ばお人好しで、然しあくまでも豪氣な英雄の大盤振舞いではないか。プイリーナの英雄たちの総元締めに想定されて、あくまでも英雄たちにさへえつとけられていたヴラジーミルは、ひとたび、プイリーナの庶民的世界から、親兵團の武者た

ちの手に転ずる時、たちまちにして、これほどの豪氣な、積極的な英雄君主に変わるのであつた。そして、この物語の源をなしたものは、フイリーナではなくて、一段と格調の高い、親兵團のもつ英雄叙事詩であつたと推察されるのである。勿論、フイリーナ以外に現在、それらの高級な親兵叙事詩のようなものは、残念ながら、ほとんど残つていない。かすかに一つだけ残存し得た『イーゴリ遠征物語』は、然し、不幸なことにまだまだ後世のもので、ロシアの文明のあけぼのを歌うほど古いものではなかつた。古く『過ぎし年月の物語』がその記事の源や下敷になし得たような親兵團の英雄叙事は、むしろ、当の『過ぎし年月の物語』の中に組み込まれて埋没してしまつた形においてしか我々は探り出すことができないのである。おそらく、盛んに年代記が書かれた頃、特に十二世紀には、それらの記録と並んで、その源や下敷になつていた口碑伝承も同時に並列的に存在していたと思われる。たしかに、それを証拠立てるような文献がある。ペテルブルグで1894年に出された『古代ロシア教会教訓文学文献』〈Памятники древнерусской церковно-учительной литературы〉p. 167に引用された十二世紀の作家キリール・トウーロフスキー〈Кирилл Туровский〉の言葉である。リハチヨフもそれを引用している。

即ちキリールは当時の古代ロシア語で次の様に述べている。

.... яко же историци и ветна, рекше летописци и песнотворци, приклоняють своа слухы в бывшая между царей рати и ополчения, да украсят словеса слышашая и възвеличатъ крепко мужествовавшая по своемъ цари, и не давших в брани плещи врагом, и тех славяще похвалами венчаютъ; колми паче нам лепо естъ и хвалу к хвалу приложить и храбрым и великымъ воеводамъ божимъ.....

『歴史家として、雄辯家も、年代記者及び詩人と言われ、嘗つて帝王たちの間にあつた戦いや攻撃におのれの耳をそばだて、聞いたことどもを言葉でかざり、おのれの帝王のために立派に戦つたものたちや戦いにおいて敵に息つく暇もあたえなかつたものたちをほめ上げ、彼等をたたえて賞讃に浴せしめるのである。だからその様に我々もまた、神の勇敢で偉大な軍司令たちを賞讃に賞讃をついでたたえるべきである』。

ところで『嘗つて帝王たちの間にあつた戦いや攻撃におのれの耳をそばだて、聞いたことどもを言葉でかざつた』詩人たちの作品は、そのまゝ、口碑の世界にもちこまれて、まざまざと人の心に生きつづけ、事あるごとに人々の行動や判断のさゝえになつたことであろう。そして重大事には常にそれが反ずりされて来たものと思われる。その様な昔話の一節を引用するなり、或はその物語の、ほんの概略を持ち出して見るだけで、もう、人々は、その小さな引用者が其処で言おうとすることを充分に察知できるような、精神の共通場に引き入れられた。その彼等の精神の共通の広場は、数多かつた（と思われる）昔話であつたにちがいない。

この、昔話の一片を通じて、精神の共通の広場へ相手を引入れ、同族意識を高め伝来の規範を示し、そのことによつて多くの効果をあげた例が、事件としても、表現手段としても、『過ぎし年月の物語』には、随所にそれが発見されるのである。いかに昔話が人の心に巨大な機能をもつて生きつゞけていたかを証明し得るものの一つであろう。例えば、その一例を此処で述べてみることにすれば、1097(6605)年の頃の冒頭から三分の一ほどさがつた所に、次の様な記事がみられる。(ラヴレンチー、トロイツキー、イバーチー、等各年代記)

Наутриа же хотящим чрез Днепр поити на Свято-
полка, Святополк же хоте побегнути из Киева;
не даша ему Кыяне, но послаша Всеволожю и митрополита

Николау к Володимеру, глаголюще: "молимся, княже, тебе и братама твоима, не можете погубити Русьские земли; аще бо възмете рать межю собою, погани имуть радоватися и възмутъ землю нашу, иже беша стяжали отци ваши и деди ваши, трудом великим и храбрством побарающе по Русьской земли, ины земли приискываху; а вы хотите погубити землю Русьску". Всеволожая же и митрополит придоста к Володимеру, и молистася ему, и поведаста молбу Княвѣ, яко творити мир, и блюсти земле Русьские, и брань имети с погаными. Се слышав Володимер, расплакавъся и рече: "по истине отци наши и деди наши сблюди землю Русьскую, а мы хотим погубити", и преклонися на молбу княгинину,.....

『翌朝、(人々が)ドニエブル(河)を渡つてスヴイヤトボルクを(攻めようと)欲した時、スヴイヤトボルクの方はキエフから逃げようと欲した。(人々は)彼に(そう)させずにフセヴォロド夫人及び府主教ニコラをヴオロジメルのもとにつかわして、言つた。『公よ、(我々は)汝及び汝の(二人の)兄弟に懇願するものである。(汝らは)ルシの国を亡ぼしてはいけない。というのは、もしも、汝らが互いの間に戦いを起すならば、異教徒たちは喜ぶであろうし、我々の国を取るであろう。その国たるや、汝等の父たち及び汝等の祖父たちが、大いなる労苦及び勇気を以て、ルシの国のために働きつゞけて獲得したのではないか。しかるに汝等はルシの国を亡ぼそうとしている』と。フセヴォロド夫人及び府主教(の二人)はヴオロジメルのどころに来たり、しかし彼に懇願し、キエフ人たちの願いを物語つた。和平を講じ、ルシの国を守り、しかして異教徒たちと戦うよりにと。ヴオロジメ

ルはこれを聞いて、泣き出して言つた。『本当に、我々の父たち及び我々の祖父たちはルシの国を守つたのに、我々は亡ぼそうとしている』と。しかして（フセヴオロド）公夫人の願いに（耳を）かたむけた……』

此処には、キエフ人たちの間、公夫人や府主教、そしてヴオロジメル公の間にも、共に感動を呼ぶにふさわしい祖国と父祖たちの栄光の物語が秘められていたことであろう。しかも、それが一朝事ある時の規範をもなしていたことが此処に明瞭に読み取られるのではないか。おそらく、こゝに秘められた昔物語は、ブイリーナのような庶民的なものよりも、もつと質の高い、格調の高いものであつたにちがいない。そして、その物語が、民族統一の理念と重ねられていたことも推測されるところである。

生き生きと伝えられていたような、こんな昔語りの、特に規範性の強いものと、英雄性の強いものが、初期の年代記、特に『過ぎし年月の物語』には、まぶしい程に照り映えていると思わなければならないであろう。言い替へれば、ロシアの歴史の夜明けは、その様な、伝承の中の規範性と英雄性の強い詩の反映によつて書きはじめられた。そして、その様な規範性や英雄性への讚美が、その夜明けの時代の公たちの描写の中に鮮やかに読み取られるのである。即ち、その意味では、オレグ〈Олег〉、イゴリ〈Игорь〉、オリガ〈Ольга〉、スヴィヤトスラフ〈Святослав〉、ヴオロジメル〈Володимер〉などという初期の公たちの姿は、年代記が書きはじめられた十一世紀から十二世紀の頃の各社会層を通じての理想像であり規範像であつたとも言えるであろう。

反対に、その他の当世風な公たちは、それらの規範的理想像に常に照らされて、年代記の中へ批判的に織り込まれて行つたのであろう。年代記者たちの側から言えば、そのことが同時に、教会の宗教活動にもおとらない教訓垂範活動でもあつた。年代記記述や写本造りが聖なる仕事とされた理由の一斑は此処にもあつた

と思わなければなるまい。

『過ぎし年月の物語』は、ネストルの書いたものとしては1110(6618)年の項で終つてゐるが、この『物語』をとじる年の少し前、即ち、1097(6605)年頃の項~~6605~~は、今のべて来た英雄性と規範性を眼目にしたためにその記述が最高調に達して熱を帯びたのであろう。何故なら記述の対象になつた人物たちは、いまだ生存し、社会に機能していたからである。

むしろ、その英雄性と規範性を表面に押し立て、その上に、新しいキリスト教の正義を重ねて、以て、半ばは警世と、半ばは文字使用階級への教訓との書にしようとしたのが『過ぎし年月の物語』であつたと思われる。ラヴレンチー、イバーチー、トロイツキー等の各年代記には見られないが、ノヴゴロドオ一年代記の冒頭の序文には、鮮かにそのことが書きとめられている。即ち、上記三つの年代記には何も書きとめられていない年号6362年、即ち西暦854年の項からノヴゴロドオ一年代記は書きはじめられるが、その直前に次の様に読まれる。

Мы же паки на последование возвратимся, глаголюще сие о начале Русьсия земля и о князех, како откуду быша. Вас молю, стадо христово, с любовью приклоните уши ваши разумно: како быша древнии князи и мужие их, и како отбараху Руския земле, и ины страны придаху под ся; теи бо князи не збираху многа имения, ни творимых вир, ни продаж въскладаху люди; но оже будяше правая вира, а ту возмя, дваше дружине на оружье. А дружина его кормяхуся, воююще ины страны и бяшеша и ркуще: "братие, потягнем по своем князе и по Руской земле";

「ところで再び我々は義の話に戻ろう。ルソの国のはじめに就

て、しかして公たちがどこから来たかということについて物語る。汝等、キリストに牧される群よ。(我は)懇願する。汝等の耳を愛を以て賢く傾けよ。古の公たち及びその家臣たちが如何にあつたか。如何にルシの国が敵に対していたか、しかして、他の国々をいかにおのれの下に統一していつたかについて。というのは、それらの公たちは、多くの財物を集めはしなかつたし、罰金もかけなかつたし、人々に税をもかけなかつたのである。然し、正当なる罰金を求めるべきは取り、親兵団に武器代として与えた。しかしてその親兵団は育てられ、他の国々を戦いとり、辛勞し、こう言つていたのであつた。『兄弟たちよ、おのれの公とルシの国のために貢献しよう』と』。

この様に古い、文字のない時代のロシアの物語は、勿論、先進文明国の記録などから借りて来る訳に欠ゆかなかつた。言い伝えの中から意図した垂訓の目的に少しでもなかつたものを汲み上げて来るより方法がない。種々の口碑から汲み上げて、その意図にかなつた物語を構成しながら、年代記者は、その物語の周間に、先進国(ビザンチン)の記録や物語、或は聖書の物語、そしてまた、た、より多くは、汲みもれたり、意図とは正反対であつたりした伝承作品を組み込んで行つたように思われる。

— 103 —

年代記者は遠い昔の出来事を言い伝えだけによつて年代記に書き込んだのではない。その最も古い部分は、既に『古代ロシア研究』才一号以下で出典が明らかにされたように、ビザンチンの記録を充分手がかりにしていた。然し、『過ぎし年月の物語』においては、その様な古い出来事だけに問題をしぼりつづけることを許さないものがある。というのは、当時、生きていた人々の心に、まさまさと残りつづけていた新しい出来事の記憶をも手がかりに、

まだ冷めやらぬ種々の出来事を、その価値判断に熱つぽい情熱を傾けて書きこんだのであつたからである。過去を書いたのではなくて、当時の現代を過去に映し過去を現代に映して書いたのだと言えるかも知れない。まだ記憶に生々しい昨日の出来事のようなものが書きとられた時はなおさらのことであつた。年代記者はその記事を、過去の出来事としてよりも、その当時の同時代人たち及び未来の子孫たちへの鏡として考えた。書きあげられた公や戦士の記事を同時代人たち及び未来の子孫たちが高く評価しつゝおのれを律するものであることを期待した。もつと正確に言うならば、公や戦士という支配者たちに、かくあつてほしいという願いがこめられていた。同時代人たちや未来の子孫たちが、公や戦士の行動をおのれの手本として評価し得るような、そういう行動を公たちに年代記者は期待したのである。おおいなる『名誉』〈честь〉と『栄光』〈слава〉にふさわしく、且つその栄光を一層おおいならしめる行動を暗黙のうちに年代記者は求めていた。その理念にかなうものこそが、年代記に書きしるさるべきものに他ならなかつた。名誉と栄光を獲るためのたたかいは、多くは公と戦士の司るところであり、或は時に名もなき兵卒の参与するところであつた。その様な戦いに関与した時にのみ、宗教界の僧たちの名も大きく書きとめられ得た。むしろ、年代記者を含む僧たちには、その名誉と栄光の戦いの勝利を祈念し、後世に伝え、且つ、民衆と共にその戦士たちに讚美の花吹雪を撒くべき立場にあつた。

名もなき一介の戦士が名誉の鏡として、年代記に書きとめられ、この祝福の花吹雪を受けることは、それほど多くはなかつたけれども、却つて、その様な折には、年代記者の筆は、その熱つぽさを増すのであつた。教少いその様な例は、だから、民族全体に華々しく伝えられた説話からの汲み取りなどではなくて、むしろ、まだまだ冷めやらぬ記憶されたつい昨日の出来事であつたにち

がない。人の口の端にはのぼつていても、英雄詩や説話の世界には入らないであろうし、いつかは消え去つて行くべき榮ある業跡であつただろう。年代記者はその業跡の本質を見落しはしなかつた。一介の戦士の記録は、その様にして年代記に書きとめられた。その数少ない例から一つだけ次の様な記事を此処にとりあげておこり、イパーチ年代記の既に時代は相当さがつてからの項であるが、6769年の記事の一節に、一人の名もなきリヤヒ人の活躍を書きとめた記事がある。

Некто же от Ляхов, не боярин, ни доброго роду, но прост сый человек, ни в доспесе, за одним мятлем со сулицею, защитився отчаяньем акы твёрдым щитом, створи дело памяти достойно, потече противу Татарину: како стекася с ним, тако уби Татарина, ольны другой Татарин со заду притече и потя Ляха, ту и убьен бысть Лях.

『リヤヒ人の或る一人が、貴族でもなく良き一門の出身者でもなく、普通の人間でありながら、具足もつけず、マントを着ただけで槍をもつて、決死の勇気を固い盾としてよらい、記念するにふさわしい行いをなした。タタールに向つて、突進したのである。行き合いざまにタタールを殺した。ところが別のタタールが背後から迫りこのリヤフ人を打つた。しかして、其処で、このリヤフ人は殺されたのである』

また、この記事から二十一年後、即ち6890年の項にも、今度は一人の貴族の息子の場合をとりあげて書きとめているのである。

それらは、共に、『記念するにふさわしい行いをなした』
《створи дело памяти достойно》 《створиста дело достйно памяти》からであると書かれている。即ち、年代記に書きとめて、その功をたたえ、以て現代及び未来の人の規範にすべきものと考えられたからなのである。それこそ、年代

記述の理念の最大の要素なのであつた。年代記が戦いの栄光を賞讃しつづけ、教会の僧の手によつて書かれながら、巨大な戦記文学の集大成であつた理由は此処にあつた。以て範とすべき戦いの榮譽が、この様に最高の位置にかかげられた以上、年代記者たちがそれについて関連性のある、がいせんの歌をつどり、祝賀の宴をのべたのは当然であつた。そして、それらの、がいせんのほめ歌や、祝賀の宴や即位の物語が、民族叙事詩からの汲み取りであつたのも当然であつたと思われる。英雄の栄光はその英雄個人のもではなかつた。ルンの国全体のものであり、ルンの国全体のために建てられた功績なのであつた。そして、それはまた人類全体に鳴りひびくべきものであるとさえ感じられていたことであろう。その戦いの榮譽が全世界にも鳴りひびくべき筈のものであるとした理念は、例えば、イパーチ一年代記の6619年の項の終りに、次の様に鮮やかな反映を見せている。

Якоже и се, с божьею помощью, молитвами святых Богородица и святых ангел, възвратитася Русь-стии князи въсвоеси, с славою великою, к своим людям; и ко всим странам далним, рекуще к Греком, и Угром, и Ляхом, и Чехом, дондеже и до Рима пройде, на славу Богу, всегда и ныня и присно во веки, аминь.

『しかして、また、神の助けと、聖母及び聖なる天使たちの祈りにより、ロシアの公たちは偉大なる栄光を以ておのれの国民たちのもとへ、家郷へ戻つた。しかして、総ての遠い国々、グレキにも、ウグリにも、リヤビにも、チエヒにも、ローマに至るまでも、神の栄光とともに語りつがれた。常に、今もまた永遠にわたつて。アーメン』

これは、ドン地方へのウラジミル・モノマハ〈Владимир Мономах〉の遠征からの帰還の記述である。勝利のがいせん記

事である。

年代記が口をそろえて、このヴラジミルに全世界的栄光をみつめていたのは面白い。

例えば、ラヴレンチー年代記を見ると、ヴラジミルの死を記述した個所の終りに、次の様な文章がみとめられる。6633年の項の冒頭である。

В лето 6633,
Индикта третьего лета.
Преставися благоверный и великий князь Русский
Володимер, сын благоверна отца Всеволода, укра-
шенный добрыми нравы, прослуживый в победах, его
имене трепетаху вся страны, и по всем землям
изиде слух его: понеже убо он всею душою въз-
люби Бога.

『6633年(1125年)

オ三年のインジクト。

信仰厚いルシの大公ヴオロジメル、信仰厚い父フセヴオロドの息子が逝去した。良き心を以てかざられ、勝利の名は高かつた。彼の名は萬国をふるえさせ、彼の噂はあらゆる國々に伝えられた。彼はその全霊を以て神を愛したからである』

萬国にその名をとどろかせるという讚美の言葉は、百年以上も経過して後もなお、同じように用いられた。例えばアレクサンドル・ネフスキー一代記《Житие Александра Невского》にも、彼の『聖なる名はラテンの國々の総てにおいて、フブジの海やアララトの山やヴァリヤギの海の両側にまで、かの偉大なるローマにさえも至るまできこえたのである』《прослыся имя святого во всех странах латынских и до моря Хупужьского и гор Араратских и обону страну моря Варяжского, даже и до самого того Вели-

каго Рима》と書かれている。このことは、この讚美手法の出
処を考えさせるに充分である。年代記者の発明を一代記《Житие》
の作者が真似たのであろうか。それとも、両方が共に真似るべき
何等かの古いよりどころがあつたのだらうか。或は、自然に生ま
れた最大級讚美の型なのであろうか。

この讚美形式の発想法は、決して年代記者や一代記の作者の発
想によるものではないことを、年代記そのものが証明している。
年代記の中で、直接話法の形で書きとられている対話や、諸人物
の言葉を注意して拾いあげて見るとよい。おそらくは、其処には
生きた古代ロシア語の喋り言葉がかくされているであろうし、そ
れ以上に、公や親兵団や貴族たちの、むきだしの理念や発想法が
求められ得る筈である。全世界に名をとどろかすという最大級の
讚美や、或はその讚美に価する行動を取らうとする決意の発想法
が、それら直接話法による記録の中には充分よみとられるのであ
る。

例えば、イジャスラフ《Изяслав》が自分の親兵団に語りか
ける6660年の項の一節（イパーチー年代記）にもそれがうかが
われる。

Изяслав же рече дружине своей: "братья и дружино!
Бог всегда Руския земле и Руских сынов в без-
чести не положил есть, на всех местех честь
свою взимали суть; ныне же, братье, ревнумы
тому вси, у сих землям и перед чужими языки
дай ны Бог честь свою взяти"; и то рек Изяслав
дружине своей, потъче всеми полкы у брод.

「ところでイジャスラフはおのれの親兵団に言つた。「兄弟た
ちよ、しかして親兵団よ！神は常にルシの国とルシの子等をば不
名誉の中に置き給うことはなかつた。あらゆる場所において、
（人々は）おのれの名誉をえて来た。ところで、このたびは、兄

弟たちよ、こそりて、これに見習わん。これらの国々にありても、また他国の民族の前にも、神よ、我らに名誉をえさせ給え」と。イジャスラフは、おのれの親兵団にかく言つて、すべての軍勢にて淺瀬を突進した」。

過ぎし時代の栄光に見習い、自分たちが、これより行わんとする行動が、他国までも鳴りひびき、ほめたゝえられんことを期して、公が親兵団に語りかけ、武勇を鼓舞した生々しい言葉である。他国にまで喧伝されるとまではゆかないにしても、ロシアの全土にその栄光をたたえられんことを期した喋り言葉は、年代記の各所に散見される。とすれば、ロシアの国を超えて、他国にまでその栄光がたゝえられんとするという最大級の讃辞は、もともと、年代記者や一代記作家の発想になるものではなかつた。もつと直接的な、戦陣における公や親兵団や勇士たちの合言葉にも似た、やりとりの言葉であつた。年代記者は、むしろ、それらの言葉を直接話法によつて書き取りながら、時にはそれと同じ発想法の讃辞を栄えある公たちへのほめ言葉にも利用したのであつた。

公や親兵団が戦陣におけるおのれの武勇鼓舞のための合言葉にもなし得た発想だとしたら、その背後には、他国における祖国の栄光——嘗つての古い時代の外国遠征の勝利——の記憶が彼等の間には生々しく記憶されていたにちがいない。『過ぎし年月の物語』の古い部分が伝えている幾多の遠征物語は、十二世紀には、まだ、鮮かに武人たちの間に、守られるべき過去の栄光の物語として躍動し、作用しつゝけていた証拠である。そして、それらの遠征物語が、その遠征先を文化の高い強い國にすればするほど、その勇壮さと、その勝利の栄光は大きく作用した。その意味で、『過ぎし年月の物語』には、ツアリグラード（ビザンチン）遠征物語だけがことのほか、幾度も大きくとりあげられたのであつただらう。

その様に考えて来ると、ロシアの中だけの世界から出て全世界

を見渡し、ロシア民族を広く世界の諸国の中に位置づけ、然も、その際に英雄的な軍事功績を関心の中心においたのが『過ぎし年月の物語』であつたということになる。これこそ、そのまゝでロシアの英雄叙事ではなかつたのか。プイリーナを始めとする多くの軍事的説話のふん囲氣と『過ぎし年月の物語』のそれとが分ち難く類似しているのは、まさに当然のことであつたと言わなければならない。歴史書であるよりも、むしろより多くは文学作品であつた。

勿論年代記者が伝承叙事詩の領域の中にとどまつていたというわけではない。年代記者はその領域から一步を進めて、それぞれの人物たちの内面に立ち入り、その賢明さを掘り起し、精神の豊かさを描き出すことにやぶさかではなかつた。特に戦争ではなくて文化史的な大きな仕事をした公たちの記述にも情熱をそゝいだ。文字や宗教を中心とする文明の開き手には、戦功におとらない讃辭を呈したのであつた。それらは民間伝承物にも少なく、また親兵團的説話にも少い題材なのであつたにもかゝらずある。その中の広さが年代記者にもたらした最大の文学態度が批判的記述といふものであつた。その態度は本來說話や叙事詩にはないものであつた。

むしろ、言うべくば、年代記者は、自己の考えるロシアの文明史にとつて、肯定的な良い面だけを口碑から汲みとつたのである。その基盤の上に彼（等）は一貫した自己の民族の歴史を組み立てようとしたのであつた。

— 3 —

『過ぎし年月の物語』が歴史記録よりも、むしろ文学作品の側へ傾けば傾くほど、それが書かれている古代ロシア語の問題は一層大きく取りあげられなければならないであらう。これほどまで

に壮大で、集約的で且つ表現性の豊かな作品がものにされた以上、これが一応完成されたと見られる十一世紀及び十三世紀の時代の古代ロシア語の表現力をふり返つて見る必要が大いにあると思われる。その頃の文明全体に就ても無視できないであろう。

特に『過ぎし年月の物語』の多くの記述が、民間口碑からの取材であり汲み取りであつたとすれば、話は当時の口碑文学の言葉の成長度から、先づ始められなければならないであろう。

九世紀及び十世紀には東スラヴには既に階級社会が生まれ、太古より存在した口碑文学も非常に発達したもののようである。またそれが最大の精神文化のさゝえでもあつた。キリスト教が文字と共に輸入され、ビザンチン文化を受け入れる十一世紀には、既にその口碑文学を織り成す古代ロシア語は、それを受け入れるにふさわしい表現力をもつていた。文字を創つた当初から、その文字を以て書かれた古代ロシア語は既に充分抽象的な概念の表現に耐えるほどのものに成長していた。キリスト教思想の伝導にも充分その言葉のみで足り、祈禱文にも、勸行言葉にも、讃歌にも、あるいはまた、歴史事件の記録にも、バイブルを始めとする様々の宗教書の翻訳にも、充分棄欠かないほどの表現力を既に古代ロシア語は持ち得ていた。その様に用いられた古代ロシア語の精華を生んだものこそ、当時の発達した口碑文学の言葉そのものであつた。十一世紀当時の口碑文学の言葉が、ほとんどそのまま文字をえて書き言葉へ移行したものと考えてよいであろう。キーエフ・ベチエールスキー聖僧伝が文字を以て書きとめられ、聖僧伝集にまとめられるまでには幾十年も語りつがれていたし、ボリス< Борис > とグレブ< Глеб > の殺される物語——年代記では6523年のウラジミルの死の直後に書きとられている——も、此処に書き取られる以前には永く伝承され⁷来た口頭の物語がその骨組みをなしていた筈である。今まで数多く引用して来た記事からそれぞれ直接明瞭な伝承のまゝの生の言葉を抜き出して見るだ

めにも、その前にこのボリスとグレブの殺害される物語を、まず引用しておく必要がある。ラヴレンチー、イパーチー、トロイツキー、フレブニツキーの年代記の『過ぎし年月の物語』には、6523年の項として、ボリスとグレブとズヴィヤトスラフの殺害が続いて記述されている。その記述の全体については、各年代記の異文の総てをも含めて『古代ロシア研究』才七号において検討を終つていたので、その記事から、キリスト教輸入後につけ加えられたと思われる説明や粉飾や正当づけらしきものを取り除いて見て、その残りの骨組みだけを此処に取り出してみよう。

Святополк же седе Кыеве по отци своем, и съзва Кыяне, и нача даяти им именье; они же приимаху, и не бе сердце их с ним, яко братья их беша с Борисом. Борису же възвратившюся с вои, не обрешю Печенег, вестъ приде к нему; отецъ ти умерел". И плакася по отци велми, любим бо бе отцем своим паче всех; и ста на Люте пришед. Реша же ему дружина отня: "се дружина у тебе отня и вои; поиди, сяди Кыеве на столе отци"; он же рече: "не буди мне възняти руки на брата своего старейшаго; аще и отецъ ми умре, то съ ми буди в отца место". И се слышавше вои, разидошася от него, Борис же стояше с отроки своими. Святополк же..... посылая к Борису, глаголаше:

"яко с тобою хочю любовь имети, и к отню придам ти". А льстя под ним, како бы и погубити.

Святополк же приде почью Вышегороду, отай призва Путшю и Вышегородьские боярьце, и рече им:

"прияете ли ми всем сердцем?" Рече же Путша с Вышегородьци: "можем главы своя сложити за тя".

Он же рече им: "не поведуче никому же, шедше

убийте брата моего Бориса". Они же вскоре обещались ему се створити..... Послании же придоша на Лято ночью, и подьступиша ближе, И се нападоша акы зверье дивии около шатра, и насунуша и копьи, и прободоша Бориса, и слугу его, падша на нем, и прободоша с ним; бе бо любим Борисом. Бяше отрок съ родом сын Угърск, именем Георги, его же любяше повелику Борис, бе бо възложил на нь гривну злату велику, в ней же предьстояше пред ним; избиха же и ины отроки Борисовы многы. Георгеви же сему не могуще вборзе сняти гривны с шие, усекнуша главу его, и тако сняша; темже послеже не обретоша тела сего в трупии. Бориса же убивше оканьнии, увертевше в шатер, възложивше на кола, повезоша и, и еще дышюцю ему. Уведевше же се оканьный Святополк, яко еще дышетъ, посла два Варяга прикончат его; онема же пришедшема и видившема, яко еще жив есть, един ею извлек мечъ, пронъзе и к сердце. И тако скончася блаженный Борис,.....

『スウイヤトポルクはおのれの父の死後、キエフに坐した。しかして、キエフの人々を召集した。しかして彼等に財産を与えはじめた。彼等は受け取つていたが、その心は彼のもとにはなかつた。何となれば彼等の兄弟たちがボリスと共にいたからである。ボリスの方はペチエネギに出合うこともなく軍勢と共に戻つて来た時、知らせが彼のもとについた。『汝の父が死んだ』と。しかして(彼は)父を思つて大いに泣いた。というのは誰にもましておのれの父に愛されていたからである。しかして来たりて、リト

(河)のほとりにとどまつた。ところで父の親兵団が彼に言つた。「見よ、汝には父の親兵団と軍勢がある。進め。キエフの父の王座に坐せ」と。ところが彼は言つた。「我はおのれの年長の兄に手をあげるべきではない。もしも、我が父が死んだのなら、この者(兄)が我がために父の位置につくべきなのだ」と。しかして、軍勢はこれを聞いて彼から離れ散つた。そこでボリスはおのれの下級従士たちと共にとどまつた。ところで、スヴィヤトポルクは………ボリスのもとへ使者をたてて言つた。「汝と愛情をもつてゆきたいものと思う。しかして汝に父の(財産)を加え与へよう」と。彼をなきものにしようとして、偽つたのである。ところでスヴィヤトポルクは夜中にウイシエゴロドに来たり、ひそかにプトシヤ及びウイシエゴロドの貴族たちを呼び招き、しかして彼等に言つた。「我を衷心から受け入れるか?」と。プトシヤはウイシエゴロドの人々と共に言つた。「汝のためにおのれの首をおとしてもよい」と。そこで彼は彼等に言つた。「誰にも言うな。行きて我が弟ボリスを殺せ」と。ところで彼等はすぐにそれを為すことを彼に誓つた………ところで、使者たちは夜中にリト(河)に至り、しかして、より近くしのびよつた………しかして、見よ、天幕の周囲の野獣の如く襲つた。しかしてそれに槍を突き込み、しかしてボリスを突きさした。しかして、彼の上に倒れた従者をも、彼と共に突きさした。(この者は)ボリスに愛されていたからである。この下級従士は、ウゴル人の子でゲオルギーという名であつた。彼をボリスは大いに愛していた。(ボリスは)彼に大きな金の首輪をかけてやつていた。それをつけて彼は彼(ボリス)の前に立つていたのであつた。(人々は)ボリスの他の多くの下級従士たちをも殺した。このゲオルギーの首から首輪をただちに取りはずすことができなかつたので、彼の首を斬りおとし、しかして取つた。その後、そのために彼の死体は(多くの)死体の中に見出されなかつた。ところで呪われたる

者たちはボリスを殺し、天幕にくるみ、荷馬車に乗せて、彼を運び出した。しかして彼は、いまだ呼吸していたのである。ところで彼がまだ呼吸しているのを呪われたるスヴィヤトボルクが見とり、二人のヴァリヤギを彼を絶命させるためにつかわした。(二人が)到着してまだ生きていたのを見た時、そのうちの一人が劔を抜いてそれを心臓に突きさした。しかして、かくして至福なるボリスは逝つた。……』

同じように、グレブの殺害の物語についても、後代に付加されたと思われるキリスト教臭い所を除いて次に引用してみよう。

Святополк же оканьный помысли в себе, рек: "се убих Бориса; како бы убити Глеба?" И прием помысл....., с лестью посла к Глебу, глаголя сице: "пойди вборзе, отець тя зоветь, не здравить бо велим". Глеб же вборзе всед на коне, с малою дружиною поиде, бе бо послушлив отцю. И пришедшу ему на Волгу, на поли потчеся конь в рве, и наломи ему ногу мало; и приде Смоленьску, и поиде от Смоленьска яко зреемо, и ста на Змядине в насаде. В се же время пришла бе весть к Ярославу от Передьславы от отни смерти, и посла Ярослав к Глебу, глаголя: "не ходи, отець ти умерл, а брат ти убьен от Святополка". Се слышав Глеб възпи велми с слезами, плачася по отци, паче же по брате, и нача молитися с лезами.....
..... се внезапно придоша послании от Святополка на погубленье Глебу, и ту абье послании яша корабль Глебов, и обнажиша оружие. Отроци Глебови уныша. Оканьный же посланный Горлсер повеле вборзе зарезати Глеб; повар же Глебов, именован Торчин, вынес ножь, зареза Глеба.....

Онем же пришедшим, и поведаша Святополку, "яко створихом поведеная тобою....."

Глебу же убьену бывшу и повержену на бреже межи двема колодама,.....

『ところで、呪われたスヴィヤトボルクは心の中で企んで言つた。『見よ。ボリスを殺した。いかにしてグレブを殺すべきか』と。しかして、悪計をとり.....;あざむいてグレブに使者をおくりかく言つた。『速かに来たれ。父が汝を呼んでいる。というの(父は)非常に健康を害しているからである』と。ところでグレブは急いで馬に乗り、少数の親兵団と共に出かけた。というの(彼は)父に従順だつたからである。しかして、彼がヴォルガ(河)に来たつた時、野において馬が濠につまづいた。しかして少し彼の足をいためた。しかしてスモレンスクに至り、しかして、スモレンスクから余り遠くない所へ進み、河舟でスミヤジナ(河)にとどまつた。この時にベドストラヴァからヤロ斯拉フのもとへ父の死についての知らせが来ていた。しかしてヤロ斯拉フはグレブのもとに使者をおくつて言つた。『行くな。汝の父は死んだ。一方、汝の兄はスヴィヤトボルクのために殺された』と。グレブはこれを聞いて涙を流して非常に大声をあげ、父を思つて泣き、またそれ以上に兄を思つて(泣いた)。しかして涙と共に祈りはじめた.....見よ。グレブを殺すためにスヴィヤトボルクによつて使わされた使者たちが急に到着した。しかして、そこで、すぐに、使者たちはグレブの舟を占領し、しかして武器を抜き放つた。グレブの下級従士たちは悲しんだ。ところで呪われた使者ゴリヤセルは速かにグレブを斬るように命じた。ところでグレブの料理人の、トルテンという名の(男が)刀を抜いてグレブを切つた.....彼等が帰り来たつた時、(彼等は)スヴィヤトボルクにつたえた。『汝によつて命ぜられたことを(我々は)なした』と.....ところで、グレブが殺され、しか

して、岸の上の二つの丸太の間に投ぜられた時……』

『過ぎし年月の物語』にみられるこの二つの骨組みの言葉を、ほとんど口頭伝承そのままの生のもの、特に対話的な部分をそのようなものと考えて検討してみるがよい。如何に、十一世紀初頭の語り物の言葉が既に充分の成長をとげていたか分るであろう。例えば、ボリスに向つて、残された父の親兵団が言う言葉、それに対してボリスが答える言葉、ボリスに向つてスヴィヤトボルクが偽つて語る言葉、ヤロスラフがグレブに忠告する言葉等々には、既に民俗学的伝承の表現力を遙かに超えたものがある。

年代記や聖者伝に文字を以て書きとめられる一方では、まだまだこの表現豊かな口頭物語の文化は口から耳へと当時併存的に生きつゞけていた。書きとめることは教会を中心とする僧やその仲間たちの仕事であつた一方には、官廷や親兵団や貴族たちの中では、書きとめ、或は読むことよりも、むしろ、まだまだ、口頭による英雄物語の高い言語芸術が愛好しつゞけられていた。この口頭の言語芸術は或るものは多く年代記に書きとめられ、また或るものは武人や貴族やまたは文化度の高い人々の愛好にささえられて伝えられ、創作され書きとめられその後も永く生きつゞけていた。年代記には書きとめられなかつたその様な口頭芸術の金字塔は、『イーゴリ遠征物語』であつたと言える。

『イーゴリ遠征物語』の様な、おそらくは、公の親兵団内で特殊な才能人によつて創られ、同じ親兵団の中に於て愛好されて伝えられた叙事詩は非常に数多く存在したであろう。それらのほとんど全部はその原型を現在に伝えられないうまゝ消滅してしまつた公を中心とする親兵団の言語芸術が伝承を強くさへる庶民層に流れ出さなかつたからなのかも知れない。その様な消滅以前の作品が『過ぎし年月の物語』には、前述したようにビザンチン（ツアリグラード）への遠征、オレグの物語、オリガ女帝の物語（『古代ロシア研究』才五号に總ての年代記のこの項の記事を集録し

た)などとして書きとられたものだと考えられる。だから、それらの多くの文章は、当時の芸術的な口頭語であつて、決して特殊な書き言葉などではなかつたと思われる。勿論、その芸術的な口頭語は庶民の日常語であつた訳ではなく、多くは宮廷の武人や親兵団員、下級従士たちの質の高い演説語に近いものを、物語の語り手や詠誦者が芸術的に加工した言葉であつたにちがいない。だから、年代記の『過ぎし年月の物語』の本当の意味での用語の基礎は、演説雄辯の言葉に根ざしたものであつた。開戦を控えて行われる公たちの演説の言葉、或は戦争処理のために派遣される使者の口上、或は町の広場で行われる民会、裁判、或は宮廷の祝賀の席での演説、或は公の即位や追放等の政治的演出での言葉などが、文字輸入以前に、既に『過ぎし年月の物語』を充分さへえ得るほどに発達していたと言えるのである。十一世紀から十二世紀の古代ロシアの社会が、その様な雄辯芸術を生み出し、むしろ必要とし、発展させたのであつた。それは多くのロシア古代社会史家の説明するところである。面白いことに、この様な雄辯芸術は十四世紀には衰退しはじめ、『イーゴリ遠征物語』が発見される以前、即ち十七世紀に入る頃には完全にロシアから嘗つての姿を消し去つてしまつていたのである。文字が用いはじめられた十一世紀頃から十二世紀末にかけてが、だから、雄辯的作品の最も盛んな書き取りの時期であり、ひいては年代記文学の古事の肉付固定の時期であつた。

ともあれ、各年代記の『過ぎし年月の物語』の中でも、特にこの頃の軍勢を前にして、戦争突入直前或は戦野において公たちがその勇を鼓した直接話法の言葉は、その簡素な形態にもかかわらず、形象的であり、内容豊かであり、力にあふれ、活達であるが、決して年代記者の勝手な創作などではない。文字以前の高いロシアの口頭文学の水準を直接に示すものなのである。

戦争突入直前或は戦野での公たちが軍勢に勇を鼓するために叫

んだ言葉を年代記から取りあげて見るがよい。その類似性が何よりも；以上述べて来たことを雄辯に物語つてゐるのである。

年代の古い順に挙げてみよう。

(イ) —6479年— и рече Святослав воем своим:

«уже нам сде пасти; потягнем мужьски, братья и дружино!»

『しかしてスヴィヤトスラフはおのれの軍勢に言つた。『すでに我々はこゝに倒れるべきである。勇敢に進もう。兄弟たちおよび親兵団よ』と。

(ロ) —6479年— и рече Святослав: «уже нам некамо

ся дети, волею и неволею стати противу: да не посраим земле Русские, но ляжем костьми, мертвыи бо срама не имам, аще ли побегнем, срам имам, ни имам убежати; но станем крепко, аз же пред вами поиду, аще моя глава ляжет, то промыслите собою»;

『しかしてスヴィヤトスラフは言つた。『すでに我らには身をかくすべき所はない。欲しやうが欲しまいが迎え撃たねばならない。ルシの國をはずかしめないようにしよう。しかし骨を横たえよう。死ねば（我々は）辱しめを受けないからである。もしも（我々が）逃げるならば辱しめを受けるであろう。（我々は）逃げずにはげしく戦おう。我は汝らにさきがけて進もう。もし我が頭が倒れたら、自分たちで考えよ』と。

(ハ) —6551年— И рече Вышата рек «аще жив буду, то с ним, аще погыну, то с дружиною»

『しかしてヴイシヤタは言つた．．．．．言つた．『もしも
（我が）生きてゐるとすれば，彼等と共であらうし，もし倒れ
るのなら，親兵団と共にであらう』と．

(=) — (a) — 6577年 — и рече (Святослав) дружине
своей: <потягнем, уже нам нелзе камо ся
дети>, (ラヴレンチー, イパーチー訃トロイツキー各年代記)

(=) — (б) — 6576年 — рече (Святослав) к дружине
своей: <потягнем, братие; уже нам не лзе
камо ся дети>; (ソフィアオ一年代記)

(=) — (в) — 6576年 — и рече (Святослав) дружине
своей: <потягнем, братиа! уже нам нелзе
камо ся дети>, (ニコノ年代記)

(=) — (г) — 6576年 — рече (Святослав) дружине своей:
<потягнем, братии; уже нам нелзе дети камо
ся>. (トヴェーリ年代記)

(=) — (д) — 6576年 — и рече (Святослав) дружине;
<потягнем, уже нам не камо ся дети>.
. (リヴオフ年代記)

(=) — (e) — 6576年 — и рече (Святослав) дружине:
<потягнем, братие, уже ся нам нелзе камо
ся дети>. (チボクラフ年代記)

以下他の諸年代記省略．

『しかしてスヴィヤトスラフは（おのれの）親兵団に（向つて）

言つた。『進もう。(兄弟)(たち)(よ)。既に我々には身をかかすべき所はない』と。

(ホ) — (a) — 6611年 — «пойдита на Половци, да любо будем живи, любо мертви»

..... (ラヴレンチー, イパーチー, トロイツキー各年代記)

『ポロヴェツに進攻しよう。或は生き、或は死ぬもよし』

(ホ) — (б) — 6611年 — «братне, велико добро сътвориши Русской земле»..... «пойдите с нами на Половци, да любо будем живи, или главы своя сложим за Русскую землю»

..... (ニコン年代記)

『兄弟たちよ、ルシの国に大いなる善を為せ。』.....『我等と共にポロヴェツに進攻せよ。或は生き、或はおのれの頭をルシの国のために横たえん。』

(ホ) — (в) — 6611年 — «пойдете на Половцы, да любо живи будем, любо мертви»..... (リウオフ年代記)

『ポロヴェツに進攻しよう。或は生き、或は死ぬもよし』

(ホ) — (г) — 6611年 — «брате, се аз готов есмь»

..... «много блага створиши Русстей земли»..... «пойдета на Половци, и покладем главы по Русстей земли»

..... (モスコ年代記)

『兄弟よ、見よ、我は用意してあり。』.....『多くのさいわいをルシの国になせ。』.....『ポロヴェツに進攻しよう。しかしてルシの国のために頭を横たえよう』

親兵団や軍勢を前にして公たちの勇を鼓舞する言葉のうち、主要なものを上にあげて見たが、それらの調子の類似性は誰の眼にも疑いを持たせないであろう。「進もう」〈*потягнем*〉は(イ)、(≡)―(а), (≡)―(б), (≡)―(в), (≡)―(г), (≡)―(д), (≡)―(е), において同一語であり、(イ)の『すでに我々は此処に倒れるべきである』〈*уже нам сле пасти*〉という発想は、(ロ)の『既に我らには身を置くべき所はない』〈*уже нам некамо ся дети*〉へ容易に発展すべきものであろうし、然もこの(ロ)と同一語として、(≡)―(а)に *некамо* を *нелзе камо* に置き替えただけのもの〈*уже нам нелзе камо ся дети*〉がみられ、それを(≡)―(б), (в), が踏襲し、(≡)―(г)は語順を狂わせて〈*уже нам нелзе дети камо ся*〉、(≡)―(д)は *нелзе* を単に *не* としただけ、即ち実は(ロ)の場合と全く同一文に帰つて〈*уже нам не камо ся дети*〉となつている。ルシの国のために死のう、頭を横たえようとする表現も、死んでも生きてもとする表現も、これらの言葉の随所にみられたのである。

それらのことごとくが年代記者の創作によらない、叙事詩的口頭語であつたことは、『イーゴリ遠征物語』の用語と照し合わせてみれば、明瞭に判明するところである。例えば、先づ、(イ)における親兵団や軍勢への呼びかけの言葉『兄弟たちおよび親兵団よ』〈*братья и дружино!*〉は、『イーゴリ遠征物語』でイーゴリが親兵団に語りかける言葉〈*Братие и дружино!*〉と全く同じである。公たちの喋る言葉が同一であるのみならず、その説明的な部分、『おのれの親兵団に言つた』〈*рече (к) дружине своей*〉も、(イ)から(ホ)に至るまで各所にあつたが、それとても、『イーゴリはおのれの親兵団に向つて言つた』〈*рече Игорь к дружине своей*〉と同一である。

『おのれの頭を横たえよう』という発想及び言葉は、そのまま『イーゴリ遠征物語』にも〈*хочу главу свою приложити*〉

と見えるし、ロシアの國のために倒れるという表現もまた《(по-
легоста) за землю Рускую》と各所に見えている。(註)に
見える骨となつて横たわろうという発想も、『イーゴリ遠征物語』
に《посеяни костями русских сынов》『ロシアの子等
の骨に(野は)まき散らされ』とある。

現代に伝えられているほとんど唯一の叙事詩に、これほどまで
に似かよつた表現が残つている以上、『過ぎし年月の物語』が筆
をとめてから後に、年代記に書き込まれて行つたこのイーゴリの
事件の物語にはなおさら同様の表現がなければなるまい。叙事詩
に歌われたと同じように、年代記にも、出陣まえの日蝕を不吉な
る前兆とした軍勢に、イーゴリが語りかける言葉は、先づ、同じ
ように『兄弟たちよ、しかして親兵団よ』《братья и дру-
жино!》であつたではないか。(イバーチ一年代記; 6693年)。
或はまた、敵に後を見せ、辱かしめを受けるようなことなら、
死んだ方がよいとする発想の言葉も此処に《оже ны будеть
не бившися возвратитися, то сором ны будеть
пушей смерти》『もし戦わずして我等戻るべきなら、我等に
とつて死より悪しき汚辱である』と見え、『進もう』という言葉
も同一の《потягнем》を用いて、『兄弟たちよ、これを我々は
求めていたのである。さて進もう』《братья! сего есмы
искале, а потягнем》とある。このイバーチ一年代記だけ
を取りあげても6693年の項の中のイーゴリ公の軍勢に対する言
葉には盛んに類似表現を見出し得るのである。

即ち

《да недивно есть разумеючи, братья, умерти》

『まさしく兄弟たちよ、死のうと考へているのはおどろくべきこ
とではない』

《оже побегнем, утечем сами, ……но или
умрем, или живи будем на едином месте》

『もしも自から逃げ走るならば……いや，一諸に死ぬか，一諸に生きようではないか』

イーゴリ公の悲報を聞いたスヴイヤトスラフが先づ口にする言葉もまた同様に

«о любя моя братья и сынове и муже земле Руское!»

『親愛なるわが兄弟たち，息子たち，ルシの国の家臣たちよ！』であつた。

そして

«а поеди, брате, постережи земле Руское»

『しかして来れ，兄弟よ，ルシの国を守れ』

であつた。

総て公たちのこの生きた生の言葉は，何を示しているのか．それは演説的口頭軍事用語の高い表現力を示すものではないか．例えば親兵団や軍勢を『兄弟』と呼んで，一心同体であるべき理念と，軍勢へのいつくしみと，民族意識と，敵がい心と……等々を同時に表現し込んだのであつた．そのことによつて，たゞ，それだけの言葉にも，勇敢さへの要求と，祖国の栄光と，戦士の名譽と熱血のほとばしりがうづまいた．『過ぎし年月の物語』が文字を得て書きはじめられる頃には，その直前まで文字をもたなかつた古代ロシア語も，既に，これほどの口頭表現力を獲得していたと断言できよう．

『過ぎし年月の物語』が素材にした筈のものが既に高い芸術的表現をもつていたことは，公たちの，もう一つの公式用語であつた~~使者~~^{使者}の口上の中にもそれをうかゞうことができる．勿論，使者たちは，書き物ではなくて，口うつしの口上でその役目を果たしていたのである以上，その口上の言葉は，文字以前の古代ロシア語の表現力を知る上から是非取りあげておかなければなるまい。

使者たちは，いつれの国，いつれの時代においても，すぐれて

賢明なものたちがその任務についたことであろう。特に文字の無い時代の使者においてはなおさらのことであつた。使者たちは、然し、いかに賢明であつたにしても、やはり、その口上は、あくまでも簡潔にして、然も要領を得たものでなければならなかつた筈である。その上に一定の形式のようなものが必要であつた。誤解の余地を残さない厳格さも必要であつた。文字をもたない言葉の表現力を試すことのできる最適の材料が、この様な古い時代の使者の口上であると見てよいであろう。

ロシアが文字を創る以前の古い時代の記事或は文字を用いなかつた口頭だけの使者の記事から、その例を取りあげてみるとよい。年代記者が多少手を加えたにしても、おそらくは、その簡潔さと形式の故に、それらの口上は嘗つての姿のままに伝えられ書きとられたと考へてよいであろう。

使者たちによつて述べられた口上の言葉は、非常に数多く年代記がこれを現代に伝えている。それら使者の口上は、その内容上、出陣の際或は開戦直前或は戦闘中に発せられた武勇鼓舞の公たちの言葉よりも、その内容は多様であり複雑である。だから、武勇鼓舞の言葉などよりもその伝統的形式性は少いかも知れない。型にはまつた言い廻しは多くないと言える。然し反対にだからこそ、使者の口上には、叙事詩的な傾向よりもより喋り言葉に近い言い廻しや用語が使用される機会もすぐれて多かつた筈である。使者の口上に托されるべき内容が複雑になればなるほど、それら口上の言葉は、ますます、当時の古代ロシア語の生きた喋り言葉に近づいていたとも考へられる。叙事詩的な言い廻しや用語からは却つてますます離れたことであろう。

文字を持たなかつた頃に、古代ロシア語がどれほどの表現力の発達を示していたかを求めるには、この使者の口上として『過ぎし年月の物語』に書きとめられたものを手がかりにするのが最上の方法であろうと思われる。

ラヴレンチー、イパーチー、トロイツキー各年代記における使者の口上を年代順に取りあげて見よう。

6368年、ヴァリアギを支配者として迎えに行つた折の口上

«вся земля наша велика и обильна, а наряда в ней нет; да поидете княжити и володети нами»

『我々の総ての土地は広大であり豊かであるが、その中に秩序がない。我々に君臨し支配するために来たれ』……(『古代ロシア研究』オ二号参照)

既にこの口上には明らかに一つの型のようなものがうかがわれる。我等の土地は大きくて豊かであるという前段につづいて、そのコントラストをなすような形で反対に其処には秩序がないとするこの対置的述べ方は、その後永らくひきつがれて、二段構えの述べ方を完成して行くのであつた。もう一つ、『過ぎし年月の物語』の中で、古代ロシア語のスピン動詞の使用はそれほど多くはなかつた。不定法がスピンに代つて行つたのであろうが、『何々するために』という場合だけに時折不定法ではなくてスピンが用いられた。この口上で面白いのはそのスピンは『君臨するために』«княжит»の方だけで、『支配する』の方は«володети»と不定法になつている。二段構えの述べ方が、この二つの動詞の使用法にも反映したとは考えられなからであろうか。スピン動詞が造格補語を持ち得なかつたからという形式的な説明では、この口上は読み尽せたとは考えられまい。即ちこの最初に登場する口上語において、古代ロシア語の行きとどいた技巧の程度を見ることが出来る。

6390年、オレグがアスコリドとシルに使者を送つた折の口上。(『古代ロシア研究』オ二号参照)

«яко гость есмь, идем в греки от Ольга и от Игоря княжича; да придет к нам к родом

СВОИМ》

『(我々は)商人である。オレグから、しかして、公の子イゴリから、グレキへ行くところである。我々のもと、おのれの一族のもとに来たれ』

此処にも二段構えの述べ方は三回も変形されて出現している。商人である、グレキへ行くところであるとするのが一つ、オレグから、イゴリからとするのが一つ、我々のもとへ、おのれの一族のもとへとするのが一つである。

これにつゞくオレグのグレキ遠征の物語はいづれまた引用して述べなければならぬことがある。其処における種々の口上も、此処に引用することを控えよう。続くイゴリのグレキ遠征の記事もまた同様である(『古代ロシア研究』才二号才三号才四号にも既に詳しく検討された)。

6453年のオリガのもとに来たドレヴリヤネの口上。

《мужа твоего убихом, быше бо муж твой яки волк восхищая и грабя, а наши князи добри суть,》

『(我々は)汝の夫を殺した。というのは、汝の夫は狼の如くりやく奪し強奪していたからである。ところで我々の公たちは善良である。』

その使者にオリガが伝えさせた口上。

《не едем на конех, ни пеши идем, но понесете ны в лодье》

『(我々は)馬でも行かぬ。徒歩でも行かぬ。我々を舟に乗せて運べ』

オリガの使者の口上。

《нам неволя; князь нашъ убьен, а княгини наша хоче за вашъ князь》

『我々にはやむを得ない。我等の公は殺され、我々の公夫人は

汝等の公に嫁がんと欲している。』

オリガの召使の再度の口上

«да аще мя просите право, то пришлите мужа нарочиты, а в велице чти приду за вашь князь, еда не пустять мене людьє Киевьстии»

『もしも汝等がまことに我を求めるのなら、大いなる名誉のうち汝等の公に嫁ぐように、高位の家臣を遣わせ。さもなくばキエフの人々は我を行かせないであろう』。

以上の記事に関する総ての年代記の記述の様子は『古代ロシア研究』才五号に総て引用しておいたが、総て上にあげた口上には二段構えの変形が次才に三段論法的な形へ進んで行く姿が見られるのである。既に整然とした論理追求のためにも、充分、当時の文字以前の言葉で事足りていた状態がうかがわれるのである。

町の中にとじこもつて強力に敵対する敵に使者をおくつて言わせる口上。二段構えの説得の効果を然も二度の口上で求めんとするのである。そのやりとりを此処に引用しておこう。(『古代ロシア研究』才五号にも総ての年代記のそれを引用した)。

посла ко граду глаголющи:" что хотите доседети?
а вси гради ваши предашася мне, и ялися по дань,
и делают нивы своя и земле своя; а вы хотите
изъмерети гладом, не имучеся по дань".....

..."яко аз мьстила уже обиду своего, когда
придоша Киеву, второе, и третье, когда творих
трызну мужеви своему; а уже не хоцю мьцати,
но хоцю дань имати помалу, смирившеся с вами
пойду опять"..... "ныне у вас несть меду, ни
скоры, но мало у вас прошу: дайте ми двора
по 3 голуби да по 3 воробьи; аз бе не хоцю тяж-
ьки дани възложить, якоже и мужь мой, сего про-

шю у вас мало, вы бо есте изънемогли в осаде;
да сего у вас прошю мала".

『……町へ（使者を）つかわして言つた。『何故、こもりつゞけようとしているのか？汝等の町々は総て我に降参した。しかして貢税に同意した。おのれの島とおのれの土地をたがやしている。ところが汝等は貢税に同意せずにか死せんとしている』

……『（汝等の使者が）キエフに来たつた時、二度目にも、三度目にも、我は既におのれの夫の恥辱に報いたのである。おのれの夫に追善供養をなした時も、しかして（我は）既に復しゆうしゆうとは思つていない。汝等と和睦して引き返すであらう』

……『現在、汝には蜜酒も毛皮もない。しかし汝等に少し求めよう。各戸から三羽づつのハトと三羽づつの雀を我に与えよ。我は汝等に我が夫のように重い貢税を課そうとは思わない。これだけを汝等に少し求める。というのは、汝等は包囲の中で弱りきつてゐるからである。だからこれだけを汝等に少し求めるのである』

この口上には、当時の口上の最も典型的な完成されたものがある
と見てよいであらう。二段構えの述べ方が三段構えに発展し、然
も、その二段と三段の構えが非常にたくみに組み合わされている
ことに気づくであらう。例えば、汝等の総ての町々は『我に降参
した』〈предашася мне〉、『しかして貢税条件を受け入れた』
〈и ялися по дань〉と二段に分けて相手の仲間の帰順を報じ、
続いて『おのれの島』〈нивы своя〉と『おのれの土地』〈зе-
мле своя〉との二つをあげて、これを平和に耕作していると此
処にも二段の述べ方をする。然も、『帰順した』〈предашася〉
ことと今は平和に耕作に従事している〈делаютъ〉こととを二
段に重ねる。そして、まとめれば、降参し貢税を払い、耕作に従
事していると三段構えをつくり出すのである。この二段構えの積
み上げによる三段構えへの移行は、その説得力を一層重厚にした

のであつた。その説得力に加えて、『貢税条件を受け入れない』
《не имети ся по дань》、『飢えて死ぬ』《изъмерети
гладом》のは何故なのかと、これもまた、そのおろかしさを二
段に問いつめるのである。これが才一段の口上。

次に続く口上とても同じである。夫のあだを報じたのは、大別
して『キエフに来た時』《когда придоша Киеву》と『追善
供養をした時』《когда творих трызну》だと二つに分けて
述べている。そして、キエフに来た時を、二度目、三度目と計三
度に重ねているのである。《когда придоша Киеву, вто-
рое, и третье, когда творих трызну》という言
葉は丁度中央に《и》という接属詞を入れて半折しながら、二段構
えの複雑な組み合わせを見せている。敵に対して、既に復しゆう
ずみであることを重ねて説き、充分安心させようとする効果をね
らつたものと考えてよいであろう。これが才二の口上。

最後の口上も一層面白い組み立て方をなしている。即ち、汝等
のもとに既に無くなつたものは『蜜酒』《мед》と『毛皮』《
скора》の二つである。求める貢税はハトと雀の二種類である。
そしてそのハトと雀はそれぞれ各戸から今度は三羽づつである。
『汝等に少し求める』は《мало у вас прошю》《прошу у
вас мало》、《у вас прошю мала》と三度繰り返される。
相手方との和睦のために当方が求める貢税が如何に少いものかを
説得するには非常に大きな効果があつたことであろう。そして求
める物が少いのだと強調するには、それぞれその三度にわたつて
理由があつた。一つはろり城したために物資が汝等に欠乏してい
る筈だという鋭い推理を含む同情であり、一つは、当方は重い貢
税を求める訳ではないという温情のみせびらかしと恩の売りつけ
であり、最後の一つは、ろり城による相手方のつかれと弱体化を
高飛車に言つてのけて自己の優越を見せつける。その一つ一つの
間に、ほんの少しの貢税を求めるだけだから城の門を開いて和睦

せよという甘言がはさみ込まれる。強圧的態度と温情を見せる甘言とを二重に重ねたのである。たしかに、相手方は、その巧妙な言葉にひつかかった。町を焼かれ全員が殺されるか捕えられてしまったのである。心にくいほどの深い読みをもつた口上である。古代ロシア語よりもむしろ其処には古代スラヴ語に近い『我は』〈аз〉という如き単語が見られるにしても、この三つの連続する口上だけからでも、既にロシア語の口頭語の技術がどれほどまでに成長していたかがうかがえるであろう。

6476年の頃の終りに、キエフの人々がスヴイャトスラフ公に使者を立て、進言し説得した口上がある。（『古代ロシア研究』才五号p.46～p.47）

"ты, княже, чужюя земли ищещи и блюдеши, а своєю охабив, малы бо нас не взяша Печенези, матерь твою и дети твоя; аще не поидеши, ни обратиши нас, да паки ны возмутъ, аще ти не жаль отчины своєю, ни матере стары, и детей своих". (1)

『汝は、公よ、他人の国を求め、しかして守つている。ところがおのれの（国を）かえりみない。だからベチエネギは我々、汝の母、汝の子らをもほとんど捕えんばかりであつた。もし（汝が）来たらず、我らを守らなければ、そのときは、（彼らは）再び我々をとらえるであろう。汝はおのれの祖国も、年老いている母をも、おのれの子らをも、いとおしくないのであるか』

年代記には使者を派遣した主体が公であり、その派遣先の相手もまた公に比敵するほどの身分のものであることが多いが、此処ではめずらしく、民衆代表者が自分の公に注文嘆願或は進言の形で使者を立て、の口上が書きとられている。それだけに、この口上は、当時の都市住民の少くとも上層者たちの精一杯の言葉を知る上で面白い資料であると思われる。戦陣の功績を求め、武力侵攻だけに夢中になつている戦野の公に、故里の国をかえりみよと

いう注文は、具体的な事例を引き合いに出して、特に説得力をもたなければならなかつた。然もその説得力は上から相手を説き伏せる形のものではなく、下から嘆願調をもつべきものであつた。嘆願調の中に幾分かの非難調をも含めなければならなかつた。他人の土地を『求め守つている』〈ищещи и блюдеши〉と二本立てで公の行動を述べあげた裏には、その行動の是認よりも批判が含まれる。その非難はおのれの国を『かえりみない』〈охабив〉という言葉で確認される。ところが、公の行動を述べ、つゞいてその行動に文句をつけるという二段構えの手法は、嘆願調を出すためには、それだけの着色が必要であつた。少くとも、批判或は非難の調子を軟らげて嘆願の印象に変えなければならぬ。批判や非難だけでは、下級者が上級者を説得することは困難であろう。そこらあたりの呼吸を、この口上は、心にくいばかりに心得ていた。即ち『かえり見ない』〈охабив〉は直接法動詞ではないのである。副動詞過去形を用いて、非難を軟らげ嘆願的説得への途を開いたのである。この技巧は次の文章にもみられる。即ち、公が出陣した留守中に横合いから異民族のベチエネギが『我々を』〈нас〉すんでのところで捕えんばかりであつたと公に告げる。それは半ば泣き言であり、半ば非難である。故里の町をかえり見ないことがもたらした当然の結果だと言わんばかりである。非難と泣き言とは、然し、武勇にはやる相手に無視されてしまうかも知れない。此処でも述べ方は二段構えを必要とした。『汝の母及び汝の子たちをも』〈матеръ твою и дети твои〉ベチエネギはすんでのところで捕えんばかりであつたとつけ加えるのである。これでは、いかなる公も戦場から故里の町へ引き返して本来の平和な生活のいとなみの保証者に戻らなければならぬであろう。口上の言葉のうち此処までは批判と嘆願をたくみに組み込んだ事実報告の形である。即ち口上の才一段である。既にこの才一段において、事実報告の中に注文や嘆願への下地は充分用意さ

れてしまつていた。二段構えとして口上の後半はその下地の上に今度は遠慮のない批判——むしろ脅迫にちかい——或は非難を重ねて相手を否応なく説得してしまふ。この二段目の口上は、だから、事実報告の上に、それ以上のおそろしい仮定を設定する。その仮定設定『もしも』〈аще〉は、これも二段構えで二度使用される。才一回目の〈аще〉は戻つて来る〈привидеши〉、故里の町を『守る』〈обраниши〉ことがなければと二重の述べ方でつゞき、ペチエネギが我々を捕えてしまふであろうと述べる。ところが二度目の〈аще〉には、二重の述べ方では物足りず、三重に重ねて、『祖国』〈отчина〉、『母』〈матеръ〉、『子供たち』〈дети〉と、公の最も弱い心の部分を突いてしまふ。口上を二段構えに分け、その才一段に報告を主体に嘆願への道をひらき、才二段で公の最も痛いところを突いている。然もその各段ごとに、二重の重ね述べをし、それぞれのしめくゞりには三段の重ね述べを持つて来るといふ手法である。これを聞いた公が早速戦野からキエフの町に引き返したのは当然であつたと言えよう。たとえば、文字を使用しなかつたにしても、当時の古代ロシア語の表現効果とそのための技巧がどれほど発達していたかがえる一つの実例であろう。

この使者の口上の手法が『過ぎし年月の物語』の中で最も見事に開花したのが、口上ではなくて、遺言の言葉である。6562年の項に、『ルシの大公ヤロスラフが死んだ。しかしてまだ生きていた時に彼はおのれの息子たちに指図をあたえて言つた』

«Преставился великий князь Русьскыи Ярослав. И еще бо живущо ему, наряди сыны своя, рек им:» につゞく次の様な言葉である。勿論、この遺言が全く文字によらない口頭だけのものであつたとは言い難いかも知れない。然し、口頭によつた使者の口上の言葉が最も典型的に行きついた高度な成果として見落してはならないと思ふ。

"се аз отхожю света сего, сынове мои; имейте в себе любовь, понеже вы есте братья единого отца и матери, да аще будете в любви между собою, Бог будет в вас, и покорить вы противныя под вы, и будете мирно живуще; аще ли будете ненавидно живуще в распрях и которающеса, то погубнете сами и погубите землю отец своих и дед своих, иже налезоса трудом своим великим, но пребывайте мирно, послушающе брат брата. Се же поручаю в себе место стол старейшему сыну моему и брату вашему Изяславу Киев, сего послушайте, якоже послушасте мене, да то вы будете в мене место;" (2)

『今、我はこの世を去るのである。我が子等よ、互に愛を持って。その故は汝等は同じ父と母より出でた兄弟たちだからである。もし、汝等が相互の間の愛の中にいるならば、神は汝等の中にいますであろう。しかして、汝等のために汝等の敵を征服し給うであろう。しかして汝等は平和に暮して行けるであろう。もしまた（汝等が）内紛の内に敵意をもつて暮し争うならば、自からも滅びるであろうし、また（汝等の父祖が）大いなる労力を以て獲たおのれの父たち及び祖父たちの国をも滅ぼすことになろう。しからずして、兄弟は兄弟にきゝ従いつゝ平和に暮せ。今、（我は）我が最年長の息子にして汝等が兄なるイジヤスラフにおのれの地位なるキエフの王座をまかせる。この兄（のいうこと）を、我（の言うこと）を聞いてあるごとくに聞け。しかして、汝等にとつて彼は私の代りとなろう……』

『今、我は去る』〈се аз отхожю〉、『今、（我は）まかせる』〈се же поручаю〉と大きく二段の述べ方が先づ目につくであろう。この二段の述べ方の中の才一段にも、『もしも汝等

が……であるなら』〈аще будете……〉〈аще ли
будете……〉と更に二重の組み立てをおこなっている。その
二重の組み立ての前節は友愛の生活をすればという良き仮定であ
る。後節は仲間割れをすればという悪しき仮定である。この対称
的な仮定そのものも、前者は当然そうあるべき注文として一段構
えの述べ方で『互いの中で友愛の中に暮せれば』〈мирно
живуше〉とあるにすぎないが、後者の悪しき仮定は、そうあつ
てはいけないものとして強調すべく、二段構えを取り、『仲間割
れをして憎しみながら生き』〈ненавидно живуше в ра-
спрях〉、『しかして争う』〈и которающиеся〉と述べられる。
然し、大切なのは、それぞれの構えによる仮定の設定ではなくて、
その仮定の設定から結果されるべき事柄への教訓なのであつた。
遺言者の言いたいことは、仮定の後に起るべき事柄そのものへの
注意であつた。だから、『もしも』〈аще〉のみちびく仮定文の
直後の言葉こそが重大である。その重大の文章は、良き仮定の場
合は二段構え、悪しき仮定の場合も同じく二段構えにしてはいる
が、その重ね方には深い思慮がうかがえる。友愛の内に生きる時
には、『神は汝等の中にいますであろう』〈Бог будетъ в
вас〉と先づ一段目にのべる。実はもうそれだけで充分な筈であ
る。何となれば、其処から総ての幸福と善は流出する筈だし、悪
は退散して、つけ込むすきは無い筈であり、万事は神の義によつ
て進行する筈だからである。にもかゝらず、血生臭い戦争の明
け暮れに充分対処した公が同じよりの将来を見通して息子たちに、
もう一段重ねて、自己の総てと、去り行く者の希求の総てを托し
のべた。『（神は）しかして汝に敵対するものたちを汝のもとに
従わしめ給うであろう』〈и покорить вы противныя
под вы〉。ヤロスラフ大公の広く高く深いえい知を示すもので
ある。

このえい知が、二段目に、仲間割れをして息子たちが生きる折

を仮定した時、巨大な宝石の如くきらめいた。この仮定に続く文章「то погыбнете сами и погубите землю отець своих и дед своих, иже налезоша трудом своим великим」は、最も心して読み取られるべきである。此処に二段構えの述べ方が二段に重ねられていることに気づくであろう。即ち、一つには、『おのれら自からが破滅するであろう』「погыбнете сами」であり、二つには『国を破滅させるであろう』「погубите землю」である。おのれら自からが破滅することはそれとしても、国を滅ぼすことの方は絶対に許すことのできない重大なことであつた。二段の注意事項は、後段に極度の重点を置く。だから後段は更に二重の圧力を加えられる。即ち、その国とは、『おのれの父たちの』「отець своих」『おのれの祖父たちの』「дед своих」国なのである。然も『大いなる労苦によつて』「трудом своим великим」創られた国なのである。その労苦は決して教えあげられ、一々指摘することや分類することを許さない。総てはただただ一つの束になるべき同質の労苦であつた。父や祖父の労苦の事業には意志の分裂や違背などは絶対になかつた。その志は分ち難く一体であつた。汝等兄弟はその一体性を堅持すべきである。……それは、この『大いなるおのれの労苦』という言葉を決して複数形にしていないうところに、にじみ出されている。もしも良ければ、もしも悪るければと二重に仮定して遊訓を垂れ、悪しき仮定の折にはこれだけの深く高い熱を込めたのである。そして、その熱の最高調の尖端において、『然らずして、平和に暮せ』「но пребывайте мирно」と、最も切実な願いを述べるのである。心にくいほどの技巧であると言わなければならぬ。この様に頂点まで持ち上げられた高い調子からは、次につゞくべき教えは自然に流れ出し、自然に相手の心へしみ込んで深く根をその心におろすであろう。遊訓の後段は、まさにそのようなものであつた。然し、それとて、おろ

そかな言葉で組み立てられてはいない。例えば、『我が最年長の息子に』〈старейшему сыну моему〉は、やはり二段構えで、『即ち汝等の兄イジャスラフに』〈и брату вашему Изяславу〉とのべられるのである。自分がまかせるべき『地位』〈место〉という言葉も二度用いている。この遺訓は、全く、二段構えの巧妙な複合による最高の文章であつたとも言える。年代記者の説明文や記述文の中にあつて、群を抜いて光る一節が、実は文字と文章をあやつつていた年代記者の地の文章ではなくてむしろ『——』〃——〃印に入れられるほどの口頭語に近いものであつたことを注目すべきである。古代ロシア語は文字の助けによつてその表現力を一方的に援助されたわけではない。むしろ、自から口頭によつて開発した高度な表現を定着させ、或は有効たらしめるために文字を用いたのである。年代記者は却つてそれらの発達した口頭表現の手法と力を借りた傾向が強い。

さて、再び使者の口上の検討に話を戻してみよう。使者の口上の言葉が、上に引用したような効果的な表現手法をもつまでには、勿論、そうなるべき数多くの基盤があつた。その基盤とは、年代記に記される雑多な短く単純な口上である。ところが、次に引用するように、それら短く単純な口上にも、二段構え及びその巧みな組合わせ、及び三段構えの発達のもとになつた形式的なタイプがあつた。そのタイプの正体は、使者の要求や請願や伝達の事項と共に常にそのアンチテーゼが組み込まれたことなのである。一つことを伝え要求し請うに際して、使者たちの口上は常に、『もしもそうでなかつたら……』というアンチテーゼの言葉を持ち出した。6572年の立派な遺言の記述以後の年代記の項に書きとられているそれらの総てを此処に取りあげて見れば、その型の共通性が判明するであらう。

6576年には先づ一つの口上とそれに対する返答が書きしるされている。その口上には

"мы уже зло створили есмы, князя своего прогнавше, а се ведеть на ны Ляхьскую землю; а поидета в град отца своего; аще ли не хочета, то нам неволя: зажегше град свой, ступим в Гречьскую землю".....(3)

『おのれの公を追い出したのは、我々が既に悪をなくしてしまつたということである。ところが、見よ、(彼は)我々に向つてリヤヒの国(の人々)をひきいて来ている。そこで(汝等は)おのれの父の町へ来たれ。もしも(汝等が来たることを)欲しないならば、我々はやむを得ない。おのれの町を焼いてグレキの国に行こう』

この口上に対する返答は

"ве послеве к брату своему; аще поидеть на вы с Ляхы губити вас, то ве противу ему ратью, не даве бо погубити града отца своего; аще ли хочеть с миром, то в мале придеть дружине".....(4)

『(我々は)おのれの兄に人を遣わそう。もしも汝等を滅ぼすべく汝等に向つてリヤヒ人と共に進攻するのであれば、彼に対して軍勢を以て(立ち向う)であろう。(我々は)おのれの父の町を滅ぼさしめることはないであろうからである。もしも(彼が)和平を以て(来たることを)欲するならば、少数の親兵団にて来たらしむべし』

再びイジャスラフにスウイヤトスラフとフセヴオロドが出した使者の口上

Всеслав ти бежал, а не води Ляхов Киеву, противна бо ти нету; аще ли хоцещи гнев имети и погубити град, то веси, яко нама жаль отня стола".....(5)

『フセスラフは逃げた。ところでリヤヒ人をキエフに連れ来た

るな。というのは汝に敵対するものはないからである。もしも、(汝が) 憤りを持ち、しかして町を滅ぼそうと欲するのならば、我々(二人)には父の王座が惜しいのだということを知れ。」

これら三つの引用例におけるアンチテーゼ置き方即ち『もしも』<аше>という言葉の使い方注意しよう。(3)には一回、(4)には二回、(5)には一回、必ずこの言葉によつて希望とは反対のアンチテーゼを置いて、その場合の結果を示し、そうならないようにという説得効果をあげようとしている。言うまでもなく、二段構えの原型である。

『もしも』<аше>という仮定のもとにアンチテーゼを置かない場合にも、二段構えの述べ方は捨てられなかつた。要求が全く一本にしぼられる場合には、却つて仮定の話など持ち出さずに、直接その要求を相手に突き立てることの方が効果的であつた。その様な単一の鋭い要求の時には、アンチテーゼの設定より、むしろ、共に同じ結果を招く筈の両面の要求を述べた。二段構えの述べ方の一番深い基底である。例えば、誰かを憎悪して殺害したいとする。その相手は敵方にかくまわれている。その男を殺せという要求と、さもなければその男を当方に引き渡せという要求を両面作戦的に採用するのである。おそらく、この述べ方が最も基本的な素朴な形の一つの使者の口上であつたであろう。スヴィヤトボルクとヴォロジメルがオレグに出した使者の口上には、例えばそれがうかがわれる。6603年の項の終りに近い個所に見られるものである。

この様な基本線を利用し、或はそれを二段構えに組み、時には三段構えに発展させ、様々な組み込み方から説得力を強化し、或は感動的な効果をあげたのが使者口上の発達であり、年代記文章の一つのよりどころであつた。その基本線をほとんど利用し得なかつたような口上が効果を発揮しなかつたこと、即ち、相手を説得し得なかつたことも、年代記は見のがさなかつた。二段構えの

基本線をもたない口上が相手を説得し得なかつた実例が、いくつ
かみとめられる。その一つに、ラヴレンチー、トロイツキ、イバ
チー各年代記6604年の項の一節に次のようなものがある。

И посла Олег слы свое к Изяславу, глаголя:
"иди в волость отца своего Ростову, а то есть
волость отца моего; да хочу ту седя поряд
створити со отцем твоим, се бо мя выгнал из
города отца моего; а ты ли ми zde хлеба моего
же не хочещи дати?" и не послуша Изяслав сло-
вес сих; надеяся на множество вой.....

『しかしてオレグはおのれの使者たちをイジャスラフのもとに
派遣して言つた。『汝の父の領地であるロストフに行け。ところ
で、それは我が父の領地である。しかして(我は)其処に坐して
汝の父と条約を結ばうと思ふ。というのは、見よ、(彼が)我を
我が父の町から追い出したのだからである。ところで、汝は此処
において我が食糧を我に与えることを欲せぬのであるか?』と。
しかして、イジャスラフは軍勢の多数をたのんでこれらの言葉を
聞かなかつた』

この同じ年の項の中には同じように効を奏しなかつた同じよう
な口上がもう一つ書きとめられている。

И посла к нему Мьстислав сол свой из Новагорода,
глаголя: "иди из Суждаля Мурому, а чужей волости не
седи; и аз пошлю молится с дружиною своею
к отцю своему, и смирно тя со отцем моим;
Аще и брата моего убил, то есть не дивно,
в ратех бо и цари и мужи погыбають". Олег же
не всхоте сего, но паче помышляше и Новьгород
перянти;

『しかしてムステスラフはノヴゴロドからおのれの使者を彼に

派遣して言つた。「スズダリからムロムにもどれ。しかして他人の領地に坐するな。しかして我はおのれの親兵団と共におのれの父に願いの使者をたてよう。汝を我が父と和解せしむるように。我が弟を（汝が）殺したとは言つても、それは驚くべきことではない。というのは、戦いにおいては王者たちも家臣たちもたおれるのであるから」と。ところでオレグはこれを（聞くことを）欲せず、しかもその上に、ノヴゴロドを奪い取ろうとさえたくらんでいた。」

此処には <аше> 『もしも』という言葉で仮定を設定し二段構えの述べ方をやゝ始めようとするのだが、それは口上の要求の本筋からはずれた内容の個所であり、一つの出口だけを開いておいて、そこへ向つて人を追い込んで行こうという説得的強制効果はない。二段構えは此処では至つて不完全であり、その上に的はずれであつた。これとは全く反対に、説得される相手が感動して泣き出すほどの効果をあげた使者口上がこの年の翌年6605年の項にみられる。二段構えによる両面作戦的手法の典型の一つであると思われる。

И ту абѣ посла к давиду и к Олгови Святослави-
чема, глаголя: "пойдета к Городцю, да поправим
сего зла, еже ся створи се в Русьскей земли
и в нас в братьи, оже вверже в ны ножь; да
аще сего не правим, то большее зло востенать в
нас, и начнеть брат брата закалати, и погыбнеть
земля Руская, и врази наши Половци пришедше
возмутъ землю Русьскую". Се слышав Давыд и Олег,
печална быста велми и плакастася,.....

『しかして、ただちに、スヴィヤトスラフの子等ダヴィド及びオレグに使者をつかわして言つた。「ゴロジエツに行け。ルシの国及び我々兄弟の間で行われたこの悪を正そうではないか。我等

の中へ刀が突き刺されたのである。しかして、もしも、これを（我々が）正さなければ、より大きな悪が我々の中に起るであろう。兄弟が兄弟を殺しはじめ、しかしてルシの国は滅ぶであろう。しかして我等の敵ボロツエツが来たりルシの国を奪い取るであろう』と、これを、ダヴィトとオレグは聞いて、非常に悲しみ、しかして泣いた』

見事な構成をもつた口上である。先づ二段構えの才一段は注文或は要求である。才二段は、もしそうでなければという仮定の設定と、その場合に予想される結果である。然もその各段は、それぞれにまた小さく二段構えを持つている。即ち、要求は『ゴロツエツに行く』ことと、『悪を正す』こととの二つである。然も正すべきその悪とは、関係代名詞で受けて、『ルシの国』と『我々兄弟』の中に起つたものである。後段においても同じような構成を一層発展させている。即ち、もしそれを正さなければとする仮定のもとで予想されるのは、実は、『より大きな悪』〈Большее зло〉が起るだろうということである。この予想を才一段において、才二段目ではそれを具体的に展開して見せるといふ二段構えである。その具体的な説明的展開は、同時にその口上のしめくくりでもあつた。そのために、相手への圧力を更に増すために、二段でもよい所を三段に重ね増して、『兄弟が殺し合う』、『ルシの国がほろびる』、『敵が国を奪う』と三要素を持ち出した。此処に見られる二段から三段への発展には、その基底に、やはり二段構えが強く働いていたことがうかがい知れる。即ち、実は三要素が述べられながら、その実、内容は二要素しか持つていないことである。兄弟の争い合いが起るだろう、ルシの国がほろぶであろうといふ二要素なのである。三要素に見せ、三段構えに発展させるために用いられた『敵がルシの国を奪うであろう』というのは、ルシの国がほろぶであろうということへの具体的説明にすぎない。ところが、本来、その二段であつてよい所を、三段に増し、

それぞれの三要素を独立的に見せながら、それらを『より大きな悪』という言葉で前以て言いかぶせておく手腕は実に見事であつた。その口上の言葉の手法は、当然、それを書きつけた年代記者自身の言葉使いにも影響するほどのものであつた。年代記者は、やはり、二段構えでこの口上を締めくくつたのである。『非常に悲しんだ』〈печална быста велми〉『しかして泣いた』〈и плакастася〉と。悲しみ泣いた主体が二人であり、この締めくくりの文章はだからすべて雙数形による記述である。このことを単に偶然の一致であつたと言いきれるだろうか。言葉の技巧の力が影響して記述されるべき事実まで狂わせたことはなかつただろうか。それほどまでに、この年の項の記述には、筆のさえが感じられ熱気がただよひである。おそらく『過ぎし年月の物語』中、その文学的物語性において、ヴァシリコが惨酷にも盲目にされるこの項の記述は、最大の圧巻であろう。ヴァシリコの眼をつぶして盲目にしたスヴァヤトボルクに、ウラジミル以下二人の兄弟が厳しい罪状尋問の使者を送る口上にも、この物語全体の記述者の筆の勢いをさへえたほどのすさまじさが感じられる。そして其処に働いた技巧は、鮮やかな二段構えの組み立てと、『もしも』〈аще〉という言葉による両面誘導の手法であつた。その古代ロシア語の原文は後に引用することとして、日本語の意味だけを此処に述べておこり、『なんたる悪を汝はルシの国において行つたのか。しかして(何故に)汝は刀を我等に突き刺したのか。何ゆえに汝はおのれの兄弟を盲目にしたのか。もしも何等かの罪が彼にあつたとしたら、我等の前で彼を摘発し、彼の罪を証拠立て、しかして事を行うべきであつたのだ。かくなつたからには、汝がかゝることを為した原因となつた彼の罪を明らかにせよ』

これらの見事な表現力と論理性を持つた使者の口上の言葉が、年代記者の記述文にまでその勢いの影響を与えたと前に述べた。

然し、それらの口上をつなぐべき記述文が本当に年代記者のものであつたかどうかは極めて疑わしい。むしろ、それら口上の言葉の創り手と同じような人物、即ち、年代記者とは全く別の人物の文章なのではなかつたか。おそらくは、口上をも大きく含むもう一つ大きな物語手の作になるものだと思われる。年代記者はその叙事詩にも似た作品を借りて来て此処へ組み込んだもののように思われる。口上と口上との間をつなぎ、そのことによつて其処に事件を記述し、物語を組み立てた構成そのものにも、口上以外の記述文そのものにも、口上の場合とほとんど同じような二段構えの立体的組み立て、或は発展した両面記述、三段構えへの技法がみとめられるからである。その文章の質の高さが、ついに、年代記者をして、借り物であることを白状しなければならなくさせたと思われる。そうでなければ、この文学性の高い物語を終つた後、同じ年代項のまゝ、次の話に進む折に、年代記者は、『しかし、我々はおのれの（物語）に戻ろう』《НО мы на свое възвратимся》などとは決して言わなかつたであらう。だからこの『おのれの物語に戻ろう』という言葉以前の記述は、明らかに、別の人の芸術作品であつたにちがいない。勿論、その行間には、どれほどかの説明的な加筆や、編集操作的省略の手が年代記者によつて加えられなかつたとは言えない。然し、省略の部分はともかく、加筆的な部分は、キリスト教的内容の部分であるとわざわざ指摘しなくとも直ちに見当がつくであらう。この芸術性の香り高い物語を長いけれども次に引用しておこう。（イバーチー、ラヴレンチー、トロイツキー各年代記による）6605年（1097年）の項の前半である。

В лето 6605.

Придоша Святополк, Володимер, Давыд Игоревич, и

Басилко Ростиславичъ, и Давыдъ Святославичъ, и братъ его Олегъ, и сняшася Любичи на устроенье мира, и глаголаша къ себѣ, рекуще: "почто губимъ Русьскую землю, сами на ся котору деюще?" а Половци землю нашу несутъ розно, и ради суть, оже межю нами рати; да ноне отселе имемъся въ едино сердце и блюдемъ Рускыя земли, кождо да держитъ отчину свою; Святполкъ Кыевъ Изяславу, Володимиръ Всеволожу, Давыдъ и Олегъ и Ярославъ Святославу; а имъ же роздаялъ Всеволодъ города, Давыду Володимерь, Ростиславичема Перемышль Володимирови, Теробовль Василкови". И на томъ целоваша крестъ, "да аще кто отселе на кого будетъ, то на того будемъ вси и крестъ честный"; рекоша вси. "Да будетъ на нь крестъ честный и вся земля Русьская", и целовавшеся поидоша въ свояси. И приде Святполкъ съ Давыдомъ Кыеву, и ради быша людемъ вси; но токмо дьяволъ печаленъ бѣше о любви сей. И влезе сотона въ сердце некоторымъ мужемъ, и поча глаголати къ Давыдови Игоревичю, рекуще сице: "яко Володимиръ сложился есть съ Василкомъ на Святполка и на ти". Давыдъ же емъ веру лживымъ словомъ, нача молвити на Василка, глаголя: "кто есть убилъ брата своего Ярополка? А ныне мыслить на мя и на тя, и сложился есть съ Володимиромъ; да промышляй о своей голове". Святполкъ же смятеся умомъ, река: "еда се право будетъ, или лжа," не веде; и рече Святполкъ къ Давыдови: "да аще право глаголеши, Богъ ти буди послухъ; да аще ли завистью молвишь, Богъ будетъ за темъ". Святполкъ же сжалиси по брате своемъ и о себѣ,

нача помышляти, еда се право будеть? и я веру Давыдови, и прелсти Давыд Святополка, и начаста думати о Василке. А Василко сего не ведяше и Володимер. И нача Давыд глаголати: "аще не имеве Василка, то ни тебе княженья, ни мне Володимери". И послуша его Святополк. И приде Василко в 4 ноябрья, и перевезеся на Выдубицъ, и иде поклонитя к святому Михаилу в монастырь, и ужина ту, а товары своя постави на Рудици, вечеру же бывшу приде в товар свой. И наутрия же бывшу, присла Святополк, рек: "не ходи от имении моих". Василко же отприся, река: "не могу ждати; еда будеть рать дома". И присла к нему Давыд: "не ходи, брате, не ослушайся брата старейшаго", и не всхоте Василко послушати. И рече Давыд Святополку: "видиши ли, не помнит тебе, ходя в твою руку; аще ти отъидеть в свою волость, да узришь, аще ти не займеть град твоих Турова и Пиньска, и прочих град твоих, да помянешь мене; но призвав Кияне и ем, и дажь мне". И послуша его Святополк, и посла по Василка, глаголя: "да аще не хочешь остати до имении моих, да приди ныне, целуеши мя, и поседим вси с Давыдом". Василко же обещася прити, не ведый лсти, юже имяше на нь Давыд. Василко же всед на конь поеха, и устрете и детьский его и поведа ему, глаголя: "не ходи, княже, хотять тя яти", и не послуша его, помышляя, "како мя хотять яти? а оно мне целовавше крест; рекуще: аще кто на кого будеть, то на того будеть крест и мы и вси", и помыслив си прекрестися, рек: "воля Господня да

будеть". И приеха в мале друдине на княжь двор; и вылезе противу его Святополк, и идоша в истобку, и приде Давыд, и седоша. И нача глаголати Святополк: "останися на святок". И рече Василко: "не могу остати, братье; уже есм повеле товаром поити переди". Давыд же седше акы нем, и рече Святополк; "да заутрокай, брате!" и обещася Василко заутракати. И рече Святополк: "поседита вы сде, а яз лезу, напяжю", и лезе вон, а Давыд с Василком седоста. И нача Василко глаголати к Давыдови, и не бе в Давыде гласа, ни послушанья; бе бо ужаслься, и леть имея в сердци. И поседев Давыд мало; рече: "где есть брат?" Они же реша ему: "стоит на сенех". И встав Давыд, рече: "аз иду по нь; а ты, брате, поседи". И встав иде вон. И яко выступи Давыд, и запроша Василка в 5 ноябрья, и оковаша и в двой оковы, и приставиша к нему стороже на ночь. Наутриа же Святополк созва боялр и Кьян, и поведа им, еже бе ему поведал Давыд: яко "брата ти убил, а на тя свечался с Володимером, и хотять тя убити и грады твоя зяти". И реша боялре и людье: "тобе, княже, достоить блюсти головы своее; да аще есть право молвил Давыд, да приметъ Василко казнь; аще ли неправо глагола Давыд, да приметъ мечь от Бога и отвечает пред Богом". И уведеша игумени, и начаша молитися о Василке Святополку; и рече им Святополк: "ото Давыд". Уведев же Давыд, нача поущати на ослепленье: "аще ли сего не створишь, а пустишь и, то ни тебе княжити, ни мне". Святополк же хотяше пустити и, но Давыд не хотяше,

блюдася его. И на ту ночь ведоша и Белугороду, иже град мал у Киева яко 10 вестр въдале, и привезоша и на колех, окована суца, ссадиша и с кол, и ведоша и в истобку малу. И седяшю ему, узре Василко Торчина остряпа ножь, и разуме, яко хотят и слепити, възпи к Богу плачем великим и стенаньем. И се влезоша послании Святополком и Давидом, Сновид Изечевичь конюх Святополчь, и Дмитр конюх Давыдов, и почаща простирати ковер, и простерпа яста Василка и хотяща и поверци; и боряшется с нима крепко, и не можаща его поврещи, и се влезше друзии повергоша и, и связаша и, и снемше доску с печи, и възложиша на перси его; и седоста обополы Сновид Изечевичь и Дмитр, и не можаща удержати, и приступиста ина два, и сняста другую дску с печи, и седоста, и удавиша и рамяно, яко персем троскотати. И приступи Торчин, именовем Беренди, овчюх Святополчь, держа ножь и хотя ударити в око, и грешися ока и перереза ему лице, и есть рана та Василке и ныне; и посем удари и в око, и изя зеницю, и посем в другое око, и изя другую зеницю и том часе бысть яко и мертв. И вземше и на ковре, взлодиша на кола яко мертва, повезоша и Володимерю. И бысть везому ему, стаща с ним перешедше мост Звиженський, на торговици, и svolокоша с него сорочку кроваву суцю, и дваша попадьи опрати; попадья же оправши взложи на нь, онем обедующим, и плакатися нача попадья, яко мертву суцю оному. И очюти плачь и рече: "где се есм?". Они же рекоша ему: "в Звиждени го-

роде". И вприси воды, они же даша ему, и испи воды, и вступи в онь душа, и упомянуся, и пощюпа сорочки и рече: "чему есте сняли с мене? Да бых в той сорочке кроваве смерть приял и стал пред Богом". Онем же обедавшим, поидоша с ним вскоре на колех, а по грудну пути; бе бо тогда месяц груден, рекше ноябрь; и придоша с ним Володимерю в 6 день. Приде же и Давыд с ним, акы некак улов уловив; и посадиша и в дворе Вакееве, и приставиша 30 мужь стеречи и 2 отрока княжа, Улан и Колчко. Володимер же слышав, яко ят бысть Василко и слеплен, ужасеся, и всплакав и рече: "сего не бывало есть в Русьской земли, ни при дедех наших, ни при отцих наших, сякого зла". И ту абье посла к Давыду и к Олгови Святославичема, глаголя: "пойдета к Городцю, да поправим сего зла, еже ся створи се в Русьской земли и в нас в братьи, оже вверже в ны ножь; да аще сего не правим, то большее зло встанеть в нас, и начнет брат брата закалати, и погыбнеть земля Руская, и врази наши Половци пришедше возмутъ землю Русьскую". Се слышав Давыд и Олег, печална быста велми и плакастася рекуца: "яко сего не бы было в роде нашем". И ту абье собравъша вое, придоста к Золдимеру. Володимеру же с вои стояшю в бору, Володимер же, и Давыд, и Олег послаша муже свои, глаголаша муже свои, глаголюще к Святополку: "что се зло створил еси в Русьстей земли, и ввергл еси ножь в ны? Чему еси слепил брат свой? Аще ти бы вина кая была на нь, обличил бы и пред на-

ми, и упрев бы и створил ему; а ноне яви вину его, оже ему се створил еси". И рече Святополк: яко "поведа ми Давыд Игоревичь, яко Василко брата ти убил Ярополка, и тебе хочеть убити и зятти волость твою, Туров, и Пинеск, и Берестие, и Погорину, а заходил роте с Володимером, яко сести Володимеру Кыеве, в Василкови Володимери; а неволя ми свое головы блюсти, и не яз его слепил, но Давыд, и вел и к себе". И реша мужи Володимери, и Давыдови, и Олгови: "извета о сем не имей, яко Давыд есть слепил и: не в Давыдове городе ят, ни слеплен, но в твоём граде ят и слеплен". И се им глаголющим разидошася разно. Наутрия же хотящим чрез Днепр на Святополка, Святополк же хоте побегнути из Кыева; не даша ему Кыеане, но послаша Всеволожю и митрополита Николу к Володимеру, глаголюще: "молимся, княже, тебе и братома твоима, не мозете погубити Русьские земли; аще бо възмете рать межю собою, погании имуть радоватися и возмутъ землю нашу, иже беша стяжали отци ваши и деди ваши, трудом великим и храбрѣством побарающе по Русьской земли, ины земли приискываху; а вы хочете погубити землю Оусьскую". Всеволожая же и митрополит придоста к Володимеру, и молиастася ему, и поведаста молбу Кыеане, яко творити мир, и блюсти земле Русьские, и брань имети с погаными. Се слышав Володимер, расплакавъся и рече: "по истине отци наши и деди наши сблюли землю Русьскую, а мы хочем погубити". И преклонися на молбу княгинину, чтяшетъ ю акы матеръ, отца ради своего, бе бо

любим отцю своему повелику, и в животе и по смерти не ослушаяся его ни в чем же; темже и послуша ая, акы матере, и митрополита, такоже чтяше сан святительский, не преслуша молбы его. Володимер бо так бяше любезнив: любовь имея к митрополитом и к епископом и к игуменом, паче же и чернечьский чин любя, и черници любя, приходящая к нему напиташе и нанаяше, акы мати дети своя; аще кого видяше ли шумна, ли в коем заворе, не осудяше, но вся любовь прекладаше.

『スヴィヤトボルク, ヴオロジメル, イゴリの子ダヴィド, 及びロスチスラフの子ヴァシルコ, 及びスヴィヤトスラフの子ダヴィド, 及び彼の弟オレグが来たり, 和平を創るためにリュビヤチに集つた. しかして互いに語つて言つた. 『何故に(我々は)自からおのれに紛争を起しルシの国を破滅させているのか? 一方ボロヴェツたちは我等の国に不和をよびおこし, 我々の間に戦争があることを喜こんでいる. さてこそ, 今後は一つの心に(我々は)まとまり, ルシの国を守ろうではないか. 各自がおのれの領地を保全しようではないか. スヴィヤトボルクはイジャスラフのキエフを, ヴオロジメルはフセヴオロドの(領地)を, ダヴィド及びオレグ及びヤロスラフはスヴィヤトスラフの(領地)を(守ろう). フセヴオロドから町々を分け与えられたもの等はそれぞれ, ダヴィドがヴオロジメルを, ロスチスラフの子等はヴオロダリのベレムインリを, ヴアシリコはチエレボヴリを, (各々保全しようではないか).』と. しかして, このことを約束して十字架に口づけした, 『もしも誰かが誰かに今後立ち向うならば, その者に対して(我々)全員及び聖なる十字架は立ち向うであらう』: 全員は言つた. 『その者に対して聖なる十字架は及びルシの全国が立ち向うであらう』と. しかして互いに口づけ

して帰途についた。しかしてスヴイヤトボルクはダヴィドと共に
キエフに来たり；しかして総ての人々は喜こんだ。然しながら、
たゞ悪魔だけはこの友愛を悲しんだ。しかして悪魔がある家臣た
ちの心にしのび込み、イゴリの子ダヴィドに向つて言いはじめた。
次の様に言つたのである。『ヴオロジメルがスヴイヤトボルクに
対し、しかして汝に対しても、ヴァシリコと共に立ち向うように
申し合わせた』と。ところで、ダヴィドは偽りの言葉を信じ、ヴァ
シリコに向つて非難して言つた。『汝の弟ヤロボルクを誰が殺し
たのか？しかも今、我に対し、しかして汝に対して企みをなし、
ヴオロジメルと申し合わせをしたのは誰か？おのれの首のこ
とを配慮せよ』と。ところでスヴイヤトボルクは頭が混乱して言つ
た。『これは本当に真実であろうか。それとも偽りであろうか』
と。（彼は）分らなかつた。しかして、スヴイヤトボルクはダヴ
イドに言つた。『もしも（汝が）真実を言つているのなら、神が
汝の証人となり給うであろう。しかしてもしも（汝が）羨望を以
て（これを）言つているのならば、神は相手がたの味方になり給
うであろう』と。ところで、スヴイヤトボルクはおのれの兄弟を
あわれみしかしておのれについて（考え）、果してこれが真実であ
らうかと思案しはじめた。しかして（彼は）ダヴィドを信じた。
ダヴィドがスヴイヤトボルクをたぶらかしたのである。しかして
（二人は）ヴァシリコについて合議しはじめた。ところがヴァシ
リコはこれを知らず、しかしてヴオロジメルも（知らなかつた）。
しかしてダヴィドは語りはじめた。『もしも（我々二人が）ヴァ
シリコを捕えないならば、汝もキエフに君臨できぬであろうし、我
もまたヴオロジメルに（君臨できぬであろう』と。しかしてスヴ
イヤトボルクは彼の言うことをきいた。しかして、ヴァシリコは
十一月四日に来たり、しかしてヴィドピチに移り、聖ミハイルを
礼拝するために修道院に向つた。しかして、其処で夕食をとり、
おのれの輜重隊をルジツア（河）のほとりにとどめた。ところで夕

方になつた時、おのれの輜重隊の所へ歸つた。しかして、ところで、翌朝になつた時、スヴィヤトボルクは使者を遣わして来たり言つた。『我が名付日を前にして去るな』と。ところでヴァシリコは、謝絶して言つた。『待つことはできない。本当に我が家郷に戦いがあるやも知れぬ故に』と。しかしてダヴィドは彼に使者を派遣し来つた。『行くな、兄弟よ。長兄の言うことを聞くな』と。しかしてヴァシリコは聞き従うことを欲しなかつた。しかしてダヴィドはスヴィヤトボルクに言つた。『どうだ、(彼は) 汝のことを考えず、汝の手には従わないではないか。もしも彼がおのれの領地に去れば、彼が汝の町々トウーロフ及びビニスク、及び汝の他の町々を占領せぬかどうか、(汝は) 今に分るであろう。我(の言うこと)を思いおこすがよい。然らずして、キエフ人たちを呼びよせ、しかして(彼を)とらえ、しかして我に(彼を)渡せ』と。しかしてスヴィヤトボルクは彼(の言うこと)を聞いた。しかして、ヴァシリコに使者をたてゝ言つた。『もし(汝が) 我が名付日まで残ることを欲せぬのであれば、今直ちに来たれ。汝に口づけし、しかして、ダヴィドをも加えて皆で席を共にしよう』と。そこでヴァシリコは、ダヴィドが彼に対してたくらんでいたあざむきを知らずに来たることを約束した。ところでヴァシリコは馬に乗つて出かけた。しかして彼の少年従士が彼を迎え、しかして彼に告げて言つた。『行くな。公よ。(人々は) 汝を捕えようと欲している』と。しかして、その言うことを(彼は) 聞かなかつた。考えた。『どうして我を捕えようと(人々が) 欲しているのか? つい近頃、我に十字架を口づけして(人々は) 言つたではないか。もしも誰かが誰かに対して立つならば、その者に対して十字架及び我々全員は立つであろうと』と。しかして、このことを考えて、十字を切り言つた。『主の意志のあるように』と。しかして、少数の親兵団をひきいて公の屋敷に来たつた。しかしてスヴィヤトボルクは彼を迎えに出て、座敷へ(彼等は) 行

つた。しかしてダヴィドが来たり、(彼等は)坐についた。しかしてスヴィヤトボルクは言いはじめた。『祭日まで残れ』と。しかしてヴアシリコは言つた。『残ることはできない。兄弟よ。(我は)既に輜重隊に先発するやうに命じてしまつた』と。ところで、ダヴィドは、あたかも、おしの如く坐つていた。しかして、スヴィヤトボルクが言つた。『然らば食事をなせ。兄弟よ!』と。しかして、ヴアシリコは食事をする約束をした。しかしてスヴィヤトボルクは言つた。『汝等(二人)は此処に坐しておれ、ところで我が行つて指図をなそう』と。しかして、(彼は)外へ出た。一方、ダヴィドはヴアシリコと(二人で)共に坐していた。しかしてヴアシリコはダヴィドに向つて言いはじめた。ところがダヴィドには声もなく聞く耳もなかつた。というのは、恐れていたからであり、心に偽りをもつていたからである。しかして、ダヴィドはしばらく坐してから言つた。『兄弟はどこにいるのか?』と。そこで彼等は彼に言つた。『二階広間に立つている』と。しかしてダヴィドは立ちあがつて言つた。『我は彼を呼びに行く。ところで汝、兄弟よ、坐しておれ』と。しかして(彼は)立ち上つて外へ行つた。しかしてダヴィドが出たとき、(人々は)ヴアシリコを閉じこめた。十一月五日のことである。(人々は)彼を二つのカセでくくりつけ、夜にかけて彼に見張り番をつけた。翌朝になつて、スヴィヤトボルクは貴族及びキエフ人たちを召集し、しかして彼等に、ダヴィドが自分に伝えたそのことを伝えた。即ち『汝の弟を(ヴアシリコが)殺し、一方、汝に対してヴオロジメルと申し合わせ、しかして汝を殺し、汝の町々を取らうと欲しているのだ』と(いう言葉を)。しかして貴族及び人々は言つた。『汝は、公よ、おのれの首(生命)を守らなければならぬ。たしかに、もしダヴィドが真実を物語つたのならば、ヴアシリコに罰を受けさせよ。もしも、ダヴィドが虚言を言つたのならば、(彼は)神からむくいを受けさせよ。神の前に責めを負わしめよ』

と。しかして、修道院長たちは（このことを）知つて、ヴァシリコについてスヴァヤトボルクに懇願しはじめた。しかして彼等（修道院長たち）にスヴァヤトボルクが言つた。「ダヴィドから（出たこと）である」と。ところで、ダヴィドは（これを）知つて（ヴァシリコを）盲目にするよう教えそゝのかし始めた。「もしも（汝が）このことを為さず彼を放免するならば、汝は（公として）君臨することは出来ないであろうし、また我とてもである」と。ところで、スヴァヤトボルクは彼を放免することを欲していたが、ダヴィドは彼を危険視して（それを）欲しなかつた。しかして、その夜、彼を（人々は）ベルゴロドに送つた。その町は小さく、キエフのそばの十露里遠くにあつた。しかして（人々は）彼をいましめられたまゝ荷馬車で運び来たり、彼を荷馬車からおろした。しかして、（人々は）彼を小さな座敷へ導いた。しかして彼が坐した時、ヴァシリコは刀をといでいるトルク人を見つけた。しかして、（人々が）自分を盲目にしようと欲していることを知つて、神に向つて大いなる泣き声とうめき声を以てさげんだ。しかして其処へスヴァヤトボルクとダヴィドによつて遣わされた者たち、即ちスヴァヤトボルクの馬丁スノヴイド・イジェチエヴィチ、ダヴィドの馬丁ジミトルが入り来たり、敷物を敷きひろげはじめた。しかして、敷きひろげ終つてヴァシリコを捕え、彼を倒そうとした。しかして、（ヴァシリコは）彼等（二人）と頑強にたたかつたので、（二人は）彼を倒すことができなかつた。しかしてその時、他の者たちが入り来たり、彼を倒した。しかして彼をしばりあげ、炉から板をはづし取り、彼の胸の上にのせた。しかして両方からスノヴイド・イジェチエヴィチ及びジミトリが（その上に）乗つた。しかして、（二人は）（彼を）押えつけることができず、しかして別の二人（の男）が近づいて来て、炉からも一枚の板をはづし取り、しかして（その二人も）乗つた。しかして（人々は）彼を強く押えつけた。胸が裂けるほどであつ

た。しかして、スヴィヤトボルクの羊飼いで名をベレンジというトルク人が刀を手にして近づき来たり、眼を突こうとした。しかして的をはづして失敗し、彼の顔を切つた。しかしてその傷は今に至るまでもヴァシリコ（の顔）にある。しかして、この後、彼の眼を突き、眼球を引きぬいた。しかしてこの後、もう一方の眼をも。しかしてその眼球をも。この時、（ヴァシリコは）あたかも死んだ如くでさえあつた。しかして（人々は）彼を敷物の上のせてもちあげ、死人の如くに荷馬車にのせ、彼をヴォロジメルに運びだした。しかして彼が運ばれた時、人々はズヴィジエニエ橋を共に渡り、市場において（彼と共に）とどまつた。しかして、人々は血だらけであつた下着を彼から脱がせた。しかして僧の妻に洗わせるまゝ渡した。ところで僧の妻は洗つて彼にかけ——彼等が食事をしていた時であつたが——しかして僧の妻は死んでいる者になすが如く泣きはじめた。（ヴァシリコは）泣き声を感じ取つて言つた。『これはどこに居るといふことなのか？』と。彼等は彼に言つた。『ズヴィジエニエの町の中に』と。しかして（ヴァシリコは）水を乞うた。彼等は彼に与えた。しかして（彼は）水を飲みほした。しかして正氣づいて気がつき、しかして、下着を手さぐり、言つた。『何故に我から（汝等は）脱がせたのか？（我は）その血だらけの下着をつけたまゝ死を受けて、神の前に立つべきであつたのに』と。ところで彼等は食事を終つた時、彼と共にまもなく荷馬車で出かけた。しかし堅い道に沿つてであつた。というのはその時は所謂十一月、グルデン月であつたからである。しかして（人々は）彼と共に六日にヴォロジメルに到着した。ところでダヴィドもまた、あたかも何か獲物をとらえたかの如くに到着した。しかして（人々は）彼をヴァケイの屋敷に置きすえた。しかして三十人の家臣及び公の下級従士ウラン及びコルチコを見張りにつけた。ところでヴォロジメルはヴァシリコが捕えられ盲目にされたことを聞いて、おどろき、しかして泣き出し

て言つた。『こんなことはルシの国には嘗つて無かつたことである。我々の祖父たちの時代にも、我々の父たちの時代にもかかる悪は（なかつた）』と。しかしてその場ですぐにスヴィヤトスラフの（二人の）子、ダヴィド及びオレグに使者をたてゝ言つた。『ゴロジエツに行け。ルシの国及び我々兄弟の間で行われたこの悪を正そうではないか。我等の中へ刀が突き刺されたのである。しかして、もしもこれを（我々が）正さなければ、より大きな悪が我々の中に起るであろう。兄弟が兄弟を殺しはじめ、しかしてルシの国は滅ぶであろう。しかして我等の敵ポロウエツが来たりルシの国を奪い取るであろう』と。これをダヴィドとオレグは聞いて、非常に悲しみ、しかして泣いて言つた。『これは我々一族において嘗つてなかつたことである』と。しかして、その場ですぐに軍勢を集め、（二人は）ヴオロジメルのもとに到着したところで、ヴオロジメルが軍勢と共に松柏林の中にとゞまつていた時、ヴオロジメルは、しかして、ダヴィドも、オレグも、おのれの家臣を遣わしてスヴィヤトボルクに言つた。『何故に（汝は）かかる悪をルシの国において行い、しかして我々に刀を突き刺したのか？ 何のためにおのれの兄弟を盲目にしたのか？ もしも、何等かの罪が彼にあつたのだとしたら、彼を我々の前において摘発し、しかして、彼を非難し、彼に（それを）行ふべきであつた。かくなつた今は、汝が彼にかゝることをなした（原因である）彼の罪を明らかにせよ』と。しかして、スヴィヤトボルクは言つた。『ヴァシリコが汝の弟ヤロボルクを殺したこと、しかして汝を殺し汝の領地のトゥロフ、及びピネスク、及びベレスケエ及びポゴリナを占領せんと欲していること、一方、ヴオロジメルと誓いをたてゝヴオロジメルはキエフに坐し、ヴァシリコはヴオロジメルに坐するよう約したことを、イゴリの子ダヴィドが我に告げた。我はおのれの首（生命）を守らなければならなかつたのである。なお、彼を盲目にしたのは我ではなくて、ダヴィド

であつた。(彼が)(ヴァシリコを)おのれのもとに連れて来たのである』と。しかしてヴオロジメル、及びダヴィド及びオレグの家臣たちは言つた。『ダヴィドが彼を盲目にしたのだと言つて、それについての辯解をするな。ダヴィドの町で(彼が)とらえられたのでもなく、盲目にされたのでもない。そうではなくて、汝の町においてとらえられ盲目にされたのだ』と。彼等はこゝろ言つて、それぞれ散り去つた。ところで、その翌朝(彼等が)スヴィヤトボルクに向つてドニエプルを越えて(攻めよう)と欲した時、スヴィヤトボルクはキエフから逃げようと欲した。キエフの人々は彼にそうさせなかつた。反対にヴオロジメルのもとにフセヴオロド夫人と府主教ニコラを派遣して言つた。『公よ、汝及び汝の(二人の)兄弟に(我々は)懇願する。ルシの国を滅ぼすことなかれ。というのは、もしも(汝等が)お互いに戦いをおこなうならば、異教徒たちは喜ぶであらう。しかして、汝等の父たち及び汝等の祖父たちが大いなる労苦及び勇気によつて獲得した我々の国を(異教徒たちは)奪い取るであらう。(汝等の父祖たちは)ルシの国のために防衛し、他の国を求め取つていたのではないか。しかるに汝等はルシの国を滅ぼそうとしている』と。フセヴオロド夫人は、また府主教は、ヴオロジメルのもとに到着し、(二人で)彼に懇願した。しかして(二人は)キエフの人々の願いをつたえた。和平を講じ、しかしてルシの国を守り且つ異教徒と戦えと。ヴオロジメルはこれを聞いて泣き出して言つた。『本当に我等の父たち及び我々の祖父たちはルシの国を守つたのに、我々は滅ぼそうとしている』と。しかして公夫人の願いに耳を傾け、おのれの父のために、彼女を母の如くあがめた。というのは(彼は)おのれの父に大いに愛され、(その)生存中にもまた死後にも、如何なることにおいても彼(父)の言うことに背かなかつたからである。それと同様にまた彼女の言うことにも、あたかも母の如くに従い、また府主教をも、その牧者としての位をあが

め、彼の願いをないがしろにはしなかつた。というのは、ヴオロジメルは極めて愛情深かかつたからである。府主教たちに対して、及び主教たちに対し、また修道僧たちに対して愛情をもち、なおまた僧の位を愛し、僧たちを愛し、彼のもとへ来たる僧たちには母がおのれの子たちに（なす）如く飲食をさせていた。もしも彼が誰かを騒々しいと見たり、或は誰かをいたづらなるものと見ても、（彼は）非難せず、あらゆるものを愛に置きかえていた』

この直後に、『我々は然しおのれの（話）に戻ろう』という言葉が続く。そして、話の筋はやはり、その後の、ダヴィド、ヴァシリコの話へ続くのである。ところが、『おのれの』〈свое〉語に戻ろうと断りながら、再び年代記者の筆は、多くの口上や対話を織り込み始め、そのことによつて、記述文もまた同時に熱を帯びて来る。その織り込まれた口上や対話は、実は、年代記者の言ひ『おのれの』〈свое〉言葉ではなくて、『おのれの』〈свое〉ではない別の物語手の口からの——おそらくは非常に叙事詩的な物語に織り込まれたそのまゝの口上や対話そのものであつたように思われる。上に引用した6605年の項の文章は、この項の前部三分の一にすぎないが、そのあたりで、話の調子を単に更める必要上、或は、これ以後の物語により真実味をもたせるために、『おのれの物語に戻ろう』と年代記者は断りを入れたのであろう。そして、それでも、やはり、続けるべき物語は、決して、『おのれの』の物語ではなかつた。前部三分の一とは別の人間層——おそらくは、より教会に近い人たちの層——に伝えられ、熱つぽく物語られていた説話であつたとも考えられる。後三分の二が非常に豊かな物語性に満ちながら、盲目になつたヴァシリコのザンゲを含む自己反省などに高い宗教性がみとめられるのも、その理由の一つであらう。『過ぎし年月の物語』の記者が僧であつた以上、それはまた同時に、やはり『おのれの』〈свое〉物語だと言ひ得たかも知れない。あくまでも、『おのれの』とは作者だけの

ものを指したのではなくて、彼を含む層全体にとつての『おのれの物語』であつたぶろう。この6605年の項に語られ記録されたヴァンリコを中心とする人物たちについては、だから、非常に多くの物語が多くの層に伝えられていたもののように思われる。そして、上に以用した前三分の一の部分においては、例えば、ダヴィドの人間像をその行動描写において見事に示す手腕が生まれ、後の三分の二においては、宗教的内面の心理描写の手腕がまた別の層で創られたと思われる。年代記の『過ぎし年月の物語』全体を通じてこの年代項に見られるほどの各方面からの充実した多彩な物語の集録或は統一がみられた個所は他には多くなかつた。おそらくはヤンが語つたという物語はこの辺にもあつたことである。引用しなかつた後三分の二の宗教的内面への掘り下げの物語手法については、いづれ後にふれることがある。それにしても、この後部三分の二には『過ぎし年月の物語』の生成要素を解く重大な一つの鍵が含まれている。年代記者が『我』〈аз〉という言葉で記述文の中に顔を出すことは、『過ぎし年月の物語』全体を通じて、ヤンという人物から多くの物語を聞いて、それを年代記に書き込んだという註記以外には、ほとんどなかつたことである。まして、『過ぎし年月の物語』の話の重要な主役級の人物として自からを登場人物の一員に組み込むことは絶体になかつた。それにもかゝらず、この6605年の項の後半には、その重大な例外が大きく認められるのである。其処だけには、堂々と一人称を用いて、事件の当事者の一員として顔を出している。だが、果して、それが当の年代記者の顔であつたかどうかは問題である。『過ぎし年月の物語』がその冒頭に明記したように『ネストル』〈Нестор〉の編集になるものであつたにしても、或は6618年の項の最終に書かれたように、シエリヴエストル〈Селивестр〉が書いたものにしても、其処に大きく顔を出す『我』〈аз〉という人物が、ネストルやシエリヴエストルその人であつたとは思われな

い。使者をつとめ，口上を述べる人物の典型的な代表者が修道院の高級僧侶であつたと果して考えられるだろうか。年代記そのものに書きつけられた使者派遣の物語全体を通じて見た時，此の項の使者だけを僧がつとめたとは素直には考えられない。むしろ，此処で使者をつとめ，自から『我』〈аз〉という一人称で登場人物の一員に自からを組み込みつゝ，物語を展開したのは，非常に言葉の達者な人物で，使者をもつとめ，事件の当時者にもなり，且つまた，自己の体験を物語にして，口でそれを人々に語り聞かすことのできたほどの人間ではなかつただろうか。一人称で語られるその物語だけでも，一つの独立した物語であつたと思われる。言葉の上からは，その総てが書き言葉ではなくて，ほとんどが口頭の物語言葉であつたと思われる。その注目すべき一節を次に引用しよう。

Василкевич же сущю Володимери, на презереченем месте, и яко приближися пост великий, и мнесту сущю Володимери, в едину ночь присла по мя князь Давыд. И приходх к нему, и седяку около его дружина, и посадив мя и рече ми: "се молвил Василко си ночи к Уланови и Колчи, рекл тако: се слышу, оже идеть Володимер и Святополк на Давыда; да же бы мене Давыд послушал, да бых послав мужь свой к Володимеру воротиться, веде бо ся с ним что молвив, и не поидеть, да се, Василю, шлю тя, иди к Вавилкови, тезу своему, с сима отрокома, и молви ему тако: оже хоцещи послати мужь свой, и воротится Володимер, то вдам ти которой ти город люб, либо Всеволожь, либо Шеполь, либо Перемиль". Аз же идох к Василкови, и поведах ему вся речи Давыдовы. Он же

рече: "сего есм не молвил; но надеюся на Бог, пошлю, да быша не прольяхи мене ради крови; но сему ми дивно, даеть ми город свой, а мой Терембовль, моя власть". Пождавши и ныне якоже и бысть; вскоре бо прия власть свою. Мне же рече: "иди к Давыдови и рци ему: пришли ми Кульмея, то пошлю к Володимеру". И не послуша его Давыд, и посла мя пакы река: "нету Кулмея". И рече ми Василко: "поседи мало", и повеле слуге своему ити вон, и седе со мною, и нача ми глаголати.....

『ヴァシルコがヴォロジメルの前述した場所にいたとき、項度また大斎戒が近づいた。しかして我もまたヴォロジメルにいた時であつた。しかして或る夜、ダヴィド公が我を迎えに使者を遣し來たつた。しかして(我は)彼のところへ來たつた。(彼の)傍には彼の親兵團が坐つていた。(彼は)我を坐らせて我に言つた。

『今夜、ヴァシルコがウランとコンチにこんなことを言つたのである。それによれば、今、ヴォロジメルとズワイヤトボルクがダヴィドに向つて進攻するところだと聞く。今、もしダヴィドが我が言うことを聞くならば、我はヴォロジメルに対して我が家臣をつかわしたいものだ。(そうすれば彼は)引き返すであらう。我は彼に何を言うべきかを知つてゐるから、(彼は)進んで來れないであらう』と。そこで、さて、ヴァシリよ。我は汝を派遣しよう。この下級従士と共に、汝の同名者なるヴァシルコのもとへ行け。しかして彼にかく言え。『もしも(汝が)おのれの家臣を遣わしてヴォロジメルを引き返えさせようと欲するならば、フセヴォロジにせよ、シェボリにせよ、ベレミリにせよ、汝に氣に入る任意の町を汝に(我は)与えるであらう』と。そこで我はヴァシルコのもとへ行つた。しかして、ダヴィドの總ての

言葉を彼に伝えた。ところで彼は言つた、『我はかかることは言
わなかつた。然し神に期待をかける。我の故に血を（人々が）流
さぬように使者を立てよう。然し、（彼が）我におのれの町を与
えようとしていることは我には不思議である。ところで、我がチ
エレボグリは我が領地である』と。しばらくして、今、事はその
通りになつた。というのは、間もなく（彼は）おのれの領地を受
けどつたのである。ところで（彼は）我に言つた、『ダヴィドの
もとに行け。しかして彼に言え。ガ我がもとへクリメイを遣わせ
。と。そうすれば、（彼を）ウオロジメルのもとに遣わすであろ
う』と。しかしてダヴィドは彼の言うことを聞かなかつた。しか
して、我を再び遣わして言つた、『クリメイは居らぬ』と。しか
してヴァシリコは我に言つた、『しばらく坐せ』と。しかしてお
のれの従者に外へ出るように命じた。しかして（彼は）我と共に
坐り、我に語りはじめた』

これだけの記事に登場する『我』がそれ以前の多くの記事にお
ける軍事一点張りの使者とは多少その目的を異にしていることは
否定できない。然し、以前よりの使者の立て方から考えて、この
場合だけ特に、宗教人である年代記者その人であつたなどと言う
単純な結論は導き出せないであらう。多くの物語や古事を知り、
誰からも尊敬される年令に達し、公たち最高権力者の間を使者と
して往復し、その口上を相方或は三方に間違いなく伝え、然も、
そのいづれにも信頼と愛情と、いくばくかの尊敬の念を抱かせ得
た人物とは果して誰であつたのか。人情の機微を充分知つた上で、
それが出来た人とは、そして、おのれの使者勤めの事件を、この
様に集約的にまとめて語り得た人がヤンであつたとは、にわか
に速断はできないであらうが、彼が90才で死んだと記録される66
14年から見て、この年はそれよりも九年前の話なのである。ヤ
ンであつたとすれば81才の元老であつたということになる。勿
論、ヤンでなかつてもよいであらう。少くとも、公たちが使者に

立てたほどの人物であり、相手方にも信頼され、口上の技術を身につけ、然もその口上の表現技術を一つの土台として自から一人称で立派に事件を語り得るほどの人物であつたにはちがいない。然も、その人物は年代記者に物語つて聞かせることができ、その物語を書きつける教会内の年代記者が宗教的にも、人格的にも、物語そのものの高度な技術にも、満腹の信頼と敬意をもつていた人物であつたことであろう。宗教人が宗教的に尊敬し得るほどの人物とは、けだし、戦陣をかけ、人生の荒波を越え、政治の峠をこえ、充分、人の立場に立つて感じ考え得るほどの文化的大人物であつたにちがいない。武人の最高権力者である公たちの間を往復し得たと同時に、宗教人にも一目置かれたほどの人物であつたが故に、盲目にされたヴァンリコが、彼を相手にさんげにも似た告白を長々と述べ得たのではなかつただろうか。もしも、『我』〈аз〉と一人称で顔を出したこの人物が、単なる僧としての年代記者であつたとしたら、ヴァンリコは、下に引用するような告白などする筈がない、その告白は、人払いをして、静かに行われる宗教的内容のさんげとは全く異質なものであることがそれを証明しているように思われる。上に引用した一人称の物語の最終個所に、『我に語りはじめた』と記された、その内容をなす総ての言葉が次の告白である。

се слышу, оже мя хочеть дати Ляхом Давыд; то се мало ся насытил крове моея, а се хочеть боле насытитися, оже мя вдасть им, аз бо Ляхом много зла творих, и хотел есмь створити и мстити Русьской земли; и аще мя вдасть Ляхом, не боюся смерти; но се поведаю ти: по истине яко на мя Бог наведе за мое възвышенье, яко приде ми весть, яко идуть ко мне Берендичи, и Печенези, и Торци, и рекох в уме своем: оже ми будутъ

Берендичи и Печенези и Торци, реку брату своему Володимереви и Давыдови: дайте ми дружину свою молодшую, а сама пийта и веселитася; и помыслих: на землю Лядскую наступлю на зиму, и на лето и возму землю Лядскую, и мышу Русьскую землю; и посем хотел есм перейти Болгары Дунайские, и посадити я у себе; и посем хотях проситися у Святополка и у Володимера ити на Половци, да любо налезу себе славу, а любо голову свою сложю за Руськую землю, ино помышленье в сердце моем не было ни на Святополка, ни на Давыда, и се кленуся Богом и его пришествием, яко не помыслил есм зла братьи своей ни в чем же, но за мое възнесенье низложи мя Бог и смири.

.....

『リヤヒ人たちに我をダヴイドが引き渡そうとしていることを（我は）聞いている。そうだとしたら、これは、我が血で以て（彼が）満足し足らなかつたことであり、（彼が）我を彼等に渡そうというのは一層充分の満足を求めているということだ。我は多くの悪をリヤヒ人たちに爲した。しかして、爲してかつまたルシの國に復しゅうしようと思つていたのである。しかして、もし（彼が）我をリヤヒ人たちに渡すなら、（我は）死を恐れはしない。汝に、見よ、（我は）本当のことを伝えよう。本当に神が我が思いあがりのために我が身に（このことを）みちびき給うたのである。ベレンジチ人及びベチエネギ人及びトルツイ人が我がもとに來たりつゝあるという報告が我がもとにとゞいた。しかして（我は）我が心の中で言うた。ベレンジチ人及びベチエネギ人及びトルツイ人が我がもとに至るならば、おのれの兄弟ヴオロダリとダヴイドに言おう。おのれの下級親兵団を我に与えよ、しかして汝

ら（二人は）自から（酒を）のみ，たのしんでいるがよいと．しかして我は考えはじめた．冬に向つてリヤヒの国を攻め，夏に向つてリヤヒの国を占領し，ルシの国に復しゆうせんと．しかして，（我は）その後ドナイのボルガレを領有し，彼等をおのれのもとに従い住ませよと思つていた．しかして，その後，ポロヴエツに進攻することの許可をスヴィヤトボルク及びヴオロジメルにえよと（我は）欲していた．おのれのために栄光を獲るか，また或はおのれの首をルシの国のために横たえよと．スヴィヤトボルクに対しても，ダヴィドに対しても，それ以外の別のたくらみが我が心の中にあつたわけではない．しかして，見よ，神及び神の来迎をかけて（我は）誓おう．いかなることにおいても，（我は）おのれの兄弟にたくらみなどもつてはいなかつたと．然らずして，我が思いあがりのために神が我をおとしめ，温順ならしめ給うたのである』

この告白を不遜な以前の態度や思いあがりや，そのための企畫が押しつぶされた後の，僧に対するさんげだと読み取れるだろうか．むしろ，野心に燃え，絶対に自信をもつていた作戦を誤解され，遂には眼をつぶされて盲目になつた失意の将が，兄弟や父や側近たちよりも，むしろより深く信頼し得る嘗つての老名将に切々と訴えた言葉なのではなかつたか．その切々なる訴えを聞き取つてやる『我』〈a's〉とは果して一体，誰なのであつたのか．

軍事上の名作戦を樹てたこともあり，戦場に血生臭い生活を送つたこともあり，且つまた，敗戦の失意をもかみしめたこともあり，勝つべき自信のあつた戦いの企畫をつぶされて唇をかんだこともあり，そして白髪の上將として生き残り，最高権力者たちの群から身を引いて，今は，それらの権力者たちからも絶大な信頼と尊敬をよせられ，過去の栄光の権化であると同時に，本当に心の底を打ちあけてしみじみと語り合える相手——おのれらの精神的支柱であると考えられていた人物，その人物に使者の役を勤

めてもらえば、最も困難な仲間割れの問題も氷解しそうだと期待された人物——それは決して備ではなかつただろう。ヤン或はそれに近い人物であつたにちがいない。

使者の口上が、古代ロシア語の表現力の一つの大きなさゝえをなしていた事情は、この一事をもつて、その証拠のしめくくりにするのがよいであろう。キリスト教と共に文字がロシアに持ち込まれ、文字を借りての書き言葉へ発展する以前に、既に、古代ロシア語の表現力は、文字をもたない口頭だけの世界で、以上の様な高度な水準を示していた。

然し、口頭の世界だけにおける古代ロシア語の姿を、口上の言葉にのみ限つて、それ以外のものを問題にしないで通りすぎるわけにはゆかないであろう。使者の口上以外に、ロシア古代社会には、口頭言葉が果すべき別の巨大な役割があつた。その一つは、公のおこなう重要会議や、都市住民のおこなう民会や、或は相談などにおける発言であつた。年代記は、それを相当多く書きとめている。年代記々述の言葉の基盤が口頭語の高い表現力にあつたとする以上、それらの発言の言葉は当然此処で検討されておかなければならないであろう。

会議や集会での発言は、一対一の対話でないことは勿論である。語りならば、複数の人々、多くは民会などでは群衆に対して述べられる筈のものであつた。そのためには、聞き手の耳に容易に入るような形のものでなければならなかつた。圧縮され然も強烈な力を持ち、それでいて、理解され易く、説得的であり、自己の心の中の意図やプログラムを明瞭に表現し得る言葉でなければならなかつた。『過ぎし年月の物語』が書きとめている、そのような発言を取りあげて見るとき、それら会議発言の口頭語が単純な形式を持ちつゝ、どれほど古代ロシア語の表現力進展に益していたかが推察されるであろう。それらの発言のうち、親兵団と公との会議で軍事的な議題に関する主要な発言は、先に武勇鼓舞の発言

として取りあげたものと重なることもある。例えば、6452年の頃のうち、次の様な一節はその種のものであつた。

Игорь же созва дружину и нача думати.....

Реша же дружина Игорева: "да сиче глаголеть царь; то что хочем боле того, не бившеся имати злато, и сребро, и паволоки? егда кто весть, кто одолеет, мы ли, оне ли? ли с морем кто светен? Се бо не по земли ходим, но по глубине морьстей; обьча смерть всем". Послуша их Игорь,

.....

『ところでイゴリは.....親兵団を集め、しかして合議しはじめた.....イゴリの親兵団は言つた。『皇帝がかく言つている以上、(我々は)その上なにを欲するのか。戦わずして金と銀と絹とを獲るであらうのに、我等と彼等と、そのいづれが勝つか、いづれが海と味方であるか、誰が知つていよう。地上を(我々は)行くのではなくて、海の深みに沿うて行くのではないか。すべての者に死は共通である』と。イゴリは彼等の言うことを聞いた』。

この発言のうち、特に〈ли〉という小詞の使用、〈то〉 〈но〉等の接属詞、〈се〉などの代名詞の使用、そして、それらの使用を含んだ短い文節の区切りの利用など、明らかに書き言葉ではないことを示すものであつた。疑問形を多くして同意を求め、一人称複数形の動詞を用いて自己の考えの協同性を示そうとした。

〈кто〉の用い方のうち『誰が知つているか』〈кто весть〉、『誰が勝つか』〈кто одолеет〉はともかくとして、『誰が海と味方であるか』〈ли с морем кто светен〉という一句の〈кто〉と〈ли〉との組み合わせに感じられる一見奇異な語順は、却つて、会議における発言そのままのほくどつさを感じさせると共に、実は、『というのは、これは』〈се бо〉という締めくまりの巧みさを予想してのことだと思われる。平原における

戦いではなくて、海上における戦いの不利を述べ、敗北と死を暗示し、且つまた死をいとうものではないことをも示そうとする。相手が既に質物を示して和を求めている以上、あえて勝利のおぼつかない戦を開くにあたらなとする主張である。ほくとつな個所はあつても、既に意のあるところは充分表出されたのである。然もその理論の展開はちよ突的なイゴリを納得させるほどのものであつた。公が武勇を鼓舞するために親兵団に語る言葉や、或は反対に親兵団員や近側者が公の心の方向に同調して激励する言葉や、或は相手方に既にその目的が充分予想できた使者の口上の言葉などとは異つて、この様な会議発言は、行動及び処致の方向が全く予想されない折の会議であればあるほど、主張の焦点の合理性を説く必要があつたであらう。発言者の主張の焦点は、あらかじめ決して聞く側の者たちには予想できなかつた筈である。その様な白紙に近い状態から発言して、説得的である形で主張の焦点を示さなければならなかつた。そのためには、たとえ、ほくとつであつても、冗慢であることは避けなければなるまい。『過ぎし年月の物語』は、多く、主張の焦点だけを短く記述して話を進めてはいるが、注意深く点検すれば、時に、この様なほとんど生のまゝ伝承されたと思われる発言をも記録している。年代記中、最も時代の古いこの会議発言の記述は、だから、非常に古い時代の口頭による古代ロシア語の表現力を示すものとして、充分注意しておくべきであらう。会議における発言であつても、その言わんとする焦点が至つて明瞭である場合がある。予め判明している焦点を確認するよりの目的の会議やその折の発言においては特にそうである。その様な時には、発言の言葉は、使者の口上におけるように理路整然たるものになる。6495年の項でヴォロジメルが貴族と長老たちを召集して、多くの宗教のうちにづれを撰るべきかを問うた折の返答の言葉は、まさにその様なものであつた。

"веси, княже, яко своего никтоже не хулить, но

хвалить; аще хочещи испытати гораздо, то има-
ши у собе мужи: послав испытай кождо их слу-
жбу, и како служить Богу".

「知れ、公よ、おのれのものは、誰とても悪しざまには言わ
ず、ほめるものだ。もしも汝が一層よく試みようと思ふならば、
(汝は)おのれのもとに家臣をもつてゐるではないか。派遣
して試せ。それぞれのもとにおける勤行と、及びいかに神に仕え
てゐるかということ。」

この発言は、理路整然たる形と、意図の焦点の明確さにおいて、
前記の発言とは全くその様相を異にしている。予め判明している
意図の焦点の確認にすぎないような会議での発言は、時にはその
会議を主催する権力者への提灯もちを演ずることさえあろう。正
面きつて堂々と権力者を支援するような会議発言が追従的であら
ばあるほど、その言葉は、ますます公約数的な表現をとるであろ
う。だから、次々にその言葉は、さりげない書き言葉に似て来る
筈である。此処に引用した古代ロシア語の一節は、まさにそのよ
うな典型であつた。言うならば、年代記者の記述文と少しも変る
ところがない。そのことまでも考慮に入れて、年代記者はこれを
記録したものであるのか、それとも、おのれの記述文と同じペー
スで、話の筋をととのえるために、つい書いてしまつたものであ
るか、それとも、その通りに伝承されて来たものを、うのみのま
ま書きつけたものであるか、その点は判然とは分らない。少くと
も、全く対象的な会議発言が上記二つの引用文に見られることは
たしかである。少くとも年代記者は、そのヴァラヤチーの多さ
を充分承知の上で書きとめていたことであらうと思われる。別の
言い方をすれば、既に、古代ロシア語はそれだけの大きな表現の
巾をもち得ていたということになるであらう。

たゞ、これから先は、結果において記述文と選ぶところのない
ような会議発言の言葉はその引用を極力省略して話を進めて行く

ことにしたい。

上に引用した会議発言は貴族や親兵団員の言葉であつたが、次には一般民衆の言葉を注目しよう。特に都市においては、重大問題の決定に必ず『民会』〈вече〉が開かれた。其処における発言は、だから、宮廷の会議における発言よりも、より民衆的日常語に近い言葉であつた筈である。年代記が初めてそれを書きとめたのは6505年の項であつた。古いロシアの民衆の日常語に近い言葉の記録として注目しなければならない。言いかえれば、文字化される以前の古代ロシア語の一般的な表現力をさぐるためにも見のがされてはならないであろう。

ウオロジメルがノツゴロドに出向いた留守中にベチエネギ人たちに包囲されて、町の人々が飢えに襲われた時の民会の記録である。

и бе глад велик, и створиша вече в городе, и реша: "се уже хочем померети от глада, а от князя помочи нету; да лучше ли ны померети? Владимиръ Печенегом, да кого живять, кого ли умертвять; уже помираем от глада". И тако свет створиша.

しかして大いなる飢えがあつた。しかして(人々は)町において民会をひらき、しかして言つた。「見よ、既に我々は飢えのために死のうとしている。ところが公からは援助がない。我々は死んでしまつた方がよいというのか? ベチエネギに降服しようではないか。(彼等は)或る者は生かし、或る者は殺すであろう。(いづれにせよ)(我々は)もはや飢えのために死にかかつてゐるのだ」と。しかしてかくの如く、(人々は)相談をおこなつた。

この一節の各年代記における種々の文章は『古代ロシア研究』才六、七号に記載しておいた。宮廷ではない一般の町中の人たちの典型的な言葉としてこの発言の言葉を注目しよう。此処には、

権力者への追従発言の様相は少しもない。むしろ、公から援助がないことへのうらみさえ見られる。然も、言葉使いの調子をあげ過ぎたための混乱もみとめられない。至つて平静で論理的でさえある。民会において貴族的な言葉使いをすれば、その効果は予期したものとは異つて現れるかも知れない。むしろ、民会は民会らしく都市庶民の言葉による発言が効を奏するであろう。その技術は充分此処で利用されたと思われる。『我は』〈аз〉などと言わずに総てを『我々は』〈мы〉に続く文法形態で述べ立てゝいるし、公から援助がないという多少の不平を含む発言には、最も民衆言葉の利用を大きくして、『無い』〈нет〉を〈нету〉と変えている。前記二つの発言中にみられた『然し』〈но〉という接属詞は完全に姿を消して、此処では民衆的な〈а〉が用いられている。ちなみに、ブイリーナでは一度として〈но〉という接属詞は用いられず、全部〈а〉ばかりであつたことをつけ加えておこう。接属詞がその〈а〉でない場合は、もつと民衆口語的に〈да〉であつた。なるほど古代ロシア語の〈да〉は接属詞としてよりも、命令法や使役法を構成する言葉であることが多かつたが、この一節の〈да〉の二回の使用をそれに近いものとしては理解しない方がよいであろう。むしろ、非常にくだけた古い口語における使いぶりであつたと見るべきである。その様な口語でありながら、既に高い表現技術をもつていたことは、この表言の冒頭と締めくくりの二箇所を見れば充分わかることであろう。敵に降服しよう。敵は降服した我々を殺すかも知れない。殺されるものも生かされるものもあるであろう。然し、もうそれはどうでもよいではないか。『既に我々は飢えのために死んでしまいそうなのである』〈уже хотим померети от глада〉と冒頭でのべ立て、再び締めくくりに、『既に我々は飢えのために死につゝあるところだ』〈уже помираем от глада〉と述べている。要するにどちらにしてもわか

らないのだという発言意向の焦点である。一方は、『死んでしま
う』〈померети〉の未来形，他方は、『死んで行く』〈поми
рати〉の現在形を使い分けているのである。古代ロシア語は現
代ロシア語のような『体』の区別を極めてほのかにしかもつてい
ない。にもかゝらず，此処では，そのほのかなるものを最大限
に拡大して利用しようとしたのである。それを冒頭と締めくくり
に設定し，締めくくりは，聞き手への説得力のための余音を残す
べく不完了体的動詞を，然も，不定法ではなくて一人称複数形で
直接法として使用しているのではないか。また完了体的な〈поме
рети〉の方は，『死んでしまいそうなのである』と冒頭にのべ
ただけにはとどめなかつた。『死んでしまうこと』〈померети〉
の方が良いとでもいうのかと，こちらは完了体的であるが故に二
度も使用している。死の覚悟をかためよと説いて，なお安全の可
能性が少しでも多い降服を主張した言葉として，この表現力は高
く評価されてよいであろう。古代ロシア語の民衆口語における表
現力の高さを知り得る立派な手がかりの一つであると言える。そ
の意味では，この年（6505年）の項の物語は，その全体にわた
つて，宮廷・武人的な物語であるというよりは，より民衆的な物
語であつたように思われる。この物語の源そのものが，上流階級
の伝承ではなくて，民会に群れる人々の側の伝承物であつたよう
に思われる。各種年代記におけるこの項の記述の様相は『古代ロ
シア研究』才六，七号にその全部を直接引用しておいた。さて，
民会での発言が高度な表現力をもちはじめ，萬人の意見を代表し
得るような内容を盛り，然も，集約されて簡潔な形式にまとめあ
げられる時，その言葉は同時に使者の口上に似て来ることは理の
当然であつた。勿論，その様にもがきあげられた発言の言葉の結
晶は，もはや庶民の話し言葉ではなくなつて行つたかも知れない。
自然，それは口上の言葉に移行し，或は物語言葉に似て，且つ，
記述文或は書き言葉の領域にまで近づいたことであろう。民会の

発言の言葉はその様な場合、同時に会議の結論をつたえるものであり、同時に、その結論を伝えるべき使者口上と同じであつた。『過ぎし年月の物語』は、その辺の事情を実に上手に物語に組み込んでいる。例えば、盲目にされたヴァシルコの物語の終末に近い個所の一節に次の様にある。6605年の項である。

Посем же придоста к Володимерю, и затворися Давыд в Володимери, и си оступиша град. И послаша к володимерцем, глаголя: "ве не приидо- хове на град ваш, ни на вас, но на врагы своя, Туряка, и на Лазаря, и на Василия, ти бо суть намолвили Давыда, и тех есть послушал Давыд и створил се зло; да аще хотите за сих битися, да се готови; а любо дайте врагы наша". Гра- жане же се слышав, созваша вече, и реша Да- выдови людье: "выдай мужи сия, не бьемся за сих, а за тя битися можем; аще ли, то отворим врата граду, а сам промышляй о себе", и бы- сть выдати я. И рече Давыд: "нету их zde", бе бо я послал Лучьску; онем же пошедшим Лучьску, Туряк бежа Кыеву, а Лазарь и Василь вороти- стася Турийску. И слышаша людье, яко Турийске суть, кликнуша людье на Давыда и рекоша: "вы- дай, кого ти хотятъ; аще ли, то предаемься". Давыд же послав приведе Василия и Лазаря, и да- сть я;

『ところでこの後(ヴァシルコとヴォロダリの二人は)ヴォロジメルに来たつた。しかしてダヴィドはヴォロジメルにたてこもつた。しかしてこれらの人々(ヴァシルコとヴォロダリの軍)は町を包圍した。しかしてヴォロジメルの町の人々に使者をおくつ

て言つた。「(我々が)攻め来たつたのは汝等の町に対してではない。汝等に対してでもない。然らずして、おのれの敵、即ちトゥリヤクに、及びラザリに、及びウアシリに対してなのである。というのは、それらの者たちがダヴィドに(我々のことを悪しざまに)言いつけ、ダヴィドが彼等の言ひことを聞いて、この悪をなしたからなのである。もしも(汝等が)その様な連中のために戦ふことを欲するならば、見よ、(我々は)(戦ひを)辞さぬのである。さもなければ、我々の敵を引き渡せ」と。ところで町の人々はこれを聞いて、民会を召集した。しかして人々はダヴィドに言つた。「それらの家臣たちを渡せ。(我々は)そのようなものたちのために戦つてゐるのではない。汝の為に戦ふことはできるがもしも(汝がそう)しないのならば、(我々は)町の門を開くであろう。汝はみづからおのれのことを考えよ」と。しかして彼等を引き渡さざるを得なくなつた。しかしてダヴィドは言つた。「彼等は此処にはいない」と。というのは彼等をルチスクへ送つてしまつていたからである。彼等がルチスクへ出発した時、トゥリヤクはキエフに逃げ、ラザリとウアシリはトゥリスクに戻つた。しかして、彼等がトゥリスクにゐることを人々が聞いて、人々はダヴィドに向つて叫んで言つた。「(彼等が)汝に求めているその者を引き渡せ。もし(それを)なさぬならば、(我々は)降伏するであろう」と。そこでダヴィドは使者を立て、ウアシリとラザリを連れ来たり、その二人を引き渡した……』

『過ぎし年月の物語』の文章が立脚してゐた一つの大きな基盤が、民会における都市庶民の発言にみられる言葉使いにあつたことがこの点からも知り得られるであろうし、別の言い方をすれば、文字に依存しない古代ロシア語が口頭によつて既に相当高度な表現を生み出してゐたことの傍証にもなるであろう。都市住民の行ひ民会が支配権力者である公に対して、どれほどの発言力を持ち、政治や軍事にどれほどの圧力をかけ、ひいては、この時代の政治

や社会の機構の様相を、歴史家は此処に読み取り得ることである。だが、それにもまして、この一節が此処に書きとめられたその言葉自体の基盤をこそ、我々は注意深く読み取るべきであろう。民会の総意にもとづく結論が、ダavidという公に伝えられる折には、民会での発言という口頭語が見事にまとめ上げられて、使者の口上に近づき、例えば、〈awe〉『もしも』という口上語につきものであつた用語をも取り入れられ、その述べ方もまた、二段構えから、両刀論法を創り出し、相手への強制力を増していることなどは決して見落されてはならないであろう。文字以前の古代ロシア語の表現力発達史の一コマが此処にもみとめられるのである。

多くの年代記が、特に『過ぎし年月の物語』がよりどころとし、利用した古代ロシア語の口頭語の高い表現力を示しているものに、もう一つ宴会の席での言葉や、武人の死を供養する際の手紙などがある。宴会は公の宮廷だけに限らず、教会でも、商人の間でも農民の間でも古くから行われていた。一方の供養は、特に、キリスト教輸入以前のスラヴ原始宗教時代のものだけに限つてみても、年代記の非常に古い部分に既に現れるのである。その原始宗教時代の武人の供養を古代ロシア語は〈тризна〉と言つた。その異教的供養の様子はオリガ〈Олга〉女帝の物語を記録した個所に詳しく書きとめられ、既に各年代記のその項は『古代ロシア研究』才五号に集録しておいた。年代記の中にみられる異教的供養はこの項においてしか見られないが、古くは実際に数多く実施されていた筈であるし、その折には供養のための言葉も多く口にされたものだと考えられる。ラヴレンチ一年代記をはじめとする各種年代記には、然し残念ながら、それらの言葉はほとんど記録されていない。たゞ一つ皇統記〈Степенная Книга〉にのみ、その名残りをうかがい知ることができる。『古代ロシア研究』才五号p. 127～p. 128にみられるオリガの言葉がそれである。日本語訳をつけなかつたので再び此処に訳語と共に引用しておこう。

Ольга собрав воинство, поиде в Деревы и прииде на гроб Игорев и плачется по нем плачем великим, источники слез от очю проливающи, жалостно глаголющи: "О свете мой милый, о драгий мой животе, како оплачу тебе или что сотворю тебе? Самодержець всей Русской земли был еси; ныне же мертв и землею покровен и киним же не владеещи и многи страны примириша ти ся и самый Царский град дани и выходы дароваху ти, и многи победы на супротивныя показал еси. Ныне же где что? Все мину. Где великое государство самодръжства твоего? Где слава и красота мира сего? Где багряница брачныя и ризы многоценныя? Где золото и серебро, и вина, и меды, и брачныя честная, и быстрыи кони, и домове велиции, и имения многая, и дани, и чести бесчисленныя, и гордения в болях своих? Уже тебе не будет сего никогда же; всех сих лишен еси; се бе, яко вижу, с перстию смесился еси, о милый мой господине, великий княже; како скрыся в землю и к нам не возвращаешься; и звери земныя на ложа своя идут и птицы небесныя ко гнездом летят; ты же, самодравне, свой дом оставив и zde пришел, идеже от безумных Древлян кровь твоя царская пролияся, и тело твое погребению предасться; и аз тебе светлейшаго живота и царя лишена бых и сира вдова со единым сыном оставаюся, и за веселие и радость плачь и слезы постигоша мя, аз утеху же и покой сетование болезнено; и многия труды скорбныя обыдоша мя, и не вем, како врагы смирити и всякая вражда утолити и како в тишине

мирны дни видети, в них же бы истиннаго възскати. И кто, когда, какво утешение дарует ми и ум мой на лучшее утвердит и желание мое исполнити? И кто обрящется возвещая ми, аще будет некая жизнь, или другой мир? Сей бо мир преходит, яко же вижу и несть хитрости, еже убежати смерти. Егда же како и мене постигнет смерть, и кто будет память мою творя по смерти? Все бо естество человеческое в небытие расходуется и забитию предавается. И что ныне успеем, косняще господубийцам врагом ненавидящим над ними царския власти; и того ради да примут мечь, и да престанет дерзость в Рустей земли помышляющих злое на самодержавных; да и прочии не навькнут убивати государствующим ими в Руси, но со страхом да повинуюся величию царствия Руския державы начальником. Мы же паки по сих егда мирно время улучим, и тогда паче потщатися имамы добрейшая и полезная уведати". И ина многа плачевная при творяше глаголы и повеле могилу сыпати над Иго-рем.....

勿論此處の言葉は後世に多く手を加えられたものであろう。例えば『皇帝』〈царь〉, 『皇帝の』〈царский〉などという言葉は古くはビザンチンの皇帝にしか用いられなかつたものであるのに、此處ではロシアの『公』〈нязь〉に相当するものとして用いられてしまつてゐる様に、語彙の面からもそのことは充分うかがうことができる。後世の追悼文的な加工で色濃く着色されているにはちがひなからうが、少くとも、異教的供養の折の言葉の名残りはとゞめられていようし、或は全くそれが無いにしても、この種の言葉が供養の折に語られたことだけはたしかである。その語ら

れた言葉の後々における成長発展の結果がこのようなものであつたと考えればよいかも知れない。訳語をつければ、次の様なものになる。

『オリガは軍勢を集め、ジエレヴリヤネに向つて進發し、しかしてイゴリの墓に着いた。しかして彼を思つて大泣きに泣いた。涙の泉を眼から流し、悲しく言つた。〃おゝ我がやさしき光よ。我が価値高き光よ。いかに（我は）汝（の死を）いたみ、汝に何をなそうや？（汝は）全ルシの国の君主にてありき。されど今、（汝は）死して、土に埋められ、誰をも支配せざるなり。多くの国々は汝に服し、ツアリの町（ビザンチン）さえ汝に貢物と税を納めていたり。しかして汝は多くの勝利を敵対するものたちに示したり。されど今や如何に？ 総ては逝きて歸らず。汝の力の大きいなる国はいづこにありや？ この世の栄光と美は何處にありや？ 婚儀の御衣と価高き王服はいづれにありや？ 黄金と銀は、しかしてブドー酒は、しかして蜜酒は、しかして聖なる絹衣は、しかして足速き馬は、しかして大きいなる家は、しかして多くの財は、しかして貢税は、しかして数限りなき榮譽は、しかしておのれの貴族たちの自慢の種は、今いづこにありや？ 既に再びこれを汝に求むべくもなし。（汝は）これら総てを失いたればなり。見やれば即ちこれは土と混じてやみぬ。あゝ、我がやさしき君よ。偉大なる公よ。いかなれば地にかくれ、我等がもとには戻ることを。地なる獸はおのがふしどに戻り、空なる鳥は巢に飛び帰るものを。君よ。汝はおのが家を殘して此處に来たり、かくして、愚かなるドレヴリヤネのために汝の皇帝なる血は流されぬ。しかして汝の体は埋葬に引き渡されぬ。しかしてぞ我が汝が光輝ある生命を失ひ、帝を失ひ果てゝ、よるべなき後家として一人の息子と共に取り殘されぬ。しかして、よろこびにつけ、うれしさにつけ、泣きの涙が我をおそい、我は慰めをもいこいをも、患い嘆くなり。多くの悲しき事どもが我をとりまき、敵をいかに押えるかを我は

知らず、あらゆる敵意をしづめるによしなく、静けさのなかに平和の日々を見るすべとてなし。平和の日々にこそ真なるものを求め得べきに、しかして、誰が何時、如何なる慰めを我に与え、我が考えを光明に向わせ、我が望みをかなえくれん？ 別の生命があり別の世界があればとて、そも、誰が我にそれを伝え呉れん？ この世は過ぎ行きて、見てやれば、死をのがれん良きすべとてなきものを。いつ、いかにかして、死が我を襲うときは、死後、我が記念をば誰がなし呉れんとするや？あらゆる人間の業は忘却の中に散り失せ忘れ果てるにまか^{まか}ざるものなるを。皇帝の権力をうかがい憎む主殺しの敵に向いて、今、我等何をなすべきや？そのためには彼等報いを受けるべく、且つまた（我等が）王国に悪をたくらめるものどもの思い上りはルンの国には絶えて消え果てしむべし。かくなりて、はじめて、ルンにありて、自からを治めるものを殺すごときことを他の者たちはやめとむならん。しかして、はじめて（人々は）恐れを抱きてルンの国の首長の偉大さに従い伏すべきなり。されば、我等は再び平和なる時をその後にはじめて得て、その時にぞ、たのしみに満ち、良き有益なることどもを知り得ん」と。しかして、多くの泣きとむらいの言葉をのべ、イゴリの上に墓を造ることを命じた』……

この様な追悼の言葉の原型をなすべき数々は、キリスト教輸入以前のロシアで、戦いの栄光の内に死んだ公や勇士に対しては勿論のこと、それぞれの戦士や名士の死に対して、常に述べられていたにちがいない。年代記は残念ながら、それらを原型のまま伝えることがほとんどない。その古い異教的な供養追悼の模様をさえ、ほとんど書きとめていない。キリスト教輸入後の教会で、異教排斥の立場から書かれた年代記の性格によるものなのであろう。だが、その排斥した等の異教的供養の折の追悼の言葉が、古代ロシア文語の大きな一つのさへになつたことは想像に難くない。キリスト教輸入後にキリスト教的追悼文の中にその表現技術

が数多く取り入れられて、バイブル的表現に組み込まれ公たちの死後の讃美の言葉として年代記に書き入れられたも多かつたように思われる。死者へのその様な讃美の言葉については、また、後にふれるであろうが、此処ではその様な讃美の言葉としてではなくて、戦死せる父の葬式にその子が泣きながらその遺体に語りかける言葉を一つだけ引用しておこう。イジャスラフの遺体を戦場からキエフの町に運び移し、葬式を挙行した折に、息子ヤロボルクが口にした言葉である。此処には明らかに古くからの武将の供養の折の言葉の反映を読み取ることができるからである。

Ярополк же идяше по нем, плачяся с дружиною своею: "отче, отче мой! Что еси пожил без печали на свете, многы напасти приим от людей и от братья своея? Се же погыбне не от брата, но за своего положи главу свою."

『ヤロボルクは彼（彼の遺体）におのれの親兵団と共に従い進みながら泣いた。』父よ、我が父よ！何故に汝はこの世に悲しみなしには暮せなかつたのか。何故に家臣たち及びおのれの兄弟たちから多くの攻撃を受けたのか？見よ、（汝は）弟によつて身を滅ぼしたのではなくして、おのれの弟のためにこそおのれの生命を捨てたのである』

さて、口頭による古いロシアの言葉の表現水準を示すものに、もう一つ、宴会での発言があつた。年代記は公の主催する酒宴について数多くの記録を書きとめている。民間ベースではブイリーナの主要なものが、その酒宴の存在をことごとく詠みこんでいる。新しい公の即位に際しても、新しい建物が完成した折にも、戦いに勝利をおさめた時には勿論のこと、外交的使節の接見の折にも、公の宮廷では事々に酒宴が開かれた。『過ぎし年月の物語』の中だけに限つてみても、宴会を伝えている記事は相当多く見出される。特にヴォロジメル公には宴会の物語が集約的に書きとめられ

ている。

В лето 6504. и створи праздник велик в ть день болярюм и старцем людьским, и убогим раздавая именье много.

..... и створи праздник велик, варя 300 провар меду, и съзываше боляры своя, и старейшины и по всем градом, и люди многы, и раздавая убогим 300 гривен.....

Се же паки творяше людем своим по вся неделя, устави на дворе в гритнице пир творити и приходити болярюм, и гридем, и съцьским, и десятицским, и нарочитым мужем, при князи и без князя: бывше множество от мяса, от скота и от зверины, баше по изобилью от всего.....

『6504年・・・しかして、この日に、貴族たちや臣下の長老たちに大いなる祭典をおこなつた。しかして、貧しき人々に多くの財を分け与えた。

・・・しかして、大いなる祭典をおこない、蜜酒三百ブロウアラを沸かした。しかして、おのれの貴族たち及び長老たち及びすべての町々からの者たち、及び多くの家臣たちを呼びあつめ、しかして貧しき人々に三百グリヴナを分け与えた・・・

ところで一方、また再び同じことをおのれの家臣たちに毎週おこない、衛兵集合所の屋敷において酒宴^も催し、貴族も、護衛兵も、百人長も、十人長も、身分高い家臣たちも、公のいる時にも不在のときにも来るように定めた。家畜及び野獣の肉が多量に出され、あらゆるものが豊かであつた』

勿論、前述したように、これは伝承を書きとめたものにちがいない。然し、少くとも、ウオロジメルに限らず、多くの公たちのもをもて、種々のことに事よせて酒宴が催されていたことにちがいない。

ない。だから酒宴を素材にした物語も当然生まれたことであろう。例えば、6573年の項には、次の様な面白い話が書きとめられている。

Единою же пьюшо Ростиславу с дружиною своею,
рече Котопан: "княже! хочю на тя пити"; оному
же рекшо: "пий". Он же испив половину, а поло-
вину дасть князю пити; достиснувься палцем в
чащу, бе бо имея под ногтем растворенье смер-
тное, и вдасть князю, урек смерть до дне земаго.
Оному же испившо, Котопан же пришед Корсуню
поведаше, яко в сий день умереть Ростислав, яко-
же и бысть; сего же Котопан побиша каменьем
Корсуньстии людье.

『ある時、ロススラフがおのれの親兵団と共に酒宴を張つていた時、間者は言つた。「公よ、(我は)汝のために飲もうと思ふ」と。ところでその者に言つた。「飲め」と。彼は半分飲みほし、ゆびをさかずきの中へ入れてから半分を公に飲むように渡した。というのは(彼は)爪の下に死の毒薬をつけていたからである。しかして、公に渡した。八日目に死ぬであろうと予言した。彼(公)が飲みほしたとき、間者はコルスニに来たり、今日ロススラフが死ぬであろうと伝えた。しかしてその様になつた。この間者をコルスニの人々は石で打ち殺した』

此処には、かすかに、酒宴の席での発言の片鱗がうかがわれる。公を祝福して酒はいをのみほそうというたぐいの言葉である。こゝでは「князю! хочю на тя пити」という言葉として書きとられている。宴会でのこの様な発言の根跡は年代記にはほとんど記録されていない。然し、讃辞や祝福の言葉や、威勢のよい自慢や、時には巧みな権力者への追従の言葉が多く述べられたことであろう。愛想言いの役目をもつたものたち「ласковъци」や

お祝いを述べる役目の連中〈праздньнословьцы〉，時には宴会の出席者を笑わせて会を陽気にさせる連中〈смехословьцы〉などがいた。『豊かなる者及び貧しきものについての物語』

〈Слово о богатом и убогом〉の伝えるところである。或はまた、ダヴィドの子ヴオロジメル(1139～1151)の銀製の酒はいに彫り込まれている次の様な文章からも、宴会での発言の様相がうかがわれる。

〈А се чара князя Володимирова Давыдовича, кто из нее пьет, тому на здоровья, а хвали бога своего и осподаря великого князя〉

『これはダヴィドの子ヴオロジメル公がそれより飲んだ酒はいである。健康を祝し、おのれの神と君主なる大公をたゞえて』

フィリーナが伝えるヴラジーミル公のもとにおける酒宴での自慢話などはともかくとして、少くとも、その席が乱れる前には形式的な一定の発言があつたにちがいない。その様な言葉が、多くは公たちへの讚美や祝福の言葉であつたことは当然であらう。年代記にはその言葉が直接には反映しなかつたにしてもその表現形式や手法が年代記文章の一部のさゝえになつていた筈である。口頭だけによるこの様な酒宴での讚美の言葉が、『イーゴリ遠征物語』の結びの一節に力強く反映したことは既に周知のことである。即ち、その一節とは、

Солнце свтится на небесе, Игорь князь в Руской земли. Девици поют на Дунаи, вьются голоси чрез море до Киева. Игорь едет по Боричеву к святаей Богородици Пирогощей. Страны ради, гради весели. Певше песнь старым князем; а потом молодым пети: Слава Игорю Святъславличю, буй туру Всеволоду, Владимиру Игоревичю. Здрави князи и дружина, побарая за христьяны на поганья плъки!

Князем слава , а дружине!

『太陽は天に輝き，イーゴリはルシの国に．乙女たちはドナイ河に歌い，その声は海を越えてキエフに及ぶ．イーゴリは馬を進めてポリチエフをのぼり，聖母教会にと進み進む．国々はあげて喜び，町々は歓呼しぬ．古き公たちに歌をばさゝげ，つゞいては若き公たちにも歌いつぐべし．スヴイヤトスラフの子イゴリに榮あれ．荒々しきおの子なる，フセヴオロドに，イーゴリの子ヴラジミルに榮あれ．公及び親兵団よ，すこやかなれ．キリスト教徒のために異教の軍勢を戦い散らせし者たちよ．公に榮あれ，親兵団に榮あれ!』

この様な歌をさゝげ得られた詩人は，勿論，一世の天才であつただるうが，ひるがえれば，彼こそ，実に，古くからの公たちの酒宴の席に欠かせぬ讚美の言葉の述べ手たちの頂点に位するものであつた．勿論，多くは，親兵団の一員か，さもなれば，常にその周辺にいた誇れ高い文人たちであつただるう．『イーゴリ遠征物語』の締めくくの一節を頂点に押し立てるまでには，実に数多くの同種の讚辞が多くの酒宴で述べたてられたことであろう．その場合，もとより，その酒宴は公の家敷に公を交えて催されたものであつた．然し，その様な酒宴での言葉が公の宮廷の場合だけに限られた筈はなかつた．また，公への讚美が酒宴の席だけでおこなわれた筈もなかつた．権力者への讚美の言葉は，もつと広く種々の場合に述べられた筈である．それはもう，単なる口頭という言葉ではなくて，歌唱せられるべき歌であつたかも知れない．例えば，『過ぎし年月の物語』にもその事情の断片が読み取られるのである．6575年の項の終末近くに次の様な一節が読み取られる．

Людѣ же кликнуша и идоша к порубу Всеславлю;
Изяслав же се видеv, со Всеволодом побегоста
с двора, людѣ же высекоша Всеслава из поруба,

в 15 день сентября, и поставиша и среде двора княжа; двор же князь разграбиша, безчисленное множество золота и серебра, кунами и белью. Изя-
слав же бежа в Ляхы.

「そこで人々は叫び声をあげて、しかして、フセスラフの牢に向つて進んだ。ところで、イジャスラフはこれを見て、フセヴオロドと共に屋敷から逃げた。そこで人々はフセスラフを牢から連れ出した。九月十五日であつた。しかして（人々は）彼を公の屋敷の中央にすえた。そこで（人々は）公の屋敷をりやく奪した。黄金と銀、貨幣と獣皮の無数を。ところでイジャスラフはリヤヒに逃亡した。」

この一節は或は何気なく読み過されるかも知れない。然し、訳文中に下線をほどこした「すえた」〈поставиша〉という一語は注意を要するところである。民衆が捕われの身である領主を牢から救出し、公の「屋敷の中央に」〈среде двора княжа〉
すえたとは何であるのか。この者こそ我等の領主であり、公たる者であるということを示す象徴的行為に過ぎなかつたと考えてよいであろうか。この「すえた」〈поставиша〉という複数三人称アオリスト形は、単にそれだけのことを意味したにすぎないであろうか？ この点は随分昔から年代記者が迷つた個所であつたと思われる。というのは、写本によつて見れば、この言葉が種々のバリエーションをもっているからである。例えば、トロイツキ一年代記は〈поставиша〉とせず〈преставиша〉と書きとつている。明らかに、単に「すえた」のではなくて、王者或は公としてすえたことを語りたかつたのであろう。по-という接頭詞がпре-と変えられているからである。また、ラジヴィロフスカヤ写本〈Радзивилловская рукопись〉では〈прославиша〉という言葉になつている。明らかに「讃えた」ことであり、ほめ歌を歌つたことである。勅令による年代記全集才一卷；1846年版

では、この прославиша は誤記であると考えられているらしいが、おそらく、単なる誤記ではなかつたであろう。поставиша にしろ、преставиша にしろ、прославиша にしろ、おそらくは同じことを表現しながら、その用語だけを違えていたものに相違ない。屋敷の中央にすえ、そのことによつて眞の公であると萬人が承知し、且つまた、即位或は復位の折のほめ歌のようなものをフセスラフに全員がささげ唱したのであろう。それは、あわたししい戦いの中での、とりあえずの行事であつたために、内容よりも表現用語の上だけにでも、あわたしさを示そうとして、『すえた』〈поставиша〉とだけ書きとめたのであつたにちがいない。即位や勝利の折における公への讃め歌が広く行われ、然も、その歌のにない手たちが民衆であつたことを示すに充分な証拠である。

この様に、用語の点にまで深いさぐりを入れなくても、用語の額面通りの受け取り方で明らかにこの証拠を示す記録がある。例えばネストルのテキストが終つてから後の記事であるが、イバーチ一年代記の6759年終末の一節に詳しく然も直接的に次の様な文章が書きとめられているのである。

Оттуда же князь Даниил приде ко Визьне и преиде реку Наров, и многи крестьяны от пленения избависта, и песнь славну пояху има, Богу помогшу има, и приидоста со славою на землю свою, наследивши путь отца своего великаго Романа, иже изоострился на поганья, яко лев, им же Половци дети страшаху.

『ところでダニール公は其処からヴィジナに到着し、ナロヴィ河を越えた。しかして、多くのキリスト教徒（農民）を捕われの身から救つてやつた。しかして、（人々は）彼等二人、及びこの二人を救い給ひし神に向つて、ほめたまへるの歌を唱つた。しかし

て、(二人は)榮与にかがやいておのれの国に帰りついた。おのれのたいなる父ロマンの道をついだ。彼(父ロマン)こそは、ライオンの如く異教徒たちに対峙し、ポロヴェツの者共は彼をおそれていたのである』

此処には戦勝に際しての公への民衆のほめ歌の存在が鮮かに書きとめられている。『過ぎし年月の物語』がその様なほめ歌の文句を直接に書きとめている個所は勿論一個所も見当らないが、少くとも、口頭民衆語を『物語』が大きな基盤にし、素材にしたことは充分うかがい知ることができる。『物語』が基盤にし、素材にした民衆の口頭語とは、日常の言葉使いではなくて、民衆なりの芸術的表現をもつ口頭語であつた。或は民衆の上に立つ公たちの言葉使いであつた。この多少とも芸術的な口頭語の表現力の豊かさや彫りの深さを感じさせる年代記の記事が幾つか求められるのである。表現力の彫りの深さは、ほめ歌よりも、むしろ、悲しみにあふれる事件の嘆きの言葉に現れるであろう。或は深刻で尊厳なる誓いの言葉にも現れるであろう。事情そのものが口頭語に高い表現力とその彫りの深さを要求する場合が多かつた。その様な事情の場面と、其処で語られた言葉とを書き取つている個所は年代記の中に数多く発見し得る。

例えば、ラヴレンチー、イバーチー、トロイツキー各年代記の6527年の冒頭の記事は、とむらい合戦の話であるが、此処には、開戦に當つて悲痛な声が生のまゝ躍動しているように思われる。
В лето 6527.

Приде Святополк с Печенеги в силе тяжьце, и Ярослав собра множество вой, и взиде противу ему на Лтьо. Ярослав ста на месте, идеже убиша Бориса, въздев руце на небо, рече: "кровь брата моего вопьеть к тебе, Владыко! мьсти от крове праведнаго сего, якоже мьстил еси крове Аве-

левы, положив на Кайне стenanье и трясенье;
такo положи и на сем". Помоливъся и рек:

"брата моя! аще еста и телом отсюда, но молит-
вою помозета ми на противнаго сего убийцю и
гордаго". И се ему рекшю, поидоша противу себе,
и покрыша поле Летъское обои от множества вой.
Бе же пяток тогда; въсходящю солнцю, и ссту-
пишася обои, бысть сеча зла, яка же не была
в Руси, и за руки емлюче сецяхуся, и сступа-
шася трижды, яко по удолюем крови теци; к
вечеру же одоле Ярослав, а Святополк бежа.....

〔6527年〕

スヴイヤトボルクはベチエネギ（人）と共に大いなる軍勢をひき
いて来たり、しかして、ヤロスラフは多くの戦士を集め、彼に向
つてリト（河）に出陣した。ヤロスラフはボリスの殺された場所
に立ち、天に向つて両手をあげて言つた。「わが弟の血が汝に向
つて号泣するのである。主よ！この正しき人の血の復しゆりを
なせ。汝がカインに叫びとおそれを与えて、アベルの血の復し
ゆりをなした如くに、このものに対しても同じことをなせ」と。
祈つて言つた。「我が兄弟よ。たとえ、汝等の肉体が我等から離
れたとしても、祈りを以て我が傲慢なる敵、殺人者に抗して我に
助力を致せ」と。しかして彼はかく言つて、（彼等は）それぞれ
に兵を進め、しかしてリトの野を両方より多くの戦士で蔽つた。
その時は金曜日であつた。太陽が昇るとき、両軍は相会した。ル
シには無かつたほどの激戦があつた。取り組み合いの戦いを行い、
三度相会した。血が谷間に流れたほどであつた。ところで夕方近
くにヤロスラフが打ち勝つて、スヴイヤトボルクの方は逃走した
……。』

此処における「」印内の言葉は、『過ぎし年月の物語』全体

を通じての最も熱つぽい言葉の一つである。キリスト教が年代記によれば、この年よりも十年ほど以前にウラジミルによつて公式に受け入れられているから、この台詞の中のカインとアベルの比喩は、おそらく、そのままの言葉通りのものであつたであろう。後代の書き加えではないように思われる。激烈にして沈痛な生の言葉であつたと考えてよいであろう。この生の言葉が年代記者の記述の書き言葉の表現を突き抜け、むしろ、その言葉のつなぎ或は説明としての役割を記述文がつとめている感さえ抱かせる。そして、この生の言葉の力に押された記述文さえも、全体的に抱括して見るとき、この一節がロシアの古い戦記物語の中でも才一級に位し得るほどのものに引きあげているのに気づくであろう。おそらくは、この記述文も、〃 〃印内の生の言葉を生かすために、共に伝えられた戦争叙事詩の一節であつたにちがいない。金曜日であつたという話も、後の『イーゴリ遠征物語』が同じく金曜日の戦いをのべているのと照合するとき、今は失われた叙事詩のかすかなタイプを見せられるように思われる。ともあれ、切実な場面での口頭の古代ロシア語の表現力の高さは此処に充分示されているとすべきである。不幸な兄が同じく不幸な弟をなぐさめて、兄弟のきづなの強さを示し、激励し、涙ながらに立ちあがろうとする場面での膨りの深い言葉を、『過ぎし年月の物語』は、6586年の項の前半のところで書きとめている。これもまた、その一句一句の短かさや、語りかけの呼吸から見て、ほとんど語られたまゝの生の言葉であつたであろう。弟フセヴロド〈Всеволод〉を慰さめ励ます兄イジャスラフ〈Изяслав〉の言葉である。

И рече ему Изяслав: "брате! не тужи; видиши ли, колико ся мне склучи? первое, не выгнаша ли мене и именье мое разграбиха? и паку кую вину вторую створил бех, не изгнан ли бех от ваю брату

своею? не блудил ли бех по чюжим землям, именья лишен бых? не створих зла ничтоже, и ныне, брате, не туживе; аще нама причастье в Русской земли, то обема, аще лишена будеве, то оба, аз сложю главу свою за тя!".

『しかしして、イジャストラフは彼に言つた。』弟よ！ 悲しむな。見るがよい。わが身には、いくばくの災禍が起つたことである。先づ才一に、我は追放されたではないか。また、我が財産はりやく奪されたではないか。さてまた才二には、我はいかなる罪をおかしたというのか。我は、汝等わが兄弟によつて追放されたではないか。我は見知らぬ国々をさまよつたのではなかつたか。いかなる悪をも（我は）なさざりしに、財産を失つたではなかつたか。しかしして、今、弟よ、悲しむではない。もし、我等二人にルシの国において領地が与えられるならば、（我等）二人に（与えられるの）であり、もし、（我等二人が）（分前を）失うならば、二人ともが（失うの）である。我は汝のためにおのれの生命をすてるであろう』と』

才一に気づくことは、この一節における否定表現の豊かさである。その数から見て、〈не〉は実に六個をかぞえるのである。記述文にしる、直接話法的な語り文にしる、これほどの否定表現の連続は、今まで一度として出現したことがなかつた。この否定表現がその数を豊かに持つてゐることだけに眼を奪われてはならない。否定表現による命令法を『悲しむな』〈не тужи〉と二人称単数形で始めた語りかけは、多くの否定形を内包しつゝ、最後に同じ命令法を今度は〈не туживе〉と変形して結んでいる。この先頭と末尾における否定形での命令法の間組み込まれた否定表現と肯定表現の交替の見事さを注目しよう。

『人々が我を追放したのではなかつたか？』

〈не выгнаша ли мене?〉

という否定表現による問いかけは、『我は人から追放されたのだ』
という事実を相手に確認させる最高の手段であつただろう。反論し難く説得的であると同時に、相手の不幸よりも、我が不幸を否認なしに大きく印象づける。同時にまたそれは、この上ない強力な慰めと、不幸にめげない激励の用を達し得るものであつた。然も、この否定表現による問いかけは、その直後に、今度は肯定表現で

『我が財産を人々はりやく奪しただらう？』

《именье мое разграбиша ?》

と続ける。否定表現の問いかけと肯定表現の問いかけを重ねることによつて、その表現効果は極度に増大したのである。否定と肯定の一对を以て問いかけた言葉は、当然、『私は何の罪も犯していないのに』と否定表現がつよくべき筈の所を、更に逆にひねつて、

『では才二に如何なる罪を私が犯したというのか』

《кую вину вторую створил бех》

と肯定表現を用いた。逆にひねられただけ、この自然の勢いに反した表現は相手の胸に突きささつたであらう。この様にして才一段を終つた語り手は、次の才二段でも、二度の否定表現を用い、その間に一つの肯定表現を組み込んでいる。この二段に分かれた内容を、前後に否定の命令法で締めくゝり、その表現力によつて、相手を完全におのれの土俵に入れる。そして、二人のきづなを説き、協力を約し、最後に生命の献上をも辞さない決意の表明によつて、慰めと励ましと協力の心と一挙に述べきつたのである。喋り言葉の切実さによる彫りの深さは、此処で完全に詩的表現をも超えた。叙事詩の域をもぬきんでたと言えるであらう。古代ロシアの喋り言葉の到達し得た表現力の高さを示す絶好の例であらうと思われる。

この喋り言葉の到達点は、日常口頭用語の域を脱して、高揚し

た雄辯術的な用語へと進み、口頭文語とも言うべき位置にあつたと考えてよいであろう。そして、この口頭文語は年代記者によつて直接そのままに近い形で織り込まれ、或はまた間接的にその表現術を利用されることによつても、色濃く『過ぎし年月の物語』の中に反映したのであつた。反映したというよりも、年代記者の記述が、そのような口頭語を何にもまして最も大きな文章基盤にしていたのであつた。だから、『過ぎし年月の物語』の文章の皮を一枚はぎ取つて見ると、その下には、庶民の生活が創り出した庶民の言葉の臭いが発散している。特にキリスト教にまつわる多くの物語を除外した個所に、その臭いは強烈である。『過ぎし年月の物語』が立脚し利用したそれら庶民の創造になる言葉を実際に求めてみよう。

— И —

明瞭に庶民の言葉を書きとめているものの一に諺が数えられる。『過ぎし年月の物語』が年号を設定する以前の個所に、『オブレは体が大きく、心がたけだけしがつたので、神が彼らをほろぼし給うた。ことごとく死に、一人のオブリ人も残らなかつた。今日に至るまでもルシには、オブレのようにほろびたというたとえがある』〈Быша бо Обръѣ тѣломъ велици и умомъ горди, и Богъ потреби я, помроша вси, и не остася ни един Обърин; есть притѣча въ Руси и до сего дне: погибоша аки Обре〉という一節がある。此処に引用された『諺』或は『たとえ』〈притѣча〉は、年代記者がわざわざ断り書きをしているように、庶民に流布した言いならわしであつた。『オブレのようにほろびた』〈погибоша аки Обре〉とは、全く端的な庶民語の原型のまゝの反映であつた。（『古代ロシア研究』オ一号、p.42～p.43参照）。

オブレ〈Обре〉という種族名は、その後の『過ぎし年月の物

語』には一度も出現しないが、『ほろびた』〈погибоша〉——
〈погынути, погыбнути, погибнути, погинути〉——
は、例えば以前に引用したヤンの父の言葉にも見受けられた
ところである。(6551年の項)。

また6411年の項の末尾に、(『古代ロシア研究』才三号,
p.16~p.17参照)『人々はオレグを靈驗あるものと呼んだ』
〈прозваша Ольга вещиИ〉という一節にみられる形容詞
〈вещиИ〉『靈驗あるもの』という言葉も、人々の間の言葉で
あつたであろう。同時にこの言葉は『イーゴリ遠征物語』におい
てバヤン〈Боян〉への讃辞として用いられるほどの、熱つばい
叙事詩言葉でもあつた。

6453年の項にも、鮮やかな庶民の言い廻しの反映がみとめら
れる。それは、イゴリに攻められるドレヴリヤネの公マルを中心
とした相談の言葉である。(『古代ロシア研究』才五号, p.3参
照)『もしも狼が羊たちのもとへ絶えず訪れるならば、もしそれ
を(人々が)殺さなければ、群全部をくわえ出すものである。こ
れもまたそうである。もしも(我々が)彼を殺さなければ、我々
すべてを(彼は)滅ぼすであろう。』〈аще ся въвадитъ
волкъ въ овць, то выносить все стадо, аще не
убьютъ его; тако и се, аще не убьем его, то
вся ны погубить〉この一節の前半はおそらく当時の諺のよ
うな言い廻しであつたであろう。然もそれは、武人たちの言葉で
はなく、牧畜者や農民たちの言葉であつたにちがいない。狼に
もたとうべきイゴリの攻撃を憎悪し、イゴリを殺して禍を排除し
ようという相談の決定に際して、その様な言葉を正当化のために
使用したということは、同時に、この庶民の言葉の中に含まれた
高い規範性にあやかろうとしたためであろう。この庶民の言い廻
しは既にそれだけ高い水準に達していた。年代記者は、それを決
して見過さなかつたのである。でき得る限り利用したのであつた。

高度な庶民用語による表現を年代記者が利用した個所は、普通の記述文の中にも数多く認められる。先にも引用した6479年のスヴィヤトスラフの物語の一節に、『しかして夕方近くスヴィヤトスラフは勝つた。しかして、槍でもつて町を取つた』〈И къ вечеру одолѣ Святославъ, и взя градъ копьемъ〉という言葉があつた。『槍でもつて町を取つた』〈взя градъ копьемъ〉とは、実は、『突撃によつて町を占領した』という意味なのである。これが純粹の話し言葉から出た用語であることをイバーチ一年代記だけが物語つてゐる。話し言葉から出た用語であることの断層を、如何にも埋め合はしたいもののように、其処には『見よ、町は我がものなりと言いつゝ』〈ръкя: Се городъ мой〉と話し言葉そのものを直接話法で書き加えているのである。突撃を槍で以て言い替える庶民的表現の巧みさを、『過ぎし年月の物語』の記者は、利用しながら、おそらく忘れ得なかつたのであろう。再び6605年の項でも、同じ表現を用いて、ウオロダリとヴァシニコの二人が『槍でもつて町を取り、火でもつて焼いた』〈взяста копьемъ градъ и зажгоста огнемъ〉と記述したのであつた。或は忘れ得なかつたというよりも、その様な用語が既に普及していたのだと考えた方がよいであらう。

これよりも、もつと庶民的な言い廻しが普通の記述文の中に利用されたのが、6476年の項の末尾の一節である。『スヴィヤトスラフはこれを聞いて、おのれの親兵団と共に急ぎ馬に乗り、キエフに來たつた』〈То слышавъ Святославъ, вборзѣ всѣде на конѣ съ дружиною своею, и приде Кіеву〉『馬に乗つた』〈всѣде на конѣ〉という言葉に注目してみよう。親兵団と共に馬に乗つたのに、何故『乗つた』〈всѣде〉は三人称単数アオリスト形なのか。『馬に』〈на конѣ〉は理論通り複数対格形ではないか。親兵団を引きつれて、何頭もの馬に乗つたのは、スヴィヤトスラフ公たゞ一人であつた筈

がない。一人は一頭の馬にしか乗れない。年代記がそんな文法上の誤謬を犯すとは考えられない。実は『馬に乗つた』とは、庶民的な表現による『出陣した』という意味なのである。引き具した親兵団と、多数の馬にそれぞれまたがって、先頭に立ちつゝ出陣して行つたのは、英雄スヴィヤトスラフであつた。三人称単数アオリスト形は、だから庶民の表現を持ちこみつゝ心にくいばかりのレトリックであつたといふべきである。『過ぎし年月の物語』の~~原~~^{原型}に見習つたその後の年代記者たちは、この庶民表現利用の見事さに度々あやかつたもののように思われる。例えば、ノヴゴロドオ一年代記には、6738年の項に、直接語法による言葉で〈Как отецъ твои рекль былъ въсѣсти на коне на воину〉『汝の父は、馬に乗りて戦いにいでよと言つたが』とあり、6848年の項にも、今度は記述文として、〈быша Новогородци всели на коня в Торжекъ〉『ノヴゴロド人たちはトルジエクに出陣した』とある。ブスコフオ一年代記にも〈на конь всѣсти и воевати нѣмецъ поити〉『馬に乗りネメツを撃ちに行かんと』とある。いづれも、出陣することを内容として、時には、実際に馬上の人となることの映像を強く、時にはその映像を弱くして、それぞれに勇壮さをみせようとした記述であつた。だから『馬に』という言葉が、時には前置格に、時には対格に、また同じ対格であつても、時には主対格に、時には生対格に動いていた。此処には、まだ、古代ロシア語の全き自由さが思いのままに活用されていたのである。そのことによつて、表現の軟かさとふくらみとが存分に発揮された。庶民表現の成句のよりのものを、年代記者が文学用語に汲み取つて来る時の腕前を見せつけられるように思われる。

『過ぎし年月の物語』が記述する年号順に拾いあげれば、庶民の諺が次に引用される個所は6488年の項である。『しかして町に大いなる飢えがあつた。今日に至るまでもノヴゴロドニヤにおける

よるな災厄。」というたとえがある』 <и бѣ гладь великъ
въ немь; есть притча и до сего дне: бѣда
аки в Роднѣ.> (『古代ロシア研究』才六号 p. 14~15参照)
ついで、同じ6488年の項に、要求をいれられなかつたヴァ
リヤーク人 <Варяг> がウラジミルに言う言葉が記されている。
『しかしてヴァリヤギは言つた。『汝は我々をあざむいた。我々
にグレキへの道を示せ』と』 <и рѣша Варязи: // сольсти
ль еси нами, да покажи ны путь въ Греки』>
この中の庶民表現『道を示す』 <показати путь> とは、何で
あつたか? 『お前の出て行く方向はこちらである』と言つて、
退出の道を指し示すことから発した成句であつただろう。やとい
兵ヴァリヤークがウラジミル公に『道を示せ』とは、だから、や
とい兵の任を解除して、ギリシアへ行かせて呉れという要求であ
つたにちがいない。やとい兵の任を解除して自由行動にまかせる
ことを <показати путь> 『道を示す』という庶民の言葉であ
らわしたものである。然し、この成句がそれだけのことをしか意
味し得なかつたのではない。『馬に乗る』場合と同じように、こ
の『道を示す』という言葉は、もつと大きなふくらみをもつてい
た。不行跡な、時には無能な公を王座から追放する時にも『道を
示す』という言葉が年代記者たちは利用したのである。例えば、
ノヴゴロド才一年代記6678年の項には <И, съдоумавъше,
Новгородъци показаша путь князю Роману> 『
しかして、ノヴゴロド人たちは相談して、ロマン公に道を示した』
とあり、明らかに公の座から追放したことなのであつた。イバー
チ一年代記6682年の項にも、今度は、直接話法の言葉として <
Брата нашего Романа вывелъ еси изъ Русьской земли безъ
нашеѣ вины> 『汝は我等の兄弟ロマンをキエフから導き出し
しかして、我々の罪はないのに、ルシの国からさえ我々に道を示

すのだ』とある。これもまた、追放することであつた。おそらくは、追い出すという庶民の成句を『過ぎし年月の物語』の記者は、やとい兵の放免という意味に採用したのであろう。この活達な表現への水準の高い内容の豊かな素材こそが当時の庶民の言葉であつたように思われる。

庶民の言葉使いを援用し或は成句を利用しながら、且つ、その言葉の裏側に秘められた過ぎし日の物語をも年代記者は発掘したように思われる。その代表的な個所が『過ぎし年月の物語』6492年の項である。(『古代ロシア研究』才六号 p.36 参照) 其処には、庶民の間に流布した言葉『ピンチャナ人たちは狼の尾をこわがる』〈Пинчанцы вольчья хвоста бѣгають〉という民間の諺のようなものが書きとめられ、それが、ロシア人がラジミチをののしる言葉であると記されている。そして実は、この言葉の由来が、その直前に書き出されているのである。即ち、ラジミチをヴオロジメルが攻撃した折の軍司令官〈воевода〉の名がヴォルチイ・フヴォスト〈Волчий Хвост〉(そのまゝ日本語訳をつければ『狼の尾』という意味)で、この軍司令官がピンチャナ河のほとりでラジミチを打ち負かしたことに由来するといっているのである。この意味では、庶民の言葉が記述や表現に大きく利用されたというよりも、庶民の言葉そのものが記述の対象であつた。成句には成りきらない庶民の言葉と、その由来を書きとめた典型的な個所を6496年の項に見ることができる。『今日までもその様に呼ばれている〈ベルンの浅瀬〉とはこゝから名づけられた』〈оттолѣ прослу Перуняна рѣнь, якоже и до сего дне словеть〉にみられる『ベルンの浅瀬』という言葉である。古くドニエプル河にあつた幾つかの早瀬の下流にあつた中州のようなものを当時の人々が個有名詞的にそのように呼びならわしていたのであろう。ヴオロジメル公が洗礼を受けた後、キエフに戻り、丘の上のベルン(——スラヴ原始宗教の主神；

おそらくは雷神で、木造)の像をはじめ多くの神像を破棄した折、河に流されたベルンの像が、早瀬を越えた直後、この中州に(或は文字通り浅瀬に)打ちあげられた。然し、早瀬を過ぎた後には、もう何処かの岸についても、再び突き離して流すことを命ぜられていながつたので、ベルンの像は、おそらく、この浅瀬に流れついたまゝであつた——そういう記事の締めくくりに出て来る言葉であつた。歴史家は、或は、当時の古いキエフ文化圏の境界線を其処に見ようとするかも知れないが、むしろ、年代記者(たち)のあくことなきまでの説話の採集と庶民の言葉の利用と、そして、その掘り下げこそが此処では読み取られるべきであろう。

人々に言いならわされた個有名詞と、それにまつわる説話の採集で最も面白く、最も華やかな『過ぎし年月の物語』の記事は6500年の項である。ペレヤスラヴリ〈Переяславль〉という町の名の由来についての物語である。この町の名を〈Перея〉と〈славль〉とに分けて、前者を相手から『奪い取つた』と続き、後者を『栄光』と続きとつた。そして、何の栄光を、いつ、誰が、どの様にして、手に入れたかという物語を、おそらくは、既に現在には伝えられていない古いブイリーナの叙事詩によつて構成されたものを、年代記者は再編集しながら記録したものであろう。この6500年(西暦992年)の項の記事とは、次の様なものである。ラヴレンチー、イバーチー、フレヴニツキー、トロイツキー等の年代記によれば、

В лето 6500.

Иде на Хорваты. Пришедшю бо ему с войны Хорват-
ския, и се Печенези придоша по оной стороне
от Сулы; Володимер же поиде противу им, и срете
и на Трубежи на броне, кде ныне Переяславль. И
ста Володимер на сей стороне, а Печенези на
оной, и не смяху си на ону страну, ни они на

сю страну. И приеха князь Печенежский к реке, возва Володимер и рече ему: "выпусти ты свой мужь, а я свой, да ся борета; да аще твой мужь ударить моим, да не воюем за три лета, аще ли наш мужь ударить, да воюем за три лета". И разидостася разно. Володимер же приде в товары, посла биричи по товаром, глаголя: "нету ли тако-го мужа, иже бы ся ял с Печенежом?" И не обретеса никдеже. Заутра приехаша Печенези и свой мужь приведоша, и в наших не бысть. И поча тужити Володимер, сля по всем воем, и приде един стар мужь ко князю и рече ему: "княже! есть у мене един сын меншей дома, а с четырьми есмь вышел, а он дома; от детства бо его несть кто им ударил: единою бо им и сварящю, и оному мьнущю усние, разгневавься на мя, преторже череву рукама". Князь же се слышав рад бысть, посла по нь, и приведоша и ко князю, и князь поведа ему вся; се же рече: "княже! Не веде, могу ли ся, и да искусят мя: нету ли быка велика и силна?" И налезоша бык велик и силен, и повеле раздраждити быка; возложиша на нь железа горяча, и быка пустиша, бык мимо и, и похвати быка рукою за бок, и выня кожую с мясы, елико ему рука зая; и рече ему Володимер: "можеша ся с ним бороти". И наутрия придоша Печенези, почаша звати: "не ли муда? Се наш доспел". Володимер же повеле той ноци облещися в оружье; и приступиша ту обои. Выпустиша Печенези мужь свой, бе бо превелик зело и страшен; и выступи мужь Володимерь, и узре и

Печенези и посмеяся, бе бо середний телом. И размеривше межи обема полкома, пустиша я к себе, и ястася, почаства ся крепко держати, и удави Печенезина в руку до смерти и удари им о землю; и кликнуша, и Печенези побегоша, и Русь погнаша по них секуще, и прогнаша я. Володимер же рад быв, заложил город на броне и нарече и Переяславль, зане перея славу отрок от. Володимер же великим мужем створи того и отца его. Володимер же възвратися в Къев с победою и с слагоу великою.

『6500 (992)年。』

(ヴオロジメルは)ホルヴァトに進攻した。彼がホルヴァートの戦いからもどつて来たとき、見よ、ベチエネギがスラ河の対岸から来たつた。そこで、ヴオロジメルは彼等に向つて進攻し、しかして、トルベジ河のほとりの、現在ペレヤスラヴリのある所の浅瀬で彼等にまみえた。しかしてヴオロジメルは此方の岸にとどまり、ベチエネギは対岸にとどまつた。しかして味方は対岸に進むことを、また敵は此方の岸に進むことを敢えてなし得なかつた。しかして、ベチエネギの公が河に(馬を)乗り進め来たり、ヴオロジメルを呼び出して彼に言つた。『汝は汝の家臣を出せ、我は我が家臣を出すであらう。二人を相斗かわそうではないか。もし、汝の家臣が我が家臣を打ちまかすならば、三年の間、戦わぬことにしよう。もしも、我々の家臣が打ちまかすならば、三年の間戦うことにしよう』と。しかして、(二人は)別々の側に分かれた。そこで、ヴオロジメルは陣営の中にもどり来たり、各陣営へ布告者たちをつかわして言つた。『ベチエネグ人との(力くらべ)を引き受けるような家臣はいないか?』と。何処にも名乗り出る者はいなかつた。翌朝ベチエネギが来たり、おのれの勇士を連れ来

たつたが、我々の中には（誰も）いなかった。しかして、ヴオロジメルは悲しみはじめ、すべての戦士たちのもとへ使者をたてた。しかして、一人の老令の家臣が公のもとに来たつて彼に言つた。＼公よ！我がもとには末の息子が一人家に残つている。ところで（我は）四人の（息子）と共に（戦いに）出で来たのであるが、彼は家に残つたのである。幼時から誰一人として彼を打ち得たものはない。或る時、我は彼をののしつたところ、彼は皮をなめじていたが、我に向つて激怒し、両手で腹の（部分）を引きさいだ＼と。ところで公は、これを聞いてよろこび、彼を迎えに使者をたてた。しかして、（人々は）彼を公のもとへ連れ来たつた。しかして公は彼に終てを物語つた。彼はこの様に言つた。＼公よ、我は（彼と力くらべをすることが）できるかどうかを知らない。我を試みさせよ。大いなる、しかして強き雄牛はおらぬか？＼と。大いなる、しかして強き雄牛を（人々は）見出した。しかして、（ヴオロジメルは）雄牛を怒らせるように命じた。（人々は）雄牛の上に焼けた鉄をのせ、しかして雄牛を放つた。雄牛は彼の傍を（走つた）。しかして（彼は）雄牛を片手で脇腹をつかみ、彼の片手がつかみ得るだけ、肉ごと皮をつかみ取つた。しかして、ヴオロジメルは彼に言つた。＼（汝は）彼と斗うことができる＼と。しかして翌日、ベチエネギが来たり、よばわりはじめた。＼勇士はいないのか？見よ、我々の（勇士）は準備がととのつた＼と。ところで、ヴオロジメルは、その前夜、武器を身につける事を命じておいた。しかして、すぐさま両者は相接近した。ベチエネギはおのれの勇士を出した。（その勇士は）きわめて背高く、おそろしかつた。しかして、ヴオロジメルはおのれの勇士を出した。しかしてベチエネギの勇士は彼を見て笑つた。というのは（こちらの勇士は）中位の体格だつたからである。しかして、両軍の間の場所をはかつて、彼等（二人）をそれぞれに向わしめた。しかして彼等（二人）は取り組み合つた。（二人は）互いに、し

つかりと取り組み合つた。(こちらの勇士は)ベチエネギ(勇士)を片手で死ぬほとしめあげ、地上に彼をたたきつけた。しかし、ベチエネギ人たちは叫び声をあげ、逃げ出してしまつた。ルシはその後を追つて斬り殺し、しかし彼等を追い払つた。そこで、ヴォロジメルは喜び、(その)浅瀬のところに町を建て、それをベレヤストラヴリと名づけた。というのは、(その)下級従士が栄光を奪い取つた(ベレヤ・ストラヴァ)からである。ヴォロジメルはそこで彼及びその父を大いなる勇士にした。ところで、ヴォロジメルは、勝利と大いなる栄光と共にキエフにもどつた」。

この一節は、ベレヤストラヴリの町にちなんだ物語であると共に、その物語は、公や武人や、支配階級の伝承ではなく、完全に、ブイリーナに近い、全くの民衆の伝承作品であつたにちがいない。物語られている題材からして、ブイリーナの話をもどまざらぬと思ひ出させる。年代記者たちが、この物語の一節に、どれほど手を加えて、『過ぎし年月の物語』の中へ織り込んだにしても、その表現のほとんどすべてが、庶民の言葉に由来することをかくせなかつた。語彙が何よりもそれを有力に証明しているし、文節の区切りにしても、そうである。年代記の中に古い庶民の言葉使いの最も鮮やかな反映を求めるとすれば、この一節を除いて、他にその典型を求めるとは困難であらう。この一節のほとんど総ての言葉使いは、古いロシアの庶民の言葉から生まれたものであると考へてよい。『死ぬほど』〈до смерти〉などという一つ一つの庶民的表現をこの一節から抜き取つて来て説明する必要はないであらう。年代記者の手が加えられなかつたとも見られるほど、言葉使いの端々までが、庶民的表現を思わせるからである。

庶民的な言葉使いが巧みに記述文の中で利用された個所には、この他に、例えば、6527(1019)年の項の後半を取りあげることが出来るであらう。多くの年代記は、この項をヤロスラフ〈Ярослав〉とスヴィヤトポルク〈Святополк〉の戦いの記述に

当てている。スヴィヤトボルクを年代記者たちは、『呪われたる』
《оканьный》と呼び、グレブ《Глеб》を殺害した彼を憎悪し
て『この呪われたる悪しきもの』《съ оканьный и злы》
と名づけて記述して来たが、遂に彼がヤロスラフに追いつめられ
て生命を絶つ個所に及ぶ。憎悪の念が庶民の間にこそ深かつたこ
とを年代記者は説明的に記述することを避けて、此處で、庶民の
口の端にのぼつてゐる言葉をそのまま利用するのである。即ち、
『ところで、彼の墓は今日に至るまでも荒野にあり、そこからは
悪しき臭氣が発散している』《Есть же могила его въ
пустыни и до сего дне, исходить же отъ нея
смадь золь》とある。これこそ、全く庶民が口頭で物語る説
話の結びの言葉そのままではないか。

ところが、このスヴィヤトボルクを打ち果したヤロスラフが、
都キエフに戻つて落ち着く最後の結びにおいても、再び、鮮やかに
庶民の表現が利用される。『ところで、ヤロスラフはキエフに
坐した。勝利及び大いなる功績を示して、おのれの親兵団と共に
汗をぬぐつた』《Ярославъ же съде Кыевъ, утеръ
пота с дружиною своею, показавъ побѣду и
трудъ великъ》とある中の『汗をぬぐつた』《утеръ пота》
こそ、典型的な庶民表現の利用である。この言葉は決して単に汗
をぬぐり動作だけをあらわしたものではない。先づ汗とは何であ
つたか。十一世紀初頭のロシア最古の文献である古代スラヴ語訳
のオスロトミールの福音書を以てこれを見ると、そのルカ伝中の
《ιδρως》の訳語に当てゝいるから、たしかに『汗』であつたに
ちがいない。ところが、この言葉は非常に古くから面白い成句を
なし易かつたものだと思われる。『功績』、『汗の結晶』、『遺
産』という方向に意味の内容が転回して行つたように思われる。
例えば、イバーチ一年代記6648(1140)年の項には、その様な
方向での意味で『見よ、偉大なるミスチスラフは、おのれの父、偉

大なるヴオロジメル・モノマハより、汗を引きついだ』〈Се бо Мьстиславъ великыи наслѣди от отца своего потъ Володимера Мономаха великаго〉とある。汗とは即ち汗の結晶であり、政治的な遺産であつた。勿論、この場合の遺産とは、安楽を保証するようなものを意味せず、むしろ、より大きな苦勞や努力を要求するような、マイナスの遺産である。『苦勞を引きついだ』ことになるとも言えよう。だから、それは『偉大なる』〈веникыи〉を冠して『大きな苦勞』〈великыи потъ〉という成句にもなつて、同年代記の6788年の項には〈взяти с великимъ потомъ〉『大いなる汗を以て占領する』という言葉として用いられた。とすれば、『汗をぬぐう』とは、『苦勞を終る』ということであると同時に、野戦から勝利をおさめて家郷にがいせんすることであつたと思われる。戦いに勝つて一段落し、ほつとすることであつた。『汗をぬぐう』〈утерети пота〉とは、少くとも、『過ぎし年月の物語』のこの項に関する限りでは、その意味で良いであろう。この言葉が如何にも労働庶民的な成句であるということの裏証のためには、残念ながらこれだけでは不十分であるように思われる。文字を使いこなす古代ロシアの文人たちが創り出した文語的成句であつてもよいからである。だが、面白いことに、それを否定する実例がある。文語的成句であれば、意味の内容が大きくくずれることは少いと考えられようが、『汗をぬぐう』という成句は、『過ぎし年月の物語』のように、『ほつとする』という^{から}、時によつて、とんでもない意味にずれ動いているのである。この意味の大きなずれ動きを、年代記者たちが、その時々、勝手気まゝに利用していたとすれば、その成句は、決して彼等の文語的成句ではなかつたはずである。年代記者は、この成句を『ほつとする』という意味とは全く正反対に用いたことさえあつたのである。例えば、イバーチ一年代記の6648(1140)年の項である。其処には、次の様な一節が

読み取れる。

『ヴォロジメルは、おのれ自からドン(河)に立ち、ルシの國のため多くの汗をぬぐつた』〈Володимиръ сам собою постоя на Дону и много пота утеръ за землю Рускую〉

此処における『汗をぬぐう』とは、『困難に耐える』、『苦勞する』、『努力する』という意味ではないか！『過ぎし年月の物語』の場合とは全く正反対である。勝利をおさめてがいせんしたり、一段落の後ほつとすることでは決してない。〈утерети〉という動詞は、現代ロシア語ならば、完了体であろうが、古い時代には、『ぬぐい終る』、『ぬぐいつゞける』という体の區別はほとんど認められない。だから、体の區別の使い分けによつて、『苦勞しつゞける』と『ほつとする』とを表現し分けることはできなかつたであろう。

また、いづれの國にもまして、非常に長期間年代記が書きつがれ、書き写されて来たロシアでは、その仕事が文字通り聖なる業であつた以上、文人たちの文語による表現ならば、そのわくの内で正しく踏襲されたはずであつた。決して反対の意味で用じ成句が用いられることはなかつたと思われる。庶民の中に生きていたきわめて自由な成句が、年代記者たちによつて、それぞれの場所で効果的に汲み上げられて使用されたのであつた。だから、もし、裏から言うことを許されるならば、『過ぎし年月の物語』が1019年の項で『一段落してほつとする』という意味に用い、イバーチ一年代記が1140年の項でその反対の意味で用いた以上、この『汗をぬぐう』という庶民の成句は、少くとも、それぞれの作品が書きとめられた間、おそらくは百年ほども、庶民の間に交換しながら用いられていた成句であつたと言ふことができよう。そして、その庶民の言葉使いを充分効果的に年代記者が利用し得るほどに、既に古代ロシア語の庶民の口頭語は高い表現力の水準に達してい

たと言える。

この民衆の言葉使いの高い表現力が先に引用した力比べや一騎打ちのような豪傑話をさへえていた。その様な古い豪傑話は数多くの民衆の中に語りつゞけられて、キリスト教輸入の時代を迎えた。教会や寺院の建立にまつわる寺伝のようなものに、この豪傑話がたくみに織り込まれたこともあつた。語りつがれた寺伝の中に、その典型的なものを『過ぎし年月の物語』は、いくつか書きとめているが、そのうちで、豪傑話を基礎にし、言うならば、キリスト教的文人の言葉ではなくて完全に民衆の言葉になる物語を求めてみよう。6530(1022)年の項は即ちそれであるう。

В лето 6530.

Приде Ярослав к Берестю. В си же времена Мьстиславу сущю Тмутороканю, поиде на Касоги.

Слышав же се князь Касожьский Редая, изиде противу тому, и ставшема обема полкома противу себе, и рече Редая к Мьстиславу: "что

ради губиве дружину мери собою? Но съидеве ся сама борот; да одолеши ты, то возмеш именье мое, и жену мою, и дети мое, и землю мою; аще ли аз одолею, то възму твое все".

И рече Мьстислав: "Тако буди". И рече Редая ко Мьстиславу: "не оружьем ся бьеве, но борьбою". И ястася бороти крепко, и надолзе борющемася има, нача изнемагати Мьстислав, бе бо велик и силен Редая; и рече Мьстислав: "о пречистая Богородица! Помози ми; аще удолею сему, сзижю цескльвь во имя твое". И се рек удари им о землю, и вынзе ножь, зареза Редая; шед в землю его, взя все именье его, жену его

и дети его, и дань възложи на Касоги. И пришед Тмутороканю, заложил церковь святая Богородица, и созда ю, яже стоит и до сего дне Тмуторокани.

『 6530 (1022) 年.

ヤロスラフがベレスチエに来たつた。この同じ時に、ミスチスラフはトムトロカニにいて、カソギ（人たち）を攻撃した。これをカソギの公レデジャが聞いて、彼に向つて出撃した。しかして両軍が互に相對峙した時に、ミスチスラフに向つてレデジャが言つた。「何のために（我々二人は）お互いの間で親兵団を亡ぼすのか？むしろ（二人）自身が相会して戦おう。もしも汝が打ち勝つならば、わが領地、及び我が妻、及び我が子等を取るがよい。もしも我が打ち勝つならば（我が）汝のものを総て取ろう」と。しかしてミスチスラフが言つた。「さようにしよう」と。しかしてレデジャはミスチスラフに向つて言つた。「武器で以て打ち合はず、取り組み合ひで（やろう）」と。しかして（二人は）激しく取り組み合ひにかゝつた。しかして、永い間、彼等二人が戦つていた時、ミスチスラフは疲れはじめた。というのは、レデジャは大きくて強かつたからである。しかして、ミスチスラフが言つた。「おゝ、いと清き聖母よ！ 我を助け給え。もしも（我が）この者に打ち勝つならば、汝の名において教会を建てよう」と。しかして、かく言つて、彼を大地に打ちつけ、しかして刀を抜いて、レデジャを斬り殺した。彼の土地に侵入し、彼の総ての財産、彼の妻及び彼の子等を取り、カソギ（人たち）に貢税を課した。トムトロカニに帰り来たり、聖母教会の基礎をおき、しかしてそれを築造した。その教会は今日に至るまでもトムトロカニに立つている。」

これは、キリスト教輸入後に宗教人や文人の創つた寺伝的物語ではない。明らかに、先に引用したヴオロジメルの家臣が牡牛を

も打ち殺し得た力で敵の代表者と一騎打ちをする物語と全く同質のものである。いづれはその豪傑によつて打ち負かされる相手が巨漢で力が強かつたという内容まで同じであり、一騎打ちによつて勝負を決めようとする物語の内容も同じである。力が強く、巨漢である相手を味方の豪傑は小柄な体でありながら、『大地に打ちつける』〈ударити им о землю〉というくだりまで同一である。面白いことには、その打ちつける折の言葉使いまで完全に同じではないか。即ち〈им о землю〉……そのまゝに訳せば、その男をもつて大地を打ちすえるというのである。寸分違わないような内容を、これまた寸分違わない用語で述べているのである。

然も、この後者の一騎打ちの物語には、まざまざと庶民的表現が数多く顔を出している。例えば、ミスチスラフにレデジヤが提案する言葉〈не оружьем ся бьевъ, но борьбою〉『（我々二人は）武器を以て戦おう』という個所の如きものはそれである。『（我々二人は）お互いに自分で取り組み合いをして相まみえよう』〈съидевъ ся сама бороть〉に見えるスピン形 боротьもまたこの同じ言葉使いであることに気づくであろう。普通、記録文献にみられる〈бороти〉という動詞は総て、『戦う』〈воевать〉ことであつて、あくまでも戦争をすることであつた。決して、素手での取り組み合いを意味したことはなかつた。勿論、例えば、古代スラヴ語 брати、古代高地ドイツ語 perjan, berjan, (うつ)、ラテン語 ferio, ferire、サンスクリット bhara (戦)に対応する言葉ではあつても、取り組み合いでの優劣決定を意味するために古代ロシア語の文献がこの言葉を用いたことはなかつた。動詞としてではなくて、名詞の形〈борь〉或は〈борьба〉としては、多く、ラテン語の〈certamen〉に当るものとして用いられて来た。その内で、〈борь〉という形は、古代ロシア語文献に数多く用いられて、やはり、『戦闘』を

意味したが、不思議なことに、《борьба》という形では、ほとんど、出現しなかつた。スズネフスキーさえも、この形での用例を、『過ぎし年月の物語』のまさにこの個所だけをしか示し得なかつた。そして、肉体だけの取り組み合いを意味するものとして、そのために、彼はラテン語だけでcertamenという註をつけるにとどめたのであつた。古代ロシア語の文献には出現することの少ない内容の言葉とは、即ち、文献語からは遠い庶民の口頭語であつたと考えてよいであらう。そして、何よりも、そのことは、年代記者が、これを直接話法の『』印の中だけでしか用いなかつたことによつて確認されるとしてよいであらう。ともあれ、庶民の口頭語が見事に一つの戦いの術語をさえ創り得ていたことを知ることができる。

戦争の決定的な勝利を誇らしく物語り、敵の完全な敗北をあざ笑いよきな、至つて直接的表現を取つた言葉使いが、庶民の言葉から汲み取られて、物語の結び言葉に用いられることがあつた。惨々に敵は敗退し、打ちひしがれ、残つたものは、いまだに『今日に至るまでも逃げ廻つてゐるという』という結びの言葉である。おそらくは、子供だましに近い民衆説話の結びの言葉がそのまま用いられたものであらう。『過ぎし年月の物語』の中には、しばしば、この庶民の結びの言葉が用いられている。ラヴレンチーをはじめとする各年代記の、例えば、① 6544(1036)年の項の終り及び、② 6568(1060)年の項にある次の様な個所は各々その典型的なものである。

(1)..... и бысть сеча зла, и одва одоле к вечеру Ярослав. И побегоша Печенези разнѡ, и не ведяхуся камо бежати, тоняху в Сетомли, ине же в инех реках, а прок их пробегоша и до сего дне.

『……しかして激烈な戦いがあつた。夕方近くになつて、ヤロスラフはかるうじて勝つた。しかして、ペチエネギ(人たち)

は、四方八方に逃げた。しかし、何処へ逃げるべきかを（彼等は）知らなかつた。（彼等は）セトムリ（河）に、他の者たちは他の河でおぼれ死に、彼等の残余の者たちは今日に至るまでも逃げ廻っている』

この〈пробегоша и до сего дне〉『今日に至るまでも逃げ廻っている』という庶民の言葉が、この引用文の冒頭の一節『しかしして激烈な戦いがあつた』〈и бысть сеча зла〉という完全に文献記録語、特に年代記特有の決り文句に対応して締めくゝりに用いられたことは注目しておきたい。冒頭の一節が、もしも、締めくゝりの一節と同じく庶民的口語なら、『しかしして大いなる戦いがあつた』〈и бысть бой велик〉となつたはずである。ところが、そうしないで、高い文体のまま〈и бысть сеча зла〉とし、縮びを庶民口語表現でとめたのはどうしてだろうか。庶民口語表現が、冒頭の高い文体に充分対応し得るほどまで表現水準を高めていたからに怪かならない。だからこそ、締めくゝりの決り文句のようにも使用されたのである。

(2) В лето 6568,

Преставися Игорь, сын Ярославль. В сем же лете
Изяслав, и Святослав, и Всеволод, и Всеслав,
совокупивше вои безчисленны, поидоша на конех
и в лодьях, безчислено множество, на Торкы.
Се слышавше Торци, убояшася, пробегоша и до
сего дне.....

『6568(1060)年。』

ヤロスラフの子、イゴリが死去した。この同じ年、イジャスラフは、スヴイヤトスラフも、フセヴオロドも、フセスラフも、無数の戦士を集め、馬及び船で、数えきれぬほどの大軍を以て、トルク（人たち）に向つて進攻した。トルク（人たち）はこれを聞いて、驚怖した。（彼等は）今日に至るまでも逃げ廻っている』

この様に庶民の言葉は既に高い文体に組み込まれるまでに成長し、時には特別の術語にさえ生まれ変わり得ていた。古い庶民の古代ロシア語は、年代記が書きはじめられる以前から、即ち、キリスト教文化の輸入以前から、キリスト教文化を撰取し、表現するに充分な発達と成長をとげていたと言えよう。キリスト教の教義は勿論のこと、主流的な文化をも、時には、主流の外側にまとわりつく民俗学的文化をも、古代ロシア語は充分に訳し込み得たし、また表現し得た。ビザンチンから伝わる文献上の、或は口うつしによる説話をまで楽々と充分に消化し得たのである。年代記者だけが消化し得たのではなくて、多くの人々が消化し得たものこそ、年代記者が書きとめたのである。6572(1064)年の項の後半に書きとめられた天兆の物語は、その恰好の例であろう。其処には次の様に書きとめられている。

В си же времена бысть знаменье на западе, звезда превелика, луче имуши акы кровавы, въсходящи с вечера по заходе солнечнем, и пребысть за 7 дний. Се же проявляше не на добро: посем бо быша усобице много и нашествие поганых на Русьскую землю, си бо звезда бе акы кровава, проявляючи кровопролитье. В си же времена бысть детищъ ввержен в Сетомль, сего же детища выволокоша рыболове в неводе, его же позоровахом до вечера, и паки ввергоша и в воду, бяшетъ бо сиче: на лици ему срамнии удове, иного нелзе казати срама ради. Пред сим же временем и солнце пременися, и не бысть светло, но акы месяцъ бысть; его же неведгласы глаголють снедаему суцу. Се же бывають сича знаменья не на добро, мы бо по сему разумеем. Якоже древле,

при Антиосе, в Иерусалиме, случися внезапно по
всему граду за 40 дний являтися на въздусе на
коних ришюшим, в оружьи, златы имуца одеже, и
полкы обоявляемы, и оружьем двизающимся; се
же проявляше нахоженье Антиохово на Иерусалим.
Посем же при Нероне цари в том же Иерусалиме
возсия звезда, на образ копийный, над градом;
се же проявляше нахоженье рати от Римлян. И
паки сице же бысть при Устиньяне цари, звезда
возсия на западе, испущаючи луча, юже прозываху
блистагицю, и бысть блистаючи дний 20, посем
же бысть звездам теченье, с вечера до заутрья
, яко мнети всем, яко падають звезды, и паки
солнце без лучь съяше; се же проявляше крамолы,
недузи, человеком умертвие бяше. Паки же при
Мавриккии цари бысть сице: жена детиць роди без
очью и без руку, в чересла бе ему рыбий хвост
приросл; и пес родися шестоног; в Африкий же
2 детища родистася, един о 4-х ногах, а дру-
гой о двою главу. Посем же бысть при Костянтине
иконоборци, сына Леонова, теченье звездное бысть
на небе, отторваху бо ся на землю, яко видячим
мнети кончину; тогда же въздух възлияся пове-
лику. В Сурри же бысть трус велик, земли раз-
седшися трий поприць, изиде дивно из земле
мьска, человечьским гласом глаголющи и про-
поведаючи наитье языка, еже и бысть: наидоша
бо Срацини на Палестиньскую землю. Знаменья
бо в небеси, или звездах, ли солнци, ли
птицами, ли етером чим, не благо бвають: но

знаменья сия на зло бываютъ, ли проявленье
рати, ли гладу, ли смерть проявляютъ.

『この同じ時に西方に天徴があつた。血の如き光をもつ、極めて大きな星が夕方から、日没の後に、登つて、七日間あつた。このことは善きことをあらわすものではなかつた。というのは、この後には、多くの内乱と、異教徒たちのルシの国に対する来襲があつたからである。ところで、この星は、流血をあらわして、血のよう（な色）であつた。この同じ時に、一人の子供がセトムリ（河）に捨てられた。この子供を、漁師たちが網で引きあげた。この子供を夕方まで（彼等は）見物して、再び彼を水の中へ投げ捨てた。というのは、（この子供は）かようなものであつたからである。（即ち）、その顔には恥づべき器官が（あつた）。その他のことは恥の故に言うことができない。ところでこの時に先だつて、太陽も変化した。しかして、（太陽は）明るくなくて、あたかも月のようであつた。それを、文盲（の人々）はむしばまれていると言つている。ところで、これは良きことへの前兆ではないものだ。というのは、我々は次のことによつて知つてゐるからである。即ち、昔、アンテオフの時代に、イエルサレムにおいて、突然、起つたことなのだが、全市にわたつて四十日間、馬に乗つて疾走し、武器をよろい、黄金の着物を着て、軍隊が空中に現れ、しかして、武器を振り動かして（見えた）。これは、イエルサレムに対するアンテオフの来襲を予告したのである。その後、ネロ帝の時代に、この同じイエルサレムで、町の上に楡の形をした星が輝き出した。これはローマからの軍勢の来襲を予告したのである。しかして再びウステヤン帝の時の時代に、こんなことがあつた。（即ち）星が西方において輝きだし、（人々が）それを燈明と名づけた光を發しつゝ、二十日の間、輝いていた。このことの後、夕方から翌朝にかけて、（諸々の）星の流れがあつた。（多くの）星が落ちるのだと總ての（人々）には思われたほどであ

る。しかして再び太陽が光線なしに輝いた。ところで、このことは、反乱、人々の病氣及び死を予告するものであつた。ところで、また、マヴリキー帝の時代に次の様なことがあつた。(一人の)女が、眼もなく、手もない子を生んだ。この子の後脰部には魚の尾が生えていた。しかして、六本足の牡犬が生まれた。アフリキー(フラキヤ)では、また、二人の子供が生まれ、一方は四本足で、他方は二つ頭であつた。ところで、この後、レオの子で聖像破壊者であるコステヤンチンの時代に、天に星の流れがあつた。(それが)地上に落ちて来たので、見た人々は(世界の)終りだと考えたほどであつた。その同じ時に、空気は非常に乾いた。スリヤ(シリヤ)では、また、大きな地震があり、大地が三ボブリシチエも裂け、地下から、不思議にもラバが出て来て、人間の言葉で物を言い、民族の進攻を予言したが、それは、(その通り)実現した。と言うのは、スラツイン(サラセン人)がパレスチナの地を進攻したからである。天における、或は星々における。或は、太陽における、或は鳥たち、或は他の何物かによる前兆は、善きことではないのである。しかし、かくの如き前兆は災厄を示すものであり、或は、軍勢の出現、或は飢え、或は死を予告するものなのである』。

さて、庶民の言葉が、特定の術語をさえ創り得るほどに発達していたことを示す例に話を戻してみよう。6601(1093)年の項に、ラヴレンチー年代記をはじめとする各年代記は、面白い言葉を用いている。それは、ボロヴェツ人たちの侵入を記録した一節である。

« и Половци пришедше къ валови, поставиша стягы свои, и налегша первое на Святополка и взломиша полкъего »

『しかして、ボロヴェツたちは土塁に近づき来たり、おのれの旗を立て、しかして、先づオーにスヴイヤトボルクに向つて攻撃

を加え、彼の軍隊を打ち破つた』

此處における『軍隊を打ち破る』〈взломнша полкъ〉という言葉に注目したい。полкъには『戦争』、『遠征』を始めとして『軍隊』、『軍勢』から『部隊』、『部分』、『陣営』、『人々』、『集団』に至るまで多くの意味を古代ロシア語は含んでいた。その内の『軍隊』という意味を取りあげて、それを『打ち破る』〈взломити〉とする表現は、多くの古代ロシア語の文献の中で、この一個所を探し出すのが精一杯であつた。具体的には、軍隊をほとんど皆殺しにするように打ち破つたことを意味したのではない布陣し、統制され、有機的に各部署が動いていた軍隊を、攻め込むことによつて、大混乱にまき込んだということである。打ち殺して、全滅させたということではなかつた。『打ち破つた』〈разбити〉、〈ударити〉、〈убити〉、〈удавити〉、〈раздавити〉のではない。〈взломити полкъ〉とは、全く古代ロシア語が独自に創り出した見事な術語であつた。イパーチー年代記に見える〈бѣгу ятися〉『逃亡を摂る』——→『逃亡する』『逃亡し出す』、同じ年代記の〈не время〉『時ではない』——→『不適當である』、ラヴレンチー年代記にみられる〈вести за кого〉『誰々のところへ連れて行く』——→『嫁にやる』、〈водить ротъ〉『誓いにみちびく』——→『誓わせる』、〈воевати〉『戦う』——→『破壊する』、等々、或は、例えば『戦争』〈война〉を使用して、〈ити на воину〉、〈ити в воину〉、〈выходити на(в) воину〉、〈ехати на(в) воину〉、〈ходить воиною〉、〈наѣхати воиною〉、〈прийти воиною〉等に組みかえる言葉なども、総て、庶民用語に發した術語的な言葉であつた。この様な例を、『過ぎし年月の物語』の中に拾ひあげて行けば、おそらくきりがつかないほど多いであろう。

これは要するに、ロシア年代記、中でも、最古の『過ぎし年月

の物語』の用語は、非常に多く、古い口頭語に依存していたといふことなのである。年代記は、勿論、古いロシア社会の歴史的な現実を反映したものにはちがいないが、むしろ、それ以上に、その現実の中で実際に喋られていた言葉を生き生きと伝えるものなのである。実際に喋られていた口頭語の最も直接的な影響を、我々は、直接引用で『』印をつけるべく年代記者が書きとめた個所に、また、年代記者が時には一人称で進める物語の個所にも、充分認めることができたのであつた。そして遂には、古い当時の術語の中にさえ、民衆口頭語の強い影響のあとを見ることができたのである。

『過ぎし年月の物語』を歴史書であるとするにしても、文学書であるとするにしても、或は古代ロシア語の宝庫であるとするにしても、それぞれの語学、文学、歴史の面での最も独自の、最も核心に近い、最も興味ある内容は、結局、古いロシア社会の各層の口頭による文化を基礎にしたものであつた。

しかし『過ぎし年月の物語』が基礎にし、よりかゝり、或は素材として利用したものの総てが、口頭による古い文化だけであつたわけではない。十一世紀から十二世紀にかけての、文字による文献もまた此処には多く利用されている。口頭文化から文字文化への、まさに、過渡期に創られた作品であつた以上、次には文字文化の面での検討を行わなければならないであらう。

— K —

伝承作品を中心とし、庶民の言葉使いまでも含めた文字以前の古いロシアの口頭文化が、文字とキリスト教の輸入後、文字文化へ移行しても、全く変質してしまはずはなかつた。『過ぎし年月の物語』の検討を口頭文化的な面から、文字文化的な面へ移すにしても、其処に全く異質的なアプローチが生まれることはない。

古代ロシア語による，正確には中世ロシア文献文学は，口頭伝承文学にさへえられながら，文献文学としての独自性を永い間かゝつて創り出しつゝ，年代記へ数々の投影を示して行つたのである。

『過ぎし年月の物語』を時には部分的に，時にはほとんど全部を含み，或は，ほとんど含むことなく，書きつがれた多くのロシア年代記は，文字以前の口頭文学から素材と内容を汲み取りつゝ，思想的にも，用語や文体の上からも，最後まで，口頭伝承文学の色合いを保ちつゞけた。輸入されたキリスト教的文化と，それにまつわる文学文化或は説話文化は主として，中世文献的なワクを古くからのロシア伝承にはめこんだに過ぎない。特に年代記者は聖書をはじめとするビザンチンの書物文化に通じた僧であつたために，その書物文化のワクの中へ記述を押し込もうとしたのである。或は，ロシアの物語をキリスト教的に正当化し，批判し，非難し，或は説明した。何よりも，記述に際して取捨撰択した。その折に，多くの古いロシアの伝承文学は捨て去られたであろう。然も，年代記者たちは決して一人ではなかつた。それぞれの記者たちの好みによつて，その取捨撰択の手法や質が多少は異つていた。そして，その状態は何百年も続いた。当然，ルン(Русь)の古い文学作品(口頭伝承物であると，文字以後の文献的作品であるとを問はず)は，そのために，決して，原初の形態のままに現在に残存し来ることはなかつた。年代記に限らず，世俗的物語も，聖者伝や一代記も，単一の作家のものとしてではなくて，それらを転写し，転写させた愛読者たちの手をくゞりつ抜けている間に，その作品の著者は，遂に単数から集団へ移つた。多くの人が，時には数百年に及んで，その作品の編集加工者になり，著述委員会を形成し，集団的な著者群を勤めた。だから，今更，『過ぎし年月の物語』の著者(編集者)をネストルであつたとしてみたところで，彼の書きしるした原型テキストを再構成してみることは，およそ，不可能であるし，そうすることへの努力にはいかほどの

価値もないであろう。『過ぎし年月の物語』にしる、それを含む数多くの年代記にしる、種々様々の時代の、種々様々の作品の集成でしかない。

然し、『過ぎし年月の物語』をはじめとする多くの年代記の編集加工者たちには、重要な一つの共通的特長があつたことを忘れてはいけない。それは彼等の独特の歴史観とでもいうべきものの共通性である。年代記の形成は実にその共通的な歴史観にさへえられて一貫的であり得たのである。年代記を書き写し、再構成し、書き抜き、書き加える折に彼等は、以前の古い物語や記憶や記録を、まず保存することに主眼を置いたのである。それらの、より以前の資料を彼等は揃つて、先づ何よりも、おのれの文化の栄えある過去の事実記録だと考えて尊重した。多くは年代記記録に参画する者であると共に、より古いものの愛読（聴）者でもあつた彼等は、それらの古い物語や記録を文学作品と知りつゝ（或は知らずに）、その中に歴史事実をみつめ、求め、その物語や記録における写実性をではなくて、事実注目しつゝけたつもりでいた。彼等が関心をもつた対象は、それらの物語や記録の物語的な筋にあつたのではなくて、其趣に語られる事件そのものにあつた。天啓的な奇跡や、天空に現れる奇跡的な前兆や、或は越自然的な出来事に就てさえ、彼等の多くは、それを現実の事件と考えた。そして、自分が生きている時代の、自分が直接目撃し、直接参与し或は、当事者から聞いた多くの出来事の物語を書き加えていつたのである。そして、その様な新しい書き加えの部分は、多くの場合、各年代記の終末の一部分だけに限られた。十六世紀に至るまで、その様にして、編集されながらも、各々の終末の一部分だけが書き足されて、結局は、現在に残るような実にぼろ大なるロシア年代記が積みあげられた。だから、各年代記の各写本のそれぞれの終末の一部分とせば、それ以前の文章の書き抜きや再編集ではなくて、それぞれ独自の言葉で綴られた新しい作品なの

であつた。そして、それはまた、次の時代の次の年代記者には、尊重されるべき事実記録とみなされて書き抜かれ再編集されて行つた。

だから、どの年代記者も、おのれの年代記を編集し書きつける折には、先づ、先人たちの伝え書き残した作品を入手することに最大の労力を費したのである。入手すべき対象は、既に書かれた年代記は勿論のこと、歴史上の記録文書、条約文、使節のたづさえた文書、公や貴族たちの覚え書き、そしてまた、歴史的な事件を主題にした文学的な物語、聖者伝、その他、あらゆる古きものの記憶であつた。その様な資料は、時には余りにも数多く、余りにも多彩であつた場合もあろうし、時には限られた少数のものであつたこともある。各年代記を読み比べて見るとき、その辺の事情は、まざまざと想像できる。然し、今、そのことは、しばらくおくとしよう。年代記者たちは、その様にして集めた資料(!)を年代順に結びつけ、書き抜き、重複を避けながら、年代順にそれらの資料を配置した。例えば、聖者の一代記のようなものは、その聖者の死亡した年に、数年連続してつゞいた戦争などの物語は(——多くの場合、古い年代記ほどそれは伝承作品であつたが——)、年毎に分割して、それぞれに話の山場を設けつゝ、各年に振り当てゝ配置して書き込んだ。年毎に分割・配置して、古い物語や資料を記述し、書き写し編集して行くという、この年代記述の構成は却つて、その年々の項への分割のために、次々に新しい物語や記録を持ち込んで書き加えるには、実に都合のよい役割を果たしたのである。勿論、年代記者たちは、単に書き足し、記録の量をふくらませるだけを仕事としていた訳ではない。時には、物語や資料の配置記述に際して、その間に起る矛盾を排除し、時には、相互間の連繋を求めて、つじつまを合わさなければならなかつた。勿論、その際には、各年代記者の属する地域社会の利害等から起る政治的感覚や、宗教的傾向によつて、取捨撰択や解

派の遠い生まれ、各年代記のバリエーションを生んでいった。かくして、年代記の古い部分は、古ければ古いほど、種々様々なジャンルの作品と、種々様々な時代の種々な傾向や好みが集まり重なり、結局、『過ぎし年月の物語』の如き最古の部分は、特に、形の上では、雑多な、鎖綜した、異質同居の作品の集大成の趣きを呈するに至つたのである。勿論、思想的にも其処には一貫性などあり得る筈はなかつた。もし、あるとすれば、それは単に中世ロシアのギリシア正教的感覚の共通性にすぎないであろう。或は、文字使用階級の封建的思想の共通性であつたであろう。だから、『過ぎし年月の物語』に書きしるされた数々の物語は、その個々の物語を個々のものとして検討すべきものであるかも知れない。そして、その個々の物語における特別な共通性を求めることによつて、それぞれの物語の出所が明らかに推察されるであろう。例えば、ロシアに初めて福音書を訳したオストロミールの子であつたヴィンヤタ〈Вьшата〉や、その子ヤン〈Ян〉の語つたと思われる物語を先に引用したが、それらは、古い親兵団の感覚にさへえられた物語で、古い親兵団員たちの中に生きていた数々の伝承や物語の一部分を反映し、彼等のイデオロギーを最も直接的に示すものであつた。この親兵団的イデオロギーの反映ということに尺度を置いて、これを特別な一つの共通性に設定してみる時、『過ぎし年月の物語』の中には、この類型での作品は、この他にもまだ数個を数えあげることができるのである。即ち、ラヴレンチー、トロイツキー、イバーチー、その他の年代記の各々 6479 (971) 年、6504 (996) 年、6524 (1016) 年、6581 (1073) 年、6583 (1075) 年の各項には、鮮やかな親兵団的イデオロギーの反映を読み取り得る部分があるのである。年代の古い順にその個所を具体的に引用しておこう。 上記各年代記の 6479 年の項。

..... и созва царь боляре своя в полату, и
рече им: "что створим, яко не можем противу

ему стати?" И реша ему бояре: "посли к нему дары, искусим и, любезнив ли есть злату, ли паволокам?" И посла к нему злато, и паволоки, и мужа мудра; реша ему: "глядай взора, и лица его, и смысла его". Он же взял дары, приде к Святославу. Поведаша Святославу, яко придоша Грьци с поклоном, и рече: "възведете я семо". Придоша и поклонишася ему, положиша преди им злато и паволоки; и рече Святослав, кроме зря, отроком своим: "схороните". Они же придоша ко царю, и созва царь бояры, реша же послании: "яко придохом к нему и вдахом дары, и не зре на ня, и повеле схоронити". И рече един: "искуси и еще, посли ему оружие". Они же послушаша его, и послаша ему мечь и ино оружие, и принесоша к нему; он же прим, нача хвалити и любити, и целова царя. Придоша опять ко царю, и поведаша ему вся бывшая, и реша бояре: "лют се мужь хоче быти, яко именье не брежетъ, а оружие ем-леть; имися по дань". И посла царь, глаголя сиче: "не ходи к граду, возми дань, еже хоцещи". За малом бо бе не дошел Царяграда. И въдаша ему дань; имашеть же и за убьенныя, глаголя: "яко род его возметь". Взя же и дары многы, и въз-ратися в Переяславецъ с похвалою.....

「.....しかして、皇帝はおのれの貴族たちを宮殿へ呼びあつめ、しかして彼等に言つた。＼（我々が）彼等に敵対することができない以上、（我々は）何をなそうか＼と。しかして彼に貴族たちは言つた。＼彼に贈物をおくれ。彼をためしてみよう。＼（

彼が) 黄金や絹織物が好きであるかどうかを〃と。しかして、(皇帝は) 彼に黄金および絹織物および賢明な家臣を(一人)送つた。(人々は)彼に言つた。〃彼の眼差し、および顔付き、および彼の考えを見よ〃と。そこで彼は、贈物を持ち、スヴィヤトスラフのもとへ着いた。グレキが礼をつくして来たつたと(人々が)スヴィヤトスラフに伝えた。しかして(彼は)言つた。〃彼らをとへつれて来たれ〃と。(彼等は)来たつて、彼に礼をし、彼の前に黄金および絹織物をおいた。しかしてスヴィヤトスラフは横を向いたまゝおのれの下級従士たちに言つた。〃しまつておけ〃と。ところで、彼等は皇帝のもとへ帰り来たつた。しかして皇帝は貴族たちを呼びあつめた。そこで使者たちは言つた。〃彼のもとへ着き、贈物を渡した。しかして(彼は)それを見ずに、しまい込むように命じた〃と。しかしてある者が言つた。〃さらに彼をためせ。彼に武器をおくれ〃と。そこで、彼等は彼の言うことを聞いた。しかして彼(スヴィヤトスラフ)に剣および他の武器を(人々は)送つた。そこで彼はうけとり、ほめ、見とればじめた。しかして(彼は)皇帝に感謝した。彼等はふたたび皇帝のもとにもどり、彼にすべてのありしことどもを物語つた。しかして、貴族たちは言つた。〃みよ。(彼は)猛き男となるであろう。財物に關心をもたないで、武器をうけとるからである。貢税を払え〃と。しかして皇帝は使者を立ててかく言つた。〃都へ来たるな、欲するだけの貢税をとれ〃と。というのは、(彼は)ツアリゴロドに殆んど達せんばかりであつたからである。しかして(彼らは)彼に貢税を払つた。ところで(彼は)戦死者に対しても、〃その一族がとるであろう〃と言つて、(貢税を)とるうとしていた。しかして(彼は)多くの贈物を取り、ベレヤスラヴエツに大いなる賞讃につつまれて帰つた』。

この一節が最も底にもつ素材が既に失われた親兵団の古い英雄叙事詩であつたことは既に述べたところである。これが、書物向

きに幾度か編集される内に、この形にまとめられた。そして、ス
グイヤトスラフという光輝ある公の物語の一斑を形成し、親兵団
の理念を映し出した。財物や富や華美さへの軽視と、武人として
の剛気で素朴な實際行動への重視とが、武器愛好の物語として定
着したのである。親兵団の高い理念となるべき『富への軽視』を
年代記者は、この様に古い叙事詩を書き取り、或は他の書物から
編集して、幾度か『過ぎし年月の物語』に定着させている。スウ
イヤトスラフのこの物語より二十五年後の、即ち6504(996)年
の項に、次の様な一節がある。酒宴で不平を鳴しはじめた親兵団
にヴオロジメルが答えるところである。富にもまして武人たちを
大切にするという形で

Се слышав Володимер, повеле исковати лжице
сребрены ясти дружине, рек сице: "яко сребром
и златом не имам налезти дружины, а дружиною
налезу сребро и злато, якоже дед мой и отець
мой доискася дружиною злата и сребра". Бе бо
Володимер любя дружину.....

『これを聞いていヴオロジメルは、親兵団が食うために銀のさじ
をきたえ造る様に命じてかく言つた。"銀及び黄金を以て親兵
団を求めることは(我々は)できないであろうが、親兵団を以て
(我は)銀や黄金を求めるものである。我が祖父及び我が父は親
兵団を以て黄金と銀を求めた"と。というのは、ヴオロジメルは
親兵団を愛していたからである.....』

また6524(1016)年の項の、ヤロスラフがキエフの王座につ
く物語の中にも、次の様な個所を読み取ることができる。先には
ラヴレンチ一年代記をはじめとする数個の年代記からこの同じ年
代の項を引用したが、其処には読み取れなかつた一節をノヴゴロ
ド一年代記から此処に引用しておく。

И в ту же ночь из Киева сестра Ярославля
Передслава присла к нему вестъ: "отець ти
умерл, а братья ти избиена". И се слышав,
Ярослав заутра собра новгородцов избыток,
и сътвори вече на поле, и рече к ним: "лю-
бимая моя и честная дружина, юже вы исекох
вчера в безумии моем, не топервое ми их златом
окупите". И тако рече им: "Братье, отец мой
Володимер умерл есть, а Святополк княжить в
Киеве; кою на него понти; потягнете по мне".

『しかしてその夜、キエフからヤロスラフの妹ペレドслава
が彼に報らせをつかわした。『汝の父が死んだ。しかして汝の兄
弟も殺された』と。しかして、これを聞いてヤロスラフは翌朝多
くのノヴゴロド人たちを集め、しかして、野において民会を催し
た。しかして（彼は）彼等に言つた。『我が愛する、しかして、
名誉ある親兵団をば、汝等よ、昨日、我がおるかさの故に、打ち
果した。我はかくなりて今彼等（親兵団）をば黄金にて買うこと
はできぬ』と。しかしてまた（彼等に、彼は）かく言つた。『兄
弟よ、我が父、ウオロジメルは死んでしまつた。しかして、スヴィ
ャトполクがキエフに公として坐している。彼に向つて進攻しよ
うと思ふ。我があとにつゞけ』と。』

このノヴゴロド才一年代記にあつては、親兵団と公との關係及
び親兵団と公の周圍にあつた他の軍隊との關係が鮮かに書きとめ
られている。意氣投合し、正義に相通ずることによつて、義のため
にこそ親兵団は公に奉公していたもののように読み取れる。親
兵団とは金銭によつて、或は、権力によつて、集められた武人た
ちではなかつた。正義に相通ずるところなくしては、公は親兵団
をかゝえることはできなかつた。まして、金銭の如きものでは到底
招集などできるものではなかつた。親兵団の心意氣こそが最も
重要なきづなであつた。そのような親兵団を或は打ち果し、或は

散じさせたことをヤロスラフは愚かなことであつたと後悔するのである。親兵団がどのような内容の人たちから成り、どのような機能をもつていたかを知る上で、ノヴゴロドオ一年代記のこの年号の項は非常に面白い。特にヤとい入れられたゲルマン系の外人部隊であつたヴァリヤギ《Варяг》たちとの関係などもこゝには端的に描き出されているので、ついでに引用しておくことにする。上に引用した一節の直前の部分である。(ラヴレンチ一年代記、トロイツキー、イパーチー、その他の年代記にはこの二つの部分は書きとめられていない)。

В Новгороде же тогда Ярослав кормяше Варяг много, бояся рати; и начаша Варязи насиллие дяти на мужатых женах. Ркоша новгородци: "сего мы насилья не можем смотрити"; и собрася в ношь, исекоша Варягы в Поромоне дворе; а князю Ярославу тогда в ту ношь суцу на Ракоме. И се слышав, князь Ярослав разгнеवासя на гражаны, и собра вои славны тысящу, и, обольстив их, исече, иже бяху Варягы ти исекле; а друзии бежаша из града.

『ところでその時ヤロスラフはノヴゴロドにおいて多くのヴァリヤギを、戦争をおそれて、養つていた。しかしてヴァリヤギたちは、既婚の女性たちに暴行をはたらきはじめた。ノヴゴロド人たちは言つた。"この暴行を我々は見ていることができない"。と。しかして、夜中に会し、ポロモンの屋敷でヴァリヤギたちを斬り殺した。ところで、(それは)ヤロスラフがその時、その夜には、ラコムに居たときのことであつた。しかして、これを聞いて、ヤロスラフ公は町の人々に対して激怒した。しかして榮えある軍勢千人を集めて、しかして、彼等をたぶらかして、かのヴァリヤギたちを殺したものを斬り殺した。ところで、他の者た

ちは町から逃げた』

この、殺され、或は町から逃げて散つた者たちを、黄金では買えないと嘆いたのである。それと共に、もとより親兵団がヴァリヤギたちの如く金銭で集つたものではないことを述べ、且つまた、親兵団気質にみられる財や富への輕蔑を惜しみたゝえたのであつた。この個所がノヴゴロドオ一年代記にのみあつて、他の古い年代記に見当らないのは、ノヴゴロドという特殊な商業自由都市で書きとめられた（編集された）年代記であつたことにもよるであらう。と同時に、かりに、古い伝承詩を素材にしたとしても、年代記は、やはり、相互に文献となり合いながら、編集され、書かれ、或は削られて出来上つて行つたものであることを物語るものであらう。再び親兵団的理念の話に戻らう。親兵団が金銭などで集められるものではないことを書きとめたのは、ラヴレンチ一年代記をはじめとする多くの年代記の 6581 (1073) 年の項である。

Изяслав же иде в Ляхы со именемъ многымъ, глаголя, "яко сим налезу вои", еже все взяша Ляхове у него, показавше ему путь от себе.

『ところでイツヤスラフは多くの財産をもつてリヤヒ人たちのところへ行つた。"これで、戰士たちを集めよう"と言いながら、その（財産）を全部リヤヒ人たちは彼からうばい取り、彼におのれのもとから道を示した（追放した）』

また、この記事より二年後の 6583 (1075) 年の項には、富にもまさるものこそが親兵団であるという内容が書きとめられている。同じくラヴレンチーをはじめとする各年代記である。

Се же лето придоша сли из Немец к Святославу, Святослав же, величаяся, показа им богатство свое; они же видевше безчисленное множество, злато, и сребро, и паволокы, и реща; "се нивчтуже есть, се бе лежить мертво; сего суть кме-

тые лучше, мужи бо ся доищють и больше сего"....

『この同じ年に、ネメツからスヴイヤトスラフのもとに使者たちが来たつた。そこで、スヴイヤトスラフは、誇つて、おのれの富を彼等に示した。ところで彼等は数限りなく多くの黄金を、しかして銀をも、また絹をも見て言つた。『これはつまらないものである。と言うのは、これは死んで横たわつているからである。こんなものよりも、勇士の方がまさつている。』というのは、家臣たちは、これ以上のものをも獲得するからである』と……』

如何なる富にもまして貴重なるものこそが親兵団であり、武人であるとする思想は、おそらく、その親兵団をかゝえていた公たちの側から、同時に、かゝえられていた親兵団そのものの内側から發出されて、公たちの考えに重なり、一層、鮮やかに、『過ぎし年月の物語』の中に映し出されたものであろう。年代記が、武勇賞讃の作品集であつたとしたら、この反映は、至極当然のことであつた。然し、年代記の当面の目的は決して武人たちの古い栄光と、武人たちの理念の賞揚にあつたわけではない。年代記が修道院において書かれたものであることを忘れてはならない。少くとも書き手（写し手）（編集者）の主観的な目的は宗教活動の一部であつたにちがいない。とすれば、今まで述べて来た多くの素材や基盤や、そして、何よりも、事件に対する親兵団的武人理念のようなものが、^{（11）}修道院的世界の中へ入り来たのであろうか。それに対する解答こそ、『過ぎし年月の物語』の正体を説く一つの重要な鍵になるであらう。『過ぎし年月の物語』がネストルの作品であると書かれているにしても、そのネストルと言う人物が、文字以前の世界から素材を汲み上げて、全く独創的に書きとめたものかどうかを解く重要な手がかりを一つ此処に求めてみよう。最後に引用した前述の6583年の項の一節には、実は、その前後に各々次の様な前書きと後書きがつけられていたのである。此処から話を掻ぐし出してみるとよい。即ち、その前書きとは、

В лето 6583.

Почата бысть церкви Печерская над основаньем Стефаном игуменом: из основанья бо Феодосий почал, а на основанье Стефан почал; и кончана бысть на третье лето, месяца иуля 11 день.

であり、後書きは、

Сице ся похваля Иезекий, царь Иудейск, к послом царя Асурійска, его же вся взята быша в Вавилон. Тако и по сего смерти все именье разсыпаша разнѣ.

である。前書きの意味は『6583(1075)年、修道院長ステファンの(建てた)基礎の上にベチエルスキー教会がはじまつた。』
というのは、フェオドシイが基礎から始め、しかして(その)基礎の上にステファンが始めたからである。しかして、三年目に完成した。七月十一日のことである』となり、これは完全に、寺伝とでも言うべきものである。そして、後書きの意味は、『これと同じように、ユダの王イエゼキイも、アスリアの王の使者たちに向つて自慢した。ところで、彼の(もの)全部は、バビロンに総て奪われてしまつた。同様にまた、この者(スヴィヤトスラフ)の死後には、総ての財産は四散してしまつたのである』となり、
バイブル(旧約)の世界の物語である。そして面白いことに、そのバイブルの物語を、ロシアのスヴィヤトスラフ公の物語の批判的説明に利用した。富にもまして親兵団や武人が最も価値高きものであるという武人的理念は、武人は富に関心を持つべきではないという本来の出発点から曲折して出て来たものであるのに、なお、それから遙かにかげはなれて、武人の理念を消し去ることによつて、富の無価値であることを宗教的な意味で述べ立てる題材に利用した。本来の出発点から曲折逆転した理念構成であつた。然もなお、ユダの王イエゼキイが自慢した相手をアスリヤ(アッ

シリヤ)王であるとしているが、バイブルによれば、本来、それは、バビロンの王でなければならなかつたはずである。

これらの点を考察する時、この年号の頃の物語は、実は三つの別々の出所から出たものであると言わなければならないであろう。一つは、前書をつとめた寺伝、中程のものは、ブイリーナ等にも見られる多少愚かしい富の自慢話と、親兵団的理念の反映した武人物語及びネエメツという言葉から見られるような外国(ドイツ)の流入した物語の混成であり、後書きの教訓的締めくくりは、バイブルの物語の誤謬をおかす程度の、たよりのない造り替えである。即ち、『これは、ペテエルスキー・フェドシー修道院の修道僧(ネストル)の年毎の物語である』《Се повѣсти временныхъ лѣтъ (черноризца Федосьева монастыря Печерьскаго — Нестера)》と銘打つていても(『古代ロシア研究』才一号 p. 1~p. 2 参照)『過ぎし年月の物語』は、また如何に、『原初』《Первоначальный》なものだと言ひ張つてみても、明らかに、多くのものからの精成作品であり、編集本であることを示している。だからこそ、親兵団的の傳承や理念も、民間的説話や傳承も、或は寺伝も、また、宗教的思想も、また公たち支配階級の政治理念も、此處には容赦なく入り込んで来たのである。もしも『過ぎし年月の物語』をはじめとする年代記が或る一つの統一的な目的——例えば宗教活動、或は政治的支配の正当化等々のうちのいづれか——にしばられた所から生まれたものであるとすれば、全く不器用で下手くそな編集構成であつたと言わなければならない。『過ぎし年月の物語』をはじめとする年代記を全体的に均一な作品と誤解し、一つの観点からだけ問いつめようとすることの愚かしさは、異々も注意されなければならないであろう。

さて、かくて、『過ぎし年月の物語』及びそれを含む年代記は、種々の題材と種々の出所から汲み取られ、且つ、種々の文体及び

用語を持つた作品集である。のみならず、その題材や出所に由来する種々のイデオロギーの集大成でもあつた。勿論、その種々な題材と内容とイデオロギーを雑然と並べたてたものであるというわけではない。其処には或程度一貫したそれぞれの年代記者の眼があつた。例えば、十一世紀末の親兵団が保有し、古い栄光をかかげ、歌いあげた彼等の思考ポーズは、それぞれの作品として汲みあげられて年代記に納められ、当世風の支配者（主として公たち）への警告と物言いや注文の役目を果すべく期待された。おそらくは、キーエフ・ベチエールスキー修道院で書かれた最初の年代記のものは特にそうであつたであろう。当世風の支配者とはその場合、多分、スヴィヤトスラフ公であつたであろう。そして、この年代記は、キエフからノヴゴロドに伝わり、ノヴゴロドという商業的自由都市では、その物言いのポーズが一層、反支配者的な発言として利用されつゝ、書き加えられ、編集し直されたもののように思われる。勿論、その間における修道院の僧たちであつた年代記者たちにとつては、公を中心とする各地の権力分野が、自己の汲み取つた題材や物語を運じて、どのように批判され、物言いをつけられていたかというようなことは、大して重要な問題ではなかつたであろう。修道僧である年代記者にとつて、重要なことは、公の権力への一定の批判ではなくて、いかなるものであるか、批判そのものが重要なことなのであつた。当世風の公たちの政治に対する古い親兵団の理念に根ざした論議こそは、期せずして、修道院の僧たちにとつても、また、自由を求める新しい貴族文人たちにとつても、利用価値の高いおあつらい向きの素材であつたのである。政治や権力にまつわるイデオロギーのみならず世界観という広い視野に立つて見ても、同じようなことが言えるであろう。勿論、年代記者たちは修道僧であつたために、その世界観は、総ての出来事を神の意志によるとする神意（摂理）説《провиденциализм》に依つていた。しかし、もしも、年代記

の総ての記事が、神意説を基礎とする世界観に完全に統一されて、首尾一貫していたものであるならば、ビザンチン神学を解く手だてとしての重要性だけに『過ぎし年月の物語』の価値がしぼられ得るであろう。ところが、其処における物語の記述や、事件の取りあげ方は、しばしば、その世界観のわくをはみ出しているから面白い。そして、そのはみ出した所においてこそ、却つて、ロシアの古い文化が大きく裸の姿をさらけ出したのである。公たちと貴族、文人、武人、或は庶民の息吹きや生の言葉は、むしろ、其処に聞きとられる。

年代記者たちの、年代記々述における態度は、ビザンチンより輸入された出来合いの世界観に依りながら、それが出来合いのものであつた為に、まともには彼等の骨肉になりきらず、おのれの国の出来事を追うに際して、常にちぐはぐな効用をしか果さなかつた。おのれの国の出来事を、ほぐし、解説し、組み立て、統一的に記述するには、彼等の借り物の世界観は余りに借り物であり、余りに貧弱すぎた。おのれ自身の思考や行動でさえ、キリスト教的輸入世界観では統卒しきれないものがあつた。そのちぐはぐさこそが『過ぎし年月の物語』を却つて、裸のロシア文化の映し手に仕立てあげた。その様にして映し出された多くの事件のうちで、本当に年代記者たちの意図する神意説的解説が板についていたのは、兇作、飢、疫病、大火、敵の来襲による荒廃、人の急死、或は日蝕をはじめとする天変などにすぎなかつた。かくして、年代記、特に『過ぎし年月の物語』における宗教的モーメントの如きものは、記述された事件や物語の内容をゆがめるほどの力は決してもつていなかつた。世俗の人たちの思考や感情や言葉が良く保存され伝えられている理由である。年代記の価値は、だから、むしろ、年代記者たちの意図の失敗から生まれたと言えるかも知れない。年代記が年号別或は項目別に綴られながら、その間に統一性或は均一性がなく、モザイクの様に多くの素材や物語や文献か

らの集成物であるのは、もう一つ、一人の記者によつて、冒頭から終末まで通して書き綴られたものではないことにも理由をもっている。それぞれに書き加え、書き抜き、書き続けた年代記者が、例えば、文体或は用語の上での手法の統一性を必要とは考えなかつたようだし、世界編の上からも、政治的思想の上からも一貫性をもたせるべきだとも思わなかつた。年代記は、この様に均一なものでもなく、一つの年代記について均一でない複数の書き手を想定することの必要なものである。年代記者の強い個性によるものではなくて、当時のロシアの時代、現実の動きが、そのまま、複雑に矛盾をはらみつゝ、結局は、モザイク鏡のように反映されたものであると言わなければならぬだろう。其処にもし、何等かの一貫性があつたとしたら、ロシアの文化の歴史のわくという一貫性であつたであらう。最古の年代記『過ぎし年月の物語』として、やはり、そのようなものである。『過ぎし年月の物語』が決して単数の著者の手になつたものではないことは、既に先に数多く引用した文章の質からも充分推察されるべき筈である。勿論、それらの引用文は、文献ではなくて伝承や口頭の作品によるものであつたし、著者ではなくして、編者が単数であつたとすれば、編者自身が編集に當つて一貫性をもたなかつたと考えるより仕方がないであらう。実はその編者でさえ、単数であつたとは考えられないが、それはさておき、編者らしきものが寄せ集めて来たものの内で、文献から持ち込んで来たものを次に具体的に検討してみることによつて。

—II—

先づ、『過ぎし年月の物語』が書かれた修道院の宗教的感覚とは全く無縁な内容のものとして目立っているのは、グレキ（ビザンチン）との間に結ばれた条約の記録である。おそらくは、ギリシア語と、当時のキエフの公たちの古代ロシア語との両語によつ

て書かれた条約文が、此処に間接的に書きとめられたのであろう。勿論、その条約文は既に『過ぎし年月の物語』の中にだけしか古い形としては残っていない。そしておそらくは、最初ギリシア語によつて書かれたものを、次に当時のロシア語に訳し、両者が互いに、それぞれのもを持つたのであろうが、その折の、古代ロシア語への訳そのものが、非常に不たしかであつたかも知れない。最初に書かれたギリシア語に対する理解さえ不たしかであつたであらう。その様な羊皮紙による現物が何度か書き写された末に、『過ぎし年月の物語』の中へ持ち込まれる時には、もう、本来の現物も、其処に書かれたと思われる文章の本来の意味の正確さも、年代記者にどれほど理解され得たであらう。最も文献的なものであつたが故に、最も理解に苦しみ、重要だと思ひながら、やはり、最ももてあました資料であつたにちがいない。口頭伝承によるものならば、聞き手の側に理解され得るよう言葉使いは少しづつ組み替えられて来たことであらうが、文献的であつたために、書きとめられた条約文は固定し、理解の域外に出た部分は、書き写し誤られ、書き落され、文節の切り方さえ不たしかになつた。そうなつてしまつてから、『過ぎし年月の物語』の中に織り込まれたのであらう。言葉の層としては最も古い部分であるとするにしても、実は、もともと、それはぎこちない翻訳語であつたと思われる。古い年代の条約文は、だから、極端に崩壊して、既に物語の一部分に組み込まれたものもあつた。例えば、6415(907)年の項の後半はその様なものである。明らかに、伝承と条約文文献の混合である。その後半に、条約文の名残りを書きとめようとして、この年の項は前半に伝承的物語を設定し、且つ、その設定に先立つて、英雄オレグ<Олег>が引き具した多くの種族名を列挙しつゝ、その中に『通訳であるチベルツイを』<Тыверци, яже суть Толковины>を加えた。(『古代ロシア研究』才三号; p. 4~p. 5参照)。そして、後半にみられる条約文の名残りとは、

次の様なものである。(『古代ロシア研究』才三号；p.11～
p.14参照)

да приходять Русь, хлебное емлютъ, елико хотятъ, и иже придуть гостье, да емлютъ мясину на 6 месяц, и злеб, и вино, и мяса, и рубы, и оwoщем, и да творять им мов, елико хотятъ: и поидуть же Русь домови, да емлютъ у царя вашего на путь брашно, и якоря, и ужа, и пре, и елико надобе.

この文章の直後に『グレキはこれを引き受けた』(И яшася Греци)と続いて、ギリシア側からの口上のように書きつゞけられるのである。とすれば、常識的には、和平交渉のロシア側からの要求文のようにも受け取られる。意味は『ルンをして来らしめ、欲するだけの穀料をとらしめよ。商人として来るものは六ヶ月に(対して)月決め糧目即ち穀物も、ブドウ酒も、肉も、魚も、果物をも取らしめよ。また欲するだけ入浴を彼らにおこなわしめよ。しかしてルンが帰途につくときは、汝らの皇帝のもとにて旅に対する食糧ならびに鎗も、網も、帆だ、および必要なだけ(のものも)取らしめよ』

これに対して、次の一節には、ギリシア側の言い分のような形で、幾つかの条項が一まとめにされている。この年号の項はロシアの年代記であり、ロシアの軍勢の遠征の物語でありながら、この一節だけが、当のロシアの側を突然『彼等』とし、ビザンチンの側を『我等』と呼んで、物語りをつゞけようとするチグハグさが、余りにも自立しすぎる。この一貫性の無さは、何よりもこの一節が、物語自体にはそぐわない機械的な文献利用であつたことを示している。明らかに、ギリシア側のもつていた条約文の断片訳を押し込んだものにちがいない。その一節とは即ち、

аще придуть Русь без купля да не взимають

месячины; да запретить князь словом своим, приходящим Руси дзе, да не творять пакости в селех в стране нашей: приходящи Русь да витають у святого Мамы, и послеть царство наше, да испиють имена их, и тогда возмутъ месячное свое, первое от города Киева, и пакы из Чернигова, и Переяславля, и прочие города и да входить в город одними вороты, с царевым мужем, без оружья, мужь 50, и да творять куплю якоже им надобе, не платяче мыта ни в чем же.

『もしもルシが商用なしに来ることがあれば、月極め糧目を取り立てざるべし。公は己れの言葉をもつて、こゝに来るルシに禁令すべきである、わが国の村落において（ルシたちは）害をなさざるべしと。到来するルシは、聖母（教会）のそばに居住すべし。わが帝国は使者を送り、彼等の名を書き上げせしむべし、しかし、その時、己れの月極め糧目をとらしむべし。まずキエフの町の（出身者）、ついでチエルニゴフの、またペレヤスラウリの（出身者）、および他の町々の（に）。しかし一つの間より皇帝の家臣を伴い、武器をたずさえず、（一度に）五十人を町へ入らしむべし、しかし、何事によらず取引税を支払わずして、彼等らの必要に応じて商用をおこなわしむべし』

この様な古い文獻資料の素朴なはめ込みを全く正直に自状している箇所が、次の五年を経た6420(912)年の項である。即ち、同一のオレグ〈Олег〉をロシア側に登場させ、同じ二人の皇帝レフ〈Лев〉とアレクサンドル〈Александр〉をギリシア側に登場させて、『他の協約の写し』〈равно другаго свѣшанія〉を書き取つていたのである。勿論、其処には多少の物語性を持たせるべく、『オレグはグレキとルシの間に和を講じ条約を結

ぶために己れの家臣を遣わした。彼は人を遣わして同じレフとアレクサンドル帝の治世にあつた他の協約の写しを述べさせた』と前書きで話をつないでいる。その協約の各条は計十五条と後書きからなり、既に『古代ロシア研究』才三号の p.19～p.50 にその検討を終つた。

『過ぎし年月の物語』が次に再度ギリシアとの条約文を書きとめるのは 6453(945)年の項である。此処には、物語性を持たせようとする努力の跡は全くなくて、たゞ、如何にもその前後の事情を事実にしく述べ捨てるのである。そして、初めて文献から取り出したもとのものが羊皮紙であつたことを確認するのである。即ち、条約文の書き写しに当つての前書きの形で、次の様に読み取れる。

В лето 6453. Присла Роман, и Костянтин, и Стефан слы к Игореву построити мир перваго; Игорь же глагола с ними о мире. Посла Игорь муже своя к Роману, Роман же созва боляре и сановники. Приведоша Руския слы, и велеша глаголати, псати обоих речи на харатье, равно другога свещанье, бывшаго при цари Романе, и Костянтине, и Стефане, христоклюбивых владык:

『6453年。ロマンが、およびコスタンチンも、およびステファンも、イゴリに、はじめの(もとの)和平を樹立するために使者たちを遣わして来た。ところで、イゴリは彼らと和平について語つた。イゴリはおのれの家臣たちをロマンのもとへ送り、一方ロマンは貴族および高官たちをよびあつめた。(彼らは)ルシの使者たちを連れ来たり、しかして(口上を)述べるように、双方の言葉を羊皮紙に書くように命じた。(すなわち)キリストを愛する君主たちであるロマン帝およびコスタンチンおよびステファンの治世にあつたもう一つの条約文の写しである』(『古代

ロシア研究』才四号；p.15～p.17参照）。

そして、この直後に計十五条の条項が書きとられ、その条項に
つゞく後書きも書き取られている。『古代ロシア研究』才四号で
は、その後書きの部分を才十六条としたが、おそらくは、ギリシ
ア語で書かれていたと思われるものの直訳であつたであろう。こ
の後書きのような部分の前半から、それら總てがギリシア側でギ
リシア語で書かれ、ロシア側を二人称、ギリシア側を『我々』、
『我が帝国』として、ロシアへと向けられた文章そのまゝの訳文
掲載であつたように思われる。

Мы же елико нас хрестилися есмы, кляхомься
церковью святого Илье в сборней церкви, и
предлежащем честным крестом, и харатьею сею,
хранити все, еже есть написано на ней, не
преступити от него ничтоже; а иже преступить
се от страны нашея, ли князь, ли ин кто, ли
крещен, или некрещен, да не имуть помощи от
Бога, и да будеть раб в сий век и в будущий, и
да заколен будеть своим оружием,.....

『我々は、我々のうちの洗礼を受けている限りのものは、大本
山の教会における聖イリア教会にかけて、また前にある聖なる十
字架にかけて、また、この羊皮紙にかけて、それに誓かれてある
すべてのことをまもり、それから何（において）も背かないこと
を誓う。ところで、我々の側からこれを犯すものは、公であれ、
他の誰であれ、洗礼されているものであれ、洗礼されていないも
のであれ、神から助けをうけざるべく、この世でも、あの世でも
奴隷たるべく、自からの武器によつて突き殺されるべし……』

ところが、6479(971)年の項まで時代がさがると、さすが
に彼我の混合は無くなり、ロシア側に視点を固定させた引用をお
こなうようになる。引用された条約文の羊皮紙の書かれた日附ま

て此処には明記される。引用した文献の非常に具体的な由来をも条約文の序文の形で書きあげているのである。

Равно другаго свещанья, бывшаго при Свято-
славе: велицем князи Рустем и при Свенальде,
писано Фефел синкеле и к Ивану, нарицаему
Цемьскию, царю Гречьскому, в Дерестре, меся-
ца июля, индикта в 14, в лето 6479.

『ルソの大公スヴィヤトスラフおよびスヴェナルドの時にあつたもう一つの条約文の写しが、シンケル（僧の階級）のテフェルのときに、グレキの皇帝ツエミスキーと呼ばれるイヴァンにあてられ、デレストルにおいて、6479（971）年、インディクトの十四年、七月に書かれた』（『古代ロシア研究』才五号；p.66～p.67参照）

以前の三つの条約は、多くはギリシア側にイニシアチブを取られて創られ、先づギリシア語で書かれた文章であつたと思われる。そして、そのギリシア語からの訳文であつたと思われるのに対して、今度の条約は、おそらく、ロシア側が主体的に創り、ギリシア側へ差し出した文章であつたであろう。そのために、945年の条約文のように詳しく多項目にわたつて、細かい規定などは此處には見当らず、項目分けにして見ても、わずかに、四ヶ条にしかならず、その才四条は、むしろ、後書きだと見なすべきものでさえある。この様なものであつたために、この年の項の物語（スヴィヤトスラフの遠征の物語）の中へ非常にうまくとけ込んでいる。勿論、本来、口頭伝承的な英雄物語であつたものの中へとけ込ませてはいても、この部分だけが、明らかに、別の次元の文献からの引き写し引用であることは、年代記者自身が明らかにそれを先に引用した序文の形の個所で指摘していた。年代記者は、この様に生の歴史的資料を裸のまま持ち込んで来ていた。古い時代のことを書きとめるために、伝承と、生の歴史的資料とだけが主要

な素材をなしていたのではない。文獻的には、多くの外國の文獻の翻訳物が『過ぎし年月の物語』の重要な素材をつとめていた。『過ぎし年月の物語』に限らず、多くの年代記の多くの記者たちは、外國、主としてビザンチンからの多くの翻訳物を利用してゐた。それらの翻訳物から自分たちの祖國であるロシアの古い歴史にまつわる個所を細心に、綿密に抜き出して来て、自からの過去を再構成したのであつた。宗教的な内容を持つたものに就て、聖書や神学書から抜き出されて年代記にはめ込まれたものは、一応、此處では除外して、純粹に歴史事實だと彼等が考えたものの内で、最も大きな翻訳物の文獻は、勿論、ハマルトルスの年代記《Хроникъ Георгія Амартола》であつた。『過ぎし年月の物語』におけるハマルトルスからの抜き書きの部分がいつれであるかは、既に『古代ロシア研究』才二号以下にその一部が検討されたところである。それ以外にも、例えばイバーチー年代記では、6622 (1114) 年の項に、年代記者自らが、わざわざ、自分が準拠した著作を示して、『もしも、誰かがこのことを信じないならば、フロノグラフ（ハマルトルス年代記）を読ましめよ』《Аще ли кто сему вѣры не иметь, да почитеть Хронографа:》と書き、フロノグラフを疑う余地のない過去の眞実の書だとしてゐる。勿論、この年の天變の前兆たる所以を説明しようとして詳しくハマルトルスから古い天變の物語を引用するわけである。或は、『パトリアルフ或はニコンの年代記』《Патриаршая или Никоновская лѣтопись》にも、年号をつけて記事を書きはじめると同時に遙かに古い時代の記事に、『というのは、ゲオルギー（ハマルトルス）が年代記で言つてゐることだが』《Глаголетъ бо Георгій в лѣтописани:》と断つて書きつけている個所がある。（1862年版；ロシア年代記全集才九卷；p.6）。此處に書き抜かれてゐる内容は、リウオフ年代記《Львовская лѣтопись》その他の年代記でもほとんど変

りなく、ラヴレンチー年代記をはじめとする各年代記の『過ぎし年月の物語』中では〈Глаголетъ Георгій въ лѣтописаньи: ибо комуждо языку овемъ исписанъ законъ есть, другимъ же обычан; зане безаконникомъ отечьствие мнится〉となつてゐるものと同一である。その大体の意味は、『ゲオルギーは年代記の中で言つてゐる、なぜなら、おのおのの民族には、或ものには書かれたおきてがあり、他のものには慣習がある。なぜなら法なきものたちにとつては先祖の習慣が（善しと）思われているからである』となるが、これによつて、相当長い文章は総て、ハマルトロス年代記からの書き抜きである。その部分には古代ロシア語とギリシア語の原文とを対比し得る。『古代ロシア研究』才三号；p.79以下にこの部分に当るギリシア語の原文とその訳註が示された。然し、実は、年代記者たちが、抜き取るべき素材にしたものがギリシア語によるハマルトロス年代記の原典であつた訳ではない。むしろ、彼等が出典としたものはその年代記の古代スラヴ語による訳本であつた。現存するその訳本と、『過ぎし年月の物語』中にみられる記事との対応の仕方の方がむしろ興味ある問題である。ハマルトロス年代記の古い古代スラヴ語訳本として、此処では、シノダール本〈Рукопись Синодальной библиотеки〉の百四十八号本を用いて見る。

ラヴレンチー、トロイツキーその他の年代記にみられる『過ぎし年月の物語』が『さて、この物語をはじめよう』〈Се начнем повѣсть сию〉と書き出したその直後から、それは実は既にハマルトロスからの抜き書きであつた。

即ち、『過ぎし年月の物語』にある文章とは、

По потопе первые сынове Ноеви разделиша землю,
Сим, Хам, Афет. И яся вѣсток Симоу: Персида,
Ватрь, тоже и до Индикія в долготу, и в ширину

и до Нирокурия, якоже реки от вѣстока и до полуденья, и Сурия, и Мидиа по Еффат реку, Вавилон, Кордуна, Асуряне, Мисопотамира, Аравия старейшая, Алмаис, Инди, Аравия сильная, Кулии, Комагины, Финикия вся: Хамови же яся полуденная страна: Египет, Ефивопись, прилежащая ко Индом, другая же Ефивопись, из нея же исходитъ река Ефиопская Чермна, текущи на вѣстокъ, Ливия прилежащи до Кириная, Мармария, Сурите, Ливуи другая, Нумидья, Масурия, Мавританья противу суши Гадире; сущим же ко востокомъ имать Киликию, Памфилию, Писидию, Мосию, Лукаонию, Фругию, Камалию, Ликию, Карию, Лудья, Масию другую, Троаду, Болиду, Вифунию, старую Фругию; и острова неки имать: Сарьдани, Крит, Купр, и реку Геону, зовемую Нил. Афету же яшася полунощныя страны и западныя: Мидиа, Альванья, Армения малая и великая, Кападокия, Фефлагони, Галат, Колхис, Воспории, Меоти, Дереви, Сармати, Тавриани, Скуфия, Фраци, Макидонья, Далматия, Молоси, Локурия, Пеления. яже и Полопонис наречеся, Аркадия, Ипирония, Илюрик, Словене, Лухития, Аньдриакя, Оньдретиньская пучина; имать же и острова: Вританию, Сикилию, Евю, Родока, Хиона, Лезвона, Кофирана, Закуньфа, Кефалинья, Ифакину, Керькуру, часть Асийски страны, нарицаемую Онию, реку Тигру, текущую межю Миды и Вавилоном;

といふものである。ノアの子等三人が分け取つた國や土地の名前

の羅列である。(『古代ロシア研究』才一号, p. 1~p. 10 参照)。日本語訳は省略して, シノダーリ本のヘマルトルス年代記スラヴ語訳本の, これに対応する個所を次に引用しよう。

По размешени убо и стльпу разорения, раз-
делише трие сынови Ноеви всех иже от-нихъ
рожденнымъ, и даше имъ съписаниемъ места по
уставу, иже от-отца Ноя приемше; и суть кое-
гождо и колена и отечество, и места и насле-
иа, и страны и острова и реки, по предлеже-
щому уставу. И дастьсе убо въ наследие прьво-
рожденному сыну Ноеву Симу от Персыди, и
Вакътроней, и Индискаа, и Риконурурь до Га-
дирь, яже къ югу; и Мафету же от Мидие
даже до Гадирь, яже къ северу; и прочее же
страны Симовы суть сии: Персисъ, Вактриани,
Иркания, Бавулиония, Кордина, Асуриа, Месо-
потамия, Аравиа древняя, Елимаисъ, Индикы,
Аравиа иевдемонь, Кылисирна, Коммагины, и
Финикиа всея, и река Еврарь. Хаму же: Егупть,
Ефиопиа зрещи къ Индии, другая Ефиопиа, отнюдь-
же исходить река Ефиопьская Вфифра, зрещиа на
въстокъ, Фиваида, Ливия простирающеясе до
Кириные, Мармариа, Суртиа, Ливия ина. Ну-
мидия, Массурия, Мавритания, яже према Га-
дирь; къ северу же поморие иматъ: Киликиа,
Памфилиа, Писидна, Мисиа, Ликаония, Фригиа,
Камалиа, Ликия, Кариа, Мимиа другая, Троада,
Болида, Вифания, древняя Фригиа; и острова
пакы иматъ: Сардиа, Критъ, Кипрь, и реку

Гиснь, иже и Ниль нарицаемы. Иафету же:
Мидиа, Алзания, Армения малаа же и великаа,
Кападокия, Пафлагония, Галатия, Колхисъ,
Вопроръ, Меоть, Дервия, Сарматия, Тавриания,
Вастарния, Скифия, Фракия, Македония, Дал-
матия, Молосия, Фесалия, Локрия, Воотия,
Етолия, Еттикия, Ахана, Пелиния яже и Пело-
пония, Аркадия, Ипоротия, Илирия, Микхнытия,
Андриакия, от-нее же Ардиакія пучина; имат-же
и острова: Вретанию, Сикелию, Еввию, Родось,
Хионь, Лесвинь, Кифара, Закириа, Кефалиния,
Ифакиния, Керкира, и страна Асиискаа, нари-
цаемаа Иоания, и река Тигрь, разделяюща
между Мидиею и Вавулонию.

この様に、ハマルトロズ年代記から、ほとんど直接的に書き抜かれた所が見られる一方では、『過ぎし年月の物語』は、内容の重点だけを汲み取つて書き入れた箇所をも、相当多く含んでいる。『シムは、ハムも、アフエトも、土地を分けて、兄弟の分前へは誰にも、ふみ込むべきものではないとして、サイを投げ、それぞれ自分の土地に住んでいた』と書きとめた直後、『言葉は一つであつた。そして地上に人々が増えた時、ネクタンとフアレクの時代に、塔を天に至るまで建てようと考えた。そして、塔を天に至るまで建て、そしてその回りにヴァウイロンの町を建てるべく、セルナの野に共に集つた。そして、四十年にわたつて塔を建てた。できあがらなかつた』とある箇所は、旧約聖書の一節とハマルトルズの一節とを巧みに組み合わせたのであつた。即ち、ハマルトルズの、これに当る一節は、次の様な古代スラヴ語に訳されていたからである。

От-нею же единогогласьнь сми родь человекъ,
якоже рече Иосипль, събираетесе въ едино место,
глаголемое Сенарь, таже стльпъ до небесъ здати
помыслыше, и окресть его градъ иже и Вавулонь,
еже есть мльва; иже дело не съвршено, от-
връжено бысть..... Стльпъ убо създан бывъ
в 40 лет, пребысть полъ несъвршен;

いづれにしても，これらは，旧約聖書創世紀才十章及び才十一章に由来する物語である．文献的なものの出所をつきつめれば，ハマルトルス年代記の古代スラヴ語訳からハマルトルス年代記のギリシア語原典へ，そして，最後には旧約聖書に至りつくであろう．『過ぎし年月の物語』の記事の中で，新旧両聖書に由来するものに就ては，いづれ後述する機会があるう．今，しばらく，ハマルトルス年代記との照合を進めてみよう．

上に引用した箇所より相当さがつて，『過ぎし年月の物語』が，明瞭に，ハマルトルスの年代記からの一節であることを断り，『年代記の中で，ゲオルギーは言つている』〈Глаголетъ Георгий въ лѣтописаньи〉と述べてから，書き進んだ一節を注意しよう．ラヴレンテ年代記をはじめとする各年代記には大体次のように読まれるところである．（『古代ロシア研究』才一号；p.51以下参照）

ибо комуждо языку овем исписан закон есть, дру-
гим же обычаи; зане незаконьником отечьствие
мнится. От них же первие Сирии, живуще на конецъ
земля, закон имуть отець своих обычаи: не любо-
деяти и прелюбодеяти, ни красти, ни оклеветати,
ли убити, ли злодеяти весьма. Закон же Нукти-
риан, глаголеми Врахмане и Островьници, еже
от прадед показаньем, благочестьем мяс не яду-

ще, ни вина пьюще, ни блуда творяще, никакоя же злобы творяще, страха ради многа. Ибо яже тае прилежащим к ним Индом, убистводеици, сквернотворяще, гневливии паче естества; в нутрьнейшей стране их человек ядуще, и страньствующих убиваху, паче же ядять яко пси. Этер же закон Халдеем, Вавилоняном, матери поимати, с братними чады блуд деяти, и убивати; всякое бо студное деянье яко детелье мнятся деюще, любо далече страны своея будуть. Ин же закон Гицион: жены в них орють, зижють храми, мужьская дела творять, но любы творять елико хочеть, не въздержаеми от мужий своих весьма, ни зазрять; в них же суть храбрыя жены, ловити зверь крепко; владеють же жены мужи своими и добляють ими. Во Вретаньи же мнози мужи с единою женою спяць, и жены с единым мужем похотьствують, незаконная законе отець творять независтно, ни въздержанно. Амазоняне же мужа не имуть, но и аки скот без словесный единою летом к вешным днем озестьвени будуть, и с сочтаются с окрестными мужи; яко некоторое им торжество и велико празденьство время тем мнать. От них заченшим в чреве, паки разбегнутся отсюду вси: во время же хотящим родити, аще родится отроча, погубять; аще девоческ пол, то въздоять, прилежне възпитають.

「何故ならおのおのの民族には、或ものには書かれたおきてがあり、他のものには慣習がある。なぜなら法なき者たちにとつて

は、先祖の習慣が（善しと）思われているからである。彼等のうちの最初のもは地の涯に住むシリイであり、おのれの父祖たちの慣習をおきてとしてもつている。すなわち、姦いん及び姦通をせず、盗まず、中傷せず、あるいは殺さず、あるいは全く悪業をせざることである。ブラフマネおよびオストログイニツイと言われるヌクチリアネのおきて、それは先祖からの訓えによるものである。（先祖への）崇敬の念によつて、多くのおそれのために、肉を食わず、酒を吞まず、いん乱をなさず、いかなる悪事をもなさないというものである。ところで一方、明らかなることであるが、インド人たちは彼等に接しているが、（彼等は）殺人者であり、けがれを行い、常ならず怒りやすかつた。彼等の（国の）奥地では人間を食べ、旅人たちを殺し、その上に犬のように食べさえるるのである。ハルデア、ヴァグイロニヤネには他のおきてがある。母をめとり、兄弟の子たちといん乱をなし、（人を）殺すことである。というのはい、あらゆる恥ずべき行いをあたかも徳行をなしているかの如くに（彼等には）思われているからである。あるいはおのれの国からより遠くにあるときにすら（そうである）ギリには他のおきてがある。すなわち、彼等の間では女たちが耕し、家を建て、男の仕事をなしている。しかし、全く自分たちの夫から妨げられることなく、また非難されることもなく、好きなだけいん行をなす。彼らの間には獸を見事に捕える女たちもあり、それらの女たちは、おのれの夫たちを支配し、権力をふるう。ブレタニアでは、多くの男たちが一人の女と寝て、また女たちは、一人の男と情交している。不法なることを怪しいまゝに妨げられもせず、父祖のおきてとしてしている。アマゾニヤネは、男をもたないが、言葉なき家畜のごとく年に一度春が近づくと、郷を出て近隣の男たちと交わるのである。その時をあたかも彼女らにとつて一種の祝典および大いなる祭日と考えている。男たちによつて腹に種を宿したとき、そこからすべて再び散りもどる。そこで（生

むことを) 欲する者たちに生むべき時(が来た時)もし、男の子が生まれたら殺す。もし女性ならば、ほいくし、熱心に育てるのである」。

この長文に亘る一節は、シノダリ本一四八号写本には、対応して、次の様にある。

И великыи Кесарие, брат великаго Григориа, различныхъ языкъ и обычаи и образы же и законы споведае, въкратце таковаа сказуеть: въ коеиждо бо странѣ и зыще, въ овехъ убо писанъ законъ есть, въ овехъ-же обычаи; законъ убо безаконнымъ отечскаа мнитсе. Отныхъ-же прьвыи Суре, иже на коньць земле живущеи, законъ имуть отечскыи обычае: блуда не творити, илы прелюбы деяти, илы красти, ли уничтожати, ли убыти, ли злодеяти отнудь. Законъ-же и въ Виктрианехъ, или Врахманехъ и Островенехъ, от преродителии наказание же и благочыстые, мяса не ясты, ли вина пити, ли блудьствовати, или всаку злоду творити, многааго ради страха Божия и веты. И открьсть техъ живущемъ Инденомъ, сквернаа убийста творещемъ, унивающимсе, срамнаа делающимъ, кровьи проливающимъ, и презрествнаа делающимъ; а иже въ вьнутрьныхъ странахъ сыхъ, человеки ядуще и туждихъ убывающе, паче ядутъ якоже псы. Инъ законъ Халдеомъ и Вавудоняномъ: съ матермы блудь творити, братняя чеда растлевати, и скверне убивати, и всакое зло дело якоже добродетель сътворяати, аще и далече от-страны ихъ суть.

Ин-же въ Галилеихъ законъ: женамъ землю делати,
и зидати, и мужьскаа дела делати, нь и блудъ
творити якоже аще хотеть, не възбраняемии от-
нудь отъ мужии, ли завидими; въ ных-же иже
на рати брань творе, и ловити иже не зело
крепка въ зверехъ; обладаютъ паче своими му-
жмы и господуютъ. На праздньцех-же идольскихыхъ
множество мужии съ единою женою осмешаютъ, и
многы жены на единого мужа въседають, и без-
аконное яко законъ добрь и отечьскы съдевають
незавыстно и невъзбранно. Амазоне же муже не
имуть, нь яко бесловесна живота, единою лета
въ креме весны отлучаютъ, и съвъкупляющесе
съ ближними мужии суседными; якоже тръжьство
некое и великъ праздникъ време оно нарицають.
От-ных-же в чреве приемше, паки потекуть въ
своихъ домохъ все: въ време же рождения ихъ
мужьскы поль убываютъ, женское же оживляютъ и
прилежно въспитають. (日本語訳省略)

この様に見て来ると、『過ぎし年月の物語』が年号を設定して
物語を綴る以前の、古い時代に関する記事は、その重要な骨組み
の箇所はほとんど、ハマルトルス年代記に由来するものであるこ
とが分る。そして、その間に、既述したように、非常に古いキー
〈Книга〉の伝説などを織り込んで行つたのである。この様なハマ
ルトルス年代記からの引き写しは、勿論、6360(852)年という
年号を始めて設定して物語りつゞけた以後の記事にも、この記述
方法は変更されなかつた。例えば、6374(866)年の項に組み込
まれたアスコルド〈Аскольдъ〉とシル〈Дирь〉のギリシア遠征
の説話は、めずらしく、たくみに、ハマルトルスの文章と組み合

わされて出来たものである。ラヴレンチーをはじめとする年代記のこの年号の項には、次の様に読まれる。（『古代ロシア研究』オ二号；p.21～p.23参照）。

В лето 6374. Иде Асколд и Дир на Греки, и придоша в 14 лето Михаила царя. Царю же отшедшу на Огаряны, дошедшу же ему Черные реки, весть епарх посла к нему, яко Русь на Царьгород идетъ, и вратися царь. Си же внутрь Суду вшедше, много убийство крестьяном створиша, и в двою сот корабль Царьград оступиша. Царь же едва в град вниде; с патрехархом с Фотьем к сущей церкви святей Богородице Блахерне всю ночь молитву створиша, таже божественную святы Богородица ризу с песньми изнесъше, в реку омочиша. Тишине сущи, морю укротившюся, абье буря вьста с ветром, и волнам вельям вьставшем засобь, безбожных Руси корабль смяте, к берегу приверже, и изби я, яко мало их от таковыя беды избегнути. Вьсвоиси вьзвратшася.

『6374(866)年。アスコルドとジルがグレキに進攻し、ミハイル帝の十四年に到着した。皇帝はオガリヤネに対して遠征中であり、黒い川に至つたとき、市長が彼に、ルンがツアリゴロドに進攻して来ると報せを遣わした。そこで皇帝は引き返したのである。これら(ルンたち)はスード(灣)の中へ入つて来て、キリスト教徒に多くの殺りくをなし、二百隻の船を漕ねてツアリグラドを包圍した。皇帝はよりやく町へはいり、総主教フオチイと共にヴラヘルンにある聖母教会に夜を徹して祈とうした。靈驗あるけさを歌と共に運び出し、川に浸した。静かであり、海はないていたが、突然、嵐が風を伴つて起り、大きな波が特に起り、それ

ら異教徒のルシの船を吹き乱し、岸にうちつけ、うちこわしたので、それらのものたちのうちで、かゝる災難からのがれたものは少なかつた。(助かつたものは)家郷へ歸つたのである』。この一節は、ハマルトルスの訳本では、

Царь же изыде воевати на Агараны, оставль въ граде Орифа и парха, иже не у цареви ни от-нихже поучаваашесе и въ уме имеаше твориму, безбожныхъ Русь възвести нашьствие, бывшу уже у Мавропотама; и царь убо и пришествия пути удръжасе, и чесо деля сия остави, ничесоже царьско и мужьско съдела. Руси же приспевше вънутрь быти церкви, много съделаше убиство христианомъ и неповинну кровь пролияше; беху же корабли 200, иже окрочисе градъ и многъ страхъ вънутрь сущимъ сътворише. Царь же уведавъ, едва възможе преити, и съ патриархомъ Фотиемъ въ Влахерну приидоста, и ту Бога моляху; таже съ песньми святыи Богородице изнесше омофоръ. въ море край омочисе. И тишине сущи, абие ветромъ наитие, и мору възмутившусе, вльнамъ встание често бысть; и безбожныхъ Русь корабли погрёзоше, малемъ убегшем от-беды.

(日本語訳省略)

とある。また、6410(902)年の項は、『過ぎし年月の物語』において、次の様に読まれる。

В лето 6410. Леон царь наля Угры на Болгары, Угре же нашедше всю землю Болгарьскую; Семеон же уведав на Угры възвратися, Угри противу поидоша и победиша Болгары, яко одва Семеон в

дѣръстер убежа.

『6410(902)年、レオン帝はボルガルに対してウグリをやとつた。ウグリは攻撃して、ボルガル全土を席捲しつゝあつた。セメオンはこれを聞いて、ウグリに向つて引きかえした。ウグリは(これに)向つて進み、ボルガルを打ち破つたので、セメオンは、かるうじて、デルステルに逃れることができたほどであつた』

(『古代ロシア研究』才三号；p.2参照)。

この一節中の『ウグリ』《Угри》をトゥルツィ《Турци》と呼びかえ、『ボルガルの』《Болгарскій》という形容詞を『グレキの』《Гръчскій》と変えただけの、ほとんど同一文章が、ハマルトルス年代記の前記の訳写本にみられるのである。即ち、

Прешьдше убо Турци, Сумеон-же упражньсе ратуе войску Гръчскую, пленише Турци Българскую землю. Сия уведевъ Сумеонъ, подвижесе на Туркы; они же прешьдше брань сътворише съ Българы, и побежденъ бысть Сумеонъ.

(日本語訳省略)

とある。

6420(912)年の項でオレグ《Олег》が占師の予言通り馬の骨から出て来た蛇にかまれて死去し、シチエコヴィツァ《Щековица》と呼ばれる山に埋められ、其処に今日まで彼の墓があるという物語の直後に、『過ぎし年月の物語』は、『うらないから、よう術が実現するのは不思議なことである』《Се же дивно есть, яко отъ волхвованія сбытсся чародействомъ》と書き足して、一つの長い物語を述べている。占いやよう術の物語を、そつくり、ハマルトルスから借用して来たのである。相当長い文章であるし、その古代ロシア語の原文は既に『古代ロシア研究』才三号のp.56以下に示したので、此処では、その日本語での意味だけを述べて、ハマルトルスの訳文

と対応してみよう。

『デメチアンの在位時代にアポロニヤニンという名前のある古い師がいて、有名であり、旅をして、いたるところ町々や村々で悪魔的な奇跡を行つていた。ところで（彼は）リムからヴィザンチヤにやつて来て、そこに住んでいる人々から、これらをなすことをこん願されて、町から多くの蛇やさそりを、それから人間たちが咬まれないように、追い出した。貴族たちが集つて来たときに、馬の狂暴さを鎮めた。（彼は）同時にアンチオヒヤにもやつて来て、さそり、および、蚊によつて、アンチオヒヤ人が苦しめられていた時、彼等から頼まれたので、銅のさそりを作り、それを地面に埋めた。しかして大理石の小さな柱をその上に建てた。しかして、人々は杖をもち、町をあるきまわり、杖をふりまわしながら叫ぶように命じた。『町に蚊が居なくなれ』と。かくして町から、蚊、及び、さそりが消えた。また、ふたたび、町に地震がよくあるので、（その）地震からまぬがれるように（人々が）たのんだ。（彼は）ためいきをついて、板に次のように書いた。「あゝ汝、呪われた町よ。（汝は）多くゆれ、火によつてとらえられ、シオリチの岸辺においても汝を（人々が）包圍するであろうから」と。彼について神の町の大いなるアナスタシイもまた言つた。「アポロニーに実現されたものは現代に至るまでをお若干の土地において実際に起つている。つまり、あるものは四足の動物の駆逐に対して、人に危害を与える強い鳥に対して、また別には妨げられることなく流れている川の流れをせき止めることに対して。しかしてまた他のことは、人間に対してあるところの滅亡と害に対して、（それらを）打ち負かすためである。というのは、彼の存命中にまさしくかくの如きことを悪魔たちが彼のためになしただけでなく、また、彼の死後にも、彼の名において彼の墓に留まつている（あやしい）しるしを行つていた。しかも、悪魔によつて、そういうことに対してより強く誘惑される、呪われ

たる人間たちに対するたぶらかしのため（である）」と、誰が一体魔術を行うものたちについて何を語りであろうか。愚かにも哲学的な知恵を我身に求めているといつて物知りのアポロニーを常に非難していたよりなものが魔術的な誘惑をすることに巧みであつたとは、私も（人が）欲していたものを言葉だけで行うことができるのであつて、人から命ぜられるものを行つてもつて行つて行つてではないと彼（アポロニー）が言つてもよかつたのであるから。これらのことは総て神の思召しと悪魔の仕業である。このようなことがらによつて我々の至高な信仰が強く堅固であるかどうか、我々が主の許に在り、まぼろしの奇跡や悪魔の所業の故に彼（悪魔）の悪意の奴隷と下僕によつて作られた敵によつて引きつけられないかどうかを試されるべきである。しかして、さらに主の御名によつてヴアラムおよびサウル、およびカイヤファのような者たちが予言し、ふたたび悪魔をイユダヤスケヴァアのような者たちが予言し、ふたたび悪魔をイユダヤスケヴァアの子等のように追出した。ところで、（主は）、働かないものにも、他のものたちを助けるために、しばしば恩ちよりを与え給うのである。なぜなら、ヴアラムは（正しい）生活と信仰の両方に無徳であつたが、それにもかかわらず、（主は）他人の世話のために、彼に恩ちよりを示したのであるから。ファラオンもかくの如き人であつた。しかし、この者にも（主は）未来を示し給うた。しかしてナヴホドノソルは、おきてに背いていた。しかし、この者にも、後にある多くの世代の後（のこと）をひらいて見せ給うた。多くの敵対的なものたちが才智をもつていふことをこれによつて示しながら、善きことを考えない人々に対する誘惑のために、他のごまかしをもつて、フリストスの像の前でしるしを行うのである。占師ンモンおよびメナンドルその他のものも、そりであつたように、そのようなもののために、奇跡によつて（人を）まどわすなといふことはまことである！

この一節の一部は、当然、文献的に旧約聖書にまでさかのぼるべき内容のものである。然し、此処では、直接の参照文献として、ハマルトルス年代記の古代スラヴ語訳の対応箇所を示しておこう。

И Аполлоние Тиане всь знаемь бе, обходе и
всуду творе въ градехъ и странахъ творения.
И къ Вузантии от-Рима пришъдь, сътвори ту
многа творения, умолень бывъ от-Византень,
яко изгнати множество змии и скорпии от-града
и никомуже от-нихъ вредитисе, ни от-многого
бесчиния конемъ ристающемъ, всьсныети власте-
ломь. Такожде же и въ Антиохию шъдь, сътво-
ри, умолень бывъ, скорпиамъ и комаремъ тво-
рения, томими бо Антиохиане беаху от-скорпии
и от-комареи зело; и створь медну скорпию, и
погребь ю в земли, и маль поставивъ пад-нею
стльпъ, повеле тръстие носити людемъ и об-
ходящем скрозе градъ звати, тръстиемъ ма-
хающе: без комареи градъ; и та ищезоше от-
града скорпие и комаре. Умолен-же бывъ и о
нале(жа)щимъ граду труса, постенавъ, написа
на щите сия: горе тебе, окаянный граде, яко
трусы многыми и западенны обеть бысть, по-
плачет-же-ся о тебе и иже приморскыи Реитие.
О нем-же убо что и великии Анастасие от-Бо-
жия града рече: Аполлониева же даже донне
въ некоторыхъ местахъ действуют творения,
стояща ова убо на вызбранение скотомъ чет-
вреногимъ и птицамъ, вредити могущихъ че-
ловеки, ова же на възлияние струямъ речнимъ,

бесчинно носимомъ, и иная въ другая некая на пагубу и вредъ человекомъ суца поборительна стоеть; и убо не тъкмо при животе ему сия и таковаа съделаше бесове его ради, нь убо и по скончании его пребывающе у гроба его, знамениа некая сътворише о имени его на прельщение человекомъ, иже удобъ украдаемымъ въ таковая от диявола. Что аще кто речеть о иже-от-Манефона отравныхъ даель, иже таковъ бысть до конца на отравную прельсть, яко присно заяпеша яве Ап-олониа, яко неизвестно иже от-него Любомудриа искусь имуща: лепо убо беше тому, рече, якоже азъ, словомъ тъкмо творити яже хотеаше, а не творенны повелети, иже от-него сътворенимъ. Сия же вса, попущениемъ Божиимъ, действиемъ бесовскимъ бывають, къеже тацями вещмы искусити нашу православную веру, аще твьрда есть и крепка пръбывающи о Господи, а не отводима от-врага мьчтними знаменны и сотрониньскими делы, делаемомъ от-рабъ и служителей злобе. Не тъкмо же, нь и именемъ Господнымъ пророчествовавше, яко Валаамъ, и Сауль, и Каиафа, и бесы пакы изганяху, якоже и Иуда и сынове Скевовы. Въ сицевыхъ-же и еже неции от-шую Христа възвещаютъ, и прочая, темже убо и въ недостойныхъ благодать действуетъ многаци, да инемъ добро створить. Ибо Валаамъ от-обовду туждь беше, от-житиа изредна и веры: нь обаче действовавъ немъ благодать инехъ ради устроения. И Фараонъ таковжде беше: нь и тому бу-

будая проявы. И навуходоносорь пребезаконьнь:
нь убо и сему паки яже по мнозехъ послезде
бываемаа родехъ открь. Темже яве, яко мнозии
супротивьнь имуще разумь, образомь Христовемь
знамениа твореть, иною хытростию некоею, на
прельщение человекомь неискуснымь о добре;
якже бысть Симонь влхъвь, и Менаандръ по
онемь, и иныи таковыи, о них-же въ правду рече:
не чюдисе прельститисе подобиемь, ниже изветомь
явления искусити, иже глаголемымь истину.

(日本語訳省略)

以上の様に、ハマルトルス年代記古代語訳本と、ほとんど同一
文章の引用個所を、『過ぎし年月の物語』は含み込んでいるが、
それとならんで、内要だけを汲み取つて来たもの、或は、ロシア
側に伝わる伝承を書きながら、それが、ビザンチンの記録と面白
いほどに照合しあうものなどがある。ロシアの伝承とビザンチン
の(ハマルトルスの)記事を組み合わせた明らかな例である。例
えば、先に述べた6449(941)年のイゴリのギリシア遠征の記述
は、その最も典型的なものである。『過ぎし年月の物語』の中
には大体次の様に書かれていた。即ち、『イゴリがグレキに向つて
進攻した。ボルガルが皇帝に報せを送つたところによれば、一万
隻のルシがツアリグラドに向つて進攻しつゝあるという。それ
らは出発し航し来たり、ウイフアニアの国々を荒しはじめた。し
かして、ポントに沿つてイラクリイまで、およびフアフロゴニア
の地までを荒し、しかしてニコジアの国全土をおさえ、しかして
スド全部を焼いた。彼等をつかまえて、あるものたちをはりつけ
にしたり、他のものたちを的のように立たせて、彼等に矢を射か
けたり、引きだして、うしろ手にしぼり、鉄の釘を彼らの頭の中
央にうち込んだりした。また多くの聖なる教会に火をかけ、修道

院や村々を焼き、(スドの)両側の少なからざる財産をうばつた。そのうち、東から軍勢が来たつたとき、デレステクのフオカがマキドニア(人)をひきいて、また、ストラチラトのフェドルがフラキア人をひきい、また彼らと共に貴族の高官たちもルシをとり囲んだ。ルシは相談してグレキに対して武装して出撃し、しかして、彼等の間には、激しい戦いがあり、かろうじてグレキが勝つた。一方ルシは夕方近くおのれの従士団のもとにもどり、夜中に船にのり込んで逃げ去つた。また、フェオフアンは火をそなえた船に乗つて彼等をむかえ、しかして筒で火をルシの船に放ちはじめた。しかして、おそろしい奇跡がみられた。ところで、ルシは炎をみて逃げようとして海の水の中へとび込んだ。かくして、他のものたちは、おのれの国へ帰つた』。(古代ロシア語原文省略)。

ハマルトルス年代記古代スラヴ語訳によれば、これに相当する一節が次の様に読まれる。

Июния же мѣсяца 11 низыилуше Руси на Константинь градъ съ корабли 10 тысушь. Послан-же быста на нихъ съ всеми корабльми, елико прилучишесе въ Цариграде, патрикие Феофанъ, и корабле наредивъ и уготовавъ, и постом и слъзами себе оградивъ яко паче, на Руси поиде братисе съ ними кораблехъ. И понеже они придоше и близъ Фара быше, съ къ Евксинскому Поуту въ устий лову, въ Иеро глаголемое, вънезаяну нападе на не, и убо своимъ пръвее кораблемъ прилудвъ, от-Русскагаго плъка множайшихъ порази, и устреннемъ огнемъ множайшее корабле пожеже; прочии же корабле побегоше. Имже последующе, и прочии корабле велиции потекше, съвръшену сътворише победу, и многы убо

корабле потопише съ самими мужии, многы же низложише, других-же живыхъ еше; ети же бывше убо въ восточную страну, въ Эгори глаголемы, преведени быше. Послан-же бысть тогда и Варда Фока по суху на конехъ бръзкихъ претечи ихъ; и убо сихъ плъку мнозехъ пославшу къ Вифиниисей стране, яко пишу себе и ину потребу купити, и обреть плъкъ ихъ реченный Варда, злехъ поразилъ, победивъ и поклавъ ихъ. Съниде же тогда и Иоанъ магистръ съ всеми восточными вой, и многы от-сихъ искази. Многа же и велика зла си сътворише, прежде не си иде Гръчьская воиска: ибо Стенонъ глаголемы въсь пожегоше, и ихъ поемааху пленники, овехъ убо распинааху, овех-же по земли протезааху, овех-же якоже белегы поставляюще, стрѣлами състрелааху, елико же от-священникъ поемааху, наопеть руже свезахъ, гвозды железны на средь главы имъ прибывааху; многы же святыи церкви огневи предаше. Зиме же уже настающе и пицу не имуше; тогда нашъ войска боецесе убо, и въ корабле же свое въшъдше, хотеаху въ своя отити и утаитесе кораблеи тѣцешесе. Септемвриа мѣсяца, 15 ендикто, отплути устръмившемсе въ Фракиискую страну, от-реченнаго Фесфана патрикия сретени бывше, ибо не могоше утаитесе бѣдрьливне оны и добрыи душе; абие убо въторую брань съвѣкупи, и многы корабле потопи, и многы от-нихъ поби реченный мужъ; малом-же от-кораблеи спасшемсе, въ

нощи наставши побегоше. Феофан-же патрикие с победою светлою възращъсе, и чьстне и велико-лепне приеть бысть, и паракимоенскымь саномь почтень бысть.

『ところで、六月十一日にルシがコンスタンチンの町を一万隻の船と共に破壊した。彼等に対して、ツアリグラドに居合せた限りの総ての船と共に総主教フエオファンが派遣された。しかして（彼は）精進及び涙を以て、できる限り強くおのれを守り、ルシに向つて、それらと戦うべく船に乗つて出かけた。しかして、彼等が到着し、ファルの近くにいた後、この者は、エヴクシオンのポント（湾）へ、イエロといわれる網の口に（至り）、突然、ルシたちを襲つた。しかして、先づおのれの船でこぎ来たり、ルシの軍勢から多くの者たちを打ち果した。しかして設備した火で以て多くの船を焼いた。その他の船は逃亡してしまつた。彼等が追跡していた時、その他の大きな船は流れ、完全なる勝利を獲た。というのは、多くの船は家臣を乗せたまゝ沈み、また多く（の船）をこわした。その上に、まだ生きていたものたちを（打ち果した）からである。とらえられたものたちはズゴリイと言われる東の国へ連れ移された。ところで、その時には、ヴァルダ・フォカが彼等をきるために陸路を早馬で派遣された。しかして、これら多くの者たちを、軍勢が、おのれの食べ物及び他の必要なものを買うために UIFINIK の地方へ遣わした時に、上記のヴァルダが彼等の軍勢を見つけ、これらの者たちを多いに殺し、打ち勝ち、しかして彼等を打ち果した。ところで、その時、騎士団長のイオアンもまた総ての東方の軍勢と相まみえて、それらのものたちの多くを破つた。これらの者たち（ルシ）は、グレキの軍が以前には会いもしなかつたほどの多くの大きな悪をなしたのであつた。というのは、所謂ステエノンを全部焼き、捕虜として捕えたものたちを、あるものたちは、はりつけにし、またある者たちを大地

にひきすえ、またある者たちを的のように置いて矢を射かけたのである。僧を捕えた限りでは、両手を逆手にしばりあげ、鉄の釘を彼等の頭の中央に打ち込んだのである。多くの聖なる教会もまた火にかけた。ところで既に冬がはじまり、食べ物を持たなかつたので、その時、襲つて来たる軍勢を、おそれた。しかして、おのれの船に乗り込み、おのれの（国）へ帰ろうと欲し船を引きさげようと望んだ。九月のインジクト十五に、前述したフエオフアン総主教によつて守られたフラキアの国へ急ぎ航した。彼等の勇敢な者たちや良き生命を守ることができなかつた。再び才二回目の戦いに入り、多くの船をしづめ、彼等の多くの者たちを上記の士が打ち果した。（それらの）船のうちで少数のものだけが助かり、夜中に、（船に）乗り、逃亡した。ところで総主教フエオフアンは立派な勝利をおさめて戻り、しかして、礼をつくし、壮重に迎えられ、しかして、バラキモメンの位に任ぜられた。』

この様に、明らかに、『過ぎし年月の物語』の中にハマルトルスの年代記の一節が書き抜かれ、或は、直接的に反映している個所を、もう一個所あげておかなければならない。それは、『過ぎし年月の物語』が年号を設定して記録をはじめめる以前の個所にみとめられる。人類の祖であるアダムから、現在の時代に至る間を手短かに記述するところである。勿論、文獻的に最終段階にまでさかのぼるとすれば、旧約聖書をもち出さなければなるまいが、年代記者は、決して自分で旧約聖書を要約したのではなかつた。次の様なハマルトルスの文章を要約したのである。前のものと同じくシノダーリ写本一四八号の古代スラヴ語訳によることにする。（『過ぎし年月の物語』の原文と日本語訳は省略）。

Сказание вкратце сущимь от-Адама до днешняго времени.

Адамь роды Сифа, Сифь Еноса, Енось Каинана, Каинань Малелеила, Малелеиль Иареда, Иаредь

Еноха, Енохъ Мафусала, Мафусаль Ламеха, Ламехъ
Ноя, Ное Сима. Суть убо от-Адама до потопа
2042. По потопе же Симъ, сын Ноевъ, роди Арфа-
ксада, Арфаксаль Каинана, Каинанъ Сала, Саль
Евера, Фалека, Фалекъ Рагава. Въ дни Фалековы
разделена бысть земля; при семъ стльпотворение
сътворисе. По Фалеце Рагавъ роди Серуха, Серу-
хъ Нахора, Нахоръ Фара, Фара роди Авраама;
въкупе летъ 3512. Авраамъ роди Исаака, Исаакъ
Иакова, Иаковъ Левиа, Левий Каафа, Кааф Аврама,
Аврамъ Моусея пророка; сьи изведъ люди от-Егу-
пта. От-Авраама до исхода Израилева летъ 509,
от-потопа же летъ 1579; въкупе от-Адама до
Давыда летъ 4470. Давыдъ роди Соломона, дръ-
жавъ царство за 40 летъ, Соломонъ роди Рово-
ама, царствовавъ летъ 40, Ровоамъ царствова летъ
17, Авиа лета 3, Аса летъ 40, Иоасафать летъ
39; при семъ пророчествова Михей, и Илиа, и
Елисей; Иорамъ летъ 9, Охозиа лето 1, Гофо-
лиа мати Охозиева летъ 7, летъ 40, Амесия летъ
29, Азариа летъ 59, Иоафъ лето 1, Ахазъ летъ 16,
Езекиа летъ 29, Манасия летъ 52, при немъ съ-
здесе Византиа; Амосъ лете 2, Иосие 31, Иоахазъ
лето 1, Иоаким летъ 14, Иехониа лето 1, Седе-
кие летъ 14; сего ослепивъ Навуходоносоръ, пле-
нника възе, и храмъ огнемъ поцалень бысть от-
Навузардана. От-начала царства Соломонова до
пленения Иудова, иже въ Вавулоне, летъ 519.
Навуходоносоръ летъ 24, Улемардахъ сынъ его
летъ 5, Валтасаръ лета 3, Дарие летъ 17, Киръ

летъ 31, Камвись летъ 29, Дарие другий летъ 28, Артаксерскъ летъ 33, Дарие летъ 9, Артаксерскъ дльгорукий летъ 34, Охось 21, Арисохъ 2, Дарие Арсамъ 6. Сего убивъ Александръ Македонянинъ, и разоръ Перское царство, царствова летъ 12 и скончаше въ Вавулонии, снй летъ 32; покори же варварскихъ языкъ 22 и колена Еллиска 13, Выпуще от-Адама до Александра летъ 5188. По скончани же сего, Египтомъ и Александриею царствова Птоломей летъ 24, Птоломей Филадельфъ летъ 30; при семь Еврейскыя священныя книги в Елладскый языкъ преписашеся; Птоломей Евергетъ 25, Птоломей Филопаторъ 17, Епифанъ 23, Филоматоръ 35, други Евергетъ 29, Фискъ 16, Сидиритъ 9, Александръ 3, Птоломей Сотиръ 8, Дионисие 28, Клеопатра 22. Въ третье лето сего пръвее единоначельствова по закону Гаие Иуль Кесарь, от него же кесари прочи царие начеше зватисе, просиггигъ лета 4; Кесарь Августъ 56. В 15 лето царствова его Клепатру убивъ, пръвее низложи Птоломеово царство, иже царствоваше летъ 208. Бывають убо от-Адама до начела царства Августа, по известныхъ летописецъ, летъ 5457. Въ 43-е лето царства его родисе плтью Господь нашъ Исусъ Христосъ от-святыя Девы Богородице, Куринь же съветомъ велмужи посланъ бысть въ Иудею, отъписание сътвори имениемъ и жителемъ. От-Адама до въчеловечения Христова летъ 5500. Тиверие царствова летъ 22; въ 15 лето царства его еувангильское учение начеть Господь, и въ

1, -е лето пострада насъ ради волну ю страсть.
Сут-же от-Адама до Господня възнесения летъ
5533. Гаие лета 4. Клавдие 14. Неронъ 14, и
бежать себе погребѣ жива. Успаниянь 10; в 2-е
лето царства его бысть пленение Иерусалиму от-
Римлянъ, по 40-хъ летехъ Господа нашего Исуса
Христа възнесени. Тить лета 3. Доместиянь 15.
Неруи лето 1. Траиянь 18. Адрианъ 21. Тить
Антонинъ месяца 2. Александръ Мамаль 13. Ма-
ксиминъ 6. Филипъ 6. Декие 1. Аврилиянь 6.
Провъ 7. Каръ 2. Диоклитиянь 20. Константинъ
великий 31; при семь бысть 1 събор. Суть убо
от Господа нашего въчеловечения до 1-го събора
318 святыхъ отецъ. Скончавсе сый летъ 65 великий
Константинъ, остави тремъ сыномъ своимъ царство:
Косте, Константину и Константию, иже царствова-
ше летъ 24. Иулианъ преступникъ 2. Иувианъ 9
месяць. Иуалентинианъ великий 10. Уаль Гра-
тианъ 6. Уалентинианъ 15. Феодосие великий 16;
при нем-же бысть второй събор. Аркадие 4. Фе-
одосие малый 42, при нем-же бысть третий съборъ.
Маркианъ 6; при нем-же бысть 4 съборъ. Львъ
великий 18. Зинонь 17. Анастасие 27. Иустинъ
Фраксъ 9. Иустинъ другой 13; при нем-же бысть
5 съборъ. Триверие 3. Маврикие 20. Фока 8. Ира-
клие 30. Константинъ сынъ Ираклиавъ 17. Иус-
тинъ 10. Львъ 3. Тиверие Апсимаръ 7. Иустинианъ
6. Филиппикъ 2. Анастасие Артемъ 2. Феодосие 1.
Львъ Кононь 1. Иконоборць Константинъ сынъ
его 18. Львъ сынъ Костантиновъ 5. Константинъ

сь православною материю своею Ериною 3; при си-
хъ бысть 6 съборъ. Константинъ единъ 8. Михаилъ
и мати его 5 и месяца 2. Никифоръ 7. Ставракие
лето 1 и месяца 2. Михаилъ лето едино и месяцъ 9.
Львь 7 и месяцъ 5. Михаилъ летъ 8 и месяцъ 9.
Феофиль Трофоръ летъ 17 и месяцъ 9.

『アダムから今日の時に至るまでにあつた簡略な物語。』

アダムはシフを生んだ。シフはエノスを，エノスはカイナンを，
カイナンはマレレイルを，マレレイルはヤレドを，ヤレドはエノ
フをエノフはマフサルを，マフサルはラメフを，ラメフはノエを，
ノエはシムを（生んだ）。アダムから洪水まで二〇四二年である。
洪水の後，ノエの息子シムはアルファクサドを，アルファクサド
はカイナンを，カイナンはサルを，サルはエヴェルを，エヴェル
はファレクを，ファレクはラガフを（生んだ）。ファレクの時に，
國が分けられた。この（者の）時に塔建設が行われた。ファレク
の後，ラガフはセルフを生み，セルフはナホルを，ナホルはファ
ルを，ファルはアヴラアムを生んだ。計，三三一二年。アヴラア
ムはイサアクを生み，イサアクはイアコフを，イアコフはレヴィイ
を，レヴィイはカアフを，カアフはアヴラムを，アヴラムは予言
者モウセイを（生んだ）。この者は，人々をエグプトから導き出
した。アヴラアムからイスライルの出エジプトまで五〇九年，洪
水からは一五七九年であり，アダムからダヴィドまで計四四七〇
年である。ダヴィドは，四〇年間帝國を統治してソロモンを生ん
だ。四〇年間統治してソロモンはロヴオアムを生んだ。ロヴオア
ムは十七年統治し，アヴィマは三年間，アサは四〇年間，イオア
サファドは三九年間（統治した）。この者の時，ミヘイ，イリア
も，エリセイも予言を行つた。イオラムは九年間，オホジアは一
年，オホジアの母ゴフオリアは七年，イオアスは四〇年，アメシ
ヤは二九年，アザリアは五九年，イオアフは一年，アハジは十六

年、エゼキアは二九年、マナシヤは五二年（統治した）。彼の時に、
に、ヴィザンチアが創られた。アモスは二年、イオシエは三一年、
イオアハズは一年、イオアキムは十四年、イエホニアは一年、セ
デオエは十四年（統治した）。この者をナヴホドノソルは捕えて
盲目にし、神殿もまたナヴザルダンのために火にやかれた。ソロ
モンの統治の始めからヴァヴロンにおけるイユドの捕囚まで五一
九年である。ナヴホドノソルは二四年、彼の息子ウレマルダフは
五年、ヴァルタサルは三年、ダリエは十四年、キルは三一年、カ
ムグイスは二九年、もう一人のダリエは二八年、アルタクセルク
スは三三年、ダリエは九年、手の長いアルタクセルクスは三四年、
オホシは二一年、アルソフは二年、ダリエ・アルサムは六年（
統治した）。この者をアケドニアのアレクサンドルが殺し、ペル
スの帝国を滅ぼし、十二年統治し、ヴァヴロニヤで死んだ。この
者は三二年（統治した）。（彼は）野蛮な種族二二及び異教十三
種族を平定した。アダムからアレクサンドルまで計五一八八年で
ある。この者の死の後エギプト及びアレクサドリアをプトレメイ
が二四年間統治し、プトレメイ・フィラデルフは三十年間（統治
した）。この者の時に、エヴレイの聖なる書物がエルラドの言葉
に書きかえられた。プトレメイ・エヴエルゲトは二五年、プトレ
メイ・フィロパトルは十七年、エピファンは二三年、フィロミト
ルは三五年、もう一人のエヴルゲトは二九年、フィクスは十六年、
シジリトは九年、アレクサンドルは三年、プトレメイ・ソテルは
八年、ジオシエは二八年、クレオパトラは二二年（統治した）。
この者の三年目に、はじめて、ガイエの法に従つてイユリ・ケサ
ルが独裁し、彼から他の皇帝たちが（皇帝と）呼ばれはじめた。
プロシグギグは四年（統治した）。ケサル・アヴグストは五六年
（統治した）。彼の統治の十五年目にクレオパトラを殺し、はじ
めて、プトレメイの帝位を廢した。二〇八年間帝位がつゞいてい
たものである。アダムからアヴグストの統治の始まりまで、有名

な年代記者たちによれば、五四五七年である。彼の統治の四三年目に主は肉体として我々のイスス・フリストスを聖なる処女の聖母によつて生み給うた。貴族たちの相談によつてクリンがイユデヤに派遣され、領地及び住民たちに布告した。アダムからフリストスの誕生まで五五〇〇年である。チヴェリエは三三年間統治し、彼の統治の十五年目に主は福音の教えを始め給うた。十九年目に、我々のために進んで受難を獲給うた。アダムから主の昇天まで五五三三年である。ガイエは四年、クラヴジエは十四年、ネロジは十四年（統治し）、ウエスバンヤンは十年（統治した）。彼の統治の二年目にローマ人たちによるイエルサリムの捕囚があつた。我々の主イスス・フリストスの昇天の後四十年のことである。チトは三年、ドメチヤンは十五年、ネルイは一年、トライヤンは十八年、アドリアンは二一年、チト・アントンは二十年、彼の息子マルコは十六年、アントニエ・ヴイルは七年、コモドは十二年、もう一人のアントニエは四年、セヴイルは十八年、アントニジは二ヶ月、アレクサンドル・ママルは十三年、マクシミンは六年、フィリブは六年、ジェキエは一年、アグリリアンは六年、プロガは七年、カルは二年、ジオクリチヤンは二十年、コンスタンチン大帝は三一年（統治した）。この者の時に才一回宗総会議があつた。我々の主の誕生から才一回宗総会議までに三一八人の聖なる父たちがいる。このコンスタンチン大帝は六五才で逝去し、おのれの三人の息子に帝国を残した。即ち、コスチヤ、コンスタンチン、コンスタンチイーの三人である。二四年統治したのである。羅人ユリアンは二年、イウヴァイアンは九ヶ月、イウアレンチニアン大帝は十年。ウアリ・グラチアンは六年、ウアレンチニアンは十五年、フェオドシエ大帝は十六年。この者の時、才二回宗総会議があつた。アルカジエは四年、小フェオドシエは四二年。彼の時才三回宗総会議があつた。マルキアンは六年。彼の時に才四回宗総会議があつた。レフ大帝は十八年、ジノンは十七年、アナス

タシエは二七年，イウステン・フラクスは九年，もう一人のイユ
ステンは十三年，この者の時に才五回宗総会議があつた．チヴェ
リエは三年，マヴリキエは二十年，イラクリエは三十年，イラク
リエの息子コンスタンチンは十七年，イウステニは十年，レフは
三年，チヴェリエ・アブシマルは七年，イウステニアンは六年，
フィリピクは二年，アナスタシエ・アルテムは二年，フェオドシ
エは一年，レフ・コノン是一年，彼の息子コンスタンチン聖像破
壊者は十八年，コンスタンチンの息子レフは五年，コンスタンチ
ンはおのれの正教の母エリナと共に三年統治し，この二人の時に
才六回宗総会議があつた．コンスタンチンは一人で八年，ミハイ
ルと彼の母が五年と二ヶ月，ニキフォルが七年，スタヴラキエが
一年と二ヶ月，ミハイルが一年と九ヶ月，レフが七年と五ヶ月，
ミハイルが八年と九ヶ月，フェオフィル・トロフォルが十七年と
九ヶ月（統治した）．

この様に，『過ぎし年月の物語』は，度々，ハマルトルスの年
代記を利用していたのである．その後，各年代記でも，おそらく
は，一々，ギリシア語の原典へは帰らずに，上に引用したような，
古代スラヴ語訳にまでしか立ち帰らなかつたことであろう．

然し，年代記者がよりどころとした古い文献が，實際はビザン
チンのハマルトルス年代記であつたかどうかは決して明言できな
い．というのは，『過ぎし年月の物語』が，年代不明なほどの古
い昔話に終止符を打ち，初めて年号を設定し，6360年（西暦852
年）として更めて記事を書きはじめたとき，その前書きには，次
の様に書かれた．

В лето 6360. Индикта 15, наченшо Михаилу цар-
ствовати, начася прозывати Руска земля. О сем
бо уведахом, яко при сем цари приходиша Русь
на Царьгород, якоже пишется в летописаньи
Гречьстем: темже отселе почнем и числа по-

ЛОКИМ.

『6360(852)年、すなわちインジクトの十五にミハイルが統治し始めたとき、ルシの地と呼び始められた。このことについて我々が知つたのは、この皇帝の治世にルシがツアリゴロドに(攻め)来たり、(そのことについて)グレキの年代記に誌されているからである。それゆゑに、ここから始めて、年代を誌そう』

この様に、年代記者がギリシアの年代記を参照していることを明らさまに述べながらも、この文章に続く一節は、本当は、ハマルトルスの年代記であつたというよりも、むしろ、宗法集《Номоканон》からの書き抜きであつたように思われる。ソフイア羊皮紙本によれば、この宗法集の冒頭には『年代記者ツアリグラードの総主教ニキフォルの要約』《Никифора патриарха Царяграда летописецъ въскоре》となつていたので、それに引かれて、『過ぎし年月の物語』では、簡単にグレキの年代記としたのではないだろうか。

トロイツキー、ラヴレンチー、イパーチー各年代記の『過ぎし年月の物語』では、年号設定に続く文章が、次の様に読まれる。

от Адама до потопа лет 2242. а от потопа до Аврама лет 1000 и 82; а от Аврама до исхоженья Моисеева лет 430; а от исхоженья Моисеева до давыда лет 600 и 1; а от Давыда и от начала царства Соломона до плененья Иерусалимля лет 448; а от плененья до Олександра лет 318; а от Олександра до Рождества Христова лет 333; а от Христова Рождества до Костянтина лет 318; от Костянтина же до Михаила сего лет 542. А от первого лета Михайлова до первого лета Олгова, Рускаго князя, лет 29; а от первого лета Олгова, понеже седе в Киеве, до

перваго лета Игорева лет 31; а от перваго лета Игорева до перваго лета Святъславля лет 33; а от перваго лета Святославля до перваго лета Ярополча лет 28; а Ярополк княжи лет 8; а Володимир лет 37; а Ярослав княжи лет 40. Тем же от смерти Святославли до смерти Ярославлли лет 85; а от смерти Ярославлли до смерти Святотолчи 60. Но мы на прежнее возъвратимся, скажем, што ся удея лета си; якоже преже почал бяхом первое лето Михаилом, а по ряду положим числа.

『アダムから洪水まで2242年、洪水からオヴラムまで1000と82年、オヴラムからモイセイの出エジプトまで430年、モイセイの出エジプトからダヴィドまで601年、ダヴィドから、またソロモンの統治の初めからイエルサリムの陥落まで448年、捕囚からアレクサンドルまで318年、アレクサンドルからフリストの生誕まで333年、フリスト生誕からコステヤンテンまで318年、コステヤンテンからミハイルまで542年、である。ところで、ミハイルのオ一年から、ルンの公オレグのオ一年まで29年、オレグのオ一年、即ち、キエフにおいて即位してからイゴリのオ一年まで、31年。イゴリのオ一年から、スヴヤトスラフのオ一年まで33年。スヴヤトスラフのオ一年からヤロ波尔クのオ一年まで28年。ところでヤロ波尔クは8年間公としてあつた。ヴォロジメルは39年間、ヤロスラフは40年間公としてあつた。このゆえに、スヴヤトスラフの死からヤロスラフの死まで85年、ヤロスラフの死からスヴヤト波尔クの死まで60年である。しかし、我々は初めに戻り、これらの年に何がなされたかを物語る。さきに我々は、ミハイルをもつて最初の年としたので、順に従つて年代を記そう』

年代記は、この様にして、此処から年代順に記述が始められるが、この文章の前半の年号や歳月の計算は、既に引用したハマルトルスにも詳しく書きとめられていた。だから、この前半はハマルトルスからの抜き書きで、後半のロシアの公たちの場合の歳月の勘定の場合は、ギリシアの文献ではなくて、ロシア本来の文献か或は記憶からの書き取りであると一応は考えられるかも知れない。

然し、実はそうではない。ロシアの公たちの場合の歳月の勘定の仕方までも含めて、この一節の更に詳しい記事が、ソフイアの羊皮紙の宗法集にあるのである。「過ぎし年月の物語」の記者（編者）は、此処では、ギリシア語による原典へなどは立ち帰っていないかもしれない。宗法集（もとをただせば、これとても、ビザンチンの物からの訳本でなお古くは旧約聖書に由来する箇所もあつた）からの簡略な書き抜きをおこなつたものであつたと思われる。宗法集〈Номоканон〉には、その前半にハマルトルスの年代記の訳本の場合と同じく、アダムから年を勘定しはじめますが、ビザンチンの皇帝ゴスチヤンチン〈Костянтин〉にまで至ると、ロシアの公イゴリ、ウオロジメル、オレグ、ヤロボルク等に就ても詳しく年を勘定しているのである。そして、面白いことに、此処には、ルシによるヴァリヤーギ招へいの折の口上の一節まで読みとれるのである。このあたりから後の部分は後代にロシアで書き加えられたものであろうか。「過ぎし年月の物語」の6360(852)年の先にあげた文章に対応すべき、宗法集の文章は非常に長いが、その全部を下に書きあげて、また、後に書き加えられたかも知れない後半のロシアの公たちにまつわる部分まで通して日本語訳をつけておこう。

Адам первый человек был лет 230, роди Сифа и живе летъ 700 до Малелеила, живе всех лет 930.

Сиф был лет 200 и 15, роди Еноса и живе лет

912. Енос же бив лет 107, роди Каинана и жи
всех лет 900. Каинан бив лет 170, роди Малеле-
леила и жи всех лет 909. Бив Малелеил лет 165,
роди Арета и жи всех лет 885. Арет бив лет 162,
роди Еноха и жи всех лет 962. Енох бив лет 165,
роди Мафусала и жи всех лет 345; и угоди Енох
Богу и не обреташеся, яко престави и Богъ.

Мафусал бив лет 167, роди Ламеха и жи всех лет
969. Ламех бив лет 178, роди Ноя и жи всех лет
406. Нои бив 500 лет, роди 3 сыны, Сима, Хама,
Афета; и в 600-е лето живота Ноева потоп бысть
на земли, и жи по потопе лет 380, и бысть всех
лет 980.

А от Адама же до потопа лет 2242.

Сим бив лет 100, роди Арфаксада в 2-е лето по
потопе, и жи всех лет 500. Арфаксад бив лет
135, роди Каинана и жи всех лет 303. Каинан
бив лет 130, роди Салу и жи всех лет 403. Сала
бив лет 135, роди Евера и жи всех лет 270. Авер
бив лет 130, роди Фалека и жи лет 209. Фалек
бив лет 134, роди Рагава; при Фалеце бысть раз-
деление языком.

От потопа до разделенья язык лет 500 и 30.

Рагав бив лет 137, роди Серуха и живе лет 207;
то Серух и първое нача кумиры творити. Серух
бив лет 132, роди Нахора и жи лет 200. Нахор
бив лет 79, роди Фару и живе лет 129. Фара бив
лет 70, роди Аврама. Аврам бив 100 лет, роди
Исака.

От деления язык до Аврама лет 552.

Исак бивъ 60 лет, роди Иякова. Ияков бивъ 87,
роди Левгию. Левгия бивъ лет 45, роди Каафа.
Кааф бивъ лет 60, роди Амбрама. Амбрам бивъ лет
73, роди Моисея. Моисии бивъ лет 80, изведе
люди из Египта, и посемь водяше в пустыни лет
40.

От Аврама до исхода лет 500 и 5.

Исус Навгин всеводьствова лет 32. Старци суд-
иша лет 23. Гофоил племене Иудина лет 50. Егло-
му царю Моавьску работаше ему лет 8. Аод пле-
мене Ефремова лет 80. Иноплеменьници обладаху
лет 18. Самагарь лет 7. Барак и девора лет 40.

Под иноплеменьники лет 20. Мадияне же лет 7.

Геден лет 40. Авимелех лета 3. Фола лето 31.

Аир лет 30. Аманати лет 18. Ефтаи лет 6. Есевон
лет 7. Елом лет 10. Лавдон лет 8. Под инопле-
меньники лет 40. Самсон лет 20. По Самсоне не
бысть судье лет 40; темь и велико бысть зло.

Илии жрьць лет 20. Пророк Самоил лет 30. Саул,
първыи царь в Израили, лет 40. Давыд лет 40.

От исхода до давыда лет 600 и 30.

Соломон лет 40. Ровоам лет 17. Авия лет 6.

Асавет 40 лет. Исафат лет 25; при томь проро-
чьствоваша Михей, Илия, Елисеи. Иарам лет 8.

Охозия лето 1. Ахав 16 лет. Оховия, мати Козе-
ова, лет 7. Оас лет 40. Амасия 29 лет. А За-

хария и Охозия лет 52; при томь пророчь-
ствоваша Иосия, Амос, Исаия, Иона. Иафа лет

16. Ахаз лет 6. Иезекия лет 29. Манасия недею;
при томь Бузантии създан бысть. Амос лет 12. О-

сия лет 31; при томъ пророчествова Еремей, и Варух, и Софония. Ахаз 3 месяце. Иоким лет 11. Охония 3 лета. Седекия лет 11; при семъ Навоходоносор царь Вавилоньскыи воева Иерусалима, Седекию плени и ослепи, и многы жиды веде в Вавилон по 1000 в единомъ ужищи, с-ними же и Данил пророк и 3 отроци, и церкы пожежена бысть по 5 месяць от-Наурдана повара. Пребы отнележе създан бысть Иерусалим до пленения 648.

То Навходьносор царьствова в Вавилоне 20. Улемардах сын его лет 5. Валтосар брат его лета 3. Дарии Мидянин лет 17. По Дарии Кюр Персянин лет 32. Камбуси лет 18. Спереди вълхв месяць 7. Дарии Остапьянин лет 20. Артаван месяць 7. Артаксерекс долгоруким лет 41. Другыи Артаксерекс месяца 2. Дарии Иарсаманин лет 6; сего уби Александр Македонскыи, и раздруши Пьрьское царство, у умре в Вавилоне, царствова лет 12, а всех лет царства его 35. И раздели царство 4-м мужем своим: Филипу, Селевку, Антиоху, Птоломею.

От Адама до умертвия Александра лет 5167. Птоломеи царствова в Еюпте и в Александре, и нарицашеся братолюбив, при томъ священныя книги на Елиньскыи язык преложены быша, лет 38. Птоломеи благодатель лет 25. Птоломеи унеиши лет 29. Птоломеи явлены лет 7, 6 месяць. Птоломеи Заячичь лет 10. Птоломеи брат его лет 8. Селевк, иже Никанор наречен бысть, лет 20. Сын Селе-

вков Антиох славный лет 15; то мучи Елезара и Соломонию и 7 отрок. Антиох сын его лет 23; при томъ Юлиия Кесаря выпороша из утробы мъртвое матери его. Птоломеи двоостровный лет 30. Клеопатрия Птоломеева лет 22. В 23-е лето ея нача в Риме първое царствовати Юлиии Кесарь лет 18; то закон до индикта и висикость обрет; в-то время Ирод царемъ бе в Иерусалиме. Юлиии Август сыновець его, Октавин сын, иже и севаст наречен, царствова лет 57 и месяц 6 и 2 дни; оттуде Антиохьяне лета их чтуть сиче: в 15 лето царства того вселенеи първое написание бысть; Клеопатру убив раздружи Птоломеискую власть, иже царствоваша лет 295.

От Адама до Августа лет 5457.

В 42-е царствия его родися по плоти от-святыи Богородице Марие Господь наш Исус Христос; послан бысть от Августа Кесаря в-то время Кюриней написание створити всеявласти Иудеиския. Всех лет от-Адама до въплощения Господня 5000 и 500; написание же бе от-Августа трии дея вин. От въплощения Господня до пришьствия до волхов лета 2, а до смерти Иродовы лета 3, а до Архилаевы смерти 9 лет, а 15 до смерти Августовы, жил бяше лет 38; до крещения Господня лет 30, до учения Иоанова при Иродидовемъ лето, по преставлении Иванове до смерти Господня месяц; а от крещения до страсти Господня лета 3, от въскресения до възнесения на небеса дни 40, от възнесения до съшествия святого Духа

на апостолы днии 10; от възнесения до побиения
първомученика Стефана лет 7, от побиения Сте-
фанова до света явлешагося с небесе Павлу ме-
сяць 6. А Богородици от-рожества до въведения в
церковь лета 3, в церкви бы до 14 лет, в дому
Иосифове месяца 4; и потом благовещение прия
от-архангела Гаврила, и зачьноши роди нетьле-
нно Господа нашего Исус Христа, бе лет 15,
живе до страсти Господня лет 33, по възнесении
и в-Ерусалиме в дому Иоана евангелиста живе с
ученики лет 11; живота ея всех лет 59.
От-Адама до страсти Господне лет 5533.
По Августе царствова в-Риме сын Иулиев Тиве-
рии лет 23. Агаи лета 3 и 8 месяц. Клавдии
лет 13, 8 месяц, днии 20. Перон лет 13 и днии
8, погребе себе живого; при семь Петр и Павъл,
Ияков брат Господень мучени. Галв 1 месяц, и
заколен бысть. Офон день 1, и зарезася. Иути-
лии месяц и 5 днєв, и убиша и в-Риме пьяно-
го. Успасьян лет 10; в 2-е лето царства его пле-
ньн бысть Иерусалим Титом, сыном его, по въз-
несении 46 лет. Тит лета 2 и месяца 2, и за-
колен бысть в подате. Доментиян лет 15 и месяц
5; то гонение въздвиже, Иоан Богослов в-Патем
поточен. Неруя лето 1 и месяц 4. Троян лет 19
и 6 месяц; при семь Игнат Богоносець мучен.
Андриян лет 20; и съ раздруши Иерусалим, Елии
град нарече, водным трудом отрудоват, убиен бы-
сть. Тит Антонин, наречены благочестивыи, с
детми своими лет 22 и месяце 3. Марко, сын

его лет 12 и месяц 14; при том Иустин философ мучен. Антонин же Ивир лета 2. Комод 13. Елин Протинакс месяц 6, заколен бысть в-полате. Севир лет 18; при томъ Леонид отецъ Оригеонов мучен, Иполит Римьскыи, ростяше же и Григорию чудотворьць. Антонии сын Севиров лет 7, заколен бысть. Маркин лето 1, и заколен бысть Антонин Галл лета 4, заколен в-Риме. Аляксандр 13, заволен бысть. Максим лета 3, и заколен бысть. Гордии лет 6, и удавися в Африкии. Филипп лет 7, и заколен бысть в оградех. Декии лето 1 и месяце 3, и заколен бысть на торгу. Гал и Улусиан лето 1 и месяце 4. Увалерьян и Гай лет 15, и заколена быста. Клавдии лето 1 и месяц 9. Авриан лет 5 и месяц 6, и заколен бысть. Такит месяц 6, и заколен бысть. Прол лет 6 и месяце 4, заколен бысть. Кар со отрокома своима, Карин и Нумерьян, лета 2, и заколени быша. Диоклитиян и Максемьян лет 20.

От-Адама до умьртвия Диоклитияня лет 5766; от страсти же Господня до начала Диоклитьяня лет 276.

Крестьяньское царство. Костянтин сын святыя Олены лет 31; в 12 лето царства его сбор бысть в-Никеи 300 и 18 отецъ на Арья попа Аляксандрьскаго, разделяющаго божества; от възнесения Христова до 1 сбора лет 318, а от-Адама до умьртвия Костянтинова лет 5836, всего живота его лет 65. Остави же 3 сыны, Косту в-Риме, Костянтина Царигороде, Костянтія в Антиохии, се ство-

ри ипатин; царствовала же лет 24. Иулиан преступник лета 2 и месяц 6, и убиен бысть в Персиде. Увалентиан новий и Феодосии великий лет 16; при семь 2 сбор бысть в Цариграде отець 150 на Македония духоборца; от 1-го сбора до 2-го лет 60. Аркадии сын Феодосьев лет 13 и месяце 3. Феодосии сын его лет 42 месяца 2; при семь 3-и сбор бысть в Ефесе отець 200 на Несторья человекослужебника; от 2-го сбора до 3-го лет 58. Маркиан и Увалениян лет 29; при сею же 4 сбор бысть в-Халкидоне отець 630 на Евтуха и Диоскора и Севгира, смущение и размешение въводящем; от 3-го сбора до 4-го лет 10. Леон великий лет 16. Леон малыи лето 1. Зинонь лет 17. Анастасии лет 27 месяце 4. Иустин волосатыи лет 9 и днии 23. Иустияния лет 38 месяць 7; при семь 5-и сбор бысть в Цариграде отець 164 на бладыства Оригеонова; от 4-го сбора до 5-го лет 100. Устьян лет 12 месяць 10 днии 20; в 7 лето, Иустин нетии его, скончася круг святых Паскы лет 532, отнюду же Господь распяся. Тиверии лет 5. Маврикии лет 20 месяце 4. Фока лет 8. Ираклии с сыномь лето 31; в 3-е лето царства его болшая часть Римское власти Пърси прияша, Иерусалим пожьгоша, и чьстныи крест и Захарию патриарха и много людии в Персы ведоша; в 12 лето Хоздрои убиен и пленение възрачено бысть. Костянтин сын Ираклиев лет 28, в Сикелии убиен бысть. Костянтин внук Ираклиев лет 17; в лето 6 сбор бысть Цариграде отець 285 на Ария, и Кюра, и

Макария, единая воля ереси; от 5-го сбора до 6-го лет 130. Иустиньян лет 10. Леонтий лета 3. Тиверий же Иапси лет 7. Иустьянин 2 лет 6. Силикс лета 2. Анастасий же Иаремии лета 2. Федосий лето 1. Лев Конин лет 25 месяце 3 дни 3. Костянтин, сын двов, с матерью лето 31 и месяца 2 и дни 2; при тою в 8-е лето 7 сбор бысть в Никеи второе отець 367 на иконоборце; от 6-го сбора до 7-го лет 122, а от-Адама в лето 6305, а от-Спаса нашего Бога лет 805; Костянтин убиен бысть на торгу. Ирина мати лет 5 и месяца 2 и дни 12. Никифор лето 1 и месяць 9. Ставракии сын его месяца 2. Михаил зать его лето 1 и месяць 9 дни 11. Лев лет 7 и месяць 5 и дни 14, заколен бысть в полате. Михаил лет 8 лет и месяць 9. Феодил лет 12 месяце 3 дни 20. Михаил сын его, с Феодорою матерью его и с Феклою сестрою его, лет 14. Михаил лет 12, с Бавильемь лето и месяце 4, заколен бысть; при сего царстве придоша Русь, Чюдь, Словене, Кривичи к Варягом, реша: "земля наша велика и обильна, а наряда в-нем нетуть, поидете княжити и володет нами", и избрашася три браты с-роды своими, старей Рюрик седе вовегороде, Синеус на Белеозере, Трувор в Изборьске; от-Адама лет 6370; по двои лету Трувор и Синеус умре, и прия всю власть в-Руси Рюрик. По Михаиле царь Василии лет 18 и месяць 11; в 2-е лето царства сего крещена бысть Болгарская земля; а от-Адама лет 6377; в 12-е лето царства его Рюрик умре,

дасть княжение Олгови, сроднику своему, и сына малаго Игоря. Льв и Ольксандр, сына Василя царя, лет 26; в 12 лето царства ея предложены быша книги от Гръчьскаго языка на Словеньскыи; есть же от-крещения Болгарского до предложения книг лет 30, а от 7-го сбора до предложения книг лет 77, а от-Адама 6405. Костянтин, сын Львов, зять Романов, царствова лет 7; а в-Руси княжити Игорь, а Олег умре. Роман царствова лет 36; 27-е лето царства его убьен Игорь, поча княжити Олга с сыном Святославомъ. Иван рекомыи Цемьскыи царствова; в 1-е лето царства его иде Олга Царюгороду и крестися; от-Адама лет 6463; Святъслав княжи лет 18, и убьен бысть, и остави 3 сыны, Ярополка, Олга, Вьлодимера; седе Ярополк Киеве и уби Олга, а Ярополка уби Володимер и седе Киеве. Костянтин и Василии царствова. При сею крестися Володимер и всю Русь; от-Адама лет 6496; живе по крещении лет 28, и умре. Томъ же лете Святополк уби Бориса и Глеба, седе Киеве 3 лета, бьяся с Ярославом, възбеснев и умре. Ярослав седе Киеве лет 38; а царь бе Манамах. Изяслав сын его лет 24, убьен бысть; при семь Федосии игумен Печерьскыи бысть. Всеволод сын его седе в Киеве лет 15, и умре. Святополк лето 21, и умре. Володимер лет 13; в 2-е лето княжения сего пренесен Борис и Глеб; от-Адама лет 6623; в-то время бе царь в Гръцех Ольксии, и умре, и по нем бысть сын его Иван Порфирогент. По Володимере седе Киеве

сын его Мьстислав лет 6. Ярополк его брат лет 7. Всеволод Олгович лет 7. Изяслав мьстиславичъ лет 6. Юрье Володимериць Манамаха княжи Кыеве 3 лета. Андреи, сын его от-отца иде Суждаю в лето 6663, княжи в Володимери лето 21; поотне смерти нача быти Кыевское княжение в воли его; в-то время царь бе Мануил; в лето 6681 убиен великый князь Андреи. Михаило брат его седе в Володимери лето 1, и умре. Кыеве седе Ростислав Мьстиславичъ лет 9; Глеб Юрьевич 2 лета; Роман Ростиславичъ. А Володимери седе по Михаилце брат его Всеволод Юрьевич лет 37, владея всею землею Русьскою. По нем седе сын его Костянтин лет, а по Костянтин брат его Юрье седе в Володимери, а Костянтиновичи Василко в-Ростове, Всеволод в Ярославле; в 5 лето княжения Юрьева явишася Татарове, и многы страны плениша, и князи Русьских избиша на Калцех; в 15 лето княжения Юрьева, а от-Адама лето 6746, Татарове плениша землю Суждальскую; в-лето 6746 Татарове убиша князя Юрья и Василка, и инех Много. В-то же лето седе в Володимери Ярослав брат Юрьев лет 9, а Ростове седе княгыни Василковая с сыном Борисомь и Глебомь; Ярослав умре в Татарех. По нем седе в Володимери Святослав брат его лето 1; и прогна Андреи сын Ярославль, и княжи лет 5, и приде Неврюнь от-Адама лето 6760, и прогна и за море. Того же лета седе Ольксандр брат его лет 12; в 4 лето княжения его число бысть, от-Адама 6765. По смерти Ольксандрове брат его Ярослав лет 10, и умре. Василии брат его лета 4, и умре. В 1-е лето княжения его 2-е число бысть, от-Адама 6781. И нача ведати великое княжение Дмитрии Ольксандровичъ. Борис Ростовський княжи лет 40, и умре в Татарех; и седоста в Ростове сына его Дмитрии и Костянтин; а Глеб приехав ис-Татар, княжив 7 месяць, и умре.

.....

『最初の人間アダムは二三〇年生き、死した時にシフを生み、マレイルまで七〇〇年生き、全部で九三〇年生きた。シフは二〇〇と十五年した時、エノスを生み、九一二年生きた。またエノスは一〇七年してカイナンを生み、全部で九〇〇年生きた。カイナンは一七〇年してマレイルを生み、全部で九〇九年生きた。マレイルは一六五年してアレドを生み、全部で八八五年生きた。アレドは一六二年してエノスを生み、全部で九六二年生きた。エノスは一六五年してマフサルを生み、全部で三四五年生きた。しかしてエノスは神につかえ、神が彼をとりたるために居なくなつた。マフサルは一六七七年してラメフを生み、全部で九六九年生きた。ラメフは一七八年いて、ノイを生み、全部で四〇六年生きた。ノイは五〇〇年して三人の息子シム、ハム、アフエトを生んだ。しかしてノイの生命の六〇〇年目に地上に洪水があつた。しかして、洪水の後、三八〇年生き、全部で九八〇年であつた。

アダムから洪水まで二二四二年。

シムは一〇〇年して洪水の後二年目にアルファクサドを生み、しかして全部で五〇〇年生きた。アルファクサドは一三五年して、カイナンを生み、全部で三〇三年生きた。カイナンは一三〇年してサラを生み、しかして全部で四〇三年生きた。サラは一三五年してアヴェルを生み、全部で二七〇年生きた。アヴェルは一三〇年してファレクを生み、しかして二〇九年生きた。ファレクは一四五年して、ラガフを生んだ。ファレクの時言葉の分裂があつた。

洪水から言葉の分裂まで五〇〇と三十年である。

ラガフは一三七七年して、セルフを生み、しかして、二〇七年生きた。そのセルフは初めて偶像を創りはじめた。セルフは一三二年して、ナホルを生み、しかして二〇〇年生きた。ナホルは七九

年してフアラを生み、一二九年生きた。フアラは七十年してアヴラムを生んだ。アヴラムは一〇〇年してイサクを生んだ。

言葉の分裂からアヴラムまで五五二年。

イサクは六十年してイヤコフを生んだ。イヤコフは八七年してレヴギヤを生んだ。レヴギヤは四五年してカアフを生んだ。カアフは六十年してアムブラムを生んだ。アムブラムは七三年してモイセイを生んだ。モイセイは八十年して、人々をエユプトからみちびき出した。しかしてこの後、四十年間、荒野をみちびいた。

アダムから出エジプトまで五〇〇と五年。

イスス・サウギンは三二年間指導者であつた。長老たちが二三年間裁いた。ユドの種族をゴフオイルが五十年、モアアの王エヴルに仕えて八年、アオドはエフレの種族と八十年。異種族が支配して十八年。サマガルが七年、ヴァラク及びデヴオラが四十年。異種族の下に二十年。マジヤンが七年。グデオンが四十年。アヴィメレフが三年。フオラが三一年。アイルが三十年。アマナチが十八年。エフタイが六年。エセヴオンが七年。エロムが十年。ラヴドンが八年。異種族の下に四十年。サムソンが二十年。サムソンの後、四十年間は士師はいなかつた。それにもかゝらず偉大であつた。イリイが二十年間神官であつた。予言者サモイルは三十年間。イスライルの最初の王サウルは四十年。ダヴイドは四十年。

出エジプトからダヴイドまで六〇〇と三十年。

ソロモンは四十年。ロヴァムは十七年。アヴィヤは六年。アサヴエトは四十年。イアサファトは二五年。この者の時、予言者であつたのは、ミヘイ、イリヤ、エリセイ。イアラムは八年。オホジャは一年。アハブは十六年。ホゼの母オホヴィヤは七年。オアスは四十年。アマシャは二九年。ところで、ザハリヤ及びオホジャは五二年。この者の時予言者であつたのはイオシャ、アモス、イサヤ、イオナである。イアフアは十六年。アハズは六年。イエ

ゼキヤは二九年。マナシヤは一週間。この者の時に、ヴィサンチーが創られた。アモスは十二年。オシヤは三一年。この者の時に予言者であつたのは、エレメヤ、及びヴアフル及びソフオニヤである。アハズは三ヶ月。イオキムは十一年。オホニヤは三年。セデキヤは十一年。この者の時にバビロンの皇帝ナヴホドノソルがエルサリムを戦いとり、セデキヤを捕えて盲目にした。しかして、多くのシドをバビロンに連れ去つた。千人づつ一つの綱につないで、それらの者たちと共に予言者ダニエルも三人の子供もいた。しかして、五ヶ月後に、炊事夫のナウルダンによつて教会が焼かれた。

エルサレムが創られてから捕囚まで六四八年。

ナヴホドノソルはバビロンに二十年君臨した。彼の息子ウレマルダフは五年。彼の弟ヴアルトサルは三年。ダリイ・メジヤニンは十七年。ダリイの後ベルシヤ人のキュルが三二年。カムプシが十八年。それ以後は魔法使いが七ヶ月。オスタピイのダリイが二十年。アルタヴァンが七ヶ月。手の長いアルタクセルクスが四一年。もう一人のアルタクセルクスが二ヶ月。ヤルサマンのダリイが六年。この者をアケドニアのアレクサンドルが殺し、ベルシヤの王国を破壊し、十二年間君臨してバビロンで死んだ。ところで彼の君臨は全部で三五年である。しかしておのれの四人の息子、フィリブ、セレヴク、アンチオフ、プトロメイに王国を分けた。

アダムからアレクサンドルの死まで五一六七年。

プトロメイはエユプト及びアレクサンドリヤに君臨し、兄弟を愛するものと呼ばれた。この者の時代に聖なる書物が、ギリシア語に訳された。三八年である。慈善者プトロメイは二五年。若い方のプトロメイは二九年。素直なプトロメイは七年と六ヶ月。ザヤチの子プトロメイは十年。その弟のプトレメイは八年。ニカノルと言われたセレフクは二十年。セレフクの子の榮えあるアンチホフは十五年。この者はエレザル及びソロモニヤ及び七人の子供

を苦しめた。彼の息子アンチオフは二三年。この者の時、ユリイ・ケサリは彼の死せる母の胎内より引き出された。二つの島のプトロメイは三十年。プトモレイの妻クレオパトリアは二二年。彼女の二三年目にローマでは初めてイウリイ・ケサリが君臨しはじめた。十八年である。このとき *Ἰουδαίος* 及び *βίσις* の法ができた。この時代にイエルサリムではイロドが皇帝であつた。イユリイの後、その息子アヴグスト、息子オクタヴィンはヤヴァストとも言われたが、(二人で)五七年六月と二日君臨した。このためにアンチホフの人々は彼等の年を次の様に数えている。即ち、その君臨の十五年にはじめて世界の書きとりがあつた。クレオパトラを殺し、二九五年間支配していたプトロメイの国を破壊した。

アダムからアヴグストまで五四五七年。

彼の在位の四二年目に聖母マリヤから我々の主イスス・フリストスが肉体を以て生まれ給ひた。その時アヴグスト・ケサリからキユリネイがユデイの全権力の書きうつしをなすために派遣された。アダムから主の肉体化誕生まで全部で五〇〇〇と五〇〇年。アヴグストによる書きうつしは三つの罪の故であつた。主の誕生から魔法使いたちへの到着まで二年、イロドの死まで三年、ところが、アルヒライの死まで九年、アヴグストの死まで十五年。(彼は)八八年生きていたのである。主の洗礼まで三十年。イロドの時にイオアンの切られるまで一年、イヴァンの即位から主の受難まで一ヶ月。洗礼から主の受難まで三年。復活から天国への昇天まで四十日、昇天から使徒たちへ聖霊の降りるまで十日。昇天から最初の受難者ステエフアンが打たれるまで七日、ステエフアンが打たれてからパウエルへ天から光が現れるまで六ヶ月。降誕から聖母が教会へ入れられるまで三年。教会に十四年までいて、イオシフの家に四ヶ月いた。しかしてその後、アルハンゲルのガブリエールから祝福を受けて、しかしてみどり、我々の主イスス。

フリストスを地上のものとしてではなく生んだ。十五才であつた。主の受難まで三三年生き、昇天の後はエルサリムの福音者イオアンの家に受難者と共に十一年生きた。彼女の一生は全部で五九年であつた。

アダムから主の受難まで五五三三年。

アウグストの後ローマではイウリイの子チウエリイが二五年君臨した。アガイは三年と八ヶ月。クラウジイは十三年八ヶ月と二十日。ネロンは十三年及び八日。生きたまゝ自からをほうむつた。この者の時、ピョートル、パーヴェル、主の弟イヤロフが受難した。ガルヴは一ヶ月、しかして殺された。オフオンは一日、しかして切られた。イウチリイは一ヶ月と五日。彼を(人々は)ローマで酔つている時に殺した。ウスバシヤンは十年。彼の治世の才二年目にチト及びその息子によつてイエルサレムが捕囚された。昇天後四六年である。チトは二年及び二ヶ月、しかして宮殿で殺された。ドメンチヤンは十五年と五ヶ月。この者は迫害を行い、神学者イオマンはパテムへ追われた。ネルヤは一年と四ヶ月。トロヤンは十九年と六ヶ月。この者の時、神の体现者イグナトが受難した。マンドリアンは二十年。しかして彼はイエルサレムを破壊し、エリイの町と呼び、水腫をわずらつて、殺された。敬虔なる者と呼ばれたチト・アントニンは、おのれの子供たちと共に二二年と三ヶ月。マルコ及びその息子は十二年と十一ヶ月。この者の時、哲学者イウステンが受難した。アントニン・イウイルは二年。コモドは十三年。エリン・プロチナクスは六ヶ月で、宮殿で殺された。シヴイルは十八年。この者の時、オリゲオンの父レオニドが受難し、ローマのイボリト、奇跡を行ふグリゴリイも殺された。シヴイルの息子アントニイは七年して殺された。マルキンは一年して殺された。アントニン・ガルブは四年してローマで殺された。アリクサンドルは十三年して殺された。ゴルジイは六年して、アフリキヤで殺され、フィリブは七年してさくの中で殺

された。ジエキーは一年と三ヶ月。しかして、市場で殺された。ガルとウルシヤンは一年と四ヶ月。ウヴァレリヤンとガンは十五年。しかして（二人は）殺された。クラウジーは一年と九ヶ月。アヴリアンは五年と六ヶ月。しかして殺された。タキトは六ヶ月。しかして殺された。プロルは六年と四ヶ月で殺された。カルはおのれの（二人の）子供ガリン及びムメリヤンと共に二年。しかして（三人は）殺された。ジオクリチャン及びマクセミヤンは二十年。

アダムからジオクリチャンの死まで五七六六年。主の受難からジオクリチャンの始めまで二七六年。

キリスト教徒の国。

聖オレナの息子コスチャンチンは三一年。彼の治世の十二年目にニキヤで才一回宗総会があつた。神性を分裂させたアリクサドリヤの僧アリイに対して三〇〇と十八人が（集つた）。キリストの昇天から才一回宗総会まで三一八年で、アダムからコスチャンチンの死まで五八三六年である。彼の一生は六五年で（あつた）。（彼は）三人の息子、ローマにコスタを、ツアリゴロドにコスチャンチンを、アンチオヒヤにコスチャンチイを残した。執政官がこれをなしたのである。（三人は）二四年治世していた。罪人イユリヤンは二年と六ヶ月してベルシドで殺された。新しいウヴァレンチアン及び偉大なフエオドシーは十六年。この者の時に才二回宗総会がツアリゴロドであり、聖霊否定論者マケドニイに対して一五〇人の僧たちが（集つた）。才一回宗総会議から才二回まで六十年。フエオドシイの息子アルカジイは十三年と三ヶ月。彼の息子フエオドシイは四二年と二ヶ月。この者の時に才三回宗総会がエズエスであり、人間礼拝者ネストリイに対して二〇〇人の僧が（集つた）。才二回宗総会から才三回まで五八年。マルキアン及びウヴァレニヤンは二九年。この二人の時に才四回宗総会がヘルキドンであつた。エウトウフ、ジオスコル、セヴギルの伝

導 混乱に対して六三〇人の僧が（集つた）。才三回宗總會から才四回まで十年。偉大なるレオンは十六年。小さなレオンは一年。ジノンは十七年。アナスタシイは二七年と四ヶ月。毛深いイユスチンは九年と二三日。イユスチャニンは三八年と七ヶ月。この者の時に才五回宗總會がツアリゴロドであり、ホリゲオンの不節儀に対して一六四人の僧が（集つた）。才四回宗總會から才五回まで一〇〇年。ウスチャンは十二年と十ヶ月二十日間。彼のおいイウスチンは主が十字架にかけられてから五三二年に聖バスカの近くで死んだ。チヴェリイは五年。マヴリキイは二十年と四ヶ月。フオカは八年。イラクリイは息子と共に三一年。彼の治世の三年目にローマの國の大部分をベルシヤ人が取り、イエルサリムを焼き、聖なる十字架及び総主教ザハリヤ及び多くの人々をベルシヤに連れ去つた。十二年目にボズドロイは殺され、持ち去られたものは戻された。イラクリイの息子コスチャンチンは二八年でシケリヤで殺された。イラクリイの孫コスチャンチンは十七年。この十三年目にツアリグラドで才六回宗總會があつた。異端者であるアリイ、キニル、マカリイに対して二八五人の僧が（集つた）。才五回宗總會から才六回まで一三〇年。イウスチニヤンは十年。レオンチーは三年。チヴェリイ・イアブシは七年。イウスチャニンは二年六ヶ月。フィリクスは二年。アナスタシイ・イアレミイは二年。フェオドシイは一年。レフ・コノンは二五年三月八日。レフの息子コスチャンチンは母と共に三一年と二ヶ月と二日。このもの時才八年目にニキヤで聖像破壊者に対して三六七人の僧の才七回宗總會があつた。才六回宗總會から才七回まで一二二年、しかしてアダムからは六三〇五年目で、我々の救世主なる神からは八〇五年である。コスチャンチンは市場で殺された。母イリナは五年と二ヶ月と二日である。ニキフォルは一年と九ヶ月。彼の息子スタヴラキイは二ヶ月。彼の娘むこミハイルは一年と九ヶ月と十一日。レフは七年と五ヶ月と十四日。しかして宮殿で殺され

た。ミハイルは八年と九ヶ月、フエオフィルは十二年と三ヶ月と二十日、彼の息子ミハイルは彼の母フエオドラ及び彼の妹フエクラと共に十四年、ミハイルは十二年、ヴァシリイと共に一年と四ヶ月、しかして殺された。この治世の時に、ルシ、チュジ、スロヴエン、グリヴイチがヴァリヤギのもとへ来たり、言つた。『我々の國は大きくて広い。ところがその中には秩序がない。君臨し、我々を治めるために来たれ』と。しかして、三人の兄弟がおのれの一族と共にえらばれ、最年長のリュリクはノヴゴロドに坐し、シネウスはペロオゼロに、トルヴオルはイズボリスクに（坐した）。アダムから六三七〇年である。二年後にトルヴオル及びシネウスは死に、ルシにおけるすべての権力をリュリクが摂つた。ミハイルの後、ヴァシリイ皇帝が十八年と十一ヶ月、この者の治世の才二年目にボルガルの國が洗礼された。しかしてアダムからは六三七七年である。彼の治世の十二年目にリュリクが死に、（彼は）おのれの一族のオレグに公國を与えた。及び幼少の息子イゴリをも。レフ及び、ヴァシリイ帝の息子オリグサンドルは二六年、この二人の治世の才十二年目にグレキの言葉からスロヴエンの言葉に（聖）書が訳された。ボルガルの洗礼から（聖）書訳まで三十年。しかして才七回宗總會から（聖）書訳まで七七年、しかしてアダムから六四〇五年である。レフの息子でありロマンの娘むこであるコスチヤンチンは七年君臨した。しかしてルシにおいてはイゴリが公として君臨しはじめ、オレグは死んだ。ロマンは三六年君臨した。彼の在位の二七年目にイゴリが殺され、オルガが息子のスワイヤトスラフと共に公として君臨しはじめた。ツエムスキーといわれるイヴァンが君臨した。彼の在位の才一年目にオルガがツアリゴロドに来たり洗礼を受けた。アダムから六四六三年である。スワイヤトスラフは十八年在位し、しかして殺された。三人の息子ヤロボルク、オレグ、ヴォロジメルを残した。ヤロボルクはキエフに坐し、オレグを殺し、ヤロボルクをヴォロジメル

が殺し、しかして、キエフに坐した。コステヤンチンとヴァシリイが皇帝であつた。この二人の時に、ヴオロジメルは洗礼を受け、全ルシを（洗礼した）。アダムから六四九六年である。洗礼の後、二八年生きて、（ヴオロジメルは）死んだ。その同じ年にスヴィヤトボルクは、ボリスとグレブを殺し、ヤロスラフと戦いながら三年間キエフに坐した。発狂して死んだ。ヤロスラフはキエフに三八年間坐した。しかして皇帝はマナマフであつた。彼の息子イジャスラフは二四年（坐して）殺された。この者の時に、ベチエルスキーの修道院長はフェオドシイであつた。彼の息子フセヴオロドはキエフに十五年坐して、しかして死んだ。スヴィヤトボルクは二一年（坐して）しかして死んだ。この者の在位の才二年目にボリスとグレブが（遣がいを）移された。アダムから六六二三年である。この時にグレキの皇帝はオリクシイであり、しかして彼は死んだ。彼の後は彼の息子イヴァン・ボルフィロゲンツが（皇帝であつた）。ヴオロジメルの後キエフには後の息子ムスチスラフが六年間坐した。彼の弟ヤロボルクは七年。オレグの子フセヴオロドは七年。ムスチスラフの子イジャスラフは七年。ヴオロジメルの子ユリエ・マナマハはキエフに三年間公としてあつた。彼の息子アンドレイは父からスズダリに六六六三年に行き、ヴオロジメルに二一年間公としてあつた。父の死後、キエフの公國は彼の自由になりはじめた。この時代に、皇帝はマヌイルであつた。六六八一年にアンドレイ大公が殺された。彼の弟ミハルコはヴオロジメルに一年間坐して、しかして死んだ。キエフにはムスチスラフの子ロスチスラフが九年間坐した。ユリエの子グレブは二年間。ロスチスラフの子ロマンも。しかして、ヴオロジメルにはミハルコの死後彼の弟フセヴオロド（ユリエの子）が三七年間坐し、全ルシの國を統治した。彼の後にはその息子のコステヤンチンが坐し、コステヤンチンの後にはその弟ユリエがヴオロジメルに坐し、コステヤンチンの子のヴァシルコがロストフに、フセヴオロドが

ヤロスラフに（坐した）。ユリエの在位の五年目にタタールが現れ、多くの國々をおさえ、ルシの公たちをカルカ（河）で殺した。ユリエの在位の才十五年目は即ちアダムからの六七四六年である。タタールはスズダリの國をおさえた。六七四六には公であるユリエ及びヴァシルコ及び他の多くの者たちを殺した。この同じ年にヴオロジメルにはユリエの弟ヤロスラフが坐した。一方、ロストフにはヴァシルコ夫人が（二人の）息子ボリスとグレブと共に坐した。ヤロスラフはタタールの中にあつて死んだ。彼の後にはその弟のヌガイヤトスラフがヴオロジメルに一年間坐した。しかして、ヤロスラフの息子アンドレイが（これを）追放し、五年間君臨した。しかして、アダムから六七六〇年にネヴロンが来つた。しかして、海の彼方に彼を追放した。この同じ年に、彼の弟オリクサンドルが十二年間に及んで坐した。彼の在位の才四年に目錄がつくられた。アダムから六七六五年である。オリクサンドルの死の後、彼の弟ヤロスラフが十年（君臨）して、しかして死んだ。彼の弟ヴァシリイは四年して、しかして死んだ。彼の在位の一年目に才二回目の目錄がつくられた。アダムから六七八一年である。しかして、オリクサンドルの子ドミートリイが大公國を統治しはじめた。ロストフのボリスは四十年間公としてあり、タタールの中で死んだ。しかして、ロストフには彼の（二人の）息子ドミートリイとコスチャンテンが坐した。しかしてグレブはタタールより来たつて七ヶ月間公としてあり、しかして死んだ』

この中にあつて、特に末尾の相当個所は、或は後代にロシアで書き加えられたもので、ビザンテンの物からの直接の訳ではなかつたであろう。然し、『過ぎし年月の物語』が各年号に分けて、それぞれの年号順に書き入れた内容と、此處における年号における内容とは全く一致することに驚くであろう。例えば、『過ぎし年月の物語』が、6494(986)年以下6497(989)年の項として長々と書きあげたヴオロジメルの記事の中にも、再びこの内容と

同じものがギリシアから来た哲学者の言葉として書きとめられているのである。その他に、この〈*Номоканон*〉『宗法集』の古代ロシア語訳本の中の各年号の内容が、総て『過ぎし年月の物語』の各年号の項の物語の骨子になつてゐることを強調しておきたいと思う。勿論ラヴレンチー年代記に納められた所謂『ネストルの年代記の古いテキスト』〈*Древний текст летописи Нестора*〉は6618(1110)年の項で終つてゐるから、『宗法集』の記録した6781年の項までは書きつがれていないことになつて、『宗法集』の末尾の部分の新旧の差はみとめておかなければならないであろう。ともあれ、ビザンテンから持ち込まれた『宗法集』〈*Номоканон*〉或はその古代ロシア語訳本が非常に大きな下敷として『過ぎし年月の物語』の中に持ちこまれていたことには疑いをはさむことはできない。

この様なものは、抜き書きしたり、下敷にしたりした出典が案外明瞭に察知し得るものであるが、(——これを余り上手でない編集と言うとすれば——)、非常に巧みに引用を変化させて組み込んでいるために、ほとんど見落してしまいそうな下敷がある。その最もよい例は6523(1015)年の項の中程から6525(1017)年に至る『過ぎし年月の物語』の記事である。実に此処には、古代スラヴの古い金言集(——旧約全書のものに、おのれの国の物語を織り込んでつくられたもの——)が、たくみにすかし彫りされてゐるのである。金言集或は假言集〈*Паремейника*〉は、ベルガミン本〈*Рукопись пергаминая*〉を以て、6523年から6525年の項の物語の対応箇所にあて、すかし彫りの個所を調べてみることにしよう。

『過ぎし年月の物語』に次の様な一節がある。

Святополк же съ оканьный и злый уби Святослава,
послав, в горе Угорьстей, бежашю ему в Угры;
и нача помышляти: "яко избью всю братью свою,

и приму власть Русьскую един". Помыслив высокоумьем своим, не ведый, яко Бог даеть власть, ему же хоцеть; поставляет бо царя и князя Вышний, ему же хоцеть, дать. Аще бо каа земля управится пред Богом, поставляет ей царя или князя праведна, любяща суд и правдуц и властеля устрять, и судью правящего суд. Аще бо князи правдивы бывають в земли, то многа отдаются согрешенья; аще ли зли и лукави бывають, то болше зло наводить Бог на землю, понеже то глава есть земли; тако бо Исаия рече: согреша от главы и до ногу, еже есть от царя и до простых люди. Люте бо граду тому, в нем же князь ун, любяи вино пити с гусльми и с младыми светники. Сяковыя бо Бог даеть за грехы, а старья и мудрыя отъиметь, якоже Исаия глаголеть: отъиметь Господь от Иерусалима крепкаго, исполина, и человека храбра, и судью, и пророка, и смерена старца, и дивна светника, и мудра хитреца, разумна, послушлива; поставляю уношу князя им, и ругателя обладающа ими.

『ところで、この呪われたる悪しきスヴイヤトボルクは、スヴイヤトスラフがウグルへ逃げる途中、人を遣わしてウゴルの山中で彼を殺した。しかして考えはじめた。『おのれの兄弟たちを総て殺し、ルシの権力を一人で摂ろう』と。神は自からの欲し給う者に権力を与え給うものであり、至高なる（神は）自からの欲し給う者を皇帝及び公に定め給うものであることを、（彼は）知らず、おのれの高慢さを以て（このように）考えたのである。というのは、もしも、いづれかの国が神の御前において治められるな

らば、(神は)その國に、裁きと正義を愛する正しき皇帝或は公を定め給うものであり、しかして、権力者をも、裁判を治める裁き手をも定め給うものである。國において、もしも公たちが正しければ、多くの罪が取り除かれる。もしも(公たちが)悪しく、ずるければ、大きな悪を神は國に導き給うのである。というのは、(彼は)國の頭だからである。即ち、イサヤはこう言っている。罪を犯かせしものたちの頭から足に至るは、皇帝から庶民に至るに似たり。その町における公が、若くして、琴をひき、若き相談相手たちと共に酒を呑むことを好むには、その町はわざわざいなるかな。かかるものたちを神は罪の故に与え給う。しかして、老いて賢明なるものたちを取りあげ給うのである。即ち、イサヤは言っている。堅固にして偉いなるもの、勇敢なる人間、裁き手、予言者、恭順なる長老、素晴らしき相談相手、賢き才能者、明知なるもの、従順なるものを神はイエルサレムから取り給う。彼等には若き公を定め、彼等を支配する口悪しき者を定めんと』。

勿論、この一節は、年代記者の主観によれば、ビザンチンからキリスト教と共に流入した國家統治の宗教的理念を此處に書きとどめ、且つは、ロシアの公たちへの宗門的ないまじめとしたものである。スヴィヤトスラフ大公を殺したスヴィヤトボルクの悪業をあげき立てると共に、キリスト教理念にさへえられた最高支配者の統治理念を教えさとしたかつたのであろう。但し、その発想も、また、説かんとした統治理念も、或は此處に用いられた言葉も年代記者独自の創造になるものばかりではなかつた。というのは、これに対応する《Паремейник》『金言集』の一節をうかがつてみるがよい。例えば、ルシで権力を一人占めにしようとする個所の言葉は《Паремейник》では、ボリス《Борис》とグレブ《Глеб》の兄弟の物語へ場面を移しているものの、やはり同じような形でみとめられるのである。

О люте души твоей! понеже зло свеча на правед-

ную братью свою, рек бо тако: избию братью свою и буду един властель в-Руси, не ведый, яко мечь Божий поострится на нь.

『おゝ、汝の魂は呪われてあれ！ おのれが正しき兄弟に悪をたくらみたればなり。（汝は）かく言えり。＼おのれの兄弟を打ち殺さん。しかして、ただ一人ルンの権力者にならん』と。神の剣はその者の上にかざされてあるを知らざればなり。』

— 相手を皆殺しにして自分一人がロシアの権力を一人占めにしようというスヴィヤトボルクの言葉と、この一節の言葉とは、今までに全く実に見事な重ね方がなされていると言わなければならぬ。

さて、この悪者スヴィヤトボルクがキエフに、一方ヤロスラフがノヴゴロドにあつて、対峙し、ヤロスラフの方が悪者退治をする物語が『過ぎし年月の物語』にも『金言集』の方に平行して続いている。ところが、『金言集』の方には、面白いことに、先に引用した年代記の一節——ヤロボルクを非難しつつ、國家統治理念を権力者に説かんとする——が、ほとんど、その言葉通りに出現しているではないか。先に引用した文章の各字句をほとんど全部、次の『金言集』の中から拾い出すことは、きわめて容易であろう。『金言集』の相当長いこの節の文章を先に書きあげてみよう。

Слыша Ярослав, яко отець ему умре, а Свято-полк сед в Киеве, избиваеть братью свою, иже бо бе Бориса убил, а на Глеба послал, печален бысть велми о отци и о брате; уби бо Бориса на Алте, а Глеба на Днепре, об-сю сторону Смоленска, на Смядине. Съжалиси велми по отци и по брату своему, и созва Новгородьце, и рече им:

"братья моя милая! отець мой умерл, а Святополк седить в Киеве, избивая братью мою";
бе бо о то чин и сам рагозен с-Ноугородьци, и не хотяху ему помагати на Святополка. Помянуша Апостольское писание. Братье! Бога бойтеса, князя чтите; Божий бо слуга есть, не туне бо мечь носить, но в-нем злодеем, в-похвалу же добродеем; и рекоша ему: "можем, княже, боротися по тебе". И собра Ярослав Варяг 6000, а прочих вой 30 тысяць, и приде на Святополка, въприим Аврамлю доблесть. Слышав бо Авраам, яко пленен бысть Лот, сыновець его, и собра люди своя 300 и 18, и погна в след их до Дана, и постиже я на Хаволе, и изби я, и отполони вся стада Содомьская, и Лота Ароновича шюрина своего, и жену его, и имение его; бе бо Авраму Лот шюрин и братень сыне, Аврам бо бяше поял братню дщерь, Аронову дщерь Сарру. Тако и съ Ярослав, новый Аврам, поиде на Святополка, нарек Бога: "не аз почых избивати братью, зане без-вины пролия кровь праведную"; глагола бо ему Борис и Глеб: ве ся, брате, не противеве, ни въпреки глаголеве. Господь гордым противится, смиренным-же даеть благодать; праведных бо душа в-руку Божию. По звавшему ваю святому, и вы свята еста о всем житии ваю, зане пишеть: святи будите, яко аз свят есмь. В страсе бо Божии пожиста лета своя, ведуце, яко нетленномь сребром и златом избавлена бы-

ста от-суетнаго житья сего, братом своимъ
предана на убийство; но драгою кровию, яко
агннца непорочна и пречиста, приведостася
своему Владыце.

Стенам твоим, Вышегороде, устройх сторожа весь
день и всю ночь, иже не уснетя, ни въздремле-
та, храняща и утвержающе отчъну свою Русьску
землю от супостатных поган и от-усобныхъ рати;
праведник бо и по смерти жив есть. Сею бо кровь
и до кончины века не престааетъ вопиючи к Богу
на незаконнаго и гордаго Святополка, паче же
реку Поганополка, безглавнаго звери. Но до-
воляше бо ему то, но и приложи еще убити Свято-
слава в горе Угорьстей, и бежащю ему в Угры;
нача помышляти: "яко избью всю братью свою, и
прииму власть Рускую един". И помысли в высо-
коумьи своемъ, не ведый, яко Бог даетъ власть,
ему же аще хоцетъ; поставляетъ бо князя и царя
Вышний, ему же хоцетъ даетъ. Аще бо кая любо
земля управится пред-Богом, поставляетъ ей
царя или князя праведна, любяща суд и правду,
и властеля устраяеть, и судию правяща суд. И
аще князи праведни бывають в-земли, то многа
отдадятся съгрешения; аще ли зли и лукави бы-
вають, то большее зло наводитъ Бог на землю ту,
понеже то глава есть земли. Люте бо граду тому,
в-нем же князь ун, любяй вино пити с-гусльми с
молодыми светники. Сяковыя Бог даетъ за грехи,
а мудрыя и старыя отъиметь; отъят от-нас Во-

лодимера, а Святополка наведе грех ради наших, якоже наведе на Иерусалим Антиоха. Исаия бо глаголетъ: отъиметь Господь от Иерусалима крепкаго исполина, и человека храбра, и судию, и пророка, и дивна светника, и смерена старца, и мудра хитреца, и дивна послушника; и поставлю уношу князя им, и ругателя обладающа ими. Ярослав же приде в-силе тяжьце, и приде на Алту и ста на месте, идеже убиша Бориса; въздѣв на небо руже, и рече: "кровь брату моему Романа и давида въпиеть к-тебе, Владыко! Мъсти кровь праведноу сею, якоже мъстил еси кровь Авелу, положив на Каине трясение; и тако положи на семь оканьем Святополце". Помолився рече: "брата моя! Аще еста и телом отсюду далече, то молитвою помозита ми на противнаго сего и убийцю гордаго". И се ему рекшу, поидоша противу себе, и покрыша поле Летское обоею от-множества вой. Бе же пяток тогда; възходящу солнцю, и приспе о то чин Святополк с-Печенеги, и съступишася обоею, и бысть сеча зла, ака же не бывала в-Руси емлюще сечахуся, и по удолиемь кровь течаше; и съступишася трижды, и омеркоша бьющеся. И бысть гром велик и тутен, и дождь велик, и молньям блистания; егда же облистаху молния, бльшашуться оружия в-руках их, и мнози вернии видаху ангелы помогающа Ярославу. Святополк же дав плещи побеже. Его же по правде, яко не праведна, суду пришед-

щю, по отцествии сего света приша же муки
оканнаго Святополка: показавши пагубная посла-
ная рана, в смѣртъ немилостивно възна, и по
смерти вечно мучимъ естъ, связанъ в дно аду, по-
неже ведый братоубийства створи. 7-м бо мстий
прия Каин, убивъ Авеля, брата своего, а Ламехъ
70 мстий, понеже бо Каин не ведый мщениа
пряти от-Бога, а Ламехъ ведый казнь, бывшую
на прародителю его; а Святополкъ ведая же се
створи, и обою сею горду ему бысть мука. Ре-
че бо Ламехъ к своимъ женамъ: мужа убихъ в вредъ
мне, и уношу в язву мне; темже рече, 70 мстий
на мне естъ, понеже, рече, ведая створихъ. Се
Ламехъ уби два брата Енохова, и поя себе ехъ; се
же Святополкъ, новый Авимелехъ, иже ся родилъ бе
от-прелюбодеяния, иже избилъ братью свою 70 сы-
новъ Гедеоновыхъ, последи же сасаго жена с-горо-
да уломкомъ жернова уби под городомъ; тако и съ
Святополкъ. Ярославъ-же пришедъ в Киевъ, с дружиною
своею утеръ пота, показая победу и трудъ великъ по
брату своему.

以上の『金言集』の文章を訳しながら、その部度、『過ぎし年
月の物語』における6523(1015)年以後の記事の文章と対応さ
せて見ることにして、

『ヤロスラフは、自分の父が死に、スヴイヤトボルクがキエフ
に坐し、あのれの兄弟を殺していること——というのは、ボリス
を殺し、グレブには(殺すべく)人遣わした——を聞いて、
父及び兄弟たちのことを非常に嘆いた、というのは、(ヤロボル
クは)ボリスをアルタで、グレブをドニエブルのこちら側のシミ

ヤジナで殺したからである。(ヤロスラフは)父及びおのれの兄弟を非常にいたみ、しかして、ノヴゴロドの人々を集めて彼等に言つた』

これに対して、各年代記の『過ぎし年月の物語』では、英雄叙事詩的に、

В ту же ночь приде ему весть из Кыева от сестры его Передьславы: "си отець ти умерл, а Святополк седит ти Кыеве, убив Бориса, а на Глеба посла; а блюдися его повелику". Се слышав, печален бысть о отци и о дружине; заутра же собрав избыток Новгородецъ, Ярослав рече:

『その同じ夜彼のもとにキエフから、彼の妹のペレドスラヴァから知らせが来た。//汝の父は死んだ。しかして、スヴイヤトボルクが汝のキエフに坐しており、ボリスを殺し、グレブに向つては(殺すべく)人を遣わした。彼をできるだけ充分警戒せよ』と。(ヤロスラフは)これを聞いて、おのれの父及び親兵団のことを嘆いた。ところで翌朝、残りのノヴゴロド人たちを集めて、ヤロスラフは言つた』となつている。もしも、同じ伝承作品からの汲みあげであつたとすれば、この一節は、『過ぎし年月の物語』の方がより直接的であり、『金言集』の方が、より記録的であるといわなければなるまい。『金言集』の方が説明的解說的であり、『過ぎし年月の物語』の方が物語的であり文学的である。勿論、『金言集』は、これを教訓の素材にして、聖書の教訓を目的とし、他方は、物語そのものを伝えようとしたのであるとも言えよう。

次に続く『金言集』の一節は、

『//我が愛する兄弟たちよ。我が父は死に、スヴイヤトボルクが、我が兄弟たちを殺しつゝキエフに坐している』と。それに就ての集會があり、しかして(彼は)自からノヴゴロドの人々と對

立し、(人々は)スヴィヤトボルクに対して彼に協力することを
欲していなかつた。(ところで人々は)使徒の書物を思い起した。
兄弟たちよ! 神をおそれ公を敬え。神の召使なればなり。(公
が)剣を帯びるは故なきにあらず。悪者には報復を、善行者には
賞讃を与えんためなり。と。しかして、(人々は)彼に言つた。
「公よ。汝のために戦うことができる」と。しかしてヤロスラフ
はヴァリヤギ六千人、他の戦士三万人を集め、アヴラムの勇気を
擧つてスヴィヤトボルクに向つて進攻した。アヴラムは、おのれ
の息子ロトが捕えられたのを聞いて、おのれの家臣三百と十八人
を集め、ダンまで彼等のあとを追い、ハヴオルで彼等を捕提して
殺した。しかして、ソドムの総ての群を、及びおのれの妻の兄弟
アロンの子ロトを、また、彼の妻を、及び彼の財産をとり返した。
というのは、アヴラムにとつてロトは妻の兄弟であり、兄弟の息
子であつた。というのは、アヴラムは兄弟の娘、アロンの娘サラ
をめとつていたからである。かくの如く、新しいアヴラムなるこ
のヤロスラフはスヴィヤトボルクに向つて進攻した。(彼は)神
に向つて言つた。「兄弟たちを打ちはじめたのは我ではない。何
となれば故なくして正しき血を(彼が)流したからである」と。
というのは、ボリスが、またグレブも彼に言つた(ことがある)。
兄弟よ、我々二人は敵対することなく、抗言することもないと。
主はたけき者に反対し給ひ、恭順なるものに恩ちよ与え給う
というのは、正しきものたちの魂は神の御手に(入る)からであ
る。汝等の聖と呼びしものによりて、汝等は汝等の一生を通じて
聖ならん。その故は、かくの如く書かれたればなり。我、聖なる
如く、(汝等も)聖ならんと。神のおそれの中におのれが年月を
生き、この空しき世より、くさらざる白銀や黄金の如くまぬがれ
るを知り、おのれの兄弟の殺人に身をゆだねたり。しかれども、
汝等(二人)は、罪なく清き子羊の如くおのれの主のもとに導か
れたり。』

この一節の後半は、明らかに、何時かボリスとグレブの追悼文にさへげられたものが此処に書きとめられたのであろう。ところで、この一節に対して、『過ぎし年月の物語』は、次の様に書かれている。即ち、筋書きだけを、伝承的英雄叙事詩の粗筋に近づけているかの様に、

"О любя моя дружина, юже вчера избих, а ныне была надобе". И утре слез, и рече им на вече: "отець мой умерл, а Святополк седить Кыеве, избивая братью свою". И реча Новгородци: "аще, княже, братья наша иссечена суть, можем по тебе бороти". И събра Ярослав Варяг тысячу, а прочих вой 40, и поиде на Святополка, нарек Бога, рек: "не я почях избивати братью, но он; да будеть отместьник Бог крове братья моя, за не без вины проля кровь Борисову и Глебову праведною; еда и мне сиче же створих? Но суди ми, Господи, по правде, да скончается злоба грешнаго".

『//おゝ、我が親兵団よ！（我は）昨日汝等を殺したが、今は（汝等は）必要になつた』と。しかして、涙をぬぐつて、民会において彼等に言つた。//わが父は死んだ。しかして、スウイヤトボルクはおのれの兄弟を打ちつゝキエフに坐している//。と。しかして、ノヴゴロドの人々は言つた。//もしも、公よ、我々の兄弟たちが打ち殺されてしまつてゐるにしても、（我々は）汝のために戦うことができよう//と。しかして、ヤロスラフはヴァリギ一千人と他の軍勢四千人を集め、しかしてスウイヤトボルクに向つて進攻した。神に向つて言つた。//兄弟たちを打ち殺しはじめたのは我ではなくて、彼である。神が我が兄弟の血の報復者であり給うように。というのは、ボリスとグレブの正しき血を（彼

が) 故なくして流したからである。いつ、(彼が) この同じことを我に対して為すであろうか? 主よ、我を裁き給え。正義に上つて、罪ある憎悪の終りますよう」と。」

此処で面白いことに気がつく。例えばその一つの例をあげてみよう。ヤロスラフが集めた軍勢の数が『金言集』ではヴァリヤギ六千人、他の軍勢三万人であるのに対して『過ぎし年月の物語』では、ヴァリヤギ一千人、他の軍勢四千人であつた。この数字の相違を出発点にして、そのいずれが真実に近い数であつたのかを問うよりも、むしろ、共に、修辭的な述べ方であると見ておこう。そう言うことよりも、『金言集』に <бъ бо о то чинъ> とある言葉—— <というのは、このことについて集會があつた>——が、『過ぎし年月の物語』では <Ярославъ рече имъ на вѣчи>——<ヤロスラフは民会において彼後に言つた>——と対応していることの方が面白い。即ち、<чин>『集會』と <вѣче>『民会』との対応である。明らかに語彙的な相違を示している。では、『金言集』の場合と『過ぎし年月の物語』の場合とでは、おしなべて、統一的に語彙や表現の相違があると考えてよいかどうか。語彙も文体もおしなべて相違していると言えるかどうか。面白い一節を此の個所からもう一個所引用しよう。即ち、『金言集』には <Божий бо слуга есть, не туне бо мечь носитъ> 『(公は) 神の召使である。故なくして劍を帯びるにあらす』という言葉があつた。ところが、『過ぎし年月の物語』の記事では、この一節に相当する言葉は全く見当たらないが、それに代るもののように、ラヴレンチ一年代記では 6683(1175)年の記事まで読み下ると、其処に、全く同じ文章で、たゞ『公』 <Князь> という言語を入れて、<Князь бо не туне мечь носитъ, Божии бо слуга есть> 『公は故なくして劍を帯びるにあらす。神の召使である』と組み込まれているのである。年代記が決して語彙や文体の統一など眼

目にしていなかつたことの証拠となるであろう。「過ぎし年月の物語」は決して一貫した文体などもつていない。それぞれの年代の項によつて、いや、同一の年代項の記事中においても、語彙も文体も様々にちがっていることを注意しておく必要があるであろう。先にあげた<чинь>『集会』に立ち戻つて見ると、古代ロシア語には、これに様々な意味があつて、例えば<въ чинь>『ついでに』、『折よく』という成句で、『過ぎし年月の物語』が6488年の項で使用し、6599年の項で<в то чинь>『その時に』と用い、6605年の項にも<о се чинь>『その頃に』と用いているが『集会』という意味では、どうやらこの言葉を用いなかつたらしい。イパーチー年代記の6705、6758兩年の項、ブスコフ年代記の6780年の項などでは、これが集会という意味で用いられている。そうして見ると、案外、この言葉は『民会』<вече>よりも余程新しい言葉であつたかも知れない。或は方言の相違であろうか。実は『金言集』の<чинь>が『集会』としての意味をもつていたのは、もともと、教会用語内においてであつた。宗教的集會を指す言葉なのであつた。年代記に世俗の集會を意味する言葉としては、やゝ、組み込まれ難かつたであろう。年代記者が借であつたためである。「過ぎし年月の物語」の場合の方が『金言集』における場合よりも、やゝ、用語の選択において厳密であつたと言うことはできるであろう。

扱て、続いて『金言集』に書かれていた内容は次の様なものである。

『ウインエゴロドよ。汝の城壁に、昼は一日、夜は全部、見張りをたたせた。彼等は寝込むことなく、まどろむことなく、いまわしき敵より、仲間裏切りし軍勢より、祖國なるおのれのルシの國を固め守つた。正しきものは、死後もまた生きてあるものである。無法にして高慢なるスグイヤトポルクをば、二人の血は世の果てるまでとどまることなく神に訴えつゞけるものである。いま

わしきボルク，愚かなる獣と言つて．これにて充分であつたのになほ，加えて，（スヴァヤトボルクは）スヴァヤトスラフがウゴルに逃げる時にウゴルの山で彼を殺したのである．（彼は）考えはじめた．「おのれの兄弟を全部殺そう．ルンの権力を一人で振るう」と．しかして，おのれの思いあがりのために考えたのである．神はもし欲し給うならばその者に権力を与え給うものであり，主はそれを与えんと欲し給う者を公及び皇帝になし給うことを知らない（男なの）であつた．もしも，どこかある国が神の前において統治されているならば，（神は）その国に正しき皇帝或は公を，裁きと正義を愛するものをおき給ひ，権力者を，裁きをつかさどるものを置き給うのである．もしも，国において公たちが正しければ，多くの罪は許され，もしも，（公たちが）悪く，ずるければ，より大きな惡を神はその国に導き給う．それは國の頭だからである．その町において公が若くて，琴をまじえて，若き相談相手たちと共に酒を飲むことを好む公なれば，その町はわざわざいである．かくの如きものを神は罪の故に与え給うのであり，賢きものたち及び長老なるものたちを取りあげ給うのである．我々からヴオロジメルを取りあげ，我々の罪の故にスヴァヤトボルクをくだし給うたのである．イエルサリムにアンチオフをくだし給うた如くに．イサヤは言つている．主はイエルサリムから堅固なる大人，勇敢なる男，裁き手，予言者，素晴らしい相談相手，恭順なる長老，賢明なるたくみの人，素晴らしい聴聞者を取りあげ給う．彼等には若き公を，彼等を支配するののしり手を定めんと』

この一節に対応する『過ぎし年月の物語』の記事は，順序を変えて物語の先頭に出されている．その対応の一節は既に先に引用したので此處では省略しておこう．そして『金言集』の文章の方をつゞけよう．

『ところで，ヤロスラフは大軍をひきいて来たり，アルタに到着し，ボリスが殺された場所に立つた．手を天にあげて，しかし

て言つた。『ロマン及びダヴィドの我が兄弟の血が、主よ、汝に嘆き訴えるのである！ 汝がカインにふるえを与えてアベルの血をむくいし如く、これら正しき（二人）の血をむくい、しかし同様に、この呪われたるスヴィヤトボルクに（ふるえを）与え給え』と。 祈り終つて言つた。『我が兄弟よ！ もしも汝等二人が肉体にては此処より遠くにありとせば、祈りによりて、このいまわしき敵にして高慢なる殺人者に対して我を助けよ』と。

既に殺された兄弟の死場所に来つて、神に報復を祈り仇打ちの誓いと祈りをささげる個所は『過ぎし年月の物語』にも美しく書きとめられている。たゞし、それは多くの文章をとばして、6527（1019）年の項にさがつてからである。

先づは、『金言集』の話をつゞけよう。

『しかして彼がかく言つた時、（彼等は）互に兵を進め、レタ河の野は両側から多くの軍勢でおおわれた。その時は金曜日であつた。太陽がのほつた時、スヴィヤトボルクはベチエネギと会合を終え、両軍は相会した。しかしてルンにはいまだながつたほどの激烈な戦いがあつた。（人々は）取り組み合ひで戦い、しかして血は谷に流れた。しかして（両軍は）三度相会した。しかして戦い合ひつゝ夕方になつた。しかして、大いなる烈しき雷が鳴り、大いなる雨が降り、稲妻のかゞやきがあつた。稲妻の輝く時、彼等の手の中なる武器は映えかゞやき、信心ある多くの者たちは天使たちがヤロスラフを助けているのを見たのであつた。スヴィヤトボルクは逃げ腰になつて逃亡した。』

二つの区切に分けて訳したこの二節は、6527年の項の冒頭として『過ぎし年月の物語』の中にほとんど全部が同文でみとめられる。但し、『金言集』の最終の部分——即ち、雷が鳴るといふ記述から、天使が助けているのを人々が見たといふ部分——は、おそらく、非常に後代に書き加えられたものかも知れない。というのは、この叙述形式が、クリコフ戦争の記述と非常に似て

いるからである（『古代ロシア研究』才四号～才六号参照）。

勿論、『過ぎし年月の物語』にはその部分はない。それ以外は、ほとんど同文であるので、此処に原文を引用することは省略しよう。

さて、『金言集』の最後の部分は次の様な意味である。

『彼（スヴィヤトボルク）は正しからざるものとして、正義に照らされ、裁きの来たりし時、この世の態度にふさわしく、この呪われたるスヴィヤトボルクの苦しみがはじまつた。破滅的な受けたきずが示され、容赦なく死に追い込まれ、死後もまた永遠に苦しめられているのである。地獄の底につながれているのである。知りつゝ兄弟殺しをしたが故である。カインはおのれの弟アベルを殺して七つのむくいを受け、ラメフは七十のむくいを受けたのである。何故なら、カインは神からむくいを受けることを知らざりしが故に、ラメフはおのれの太祖の上にあつた罰を知つていたが故に。しかして、スヴィヤトボルクは知りつゝこれをなしたのである。しかして、この両面によつて、彼の苦しみは一層激しいのである。ラメフはおのれの二人の妻たちに言つた。『我、わがいたでのために人を殺す。我がぎづのために少年を殺した』と。しかしてまた言つた。『七十のむくい我にあり。』即ち、曰く、『知りつゝ為したればなり』と。かくの如く、ラメフはエノフの二人の兄弟を殺し、彼等二人の妻をおのれのものに取つた。さて、新しきアヴイメレフなるスヴィヤトボルクは、かんいんより生れたるものにして、おのれの兄弟たち、ゲデオンの息子たち七十人を殺し、その後、おのれ自からの妻は町より（連れ出して）町はずれにてウスの破片にて殺した。スヴィヤトボルクはかくの如き者である。ヤロスラフはキエフに来たり、おのれの親兵団と共に汗をふき（——がいせんして——）おのれの兄弟のための偉大なる労と勝利を示した。

この最後の一節もまた、『過ぎし年月の物語』では6527年の

しめくくりの一節としてほとんど同文で出て来るのである。たゞ、『過ぎし年月の物語』の方が少し簡略であるのと、途中に『彼の墓は今日に至るまでも荒野にあり、其処からは悪臭が発散している』〈Есть же могила его в пустыни и до сего дне, исходить же от нея смрад зол〉以下二、三の字句が異つているだけである。

以上の様に明らかに『金言集』の文句と『過ぎし年月の物語』の文句とはお互いに交錯している。これに就ては、ハマルトルス年代記からの抜き書き利用の場合とは異つて、各年代記に見られる『過ぎし年月の物語』のほぼ大体の原形が何時頃に完成していたものなのかを検討しなけれが、いづれがいづれの台本になつているのかを決定することはできないかも知れない。現代に伝わる『金言集』の写本と、各年代記の『過ぎし年月の物語』との各々の原形の成立年代を確定することは非常に困難だと思われる。然し、それらのことに就ては、いづれ、まとめて後にふれることにして、次の問題に移らう。

ラヴレンチー年代記、トロイツキー、イパーチー各年代記の『過ぎし年月の物語』は、6559(1051)年の項が次の様な言葉で始められている。

〈Постави Ярославъ Лариона митрополитом Русина в святѣй Софѣи, собравъ епископы. И се да скажемъ, что ради прозвася Печерскый монастырь〉

『ヤロスラフは、主教たちを集めて、聖ソフィア(教会)におけるルシの府主教としてラリオンをたてた。しかして、(我々は)何のためにベチエルスキー修道院と呼ばれたかに就て物語らう』

年代記者が時に一人称単数格形で〈аз〉〈яз〉『我は』という言葉を用いて直接記述へ顔を出したことは以前にもふれた。然し、此処では、単数形ではなくて、複数一人称の動詞〈ска-

жемь》『物語るう』という言葉が用いられている。明らかに、年代記者個人だけではなくて心ある僧ならば誰でも知り得ている話を書きつけようとしたものにちがいない。即ち、実は明らかにベチエルスキー修道院の寺伝なのである。少くともこの場合《скажемь》『我々は物語るう』と書いた年代記者は、たしかにベチエルスキー修道院の僧であつたにちがいない。『過ぎし年月の物語』の書き出しに《Се повѣсти временныхъ лѣтъ (черноризца Федосьева монастыря Печерскаго)》『これは(ベチエルスキー・フェドシー修道院の修道僧の)年毎の物語である』と銘打つた言葉に間違いないであらう。信ずるとすれば、『過ぎし年月の物語』のうちで、この6559年の項は完全にこの修道僧の書きつけたものであつた、但し、彼が独創的に書きつけたものではなくて、僧たちの間に伝わる寺伝を此處に書きつけたにすぎないと思われる。とりあえず、『過ぎし年月の物語』における、ベチエルスキー修道院の寺伝だと思われる部分を下に引用してみよう。

Боголюбивому князю Ярославу любящу Берестовое, и церковь ту суццю Святыхъ Апостол, и попы многы набдящю, в них же бе презвутер, именемъ Ларион, мужъ благ, книжен и постник; хожаше с Берестоваго на днепр, на холм, где ныне ветхый монастырь Печерский, ту молитву творяше, бе бо ту лес велик. Ископа печерку малу, двусажену, и приходя с Берестоваго, отпеваше часы и моляшеся ту Богу втайне. Посем же Бог князю вложи в сердце, и постави и митрополитом в святей Софьи: а си печерка тако оста. И не по мнозех днех бе некий человек, именемъ мирскимъ от града Любча; и възложи сему Бог в сер-

дце в страну ити, он же устремися в Святую Гору, и виде ту монастыря суца, и обикодив, възлюбив чернецьскый образ, приде в монастырь ту и умоли игумена того, дабы на нь възложил образ мнишьскый. Он же послушав его, постриже и, нарек имя ему Антоний, наказав его и научив чернецьскому образу, и рече ему: "иди в Русь опять, и буди благословенье от Святыя Горы, яко от тебе мнози черньци быти имуть"; благослови и и отпусти его, рек ему: "иди с миром". Антоний же приде Киеву, и мысляше, где бы жити, и ходи по монастырем, и не възлюби, Богу не хотящу, и поча ходити по дребем и по горам, ища где бы ему Бог показал; и приде на холм, идеже бе ларион ископал пещерку, и възлюби место се, и вселися в не, и нача молитися Богу, со слезами глаголя: "Господи! утверди мя в месте сем, и да будеть на месте сем благословенье Святыя Горы и моего игумена, иже мя постригал". И поча жити ту, моля Бога, ядый хлеб сух, и то через день, и воды в меру вкушая, коная пещеру, и не да себе упокоя день и ноць, в трудех пребывав, в бденьи и в молитвах. Посем же уведеша добрии человеци, и приходяху к нему, приносяще же ему, еже на потребу бе; и прослу якоже великий Антоний, приходяще к нему просяху у него благословенья. Посем же представльшюся великому князю Ярославу, прия власть сын его Изяслав и седе Киеве, Антонии же прославлен бысть в Русьской земли; Изяслав же

уведав житъе его, приде с дружиною своею, прося у него благословенья и молитвы. И уведан бысть всеми великий Антоний и чтим, и начаша приходить к нему братья, и нача приимати и постригати я; и собрася братья к нему числом 12. Ископаша пещеру велику, и церковь, и кельи, яже суть и до сего дне в пещере под ветхим монастырем. Совъкуплене же братья, рече им Антоний: "се Бог вас братья совъкупи, и от благословенья есте Святыя Горы, им же мене постриже игумен Святыя Горы, а яз вас постригал; да буди благословенье на вас перво от Бога, а второе от Святыя Горы; "и се рек им: "живете же себе, и поставлю вы игумена, а сам хочу в ону гору ити един, якоже и преже бях обыкл, уединився". И постави им игуменом Варлама, а сам иде в гору и ископа пещеру, яже есть под новым монастырем, в ней же сконча живот свой, жив в добродетели, не выходя из пещеры лет 40 никдеже, в ней же лежать моще его и до сего дне. Братья же с игуменом живяху, и умножившимся братья в речере, и помыслиша поставити вне пещеры монастырь; и приде игумен и братья ко Антонью, и рекоша ему: "отче! умножилось братъе, а не можем ся вместити в пещеру; да бы Бог повелел и твоя молитва, да быком поставили церковьцю вне пещеры", и повеле им Антоний. Они же поклонишася ему, и поставиша церковьцю малу пещерою во имя святыя Богородица Успенъе. И нача Бог умножати черноризце, молитвами

святыя Богородица, и съвет створиша братья со игуменом поставити манастирь; и идоша братья ко Антонию, и реша: "отче! братья умножаются, а хотели быхом поставити манастирь". Антонии же рад быв, рече: "благословен Бог о всем, и молитва святыя Богородица и сущих отець иже в Святей Горе да будеть с вами". И се рек, посла единого от братье ко Изяславу князю, река тако: "княже мой! Се Бог умножаеть братью, а мestyце мало; да бы ны дал гору ту, яже есть над печерою; "Изяслав же слышав и рад бысть, посла мужь свой, и вда им гору ту. Игумен же и братья заложиша церковь велику и манастирь огородиша столпем, келье поставиша многы, церковь свершиша и иконами украсиша. И оттоле почася Печерский манастирь; иже беша жили черньци преже в печере, а от того прозвася Печерский манастирь; есть же манастирь Печерский от благословенья Святыя Горы пошел. Манастиреви же свершену, игуменьство держащу Варламови, Изяслав же постави манастирь святого Дмитрия, и выведе Варлама на игуменьство к святому Дмитрию, хотя створити вышний сего манастиря, надеяся богатству. Мнози бо манастири от царь и от бояр и от богатства поставлени, но не суть тацн, кацн суть поставлени слезами, ношеньем, молитвою, бденьем: Антоний бо не име злата, ни сребра, но стяжа слезами и пошеньем, якоже глаголах Варламу же шедшу к святому Дмитрию, съвет створше братья, идоша к старцю Антонью и

рекоша: "постави нам игумена". Он же рече им: "кого хотите? Они же реча: "кого хочет Бог и ты". И рече им: "кто болий в вас, ак же Феодосий, послушливый, кроткий, смиренный; да съ будеть вам игумен". Братья же ради бывше, поклонишася старцю, и поставиша Феодосья игуменом братье числом 20. Феодосу же приемию монастырь, поча имети въздержанье, и велико пощенье, и молитвы с слезами; и совокупляти нача многы черноризьци, и совокупи братье числом 100. И нача искати правила чернетскаго, и обретесе тогда Михаил чернецъ монастыря Студийскаго, иже бе пришел из Грек митрополитом Георгием, и нача у него искати устава чернецъ Студийских; и обрет у него, и списа, и устави в монастыри своем како пети пеня монастырская, и поклон как держати, и чтенья почитати, и стоянье в церкви, и весь ряд церковный, на трапезе седанье и что ясти в кыя дни, все с уставлением. Феодосий все то изобрет, предасть монастырю своему. От того же монастыря переяча вси монастыреве устав: темже почтен есть монастырь Печерский старее всего. Феодосьеви же живущю в монастыри, и правящю добродетелное житье и чернецкое правило, и приемающю всякого приходящаго к нему, к нему же и аз придох худый и недостойный раб, и прият мя лет ми сущу 17 от роженья моего. Се же написах и положих, в кое лето почал быти монастырь и что ради зоветься Печерский; а о Феодосове житьи пакы скажем.

この文章は、『過ぎし年月の物語』の最大の母たいであつた。おそらくは、この様な記事が中心に置かれて、その他のものが各年代をつなぐ埋め草に役立たされた上に『過ぎし年月の物語』が構成されたものだと考えられるからである。そして、この母たい自身が実はベチエルスキー寺院の聖僧伝〈Патерик〉の一節なのである。ノヴゴロド・ソフィア文庫蔵A集 №578号による羊皮紙本、或はベテルブルグ（レニングラード）公共図書館本による『ベチエルスキー聖者伝』〈Патерик Печерский〉は、ほとんど同じ文章で綴られたこの一節をもつてゐるのである。即ち、後者の写本によつてこれを対比すると次の様な相異点だけしかない。左側に『過ぎし年月の物語』の方を、右側に後者の写本によるベチエルスキー聖者伝の方を、その相違点だけに限つて書き示そう。（綴字法の相異は取りあげない）。

Берестове	-----	Берестово
церковь ту	-----	церковь
Берестоваго	-----	Берестова
И ископа себе печерку малу		
	-----	И ископа себе ту печерку малу
и приходя с Берестоваго, отпеваше часы		
	-----	"нет"
постави и	-----	постави его
"нет"	-----	събрав епископы, в лето 6559;
некий человек	-----	некто человек
именем мирьским	-----	мирьский

в сердце	-----	на ум
в страну ити	-----	в страну ити Гречьскую
устремися в Святую Гору		
	-----	устремися и в Святую Гору
		дойде,
виде ту монастыря суца		
	-----	виде монастыря суца ту
и обиходив, възлюбив		
	-----	и възлюби
приде в монастырь ту		
	-----	и прииде в един монастырь от
		суцих тамо монастырев
умоли	-----	моли
образ мнишьскый	-----	чернецьскый образ
послушав его	-----	послушав
нарек	-----	нарече
научив чернецьскому образу		
	-----	научи его чернеченскому
		житию
иди в Русь опять	-----	иди пакы в Русию
буди благословенье от Святыя Горы		
	-----	буди благословение имея от
		Святыя Горы
"нет"	-----	и рече ему
от тебе мнози черньци быти имуть		
	-----	мнози от тебе черноризци
		имуть быти
благослови и и отпусти его		
	-----	благословив его отпусти и
приде Киеву	-----	прииде в град Киев

ходи	-----	походи
и не възлюби, Богу	-----	и не възлюби ни в едином же где бы жити, Богу
Бог показал	-----	Бог показал жити
ископа печерку	-----	печерку ископал
место се	-----	местьце то
в не	-----	в нем
в месте сем	-----	в мечьци сем
и моего игумена	-----	и молитва моего игумена
поча жити	-----	нача жити
то через день	-----	того же через день
копая печерку	-----	и копаше печеру
и не да	-----	и не дасть
день и ночь	-----	в дне и в ноци
в трудех	-----	и в трудех
уведеша добрии человеци	-----	уведаша его людие
приносяще же ему, еже на потребу бе	-----	приносяще яже на потребу
седе Кыеве	-----	седе в Кыеве
Изяслав же	-----	князь же Изяслав
приде с дружиною своею	-----	прииде к нему с дружиною своею
и чтим	-----	и почитаем всеми
и начаша приходити к нему братья, и нача приимати и постригати я	-----	и начаша приходити к нему
боголюбивии людие, он же приимаше их и постри- заше		

братьи ----- братьи бывши
 Антоний ----- великий Антоний
 совъкупи ----- совокупил
 а аз ----- аз же
 постригал ----- постригох
 перво от Бога ----- пръвое от Бога и пречист-
 ыя Богородица
 и се рек им ----- и рече им сиче
 живете же себе, и ----- живете себе, и аз
 вы ----- вам
 ити един ----- ити и тамо сести един
 постави им игуменом Варлама
 ----- постави им игумана, именем
 Варлама
 Братья же с игуменом
 ----- Игумен же и братиа
 Умножившимся братьи в пещере
 ----- умножившимся братии и не
 могущим в пещеру вместитися
 помыслиша поставити вне пещеры монастырь
 ----- помыслиша вне пещеры поста-
 вити монастырь
 умножилось братье ----- умножилось естъ братии
 Бог повелед и твоя молитва
 ----- Бог повелед и пречистая
 Богородица и твоя молитва
 Антоний ----- преподобный
 поклонишася ему ----- поклонишася ему до земли и
 отъидоша
 святая Богородица ----- святая Богородица и пре-

		подобнаго Антониа
и идоша братья	-----	и идоша пакы
реша	-----	реша ему
а хотели	-----	и хотели
И се рек	-----	И сия рече
княже мой!	-----	княже господине!
да бы ны дал гору ту	-----	да бы еси пожаловал нам
		дал гору ту
Изяслав же слышав	-----	князь же Изяслав сия
		слышав
посла мужь свой	-----	посла к ним боярина
		своего
и оттоле почася Печерский монастырь	-----	и оттоле почася звати
		Печерский монастырь
иже беша жили	-----	понеже беаху жили
Изяслав же	-----	князь же
вышний сего монастыря	-----	выше Печерскаго мо-
		настыря
надеася богатству	-----	надеася на богатство
таци	-----	тако
каци	-----	акови же
ни	-----	и
рекоша	-----	глаголаша
постави нам игумена	-----	Отче! постави нам игу-
		мена
реша	-----	глаголаша
Бог и ты	-----	Бог, и пречистаа Бого-
		родица и ты честный отче!

рече им	-----	рече им великий Антоние
ак	-----	аков
Феодосий	-----	великий Феодосий
поклонишася старцю	-----	поклонишася ему до земля
братье числом 20	-----	братии же тогда сущи чи- сло 20
имети въздержанье	-----	имети въздержание велико
и велико пощенье	-----	пощение
совокупи братье числом 100.	-----	съвокупи всех братий чи- сло 100.
старее всего	-----	и старей всех, и честию болий всех

以上の様な差異を見渡してみると、それらは、単にその時々
の筆の勢いで揺れ動いただけのもので、別に意味を大きく左右す
るものではないことが分る。明らかに、聖者伝の中の寺伝の書き
抜きである。そしてまた、実は、その寺伝の作者——記録者——
こそが、或はその文章から明らかに年代記者であつたかとも
思われる。ともあれ、『過ぎし年月の物語』におけるこの一節の
意味は次のように訳せる。

『神を愛する公ヤロスラフはベレストヴオ（村）を愛し、其処
にある聖なる使徒たちの教会を愛し、多くの僧たちを援助してい
たが、彼等（僧たち）の中にその名をラリオンという僧がいた。
（彼は）善良で書物に通じた士で精進者であつた。現在、古い
ベチエルスキー修道院のあるドニエブル河の丘へベレストヴオ村
から（彼は）よく出かけて、そこで祈りをさへげていたのである。
というのは其処には大きな森があつたからである。（彼は）ニサ
ージェンの小さな洞穴を掘り、ベレストヴオからやつて来て、勤
行を行い、しかして其処でひそかに神に祈つていた。ところでそ

の後、神が公の心に暗示し給ひ、しかして（公は）彼を聖ソフィヤ（教会）の府主教にすえた。しかして、この洞穴はそのまゝに残つた。しかして多くの日数を経ずして、町から出て、その世俗の名をリユブチャという或る男がいた。神はこの男の心に外国へ行くように暗示し給うた。彼は聖なる山へ急いだ。しかして其処にある修道院を見て、（その廻りを）歩き、修道僧の形が好きになり、その修道院に入り来たり、僧の姿を自分の上に負わせて呉れるように修道院長にたのんだ。修道院長は彼の言うことを聞いてやり、彼を得度してやり、彼の名をアントニイと呼んだ。彼を教え、しかして、修道僧の形を習わせ、彼に言つた。「ルシに引きかえせ、聖なる山より祝福があろう。汝から多くの修道僧が生まれるであろうように」と。彼を祝福し、しかして彼を行かせて、彼に言つた。「平和と共に行け」と。ところで、アントニイはキエフに来たりついた。しかして、何処に住もうかと考えていた。しかして修道院を歩き廻つたが、気に入らなかつた。神が望み給わなかつたからである。神が彼に示し給ひ場所を求めて、（彼は）密林や山々を歩き廻りはじめた。しかしてラリオンが洞穴を掘つていたその丘にやつて来た。しかして、この場所を愛し、その洞穴に坐り込み、神に祈りはじめて涙と共に言つた。「主よ！（汝は）我をこの場所に定め給ひぬ。聖なる山と、我を得度せし我が修道院長の祝福がこの場所にありますように」と。しかして（彼は）神に祈りながら其処に暮しはじめた。乾いたパンを食べ、しかも一日置きにし、水も必要なだけしか飲まず、洞穴を掘りつゞけ、昼も夜もおのれに怠いを与えず、労苦の中に時をすごし、勤行と祈りに（昼夜を送つていた）。しかしてその後、善良な人々が聞き知つた。しかして彼のもとへよくやつて来ては、必要であつたものを彼に持参したのである。偉大なるアントニイとして名がひろまり、（人々は）彼の祝福を求めてよくやつて来た。その後、ヤロスラス大公が死去した時、その息子イジヤスラブが権

力を受けつぎ、キエフに坐した。アントニイはルシの国に名をうたわれた。イジャストラフは彼の生活を聞き知つて、おのれの親兵団と共に來たり、彼に祝福と祈りを乞うた。しかしてアントニイはすべての（人々）に知られ、尊敬された。しかして兄弟たちが彼のもとに來たりはじめた。（彼は）彼等を受け入れて得度してやつた。彼のもとには十二人の兄弟たちが集つた。（それらの人々は）大きな洞穴を、教会を、僧房を掘つた。それらは現在に至るまでも古い修道院の近くの洞穴の中にある。ところで兄弟たちが集まつた時、アントニイは彼等に言つた。「見よ、神は汝等兄弟を集め給うた。（汝等は）聖なる山の祝福によるものである。その祝福によつて我を聖なる山の修道院長が得度してくれたのである。しかして我は汝等を得度したのである。汝等の上に祝福あれ。先づは神より、次には聖なる山より」と。しかして彼等はこゝろ言つた。「自分たちで暮せ。（我は）汝等に修道院長を定めよう。しかして（我）自からは一人でかの山に行きたく思ふ。（我は）以前にも世をのがれて（そのことに）馴れていたからである」と。しかして彼等にヴァルラムを修道院長と定め、しかして自からは山に入り、洞穴を掘つた。それは新しい修道院の近くにある。その中で（彼は）善行の中に生きて四十年間洞穴を出ることなくおのれの生涯を終つた。その中には今日に至るまでも彼の遺体が横たわつている。ところで、兄弟たちは修道院長と共に暮していたが、兄弟たちの数が洞穴の中にふえたので、（人々は）洞穴の外に修道院を建てようと思つた。しかして、修道院長と兄弟たちはアントニイのもとに來たり、しかして彼に言つた。「父よ！兄弟たちがふえた。ところで（我々は）洞穴の中に身をおくことができない。神が命じ給いますよう。しかして汝の祈りがありますように、洞穴の外に（我々が）修道院を建てられるよう」と。しかしてアントニイは彼等に命じた。彼等は彼に頭をさげた。しかして、洞穴の傍とりに聖母昇天という名の小さな修道院を建て

た、~~た~~しかして神は聖母の祈りによつて修道僧たちをふやしはじめ給うた。しかして兄弟たちは修道院を建てようと修道院長と相談をなした。しかして兄弟たちはアントニイのところへ来たつて言つた。「父よ！ 兄弟たちはふえつゝある。しかして（我々は）修道院を建てようと欲していたのである」と。ところでアントニイは喜んで言つた。「総てに祝福されている神、しかして聖母の祈りも、聖なる山にいる父たちの（祈りも）、汝等と共にあるように」と。しかして、こう言つて、兄弟たちの一人をイジャスラフ公のもとに遣わし、かく言つた。「我が公よ！ 見よ、神は兄弟たちをふやし給う。しかして場所は小さい。洞穴の上にあるかの山を我々に与えよ」と。ところでイジャスラフは聞いて喜び、おのれの家臣を遣わし、彼等にその山を与えた。ところで修道院長及び兄弟たちは、大いなる教会を基礎づけ、しかして修道院を塔でかこみ、多くの僧房を建て、教会を完成し、聖像で飾つた。しかして此処からベチエルスキー（洞穴の）修道院がはじまつたのである。その修道僧たちは以前は洞穴に住んでいたのので、そのためにベチエルスキー（洞穴の）修道院と呼ばれたのである。ベチエルスキー修道院は聖なる山の祝福から出たものなのである。修道院が完成し、修道院長の席をヴァルラムが占めた時に、イジャスラフは聖ドミトリイの修道院を建て、ヴァルラムを聖ドミトリイへ修道院長として連れ出した。富に期待してこの修道院よりも一層高いものを造らうと欲したのである。というのは、多くの修道院が皇帝たちや、貴族たちや、富によつて建てられたからである。しかし涙によつて、精進によつて、祈りによつて、勤行によつて建てられたもののような（そんな教会）はない。というのは、アントニイは、黄金も銀ももたなかつた。しかし、言われている如く涙と精進によつてなし得たのである。ヴァルラムが聖ドミトリイ（修道院）に来たつた時、兄弟たちは相談をして、長老アントニイのもとへ行き、言つた。「我々に修道院長を立てよ」

と、ところで彼は彼等に言つた。「(汝等は)誰を欲しているのか?」と、そこで彼等は言つた。「神及び汝が欲するものを」と、しかして(彼は)彼等に言つた。「汝等の内でより卓越したもののフエオドシイの如く、謙恭にして温順、温和なるもの。その者が汝等の修道院長になるがよい」と、兄弟たちは喜び、長老に頭をさげ、しかして、その数二十人なる兄弟たちの修道院長として、フエオドシイを立てた。フエオドシイは修道院を受け、節制、大いなる精神、及び涙と共にする祈りをおこないはじめた。しかして多くの修道僧を集めはじめ、その数百人に及ぶ兄弟たちを集めた。しかして修道僧の法規を求めはじめた。その時、ストジイの修道院の修道僧ミハイルが見出された。彼は、グレキから府主教グレゴリイと共に来ていたのであつた。彼のもとでストジイの修道僧たちの規則を(フエオドシイは)求めはじめた。彼のもので求め得て、書き取り、おのれの修道院において、如何に修道院の歌をうたい、いかに礼拝をおこない、如何に読み上げをおこない、教会の中に如何に立つかということ、及び教会のあらゆる定約、食堂における坐り方、如何なる日に何を食ふかということ、(それら)総てを規定と共に定めた。すべてこれをフエオドシイは定めておのれの修道院に課した。この修道院からすべての(他の)修道院は法規を採用したのである。そのことによつて、ベチエルスキー修道院は総てよりも高位であるのである。フエオドシイが修道院に暮し、善行の生活とベチエルスキーの法規を行い、彼のもとに来る者を誰でも受け入れていた時に、彼のもとへ、悪しく、しかして価値なき奴隸である我も来たつたのである。しかして、~~我~~我が生後十七才であつた時に私は受け入れられた。かくして、いかなる年に修道院が始まつたものなのか、しかして何のためにベチエルスキーと呼ばれているのかを此処に(我は)書き示して、(その年を)定めたのである。ところでフエオドシイの一生に就ては、再びまた語るこゝがあるう』。

『我が書き示して(年号)を定めた』〈написах и положих〉という一人称単数アオリスト形を、此処に年代記者が堂々と用いているのはどうしたことであろう。ペチエルスキー修道院の聖者伝のこの一節と、『過ぎし年月の物語』のこの一節は完全に同一人物で、然もその人物が、『過ぎし年月の物語』の原型の書き手であつたと考えてよいであろうか。もし、そうだとすれば、『過ぎし年月の物語』の冒頭にある言葉『これは(ペチエルスキー・フェドシイ修道院の修道僧の)年毎の物語である』〈Се повѣсти временных лет(черноризца Федосьева монастыря Печерьскаго)〉と完全に符合する。ところが、6618(1110)年の最終個所に明らかに次の様に書かれているのはどうしたことであろう。ネストル〈Нестор〉の年代記と言われる〈Нестор〉という人物名はどうしたのである。ともかく、この最終個所にはラヴレンチーその他の年代記では、

Игумен Селивестр святаго Михаила написах книги си летописецъ, надеяся от Бога милость прияти, при князи Володимере, княжащю ему Кыеве, а мне в то время игуменящю у святаго Михаила, в 6624, индикта 9 лета; а иже чтеть книги сия, то буди ми в молитвах.

とある。

『聖ミハイル修道僧セリヴェストルが年代記者たちのこれらの書物を書いた。神から恩ちようを受けることを期待しながら。キエフに公としてあつたヴオロジメル公の時代であり、私はその時、聖ミハイルにあつて修道していた。6624(1116)年、インデクトの九年である。ところで、この書物を読む者は、私に対して祈りの中にあれ』

これによれば、少くともラヴレンチーその他の年代記に見られる『過ぎし年月の物語』の記者はネストルではなくて、1116年

にこれを書いたとするセリヴエートルである。だが、彼は『これらの書物』を書いたと、複数形でのべていて、決して『この書物』とは言っていない。とすれば、セリヴエートルによれば、『過ぎし年月の物語』とは、決して単一の書物ではなかつたということになる。書物の寄せ集めであつた。いづれ、このことに就ては詳しくふれる機会があるであろう。少くとも、セリヴエートルは1116年に、『過ぎし年月の物語』を写したか或はまた写しながら書き加えたかして、例えば、先にあげた聖者伝の一節をも書物と呼んでいたらしいことはたしかである。もし、その様な明白な出典を書物と呼ぶとすれば、『過ぎし年月の物語』は、まだまだ多くの書物を含み込んでいるのである。例えば同じペテエルスキー聖者伝から、この他に、なお数ヶ所抜き書きされた部分を見出すことができる。ペテエルスキー聖者伝のペルセネフ羊皮紙本によつて、それを見よう。『過ぎし年月の物語』の6582(1074)年の項の最初より三分の一ほどさがつた個所に、次の様にある。聖者たちのことを述べる個所である。

Тази бо беша любовници, и въздержници, и постници, от них же намену неколико мужь чудных.

『というのは、信憑者たちは、帰依者たちも、精進者たちも、かくの如くであつたのである。ところで、彼等から、すぐれた人々を若干、(我は)示そう。』

そして、先づ才一に書きつけられたのは、次の様な文章であつた。

се первый демьян презвутер: бяше тако постник и въздержник, яко разве хлеба и воды ясти ему до смерти своея. Аще кто коли принесяше детишь болен, кацем либо недугом одержим принесяшу в монастырь, ли свершен человек, кацем либо недугом одержим, приходяше в монастырь к бла-

женому Феодосию: повелеваше сему Дамьяну молитву створити болящему; и абье створише молитву и маслом помазаше, и приимаху ицеленье приходящии к нему. Разболевшу же ся и конецъ прияти лежащю ему в немощи, приде ангел к нему в образе Феодосьева, даруя ему царство небесное за труды его; посем же приде Феодосий с братью, и приседяху у него, оному же изнемагающю, възрев на игумена рече: "не забывай, игумене, еже еси обещал"; и разуме великий Феодосий, яко видел, и рече ему: "брате Дамьяне! еже есмь обещал, то ти буди". Он же сомжарив очи, предасть дух в руке Божии; игумен же и братья похорониша тело его. Также бе и другой брат, именем Еремия, иже помняше крещенье земле Русьския. Сему бе дар дарован от Бога: проповедаше предбудущая, и аще кого видяше в помышлени, обличаше и втайне и наказаше блюстися от дьявола; аще который брат умышляше ити из монастыря, и узряше и, пришед к нему, обличаше мысль его и утешаше брата; аще к нему что решаше, ли добро, ли зло, сбудяшется старче слово.

『オ一人者は——これは、長老のデミヤンである。(彼は)パンと水以外はおのれの死まで食べなかつたような精進者であり帰依者であつた。もしも誰かと、或る病氣にとりつかれた病氣の子供をたづさえて修道院にその子供を連れて来たり、或は或る病氣にとりつかれた大人が至福なるフェオドソイの修道院へ来るようなことがあると、彼は病人のために祈りをなすようこのデミヤンに命じたものであつた。しかして、すぐに、(彼は)祈りをおこ

ない、油を塗つた。しかして彼の所へ来たるものは回復をえていたのである。ところで彼が病みついて、終末を受けるべく病の床に横たわつていた時、天使が彼のもとへフエオドシイの形で来たり、彼の勞苦に対して彼に天国をめぐんだ。ところで、この後に、フエオドシイが兄弟たちと共に来たり、彼のそばに坐つた。彼は、弱り果てゝいたが、修道院長をみあげて言つた。「修道院長よ！（汝が）約束したことを忘れ給ひな」と。彼が幻想をみていることを偉大なるフエオドシイは知つて、彼に言つた。「兄弟デミヤンよ！（私が）約束したことは汝に實現するであろう」と。ところで彼は眼をとち、神の御手におのれの生命を引き渡した。修道院長と兄弟たちは、彼の遺体を葬つた。同じように、その名をエレミヤという別の兄弟がいた。彼はルソの國の洗礼を憶えていた。この者には神から才能が与えられていたのである。（彼は）未來を予言していた。しかして、もしも沈思して誰かを見ると、その者をひそかに非難し、惡魔から身を守るように教えたのである。もしも兄弟たちの誰かが修道院から去ろうと企てると、そのことをエレミヤは気づいて、その者の所へ来たり、彼の企てを非難し、その兄弟を慰めたのである。もしも彼（エレミヤ）が誰かに何かを言ふと、良きにつけ悪しきにつけ、（この）長老の言葉は實際に起つたのであつた。」

この一節を前記のベルセネフ羊皮紙本に比較して見ると、ただ、次の様な個所の相違だけしか出て来ないのである。（左側は『過ぎし年月の物語』；右側は聖者伝）。

Демьян презвутер: бяше тако постник и въздержник, яко разве..... ----- Демьян прозвутер

бяше так постник, яко разве

Аще кто коли ----- И аще бо коли кто

одержим , ----- одержим беаше

принесяху в манастирь----- "нет"

и абѣ створише молитву ---- "нет"
 разболевшю же ся и конецъ прияти лежащю ему в
 немощи ----- Единою же ему разболе-
 вшюся и конецъ прияти хотящю,
 еже еси обещал ----- еже ми еси в-сию ночь
 обещал
 еже есмь обещал ----- еже ти есмь обещал
 сомжарив очи ----- смежав очи свои
 и узряще и ----- "нет"
 аще к нему что решаше ---- аще кому речаше что

この相違とても，単なる筆の勢いのちがいにすぎないし，
 多かれ少なかれ古写本には付き物の相違の範囲を越えるものでは
 ない．『過ぎし年月の物語』の6582(1074)年の項には，今，
 上に引用した一節について長々とした文章が出て来る．然し，
 実はこれとても，聖者伝の一節を書き抜いたものにすぎない．
 シノダリ図書館本 版216とこの長い一節を比較して見ても，其
 処には，上記二つの場合ほどの文章のちがいしか見当らない．だ
 から，両方の原文を此処に取りあげる必要はあるまい．念のため
 にその内容の日本語訳を次に示そう．

『ところで，その名をマトフエイというもう一人の長老がいた．
 彼は洞察力があつた．ある時，彼が教会の自分の場所に立つてい
 たとき，唱歌隊の席で両側に立つて歌つていた兄弟たちを，眼を
 あげて見た．しかして，リヤフ人の形をして，マントを着て，レ
 ポクと言われる花を裾につけて，その兄弟たちの周りを歩いてい
 る悪魔を彼は見つけた．しかして（悪魔は）兄弟たちをめぐりな
 がら，ふところから花をとり出しては，任意に誰かに投げている
 兄弟たちの中の歌つている者たちの誰かに花が着くと，（その者
 は）しばらく立つていて，しかして思考が弱まり，何かある口実
 をもうけて，教会から出て，僧房に行き，眠り込んで，勤行が終

るまで教会に戻つて来なかつた。もしも、別の者に（花を）投げ、その者に花が着かなければ、（その者は）唱歌しつゝしつかりと立つていた。朝の勤行を歌い終るまで。そして、その時に、おのれの僧房へさがつたのである。ところで長老はこれを見て、おのれの兄弟たちにつたえた。ところで、再び、長老はこんなことを見たのである。即ち、この習慣によつて長老が朝の勤行をつとめあげて、あかつき前に兄弟たちがおのれの僧房へさがつた時、さて、長老は、最後に教会から退出したのであつた。彼が一人で歩いていた時、信号板の下で休もうとして坐した。というのは彼の僧房は教会から遠かつたからである。すると彼は群が門から出て来るのを見た。彼が眼をあげて、見ると、一人の男が豚に乗つていて、他のものたちは彼をとりかこんで動いていた。しかして長老は彼等に言つた。「どこへ行くのか？」と。しかして豚に乗つた悪魔が言つた。「ミハル・トリベコウイチを迎えに」と。そこで長老は十字架のしるしで我が身に印しづけ、しかしておのれの僧房にかえりついた。夜が明けた時、長老は気づいて侍者に言つた。「行きてたづねよ。ミハルは僧房にいるやを」と。しかして人々は彼に言つた。「（彼は）朝の勤行の後、もうずつと前に、かこいから飛びにげた」と。しかしてこのことを長老は修道院長及び兄弟たちにつたえた。この長老の時に、フェオドツイが死去し、ステファンが修道院長になり、ステファンの後にはニコンが（修道院長になつた）。ところでこの長老がまだ生きていた時であつた。或る時、朝の勤行を彼がつとめていた時に、（彼は）修道院長ニコンを見ようとして眼をあげた。しかして、修道院長の位置にロバが立つているのを見た。しかして、まだ修道院長は立つてはゐなかつたことに気づいた。この様な別の多くの幻を長老は見た。しかして、この修道院の中で、非常に老令になつて死亡した。

ところでまた、その名をイサキイという別の修道僧がいた。し

かして、いまだ彼が俗世にて、即ち、世俗生活にあつて、トロブ
チャニンの生まれの商人であつたために、裕福であつた時、僧に
なろうと思つた。しかして、自分の財産を欠乏している者たち及
び修道院に分け与え、しかして、洞穴にいる偉大なるアントニイ
のもとへ行つた。自分を修道僧にして呉れるように彼にたのんだ
のである。しかして、アントニイは彼を受け入れ、修道僧の衣を
彼に着せ、彼の名をイサキイと言つた。というのは、彼の以前の
名前はチエルニであつたからである。この様にしてイサキイは、
厳しい生活を受け入れた。(苦行者用の)剛毛製緊衣をおのれの
身にまとい、自分に雄山羊を買つて呉れるように命じ、しかして、
苦行者服にするために皮を取り、生の毛皮を我が身につけて乾か
した。洞穴に、一つの出入通の中の、四ロコチの広さの小さな僧
房にこもり、其処で涙と共に神に祈つていたものである。彼の食
べ物は聖餅だけであり、それさえも一日置きであつた。水は適當
にしか飲まなかつた。偉大なるアントニイが彼に(食べ物を)も
つて来て、彼に手をさし入れるだけの大きさの窓ごしに与えると、
(彼は)食べものを受け入れたのであつた。このことを(彼は)
七年間実行した。光の当るところへは出ず、横ばいになることも
なく、ただ坐つたままですい眠をとつていたのである。ある時、
例によつて、夕方が近づいた時、頭をさげ(礼拝し)はじめた。
詩編を誦した。夜中に至りさえした。彼が苦業していた時は自分
の座に坐り通していたのである。或る時、例によつて彼が坐つて
いて、ローソクを消した時、光が急にかどやき出した。あたかも、
洞穴の中で太陽が輝き出した如くであつた。あたかも人間の眼を
くらませるばかりであつた。しかして、うるわしい二人の青年が
彼のところへ来たり、二人の顔は太陽のようにかどやいた。しか
して、(二人は)彼に言つた。＃イサキイよ！我々二人は天使
である。見よ、汝のもとへフリストスが来給り。ひざまづきて彼
に礼拝せよ＃と。ところで彼は(これが)悪魔の仕業であること

を知らず、十字を切ることも忘れていた。フリストスに向つてな
ず如く、悪魔の仕業に向つて進み出て礼拝した。悪魔どもは呼ん
で言つた。「汝は我々のものなり、イサキイよ！既に」と。（
悪魔どもは）彼を僧房の中へみちびき込み、彼を坐らせ、彼の近
くに坐りはじめた。しかして僧房は彼等で一杯になつた。しかし
て洞穴の通路も。フリストスと言われる悪魔の一人が言つた。
「笛、太鼓及び琴を取りて奏せよ。我々にイサキイを躍らせよ」
と、悪魔どもは笛、琴、及び太鼓を奏して彼をもてあそびはじめ
た。しかして彼をつかれさせ、彼を半死半生のまゝ、捨てて、彼
をののしつて去つてしまつた。翌朝、暁になつて、食物をとる時
になつた時、例によつて、アントニイが小窓のところへ来て言つ
た。「主よ祝福し給え。父イサキイよ！」と。しかして 答えは
なかつた。しかしてアントニイは言つた。「これは既に（彼が）
死去してしまつてゐるといふことだ」と。しかして、修道院の
フェオドシイ及び兄弟たちを迎えに使者をつたわした。入口が埋
められてしまつてゐたところ（の入口）を掘り出して、中に入り、
（人々は）イサキイをかゝえ、死んだものと考えて運び出し、洞
穴の前に彼を置いた。しかして（人々は）彼が生きているのを見
た。しかして、フェオドシイ修道院長が言つた。「これは悪魔の仕
業によつて起つたのだ」と。しかして（人々は）彼を寢床に置き
、彼のためにアントニイが勤行した。この時に、イジャスラフが
リヤヒからやつて来て、フセヌラフのことでアントニイに対して
イジャスラフは立腹した。スヰイヤトスラフは使者をつかわして、
チエルニゴフへアントニイを夜中に出頭させた。そこでアントニ
イはチエルニゴフへ来たつた時、バルジンの山々が好きになつた。
洞穴を掘つて其処に（彼は）住みついた。其処、バルジンの山々
には今日に至るまでも聖母修道院がある。フェオドシイはアント
ニイがチエルニゴフに行つたのを知つて、兄弟たちと共に行き、
イサキイを手にとり、彼をおのれの僧房へ連れて来て、彼の面倒

をみた。というのは、彼は肉体的に弱り果てていて、寝返りをうつことも、起きあがることも、坐ることもできないほどであり、一方のわき腹の方を下にただけで横たわり、ほんの傍を這い廻るだけであつた。彼のこのわき腹の側の下には度々ウジ虫がわき出してゐた。ぬれてゐたためであり、横になつたまゝであつたためである。フェオドシイは自からおのれの両手で彼を洗つてやり、着替えさせてやつた。二年の間、彼の世話してこの様になした。次の様なことは不思議であり驚くべきことであつた。即ち、この男は二年の間横たわつて、パンも食わず、水も（飲まず）いかなる食べ物も果物も（取らず）、一言葉も言わずに二年間、おしてつんぼになつて横たわつてゐた。フェオドシイは彼のために神に祈つてゐた。彼の上に昼も夜も祈りをなしてゐた。（この男が）三年目に口をきき、物を聞きとり、幼児のように両足で立ち、歩きはじめるまでずつと。彼は教会へ通うことを意に介しなかつた。（人々は）彼を力ずくで教会へ引張つて行つた。しかして、この後、彼は僧院食堂へ通うことを憶えた。（人々は）彼を兄弟たちから離して坐らせてゐた。彼の前にパンが置かれてゐたのに、彼の手の中へ入れてやらなければそれを取ろうとはしなかつた。ところで、フェオドシイは言つた。〃彼の前にパンを置け。しかし、彼の手には持たせてやるな。（彼が）自から食うにまかせよ〃と。しかして（彼は）一週間の間食べようとはしなかつた。しかして少し周囲を見廻して、パンをかちつてゐたのである。この様にして彼はパンを食べることを憶えた。この様にしてフェオドシイは悪魔の策略から（彼を）救つたのである。ところでイサキイは再び苛酷な節制をはじめた。フェオドシイが死去し、しかしてステファンがその地位にあつたとき、イサキイは言つた。〃見よ、悪魔よ、（汝は）既に我をたぶらかした。一個所に坐りつゝけてゐた（我を）。ところが、既に、（我は）洞穴の中にはこもろうとは思わない。反対に修道院の中を歩き廻りながら汝に

打ち克つてあろう」と。しかして苦行者服を着て、苦行者服の上に粗布の布着をつけて、白癩を装いはじめた。兄弟たちのために物を煮て、料理人たちに協力しはじめた。しかして朝の勤行には誰よりも早く通い、しつかりと身じろぎもせずに立つていた。冬がやつて来て、厳しい寒さがはじまると、ふみつぶされたカガトの靴をはいて立つていた。だものだから、彼の両足は石に凍りついて、朝の勤行がつとめ終えられるまで、足を動かすことができなかつたほどである。しかして朝の勤行の後には料理場へ行き、火を、水を、たき木を用意していたのである。兄弟たちのうちの他の料理人たちが（然る後に）やつて来たのであつた。ところで一人の料理人がいた。その者の名前は同じくイサキイであつた。しかして（彼は）笑いながらイサキイに言つた。「そら、あそこに黒い鳥がとまつている。行きて、あれをとらえよ」と。ところで彼は、彼に地面まで頭をさげ、行つて、鳥をとらえ、総ての料理人たちの前で彼に持参した。しかして（人々は）おそれ、修道院長と兄弟たちに知らせた。兄弟たちは彼を尊敬しはじめた。ところで彼は人間の榮与を欲せず、白癩の真似をしはじめ、或は修道院長に、或は兄弟たちに、或は世俗の人々に迷惑をかけはじめた。他の人々が自分に打ちきずを与えてくれることを目的にしていたのである。しかして自からを白癩とみせて、世間を乞食して廻りはじめた。以前にいた洞穴に住みついた。というのは、アナトリイが既に死去していたからである。しかして、おのれに、若者たちを集め、彼等に修道服を着せ、時には修道院長ニコンから、時には、それらの子たちの親たちから打ちきずを受けていたのである。ところで、この様なことを総て耐えしのび、昼も夜も、打ちきずを受け、裸と寒さを（耐えていた）。ある夜、洞穴の傍の小屋の中で炉をたいた。炉がもえた時、古かつたので、炎が隙間を越えて立ちのぼりはじめた。（隙間を）ふさぐものがなかつたので、（彼は）はだしの足で進み出て、炎の上に立つて、炉が

もえきつて、それから、這いおりたのである。彼に就てはこの他多くのことが物語られていた。(我は)その他のことについて実際に見た者である。しかして、かくして(彼は)悪魔に打ちかつた。ハエなどのおどしや、そののかしを何とも思わなかつたように、悪魔たちに向つて彼は言つていた。〃もしも、(汝等が)最初、私を洞穴の中でたぶらかしたにしても、(それは)(私が)汝等の策略とずるさを知らなかつたからである。ところが、今は、(私は)主なるイスス・フリスト及び我が神及び我が父フエオドシイの祈りとをもつているので、うち勝つてであろうと期待している〃と。何度も悪魔たちは彼に害をして言つたものである。〃(汝は)我々のものだ。我々の長老及び我々に(汝は)既に頭を下げてではないか〃と。そこで彼は言つたものである。〃汝等の長老は反キリスト(アンチフリスト)であり、汝等は悪魔である〃と。おのれの顔を十字架の形で(彼が)影らせるとすぐに(悪魔たちは)消えて行つたのである。また或る時は、夜中に彼の所へ(悪魔たちが)来たり、幻想の中で彼に恐怖をあたえ、あたかも、今、多くの民衆がシヤベルとツルハンをもつて進み、次の様に言つているように(みせた)。〃この洞穴を掘りくづし、この男を此処に埋めよう〃と。また別の人々は言つていた。〃イサキイよ、逃げよ。埋めようと(人々は)思つていゝ〃と。ところで彼は彼等に言つたものである。〃もしも(汝等が)人間であれば、日中に来るがよかるう。ところで、汝等が闇であれば、闇の中を歩け。闇が汝等を振るであろう〃と。しかして、彼等を十字架でしるしづけた。(人々は)消えた。また別の時には、熊の形をして、或は猛獣の形をして、或は去勢牛の形をして、或は蛇の形で彼のもとへ這い來つて、或はびきがえるや、ネズミやあらゆるハ虫類の形をして(悪魔たちは)彼をおどした。何も彼にしでかすことができず、(悪魔たちは)彼に言つた。〃イサキイよ！(汝は)我々を打ちまかした〃と。そこで彼は言つた。〃イスス・フリスト

ス及び天使たちの形をして、（最初に）汝等は我に打ち勝つた。その様な形は汝等には価しないものである。然し、見よ、今度は汝等は、本当にちようど、汝等自身が見たところ、いやらしく、兇悪であるように、獣や家畜や蛇やハ虫類の形をして、出現して来ている」と。すると、直ちに、悪魔たちは彼から立ち消えた。しかして、それから、彼には悪魔たちからの害がなかつた。このことを（彼）自からが次の様に語っていた。『これは、この戦いが私には三年に及んでいた』と。その後、彼は信心深い生活をはじめ、節制と精神と誠め^ま守りはじめた。しかして、かくの如く生きて、彼はおのれの生涯を終つた。洞穴の中で病みつき、（人々は）彼を修道院に運んだ。しかして七日目に主のもとに死去した。ところで修道院長イオアン及び兄弟たちは彼の遺体をとり、彼を埋葬した。フェオドシイ修道院の修道僧たちは、かくの如くであつた。彼等は、死後もなお燈明の如く輝き、この世にいる兄弟たちの為、世俗の兄弟たちの為に神に祈り、修道院へ寄附する人々のために折つてゐるのである。その修道院の中には、現在まで、善行の生活を人々は送り、全員一致共同して、歌い、祈り、聴聞して、全能の神をたゞえ、フェオドシイの祈りに守られてゐるのである。フェオドシイに栄光あれ。アーメン。』

『ペテルスキー聖者伝』と対応するものとして最後に、もう一個所だけ引用しておこう。同じく、シノダリ図書館本¹⁶216にある聖者伝には、次の様に読み取られる。

Мета 5599, индикта 14, иже бе в 18 лето по преставлении преподобнаго отца нашего Феодосиа, игумен и черноризци съвет сътвориша; "не добро есть лежати преподобному отцю нашему Феодосию кроме монастыря и церкви своеа, понеже тыи есть основал церковь и черноризца съвокупил; и съвет совторше, повелеша устроити

место, идеже положити мощи святого, и раку
камену поставиша. И приспевшу празднику Ус-
пения святыя Богородица, и преже триех дней
праздника, повеле игумен копати, идеже мощи
святого отца нашего Феодосиа; его же повелению
и аз грешный Нестор сподоблен бых, и прьвое
самовидецъ святых его мощей, по повелению
игумена; еже и скажу, не слухом бо слышах,
но сам началник бых тому делу. Пришед бо игу-
мен ко мне и рече ми: "пойдеве в пещеру в пре-
подобному Феодосию"; аз же идох с игуменом в
пещеру, не сведущю никомуже. Рассмотривше же,
куде копати, и назнаменовше место, где копати,
кромѣ устия, рече же к мне игумен: "не мози
никомуже поведати от братиа, да не уведаетъ ни
един; попоими его же хоцещи, да поможетъ ти".
Аз же пристроих в садмый день рогалиа, имже
копати, и в вторник, вечер глубок, поях с со-
бою два брата, не ведущу никомуже, и приидохом
в пещеру. И отневше псалмы, начах копати, и
трудився много, вдах другому брату, и копахом
до полунощи, и трудившеся много не могохом
докопатися; и начах скорбети, еда како на стра-
ну копаем. Аз же взял рогалию, начах прилежно
копати, подругу моему опочивающу пред пещерою;
и рече им: "удариша в било"; аз же в то время
прокопах над мощьми святого, и оному глаголю-
щю ко мне: "уже удариша в било", мне же рекню:
"прокопах уже". Егда же прокопах, абие страх
объят мя и начах звати: Господи помилуй! В то

же время седяста два брата в монастыри, стрегуша, егда игумен утаився несъким, и принесть его стай, и зряста прилежно к печере; и егда удариша в било, видеша три столпы, аки дуги зарнии стоавше приидоша над верх церкви, идеже положен бысть святыи Феодосий. И се видеша вси мнися и мнози в граде, им же възвещено бысть, и реща: "се уже приносять преподобнаго Феодосиа от печеры"; утру же бывшу, множество людей приидоша с Киева, с свещами и с фимианом. В то же время виде и Стефан, иже бысть в него место игумен, иже в то время бысть епископ, виде в своем монастыри чрез поле зарю велику над печерою, мнев, яко несуть святаго Феодосиа, бо ему възвещено преже пред единым днем, съжалився зело, яко без него преносять мощи святаго; и в той час всед на конь, вборзе поеха к печере, поим с собою Климента, его же постави игуменом в себе место; грядуще же видяху зарю велику над печерою, и яко приидоста близ, видеста свеща многи над печерою, и приидоста близ к печере, и не видеста ничтоже, и приидоста к дверем печеры, нам же седящим у мощей святаго. Егда бо прокопах, послах у игумену, глаголя: "прииди, да изнесем святаго", игумен же прииде с двема братома; и прокопах велми, и преклоншеса видехом его лежаща мощьми святолепно, но и состави его цели бяху всяко и тлению непричастни, власи же главнии присъхли бяху к главе его; и възложивше на одр святаго его

мощи, изнесохом пред пещеру. В другой же день съвкупльшися епископи, вси вкупе приидоша в пещеру, им же суть имена: Ефрем Переяславскы, Стефан Володимерьскый, Иоан Черниговскый, Марин Юрьевскый, Антоний Пороский, и игумени вси от всех монастырев с черноризьци приидоша, и людие благоверний; и взяша мощи святаго Феодосиа от пещеры, с свечами и фимианом, и принесше его положиша в своей ему церкви, в притворе на десной стране, месяца августа 14, в день четверток, в 1 час дне, и призоваша светло в той день. Се же повем вам мало нечто, еже ся и сбысть проречение святаго отца нашего Феодосиа: еще бо живу сущу великому Феодосию, и игуменьство обдержашу, и правяшу еже Богом порученное ему стадо, иже нетокмо черноризца едины, но и мирьскими печашеся о душах их, како бы спаслися, паче же о сынех своих духовных, утешаа и наказашаа приходяща к нему, иногда же и в дома их приходя и благословение им подаваа. Единою же пришедшу ему в дом Янев, к Яневи и к подружю его Марии, бе бо любя их блаженный Феодосий, понеже живяста в заповедех Господних и в любви межю собою пребывааста; единоюже пришедшу ему к нима, и учае их о милостыни к убогим и о царствии небеснем, еже приати праведником, а грешным муку, и о смертнем часе; еще же и се ему глаголющу има о положении тела в гробе има, и рече ему Яневаа: "кто повесть, где мя положить?" Рече же ей Феодосий: "по истине идеже

лягу аз, ту и ты положена бужешн". Сие же сбысться по 18 лет преставления святаго: преподобному бо Феодосию преставльшуся преже 18 лет пренесения честнаго телеси его, егда же пренесоша мощи его, и тогда того же лета и месяца преставися Яневаа, именем Мариа, месяца августа в 16 день; и пришедше черноризьци, певше обычныя песни, и принесе положиша ю в церкви святаыя Богородица Печерьския, противу гробу Феодосиеву на шюей стране. Феодосий бо положен бысть в 14 августа, а сиа в 16. Сие же сбысться пророчение преподобнаго Феодосиа, добраго пастыря, иже пасяше словесныя овца нелицемерно, с кротостию и с рассмотрением, съблюдая их и бдя за ня, и моляся за порученное ему стадо и за вся православныя християны и за землю Русскую, иже и по отшествии своем от сеа жизни молится за люди верныя и за своа ученикы, иже взирающе на честную его раку и поминающе учение его и въздержанье, прославляють Бога. Аз же грешный и недостойный раб его и ученик Нестор недоумю, како похвалити добраго его жития и въздержанья: но сиа реку мало нечто. Радуйся, отче нашъ и наставниче, мирьския плища отринув, и мльчание възлюби, Богу послужил еси в тишине, и в мнишьском житии свяко себе принесение божественое принесл еси, пощением превъзвышья, плотьския сласти възненавидев и мирьскую красоту и желание века сего отринув, последуа стопам, высокомысленным Отцем ревнуа,

молчанием възвышаася и смиреніем украшаася, в словесех книжных веселуася. Радуйся, укрепи-
выйся надежею вечныхъ благъ, ихже приал еси, умер-
твивъ плотское желаніе и истояникъ безаконіа и
мятежь, преподобне, и бесовьскихъ козней избег
и сетей его, с праведными, отче, почил еси, въ-
сприимъ противу трудомъ своимъ възмездіе, Отцемъ
снаследникъ бывъ, последовавъ учению ихъ и нраву
и въздержанію, и правило ихъ правя. Паче ревно-
ваше великому Феодосію, нравомъ и житіемъ подо-
бся житію его, и въздержанію ревнуя, и послед-
ства обычаю его, и преходя отъ дела в труды
унишаа, обычныя молбы Богу въздаа и в воню бла-
гоуханіа принося вадило молитвенное, фимианъ бла-
говонный, победивъ мирския похоти, и миродрѣзца
князя тмы века сего супротивника поправъ диавола
и козни его, победникъ явися противнымъ его стре-
ламъ и крепкимъ помысломъ ставъ супротивно, укре-
пився оружіемъ крестнымъ, и верою непобедимою, и
Божіею помощію. Темже, о честный отче и пастырю
Христовъ стада, помолися и за мя недостойнаго
раба твоего Нестора, избавлену ми быти отъ сети
неприязнины, и отъ противнаго врага съблуди мя
твоими молитвами, о Христе Исусе о Господе на-
шемъ, ему же подобаеть слава и честь и покла-
нание, с безначальнымъ его Отцемъ, с пресвятымъ
и благымъ и животворящимъ Духомъ, и ныне и присно
и в веки векомъ, аминь.

此処には、前に少しふれた年代記者の名前〈Нестор〉ネストルが数回読み取られる。然も、自分を一人称単数形でこの文章に出頭させているのである。ラヴレンチー年代記その他に見られる『過ぎし年月の物語』が『ネストルの』〈Нестора〉という名前を冠せられることから考えて、これは見のがすことのできない箇所である。ところが、この文章が実は、『過ぎし年月の物語』の同じ6599(1091)年の項にその冒頭から、全くうり二つの形で書きとめられているのである。たゞ、『聖者伝』で『罪ある我、ネストルは』〈аз грешный Нестор〉と明らかに自分の名前を書きとめているのに対して、『過ぎし年月の物語』では単に『罪ある我』〈аз грешный〉とのみ書いて、ネストルという自分の名をあげていない。その他の大きな差異は両文には多くはみとめられない。『過ぎし年月の物語』の文章における意味は次の通りである。

『6599(1091)年。修道院長及び修道僧たちが会議をひらいて言つた。〃我々の父なるフエオドシイがおのれの教会の修道院の外に横たわつているのは良くない。何故ならば、(彼は)教会を基礎づけたのであり、修道僧たちを集めたのであるから〃。と相談をして(彼等は)彼の遺体を置くべき場所をとるのえるように命じた。三日後、聖母昇天祭の日が来たとき、修道院長は、我々の父なるフエオドシイの遺体の横たわつている所を掘るように命じた。ところで彼の命令の先づ最初の実際目撃者は(この)罪ある我であつた。そのことを(私は)人づてに聞いて語るのではなくて、自分がこのことに就ての発端者なのである。修道院長が私のところへ来て〃(汝と二人で)フエオドシイの洞穴へ行こう〃と言つた時、私は修道院長と共にやつて来て、誰にも知られずに、掘るべき場所をしらべて見て、掘るべき場所を入口のわきのところに標示した。私に向つて修道院長が言つた。〃誰も知ることのないように、兄弟の内の誰にも言うな。然し汝に協力で

きるよりの好きな着を連れて来たれ」と。私はそれで掘るための
シャベルを七日間で用意した。しかして火曜日に夕方、誰にも知
られず、二人の兄弟を連れて洞穴に来たり、詩篇を誦し、掘りは
じめた。つかれると別の兄弟にまかせ、(我々は)真夜中まで掘
つた。(我々は)努力した。しかして掘りつくすことができなかつ
た。(我々が)わきの方を掘っていることを悲しみはじめた。私
は、シャベルを取つて熱中して掘りはじめた。洞穴の前で我が
友が眠つて、しかして私に言つた。「拍子木を打て」と。しかして
私はその時、フエオドシイの遺体に掘りついた。彼が私に「拍
子木を打て」と言つた時、私は言つた。「既に掘りついた」と。
(私が)掘りついた時、私を恐怖がとらえた。しかして、さけび
はじめた。「主よ、あわれみ給え！」と。ところがこの時、二人
の兄弟が修道院の中に坐し、修道院長が彼の遺体を誰によつて運
ぶかを秘していたので、(二人の兄弟は)洞穴の方を見つめてい
た。(人々が)拍子木を打つた時、三本の柱が輝ける弓の様であ
り、しかも、教会の頂きの上に来たり立つのを(二人の兄弟は)
見た。其処へフエオドシイが置かれた。フエオドシイの代り修道
院長であり、この時府主教であつたステエフアンが、この時に、
おのれの修道院の中で、野原の向うの洞穴の上に大きな輝きを目
撃した。彼には一日前に知らされていたので、(人々が)フエオ
ドシイを運んでいるのだと思い、自分のいない時に(人々が)彼
を運び移していることを悲しみ、急いで馬に乗つて出かけた。ク
リメントをつれて。クリメントとは自分の代りに(彼が)修道院
長に任じた者であつた。しかして(ステエフアンとクリメントの
二人は)大きな輝きをみながら進んだ。近くへやつて来たとき、
(二人は)洞穴の上に多くの燈明を見た。しかして、洞穴へ来り
ついて見ると何も見えなかつた。(彼等二人は)我々が彼の遺体
のそばに坐していた時に洞穴の底へ来りついた。(私が)掘りあ
つた時、我々は修道院長に使者をたてた。「来たれ。しかして彼

を（我々は）引き出そうかと。ところで修道院長は二人の兄弟と共に来たつた。（私は）広く掘りひろげ、しかして（我々は）這いり込んだ。しかして（彼は）遺体となつて横たわつていた。しかして關節は（いまだ）バラバラにならず、頭の髪の毛はくつついてしまつていた。彼（の遺体）を修道僧マントの上におき、それを洞穴の前に（人々が）運び出した。ところで翌日に、主教たち、ベレヤスラフのフレム、ヴォロジメルステファン、チエルニコフのイオアン、グルゲフのマリン、及び、あらゆる修道院から修道院長が修道僧たちをつれて、やつて来た。しかして、信心厚き人々も。しかして（人々は）香と燈明とをもつて、フェオドシイの遺体を持ち、運んで来て、彼を彼自身の教会へ、その上り段の右手においた。八月十四日木曜日午後一時であつた。インジクトの十四年の。この日には、壮重に（人々は）式典をおこなつた。

ところで今、（私は）フェオドシイの予言が實現したことについて少しあることをつたえよう。——（このあと数行はその原文を先に引用したことがある）——フェオドシイが修道院長職にあり、生きていたとき、神によつて自分にまかされた（修道僧）についてのみならず、世俗の人たちに就てもその魂のことを配慮して、どうしたら救われるかを心配していた。特にまた、おのれの宗門の息子たちに就ては（配慮し）、彼のもとに来たる者たちをなぐさめ、教え、或る時には彼等の家へやつて来ては彼等に祝福を与えていたものであつた。或る時、ヤンの家へ、ヤン及びその妻のもとへフェオドシイが来たことがあつた。彼は実は彼等を愛していた。（この二人が）主の教え通りに暮し、互いに愛しながら時を過していたからである。この二人の所へ彼が来て、貧しき者たちへのほどこしについて、（また）正しきものが受けるべき天なる王国について、罪人たちは苦しみを（受けることに就て）、死の時について、この二人に教えていた。さて、二人の棺にお

ける遺体の場所について彼が語っていた時、ヤン夫人が彼に言つた。「私が埋葬される場所を誰が知つていようか？」と。そこで、フエオドシイは彼女に言つた。「本当に、私が横たわるところに、汝もまた葬られるであろう」と。ところで、このことは実現した。修道院長は（彼女より）先に死去した。十八年目にこれは実現した。というのは、この年にマリヤと言う名のヤン夫人が死去した。八月十六日である。しかして、修道院僧たちが来たり、習慣通り歌を歌い終り、運んで来て、聖母教会のフエオドシイの棺の向い、左側に彼女を置いた。フエオドシイは十四日に、しかしてこの（女性）は十六日に埋葬された。この様に我々の父フエオドシイの予言は実現したのである。彼は良き牧者であり、言葉ある羊たちを偽りなく牧し、温順さと注意とを傾けて羊たちを守り配慮したのである。彼にまかされた群のため、キリスト教徒の人々のため、ルシの国のために祈つたのであつた。また彼は、おのれがこの世を去つてからも、信仰厚き人々のため、おのれの弟子のために祈つているのである。彼等（弟子たち）は汝の棺を見あげて汝の教え及び汝の節制を思い起し、神をたゞえているのである。ところで罪ある汝のしもべにして弟子なる私は、如何にして汝の良き生涯と節制をほめるべきかを知らない。しかし、此処に何かを少し語らう。喜こべ。我が父にして教訓者なる者よ。世俗の騒音を拒み、祈りをより愛し、汝は僧の生活にあつて静けさの中で神に祈つたのであつた。神の与え給うものを総ておのれに取り、精進によつて称揚され、肉体の情欲とそそのかしを憎み、この世の美と望みを捨て、至賢なる父たちの跡を守り、きそい、沈黙によつて高まり、温順によつてまた身をかざり、書物の言葉に我が心を喜こばせた。喜こべ。永遠の幸を受けようとの希望に心をかため、肉体の欲望と、不法及び反逆の源を断ちし、汝、尊師よ。悪魔の策略及びそのあみの目をのがれ、正しきものたちと共に（汝は）永眠した。おのれの勞によつて（良き）むくいを経て、父たちの後継

者となり、父たちの教えと習慣をつぎ、父たちの節制と彼等の法とを（汝は）守つたのである。特に、その習慣と生活において偉大なるフェオドシイに見習い、彼の生活におのれの生活を近づけ、その節制に見習い、彼の慣習のあとをつぎ、一つ仕事より次の仕事に移りつゝ、神への定められた祈りをあげ、良き香りのために祈りの香炉をさゝげ、良き香りの香をさゝげたのである。俗世の欲望及びこの世の世俗支配の公に打ち勝ち、敵なる悪魔及びその策略をたゞし、勝利者として現れたのである。悪魔の敵対的な矢及び高慢な考えに反対して立ち、十字架の武器と、破れざる信仰と、神の御助けによつて確固たるものとなつたのである。敵なる悪魔のあみの目よりまぬがれ得られるよう、誠なる父よ、我が為に祈れ。敵なる悪魔より我を守るに汝の祈りを以つてせよ』

ほとんど完全に一致するような形で『聖者伝』から書き取られているのは以上の個所である。然し、『過ぎし年月の物語』が、汲み取つて来て利用した『文献的なもの』が、これだけであつたのではない。例えば6604(1096)年の項の中程よりやゝ後に、年代記者が一人称単数形で顔を出して、『ノヴゴロド人ギユラチヤ・ロゴヴィチ』〈Гюрята Роговичь Новгородец〉が『私に』〈мн〉話したことを語ろうという一節がある。ところが、その内容を、人から口うつしに聞いたまゝのものであつたとは正直に考えられない。おそらくは、人に聞いた話であつたにちがひなからうが、その内容は、むしろ、文献から流出したものであつて、根本的に口頭伝承だけの作品であつたとは考えられないからである。それなればこそ、途中で、『パタリヤのメフオジイが彼等について語つているところによれば』〈Якоже сказаеть о нихъ Мефодий Патарийскыи〉という一節を入れたのである。『語つている』〈сказаеть〉という現在形の動詞は、彼の書物に書かれているものだということを正直にのべている言葉にちがひない。特に、『パタリヤのメフオジイが彼等につ

いて語つているところによれば』という言葉に続く文章は、メフオジイの著作からの書き抜きであつたにちがいない。

年代記の中に組み込まれている非常に多くの独立的な物語——たとえば、オリガの洗礼を受けた物語、彼女の死の物語、（『古代ロシア研究』才五号参照）、ヴオロジメル（Vologodskiy）の洗礼以前にルシ（Rus）に来ていたキリスト教徒のヴァリヤギ（Varyagi）の受難の物語（『古代ロシア研究』才六号参照）、ヴオロジメル（Vologodskiy）のルシ（Rus）洗礼の物語、ボリスとグレブの物語等々——が、どこまで伝承で、行きつくところ源の文献は何で、然も、年代記者が直接口頭で聞いたものを書きつけたのか、源の文献を多少知つていたり利用して書いたものなのか——この決定は実に困難な問題である。『過ぎし年月の物語』の編集者、或は編纂者よりも先に原型になる幾つかの物語を書いた『過ぎし年月の物語』の先駆をなした年代記が、では、誰であり、何であり、何を利用していたかを決定することもまた容易ではないであろう。『過ぎし年月の物語』の先駆をなしたような年代記的物語が何を編集し、如何なる出典から構成されていたものであるのか？ また、それらの年代記的物語が編集された時に、年代記者たちの一人一人が、どのような年代記以外の文献を素材として利用したのであるか？ これらの問題に対しては、実証する術はないので、なるだけ論理的に推測するより手がないであろう。然しながら、その論理的推測にもその基盤をなすような幾つかの記述が『過ぎし年月の物語』それ自身の中に存在しなければならぬ。推測可能にするような記述個所が多ければ多いほど、論理的推測は推測の域を脱して真実に近づくであろう。かくして、その様な記述個所は丹念に読み取られなければならない。できるだけ多く、年代順にそれを読み取つてみよう。

『過ぎし年月の物語』が年号を設定するまでの部分のほとんどがハマルトルス年代記によつたものであることは既に『古代ロシア研究』においても、此処でも幾度か述べられた。然しそれ以外にも、例えば《бѣ путь изъ Варягъ в Греки》『ヴァリヤギからグレキへの道があつた』という一節は、ビザンチン帝コンスタンチヌス（905～959）の『帝国統治論』才九章（『独木舟に乗つてコンスタンチノーポリに来たるルスについて』）の中に詳しく記述されている。また《Онѣдрѣю учащо в Синопи и пришедшо ему в Корсунь...》『オニドレイがシノピヤで教へ、しかしてコルスニに来つた時に』と言う一節も、使徒アンドレイがロシアに来たという物語であるが、実際には、その事實はない。然し、年代記者の創作ではなくて、十一世紀のビザンチンで一般に俗説としてそう信じられていたことがロシアに流入して来たものを書きとめたのであろう。ところが、このオニドレイ（アンドレイ）という使徒の話が始まる一つ前の節の冒頭に《Полянѣмъ же жившим особѣ》『ポリヤネが別々に住んでいた頃』という言葉があり、然も、使徒オニドレイの話が終つた一つ後の節の冒頭にも全く同じく《Полянѣмъ же жившим особѣ》と記述されているのは何を意味するのであろう。明らかにこれは、ロシア（ルス）の記述が織り込まれた使者アンドレイの説話が、『過ぎし年月の物語』よりも古い何等かの文献テキストに入れられたことの証拠ではないであろうか。おそらく、もともとは最初一回だけこの言葉が用いられて話が進められた古いテキストがあつて、其処に、後で余計な物語を組み込んだために、もう一度、もとのテキストへ話を戻すために、この同じ『ポリヤネが別々に住んでいた頃』という個所へ立ち帰つたのであろう。そのために、そつくり同じ言葉が中間に一つの物語をへたせて繰り返されたと考えられる。だから、古いテキストに後で組み込まれた物語とは、或は、この全文の言葉の間の物語

自体であつたかも知れない。即ち、ロシアをおとずれた使徒アンドレイの物語なのである。実際、そんな歴史事実はない。この物語は、おそらく、比較的後代の説話であつた。というのは『過ぎし年月の物語』よりも古いノヴゴロドオ一年代記には、このアンドレイの物語は記述されていないからである。然も、『過ぎし年月の物語』それ自体が後になつて、この使徒のロシア訪歴の物語を否定しているではないか。『ポリャネが別々に住んでいた頃』という同じ言葉につゞく二つの物語の間のコルフニに來たアンドレイの話をつじつまの合わない矛盾だとする如く、6491(983)年の項の終りに、次の様に記述している。(『古代ロシア研究』才六号；p.34～35参照)。

Вяху бо тогда человеци невеголоси и погани; дьявол радовашеся сему, не ведый, яко близ погибель хотяше быти ему. Тако бо тщешся погубити род хрестяньский, но прогоним бяше хрестом честным и в оных странах; сде же мяшешся оканьный : яко сде ми есть жилище, сде бо не суть апостоли учили, ни пророци прорекли. Не ведый Пророка глаголюща; и нареку не люди моя люди моя; о апостолех бо рече: во всю землю изидоша вешанья их, и в конец вселенья глаголи их. Аще и телом апостоли не суть сде были, но ученья их аки трубы гласять по вселеней в церквах. Им же ученьем побежаем противнаго врага, попирающе под нози; якоже попраста и си отеника, приемише венець небесный с святыми мученики и праведники.

明らかにこれは、使徒アンドレイがルシに來たことを否定して、この頃まだ使者が実際にロシアには足をふみ入れていないことを

述べている一節ではないか。念のため、この一節の意味は次のようである。

『というのは、その時には人々は無知で異教徒であつたからである。悪魔は自分に破滅が近くおこるであろうことを知らず、この事を喜こんでいた。というのは、(悪魔は)このようにしてキリスト教徒の民を滅ぼすことを楽しんでしたが、尊い十字架によつて他の国々においても追い払われてしまつたのである。ところで此地(ロシア)では、呪われた悪魔は、此地が自分にとつて住み家とすべき所である—— というのは、此地では使徒たちが教えたことはなかつたし、予言者たちも予言を行つたことはなかつたからである—— と考えた。予言者が次のように言つてゐるのを知らなかつたからである。即ち、"しかして我が民ならざる民を我が民と(我は)呼ばん"と。というのは、使徒たちについて"彼らの教えが国中にひろまり、宇宙の果てまで彼等の言葉がひろまつた"と言われているからである。もしも、使徒たちが肉体としては此地に来なかつたにしても、彼等の教えはラツバの如く世の果てまで、教会の中で高鳴つてゐるのである。彼等の教えによつて、(我々は)はむかう敵をうちまかし、足の下にふみつけるのである。ちようど、これらの父子が(悪魔を)ふみつけ、**聒**なるじゆん教者と正しき人々とともに天の冠をうけたように』

とすると、少くとも、この一節を書いた人は、年号設定以前の古い使徒アンドレイのロシア訪問を信じていない。いや、おそらく、書いた人は別々であつたであろう。全部を通じて見た時の矛盾に気づかずに、後代に誰かゞ、使徒アンドレイがロシアに来たことを書き込んだのであろう。使徒アンドレイがロシアに来たことはないと信じて書かれた文章が『過ぎし年月の物語』にはもう一個所存在する。同じくヴォロジメル公についての物語で、公がルンを洗礼した時、やはり、追われた悪魔が語る言葉として、6496(988)年の項の三分の二ほどの所に次の様にある。上に引

用した文章と似ていることを注意しよう。

а дьявол станя глаголаше: увы мне, яко отсюда
прогоним есмь! сде бо мнях жилище имети, яко
сде не суть учнья апостолька, ни суть ведуще
Бога, но веселяхся о службе их, еже служаху
мне; и се уже побежен есмь от неведглас, а не
от апостол, ни от мученик, не имам уже цар-
ствовати в странах сих.

『ところで悪魔はうめいて言つた。「あゝ、我は悲しいことだ。ここから追いはらわれるとは！ というのは、ここに住み家を持つことができると思つていた。こゝ（ロシア）には使徒の教えがなく、神を（人々は）知りもしないから。ところで、（我は）我に仕えて来た彼等（ルン人）の勤めをよるこんでいた。しかして見よ。すでに（我は）無知なるものたちによつて、打ちまかされたのであつて、使徒たちからもじゆん教者たちからも（打ちまかされた）のではない。すでに、これらの國々において（我は）君臨することができない』と。』

この二つのよく似た文章は、完全に使徒アンドレイのロシア訪問の記事を否定している。アンドレイの記事は後代に別人によつて書き込まれたものに相違ない。少くとも、6491年の項と6496年の項とを書いた原作者とは別の人が書いたものであろう。その人は、『過ぎし年月の物語』全体を通じて話のつじつまを合わす程の才能はもち合わせていない人物であつたであらう。たゞ、組み込んだ個所の、ほんの前巻だけの筋を合わせるために「По—дьяномъ же жившим особѣ」という当時の原本の言葉をキズ口の前後に書き出したにすぎないと言えるであらう。

さて、ハマルトルスの年代記から取つて来られた言葉は「от скуфь, рекше от козарь», «Си бо угри почаша быти пр—Ираклии цари, иже находиша на Хозд—

роя», «Въ си же времена быша и обри, иже ходиша на Ираклия царя и мало его не яша», 等々があり, «Глаголетъ Георгий в лѣтонисаньи» 以下に書きとられた一節は明らかにハマルトルス年代記からの書き抜きである。(『古代ロシア研究』オ一号参照)

さて、年代設定以後を、より深く注意しながら読んでみよう。

先づ初めて年代を設定した年、即ち『6360年(852)年・インシクトの十五・ミハイルが君臨しはじめた時』«Въ лето 6360, индикта 15, наченшо Михаилу царствовати»に『ルシの國が呼ばれはじめた』«начася прозывать Руска земля»という言葉がある。然し、他の文献と比べて見るとき、この年号は、そのまゝのみにするわけにはいかない。『過ぎし年月の物語』の台本よりも、なお古い台本をもとにしたと思われるノヴゴロドオ一年代記では6360年ではなくて6362年としているのではないか。ノヴゴロドオ一年代記の台本と『過ぎし年月の物語』(ラヴレンチー、イパーチー、トロイツキー各年代記の)の台本とは明らかに別物である。実際にミハイル帝が即位したのは842年で、年代記的に言えば十年前の6350年であつた。何故、十年の間違ひが生まれたのであろう。準拠した文献によると考えなければなるまい。事実、南スラヴの諸年代記は間違つた方の6360年を採用している。総主教ニキフォル«Никифор»の簡略年代記«Летописецъ вскоре»«Хронографскѣи оубоидовъ»オ二本には、『キリストの誕生から最初の正教の皇帝コスタンチンまで318年、コンスタンチン帝からミハイル・キリシア帝まで542年』«От Христова рождьства до прьваго правовернаго царя Костянтина лет 318, от Константина царя до Михаила царя греческаго лет 542»とあつて、世界創造からキリスト誕生までの5508年を加えると、たしかに、6360年になつてしま

う。即ち、西暦852年になつて、歴史事実とは合わない。このニキフォルの簡略年代記にパレア〈Палеа, Палѣя, Παλαιά〉の古い訳文が重ねられた。シノダリ本 №211には、次の様なパレアの一節が読まれる。『しかし、この者(ミハイル)の治世の時代に、彼の治世才二年目にボルガルの国が洗礼され、哲学者キリルがメフオジイと共に6363年に、ボルガルのボリス公の時代にギリシア語から(聖)書をスロヴエンの言葉に訳した』〈и при сего царствии, в второе лето царство его, крещена бысть Болгарьская земля, и преложиша книги от греческа языка на словеньский Кирил философ с Мефоднем в лето 6363, при Борисе князи болгарьстем〉とある。おそらくは、これらの文献の年代算定が『過ぎし年月の物語』の年代決定の基礎になつていたのであろう。少くとも、その年代記者はニキフォルの簡略年代記やパレアを知つていて、それに準拠したものにちがいない。

さて、この様にして年号が決定された後にも、『過ぎし年月の物語』は再びニキフォルの簡略年代記を利用している。アダムからコステヤンチン帝までの年数をこの年の項で算定する個所である。簡略年代記才二本がアダムからニキフォルの死までを算定している個所からの抜き書きである。簡略年代記才一本では、洪水からアブラハムまで1072年となつていて『過ぎし年月の物語』におけるように1082年とはなつていないので、この十年の相違が才二本にあつて、その才二本がよりどころにされたのであろう。

扱て、次に、6415(907)年の年号のもとに、グレキにオレグ〈Олег〉が進攻した物語が『過ぎし年月の物語』に書きとられている。然し、この年号は、ノヴゴロド才一年代記の年号6430(922)年とは一致しない。前述したように、『過ぎし年月の物語』の台本よりも、一層古い台本(現存しないが一般に『原初の集』〈Начальный свод〉と言われている)をもとにしたのが

ノヴゴロドオ一年代記であつた。ところで、そのノヴゴロドオ一年代記では、6428年にイゴリがグレキに進攻して成功しなかつた物語が書かれ、続いて、6429年にはそのイゴリとオレグが二人で軍勢を集め、6430年にイゴリがグレキへ進攻すると書かれている。そして、『過ぎし年月の物語』が、6415年にグレキに進攻し、和を講じたとして、条約文の断片を書き取つている箇所も、年号も、ノヴゴロドオ一年代記には全く見当らないのである。ノヴゴロドオ一年代記は少くとも6430年のオレグのグレキ遠征を、前々年のイゴリの遠征の復しゆうだと見ている。ところで、『過ぎし年月の物語』がオレグの遠征に事よせて書きとめたルンとグレキの条約文は、ノヴゴロドオ一年代記の書かれた時、或はその台本であつた『原初の集』が書かれた時には、いまだ、その書き手なり、編集者の手には入つていなかつたということになるであろう。ところが、この条約文と似たものが、『過ぎし年月の物語』には、これから五年後の6420(912)年の項に、もう一度オレグが講じた条約文が書きとられているのである。『原初の集』やノヴゴロドオ一年代記の記者には、知られていなかつたこの二つの条約文を『過ぎし年月の物語』の記者(編集者)は、あとになつて何処からか探し出して来たのであろう。そして、新しく独自に手に入れた資料を余りに誇らしく年代記編集の中心におきすぎた。そして、彼は、6420(912)年の項に書き入れるべきその資料の冒頭の言葉『もう一つの協約の写し』《равно другого свещания》という言葉(『古代ロシア研究』；オ三号；p.17～p.18参照)と、なおそれに冠せられた『アレクサンドル帝の治世にあつた』という前書きにとまどつた。そして、その一部分を五年前の6415(907)年の項に組み込んだのであろう。少くとも、『過ぎし年月の物語』における6415年及び6420年の両項に書きとられたルンとグレキとの条約文は、以前の年代記的作品には無かつたものだと考えてよいであろう。その様な新

資料を『過ぎし年月の物語』の記者（編集者）がどこから入手したかは知る由もない，然し，では，何故に五年前の6415(907)年に組み入れたのであろうか．此処には伝承の及ぼした面白い作用を認めることができそうである．オレグ<Олег>が馬の頭蓋骨を足にかけたために，その頭蓋骨から出て来た蛇にかまれて死んだという説話が書かれ，然も，その死は，馬のために死ぬであらう<княже! конь, его же любилши и ездилши на нем, от того ти умерети>『公よ，それを愛し，それに乗っている，その(馬)によつて汝は死ぬであらう』——というよう術師の予言が的中した物語が書きとめられている．そして，これが如何にも，叙事詩的説話伝承であつたことを示す如く，『しかしして，彼の在位のすべての年は三十三年であつた』<И бысть всех лет его княжения 33>という言葉で締めくくつている．というのは，三或は三十三という数は，ロシアの伝承作品に名染みの数であつたからである．この数が叙事詩的な数であつて事実を反映したものではないことが，他の年代記から推察される．ノウゴロドオ一年代記，ウスチエグ年代記によれば，オレグの死は6420(912)年ではなくて6430(922)年になつているし，『過ぎし年月の物語』自身も，6360(852)年の項で『オレグのオ一年，すなわちキエフにおいて即位してからイゴリのオ一年まで三十一年』<а от первого лета Олгова, понеже седе в Киеве, до первого лета Игорева лет 31>としている．『過ぎし年月の物語』自体が，その様に三十一年としながら，此処で伝承作品に引つばられて三十三年として，矛盾をおかしながら，そのことをケロリとして知らぬ顔をきめ込んでしまつている．文獻的素材の利用と，伝承作品の利用との組み込みがもたらした断層であると言えよう．その断層のために，実は本来一つのものであつた6415(907)年及び6420(912)年の条約文が，あたかも別物の二つのものであるかの如

くは二年に分けて書き込まれた。いくら、この二年に分割して見ても、6415年から6420年の間には、何等書き込むべき事件を『過ぎし年月の物語』の記者は見出さなかつた。たゞ、6419(911)年の項に『西方にヤリの形をした大きな星が現れた』
《Явился звезда велика на западе, копеейным образом》と天文現象を書きつけられるにすぎなかつた。何の事件も起らないのに、別の条約文が生まれる道理がない。『原初の集』を、よりたしかに反映したノヴゴロド才一年代記はこの点について実に正直であつた。オレグが勝利をおさめて、帰途につく前のくだりを、ノヴゴロド年代記は、次の様にのべている。

И заповеда Олег дань даяти на 100, 200 корабль, по 12 гривне на человек, а в корабле по сороку мужь; сам же взя злато и паволоки, и возложи дань, юже дають и доселе княземь руским.

『しかしオレグは百・二百隻の船に対し、一人につき十二グリヴナづつを貢税として支払うように命じた。ところで(一隻の)船には四十人づつ(のつていたのである)。ところで、自からは、黄金と絹織物を撰つて、しかし、現在までも(彼等が)ルシの公たちに支払つてゐる貢税を課したのである』

このうち、《И заповеда Олег…… мужь》という前半の文章は、船の数を二千隻と変えるだけで、そのまま、『過ぎし年月の物語』の中にもみとめられる。ところが、後半の文章を『過ぎし年月の物語』は書きとめることをせず、たゞちに、条約締結の話に移るのである。そして、6415(907)年の条約文才一条で、再び、この『四十人づつ乗つてゐる船二千隻の一人づつに対して十二グリヴナを支払う』ことと云う内容を取りあげるのである。前文を再び才一条に組み込む不器用さを、再びもう、此處で取りあげるのばやめておこう。それよりも、6415(907)、

6420(912), 6453(945)の各年代の項に書きとめられた条約文を相互に比較してみるがよいであろう。例えば, 6453(945)年の項の条約文の前書きには『過ぎし年月の物語』には次の様に書かれている。

В лето 5453. Присла Роман, и Костянтин, и Стефан слы к Игореву построи мира первого; Игорь же глагола с ними о мире. Посла Игорь муже своя к Роману, Роман же созва боялре и соновники. Приведоша Руския слы, и велеша глаголати, псати обоих речи на харатье, равно другаго сведанья, бывшаго при Романе, и Костянтине, и Стефане, христоролюбивых владык.....
..... послании от Игоря великаго князя Рускаго, и от всякоя княженья, и от всех людей Руския земля. И от тех заповедано обновити ветхий мир, ненавидящаго добра и враждолюбца дьявола разорити от мног лет, и утвердити любовь межю Греки и Русью.....

『6453(945)年・ロマンが, およびコスチャンテンも, およびステファンも, イゴリに古い和平を樹立するために使者を遣わして来た。ところでイゴリは彼等と和平について語つた。イゴリはおのれの家臣たちをロマンのもとへ送り, 一方ロマンは貴族および高官たちを, よびあつめた。(彼等は)ルシの使者たちを連れ来たり, しかして(口上を)述べるように, 双方の言葉を羊皮紙に書くように命じた。(すなわち)キリストを愛する君主たちであるロマン帝およびコスチャンテンおよびステファンの治世にあつたもう一つの条約文の写しである。.....(ルシから派遣された人々の名前の列挙).....ルシの大公イゴリ, および

あらゆる公たち，およびルシの國のあらゆる人々からつかわされたものである。しかして，これらのものたちによつて古い和平を新たにし，多年にわたつて善をにくみ悪を愛する愛魔を破滅させ，しかしてグレキとルシの間の友好を確立することが命ぜられたのである』。

此処にも『もう一つの条約文の写し』〈равно другого свщанья〉という言葉が出て来る。実際，6415(907)，6420(912)，6453(945)の三つの項目に記述されている条約文のそれぞれ三つの資料を『過ぎし年月の物語』の記者(編者)がもつていたのではなからう。上にあげた引用文でも分る通り，6453(945)年の条約は『古い和平』を更新確立することであつた。『古い和平』〈ветхий мир〉とは6415(907)年と6420(912)年の項とに書き取られているものを指し，6453(945)年の項では『定められている如く』〈якоже установлено есть〉という言葉をも二度も繰り返したのである。この『定められている如く』と言われた実際の内容は決して，6420(912)年の条約文にあるものに限られず，6415(907)年の項に出て来る内容をも反映しているのである。とすれば，6415(907)年の項で書き取られた条項は，実際は6420(912)年の項に入れるべきものであつたかも知れない。ともあれ，その二つは実は同一のものなのであり，且つ，6453(945)年の条約文の下書きになつたものなのである。だから，6415(907)年の条約文(の断片)と6420(912)年の条約文(の断片)とは，用語も文体も同一であり，これを下書きにして更新した6453(945)年の条約文は，前二者と用語及び文体を異にしているのである。

ところで，6415(907)年と6420(912)年の両項に分割されながら実は一つのものであつた条約文の中間に，空白な年号だけを入れて，単に6419(911)年の項に天文現象だけを書きとめていゝことは前に述べた。即ち，ヤリの形をした大きな星が西空に現

れたという記事である。これは、ロシアの古い伝承や或は何等かの古い文献によつたのではない、ビザンチンのハマルトルス年代記の続編によつたまでのことであつた。天文学的には、この星は実は912年即ち『過ぎし年月の物語』がしるした年の翌年の七月十九日に近日点を通過したはずである。ちなみに989年にもホウキ星が現れているが、この記事は『過ぎし年月の物語』には全く記録されていない。

さて、条約を結んだオレグが、馬の頭蓋骨から這い出した蛇にかまれて死去したという伝承が書き取られた。然し実は、その直後に、『占からよう術が実現するのは不思議なことである』〈Се же дивно есть, яко от волхвования сбывается чародейством〉という言葉があつて、その例を『過ぎし年月の物語』の記者は相当長々と書き込んでいる。実は、ハマルトルス年代記の逐字訳にすぎない。その古代ロシア語の原文と日本語訳は、既に先に引用しておいた。

6421(913)年の『オレグの後にイゴリが(公として)君臨しはじめた』〈Поча княжити Игорь по Олзе〉という一節につゞく『この時に、レオンの子、ロマンのむこ、コスチセンチンが(皇帝として)君臨しはじめた』。〈В се же время поча царствовать Костянтин, сын Леонтов, зять Романов.〉とあるのは、ハマルトルス年代記の続編からの取材であり、翌、6422(914)年に『この同じ年に、ボルガルのセメオンがツアリグラドに来たり、しかして和平を講じ帰途についた』〈В то же лето приде Семеон Болгарьский на Царьград, и створив мир, иде въсвояси.〉とあるのも、次の年の6423(915)年に『この同じ時代に……』として下に記するよりの記事があるのも、総て、ハマルトルス年代記続編から取られたものである。

В лето 6423.....

В си же времена приде Семеон пленяя Фракию, Греци же послаша по Печенегы, Печенегом же пришедшим и хотящим на Семеона, разсваришася Грецкыя воеводы; видевше Печенези, яко сами на ся рать имуть, отыдоша въсвоиси, а болгаре с Грекы съступишася, и посечени быша Греци. Семеон же прия град Ондьбреянь, иже первое Орестов город нарицашеся, сына Агамемнон, иже первое в трех реках купався, недуга избы, ту сего ради град в свое имя нарече. Поселе же Андрейн Кесарь обновины и, в свое имя нарече Андрейн, мы же зовем Ондреянем градом.

『またこの時代にセメオンがフラキヤをおさえつゝ来たつた。グレキもまたベチエネギを迎えに使者を遣わした。ベチエネギが来たり、セメオンに向つて（進攻）しようとしたとき、グレキの司令官たちが争いを起した。ベチエネギは（彼等が）互に相対立しているのを見ておのが國へ立ち去つた。ところがボルガルはグレキと交戦し、グレキが斬り殺された。ところでセメオンはオニジレヤニという町を取つた。それは、はじめアガムムノンの子オレストの町と呼ばれていた。彼ははじめ三つの川で水浴し、病からまぬがれて、其処に、このために、おのれの名にちなんで町を名づけたのである。後にはアンドレヤン帝がそれを復興して、おのれの名にちなんで、アンドレヤンと呼んだ。我々もオンドレヤニ町と呼んでいるのである。』

ところで、ハマルトルスの年代記の続編から取材したもので、面白いのは6428(920)年の項である。其処には単に『ロマンがグレキにおける皇帝にすえられた。ところでイゴリはベチエネ

ギに対して戦つていた』《В лето 6428. Поставлен Роман царем в Грецах. Игорь же воеваше на Печенеги》とだけしか書かれていない。勿論、この文章の前半はハマルトルスからの取材である。『過ぎし年月の物語』が基礎にしたものよりも一層古い『原初の集』を基礎にしたと思われるノヴゴロドオ一年代記には、同じ6428(920)年の項として次の様に書き取られている。

В лето 6428. Посла князь Игорь на Греки вой Русь ськыдеи 10 тысящ. И приплыша ко Цесарюграду, и многа зла створиша Русь: Суд бо вес пожгоша огнем; а их же имше пленники, овех растинаху, иныя же к земле посекаху, другыя же поставляюще, стрелами стреляху; елико же ратнии творят, изьломаше опаки руце и связающе, гвозды железны посреде глав вбивающе; и многы церкви огневи предаша. В время же то царствующю во граде Роману, и абие посла Роман цесарь патрикия Феофана с вой на Русь, и огненным строем пожже корабля рускыя. И възвратиса Русь в своя. Том же лете препочиша и другое, на третее идоша.

これは、実に、『過ぎし年月の物語』が、それよりも二十一年後の6449(941)年の項に書き取つているイゴリのギリシア遠征の物語ではないか。(既にその日本語訳も原文も先に引用したのでノヴゴロドオ一年代記のこの部分の日本語訳も省略しておこう)。ロマン帝の名前だけが、『過ぎし年月の物語』にもノヴゴロドオ一年代記にも共に同年の項に出て来る唯一の共通点である。ノヴゴロドオ一年代記が設定した年号とイゴリのギリシア遠征の

物語とは、現存する古い文献の何れに一致するであろう。ベテルブルグ（レニングラード）公共図書館にあるシノダリ本 №210 及び №211 の《Палея》『古代ロシア史物語』と一致するのである。おそらく、Палея が、『原初の集』をおのれの中に吸収して反映させているのであろう。『過ぎし年月の物語』の記者はそれには準拠しなかつたかも知れない。ハマルトルス年代記の続編では、ルンの攻撃の年を 6428 ではきくて、6449 年だとしている。と言え、年号設定に関して、ノヴゴロドオ一年代記は『原初の集』を基礎にしつゝ、ハマルトルスの続編を無視し、『過ぎし年月の物語』の記者は『原初の集』に寄らずに、ハマルトルスの続編だけによつたということになる。『過ぎし年月の物語』がハマルトルスの年代記、或はその続編から取材し或は抜き書きにしたものは実に多い。例えば、6437 (929) 年、6442 (934) 年の両項の全文はそれである。

ところが、『過ぎし年月の物語』の記者（編者）は、ハマルトルスのものだけに準拠したのではない。ハマルトルスに他の二、三のものを組み合わせて物語を構成している所も見受けられるのである。例えば 6449 (941) 年の項は、最終の一行ほどを除いてその全部が三種類のよりどころから構成されている。オ一のよりどころは、勿論、古いロシアの伝承であつた。文献的には何をよりどころにしたのであろう。それよりも先に、再び、その文章を下に引用してみよう。

В лето 6449. Иде Игорьъ на Греки; яко послаша болгаре вестъ ко царю, яко идуть Русь на Царьградъ скедий 10 тысящъ. Иже поидоша и приплуша, и почаша воевати Вифанския страны, и воеваху по Понту до Ираклия и до Фарлогоньски земли, и всю страну никомидийскую попленивше, и Суд весь пожьгоша. Их же емше, овех растинаху

、 другия аки странъ поставляюще и стреляху
в ня, изимахуть, опаки руке съсызываютъ, гво-
зди железны посреди главы въбивахуть их; много
же святыхъ церквий огневи предаша, монастыре и
села пожьгоша, и именья не мало обокъ страну
взяша. Потомъ же пришедшемъ всемъ отъ вѣстока,
Памфиръ деместикъ с 40-ми тысящъ, Фока же патре-
кий с Макидоны, Федоръ же стратилатъ с Фраки, с
ними же и сановники боярѣстии обидоша Русь
около. Съвещаша Русь, изидоша въружившеся на
Греки, и брани межю ими бывши зѣли, одва одо-
леша Гръци; Русь же възратишася к дружинѣ своей
к вечеру, на ночь влезоша в лодью и отбегоша.
Феофанъ же устрете я в лядехъ со огнемъ, и пуша-
ти нача трубами огнь на лодьѣ Руския, и бысть
видети страшно чудо. Русь же видящи пламянь,
вметахуся в воду морьскую, хотяще убрести, и
такъ прочии възратишася въсвои. Темже при-
шедшимъ в землю свою, и поведаху кождо своимъ о
бывшемъ и о ляднемъ огни: "якоже молонья", рече
"иже на небесехъ, Гръци имуть у себе, и сию пу-
щающа жежаху нас; сего ради не одолехомъ имъ".

↑ 6449 (941) 年 . イゴリがグレキに向つて進攻した . ボル
ガルの皇帝に報告を送つたところによれば , 一万隻のルシがツア
リグラドに向つて進攻しつゝあるといふ . それらは出発し航し来
たり , ギイフアニアの國々を荒しはじめた . しかしてポントに沿
つてイラクリイまで , およびフアフロゴニアの地までを荒し , し
かしてニコミツアの國全土をおさえ , しかしてスド全部を焼いた .
彼等をつかまえ , あるものたちをはりつけにしたり , 他のものを

ちを的のように立たせて、彼等に矢を射かけたり、引きだして、うしろ手にしぼり、鉄の釘を彼らの頭の中央にうちこんだりした。また多くの聖なる教会に火をかけ、修道院や村々を焼き、(スド)の両側の少からざる財産をうばつた。そののち、東から軍勢が来たつたとき、デメスチクのバムフィルが四万人をひきいて、また、パトレキーのフオカがマキドニア(人)をひきいて、また、ストラチラトのフエドルがフラキア人をひきい、また彼等と共に貴族の高官たちもルンをとり囲んだ。ルンは相談して、グレキに対して武装して出撃し、しかして彼らの間には、はげしい戦いがあり、かろうじてグレキが勝つた。一方ルンは夕方近くおのれの親兵団のもとにもどり、夜中に船にのり込んで逃げ去つた。またフエオフアンは火をそなえた船に乗つて彼らをむかえた。しかして筒で火をルンの船にはなちはじめた。しかしておそろしい奇蹟がみられた。ところで、ルンは炎をみて逃げようとして海の水の中へとび込んだ。かくして他のものたちはおのれの国へ帰つた。これらのものたちがおのれの国へ到着したとき、各々自分の(身内)に、ありしこと及び船の火について、物語つたものであつた。(彼等が)言うには「空にあるいなづまのようなものを、グレキはおのれのもとにもつており、しかして、これを放つて我々を焼いたものであつた。このために(我々は)彼等に勝てなかつたのである」と。」

此処には、伝承による素材以外に、ハマルトルスの年代記の続編と、ギリシアの聖者『新しきヴァシリイ』(Василий Новый)の一代記の物語が素材として組み込まれている。伝承からは勿論イゴリというロシアの英雄の名前が取つて來られた。ヴァシリイの一代記にはロシア人の来歴の話が相当詳しく物語られている。この聖者伝(Житие Василия Нового)は少くとも十一世紀前半以前にはルンの言葉に訳されていた。さて、『過ぎし年月の物語』の文章とこの聖者伝の古い訳の文章との相似している個所

は、数多く指摘し得るであろう。例えば、リハチキフは一九五〇年版『過ぎし年月の物語』の註において、そのことにふれている。(p. 285 ~ p. 286)。ヴァシリイ一代記の古代ロシア語訳における対応部分を次に引用して見よう。下線の部分は『過ぎし年月の物語』内の言葉と見事に対応する個所である。

Отътоле же прииде вестъ цареви от тех, яко уже
идуть. По неколицех же днехъ прииде вестъ о сих
и от болгар, ино по мнзехъ възвести и корсун-
ский стратиг уже темъ явившемся и ту ся им
приближившем. И потомъ приидоша в Стегеру и по-
том устретшемъ имъ воелодииныя цареви, по гла-
голу чловека божиа, отгнани быша к рече Риве,
и ту в тихости им ставшемъ выходяше пленоваху,
простершемся до Понта Иераклиа и до Пеллагонь-
ския земля и в всю страну Никомидийскую попле-
нивше и многи язвы сътворивше, пожгоша все
Стегерско, яко же рече предваривъ угодникъ божий,
монастыря же и села вельможь все огневи предаша,
именна не мало обою страну съвокупиша. Потомъ
же пришедшемъ воем на них от востока, Панфир
доместикъ воинский с четырьми десятми тысящми,
Фока патрикей с македоныя, Феодор же святаейший
стратиг с фракисианы, с ними же и сановницы
болястии иже по прирочному Слогарис, и обыдоша
их окрест и не дааху им к тому възходяще плен-
овати. И обдержаше ихъ страхъ и съвешавааху
отай побегнути, но бояхуся вой морскихъ, ношную
стражу около ихъ имуще. Дръзнувше же Русь изидо-
ша на греки въоружившеса, и брани межю ими бы-

вни, побежени бывша Русь и биша их греци бежа-
ших дондеже убо възвратиса до дружины своея.
И вечеру достигшю, отай влезше в ладия своа
отбегоша. Воя же царевы стоаща в Стегеру и стра-
жем уведавшем бежание их, дондеже всем уведа-
вшем воемь, боле ихъ отидоша. Обаче убо достиг-
оша и постигоша их и последнихъ и съвокупившемся
олядем огнь имущем достигающе ихъ пожигааху. И
бысть видети страшное чудо, како боящися пламене
огненаго, волею метааху себе в пучину морску,
изволивше паче утонуть в водах или попалену быти
огнем, но обыче обои погибоша: ови пожжени
быша огнем, а друзии сами ся ввергоша в глу-
бину морскую, мняще бродию избежати, друзии
от нихъ копий прободени быша от грек; ови в
пучине утопоша, в друзии от них живи яти быша.
И тако скончася от нихъ. Болестию же чревною
убежавших Руси мановением господним падоша, до-
ндеже доидуть в своаси. Мнози же от нихъ на
пути изомроша. Тем же пришедшим в землю свою,
поведахуть кождо своим о бывшем и о оляднемь
огни: "яко мольния, рече, иже на небесех, греци
имуть у себе, сию попушающе жкахуть нас, и сего
ради не одолехомь им".

この古代ロシア語への訳文を日本語に直してしまえば、『過ぎし年月の物語』と余りにも似てしまふであらう。

『ところでその後、それらの者たちから、既に(ルシたち)が来りつゝあるとの知らせが皇帝のもとにとどいた。ところで数日の後に、これらの者たちについての知らせがボルガルからも来た。

また、多くの日々した後、コルスニの軍司令も、既に彼等が出現し、
其処に近づいたことを宣言した。しかしてその後、(ルンたちは)
ステエゲラに到着し、しかして、その後、皇帝の船軍を彼等が迎
えたとき、神の子の言葉によつて、リヴァ河へ追われた。しかして
其処で平静にとどまつていたときに、(彼等は)出撃しては(人
々を)捕えたのであつた。イエラクリイの湾にまで、ペフラゴニ
の地にまでも、来たり、ニコミジイの全国を捕え、多く悪をなし、
ステエゲルの沿岸をこどごとく焼いた。神の下僕が予言して言つ
た通りであつた。修道院を、そしてまた貴族の村々を総て火にか
け、両側の財産を少なからず集めた。その後、東方から彼等に対
して軍勢が来たつたとき——ドメスチクの將軍パンフィールが
四万の軍勢をひきい、パトリキヤのフオカがマケドニヤ人たちを
ひきい、至尊なる軍司令フヨードルがフラキヤ人たちをひきい、
また、彼等と共に貴族の高官たちも共に(来たつたとき)——
彼等を取りかこみ、それ以上、彼等が勝手に捕え廻ることを許さ
なかつた。しかして、彼等は恐怖にとりつかれ、ひそかに逃げる
相談をした。然し、海軍をおそれ、夜の警備を彼等のまわりにつ
けていた。ところで、ルンたちは武装してグレキに対して出撃し、
しかして、彼等の間には戦いが起り、ルンは打ち負かされ、しか
して、逃げる彼等をグレキは打ち、おのれの親兵団まで(彼等が)
もどるまで(追つた)。しかして、夕方が近づく頃、ひそかに(
彼等は)おのれの舟に乗り込み、逃げ去つた。ところで皇帝の軍
勢はステエゲラにとどまり、彼等の逃亡を見張りが知り、総ての
軍勢が知つてから、彼等よりも多敷で出撃した。さて再び(グレ
キたちは)追いつき、彼等の後部の者たちをとらえ、火を備えて
いる船が集まり、彼等を捕提して焼いた。火の炎をおそれて、勝
手に海の深みに飛び込むのを見るのはすさまじい光景であつた。
水の中に沈み、或は火に焼かれるのをまぬがれたものたちも、然

し多くは共に渡んだ。というのはある者たちは火にやかれ、また他の者たちは歩いてにげようとしておのれ自から海の深みに身を投げ、また彼等のうちの他の者たちはグレキのために禱で突き殺された。あるものは深みでおぼれ死に、また彼等のうちの他のものは生きたまゝ捕えられた。かくして、彼等のものたちは死んだ。腹の病気で逃げたルシのものたちは、おのれの家にたどりつくまでに主の指図によつて倒れた。彼等のうちの多くのものたちは途中で死んだ。ところで彼等がおのれの国へたどりついたとき、それぞれのおのれの（親族たち）に、あつたことに就て、船の火のことについて、物語るつて言つた。「空にある稲妻のようなものをグレキたちがおのれのもとに持つており、これを放つて我々を焼いた。しかして、このために、彼等に勝てなかつた」と』

この新ヴァシリイ一代記の内容が年代記に移され、『過ぎし年月の物語』という形で定着した時には、その表現が多少ロシア奥く味方びいきになつたことは勿論である。例えば上に引用した文章の内て <и брани между ими бывши, побежени быша Русь и биша их грецы бежаших> 『しかして、彼等の間には戦いがあり、ルシは打ちまかされ、しかして、グレキは逃げる彼等を打つた』という表現は、『過ぎし年月の物語』では <и брани между ими бывши зде, одва одолеша греци> 『しかして彼等の間には激しい戦いがあり、グレキはやつと勝つた』となつている。然し、実は、上に引用した新ヴァシリイ一代記の最後の部分——即ち、家郷に帰りつたものたちが、ありしことや船の火の話を仲間に語つたという一節——は、古代ロシア語訳本にあるだけで、ビザンチンの原典にはない。おそらくは、訳者が書き加えたものであるうという。（リハチヨフ）。とすれば、その部分と、年代記にみられる『過ぎし年月の物語』のそれに当る部分とは、共に同一の源（おそらくはロシアに伝わつていた伝承）からの書き取りであつたと言ひ得る

であろう。ともあれ、上に引用した新ヴァシリー一代記の古代ロシア語の訳文が、『過ぎし年月の物語』の一つの下敷になつていたことは、次の6452(944)年の項からも実証し得るであろう。『過ぎし年月の物語』の記者(編者)は上に引用した一代記の訳文を、二つに分散するかの様に此処でも利用したと思われる。例えば、ゴルスニハがビザンチンの皇帝ロマンに、ルシが攻め来たることを通報する物語や、同じように、『海の深み』《плубина морская》などという言葉が此処にも盛んにみられるからである。一つの条約文を二つに分けたために、その間に、6452(944)年の項として、負け戦の報復戦をイゴリが実行した如くに、此処へ話を創り込んだものなのであろう。おそらくは実際には無かつたこの報復戦の物語は、だから、案外、年代記者の創作であつたかも知れない。むしろ、それよりも、負け戦だけでは納得しなかつたロシアの人々によつて朝られた。報復戦の伝承を年代記者が書きとめたのであろう。たゞその際に、用語の主要な部分を、再び、前記の一代記の訳本に求めたものかも知れない。

次にオリガ女帝の物語に移ろう。(各年代記のオリガ女帝に関する記事は総て『古代ロシア研究』才五号に集録した)。イゴリは即ちオリガの夫であつた。彼女が夫のためにあだうちを行ふ三つの物語は明らかに伝承から取材したものであるが、『過ぎし年月の物語』が、その直後に書き込んだツアリグラード(ビザンチン)行きは、少くとも、その年代(6463年——955年)は、文献を参考にして考えたものであつた。『過ぎし年月の物語』よりも古く、原初の集よりもなお古かつたと思われる最古のロシア年代記(——何処にも既に現存しない——)——が反映した作品であると考えられるヴラジーミル公の『記念と賞讃』《Память и похвала》によれば、オリガの死は6477(969)年である。そして、これをキリスト教洗礼後十五年であつたとしているから6462(954)年に彼女は洗礼を受けたことになる。またコンスタ

ンチンの帝国統治論によれば、オリガのビザンチン訪問は6475
(957)年であつた。後代のロシアの諸年代記は、これによつてオ
リガのツアリグラード行きを6475(957)年として、『過ぎし年
月の物語』におけるように6463(955)年とはしていない。とす
ると、少くとも『過ぎし年月の物語』の記者は帝国統治論には準
拠しなかつたと考えられる。むしろ、今はなき最古のロシア年代
記に拠つて、年の更めを古い九月から十月に移して、その結果、
これよりも一年さげて翌年の6463(955)年に決定したのである
り。たゞし、この年号の中に書かれた『過ぎし年月の物語』の記
事は、ほとんど伝承であつたであらう。ところが、このオリガが
6477(969)年に死去し、埋葬されたことを『過ぎし年月の物語』
が書きつけた直後、彼女の功績と榮譽をたゞえる文章が書き加え
られている。ところが、この年代よりも46年後の6525(1015)
年の冒頭にヴオロジメル公の死を記し続いて、彼を讚美した文章
があるが、この兩者を比較して見ると面白い相似性を発見するで
あらう。文体的にも内容的にもこれほど一致する文章は『過ぎし
年月の物語』の中には、ほとんど見当らない。共に、おそらくは
同一者、或は型通りの同系者による後代の追悼文の一節であつた
にちがいない。後代の追悼文であつたために、この兩者には盛ん
に聖書(セプタギンタ)からの引用が盛り込まれているし(——
オリガの追悼文に就ては『古代ロシア研究』第五号p.49~p.53
に既に訳註をつけ、セプタギンタの原典ギリシア語の部分をも示
した。ヴオロジメルのものに就ては、同じく第七号に示される)
その上に、内容及び文体の相似性に就ては、先づ、その冒頭の部
分から、それを指摘し得るであらう。例えば、オリガの方には『
この(司祭)が至幸なるオリガを埋葬したのである。この(オリ
ガ)は太陽の前の朝映えのごとく、また夜明け前の空やけの如く
キリスト教の国の先駆者であつた』<сей похорони блаже
ную Ольгу. Си бысть предътекущия крестьянь—

стей земли, акы деньница предъ солнцемъ и акы зоря предъ свѣтомъ》とあるのに対して、ヴオロジメルの方には『(人々は)彼、至幸なる公を泣きながら埋葬した。これは偉大なるローマの新しいコステヤンチンである』《схраниша тело его с плачемъ, блаженаго князя, Се есть новый Костянтин великого Рима》とある。また、オリガの方には『この(オリガ)をルシの子らは、先達者としてたゞえているのである………ところで見よ、すべての人々は、永年にわたり肉体の中にある(もの)を見て、たゞえているのである』《сію бо хвалять русіе сынове, акы началницю:………Се бо вси чловѣци прославляютъ, видяще лежащая въ тѣлѣ на многа лѣта》とあるのに対して、ヴオロジメルの方には、《Сего бо въ память держать Русьстни людьє, поминающе святое крещенье, и прославляютъ》『ところで、この(者)の記憶をルシの人々とよめ、聖なる洗礼を思いつゝ、しかしたゞえているのである』とある。オリガをエレナにたとえ、ヴオロジメルをコステヤンチンにたとえたのも同一手法である。ヴオロジメルがオリガのあとをかえりみて、自からも洗礼を受け、ロシアをも洗礼した物語には、明らかに、オリガの先駆的役割が手本として言挙げられていた。そこから考えて見ると、この二つの追悼文は、案外、前後一つとぎのものなのであつたかも知れない。いつの時にか、先王たちを祭る折に一連の長い追悼文が読まれ、その文献的な文書の断片を、年代記者が『過ぎし年月の物語』の969年の項と1015年の項とに分けて書き込んだものとも考えられる。

『過ぎし年月の物語』が伝承にしろ文献にしろ、多数の源から汲み取られて来た作品集であつて、均一な一貫した著作ではないことから、その一項目一項目が、それぞれ他の項目の文献的参考

資料に限り得る可能性もあるのである。その意味では6485(977)年の頃の物語は面白い。おそらくは、非常にドラマチックな伝承的物語を題材にしたものであろうが、其処には、兄弟殺しの次の様な物語が読まれるのである。

В лето 6485. Поиде Ярополк на Ольга, брата своего, на деревьску землю, и изиде противу его Олег, и вполчитася; ратившемася цолкома, победи Ярополк Ольга. Побегъшу же Ольгу с вои своими в град, рекомый Вручий, бяше гроблю мост ко вратом градным, теснячеся друг друга пихаху в гроблю; и спехнува Ольга с мосту в дебрь, падаху людье мнози, и удавина кони чловеци. И въшед Ярополк в град Ольгов, перея власть его и посла искати брата своего; искавше его не обретоша, и рече един Деревлянин: "аз видех, яко вчера спехнуша с мосту". И посла Ярополк искат брата, и влачиша трупье-из гробли от утра и до полудне, и налезоша и Ольга vysподи трупья, внесоша и, и положиша и на ковре. И приде Ярополк, над нем плакася, и рече Свеналду: "вижь сего ты, еже еси хотел". И погребоша Ольга на месте у города Вручего, и есть могила его и до сего дне у Вручего.

『ヤロ波尔クがおのれの弟オレグに向つてジエレヴァの國へ進攻した。しかして、彼に向つてオレグが出撃した。しかして、互いに対峙した。両軍が戦つた時、ヤロ波尔クがオレグを負かした。オレグがおのれの軍勢と共にウルチイといわれる町の中へ逃げたとき、堀にかゝつてゐる町の門への橋がぶつたが、(彼らは)ひ

しめき合つてお互いに堀の中へ突き落とし合つた。しかして（人々は）オレグを橋から堀へ押し落した。多くの人々が落ちた。しかして馬が人を圧しつぶした。しかして、ヤロボルクはオレグの町へはいり、彼の権力をうばい、おのれの弟を探すために人をつかわした。彼をさがしたが（人々は）見出せなかつた。しかして一人のジエレヴァ人が言つた。「我は昨日（人々が）橋から（彼を）突き落とすのを見た」と。しかしてヤロボルクは弟を探すために人をつかわした。しかして、（人々は）朝から昼まで堀の中から死体を引き出した。しかして、オレグも死体の下から見つけ出し、彼を（町へ）運びこみ、しかして、彼をじゆうたんの上においた。しかして、ヤロボルクが来たり、彼に涙し、スヴエナルドに言つた。「汝、これを見よ。これこそ、汝が欲していたことである」と。しかして（人々は）オレグをウルチイの町のそばの場所に埋めた。しかして、彼の墓は今日に至るまでもウルチイのそばにある。（『古代ロシア研究』才六号、p.3～p.6参照）

面白いというのは、最後の『彼の墓は今日に至るまでもウルチイのそばにある』という結びの言葉である。『過ぎし年月の物語』の記者が、いつの時代にこの文章を書き込んだものであるかという答えは、実は簡単には出てこないであろう。というのは、『過ぎし年月の物語』が、この項より六十七年後の項に話を進めるとき、既に其処には、実は、もう墓は無くなつていた筈だからである。即ち、6552(1044)年の項には、《Выгребоша 2 князя Ярополка и Ольга, сына Святославля, и крестиша кости ею, и положиша я в церкви святых Богородица》『二人の公、ヤロボルク、及びスヴイヤトスラフの息子オレグを（人々は）掘り起し、彼等（二人）の骨を洗礼し、しかして、人々はそれを聖母教会の中においた』と書かれている。この遺体発掘・洗礼の項がいつの時代に書かれたものかはともかくとして、墓が今日まで町のはずれにあるとする 6485(

977)年の項は、少くとも1044年より以前に書かれたものであり、1044年の項は、それよりも後に書かれたものである。単一に見え、或は単一に見せようとした『過ぎし年月の物語』は、この様に、わずか六十七年間の記事を書きつづける間に、前後の矛盾をおかしてしまつている。洗礼以前の異教的な墓は、発掘・洗礼・移転の後には存続を許されなかつたはずである。少くとも、だから、977年の項と1044年の項とは、書かれた時代が完全にちがう。同一人物が編集したとしたら、全く無神経な編集であつたと言わなければなるまい。もし、そうでなかつたとしたら、前者977年の項は、余りに不要心を伝承採取であつたと言えるかも知れない。

これとは反対に、古い年号のところに書かれている一節を、ほとんどそのまま下敷にして、後続の物語の一節を創りあげる場合があつた。この場合には前者が後者の出典的文獻をなすものであると考へてよい。例えば、6491(983)年の項で、ヴオロジメルがいまだ洗礼を受けない時、異教の神への犠牲として二人のヴァリヤグの青年を捕えようとし、キリスト教徒であつた二人の青年はそのために殉教したのであつた。この物語の結びの一節に、キリスト教の入り来まつていることを知らなかつた悪魔が、ひそかにそれを喜んでゐたという文章があつた。そして、この文章は、6496(988)年にヴオロジメルが全国を洗礼する物語の折にも瓜二つの形で出現しているのである。

即ち、6491(983)年の項には

«сле же мняшеся оканьный: яко сле ми есть жилище сле бо не суть апостоли учили»

6496(988)年の項には

«сле бо мнях жилище имети, яко сле не суть ученья апостольска,»

とある。即ち、共に、いまだこの地には使徒の教えが流入してい

ないので悪魔は此処が自分の住み家であると考えていたという意味である。

また、6491(983)年の項には

«не суть то бози, но древо...-гръци и кланяются, иже створил небо и землю, звезды и луну, и солнце, и человека...»

とあり、6496(988)年の項には

«клянемся богу, иже створил небо и землю, звезды, месяц и всяко дыханье, а бози ваши древо. суть»

とある。共に、異教の神はその像が立っている、それは像の素材の木に過ぎない。キリスト教の神は、天と地と月と人間(生命)を創り給うたものであるという意味である。

此処は、単に五年間の期間内での記述であるために、矛盾を言及することもなく、むしろ、反対に、前の文章を、そのまま少しもじつただけで五年後の記述にも利用したのであろう。案外、一人の人物が何かに書いたキリスト教流入の物語の一部分が年代記者の手によつて『過ぎし年月の物語』へ抜き取られて来たのかも知れない。そしてそれは、おそらく、6491(983)年の項の物語を形成したものであろう。年代記者は再びその文章の一節を利用して6496(988)年の項の一節を書き足したものだと思像される。

さて、ロシアの文化史上にあつて、キリスト教の輸入は畫期的な事件であつた。あらゆる年代記は、このキリスト教の輸入とロシアの洗礼を総てヴラジーミル公(現代語 Владимир; 古代語 Влодимѣр)に結びつけて記録している。然し、実際は一人の英ましい君主だけによつて一挙に行われたはずのものではない。『過ぎし年月の物語』が、それをどれだけ強辯しようとしても、やはり事実には勝てないで馬脚を出さざるを得なかつた。『古代ロシア研究』オ六号及びオ七号には、ヴラジーミル

公に関する総ての年代記の記事を古代ロシア語原文のまま集録したが、此処では、イパーチー、ラヴレンチー、トロイツキー各年代記のみによる『過ぎし年月の物語』の問題点を二三とりあげてみよう。

先づ、ヴラジーミル公がスラヴ原始宗教を脱して、新しい宗教をそのおきてと共に摂取しようとするのを聞き伝えて、各地から各宗教・各宗派の伝道者たちが、おのれの宗教を伝えようとして、彼のもとにやつて来る物語が書きとめられている。中でも、6494(986)年の項には、マホメット教を信ずるボルガル、ローマの宗教を信ずるネムツイ(ドイツ)人に続いて、コザルのジド(ユダヤ)人が伝導に来る話が書き取られている。繰返して言うが6494(986)年の出来事として書かれている記事である。さて、このジド(ユダヤ)人に対してヴラジーミル公が尋ねる個所から、『過ぎし年月の物語』の記事を引用しよう。

И рече Володимер" что есть закон вашь?" Они же реша: "обрезатися, свинины не ясти, ни заячины, субботу хранить". Он же рече: "то где есть земля ваша? Они же реша: "в Ерусалиме". Он же рече: "то тамо ли есть?" Они же реша: "разгневался Бог на отци наши, и расточи ны по странам грех ради наших, и предана бысть земля наша Хрестеянном".

『しかして、ウオロジメルは言つた。『汝らのおきてはどのよ
うなものであるか』と。ところで彼らは言つた。『割洗をし、豚
肉も、うさぎの肉も食はず、安息日を守ることである』と。と
ころで彼は言つた。『それでは汝らの国はどこにあるのか』と。そ
こで彼等は言つた。『エルサリムに』と。そこで彼は言つた。
『それでは、そこに(今も)あるのか』と。そこで彼らは言つた。

「神が我々の父たちに対して怒り給ひ、しかして我々の罪のゆえに我々を國々に散らし給うた。しかして我々の國はキリスト教徒たちにゆだねられた」と』（『古代ロシア研究』才六号 p.42～p.43 参照）。

キリスト教徒がエルサレムを占めたのは、この記事によれば、6494(986)年以前ということになる。986年に、ユダヤの伝導師がそう語つたのだと『過ぎし年月の物語』が記録しているからである。然し、実際は、エルサレムがキリスト教徒によつて占められたのは最初 1099 年から 1187 年の期間であつた。『過ぎし年月の物語』は少くとも十三年以上のサバを読んで、986 年の項に既に過去形でこの事実があつたように書きこんでいる。矛盾もはなはだしいと言うべきである。キリスト教徒がエルサレムを初めて占めた 1099 年以前に、『我々の國はキリスト教徒にゆだねられた』〈предана бысть земля наша Хрестеяном〉など、言う言葉が生まれる（——或は古代ロシア語によつて表現される——）はずはない。少くとも、この一節は、1099 年以後にヴラジーミル公の記事を豊かにするために強引に組み込まれたものにならぬ。

ヴラジーミル公のもとに最後に来たり、詳しくギリシア正教の教義を説く哲学者〈Философ〉の言葉は、そもそもの世界創造から始まるが、おそらく、これは、嘗つて独立した大きな教義作品であつたであろう。勿論、その言葉は旧約聖書に多くの出典を求めることができるが、それだけを爽施して事が終つたとして見たところで、実は何の役にも立たないであろう。『過ぎし年月の物語』におけるこの哲学者の言葉は、決して年代記者が直接バイブルから引用しながら構成して書きつけたものではないからである。直接の出典は決してバイブルではなくて他にあつたと思われるからである。出典と言つて悪ければ、『過ぎし年月の物語』の中にまとめ上げるに際して、その記者が用いた参考文献の如きも

のは、直接にバイブルであつたというよりも他の『ロシアの』
書物であつた。旧約聖書にもとづく古代ロシアの歴史物語は、既
にその頃、僧を中心とする読書人に多く読まれ引用されていた。
或は年代記の記述を利用しつつ、このバイブル的ロシア歴史物語
は成長しつつけていた。バイブル的ロシア歴史物語を一般にパレ
ヤ《Палея》と言ひが、《Толковая Палея》にも、《Кра
ткая Палея》にも、『過ぎし年月の物語』の『哲学者の言葉』
と対応する平行的文章は実に数多く指摘することができる。
《Палея》自身も、年代記的作品を利用しつつ成長していたもの
だとすれば、大きく成長した《Толковая Палея》よりも、骨
組み的であつた《Краткая Палея》の方が一層古い基盤層を
なしていたものであろう。そして、この古い基盤層であつた《
Краткая Палея》の一節と、『過ぎし年月の物語』の哲学者
の言葉ともよく対応するのである。或は、だから、《Краткая
Палея》と『過ぎし年月の物語』とが、共に、利用した一層古い
出典素材があつたのかも知れない。然し、その最も古い出典素材
がバイブルであつたと考えるのは余りにも早計である。バイブル
よりも、むしろ、アポクリフ及びハマルトルスの年代記に近く準
拠していたことは、その内容によつて明らかである。だから、出
典は非常に雑多な（—— 異端的物語をも含めて ——）民間の
宗教的物語をも含めて考えて置く必要があるであらう。世界創
造から始まる哲学者の言葉は、バイブルに無い、バイブルに矛盾
する、或は、バイブルにとつては余計な言葉を数多く組み込んで
いるのである。

だから、哲学者の言葉として、長々と『過ぎし年月の物語』に
書きとめられた文章は、そのうちのどれがバイブルの文章と対応
するかという問題からではなくて、バイブルとの対応から見た時
に余計なものとして、はみ出す部分からこそ、カラクリを解く鍵
は求められるべきである。バイブルから、はみ出す言葉の点検を

そ重要である。特に、既に久しく圧殺されてしまつたロシアの古いアポクリフや、異端的物語や民間の宗教的説話などは、今、再び、再構成し難いものだとしたら、——そして、聖書が利用されたとしても、その聖書が今では、これまたその総てを復元し得ないセプタギンタの古代語訳であつた以上、今更、現在各宗派のもつ現代語バイブルを、はかない手がかりにして、出典を其処に求めて見るよりも、其処に求められない個所こそ、一層大切にされなければなるまいし、むしろ、そういう個所にこそ多くの『古代ロシア』を解く鍵は伏在しているはずだからである。

天地創造の四日目に、神は太陽、月、星を創り、『しかして神は天を飾り給うた』〈и украси бог небо〉と書かれているが、この一節は、聖書には求められない。また、『しかしてアダムは樂園にあつて、天使たちがたゞえていた時には神を見、しかして(神を)たたえていた』〈И бѣ Адамъ въ раи, видяше Бога и славяше, егда ангели славяху〉、『しかしてソトナは大地の呪われたことを喜んだ』〈и порадовася Сотона о проклятьи земли〉、『(カインは)彼をいかに殺すべきかを知らなかつた。しかしてソトナは彼に言つた。『石をとつて彼を打て』と』〈и не умяше, како убити и; и рече ему Сотона: «возми камень и удари и.»〉などという一節もバイブルには見当たらない。これらは、一般にアポクリフと言われているものよりも、もつと庶民化した物語を利用したものであつたと思われる。或は、非常に物語性を豊かにした庶民向け伝導説教の手法からの借用であつたかも知れない。ロシアに持込まれ、読み物となり、庶民向け伝導説教の道具にもなつて、アポクリフは、その周囲に多くの半ば著作的な物語の枝葉を出して行つた。比較的ビザンチン直輸入のアポクリフに近い形で、『哲学者の言葉』(『古代ロシア研究』才六号; p. 49~p. 94 参照)に組み込まれたものが、アダムとエブ

カが、カインによつて殺されたアヴエリを嘆く物語に続いて、このアヴエリの死体が腐らなかつたと語られ、埋葬の仕方を知らなかつた折に、二羽の鳥が飛び来たつて、その内の一羽が死に、他の一羽が穴を掘り、埋葬の仕方をそれとなく人に教えたという物語がある。このような二羽の鳥によるアダムとエヴガへの埋葬手法教授の物語は、明らかに本来的なアポクリフからの借用であつた。

ところがノアの洪水の物語に及んで、神に建造を命ぜられた箱舟の大きさを、『過ぎし年月の物語』は、長さ300ローコチ、巾50、しかして高さ30ローコチとしている。そして、その註釈のように、『というのは、サージエンがローコチと呼ばれているからである』〈ибо локтемь сажень зовуть〉と述べている。ラヴレンチー年代記以外のイパーチー、トロイツキー、フレブニツキ等の年代記では、そのように『呼んでいる』のはエジプトであるという言葉がつけ加えられている。これは、明らかに、ハマルトルス年代記のエジプトの尺度を解説した箇所を利用したものである。ハマルトルス年代記が利用し始められると、『哲学者の言葉』の中でも、その利用はとめどなく拡がって行くのである。例えば、物語がバベルの塔の建設に及ぶ時にも、その時の長老はネヴロドであつた——『しかして長老のネヴロドがいた』〈и бы старейшина Невродъ〉——と述べられるが、バイブルにはそんな人名などない。バビロンにおける塔の建設などではなくて、バビロンという町の建設者として、また、天文学の創始者として、このネヴロドの伝説的な名前を持ち出しているのは、バイブルなどではなくて、これまたハマルトルスの年代記なのである。

また、塔の建設をくづした神によつて、本来一つであつた人間の言葉が七十二に分けられたという聖書の物語がつどくが、その後『そこでアダムの言葉はアヴエルからは奪われなかつた。と

いうのは、そのもののみが彼らの愚かしさに加わずに……』

《Адамовъ же бысть языкъ не отять у Авера;
ты бо единъ не приложися къ безумью их……》

とある。ところが、この一節に相当する部分は、聖書にはない。同じくハマルトルスの年代記によつたものである。

ところが、モーゼのくだりに話に移ると、今度は別のものが大いに活用された。例えば、モーゼの幼少の時の物語がそれである。ファラオンの娘に育てられた四才のモーゼが、王にすがりつき、王冠を落すところである。ファラオンの御用学者——魔法使い

《ВОЛЬХВЪ》が、この不吉な王冠脱離を見て、エジプトがこの者に滅されると予言し、モーゼを殺せと進言する。バイブルにはこのくだりは見当らない。勿論、ハマルトルスにもない。アポクリフにおけるモーゼ一代記の古代ロシア語訳にこの部分がある。即ち、其処には、次の様な物語がみとめられるのである。

三才のモーゼはファラオンに近づいて、その頭から王冠を取り、自分の頭にのせた。これを見ていた神官が後ほど、モーゼを殺すように進言したが、神はその時天使アルハンゲルのガヴリーラを遣わし、ガヴリーラは一人の貴族の形象をもつて王に近づき、宝石と燃える炭を以てモーゼの知恵を試せと説得する。もしも、モーゼが宝石を取るなら、彼は知恵あるものとして、王は危険視する必要があるが、もしもモーゼが燃えている炭の方にひかれるのなら、生かしておいても別条ないであろうというのである。そして、ガヴリーラはモーゼを炭の方に進ませ、モーゼはそのため燃えている炭を取つて口に入れ、舌をやいたが、実は、そのため、おのれの生命を全うすることができたというのである。

このアポクリフのモーゼ一代記は、つゞいて、成人したモーゼが、エヴレイ人をばづかしめているエジプト人を殺し、逃亡して、マジャンの國に来たという記述の直後にも利用された。即ち『過ぎし年月の物語』の『哲学者の言葉』に次の様にある個所である

る。

и ходи по пустыни и научися от ангела Гавриила о бытии всего мира и о первом человеке, яже суть была по нем и по потопе, и о смещеньи язык, аще кто колико лет был, звездное хоженье и число, землю меру и всему мудрость.

『しかしして荒野を歩きまわり、しかしして天使ガヴリールから学んだ。——— 全世界のなりたちについて、最初の人間について、彼ののちに、洪水ののちにあつたことについて、言葉の混乱について、だれがどれだけの年月いたか、星の運行と数、土地の測り方およびあらゆる知恵を』

この様に見て来ると、『哲学者の言葉』が如何にもバイブルの要約の如く見えながら、実は、むしろより多くハマルトルスやアポクリフによつていたことが明らかになつて来るであろう。そして、『哲学者の言葉』が、キリスト誕生に移ると、もう其処に新約聖書の台本を求めるよりも、我々は、その論説を当時のロシアのキリスト教教義の精一杯の要約と読み取るべきなのである。教義の精一杯の要約であつたればこそ、年代記者は、其処で『哲学者の言葉』をわざわざ二分して、ウラジーミル公を登場させ、哲学者に対して、ことごとく時を見はからつて質問させるのである。（これ以下の『過ぎし年月の物語』の記事は『古代ロシア研究』才七号p.1以下参照）。だから『哲学者の言葉』の、新約への移行以後のこの後半の部分には、たとえ、多くの聖書の言葉が引用されていようとも、それはあくまでも引用であつて、本質は、当時の彼等のもつたギリシア正教の最も典型的な教義の心髄なのであつた。一言一句をゆるがせにできないほどにつめられた神学の要約であつた。ロシア十一、十二世紀のギリシア正教の骨組みはこの神学的論義の中にことごとく含まれていた。ギリシアの哲学者がウラジミル公に布教的に語り聞かせた言葉などではなくて、

僧である年代記者が、最も嚴肅にまとめられた信仰哲学を此處に書きとめたものである。文献的なものだと言うのなら、これほど嚴肅な、これほど熱つぽい、これほど真剣な文献はなかつたであらう。それが、一本の教義の書物や、神学書にはまとめられず、或は、聖僧の一代記になどには組み込まれず、年代記の中に組みこまれたのは面白い現象である。『過ぎし年月の物語』には、いくつかの熱つぽい頂点がみとめられるが、宗教書としての頂点を此處に求めるとすれば、それは、『哲学者の言葉』の、この後半の部分であらう。即ち、それは次の様なものである。

Рече же Володимер: "то кое время сбыться, и было ли се есть? Еда ли топерво хочеть быти се?" Он же отвещав рече ему:

"Якоже преже сбыться все, егда Бог воплотися. Якоже бо преже рекох, Жидом пророки избивающим, царем их законы преступающим, предасть я в расхищенье, и в плен ведени быша во Осурию, грехь их ради, и работаша тамо лет 70; и посем возвратишася в землю свою, и не бе у них царя, но архиереи обладаху ими до Ирода иноплемьника, иже облада ими. В сего же власть, в лето 5500, послан бысть Гавриил в Назарей к девиче Марии, от колена давидова, рещи ей: радуйся, обрадованная, Господь с тобою. И от слова сего зачат Слово Божье в утробе, и породи сына, нарече имя ему Исус. И се во льсви придоша от вьстока, глаголюще: кде есть рожийся царь жидовеск? Видехом бо звезду его на вьстоце и придохим поклонитися ему. Услышав же се царь Ирод, смятеся, и весь Ерусалим с ним; призван книжники и старци людския, и выпраша их: кде Христос ражается? Они же

реша ему: в Вифлевоме мидовъстем. Ирод же се слышав, посла, рек: избийте младенца, суца 2 лет. Они же шедше, избиха младенца. Марья же убоявши-ся съкры отроча; Иосиф же с Марьею, поим отроча, бежа в Египет и бысть до умертвия Иродова. В Египте же явися ангел Иосифу, глаголя: въстав пойми отроча и мать его, иди в землю Израилеву. Пришедшю же ему, вселися в Назариф. Възрастшю же ему и бывшю 30, нача чудеса творити и проповедати царство небесное, и избра 12, яже ученик себе нарече; и нача чудеса велика творити, мертвыя въскрещати, прокаженныя очищати, хромья ходити, слепым прозренье творити, и ина многа чудеса велъя, якоже быша пророци прорекли о нем, глаголюще: то недуги наша ицели; и болезни подъя. И крестися в Ердане от Иоана, показа новым людям обновленье. Крестившю же ся ему, и се отверзошася небеса, и Дух сходяць зраком голубиным на нь, и глас глаголя: се есть Сын мой възлюбленный, о нем же благоизволих. Посылаша ученики своя проповедати царство небесное, покалнѣе в оставленье грехов; хотя исполнити пророчество, и нача проповедати, яко подобаетъ сыну челоувечьскому пострадати, распяху быти и в третий день воскреснути. Учащю же ему в церкви, архиереи, книжници исполнишася зависти, искаху убити и, и имъше и, ведоша к гемону Пилату. Пилат же испытав, яко без вины приведоша и, хоте испустити и; они же реша ему: аще сегопустиши, не имаша быти друг кесареви. Пилат же повеле, да и распнуть. Они же поимше

Исуса, ведоша на место Краснѣво, распяша и ту: бысть тьма по всей земли от 6-го часа до 9-го, и при десятом часе испусти дух Исус, церковная запона раздрася надвое, мертвии всташа мнози, им же повеле в рай ити. Сънемше и со креста, положиша и в гробе и печатями запечатьлеша гроб люди Жидовъстии, стражи поставиша, рѣкуще: еда украдутъ и ученици его. Он же в 3-й день воскрес; явися учеником воскрес из мертвых, рек им: идете во вся языки, и научите вся страны крещенью во имя Отца и Сына и святаго Духа. Пребысть с ними 40 дний, являясь им по воскресеньи. Егда исполнися 40 дний, повеле им ити в гору Елевонскую, и ту явися им, благословив я, и рече им: сядете в граде Ерусалиме, дондеже послю обетованье Отца моего. И се рек, възношашеся на небо; они же поклонишася ему, възвратишася в Ерусалим, и бяху воину в церкви. Егда кончашася днѣе 5 --- десятинии, сниде Дух святый на апостолы; приимше обетованье святаго Духа, разидошася по вселеней, учаще и крестяще водою".

Рече же Володимер: "что ради от жены родися, и на древе распятся, и водою крестися?" Он же рече ему:

"сега ради, понеже исперва родъ человеческий женою съгрѣши, дьявол прельсти Евгою Адама и отпаде рая, такоже и Бог отместве дая дьяволу: женою первую побеженье бысть дьяволу, женою бо первое испаде Адам из рая, от жены же воплотився Бог повеле в рай внити верным. А еже на древе рас-

пятау быти; сего ради яко от древа вкушь, и ис-
паде породы: Бог же на древе страсть прия, да
древом дьявол побежен будет, и от древа животь-
наго примуть праведнии. А еже водою обновленье;
понеже при Нои умножившемся грехом в человецех,
наведе Бог потоп на землю, и потопа человеки во-
дою. Сего ради рече Бог: понеже погубих водою
человеки грех их ради, ныне же паки водою очишу
грехи человеком, обновленьем водою. Ибо жидов-
ьский род в мори очичтиса от Ёупеть-скаго злаго
нава, понеже вода из начала бысть первое; рече
бо: дух Божий ношася верху воды. Еже бо и ныне
крестятся водою и духом. Преображенье бысть
первое водою, якоже Гедивон преобрази посем. Ег-
да приде к нему ангел, веля ему ити на Мадимьян;
он же искушая рече к Богу, вложив руно на гумне,
рек; аще будеть по всей земли роса; а на руне
суца, и бысть тако. Се же прообрази, яко ино-
странни беша преже суца, а жидове руно, после
же на странах роса, еже есть святое крещенье, а
на жидех суца. И пророци проповедаша, яко водою
обновленье будеть. А Апостолом же учаем по
вселеней веровати Богу, их же ученье мы Грьци
перяком; вселеная веруеть ученью их. Поставил
же есть Бог един день, в не же хоцеть судити,
пришед с небесе, живым и мертвым, и въздати кому-
ждо по делом его: праведным царство небесное,
и красоту неизчеренну, веселье без конца, и не
умирати в веки, грешником мука огнена, и червь
неусыпай, и муце не будеть конца. Сиа же бу-

дуть мученья, иже не веруеть к Богу нашему Иисусу Христу; мучими будутъ в огни, иже ся не крестить".

『ところで、ヴオロジメルは言つた。『このことはいつ起つたか？ しかして、これはあつたことなのか？ 或はまた、これは今や実現しようとしているのか？』と。そこで彼（哲学者）は答えて彼に言つた。

『以前、即ち神が受肉し給うた時、すべては実現した。』というのは、以前に（我が）言つたように、ジドたちが予言者たちを殺し、彼等の皇帝たちがおきてをおかした時に、（神は）彼等を略奪にまかせ給ひ、しかして彼等の罪の故に（彼等は）オスリヤへ捕虜として連れて行かれ、しかして、其処で七十年間奴隸であつた。しかして、この後（彼等は）おのれの国にもどつた。しかして彼等には皇帝がなく、彼等を支配した異種族のイロドまで、祭司長が彼等を支配していた。この者が支配していたとき、5500年にガヴリールがダビドの子孫である処女マリヤのいるナザレブへ遣わされて彼女に言つた。『よろこべ。喜ばされた女よ。主は汝と共にいます』と。しかして、この言葉によつて、神の言葉が体内に宿つた。しかして、（マリヤは）息子を生子、彼の名をイススと名づけた。しかして見よ、占師たちが東方から来たつて言つた。『ジドの皇帝として生まれ給える者は、いづれにありや？』というのは、東方に彼の星を（我々は）見たので、彼を拜せんとして来だつたのである』と。ところで、これをイロド帝がきいて、なやんだ。しかしてエルサリム全体も彼と共に。学者たち及び人々の長老たちをよびよせ、しかして、彼等にたづねた。『どこにフリストが生まれたのか？』と。そこで彼等は彼に言つた。『ジドのヴイフレヴオムに』と。ところで、これを聞いてイロドは使者をつかわして言つた。『二才である子供を皆殺しにせよ』と。ところで彼等（使者たち）は来たり、子供を皆殺しにした。ところで、マリヤはおそれて、子供をかくした。ところでヨシフ

はマリヤと共に子供を連れ、エジプトへのがれ、しかしてイロドの死まで（そこに）いた。ところでエジプトにおいてヨシフに天使が現れて言つた。「立つて子供およびその母を連れてイスライリの国へ行け」と。ところで、彼が来たつた時、（彼は）ナザレフに住みついた。ところで彼が成長し、しかして三十才になつたとき、奇跡を行い、天国を教えるべはじめた。しかして、十二人をえらび、彼等をおのれの弟子とよんだ。しかして、大いなる奇跡を行いはじめ、死せる者たちをよみがえらせ、ライを病めるものたちを清め、足なえを歩ませ、盲人たちの目をひらかせ、しかして他の多くの大いなる奇跡を（行いはじめた）。ちようど、予言者たちが彼について予言して言つていたように。「そうすれば我々の病を治し給い、しかして患いを引き受け給うであろう」と。しかして（フリストは）エルダン（河）でイヨアンから洗礼を受け給い、新しき人々に悔い更めを示した。彼が洗礼を受けた時、しかして見よ、天は開き、しかして御霊が彼の上へハトの姿でおりに来たり、しかして、声が言つた。「これが我が愛する子である。彼について（我は）よろこんだ」と。（フリストは）天国をのべつたえ、罪をまぬがれるために悔い更めることを（のべつたえ）ために（各方面に）、おのれの弟子たちを派遣した。予言を實現することを欲し給い、しかして、人の子は苦しみを受け、はりつけになり、しかして、三日目に復活すべきはずのものであるとのべた。ところで彼がつどいの中で教えていた時、祭司長たち、学者たちは憎しみに満ち、彼を殺すためにさがしていた。しかして、彼をとらえ、総督ピラトのもとへ連れ来たつた。ところでピラトは、（人々が）彼を罪なくして連れ来たつたことを知つて、彼を放免しようと思つた。ところで彼等は彼に言つた。「もしも汝がこの者を放免すれば、皇帝の友であることはできないであろう」と。ところで、彼をはりつけにするようにピラトは命じた。ところで彼等はイススを連れてクラエの場所へつれて行き、そこ

で彼をはりつけにした。六刻（十二時）から九刻（三時）まで地上全体が闇になつた。しかして九刻（三時）にイスマは息絶え給うた。聖処の幕は二つに裂け、死者たちの多くが生きかえり、（神は）彼等に樂園へ行くことを命じ給うた。ジドの人々は彼（キリスト）を十字架からおろし、彼を墓におき、墓を封印を以て封じ、見張りをして言つた。「そりでない、彼の弟子たちが彼をぬすみ去るであらう」と。ところで彼は三日目に復活し給うた（キリストは）弟子たちに死人の中よりよみがえつて現れ給ひ、彼等に言ひ給うた。「すべての国民たちの中へ行き、父と子と聖靈の名によつて、すべての國々に洗礼を以て教えよ」と。（キリストは）復活の後、彼等に現れ給ひて四十日間彼等と共に居給うた。四十日がみちた時、（彼は）オレヴオンの山へ行くように彼等に命じ給ひ、しかして、そこで彼等に現れ給ひ、彼等を祝福して彼等に言ひ給うた。「わが父の約束を（我が）おくるまで、エルサリムの町にとどまれ」と。しかして、天に昇りながらかく言ひ給うた。ところで彼等は彼を礼拝し、エルサリムにもどつた。しかして常に集りをもつていた。五十日が終つた時、聖靈は使徒たちの上におりた。聖靈の約束を受け入れて（人々は）世界に散り、教え、しかして水を以て洗礼をほどこした。

そこでヴオロジメルは言つた。「何故に（神は）女から生まれ、しかして木の上ではりつけにされ、しかして水で以て洗礼を受けたのか？」と。ところで彼（哲学者）は彼（ヴオロジメル）に言つた。

「この故に。—— 何故なら古より太初に人類は女によつて罪をおがした。悪魔がエヴガによつてアダムをまどわし、しかして（人類は）樂園を失つた。かくして神は悪魔に復しゆるをなし給うた。最初の女によつて悪魔には勝利があつた。というのは、女によつて、はじめにアダムが樂園から落ち、また、女から神は肉体を以て現れ給ひ、信ずる者たちに樂園へ入るように命じ給う

たからである。ところで、木の上ではりつけられたことについては——木からの（実）を食べたので天国からおちた、ところで神は木の上で苦しみを受け給うた、悪魔が木によつて打ちまかされ、しかして生命の木から正しきものたちが（実を）とらんがために。ところで、水による再生については。——何故ならノエの時に人間たちの中に罪がふえたので神は洪水を地上におとし給ひ、しかして人間たちを水で沈め給うた。この故に神は言い給うた。〃人間たちを彼等の罪の故に（我は）水で亡ぼしたので、今や、再び水による再生で以て人間たちの罪を清めよう〃と。何となればジドの種族は海の中でエヌベトの悪い習慣から清められたというのは先づ最初からあつたのだから。というのには次の様に言われているからである。〃神の靈は水の上をたゞよつていた〃と。その故に今もまた（人々は）水と精靈によつて洗礼を受けているからである。変貌が先づ水によつて行われた。ゲジヴオンが次の様な形で変貌した時に、彼のもとに天使がやつて来て、彼にマジミヤンへ行くことを命じた時、彼はためして神に向つて言い、羊毛を穀物小屋の上において言つた。〃もしもこの地上全体につゆがおりて、なお羊毛の上は乾いていたら〃と。しかしてその様になつた。これは次のことの前兆になつた。即ち以前には外国の乾いた場所が、そしてジドの羊毛があつたが、その後には聖なる洗礼である露が国々におり、ジドたちの上には乾きがあつた。しかして水による再生が行われることを予言者たちは予言した。ところで神を信ずるよりに、この世界中に使徒たちが教えていた時に、彼等の教えを我々グレキたちが撰取した。全世界は彼等の教えを信じている。ところで、神は或る一日の日を定め給うた。その日に、（神は）天より来たり、生けるものたちにも、死せる者たちにも、裁きをなし、しかして各々にその行いによつてむくい給うてあろう。正しきものたちには天国及び言い難き美しさ、終りなきたのしさを、しかして、永遠に死なざることを。罪人たちには

火の苦しみが、ねむることなきうじ虫が、しかしで、苦しみに
終りが無いであろう。神なる我々のイスス・フリストを信じない
もの（には）この様な苦しみがあろう。洗礼を受けざるものは、
火の中で苦しめられるであろう』と。

年代記者は、此処でヴラジーミル公をコルスニへ出撃させ、ビ
ザンチンの皇女を妻に迎えさせて（——これはベチヨラ河河
口近くの古い伝承によつたものであろう——）洗礼を受けさせ
る。その様な一つの物語を織り込んだ後、再び、洗礼に際してビ
ザンチンの人から彼が説教を受けた言葉として、年代記者は再び
長々と信仰論を展開する。その前半の三位一体論を兼ねた信仰象
徴論は、よく似た形で1073年のスウイヤトスラブ《СВЯТОС-
ЛАВ》の文集にも見られる通り、一つの独立した神学論文であつ
たものが此処へ持ち込まれたものであるにちがいない。それは次
の様な内容のものである（古代ロシア語の原文は省略しよう；『
古代ロシア研究』才七号参照）。

『全能なる父、天及び地の創造者なる唯一の神を（我は）信ず
る。永遠にこの信仰を（信ずる）。しかしで、また、（人によつ
て）生み出されたものではない父なる唯一の神及び（人によつて）
生み出された唯一の子、（父に）発する唯一の聖靈を（我は）信
ずる。三つの位は完全なもので、精神的なものであり、本質の教
によつて分けられるものであつて、神の（数）によつて（分けら
れる）のではない。というのは分かち難く分かたれていて、混合
することなしに統一されているからである。父即ち父なる神は永
遠なるものにして、父の位にあり、（人によつて）生み出された
ものではなくて、初めなきものであり、あらゆるものの始めであ
り原因であり、（人によつて）生み出されるものではないというこ
とのみによつて、これは子及び聖靈よりも古い。ところで彼（父）
から、すべての時よりも以前に子が生まれ、聖靈は時及び肉体な
しに発している。父も、子も、聖靈も、共にあるものである。子

は父に同様なものである。生み出されるということによつてのみ、父と聖霊とから区別されるものである。霊は至聖なるものであり、父と子に同様なものであり、永遠なるものである。というのは父には父の位が、ところで子には子の位が、また霊には榮出がある。というのは父は子を或は靈をおかすことなく、子も父及び聖霊を、しかして靈は子或は父を（おかすことはない）。各本質は不動なるものである。三つの神ではなくて、一つの神である。その神によつて唯一の神性が三つの位において（現れるのである）。ところで、父及び靈の、おのれの創造物を救わんとする望みによつて（神が）父のふところというそのものから離れずに天下り、しかして処女のけがれなきふしどに神の種として入り、靈化された。そして言葉のある、しかして賢明な、以前にはなかつた肉体を擧り、肉体化されて神が出で来たり、説明し難く生まれ給ひ、聖母の処女性を永遠に守り給うたのである。融合も混合も変化も受けずに、ありしまゝにとどまり、かつて無かつたものになつた。空想としてではなくて、眞実のものとして奴隸の形をとり、罪を除いては、あらゆる点で我々に似たものであつた。というのは、（神の）みこゝろによつて生まれ、みこゝろによつて飢え、みこゝろによつて渴き、みこゝろによつて悲しみ、みこゝろによつておそれ、みこゝろによつて死んだのである。空想としてではなくて、眞実のものとしてである。すべてのものは必然的であり、非難されるべきはずのない人類の受難なのである。十字架にかゝつて罪もないのに死（の味）を味わひ、おのれの肉体において復活し、腐敗をみずに天にのぼり、父の右手に坐し給うた。ところで再び榮光と共に生けるもの及び死せる者を裁きに来たり給うてある。榮光及び肉体と共に（天に）のぼり給うた如くに、天下り給うてある。かくて、（我は）水と靈による唯一の洗礼を奉じ、いと清き聖餐を受け、眞に肉と血を信じ、教会の教えを受け入れ、しかして聖なる聖像に礼拝し、聖なる木及びあらゆる十字架、聖な

る遺体及び聖なる器に礼拝するものである』。

年代記者はこの論文の組み入れに続いて、今度は闇に物語を入れず、直接別の文章を継ぎ足して来るのである。それは才一回世界宗教会議が318人の人々によつてニキヤで開かれ、アリイを呪つたことにはじまり、順を追つて才七回世界宗教会議の出席者数と目的と内容を簡略に述べて行く文章である。然もこれは次に一続きになつて、ローマ・カソリックに対す批判の文章をなしている。年代記者が、ウラジーミル公が洗礼を受けた時に受けた説教のように見せかけてみても、それは決して988年(この論文の組み込まれている『過ぎし年月の物語』の年号——6496年)ではなくて東西教会の分裂後にしか現れなかつた内容であり、文章であるはずである。おそらく、十一世紀末か十二世紀初頭の文章を988年のウラジーミル公にことよせて無神経に此処に組み込んだものであらう。才七回世界宗教会議にちなんでこの論説が生まれたにしても、決して十世紀などには考え出される文章内容ではない。その文章とは次の様なものである。

Не преимай же ученья от Латын, их же ученье раз-
вращено; влезъше бо в церковь, не поклонятся ико-
нам, но стоя поклонится, и поклонився напишетъ
крест на земли и целуетъ, въстав прост станеть
на нем гогами; да лег целуетъ, а встав понираеть.
Сего бо апостоли не предаша; предали бо суть
апостоли крест поставлен целовать, и иконы пре-
даша. Лука бо еуангелист первое написав посла
в Рим, якоже глаголетъ Василий; икона на первый
образ приходить. Паки же и землю глаголютъ мате-
рию. Да аще им есть земля мати, то отецъ им есть
небо, искони бо створи Бог небо, таже землю; та-
ко глаголютъ: Отче нашъ, иже еси на небеси. Аще

ли по сих разуму земля есть мати, то почто плюете на мать свою, да семо ю любьзаете, и паки оскверняете? Сего же преже Римляне не творяху, но исправляху на всех соборех, сходящесе от Рима и от всех престол. На первом бо соборе, еже на Арья в Никеи, от Рима Силвестр посла епископы и презвутеры, от Олександрее Офонаси, от Царягорода Нитрофан посла епископы от себе; тако исправляху веру. На втором же соборе от Рима Дамас, а от Олександрия Тимофей, от Ентиохия Мелетий, Курил Ерусалимский, Григорий Богословець. На третьем же соборе Клестин Римский, Курил Олександрский, Увеналий Ерусалимский. На четвертом же соборе Левонтий Римский, Анасталий Царягорода, Увеналий Ерусалимский. На пятом соборе Римский Вигилий, Автухи Царягорода, Анолинарий Олександрский, Домнин Антиахский. На 6-м соборе от Рима Агафон, Георгий Царягорода, Феофан Антиохский, от Олександря Петр мних. На 7-м соборе Оньдрия от Рима, Тарасий Царяграда, Политиан Олександрский, Федорит Антиохский, Илья Ерусалимский. И си вси с своими епископы сходящесе исправляху. По сем же соборе Петр Гугнивый со имени шед в Рим и престол възхватив, и развърати веру, отвергься от престола Юрусалимска, и Олександрскаго, Царяграда и Антиахийскаго. Възмутитиа Италию всю, сеуще ученье свое разно: ови бо попове единою женою оженевся служить, а друзии до семей жены поймаючи служить. Их же блюстися ученья: прашають же грехи на дару, еже есть злее

всего. Бог да схранить тя от сего.

『ラトウイニから教えを受けるなかれ、彼等の教えは道にはづれている。というのは（彼等は）教会に入つて、聖像に礼拝せず、立つたまゝ礼拝する。しかして、礼拝して地上に十字を書き、接吻し、立上つてその十字の上に平気で立つているからである。然もまた伏して接吻し、しかして立ち上つてふみつけている。というのは、このようなことを使徒たちは教えなかつた。というのは、使徒たちは、置かれた十字架を接吻するように教えつたえ、しかして、聖像をつたえたのであるから。というのはヴァシリイの言うところによれば、福音をつたえたルカは（聖像を）はじめて書いてリム（ローマ）に送つたのであるから。（その）聖像はもとの姿に似ている。また大地をも（人々は）母と呼んでいる。ところで、もしも彼等にとつて、大地が母であるならば、その時は彼等にとつて父は天である。というのは太初に神は天を創りたまひ、しかして、大地をも（創り給うたのである）。（人々は）次の様に言つている。『天にまします我等の父よ』と。もしも、これらの者たちの理解するところによつて大地が母であるならば何故に（汝等は）おのれの母の上へつばをはき、更にそれを口づけし、しかしてまたけがしているのか？ この様なことを以前にはリム人たちは為してはいなかつた。しかして、リムから及びすべての総主教の座から（人々が）集り来たり、総ての総会議において（人々は）訂正したものであつた。アリイに対してニケヤで行われた最初の総会議で、リムカシレヴエストルが主教たち、および、長老たちを送り、オレクサンドレイからはオフオナシイが、ツアリゴロドからはミトロフアンが、おのれのもとから主教たちを送つた。かくして信仰を正して来たのである。二度目の総会議では、リムからダマスクが、しかして、オレクサンドレイからはチモフエイが、アンチオヒイからはメレチイ、エルサレムのクリル、神学者のグリゴリイが。ところで三回目の総会議ではリムのケレス

チンが、アレクサンドリイのクリルが、エルサレムのウヴエナリイが、才四回目の総会議ではリムのレヴオンチイ、ツアリゴロドのアナタリイ、エルサレムのウヴエナリイが、才五回目の総会議ではリムのヴイギリイ、ツアリゴロドのエクトウヒイ、アレクサンドリイのアポリナリイ、アンチオフのドムニンが、才六回目の総会議ではリムからアガフオンが、ツアリゴロドのゲオルギー、アンチオフのフェオフアンが、アレクサンドリイからは僧のベトルが、才七回目の総会議ではリムからオニドレアン、ツアリグラドのタランイ、アレクサンドリイのポリチアン、アンチオフのフェドリト、エルサレムのイリヤが、しかして、これら総のものたちが、おのれの主教たちと共に集つて（教えを）正したのであつた。ところで、この総会議の後に口下手のベトルが他の者たちと共にリムに行き、しかして教皇々座を取り、信仰をゆがめ、エルサレムの、及びツアリゴロドの、及びアンチオフの、およびアレクサンドリイの坐からはづされた。イタリヤ全土を混乱させ、おのれの教えを様々に布教した。というのは、あるものたちは、おのれの妻をめとつて（神に）仕え、また別のものたちは七人目の妻までめとり（神に）仕えている。ところで、彼等の教えを用心すべきである。（彼等は）罪を贈物によつて許している。その様なことは、あらゆるものよりも悪いことである。神が汝をかゝることから守り給うように」と。」

この文章は、引用した直前に十数行の文章が組みこまれ、其処では、才一回から才七回に至る宗教総会議の出席者数とそれぞれの目的とが書きとられている。全部を含めて、この引用文の後半の僧たちの名前と合わせて、この文章は半ば宗教総会議の略記をも勤めるような文章であつた。ビザンチンから伝つて、古いロシアの教会で訳され書きとめられた文献と神学文との折半的な組み込みであつたと思われる。この様にヴオロジメルにちなんで、一筆に古いロシアのギリシア正教の教義を書きつけた以上、年代記

者は、いきおい、この個所で、その教義のありつたけを書きつけてしまいたくなつたものの様に思われる。ウラジミル公にまつわる多くの伝承（—— 妻をめどり、ロシア全土を洗礼し、ペンル（ロシア原始宗教の主神）の像を河に流し、教会を建て、貴族の子弟に書物を教え、等々）を組み込みながら、盛んにその行間に、聖書の言葉と共に、おそらくは、もつと後代に創られた教義的言説を織り込んだのである。かくして、6500(988)年の項は埋めつくされる結果となつた。勿論、ウオロジメル（ウラジミル）公に関する伝承は、教義のツマにするよりも多く豊かであつた。年代記者は、その内から6497(989)年、6499(991)年の項にみられる教会建設と町の建設を汲みあげて定着させ、つゞいて、その後の年号に及び、彼の軍事行動の物語を書きつけた。そのウラジミル公が歿する頃には、ロシアには充分ギリシア正教の教義も勤行形成も板につく頃であつたにちがいない。それを利用して、年代記者はウラジミル公の死んだ年に設定された6523(1015)年に、独立したウラジミル公への宗教的讚美の言葉を書きつけたのである。この一節は非常に後代になつてから、ウラジミル記念祭のような折に書かれ、読まれた文章を此処へあてはめたもののように思われる。このウラジミル公讚美の文章に年代記者が如何に手を加えて見ても、アレクサンドル・ネフスキー《Александр Невский》によつて1240年にノウゴロドでウラジミル記念祭が挙行されるまで、これほどの追悼名文が生まれて、読み上げられる筈はなかつたし、ウラジミル公を聖者だとする考えが、彼の死の直後からあつたわけでもない。ロシアの聖者たちの仲間へウラジミル公が教え入れられたのはイバーチー年代記《Ипатьевская летопись》によれば1254年にもなつてからであつた。巨大な政治家や軍事的支配者（——アレクサンドル・ネフスキーの様な——）によつて国家的行事として記念祭が行われる以前に、教会の僧たちの内部で、時にウラジミル公への讚

美の文章が勤行的に創られて読まれていたとしても、おそらくは、それとてもまたそれほど古いことではなかつたであらう。少なくとも、十二世紀末以前には、こんな文章はあり得なかつた。それ以後に『過ぎし年月の物語』の中へこの一節が一人の年代記者によつて組み込まれたものであらう、その一節とは、次の様なものである。

Се еть новый Костянтин великого Рима, иже крестив ся сам и люди своя: тако и съ створи подобно ему. Аще бо бе и преже на скверньную желая, но послеже прилежа к покаянью, якоже Апостол вещаетъ: идеже умножиться грех, ту изобильствуееть благодать. Аще бо преже в невежестве етера быша сгрешения, последи же разсыпашася покаяньем и милостынями. Якоже глаголетъ: в чем ты застану, в том ти и сужю. Якоже Пророк глаголетъ: жив аз Аданаи Господь, якоже не хоцю смерти грешника, но якоже обратится ему от пути своего и живу быти; обращением обратитесь от пути своего злаго. Мнози бо праведнии творяще и по правде живуще, к смерти соврацаются праваго пути и погибають; а друзии развращено пребываютъ, и к смерти въспомнуться, и покаяньем добрым очистять грехи. Якоже Пророк глаголетъ: праведный не возможе спастися в день греха его. Егда реку праведному: жив будеши, съи же уповаееть правдою своею, и сотворить безаконье, вся правда его не въспоманеться в неправде его, юже створи, и в ней умреть; и егда реку нечестивому. Смертию умреша, ти обратитесь от пути своего и створить суд и

правду, и заим суд лжку отдаеть, и въсхищение
възвратить, вси греси его, яже сгрешил есть, не
помянутся, яко суд и правду створил есть, и жив
будеть в них; комуждо вас сужю по пути его, доме
Израилев! Съи же умер во исповедании добрем, по-
кааньем разсыпа грехы своя, милостынями, иже есть
паче всего добрый. Милости бо хошу, рече, а не
жарьтве. Милостыня бо есть всего луче и выьше,
възводящи до самого небеси пред Бог. Якоже ан-
гел Корнильеви рече: молитвы твоя и милостыня
твоя взиидоша в память пред Богом. Дивно же есть
се, колико добра створил Русьстей земли, крестив
ю. Мы же, хрестьяне суще, не въздаем почестья
противу оного възданью. Аще бо он не крестил бы
нас, то ныне были быхом в прелести дьяволи, якоже
и прародители наши погыбнуша. Да аще быхом имели
потщанье и мольбы приносили Богу за нь, в день пре-
ставленья его, и видя бы Бог тщанье наше к нему,
прославил бы и: нам бо достоить за нь Бога молити,
понеже тем Бога познахом. Но дажь ти Господь по
сердцю твоему, и вся прошенья твоя исполни, его
же желаше царства небеснаго: дажь ти Господь ве-
нецъ с праведными, в пиши райстей веселье и ликъ-
ствованье с Авраом и с прочими патриархы; якоже
Соломон рече: умершю мужю праведну, не погыбаеть
упованье. Сего бо в память держать Русьстии людье,
поминающе святое крещенье, и прославляють Бога
в молитвах и в песнях и в псалмех, поюще Го-
сподеви новии людье, просвещени святым Духом,
чающе надежи великаго Бога и Спаса нашего Исуса

Христа, въздати комуждо противу трудом, неизреченную радость, юже буди уллучити всем хрестьяном.

「これは、おのれ自から及びおのれの民たちを洗礼した偉大なるローマの新しいコスチヤンチンである。そのように、この者もまた、彼に同じく為したのであるから。というのは、(この者は)もしも以前に、みにくい慾望に心を向けていたとしても、然し、後程には悔悟にはげんだのである。使徒がつかえている如くに、罪の増すところには、めぐみもいや増すのである(新訳; ロマ書; 才五章二十節後半・…・筆者註)と。(これ以下はイバーチ一年代記、フレブニコサ年代記のみに読み取られる文章である…・…筆者註)。というのは、もしも以前に多少文盲であつたために罪をおかしていたにしても、ところが後程には悔悟とめぐみによつて(その罪は)四散したのである。(我が)汝に行きつくところにおいて(我は)汝を裁くであろうと言われている如くである。また予言者が次の様に言つている如くである。主アダナイは(言い給う)我は生きてゐる。(我は)悪人の死ぬのを欲しない。然し、彼(悪人)がおのれの道から離れることを(欲している)。また(彼が)生きることを(欲している)と。(エゼキエル書; 才三十三章, 十一節前半・…・筆者註)というのは、多くの正しきことをなしながら、しかして、義によつて生きながら、(人々は)正しき道より(それて)死へ變り、しかしてほろびてゐるのである。ところで他の者たちは間違つた生き方をし、しかして死への迷いがさめ、しかして、よき悔悟によつて罪を清めてゐるのである。予言者が次の様に言つている如くである。正しきものは、彼(正しきもの)の罪の日に救われることはできない(エゼキエル書; 才三十三章; 十二節後半・…・筆者註)。(我が)正しきものに、(汝は)生きるであろうと言ふ時、この者(正しき者)がおのれの正しさをたのんで、しかして不法をなすならば、

彼の総ての正しさは、(彼が)なした彼の不正において忘れられ、
しかして(彼は)その不正において死ぬであろう。(エゼキエル
書；オ三十三章；十三節……筆者註)しかして(我が)悪人に、
(汝は)死ぬであろうと言ひ時(にも)、その者がおのれの道か
ら離れ、罪をみとめ正義をなし、しかして、いつわりをわきま
えて(質物……バイブル……筆者註)もとへもどし、しか
して、うばいしものをもどすなら、おかしてしまつた彼の罪は総
てとあげされないであろうし、公道と正義を(彼が)行つていた
のなら、それらの中において彼は生きるであろう。(エゼキエル
書；オ三十三章；十四節から十六節……筆者註)。イスラ
エルの家よ、(我は)その道によつて汝等の各々を裁くであろうと
ところで、この者(ヴオロジメル)は、良き信仰の内に死んだ。
おのれの罪を悔悟によつて、また総てにましていた情け深さによ
つて、四散したのである。というのは、情け深さは総てよりも良
く、高く、神の御前の天そのものまでも(人を)みちびきあげる
ものであるからである。天使がコルニリに次の如く言つたように
汝の祈りと、汝の情け深さが神の御前に記念されるべく昇つたと。
(……此処までの文章はイバーチー、フレブニフオの各本以
外には無い……筆者註)彼(ヴオロジメル)がルシの國を洗礼し、
ルシの國に如何ほどの善をなしたかということは、おどろくべき
ことなのである。ところで、我々は、キリスト教徒として、彼の
事業にふさわしいほどの賞讃を行い得るものではない。というの
は、もしも彼が我々を洗礼しなかつたとしたら、(我々は)今、
我々の先祖たちがほろんだような悪魔のかどわかしの中にいたこ
とであろう。なおまたもしも(我々が)彼のために彼の死の日に
熱心さと祈りとを神にさしあげるならば、神は彼(神)に対する我
々の熱心さを見とめられ、彼をたゞえ給うであろう。我々は彼の
ために神に祈らなければならぬ。というのは、彼によつて(我
々は)神を知つたのだからである。されど、主が汝の望むところ

に従つて汝にむくい給い、汝の総ての願いをかなえ給うように！
天なる王国を（汝は）望んでいたのだが、主が汝に正しきものた
ちと共に冠を与え給うように、楽園の食べものの楽しみと、アヴ
ラム及び他の総主教たちと共にあるよろこびをも。ソロモンが次
の様に言つている如く、正しきものが死する時にはそのよろこび
はほろぶことなしと。（箴言；才十一章才七節・・・筆者註・・・）
というのは、この者の記念をルシの人々は心にとどめ、聖なる洗
礼を思い起しつゝ、祈りにおいて、歌において、詩篇において神
をたゞえているのであり、聖霊によつて洗礼された新しい人々が
主をほめ歌うのである。偉大なる神及び我等の救世主イスス・ク
リストがキリスト教徒の総てが受けるべき玄妙なる喜びを、その
労苦によつて各人にくだし給うべく来たらんものと望みつゝ、』
さて、『過ぎし年月の物語』の編者は、此処で（6523年—
1015年の項）でウラジーミル公の記事をどち、それと共に、ボ
リスの殺される物語を伝承によつてこの年の項に書き加えたので
あつた。その伝承を『過ぎし年月の物語』以前に既に書きとめて
物語的作品書としていたものがあつたとしたら、それは、年代記
の個々の物語の原型をなすような英雄や聖者の一代記であつたで
あろうし、ロシアの原型的なキリスト教的物語の書きものであつ
たであろう。もしも、『過ぎし年月の物語』が、この1015年の
ボリス殺害の物語（その一部は原文と共に既に先に引用した）を
なまの伝承からではなくて、伝承を作品化したより古い文献から
写し取つたものだとしたら、この記事の直接の発祥源もまた文献
的なものであつたと考えなければならぬであろう。それに就て
は、いづれ更めて後述することにしよう。ボリスとグレブの殺害
の物語は、『過ぎし年月の物語』の中にあつて、最もドラマチッ
クな物語的頂点を形成する個所であるので、其処に構成や出典の
からくりがあるとすれば、後に更めて取りあげられなければなら
ないからである。

ところで、考察の時代を6527(1019)年まで下げよう。実は、この年の項に書かれた『過ぎし年月の物語』は、ヤロスラフがボリスのとむらい合戦に勝つ話である。その一節に、打ちまかされたスヴィヤトボルクの死を書きとつた後に、年代記者は次の様な一節をつづけている。即ち、スヴィヤトボルクの墓は今に至るまで荒野にあつて悪臭を放つているという言葉に及ぶ直前の文章である。

Его же по правде, яко неправедна, суду нашедшу на нь, по отшествии сего света прияша муки оканьнаго: показоваше яве посланая пагубная рана, в смерть немилостивно вьгна, и по смерти вечно мучим есть связан.

『ところで、義によつて彼を正しからざるものとして、その上に裁きが来つたとき、この世を去つた後も呪われたる者の苦しみを受けたのである。明らかに示された亡滅的な傷が(彼に)送られて、(彼を)情け容赦なく死においやつた。しかし、死後もまた(彼は)いましめられたまゝ永遠に苦しめられている』

正義によるかたき打ちの物語を書きとどめ、且つ、結びの文句に、余り庶民的なほどの墓地の臭気の話を書き込む行間に、年代記者は、この一節を入れたのである。悪者に対するきびしい批判の言葉として、英雄的伝承、聖者物語、或はそれを書きとどめた文献、及び、墓地にまつわる庶民の余りにも素朴な伝説をまとめて構成しながら、その上に『過ぎし年月の物語』の記者は、この一節を別のところから持つて来て組み込んだ。実はハマルトルス年代記の古代ロシア語訳がイロド<Ирод>王の所業にふれ、口ぎたなく非難する文章の一節を、そのまま此処へ持ち込んだのである。その折に、ハマルトルスの文章が、どれほども手を加えられていないことに気づくであろう。日本語訳を省略して、ハマルトルスの古代ロシア語訳の一節を次に引用しておく。

его же по правде яко неправеднаго суду пришедшу,
по отшествии сего света прияша муки оканьнаго;
показавше яве образ абье прият сего от бога
послана рана пагубная в смерть немилостивно
въгна.

この1019年の項がその結びの正当化の言葉や教義的な言葉ま
でも含めて、いかに雑多なものつぎはぎから構成されているも
のであるかと分るであろう。そして、其処にもまたハマルトルス
が顔を出していた。

では、その様なハマルトルスの年代記を中心とするビザンチン
の文献は、総合的統一的に、何時、ルシの言葉に訳されたのであ
ろうか。勿論、個々にはそれぞれ古くから断片的にしる訳されて
いながつたとは言えないが、統一的な翻訳事業を、『過ぎし年月
の物語』自身が語っている。ヤロスラフ公の業跡をたゞえた6545
(1037)年の項である。

И при сем нача вера хрестьяньская плодитися и
разширяти, и черноризьци почаша множитися, и
монастыреве починаху быти. И бе Ярослав любя
церковныя уставы, попы любяше повелику, изли-
ха же черноризьце, и книгам прилежа и поситая
е часто в нощи и в дне; и собра писъце многы, и
прекладаша от Грек на Словеньское писмо, и списаша
книгы многы, и сниска, ими же поучащеса вернии
людье, наслажаются ученья божественнаго.....

『しかしこの者の時に、キリスト教の信仰が実り、広まりは
じめた。修道僧が増加しはじめ、修道院が起りはじめていたの
である。しかし、ヤロスラフは教会の規定を愛し、僧たちを非常
に愛し、それにもまして修道僧たちを愛し、書物に心を傾け、し

かして、それらを夜も昼もしばしば読んでいた。彼は多くの書き手を集め、(人々は)グレキからスロヴエンの文字に訳し、しかして多くの書物を書き写し、しかして集めた。それら(の書物)によつて信仰ある人々が学び、神の教えをよろこんでいるのである。』

此処に述べられた内容に当るものが、ヴラジーミル公によるロシア洗礼の折に貴族の子弟を集めて書物を教えたという6496(988)年の物語に振り替つて先出していたのであらうと思われる年代記の文献的な素材や原型になるような作品も、また、この時代に前後して創られたものであつたにちがいない。だからこそ、『過ぎし年月の物語』の記者は、時宣を得て、こゝぞとばかりに、この年の項に書物の効用を書き立てたのであらう。勿論、その文章の原型は現在に伝わっていないが、おそらくは、僧たちや貴族の子弟たちに、読み書きを教える折の前置きのような、説教めいた文章であつたにちがいない。教育のすすめの文章であつたであらう。そして、それは教える側にも、教えられた側も、おそらくは頭にこびりついていたほどの教訓的文章であつたであらう。『過ぎし年月の物語』は、その文章を次の様な形でとよめているのである。

Велика бо бываеть полза от ученья книжного; книгами бо кажеми и учими есмы пути покаянью, мудрость бо обретаем и въздержанье от словес книжных; се бо суть реки, напаяющи вселеную, се суть исходиша мудрости; книгам бо есть неисчетная глубина, сими бо в печали утешаеми есмы, си суть узда въздержанью. Мудрость бо велика есть, якоже и Соломон хваля е глаголаше: аз премудрость вселих, свет, разум и смысл, аз призвах страх Господень; мои съвети, моя мудро-

сть, мое утверженъе, моя крепость; мною царе-
царствуютъ, а силнии пишутъ правду, мною вель-
можи величаются и мучители держатъ землю; аз
любящая мя люблю, ищущи мене обрящутъ благодать.
Аще бо поищеши в книгахъ мудрости прилежно, то
обрящеши великубъ ползу души своей; иже бо книги
часто чтеть, то беседуетъ с Богом, или святыми
мужи; почитая пророческыя беседы, и еуангель-
ская ученья и апостолская, житья святыхъ отецъ,
въсприемлетъ душа велику ползу.

『 というのは書物の教えからの利益は大きい。というのは（
我々は）書物によつて悔い改めの道を示され、しかして教えられ
ているからである。書物の言葉から（我々は）英知を見出し、し
かして節制を（見出しているからである）。というのは、これは
全世界を養つている河である。これは英知の源泉である。という
のは、書物には測り切れない深みがある。それらによつて（我々
は）悲しみの中で慰さめられているのである。これら（書物）は
節制のクツワである。英知は偉大である。ソロモンもそれをほめ
て次の様に言つている。 我、英知を、光を、理性を、思慮を定
着せしなり（箴言；才八章十二節……筆者註）。 我、主のお
それを呼びよせしなり。我がはかりごと、我が英知、我が才知、
我が能力なり。我によりて王者たちは政治をなし、しかして強き
ものは正義を書き、我によりて、貴族たちはたたえられ、さばき
人は世を治めるものなり。われを愛するものは、我、これを愛す。
我を求むるものは恩ちようにあわん（箴言；才八章、十三節より
十七節……筆者註）と。というのは、もしも（汝が）書物の
中に熱心に英知を求めるならば、おのれの魂のための大いなる利
益を（汝は）見出すであろう。というのは、書物をしばしば読む
ものは、神或は聖なる人々と対話するのであるから。予言者の対

話を、しかして福音書の教えを、また使徒の(教え)を、聖なる父たちの一代記を読むものは、魂の大きな利益を摂取するのである』

そして、この後には、この時代の英まいた君主ヤロスラフ公の二三の業跡を書きとめただけで、『過ぎし年月の物語』は、『多くの物語を知つていて、それを語り、私も、それを年代記に書き込んだ』という語り手ヤン〈ЯН〉の父を登場させているのである。その個所に就ては既に前述したところである。ところで、その後の年代、即ち、6559(1051)年の項に、ベチエルスキ—修道院にまつわる話が書きとられている。その文章の出典或は対応文献と見られるものについては、その原文をあげて先に述べたところであるが、実は、この文章の出来た年代に就て面白いことが考えられる。即ち、前にも用いた『フェオドシイ—代記』〈Жития Феодосия〉によれば、この洞穴の上に建てられたこの新しい修道院は1073年から翌年頃にかけて建てられたことになっている。とすると、この1051年の項の文章は1073年或は1074年より以前に存在したはずがないということになる。『過ぎし年月の物語』はだから全部が通して一挙にある時期に書きあげられたものではなく、随分の年月の間にそれぞれの項目が或る原型の上に書き加えられて行つたものようである。そして、6559(1051)年の項は、たしかに、少くとも1073年以後に書かれたものである。

一見、一つの年号項目にまとめられ、一貫した一つの文章の様に読まれるものとても、時に二つ或は三つの古い作品の一部分の組み合わせからなつていることがある。例えば、その最も良い例が6575(1067)年……(ラヴレンチイ—年代記による。イパーチ—年代記ではこの同じ文章は6576(1068)年になつてい)……の記事である。

即ち其処には冒頭に『異種族たち即ち多くのポロヴェツ人たち

がルシの国に来たつた。ところでイジマスラフは、スヴィヤトスラフも、フセウオロドも彼等に向つてレタ(河)に出撃した。しかして夜であつたが、相互に兵を進めた。ところで我々の罪の故に神は我々に異教徒たちを放ち給うたのである。しかして、ルシの公たちは逃げ、ポロヴェツ人たちが勝つた』という文章がある。そして、続いて相当長文の教訓めいた敗戦の理由づけといましめがあり、その後、『我等は前の話にもどろり』という言葉がつづいて、今度は、逃げたルシの公たちのその後の消息に記事を及ぼしている。これだけのところにも、記事としては三つの異質的なものが組み合わされていると考えられる。然し、一項目の物語が実は寄木細工であつたことを単にこれだけから実証して見ても、それほど面白くない。ロシアの公たちの物語がそれを前後にはさんでいる、中間の教訓的な敗戦の理由づけやいましめの文章自身が、異質的なものに前後をはさまれながら、実はそれ自身もまた異質的なものの寄木細工だからこそ面白いのである。自からが寄木細工でありながら、その上に前後から、これまた異質的な文章にサンドイッチされた教訓的いましめの文章とは次の様なものである。

Наводить бо Бог по гневу своему иноплемьники на землю, и тако скрушеным им въспоманутся к Богу; усобная же рать бываетъ от соблаженья дьявол. Бог бо не хочетъ зла человеком, но блага; а дьявол радуется злему убийству и кровопролитью, подвизая свары и зависти, братоненавиденье, клеветы. Земли же согрешивши которей любо, казнить Бог смертию, ли гладом, ли наведеньем поганых, ли ведром, ли гусеницею, ли иными казнями, аще ли покаявшеся будем в нем же ны Бог велить жити. Глаголетъ бо Пророком

нам: обратитесь ко мне всем сердцем вашим, постом и плачем. Да аще сице створим, всех грех прощени будем: но мы на зое възвращаемся, акы свинья въ кале греховнем присно валяющесе, и тако пребываем. Темже Пророком нам глаголетъ: разумех, рече, яко жесток еси, и шия железная твоя. Того ради удержих от вас дождь, предел един одождих, а другаго не одождих, ише, и поразих вы зноем и различными казньми; то и тако не обратистесь ко мне. Сего ради винограды ваше, и смоковье ваше, нивы и дубравы ваша истрох, глаголетъ Господь, а злоб ваших не могох истерти; послах на вы различныя болезни и смерти тяжкыя, и на скоты казнь свою послах, то и ту не обратистесь, но ресте: мужаемься. Доколе не насытитесь злоб ваших? Вы бо уклонистесь от пути моего, глаголетъ Господь, и соблазнисте многы: сего ради буду сведетель скор на противныя, и на прелюбодейца, и на кленушася именем моим во лжу, и на лишающая мьзды наймника, насильствующая сироте и вдовици, и на укланяющая суд криве. Почто не въздержастесь в грех ваших, но уклонисте законы моя и не схранисте? Обратитесь ко мне, и обращюся к вам, глаголетъ Господь, и аз товерзу вам хляби небесныя и отвращю от вас гнев мой, дондеже все обилуеть вам; и не имуть изнеможи винограды ваши, ни нивы. Но вы отяжасте на мя словеса ваша, глаголюще: суетен работаяй Богу. Темже усты чтуть мя, а сердце их далече отстоитъ мене. Сего ради ихже

просим не приемлем: будетъ бо, рече, егда призовете мя, аз же не послушаю вас, взищете мене зли, и не обрящете; не всхотеша бо ходити по путем моим, да того ради затворяется небо, ово ли зле отверзается, град в дождя место пуская, ово ли мразом плоды узнабляя и землю зноем томя, наших ради злоб. Аще ли ся покаем от злоб наших, то акы чадом своим дасть нам вся прощенья, и одождит нам дождь ран и поздн, и наполнятся гумна ваша пшенице, пролеются точила виная и масляная, и въздам вам за лета яже пояша пружи, и хрустове, и гусеница, сила моя великая, юже послах на вы, глаголетъ Господь Вседержитель. Си слышаще, въстягнемся на добро, взищете суда, избавите обидимаго; на покаянье придем, не въздающе зла за зло, ни клеветы за клевету, но любовью прилепимся Господи Бозе нашем, постом и рыданьем, слезами омывающе вся прегрешенья, не словом парицающеся хрестьяни, а поганьски живуще. Се бо погански ли живем, аще усрести верующе? Аще бо кто усрящеть черноризца, то възвращается, ли единецъ, ли свинью, то не поганьски ли се естъ? Се бо по дьяволу наученью кобъ сию держать, друзии же и закыханью веруютъ, еже бываетъ на здравье главе. Но сими дьявол лстить, и другими нравы, всячьскими лстями превабляя ны от Бога, трубами и скоморохы, гусльми и русальи. Видим бо игрища утолочена, и людей много множество, яко упихати начнутъ друг друга, позоры деюще от беса замышленнаго дела,

а церкви стоять; егда же бываетъ годъ молитвы,
мало ихъ обрѣтается въ церкви. да сего ради казни
приемлемъ отъ Бога всяческия, и нахоженье ратныхъ,
по Божью повеленью приемлемъ казнь грехъ ради нашихъ.

『というのは、神はおのれの怒りによつて異種族たちを（わが）
国にみちびき給うのである。しかして、かくして人々が打ちくだ
かれたとき、（人々は）神に向つてめざめることであらう。また
内乱の戦いは悪魔のそそのかしによつて起るものなのである。と
いうのは、神は人間たちに悪を欲し給うのではなくて、幸を（欲
し給うのであるから）。一方、悪魔は悪しき殺人と流血を喜び、
争論及び羨望、兄弟憎悪、誹謗を起しながら。ところで、それが
いづれのものにしる、国が罪をおかすと、神は、死或は飢え、或
は異教徒の来襲、或はひでり、或はいなど、或は他の罰によつて
罰し給うのである。我々に神がその様に生きよと命ぜられた悔後
に、我々が向うようになし給うために。というのは、（神は）予
言者によつて次の様に言い給うているからである。汝ら、断食と
なげきと（悲しみと）をなし、心をつくして我に帰れ（ヨエル書
；才二章十三節・・・筆者註）。ところで、もしも（我々が）
この様になすなら、（我々は）総ての罪から許されるであらう。
然し、我々が、永遠に罪深いけがれの中に豚が転げ廻つてい
るよ
うに、悪へ戻るのであれば、（我々は）そのようにありつゞける
であらう。（神は）予言者によつて次の様に言い給うている。い
わく、（我は）知つている。汝は苛酷にして、汝の首は鉄の如し
と。そのために、（我は）汝に雨をとどめ、一つの境には雨をふ
らし、しかして他の（境には）雨をふらさず、それは乾きたり。
しかして（我は）汝等を暑さ及び種々の罰にて打ちのめしたり。
しかるに汝等は我に向わず（アモス書；才四章六節から八節・・・
・筆者註）と。このために、（我は）汝等のブドウ鳥と、しかして
汝等のイチヂクと、鳥と森とをほろぼしたり。主は言い給う。

しかれども、汝等の悪を我はほろぼし得ざりき。(我は)汝等の上に、様々の病及び重き死をおくり、しかして家畜の上におのが罰を送りしなり。されど、其処でも(汝等は我に)向わずして言えり。(我等)勇を鼓せりと。いかなるまで(汝等は)汝等の悪にあきざるや? 主は言ひ給う。汝等は我が道よりはずれ、多くの者たちをまどわせたり。このために、(我は)速やかなる証人にならん。敵に対して邪魔なる情交に対して、偽りて我が名によつて誓う者たちに対して、やとい人たる者の働きに支払わざるものに対して、みなし兎及び未亡人たちを強圧するものたちに対して、よこしまなる裁きをなすものに対して。何故に(汝等は)汝等の罪を自制せずして、我がおきてを曲げ、それを守らざるや? 我が方に向え。しからば(我は)汝等の方に向くであろう。主は言ひ給う。しかして我は、天国なる深淵を汝等に打ち開こう。しかして汝等から我が怒りを除こう、汝等に総てが豊かになるまでは。しかして、汝等のブドウ鳥は、また鳥も、つきることはないであろう。されど汝等は、次の様に言いつゝ、汝等の言葉を我が上に負かした。神につかえ励むはいたづらなりと。また、その故に(人々は)我を口にては尊べど、彼等の心は我より遠く離れ立つなりと(イザヤ書; 才二十九章十三節……筆者註)。この故に、(我々が)望むものは、(我々は)入手し得ないであろう。次の様になるだろうと言われている。汝等が我を寄びよせるとき、我は汝に耳をかさないであろう。ひたすらに、(汝等が)我を探し求めようとも、汝等は(我を)見出さないであろう(箴言; 才一章二十八節……筆者註)と。というのは、(人々は)我が道を歩むことを欲しなかつた。そのために、天はとざされ、或はまた、きびしく打ちひらかれて、雨の代りにひよりをふらし、また、寒さによりて木の実を打ちのめし、また、暑さによつて大地を苦しめるのである。我々の悪業の故である。我々の悪業を(我々自からが)悔悟するならば、(神は)おのれの子供に対する

如く我々に總ての許しを与え給うてあろう、しかして、早きにつ
け、おそきにつけ雨を我々にふらせ給うてあろう。しかして、汝
等の穀穀場は、穀物で満されるであらう。ブドウ酒及び油のしぼ
り機は動き出し、しかして、(我は)、イナゴ及び^鳥ばつ及び青
虫が取りあげたものを汝に与えるであらう。汝等に(我が)向け
た我が力は偉大である、と、全能の主は言ひ給うている。(ヨエ
ル書；オ二章、二十三節後半より二十五節……筆者註)。

これらを聞いて、我々は善に進もう。裁きを求めよ。はづかしめ
られている者を許せ。悔悟に向かおう。悪に悪を以てむくい、そ
しりにそしりを以てむくいることをなさず、我々の主なる神に愛
を以て身をよせ、精進と涕泣と涙を以て總ての罪を洗い、言葉で
以てキリスト教徒と呼ばれながら、異教徒のように生きているこ
とのなきように(しよう)。もしも(我々が)出会いを信じてい
るのならば、果して異教徒のように生きていないと言えるだろ
うか？もしも誰かと僧と出会うなら、(彼は)(家へ)戻るのであ
り、世捨人或は豚に(出会うなら)、(同じようにするといふの
は)、これは異教徒的ではないか？といふのは、これは、悪魔の
教えによつてこの迷信判断を(人々が)持つているからなのであ
る。また他の者たちは、生命の健康のためにあるクシャミを信じ
ているのである。然し悪魔は、これらのことを以て(我々を)た
ぶらかしているのであり、しかして他のずるい方法によつて、あ
らゆる甘言によつて、ラツパ及びスコモロフ、グースリ(琴)及
びルサリイ(異教的死者追善祭)によつて我々を神から離してい
るのである。本当に(我々が)見るところでは、足ぶみする遊び
があり、しかして、多くの人々が群をなして今にもお互いを圧殺
しそふになり、悪魔によつて企てられた所業の光景を呈してい
るのである。一方、教会は空虚になつている。祈りの時が来る時
にも、(人々は)少数しか教会には来ない。このことのために、
(我々は)神からあらゆる罰を受けているのであり、しかして、(

敵)軍の来襲をも(受けているのである)。神の命令によつて、我々の罪の故に罰を(我々は)受けているのである。』

一読して、この文章が寄木細工であることが分る。この文章全体が『神の罰について』という一つの一貫した作品で、その作者がベチエルスキー寺院のフエオドシイ<Феодосий>であつたと考えられるにしても、年代記に持ち込んだのも彼であつたかどうか。或はまた、もしそうであつたにしても、この文章の作者自身が、どれほどの素材から寄木細工を創つたかということの方が、実は、問題の中心をなさなければならぬ。訳文の中に下線をつけた部分がバイブルからの抜き書きであつたというだけでは答えにはならないであらう。この寄木細工の教訓がレタ河におけるロシアの公たちの敗北の年即ち1068年以後に創られたことはたしかであらう。さて、これが寄木細工であつた証拠の一つは、この長い文章における一貫的な主語の定着が見当たらないことであり、人称の使い分けの混乱である。日本語訳を一読しただけでは、余りに混乱が多きいため、話のつじつまが分らないほどである。それは、バイブルの文句を不器用に織り込もうとしたことにもよつた。例えば上に引用したラヴレンチー、イバーチー、トロイツキー等の年代記の文章に比べて、ノヴゴロド才一年代記の6576年の項では、混乱した人称の取り扱い方が美しく整理されて、余程、話のつじつまが合っている。ちなみに整理されている個所とは次の様なところである(左側はラヴレンチーその他の年代記、右側はノヴゴロド才一年代記)

от соблажненья	от сважения
человеком	в человецех
подвизая	въздвизая
которей	коей
ли	или
нам	к нам

железная твоя	железные вы твоя
винограды ваше	винограда вашего
различные болезни и смерти тяжкие	различные напасти и болезни, смерти тяжкие
.....
мужаемся	мужа есмя мы.
именем моим во лжю	во лжу именем моим
взддержастесь	сдержаетесь
словеса ваша	словеса тяжка
суетен работаяй Богу	суетно работая богу
сердце их	сердце ваше
(-----)	глаголетъ господь
Сего	Того
приемлем	улучим
пуская	пушаетъ
мразом плоды узнабляя	сланю плоды ознобляя
от злюб наших	о злобах своих
дасть нам	подаст бог нам

以上、此処までの相異は、実は、上に引用した文章の前半を成す部分のものである。信仰すべき当時の民衆の異教的迷信や、村祭りのな娛樂を惡魔的なものだときめつけた後半の文章には、大きな相異点はほとんどない。これだけの証拠からも、前半が如何に固苦しい、然も、下手なつぎはぎの文章であり、後半がほとんど手を加えることの出来ないほどの完成された文章であるかゞ分かるであろう。その様なつぎはぎの文章であり、且つまた、単独の別の文章であつたために、ソフィアオ一年代記は、これを全部記事から消し去つて、6576年の項を埋めたのであろう。ニコノ年代記は余程文章を分りやすく統一したが、エルモリンスキー年代記は完全に無視し、トウヴェル年代記もまた全くこれを無視し

て書きつけてはいない。リポフ年代記もまた一言もこれにはふれていない。エルミタージュ写本によるモスコ年代記集にも、この文章は見当たらないし、ヴオロゴドスコ・ベルム年代記にも、ニコノロフ年代記にも、ウヴァロフ年代記にも、全く見当たらないのである。さて、其処で、もとの上記引用文に戻つて見るとき、我々は、『ところで異教徒のように生き』〈а поганьскы живуше〉という言葉の前と後の文章が異質であることに注意しよう。一見して、〈а поганьскы живуше〉以下の文章は、かみくだいて『異教徒のように生き』ることを説明しているにすぎない。非常に風俗描写的な、庶民の生活描写の文章である。前半の文章の結びだけでは物足らなくて、或はその結びに註釈をつけるための、非常に安易で、身近な文章である。前半の文章が結ばれた直後に、誰か、その意味をかみくだいて説明的に庶民の身近な例を引きつゝ書き足したものではなかつたか。とすると、まことに文献利用的な文章とは〈а поганьскы живуше〉以前の前半文であると言える。そして、その前半文自身が、誠に不器用なバイブルの言葉のつぎはぎであつた。その為文体は固くなり、文勢は凹凸をきわめ、後半文と余りに鮮かな対象をなしたのである。その文勢の凹凸は、『過ぎし年月の物語』の中へ持ち込まれた時に、その記者の不器用さによつてなされたものか、或は、本来、余りに生硬なものゝの転写であつたのか——ノヴゴロド才一年代記との字句の相異から見て、おそらくは、記者の不器用さによつたものである。少くとも、バイブルの言葉の内容が、後半文にみとめられるほどの域にまで生活化していなかつた頃に、幾分かは特権的態度で、シレッタントな姿勢で書かれたものであつたにちがひあるまい。だからこそ、庶民の生活に例を取つた後半文の註釈的な書き加えが必要となつたのであろう。

この様に、①バイブルのつぎはぎに基礎を置き、②ルシの実体に近づけようとして神からの背反行動のいましめ文となしたもの

を、—— ことまでは、おそらく僧たちの間における教訓的文献であつたであらう。—— ③庶民的な例を引いて、具体的に註釈をつけて、結局三段構えで、この文章は構成されていた。そして、この積み重ねの文章を、外敵侵入の記事の中間にサンドイツし、「我々は前の(話)に戻ろう!」《Мы же на предежашее възвратимся》として、ルソの公たちの敗北後の物語を書き取つたものがラヴレンチー年代記 6575 年、その他の年代記 6576 年の項にみられる『過ぎし年月の物語』の一節なのである。そして中間にはさまれていた上記引用文中、前半の固い文体の教訓は、実に、スラトストルイ《Златоструй》からの抜き取りであつたと思われる。既にこの教訓集はシメオン《Симеон》帝(9～10世紀)の頃に古代スラヴ語に訳されていたのであつた。文獻的に出處を求めてさかのぼるとすれば、バイブルに至るよりも、むしろ、《Златоструй》の古代スラヴ語訳に至るであらう。

さて、次にラヴレンチー、イバーチー、トロイツキー等の年代記における 6601(1093)年の項を注目しよう。この年の項の記事は非常に長い。此處では先づその前部十分の一ほどを取りあげて検討してみよう。前部十分の一だけでも、出典的には単一な文章ではないからなのである。

В лето 6601, индикта 1 лето. Преставися великий князь Всеволод, сын Ярославль, внук Володимерь, месяца априля в 15 день, а погребен бысть 14 день, недели сущи тогда страстней и дни сущю четвертку, в онь же положен бысть в гробе в велицей церкви святых Софья. Сий бо благоверный князь Всеволод бе издетьска боголюбив, любя правду, надбля убогья, въздая честь епископом и презвутером, излиха же любяше черноризи, подаяше требованье им, бе же и сам въздержася от пьянства и от похоти,

тем любим бе отцем своим, яко глаголати отцю к нему: "сыну мой! Благо тебе, яко слышу о тебе кротость, и радуся, яко ты покоиши старость мою; аще ти подасть Бог прияти власть стола моего, по братьи своей, с правдою, а не с насильем, то егда бог отведеть тя от житья сего, да ляжеш, идеже аз лягу, у гроба моего, понеже люблю тя паче братьи товее". Се же сбысться отца его, якоже глаголал бе: сему примшу послеже всея братья стол отца своего, по смерти брата своего, се же Кыеве княжа быша ему печали болше, паче неже сядящю ему в Переяславлѣ, сядящю бо ему Кыеве, печаль бысть ему от сыновец своих, яко начаша ему стужати, хотя власти, ов сѣя, ов же другое; се же смиривая их, раздаваше волость им. В сих печаль всташа и недужи ему, припеваше старость к сим. И нача любити смысл унхъ, съвет створя с ними; си же начаша заводити и неголовати дружины своя первыя, и людем не доходити княже правды, начаша тиуни грабити, людий продавати, сему не ведушю в болезнех своих.

『6601(1093)年。インジクトオ一年。ヤロスラフの息子、ヴォロジメルの子であるフセヴォロド大公が四月十三日に死去し、十四日に葬られた。その時は受難週であり、しかして木曜日である時に、その日に、聖ソフィヤ大教会の中で棺に安置された。(ここまで年代記一般にみられる事実記録の典型的な文章……筆者註)。ところで、この信仰厚いフセヴォロド公は、幼い頃より神を愛し、正義を愛し、乞食たちに気を配り、主教及び僧たちに榮譽を与え、ところで特に修道僧たちを愛していて、彼等

の求めに応じていた。ところで、自からもまた、飲酒及び慾情を節し、そのことによつておのれの父に愛された。(ここまでは教会内で死者の追善と表彰を兼ね、故人の榮譽をたゞえ、記念する折の、過去帳的文章であつたと思われる……筆者註)。彼に向つて父が言つたところによれば、「我が息子よ！ 汝に幸いあれ。(我は)汝の柔和さについて聞いている。しかし、我が老境を(汝が)安んじてくれているのを(我は)喜こんでいる。もしも、汝に、おのれの兄たちの後に我が王座の権力を暴力によらずして正義によつて取ることを神が許し給うならば、神が汝をこの世から去らしめ給う時、我が懺たわるところ、即ち、我が棺のかたわらに(汝は)懺たわることがよい。というのは、(我は)汝の兄たちにもまして汝を愛しているからである」と。(この言葉は、宗教的な世界への傾きにおいて書かれた遺書のようなものであつたであろう。勿論、それは、使者の口上のようなものから發達した表現タイプをもつていた……筆者註)。(父王が)語つた、彼の父の言葉は實現した。この者が、おのれの父の王座を、おのれの兄の死後、總ての兄弟の後に受け取つた時、見よ、キエフに(公とし)坐したが、彼には、彼がベレヤスラヴリに坐していた時にもまして悲しみが多かつた。彼がキエフに坐していたとき、彼にはおのれのおいたちのために悲しみがあつた。(彼等は)領地を望み、或者はこれを、他の者はあれを(望み)、彼に苦勞をかけはじめたからである。ところが見よ。(彼は)彼等をしづめながら、彼等に領地を分け与えていたのである。かくの如き悲しみの内に、病氣もまた彼に立ち現れていた。この者に老境が来りつゝあつたのである。(賢者の一代記の文章であろう……筆者註)。しかし彼は若き者たちの考えを愛しはじめ、彼等と相談をしていたのである。これらの者たちは、(彼が)おのれの年長親兵団を輕視するように彼を仕向けはじめた。しかし、人々は公の正しき裁にありつくことができなかつた。(若者たちは)

略奪を行い、人々を売りはじめた。(しかして公は)おのれの病の中にあつてこのことを知らなかつたのである。』

訳文中に()印で註を付けず、下線をほどこした部分もまた、その前の部分と同じく一代記的文章にはちがいないが、この下線の部分には明らかに照応する文章が古くみとめられるのである。特にこの部分について考えてみよう。この部分は、どうやら、『過ぎし年月の物語』以前の年代記的作品『原初の集』《Начальный свод》(現在には伝えられていない)にあつた文章の照り返しのようと思われる。というのは、ソヴゴロドオ一年代記は、初めて年号を設定してルシの國の始まりを6362(854)年とするが、その年号設定の直前、即ち、オ一年代記の序文に相当するところで、この文章と照応し得る文章を先づ書きとめているからである。また、ソフイヤオ一年代記も同様に、ソヴゴロド年代記とほぼ同一文を、年号設定直前の序文にもつているからである。此処では、ソフイヤオ一年代記の序文を引用してみよう。特に下線の部分と先に引用した文章の下線の部分とを注意しよう。ソヴゴロドオ一年代記の序文の一部は嘗つて引用して日本語訳をつけたことがあつたので、此処では下線の部分だけに日本語訳をつけることにして：

О НАЧАЛЕ РУССКАЯ ЗЕМЛЯ И О КНЯЗЕХ, КАКО И ОТКУДУ БЫША.

Вас молю, стадо Христово, с любовью, приклоните ушеса ваша разумно: како быша древнии князи и мужи их, и како отбараняху Русьския земля, и иныя страны приимаху под ся. Ти бо князи не собираху многа имения, не творимых вир, ни про дахь въскладаху на люди; но оже будяше правая вира, и ту возма, даяше дружине на оружие. А дружина его кормляхуся, воюючи иныя страны,

бьющися: "братие! потягнем по своем князи и по Русьской земли". Не жадаху: "мало ми есть, княже, 200 гривен"; не кладаху на свои жены златых обручей, но хожаху жены их в серебре, и расплодили были землю Русьскую. За наше несытьство навел Бог на ны поганья, а и скоти наши, и села наша, и имения за теми суть; а мы злых своих не останем. Пишетъ бо ся: богатство неправдою собираемо, скоро извеется. И паки: собираеть, и не весть кому собираеть. И паки: лучше малое праведнику, паче богатства грешных многа. Да отселе, братия възлюбленная моя, останемся от несытьства своего; доволни будите уроки вашим. Яко и Павел пишетъ: ему же дань, то дань, ему же урок, то урок; никому же насилия творяще, милостынею цветуще, страннолюбием в страсе Божии и правовернии свое спасение съдевающе, да и zde добре поживем, и тако вечный жизни причастници будем. Се же таковая. Мы же от начала Русьской земли до сего лета и вся по ряду известно да скажем, от Михаила царя до Александра и Исакия.

ところで下線をつけた部分には『多くの財産をも集めず、罰金をも取り立てず、人々に売却（刑）をも課しはしなかつた』とある。扱て、これを先にあげた文章の下線の部分と比べて見るがよい。老年の公が病の中にあつて気づかなかつた折に、相談相手として重宝がられた若い者たちが、増長してなしていたことは、『公の正しき裁きに会うことができない』ように人々を妨害することであつた。というのは、即ち、税は取り立てられ、罰金は取り

立て、罪をおかしたものを奴隷として売つて着服することであつた。ラヴレンチー、トロイツキー、イパーチー各年代記にみられる『過ぎし年月の物語』のこの年代の項のこの文章の記入者は、或は作者は、明らかに、ノヴゴロド年代記や、ソフィヤ年代記の序文にもなるほどの古い教訓的文章を知つていた。そして、その文章の一節と全く裏腹のことを此処に書き出して、フセヴオロド大公をないがしろにして、道からはずれた増長者たちを厳しく非難したのであつた。だから、其処には、文獻的には、尊重さるべき古い中軸的教訓が倒立的に映し出されたと言わなければならぬ。ちなみに、倒立的映像の文章ではなく、古いまゝの立像的文章を序文に用いたノヴゴロドオ一年代記及びソフィヤオ一年代記では、この6601年の項は、単に「Всеволод преставися; и съде Святополкъ въ Киевѣ. В то же лѣто побѣдиша Половци Святополка」『フセヴオロドが死去した。しかしてスヴィヤトボルクがキエフに坐した。ところでこの同じ年にボロヴェツたちがスヴィヤトボルクを打ち負かした』（ノヴゴロドオ一年代記の場合）とあるか、或は、教訓的文章の倒立も、追悼的文章も、全く見当らず、単に普通の年代記的記録を次の様に書きつけているにすぎない（ソフィヤオ一年代記の場合）。

В лето 6601. Преставися князь великий Всеволод
месяца априля в 13 день, и положен бысть в святой
Софеи в Киеве. Рече же Володимер: "аще сяду на
столе отца своего, то рать имам с Святополком",
яко стол преже отца его бысть. И посла по Свято-
полка к Турову, а сам иде к Чернигову. Того же
лѣта седе Святополк Изяславичь в Киеве на
столе отца своего; си же много пострада за зе-
млю м погаными Печенегы. Приидоша на Рус-

бскую землю, Святополк же и Володимер Всеволодичь Монамах бишася и ними об ону страну Стугны; и бысть брань велика зело, и побежени быша от Половцев грех ради наших; овии от оружия и мечя изомроша, а друзии истопоша. Тогда же князь Ростислав Всеволодичь утопе, и мало Володимер не утопе, хотя помощи брату своему; и многое множество паде за Русьскую землю. Святополк же прииде к Киеву сам третий, а Володимер к Чернигову; и бысть плачь велик, а не радость. Половци же взяша град Торчъский.

〔6601(1093)年・四月十三日にフセヴォロド大公が死去した。しかしキエフの聖ソフィヤ(寺院)に安置された。ところでヴォロジメルは言つた。//おのれの父の王座に、もしも(我が)坐すならば、スヴィヤトボルクと戦うであらう//と。王座は以前彼の父のものであつたからである。しかしスヴィヤトボルクを迎えにトゥロフへ使者をたてた。一方、自分はチエルニゴフに行つた。その同じ年、イジヤスラフの息子スヴィヤトスラフがキエフのおのれの父の王座に坐した。この者はルシの国のために異教徒のベチエネギと(戦つて)多くの労苦をなした。ルシの国にボロヴェツ人たちが進攻し来たり、スヴィヤトボルクは、またヴォロジメル・フセヴォロジチ・モナマフは、ストウグナ(河)の対岸で彼等と戦つた。しかしきわめて大きな戦があつた。しかし、我々の罪の故にボロヴェツ人たちに打ちまかされた。或者は武器及び劍によつて死に、また他の者はおぼれた。その時、ロスチスラフ・フセヴォロジチ公はおぼれた。しかし、ヴォロジメルはおのれの弟を助けんとして、あやうくおぼれるところであつた。ルシの国のために多くの人たちが倒れた。ところで、スヴィヤトボルクは自分で三度目にキエフに帰り来たつたが、ヴォロジ

メルはチエルニゴフに（もどつた）。大いなる涙があつて、喜びはなかつた。ところで、ボロヴェツ人たちはトルテスキイの町を占めた。』

さて、次の記事へ読み進んでみよう。『過ぎし年月の物語』（ラヴレンチー年代記による）の6604（1096）年の項も非常に面白い組み合わせの文章になつている。即ち、その初めには、例によつて、公たちを中心とする政治的支配層がボロヴェツによる攻撃を受け、防戦する記録を書きとめる。スヴィヤトボルク〈Святополк〉とヴオロジメル〈Володимер〉の二人の公が中心をなした物語である。それは、戦争物語であり、前述した使者の口上のやりとりであり、一部はまた武勇伝の変形でもあつた。だから、この初めの部分に文献的出典を求めることはないであろう。ところが、それに続いて、外敵ボロヴェツによる教会の焼打ちの物語がつどいてゐる。然し、それも、文献的な寺伝によるものではなくて、僧たちの間に伝えられた受難伝承によるものなのかも知れない。ところが、神のいます教会まで焼打ちにする非道な異教徒たちの発生源に話が及ぶと、其処には明らかに古い文献が照り映えるのである。然も面白いことに照り映える文献は一つではない。即ち、その一節には、次の様にある（ラヴレンチー年代記）。

Ишьли бо суть си от пустыня Нитривьскыя, межю востоком и севером; ишьли же суть их колен 4; Торкъмени и Печенези, Торци, Половци. Мефодий же сведетельствует о них, яко 8 колен пробегли суть, егда исече Геден, да 8 их бежа в пустыню, а 4 исече. Друзии же глаголють: сыны Амоновы. Се же несть тако: сынове бо Моавли, Хвалиси, а сынове Аммонови болгаре, а Срацини от Измаила творятся Сарини, и прозваша имена собе

Саракыне, рекше: Сарини есмы. Темже Хвалиси и Болгаре суть от дочерю Лотову, иже зачастую от отца своего, темже нечито есть племя их: а Измаил роди 12 сына, от них же суть Торкъмени, и Печенези, и Торци, и Кумани, рекше Половци, иже исходятъ от пустыне. И по сих 8 колен к кончине века изидуть, заклепении в горе Александром Македоньским, нечистыя человеки.

『というのは、これらの者たちは東と北の間のエトリフ（エトリフ）の荒野から出て来たものであつた。彼等は四つの血統として出て来ているのである。即ちトリクメニ及びベチエネギ、トルツイ、ポロヴェツである。彼等についてメフオジイは証言している。即ち、八つの血統が、（彼等を）ゲデオンが斬り殺したとき逃げのびたのである。しかして彼等八つ（の血統）は荒野に逃げた。しかして四つ（の血統）を（ゲデオンは）斬り殺したと。ところで、他の者たちは言つている。即ち（彼等は）アモンの息子たちであると。ところで、これは左様ではない。（これらは）モアの息子たちのフヴァリンであつて、アセンの息子たちはボルガレなのである。ところで、サラエンたちはイスマイルからサリニ（サラの息子たち）をなし、自からの名をサラキネと呼んだ。曰く。（我々は）サリニであると。かくして、フヴァリン及びボルガレは、おのれの父によつて身ごもらされたロトの娘たちから（発している）のである。その故に彼等の種族はけがれている。ところでイスマイルは十二人の息子を生んだ。彼等から（出た）ものがトルクメニ、及びベチエネギ、及びトルツイ、及び、ポロヴェツというクマニであり、彼等は荒野から来つていのである。これらの八つの血統の後に、この世の終る時に、マケドニヤのアレクサンドルによつて山中にとじこめられた不浄なる人間たちが出て来るのである』。

年代記者は、此処では明瞭にメフオジイが証言している〈Мефодий же свѣдѣтельствуеть〉、『他の者たちは言つてゐる』〈Друзии же глаголють〉と二つの出典を引き合ひに出している。メフオジイとは小アジアのサキヤ〈Ликня〉のバトル〈Патар〉という町の主教であつたと言われる三世紀から四世紀頃の人物を指している。彼の手になる『天啓』（——一般にロシアでは〈Откровение Мефодия Патарского〉として知られている——）に準拠して、それ以下の教語を書きつゞつてゐると思われる。メフオジイの『天啓』にはアダムから始まつて、世界創造七千年にして世が終るといふ所までの物語が書かれ、特に世界が終る最後の部分はロシアの古代文学では盛んに利用されていた。この『天啓』は古代ブルガリヤで古代スラヴ語による二つの訳書が造られていた。その内の一つは十三世紀から十四世紀にかけて消失し、一つだけ残つて来たが、それによれば、年代記者が『メフオジイは証言している』として、それ以下に替いた教語は、『天啓』の次の部分に當るであらう。

На коньчину бо седмыа тысяща разоритися царство Перьсьско, и тогда изыидеть племя Измаилево от пустыня Етрева, и ишедше ис пустыня соберутся вси вкупе..... и власти почнуть до входа и до исхода севернаго и до востока и запада и будутъ вси под властью их..... и престанеть служба божиа и устанеть всяка песнь церковная.....

『というのは、七千年の世の終りにペリシの王国は亡ぶであらう。しかして、その時には、エトリの荒野からイズマイルの種族が出て来るであらう。しかして荒野から出て来て、総て（彼等は）一つにまとまるであらう。……しかして、入口まで及び北の出口まで、及び東まで、及び西まで権力をふるいはじめ、しかして、総ての（者たち）は彼等の権力の下にあるであらう。……しかし

て、神への勤行は中止され、教会のあらゆる歌はとまり……』

この一節を文獻的な下敷にした年代記者は、続いてルシの外敵——東方遊牧民族をバイブルにおけるイスマイルから出たものたちであるとし、今度ハマルトルスの年代記から引き出して来て、イスマイルには十二の息子がいたとし、其処からゲデオンに殺された四人を除いて八つの血統を考えた。メフオジイの『天啓』には八つの血統のこと以外には何もふれられていないから、十二マイナス四即ち八という計算はハマルトルスによつたのであろう。だからこそ、それを『他の者たちが言っている』と断り書きしたものだと言わなければならぬ。この様に、年代記者は『過ぎし年月の物語』を構成して来て、アレクサンダー大王によつて山にとじこめられた異教的蛮人の話に及んだ。そして、この物語は、山にとじこめられた人間たちの物語へ続くべきであつた。ところが、ラヴレンチー年代記だけは、その間に一つの教訓を差し込んでしまつて、話の流れを途切らせているのである。然も、その教訓は馬鹿に長い。ブラジミル・モノマハ《Владимир Мономах》の教訓である。ラヴレンチー年代記だけが、本来単独であるべき教訓を何故かこの1069年の項に差し入れてしまつた。（そのことについては、シャフマトフの考察がある）『過ぎし年月の物語』の文獻的な基盤をそすねる以上、この問題は素通りできないであらう。この教訓は完全に独立的な別の文獻であつたはずだからである。ともあれ、その教訓とは次の様なものである。

Поучение

Аз худый дедом своим Ярославом, благословленным, славным, нареченем в крещении Василий, Русьским именем Володимер, отцем възлюбленным и матерью своею Мъномахы.....
..... (Далее пробыл в четыре строки с половиною; нечто пропущено и продолжение речи без начала)

.....
.....
.....
..... и хрестьяных лю-
дий деля, колико бо сблюд по милости своей и по
отни молитве от всех бед. Седя на санех, помы-
слих в души своей и похвалих Бога, иже мя сих
дней грешнаго допроводи. Да дети мои, или ин кто,
слышав сю грамотицю, не посмейтеся, но ому же
любо детей моих, а приметь е в сердце свое и не
ленитися начнеть, такоже и тужатися. Первое,
Бога деля и душа своея, страх имейте Божий в
сердци своем и милостыню творя неоскудну, то бо
есть начаток всякому добру. Аще ли кому не любя
грамотиця си, а не поохрищаются, но тако се ре-
куть: на далечи пути, да на санех седя, безле-
пицю си молвил. Усретоша бо мя слы от братья мо-
ея на Волзе, реша: "потъснися к нам, да выженем
Ростиславича и волость их отъимем; иже ли не по-
идеши с нами, то мы собе будем, а ты собе". И
рех: "аще вы ся и гневаете, не могу вы я ити, ни
креста переступити". И отрядив я, взем Псалтырю
в печали, разгнух я, и то ми ся выня: вскую печал-
луеши, душ? Вскую смущаеми мя? И прочая. И по-
том собрах словца си любая, и складох по ряду, и
написах: аще вы последняя не любя, а передняя
примайте. Вскую печална еси, душе моя? Вскую
смущаеми мя? Упова на Бога, яко исповемся ему.
Не ревнуй лукавнующим, ни завиди творящим без-
аконье. Зане лукавнуущии потребятся, терпящи

же Господа, ти обладають землю. И еще мало, и не будет грешника; взиеть места своего, и не обрящеть. Кротции же наследять землю, наслаждаться на множестве мира. назираеть грешный праведнаго, и поскрегчеть на нь зубы своими; Господь же посмеетя ему, и прозрить, яко придетъ день его. Оружья извлекоша грешници, напряже лук свой истреляти ница и убога, закалати правыя сердцем. Оружье их видеть в сердца их, и луци их скрушатся. Луче есть праведнику малое, паче богатства грешных. многа. Яко мышца грешных скрушится, утверждаетъ же праведныя Господь. Яко се грешници погыбнуть; праведныя же милуя и дають. Яко благословящии его наследять землю, кленущии же его потребятся. От Господа стопы человеку исправятся. Егда ся падеть и не разбьеться, яко Господь подъемлетъ руку его. Ун бех и ~~У~~старехся, и не видех праведника оставлена, ни семени его просяща хлеба. Весь день милуеть и взаим дають праведный, и племя его благословлено будетъ. Кулонися от зла, створи добро, взищи мира и пожени, и живи в веки века. Внегда стати человеком, убо живы пожерли ны быша; внегда прогневатися ярости его на ны, убо вода бы ны потопила. Помилуй мя, Боже, яко попра мя человек; весь день боряся, стужи ми. Попраша мя врази мои, яко мнози борущися со мною свыше. Возвеселится праведник, и егда видить месть; руке свои умьеть в крови грешника. И рече убо человек: аще есть плод праведника, и есть убо Бог судья земли. Измий мя от

враг моих, Боже, и от втсающих на мя отъими мя. Избави мя от творящих безаканье, и от мужа крови спаси мя; яко се уловиша душу мою. И яко гнев в ярости его, и живот в воли его; вечер водворится плачь, а заутра радость. Яко лучши милость твоя паче живота моего; и устне мои похвалята. Яко благословлю тя в животе моем, и о имени твоём въздею руже мои. Покры мя от соньма лукаваго, и от множества деляющих неправду. Възвеселитесь вси праведнии сердцем. Благословлю Господа не всяко время воину, хваля его, и прочая. Якоже бо Василий учаше: собрав ту уноша, душа чисты, нескверни, телеси худу, кротку беседу и в меру слово Господне, яди, питью без плица велика быти; при старых молчати, премудрых слушати, старейшим покарятися, с точными и меншими любовь имети; без луки беседующе, а много разумети; не свереновати словом, ни хулити беседою, не обило смеятися, срамлятися старейших, к женам нелепым не беседовати, долу очи имети, а душу горе, пребегати, не стрекати учить; легких власти ни в кую же имети, еже от всех честь. Аще ли кто вас может инем услети, от Бога мьзды да чаеть и вечных благ насладитя. О Владычице Богородице! Отъими от убогаго сердца моего гордость и буеть, да не възношюся суетою мира сего в пустошнем сем житьи. Научися, верный человек, быти благочестно Делатель. Научися, по евангельскому словеси, очима управленье, языку удержанье, уму смиренье, телу порабощенье, гневу погубленье, помысл

чист имети, понужаяся на добрая дела, Господа ради: лишаем не мести, ненавидим любо гоним, терпи, хулим, моли, умертви грех, избавите обидима, судите сироте, оправдайте вдовицу. Придете, да сожемься, глаголетъ Господь; аще будетъ греси ваши яко оброщени, яко снег обелю я, и прочее. Восияетъ весна постная, и цвет покаляя; очистим себе, братья, от всякоя крови плотскыя и душевныя, Святодавцю вопьюще рцем: слава тебе, человеколюбче! По истине, дети моя, разумеите, како ти есть человеколюбецъ Бог милостив и премилостив. Мы человеци грешни суще и смертни, то оже ны зло створить, то хоцем и пожрети и кровь его прольяти вскорее; а Господь нашъ, владея и животом и смертью, согрешенья наша выше главы нашея терпить, и пакы и до живота нашего яко отецъ чадо свое любя, бья, и пакы привлечь е к себе. Также и Господь нашъ показал ны есть на врагы победу, 3-ми дела добрыми избыти его и победити его: поканьем, слезами и милостынею; да то вы, дети мои, не тяжька заповедь Божья, оже теми дела 3-ми избыти грехов своих и царствия не лишитися. А Бог деля не ленитесь, молю вы ся, не забывайте 3-х дель тех: не бо суть тяжка; ни одиночьство, ни чернечьство, ни голод, яко инии добрии терпять, но малым делом уллучити милость Божью. Что есть человек, яко помниши и? Велий еси, Господи, и чудна дела твоя, никакъже разум человеческ не можетъ исповедати чудес твоих. И пакы рчем: велий еси, Господи, и

чюдна дела твоя, и благословено и хвално имя твое
в веки по всей земли. Иже кто не похвалить, ни
прославляеть силы твоея и твоих великих чудес
и доброт, устроеных на сем свет; како небо ус-
троено, како ли солнце, како ли луна, како ли
звезды и тма и свет, и земля на водах положена,
Господи, твоим промыслом! Зверье разноличнии, и
птица и рыбы, украшено твоим промыслом, Господи!
И сему чкду дивуемся, како от персти создав че-
ловека, како образи разноличнии в человеческих
лицах, аще и весь мир совокупить, не вси в один
образ, но кый же своим лиць образом, по Божии
мудрости; и сему ся подивуемы, како птица небес-
ная из ирья идуть, и первее наши руце, и не ста-
вятся на единой земли, но и сильныя и худыя иду-
ть по всем землям, Божиим повеленьем, да напол-
нятся леси и поля. Все же то дал Бог на угодые
человеком, на снеть, на веселье. Велика, Гос-
поди, милость твоя на нас, яже та угодыя створял
еси человека дела грешна. И ты же птице небесныя
умудрены тобою, Господи, егда повелиши, то вспо-
ють и человеки веселять тебе; и егда же не по-
велиши им, язык же имуще онемеють. А благословен
еси, Господи, и хвален зело! Всяка чюдеса и ты
доброты створив и сделав, да иже не хвалить тебе,
Господи, и не веруеть всем сердцем и всею душею
во имя Отца и Сына и святаго духа, да будет про-
клят. Си словца прочитаюче, дети моя, божествен-
ая, похвалите Бога, давшего нам милость свою,
и се от худаго моего безумья наказанье. Послу-

шайте мене, аще не всего примете, то половину. Аще вы Бог умякчить сердце, и слезы своя испустите о гресех своих, рекуще: "яко блудницу и разбойника и мытаря помиловал еси, тако и нас грешных помилуй. И в церкви то дейте и ложася. Не грешите ни одну же ночь, аще можете, поклонитися до земли, али вы ся начнетъ не мочи, а трижды; а того не забывайте, не ленитесь, тем бо ночным поклоном и пеньем человек побеждает дьявола, и что в день согрешить, а тем человек избывается. Аще и на кони ездяче не будетъ ни с кым орудья, аще инех молитв не умеете молвити, а "Господи помилуй" зовете безпрестани, втайне; та бо есть молитва всех лепши, нежели мыслити безлепицу. Всего же паче убогих не забывайте, но елико могуще по силе кормите, и придавайте сиrote, и вдовицу оправдате сами, а не вдавайте сильным погубити человека. Ни права, ни крива не убивайте, ни повелевайте убити его; аще будетъ повинен смерти, а душа не погубяете никакая же хрестьяны. Речь молвяче, и лихо и добро, не кленитесь Богом, ни хреститесь, нету бо ти нужда никакоея же; аще ли вы будетъ крест целовати к братъи, или к кому, али управивше сердце свое, на нем же можете устояти, тоже целуйте и целовавше блюдете, да не приступни погубите душе свое. Епископы и попы и игумены, с любовию взимайте от них благословенье, и не устранныйтеся от них, и по сиде любите, да примете от них молитву от Бога. Паче всего гордости не име-

йте в сердцах и в уме, но рцем: смертни есмы,
днесъ живи, а завтра в гроб; се все, что ны
еси вдал, не шане, но твое, поручил ны еси на
мало дней. И в земли не хороните, то ны есть
велик грех. Старыя чти яко отца, а молодыя яко
братью. В дому своем не ленитесь, но все видите;
не зрите на тивуна, ни на отрока, да не посме-
ются приходящим к вам, и дому вашему, ни обеду
вашему. На войну вышед, не ленитесь, не зрите
на воеводы, ни питью ни еденью не лагодите, ни
спалью; и стороже сами наряживайте, и ночь от-
всюду нарядивше около вой тоже ляжите, а рано
встанете; а оружья не снимайте с себе, вборзе
не розглядавше, леношами внезапно бо человек по-
гыбаеть. Лже блюдися и пьянства и блуда, и том
бо душа погыбаеть и тело. Куда же ходяше путем
по своим землям, не дайте пакости деяти отроком,
ни своим ни чужим, ни в селех, ни житех, да не
кляти вас начнутъ. Куда же поидете, идеже станете,
напойте, накормите унеина; и боле же чтите
гость, откуда же к вам придетъ, или прост, или
добр, или сол, аще не можете даром, брашном и
питьем; ти бо мимоходячи прославятъ человека по
всем землям, либо добрым, либо злым. Болнаго
присетите; над мертвеця идете, яко вси мертвени
есмы; и человека не минете не привечавше, добро
слово ему дадите. Жену свою любите, но не дайте
им над собою власти. Се же вы конецъ всему, страх
Божий имейте выше всего. Аще забываете всего, а
часто прочитайте: и мне будетъ без сорама, и

вам будетъ добро. Его же умеючи, того не забываютъ добраго, а его же не умеючи, а тому ся учите; якоже бо отецъ мой, дома сядя, изучаеше 5 языкъ. В томъ бо честь есть отъ инехъ земель. Лениость бо всему мати, еже умееть, то забудеть, а его же не умееть, а тому ся не учить; добре же творяше, не мозите ся ленити ни на что же доброе. Первое къ церкви: да не застанеть васъ солнце на постели. Тако бо отецъ мой деяше блаженный и вся добрии мужи свершений: заутреню отдаше Богови хвалу, и потомъ солнцю въсходящу, и узревше солнце, и прославити Бога с радостью и рече: просвети очи мои, Христе Боже, и дал ми еси светъ твой красный; и еще, Господи, придожи ми лето къ лету, да прокъ греховъ своихъ покаявша, оправдивъ животъ, тако похвалю Бога и седше думати с дружиною, или люди оправливати, или на ловъ ехати, или поездити, или лечи спати: спанье есть отъ Бога присужено полудне, отъ чина бо поживаетъ и зверь и птици и человеци. А се вы поведаю, дети моя, трудъ свой, оже ся есмь тружалъ пути дея и ловы 13 летъ. Первое в Ростову, сквозе Вятиче, посла мя отецъ, а самъ иде Курьску, и пакы 2-е к Смоленьску со Свавкомъ Скордятичемъ, той пакы и отъиде к Берестию со Изяславомъ, а мене посла Смолиньску; то и Смолиньска идохъ Володимерю. Тое же зимы то и посласта Берестию брата на головне, иде бяху пожгли, то и ту блядъ городъ тихъ, та идохъ Переяславлю отцю, а по Велице дни изъ Переяславля та Володимерю, на Сутейску

мира творит с Ляхы. Оттуда пакы на лето Володимерю опять. Та посла мя Святослав в Ляхы: ходив за Глоговы до Чешьскаго леса, ходив в земли их 4 месяци; и в то же лето и дѣтя ся роди старейшее Новгородское. Та оттуда Турову, а на весну та Переяславлю, таже Турову. И Святослав умре, и яз пакы Смолиньску, а и смолиньска той же зиме та к Ковугороду, на весну Глебови в помочь; а на лето со отцем под Полтеск, а на другую зиму с Святополком под Полтеск, ожгоша Полтеск, он иде Новгороду, а я с Половци на Одрьск, воюя, та Чернигову. И пакы и Смолиньска к отцю приходх Чернигову; и Олег приде из Володимеря выведен, и позвах и к себе на обед со отцем в Чернигове, на Краснем дворе, и вдах отцю 300 гревен золота. И пакы и Смолиньска же пришед, и приходх сквозе Половечьскыи вои бьяся до Переяславля, и отца налезох с полку пришедше. То и пакы ходихом, том же лете, со отцем и со Изяславом биться Чернигову с Борисом, и победедихом Бориса и Отлга. И пакы идохом Переяславлю, и стахом во Оброве. И Всеслав Смолнеск ожьжк, и аз всед с Черниговци о двою коню, и не застахом в Смолиньске; тем же путем по Всеславе пожег землю и повоевав до Лукамля и до Логожьска, та на Дрьютск воюя, та Чернигову. А на ту зиму повоеваша Половци Стародуб весь, и аз шед с Черниговци и с Половци, на десне изъимахом князи Асадука и Саука, и дружину их избиша; и назаутрее за Новым городом реэ гнахом сильны вои Бел-

катгина, а се мечи и полон весь отяхом. А в Бя-
тичи ходохом по две зиме, на Ходоту и на сына
его, и ко Корьдну ходих 1-ю зиму, и паки по Изя-
славичих за Микулин, и не постигохом их; и на ту
весну к Ярополку совкупляться на Броды. Том же
лете гонихом по Половцях за Хорол, иже Горошин
взяша. И на ту осень идохом с Черниговци и с По-
ловци, с Читеевичи, к Меньску: изъехахом город
и не оставихом у него ни челядина, ни скотины.
На ту зиму идохом к Ярополку совокуплятися на
Броды, и любовь велику створихом. И на весну
посади мя отець в Переяславли перед братьею, и
ходихом за Супой; и едучи к Прилуку городу, и
сретоша ны внезапно Половечьские князи 8 тысячъ,
и хотехом с ними ради битися, но оружье бяхом
услали наперед на повозех, и внидохом в город:
толко Семць яша одного живого, ти смерд не-
колико, а наши оных боле избиша и изымаша, и
не смеша ни коня пояти в руце, и бежаша на Мулу
тое ноци. И заутра, на Госпожин день, идохом
к Беле вежи, и Бог ны поможе и святая Богороди-
ца: избиша 900 Половецъ, и два князя яша Багу-
барсова брата Асиня и Сакзя, а два мужа толко
утекоста. И потом на Святославль гонихом по
Половцях, и потом на Торческий город, и потом
на Гюргев по Половцях. И паки на той же стороне
у Красна Половци победихом. И потом с Ростиславом
же у Варина веже взяхом. И потом ходив Володимерю,
паки Ярополка посади, и Ярополк умре. И паки по
отни смерти и по Святополце на Суле бившеса с

Половци, до вечера, быхом у Далепа, и потом мир створихом с Тугорканом и со имени князи Половечьскими. И у Глебови чади пояхом дружину свою всю. И потом Олег на мя приде с Половечьскою землею к Чернигову, и бишася дружина моя с ним 8 дний о малу греблю, и не владуче им в острог. Съзидавъси хрестьяных душ и сел горящих и монастырь, и рех: "не хвалитися поганым". И вдах брату отца своего место, а сам идох на отца своего место Переяславлю. И внидохом на святаго Бориса день из Чернигова, и ехяхом сквозе полкы Половчские не в 100 дружине, и с детми и с женами; и облизухутся на нас акы волци стояще, и от перевоза и с гор; Бог и святой Борис не да им мене в користь, неврежени доидохом Переяславлю. И седев в Переяславли 3 лета и 3 зимы, и с дружиною своею, и многы беды прияхом от рати и от голода. И идохом на вои их за Римов, и Бог ны поможе, избиша и, а другия поимаша; и паки Итлареву чадь избиша, и вежи их взяхом, шедше за Голтавом. И Стародубу идохом на Ольга, зане ся беше приложил к Половцем. И на Бог идохом, с Святополком на Боняка за Рось. И Смолинську идохом, с Давыдом смирившеся. Паки идохом другое с Воронице. Тогда же и Торци придоша ко мне, из Половецъ Ичителичи, идохом противу им на Сулу. И потом паки идохом к Ростову на зиму, и по 3 зимы ходихох Смолинську; и се ныне иду Ростову. И паки с Святополком гонихом по Боняце, по ли оли убиша, и не постигохом их, и потом по Боняце же гонихом

за Русь, и не постигохом его. И на зиму Смоленску идох, и Смоленска по Велице дни выдох. И Гюргева мати умре: Переяславлю пришед на лето, собрах братью. И Боняк приде со всеми Половци к Коснятиню, идохом за не из Переяславля за Суду; и Бог ны поможе, и полки их победихом, и князи изымахом лепшии. И по Рожестве створихом мир с Апою, и поим у него дчерь, идохом Смоленську; и потом идох Ростову. Пришед из Ростова, паки идох на Половци на Урубуну с Святополком, и Бог ны поможе. И потом паки на Боняка к Лубьну, и Бог ны поможе. И потом ходихом в войну с Святополком, и потом паки на Дон идохом с Святополком и с Давыдом, и Бог ны поможе. И к Выреви бяху пришли Аепа и Боняк, хотеша взяти и: ко Ромну идох со Олгом и с детми на нь, и они очитивше бежаша. И потом к Меньску ходихом на Глеба, оже ны бяше люди заял: и Бог ны поможе, и створихом свое мышленое. И потом ходихом к Володимерю на Ярославля, не терпяче злоб его. А из Чернигова до Кыева нестишь ездих ко отцю, днем есм. переездил до вечерни; а всех путей 80 и 3 великих, а прока не испомню менших. И миров есм створил с Половечскими князи без одного 20, и при отци и кроме отца, а дая скота много и многы порты свое. И пустил есм Половечских князь лепших из оков толко: Шаруканя 2 брата, Багубарсовы 3, Овчины братье 4, а всех лепших князий инех 100; а самы князи Бог живы в руке дава: Коксусь с сыном, Аклан, Бурчевичь, Таревський князь Азгугуй, и

инех кметий молодых 15, то тех живы вед, исек,
вметах в ту речку в Влавлии, по чередам избьено
не с 200 в то время лепших. А се тружахься ловы
дея: понеже седох в Чернигове, а из Чернигова
вышед, и до (здесь, на середине листа, про-
рвана дирочка.) лета по сту угневал и им
даром, всею силою, кроме иного лова, кроме Туро-
ва, иже со отцем ловил есм всяк зверь. А се в
Чернигове деял есм: конь диких своима руками
связал есмь, в пушах 10 и 20 живых конь, а кроме
того иже по рови ездя имал своима руками те же
кони дикие. Тура мя 2 метала на розех и с конем,
олень мя один бол, а 2 лоси, один ногама топтал,
а другой рогама бол, вепрь ми на бедре мечь от-
ял, медведь ми у колена подьклада укусил, лютый
зверь скочил ко мне на бедра, и конь со мною по-
верже: и Бог неврежена мя съблюде. И с коня много
падах, голову си розбих дважды, и руце и нозе
свои вередих, в уности своей вередих, не блюда
живота своего, ни шадя головы своея. Еже было
творити отроку моему, то сам есмь створил дела,
на войне и на ловех, ночь и день, на зною и на
зиме, не дая себе упокоя. На посадники не зря,
ни на биричи, сам творил что было надобе, весь
наряд и в дому своем, то я творил есм. И в ловчих
ловчий наряд сам есмь держал, и в конюсех, и о
соколах и о ястрябех, тоже и худаго смерда и
убогые вдовице не дал есм сильным обидети, и цер-
ковнаго наряда и службы сам есм призираю. Да не
аззрите ми, дети мои, но ин кто прочет: не хвалю

бо ся ни дерзости своея, но хвалю Бога и просла-
вляю милость его, иже мя грешнаго и худаго селико
лет сблюд от тех час смертных, и не ленива мя
был створил худаго на вся дела человеческая по-
требна. Да сю грамотицю прочитаючи, потъснетеса
на вся дела добрая, славяще Бога с святыми его.
Смерти бо ся, дети, не боячи, ни рати, ни от
звери, но мужьское дело творите, како вы Бог по-
дасть. Оже бо яз от рати и от звери и от воды,
от коня спадався, то никтоже вас не может вре-
дитися и убити, понеже не будеть от Бога по-
велено; а иже от Бога будеть смерть, то ни отець
, ни мати, ни братья не могуть отъяти. Но отче
добро есть блюсти, Божие блюдоенье леплее есть
человечьскаго. О многострасный и печалны аз!
Много борешися сердцем, и одолевши душе сердцю
моему, зане тленьне сущи, помышляю, како стати
пред страшным Судьею, каянья и смеренья не при-
имшим межю собою. Молвить бо, иже Бога люблю, а
брата своего не люблю, ложь есть. И паки: аще не
отпустите прегрешений брату, ни вам отпустить
Отець ваш небесный. Пророк глаголеть: не рев-
нуй лукавнующим, ни завиди творящим безаконье,
что есть добро и красно, братья вкупе! Но все
дьяволе наученье! То бо были рати при умных де-
дех наших, при добрых и при блаженных отцих на-
ших; дьявол бо не хоче добра роду человеческому,
сваживает ны. Да се написах, зане принуди мя
сын твой, его же еси хрестил, иже то седить близь
тобе, прислал ко мне мужь свой и грамоту, река:

ладимься и смеримся; а братцю моему суд пришел; а ве ему не будеве местника, по възложиве на Бога; а станут си пред Богом; а Русьскы земли не погубим. И аз видех смиренье сына своего, сжалихси и Бога устрашихся, рекох: он в уности своей и в безумьи сице смеряется, на Бога укладает; аз человек грешен есмь паче всех человек. Послушах сына своего, написах ти грамоту: аще ю примеш с добром, ли с поруганьем, свое же узрю на твоём писаньи. Сими бо словеса варих тя переди, его же почаях от тебе смиреньем и покаяньем, хотя от Бога ветхых своих грехов. Господь бо наш не человек есть, но Бог всей вселене, иже хоцеть, в мегновеньи ока вся створити хоцеть, то сам претерпе хуленье и оплеванье и ударенье, и на смерть влася, животом и смертью; а мы есмы человеци грешнии? Ли си день живи, а утро мертви, день в славе и в чти, а завтра в гробе и без памяти, ини собранье наше разделять. Зри, брат, отца наю: что взяста, или чим има по роте! Но токмо оже еста створила души свои. Но да сими словеса, пославше быше переди, брат, ко мне варити мене. Вгда же убиша дети мое и твое пред тобою, и быше тебе узревше кровь его и тело увянувшю, яко цвету нову процветшю, якоже агньцю заколену, и рещи быше, стояще над ним, вникнуци помыслы души своей: увы мне! что створиш? И пождав его безумья, света сего мечетнаго кривости ради налезох грех себе, отцю и матери слезы; и рещи быше Давыдскы: аз знаю грех

мой, предо мною есть воину. Не крове дея прелитья, помазаник Божий Давид прелюбодейные своры, посыпа главу свою и плакася горко в от час: отда ему согрешенья его Бог. А к Богу быше покаятися, а ко мне быше грамоту утешеную, с сноху мою послати ко мне, зане несть в ней ни зла, ни добра, да бых обуим оплакал мужа ея и оны сватбы ею, в песний место; не видех бо ею первее радости, ни венчанья ею, за грехы своя; а Бога дея пусти ю ко мне вборзе с первым словом, да не с нею кончав слезы посажу на месте, и сядеть акы горлица на сусе древе, жележчи, а яз утешося о Бозе. Тем бо путем шли отци наших: суд от Бога ему пришел, а от тебе. Аще бы тогда свою волю створил, и Муром налезл, а Ростова бы не занимал, а послал ко мне, отсюда ся быхом уладили; но сам разумей, мне ли бы послати к тебе достойно, ци ли тебе ко мне? Да же еси велел детяти: "слися к отцю", десятья есм послал. Дивно ли, оже мужь умерл в полку ти? Лепше суть измерли и роди наши. Да не выискывати было чужего, ни мене в сором, ни в печаль ввести. Научиша бо и паропци, да быша себе налезли, но оному налезоша зло. Да же начнеши каются Богу, и мне добро сердце створиши: послав сол свой, или попа, и грамоту напиши с правдою, то и волость възмешь с добром, и наю сердце обратиши к себе, и лепше будем яко и преж; несм ти ворожит, ни местыник. Не хотех бо крови твоея видети у Стародуба: Но не дай ми Бог крови от руку тво-

ею видети, ни ои по-аленья своего, ни котораго же брата. Аще ли лжю, а Бог мя ведаеть и кресть-честный. Оли то буду грех створил, оже на тя шед к Чернигову, поганых деля: ли того ся каю, да то языком братьи пожаловах, и паки е победах, зане человек есмь; аще ти добро, да с тем, али ти лихое, да то ти седить сын твой крестьный с малым братом своим, хлеб едучи деднь, а ты седиши в своем. А о се ся ради; али хочеши тою убити, то ти еста, понеже не хощю я лиха, но добра хощю братьи и Русьскей земли. А его же то и хощеши насильем, тако выдаяла у Стародуба и милкусячча по тебе отчину твою: али Бог послух тому, с братом твоим радилися есве, а не поможеть ради-тися без тебе. И не створила есве лиха ничтоже, ни рекла есве: сли к брату, дондеже уладимься, оже ли кто вас не хочеть добра, ни мира кресть-яном, а не буди ему от Бога мира узрети на оном свете души его. Не по нужи ти мољвлю, ни беда ми которая, по Бозе сам услышашь: но душа ми своя лутши всего света сего; на страшней при без суперник обличаються, и прочее. Премудрости наставниче, и смыслу давче, несмысленым казателю и нищим заступниче! Утверди в разуме мое сердце, Владыко! Ты дажь ми слово отче, се бо устнама моим не възбрани впити ти: милостиве, помилуй падшаго! Упованье мое Бог, прибежище мое Христос, покров мой святыи Дух. Надеже и покрове мой, не презри мене, благая! Тебе бо имуще по мощницю в печали и в болезни и от злых всех, и

тебе славлю, препетая! И разумеите и видите, яко аз есмь бог, испытаю сердца и сведый мысли, обличай дела, опаляя грехы, судяй сироте и убогу и нищю. Всклонися, душе моя, и дела своя помысли, яже сдея, пред очи свои принеси, и капля испусти слез своих, и повежь яве деянья и вся мысли Христу, и очистися. Андреа честный, отче треблаженный, пастуше Критьский! Не престай моляся за ны чтушая тя, да избудем вси гнева и печали и тля и греха и бед же, чтуше память твою верно. Град свой схрани, Девице Мати чистая, иже о тебе верно царствует, да тобою крепимся и тебе ся надеем, побежаем вся брани, испрометаеть противныя и творить послушенье. О препетая Мати, родышая всех святых пресвятаго Слова! Примши нынешнее приношенье, от всякия напасти заступи и грядущия муки, к тебе вопьющих; молим ти ся раби твои и прекланяем си колени сердца нашего, приклони ухо твое, чистая, и спаси ны в скорбех погружающася присно, и соблюди от всяко плененья вражья твой град, Богородице! Пощади, Боже, наследья твоего, прегрешенья наша вся презри, ныне нас имея молящих тя на земли, рожьшюю тя без семене, земную милость, изволив обещися, Христе, в человечество; пощади мя, Спасе рождся, и схрань рожьшюю тя нетленну по рожестве, и егда сядеши судити дела моя, яко безгрешен и милостив, яко Бог и человеколюбець. Дево пречастая, неискусна браку, Богообрадованная, верным направленьем! Спаси мя погыбшаго, к Сыну си вопьющи. Помилуй мя, Господи,

помилуй, егда хоцещи судити, не осуди мя в огнь,
ни обличи мене ярости си. Молит тя Дева чистая,
рождающая тя, Христе, и множество Ангел и Мученик
сбор. О Христе Иисусе Господи нашем, ему же подобает
честь и слава, Отцу и Сыну и святому Духу,
всегда и ныне, присно, век.

『教訓』

悪しき我は、至福なる、栄えある、おのれの祖父ヤロスラフによつて洗礼の折にヴァシリイと呼ばれ、ルシの名をヴォロジメルと言われ、愛された父及びおのれの母モノマハたちによつて……（この間、四行半は余白になつていて読めない。）……しかして洗礼された人々のために、おのれの情深さによつて、また、あらゆる災厄から父なる祈りによつて、どれほどそれらを守つたことであろう！ そりの上に坐しつゝ、我はおのれの心の内に思ひ、神への讚美を奉つた。神は我を今日まで罪深き者にもかゝらず守り給うたのである。我が子たちよ、また他の誰にても、この遺訓を聞いて笑わされ。もしも誰かに（この遺訓が）気に入れば、おのれの心をそれを受け入れて、怠ることなく、また労苦せよ。先づ、神のために、また、おのれの魂のために、神のおそれをおのれの心に持ち、多くの恩情をつくせ。それはあらゆる善の初めである。もしまたこの遺訓が気に入らないものがあるなら、その者たちは嘲けることなくかく言ひがよい。道は遠し、そりの上に坐しつゝ、彼はうつろなることを言ひしと。ヴォルガ河において、我が兄弟たちからの使者が我を迎えて、かく言つたことがあつた。即ち「我々に味方せよ。ロスチスラフの子等を追放し、彼等の領地を取りあげるために。もしも（汝が）我々と共に行かないなら、我々はおのれの行動をとり、汝はおのれの行動を取れ」と。しかして（我は）言つた。即ち「もし、たとえ汝等が

怒るとも、我は汝等と共に行くことはできない。十字架（誓い）をおかすことは（できない）かと。しかして（我は）使者たちを行かせ、詩篇を手にして、悲しみつゝそれを開いた。我に読まれたのは——魂よ、何を悲しみ、何故に我をまどわせるか云々——という言葉であつた。しかしてその後我はこれらのうるわしき言葉を選び出して、それを順番に並べて書きあげたのである。もしも汝等に終りの所が気に入らなければ、最初の部分をとるがよい。（これより以下詩篇の言葉……筆者註）。我が魂よ、何を悲しむや？ 何故に我をまどわせるや。神に安んでよ。我は総てを神に打ちあげたればなり。（XLI, 12）ずるき者たちと争うなかれ。不法をなすものたちを羨むなかれ。ずるきものは滅され、神に耳を傾けるものは大地を占めるであろう。（XXXIV, 1）なおまた言わん。罪人はほろびんと。そはおのれの位置を求めて、見出し得ず。温順なるものは大地をたのしみ、平和の多きに楽しみをなさん。罪深きものは正しき者を見ておのれの齒を彼に向つてきしませ、神はそれを笑い給ひ、彼（罪深きもの）の（死の）日の来るを予言し給ひ。罪深きものは武器を抜き、おのれの弓を引きしほりて、貧しきもの及び不幸なる者を射んとし、正しきものを心痛めんとする。彼等の武器は彼等の心を打ち破り、彼等の弓は打ちこわれるのである。罪深きものたちの多き富より、正きものの少き（富）はまさる。何故ならば、罪深き者たちの力はやぶれ、主は正きものたちを確保し給ひ。これぞ罪深き者のほろぶ故なり。正き者を（主は）あわれみて彼等にほどこしを為し給ひ。主をたゞえるものは大地をつぎ、主を呪うものはほろぼされん。主によりて、人の足取りは正されるものなり。人は落ちてなお打ち割られざるは、主が人の手をさゝえ給ひ故なり。我若かりき。しかして老いぬ。しかして、正しきものの捨ておかれ、その子等のパンを求め歩くをいまだ見ざりき。正しきものは如何なる日にも情をかけ、人に貸し与え、しかして、彼が子孫は祝福されん。

悪をさけて善をなせ。平和を求めて(悪を)追い払え。されば、
とわに生きるべし(XXXII, 9~17, 19, 21~27), 人々が立ちあ
がる時、(人々は)生きてまゝ我等を食いつくすであろう。主
の怒りが我々にもえさかるとき、水は我等を沈めるであろう。神
よ、我をあわれみ給え。我は人にふみつけられたればなり。(人
は)終日攻め立てつゝ、我を圧迫し、我が敵は我をふみにじりた
り。我に向いて上より攻めるもの多し。(LV, 1-2) 正しきもの
は喜び、復しゆうを見るとき、おのれの手を罪深き者の血に洗
い浄めん。しかして人は言いたり。もし、正しき者にむくいあれ
ば、即ち、地上に裁き給う神のいますなりと。(LVI, 11~12)
我が敵の手より我を救い出せ、神よ、しかして、我に向いて起
るものたちより我をまぬがれさせ給え。法を犯せる者たちより我
を救い、血に飢えし人々より我を救い給え。彼等は我が魂をあざ
むきたればなり。(LVIII, 1-4) 彼が憤りにおける怒りの如く、
彼が御心における生命もまた然り。夕には涙の来たるとも朝には
喜びの湧くあり。我が生命より汝の恩情はすぐれたり。我が口を
して汝をたゝえしめよ。我が生命のあらん限り汝をたゝえ、汝の
名において我が手をあげん。(LXII, 4~5) ずるき者たちの群より
、また道ならぬことをなせる多くの者たちより我を守り給え。(
LXIII, 3)。心正しきものは総てたのしみ喜びべ。常に日頃主を(
我は)たゝえん。主の讚美のどこしえなれ、云々(XXXIII, 2)。

ところで、ヴァンリイは教えている。若者たちを集めて、清く、
けがれなき魂と、悪しき肉体と、温和なる対話と、主の言葉を手
本とすべきことを。食し飲するは、大いなる騒ぎのあるべからず
。年長者のものにては沈黙し、賢き者の言いを聞き、年長者には
従い、同年輩者及び若年者には愛を持ち、悪しきたくらみなしに
語らい、より多く物を思え。言葉にては荒々しく言うことなく、
口にて裁きをなさず、多くは笑わず、年長者をおそれ、愚かしき
女たちとは語らず、眼を下に向け、魂を高め、女たちをさげよ。

あらゆる者たちより尊敬されるものであろうとも、権力を望むに
教えさすことを止めざれ。もしも汝等の内の誰かが他の者に奉
仕し得たらば、神よりのむくいを望み得べく、永遠の幸を楽しみ
得べし。おゝ、聖母マリヤよ！我が貧しき心よりたかぶりと荒々
しさを取り去り給え。我等がいやしき一生にありて、この世のう
つろさを我がほこらざらんがためなり。信仰ある人よ。心正しく
行動するものであることを学べ。福音書の言葉によりて学べ。眼
の管理、舌の抑制、智の温順、肉体の制圧、怒りの押殺、思考の
清純順守、主のための善行への渴望、これなり。奪われしものは
復しゆりするなかれ、憎まれし者は、愛せよ。追われし者は耐え
よ。非難されし者は祈れ。罪を禁ぜよ。はづかしめられたる者は
許せ。みなしごに（正しき）裁きをなせ。夫なき女を辯明せよ。
来たれ、合流せんためにと主は言い給う。もし汝等の罪が紫なり
とも（我は）それを雪の如く色染めよう云々と。（イサヤ伝；I,
18）精進の春及び悔悟の花はかゞやき、兄弟よ、自からを清めよ
う。肉体及び魂のあらゆる血より。光を与え給うものによびかけ
て、人間を愛し給う者よ、汝に栄光あれと言わん。まことに、我
が子等よ、人間を愛し給う神が如何に情厚く、深さかを知れ、我
々は罪深き、死すべきものなるに、もし誰ぞ我等に悪をなせば、
（我等は）（我が罪を）省みず、速かに彼の血を流さんものと欲
す。しかれども我等が主は生命及び死をつかさどりつゝ、我等が
罪を我等が一生に及びて耐え給う。しかしてまた、おのれが子を
愛する父の如く、我等が一生に及びて、打ちつゝもまた再びおの
れのもとに引きよせ給う。しかしてまた、我等が主は敵に対する
勝利をば我等に示し給ひ、三つの良き事を以て敵からまぬがれし
め、且つ、敵に打ち勝たせ給う。（三つとは即ち）悔悟、涙及び
喜捨なり。しかして、これは、我が子等よ、三つの事によりてお
のれの罪からまぬがれ、天の王国を失わざるとは、神の教えは汝
に困難なるものにあらず。しかして神のために愈ることなかれ。

願わくば、この三つの事を忘れることなかれ。困難なるものにあ
らざればなり。閑居にあらず、修道院生活にあらず、飢えること
にもあらざればなり。他の善行者たちの耐えているに比べれば、
これらがさゝやかなことにて神の恩ちよを受けようとは、人間
とは如何なるものなりや。人間を汝は如何に思うや？（詩篇；Ⅶ、
6）主よ、汝は偉大なり。しかして汝の業は不思議なり。人間の
知恵はいかにすれども汝が不可思議を物語り得ざるなり。また我
々は言う。主よ、汝は偉大なり。汝の業は不思議なり。この地の
果てまで永遠に汝の名は祝福されほめられてあるものなりと。
この世に立てられし汝が偉大なる奇蹟と善と、汝の力をば、誰ぞ
たゞえほめざるものなき。天がとゞのえられ、陽があり、また月
があり、また星があり、闇が、光があり、水の上に地が置かれた
るは、主よ、汝の考えによりてなり！ 様々な獣及び鳥及び魚
は、主よ、汝の考えによつていゝどられてあり。しかして、この
不思議に（我等は）おどろくものなり。土より人間を創り給ひ、
人間の類の形の様々なも、もし一つにまとまりて見れば、一樣
ならざるものもありて、それぞれにおのれの形をなせるは、神の
英知によるものなり。しかして、また（我らの）驚くべきは、天
なる鳥の樂園より出でて、先づ我等の手に来たり、一つの國には
住むことなく、強きものも弱きものもすべての國々に住みたるは
、神の命によりて、おのれの森と野を満たさんがためなり。すべ
てこれをば神は人間の幸のために、食べ物として、楽しみとして
与え給ひしものなり。主よ、我等に対する汝の恩ちよりは偉大な
り。罪深き人間のために、これらをば（汝は）なし給ひたればな
り。かの天なる鳥は、主よ、汝によつて知恵あり。主よ、（汝が）
命じ給うとき、（鳥は）歌いて、人を樂しませるなり。しかして、
（汝が）鳥どもに命ぜざるときは、舌をばおしの如くとどめるもの
なり。主よ、汝は祝福され、きわめてたゞえられたり。（汝は）
あらゆる不思議とかの善をなしつくり給ひぬ。汝をたゞえざるも

のもは、主よ、父と子と聖霊の名をば、心をつくし、魂を傾けつゝも信ぜざるものなり。そは呪われてあるべし。これらの言葉を讀みつゝ、我が子等よ、我等に、おのれが恩ちよりを与え給ひし神をたゞえよ。しかして、これは弱き我が才智より出でし教訓なり。我が言うことを聞け。たとえ総てを受け入れずとも、半ばを(受け入れよ)。もしも汝等の心を神が軟らげ給わば、おのれが涙をおのれの罪を思いつ流せ。言うべし。邪いんなる者及び盜賊及び取税吏をば汝が許し給ひし如く、罪深き我等をも許し給え。と。しかして、教会の中でそれをなして地に伏せ。一夜とても罪を犯すべからず。もし爲し得れば、地につくまで頭をさげるべし。もし汝等が病におかされなば、三度(これをおこなえ)。しかしてこれを忘れるなかれ。怠るなかれ。夜中の礼拝及び祈りによりて人は悪魔に打ち勝つものにして、日中に人の犯せし罪は、それによりて許されるものなればなり。もしも馬にて進み行く折、誰とも事をかまえることなかりせば、もしも他の祈りの言葉を言い得ざれば、*「主よあわれみ給え」*と絶えまなくひそかに言うべし。その祈りは総てにまさり、進みつゝ、エソラゴトを考えるにまさればなり。また何にもまして貧しき人々のことを忘るべからず。しかして能う限り、力の及ぶ限り、みなしごに食を与えほどこしをなすべし。しかして夫なき妻をば自から釈明してやるべし。力強きものが人をほろぼすを許すべからず。正しきものをも、罪ある者をも殺すべからず。また、殺すべく命ずることなかれ。もしもその者が死に備すとも、一人たりともキリスト教徒の魂をほろぼすべからず。会話においては、愚かなると良きとを問わず、神を以て誓うべからず、十字を切るなかれ。そのことに汝には如何なる必要をもなければなり。兄弟たち或は他の誰かが十字架に口づけする(誓う)ことあらば、おのれの心に聞いて守り得るものを誓うべし。一度誓いなば、違反しておのれの魂をほろぼさざるよう、(誓いを)守るべし。主教、僧及び修道僧は愛情を以て彼等

の祝福を受け、彼等を遠ざけるべからず。力の限り彼等を愛し且つ配慮せよ。彼等より神への祈りを受けんためなり。胸にも頭にもたかぶりをもつべからず。然らずして言わん。我等は死すべきものなり、今日生きてあれど、明日は棺の中なり、これら総て汝の我等に与えしものは、我等のものにあらずして、汝がこれをただ一時我等にまかせしものなり。と。しかして、地中に(富を)かくすべからず。これは我等にとつて大いなる罪なればなり。長老なるものを父の如くあがめよ。若き者たちをば兄弟の如く(愛せよ)。おのが家にて怠るなかれ。然らずして総てに目をくばるべし。汝等の客人たちが汝等の家及び汝等の食事をば笑わざらんがために家令にも或は下僕にも頼るべからず。いくさに出でては怠るなかれ。軍司令に頼るべからず。飲み物をも、食べ物をも、眠りをも不注意に見過すべからず。見張りの守りをば自から指図すべし。しかして夜中、戦士をば四方に散せしめて伏すべし。しかして朝は早く起きるべし。しかして、いそぎで周囲を見渡さず我が身より武器をはづすべからず。人は怠惰のためにほろびるものなり。虚言に用心せよ。飲酒と邪いんに用心せよ。それによりて魂は、肉体もまたほろぶものなればなり。おのれの國をいづれになりと行軍するに際しては、汝等が呪われざらんがためには、おのれの下僕にも他人の下僕にも、住家や田地に害をなさしめるべからず。いづこに行き、いづこにとどまるとも、巡礼には飲まし食を与えるべし。しかして、何にもまして客を敬え。何処から来たるものであろうとも、それが平民なりとも貴顕なりとも、或は使者たりとも。そを贈物にて敬する能わざれば、食べ物及び飲み物を以てせよ。彼等は途中にて各地に良き者或は悪しきものとて人を言いひろめる者なればなり。病める者を見舞い、死せるものを見送れ。我等総て死するものなればなり。ひとりの人間たりとも愛相をつくし良き言葉を贈り、ないがしろにすべからず。おのれの妻を愛せよ。されど女たちにおのれを律する権力を与えるべか

らず。しかして汝等に總ての最終のものとは、即ち、何物にもまして神のおそれを持てということなり。もしもこれらを総て汝等が忘れなば、くり返して(これを)読むべし、されば我は恥ずることなく、また汝等にも良きことならん。汝等が為し得る良きことは忘れず、為し得ざるものについては学ぶべし。汝の父は家に坐しては、五つの言葉を学び、それによりてこその他の国々よりは受けしものなるを、怠惰はすべての母なり。為し得るものは忘れ、為し得ざるものについては学ばざるとは、良きことを為すに当りては、善きことに向いて怠るべからず。先づ何よりも教会に対して然り。床にある内に汝等を太陽の訪れることなからしめよ。我が至福なる父は及び總ての名なる士は長所に満ちつゝかく振舞いたればなり。朝の勤行にありて神に讚美を奉り、然る後日の出に太陽を見て、神をうれしくたゞえて言うべし。神なるフリストよ、おのれがうるわしき光を我に与え給ひ、我が眼を開かせ給ひぬと。しかしてまた言え。主よ、おのれが残せし罪を今後は悔いつゝ、おのが生命を正さんがため、願わくば我に年を年についでめぐみ給えと。かくの如く我は神をたゞえおればなり。しかして、坐して親兵団と協議し、或は人々に裁きをなし、また、狩りに行き、貢税集めに、或は寝につくべし。眠りは神によりて正午に定められたり。しかして獸も鳥も、人々もこの定めによりて眠るものなり。しかして今、汝等に我は十三才の時より行軍や狩において我が味わいしおのが苦難について物語らん。はじめ我はグヤチチの国を経てロストフに行きたり。父が我をつかわしたればなり。しかして父自がらはクルスクにおもむきぬ。しかして二度に及びて(我は)スモレンスクに行きぬ。スタヴク・ゴルチャチチと共にして、彼はその後にイジャスラフと共にベレスチエに戻り、我はスモレンスクにつがわされたればなり。しかしてスモレンスクよりヴオロジメルに行きぬ。その同じ冬に我は兄弟たちによりてベレスチエのやかれし躰跡につかわされぬ。其処において(我

は) 町の静もれるを見，しかして，ベレヤ斯拉ヴリの父のもとに行き，復活祭の後，ベレヤ斯拉ヴリからステイスクのヴオロジメルに行きぬ。ポリヤキと和平を齎せんためなり。其処よりして再びヴオロジメルに夏を迎えて戻りたり。その後スヴィヤトスラフは我をポリヤキにつかわしぬ。我はグロゴフを越えてチエヒの森に至り，彼等が国を四ヶ月にして歩きぬけたり。しかしてその同じ年，ノヴゴロドの長兄なる我が息子，我に生れぬ。しかして其処より我はトウロフに行き，春に向いてベレヤ斯拉ヴリに，然る後にトウロフにと行きぬ。しかしてスヴィヤトスラフは死し，我は再びスモレンスクに行き，スモレンスクよりその冬にはノヴゴロドに行きぬ。春にはグレブを助けに行きぬ。しかして夏には父と共にポロツクの近くにおり，次の冬にはスヴィヤトボルクと共にポロツクの近くにおり，しかして我々はポロツクを焼払いたり。スヴィヤトボルクはノヴゴロドに行き，我はポロヴェツと共に軍勢をひきいてオルデクスへ，然してチエルニゴフへ行きぬ。しかして再び我はスモレンスクより父のもとなるチエルニゴフに来たりぬ。しかしてオレグも其処に来たりぬ。ヴオロジメルより導かれ来たりしなり。しかして我は父と共に彼を食事にまねきたり。チエルニゴフの赤き屋敷においてなり。しかして我は父に三百グリヴナの黄金を運びさへげたり。しかして今一度，スモレンスクより戻り来たりて，ポロヴェツとの戦いを經てベレヤ斯拉ヴリにたどりつき，遠征より戻りし父を其処にたづね合わしたり。然る後に我等は再び父およびイジャスラフと共にその同じ年，ボリスと戦うべくチエルニゴフに行きぬ。しかしてボリス及びオレグに対し勝利をおさめぬ。再びまたベレヤ斯拉ヴリに行きてオブロフにとままりぬ。しかして，フセスラフはスモレンスクを焼き，我はチエルニゴフ人たちと共に二頭の馬にまたがりて追へどもスモレンスクではたづね合わず，フセスラフを追いその道すがらその国を焼き，クコムリにまで戦い至り。ロゴツスクに至る。な

お戦いてトリゴックに至り、またチエルニゴフに着きぬ。しかしてその冬には、ポロヴェツたちがスタロドゥブを総て戦い取りたれば、我はチエルニゴフの人々及びポロヴェツと共に進み、ジェスナ河においてアスクド公及びサウク公を捕え、彼等の親兵団をば打ちくだきぬ。翌日、ノヴゴロドの近くにてベルカトギンの強き部隊を散ぜしめ、剣をも捕虜をもすべてを手に入れぬ。しかしてヴイヤチチの国にはホドト及びその息子に向いて二冬に及びて征き、しかしてコリドンには一冬を征きぬ。再び我等はイジャストラフの子等を求めてミクリンに進みたれど、彼等をとらえざりき。しかしてその春にはブロードに集らんがためにヤロボルクに向つて進みぬ。その年にゴロジンを奪い取りしポロヴェツを追いてホロル河に至りぬ。しかしてその秋にはチエルニゴフの人々及びポロヴェツと共にミンスクに進みぬ。町を占領してその町に奴隸をも家畜をも残さざりき。その冬にはブロードに集まらんがためヤロボルクに向つて征き、大いなる友情を結びぬ。その春、父は我を兄弟たちに先んじてベレヤストラブリにすえたり。しかして(我等は)スバに進みぬ。ブリルクの町への途中、不意にポロヴェツの公たちが八千の兵と共に我等を迎えぬ。我等は彼等と戦うに喜びはあれど、武器は先に輸送されいて、我々は町に入りぬ。(彼等は)たゞ一人のセメツを生け捕りにし、若干の奴隸をもとらえたるのみなり。我が方はより多くのポロヴェツを殺し、また捕えぬ。しかしてポロヴェツたちは馬より降りる能わず、その夜の内にスラ河に逃げぬ。然して翌日、聖母昇天祭に我等は白きベイジャに進みぬ。神及び聖母の我等を助け給いたればなり。九百人のポロヴェツを打ち殺し、二人の公を捕えたり。バグバルスの兄弟なるオセニ及びサクジ即ちこれなり。二人の男のみ、逃げて生きのびたり。しかしてその後、スヴイヤトスラヴリに向いてポロヴェツを我等は追ひ、その後、トルチエスクの町に向い、また、ユリエフを望んでポロヴェツを追ひぬ。しかして再び対岸にてクラス

ヌイのほどりにポロヴェツを破り、ロスチスラフと共にヴァリンのかたわらにて天幕を手に入れぬ。しかしてその後、我はヴォロジメルに行き、再びヤロボルクを其処に坐せしめたるも、ヤロボルクは死去しぬ。しかして再び父の死後、スヴィヤトボルクの時に、ストウグナに我等はポロヴェツと夕刻まで戦い、ハレブのかたわらで戦えども、トゥゴルカン及び他のポロヴェツの公たちと和平を講じ、グレブの家臣たちよりおのれの総ての親兵団を取りあげぬ。しかして再びオレグはチェルニゴフなる我を目指して総てのポロヴェツをともないて進み来たり、我が親兵団は彼等と小さき盛土に位置して八日間戦い、彼等をして、とりでの中に入るを許さざりき。キリスト教徒の魂と燃えさかる村々及び修道院を嘆きて我は言ひぬ。ポロヴェツ人どものほこり高ぶることのなきよりと。しかして兄弟に彼の父の王座を与え、我は我が父の王座なるベレヤスラヴリに行きぬ。しかして我等はボリスの日にチェルニゴフより出でて、子や女たちを含みて百人ばかりなるポロヴェツの軍勢を破り進みたり。しかしてポロヴェツは、狼の如く我等に舌なめざりし、渡しや山々に立ちてありぬ。神及び聖ボリスは我をば彼等が利には引き渡し給わず、害されることなくして我等はベレヤスラヴリに到着しぬ。しかして我はおのが親兵団と共にベレヤスラヴリに三年と三月坐しぬ。しかして我等は戦い及び飢えによる幾多の災厄を耐えたり。しかしてリモフのために彼等(ポロヴェツ)の軍勢に向い進攻し、神の加護によりて彼等を打ち、また他の者たちを捕えたり。しかして再びイルタリイの子等を打ち、ゴルタフに行きて彼等が天幕を占領しぬ。しかしてオレグに向いてスタロドウグに進みたり。彼がポロヴェツに投降せしためなり。ボニヤクに向いてブグにスヴィヤトボルクと共に進み、ロンにも行きぬ。しかしてスモレンスクに進みダヴィドと和を講じ、また再びヴォロニツアと共に進みぬ。その折にトルツイもまたポロヴェツのイチチエイの子等と共に我に向いて来たりし

ために、我等は彼等に対してスラ河に進攻しぬ。しかしてその後
に、再び冬に向いてロストフに来たり、三冬の後にスモレンスク
に行きぬ。しかして今またロストフに行く。しかして再びスウイ
ヤトスラフと共にボニヤクを追い、或者は殺せしも、彼等を追い
捕え能わざりき。しかしてその後にもボニヤクを追いてロンに行
くも、ついに彼を捕えざりき。しかして冬に向いてスモレンスク
に行き、しかして復活祭の後スモレンスクを出でぬ。ギユリイの
母は死せり。夏にはベレヤスラヴリに来たり、兄弟たちを集めぬ。
しかしてボニヤクは総てのボロヴエツと共にスニヤチンに来り
たれば、迎えてベレヤスラヴリを出でスラ河に行きぬ。しかして
神の我等を助け給りありて、彼等の軍勢を破り、位高き公たちを
捕え、降誕祭の後にアバと和を講じて彼より娘をとり、スモレン
スクに来たりぬ。しかして後にロストフに行きぬ。ロストフより
戻り来たるや再びスウイヤトボルクと共にボロヴエツに向いてウ
ルバに進めども、神は我等を加護し給いぬ。しかして、またボニ
ヤクに向いてルピンに行けども神は我等を助け給いぬ。しかして
またその後にスウイヤトボルクと共に戦いに行けども、また再び
スウイヤトボルク及びダヴイドと共にドンに進めども、神は我等
を加護し給いぬ。ヴイリにアエパ及びボニヤクの来りて、ヴイリ
を取らんとせしことあり。オレグ及び子等と共に彼等に向いてロ
ムンに我の進みたれば、彼等はそれを知りて逃げたり。しかして
その後に、我等が家臣を捕えたるグレブに向いてミンスクに行け
ど、神は我等を助け給い、我等が思いしことを成就し得たり。ヤ
ロスラヴエツに向いて彼が悪業に耐え能わざるためヴオロジメル
に進みたり。しかしてテエルニゴフよりキエフなる父のもとには
限りなく乗り行きしことあり。朝に乗り出だして一日を費し夕刻
に到着せしなり。この旅の教、大いなるもの八十三に及べど、小
さき旅は記憶せず。ボロヴエツの公たちと和を講ぜしこと父の生
前と死後にて十九回に及び、多くの家畜とおのれが衣服を手渡し

ぬ。しかして、高位なるボロヴェツの公たちのいましめを解きて
放せし教は、シャルカンの二人の兄弟、バグバルスども三人、オ
セニの兄弟四人、高位のその他の公たちの教、総て百なりき。し
かして生きしまゝ神が我が手に渡し給ひし公たちは、息子と共な
るスクスシ、ブルチの子アクラン、タレフの公アズグルイ、しか
して他の下級なる村長十五人に及びぬ。これらの者たちをば我は
生きたまゝともない来たり、斬りて、このサリニヤ河に捨てたり
。しかして、この時、別に打ち殺せし彼等の教は、高位の家臣二
百ばかりなり。狩をなしつゝ我が苦勞せしこと次の如し。しばし
はチエルニゴフに坐しいたれども、チエルニゴスより出でてこの
年までに百姓どの教を追い、勞することなくしてそを手に入れぬ
。他の狩は別として、父と共にあらゆる獸を狩りしトウロフを除
いてかくの如し。しかしてチエルニゴフにて我がなせしことを言
えば次の如し。即ち、密林において野生の馬をばおのが手にて生
きたまゝ三十頭をつなぎとめ、また記憶によれば、広野に出でて
はおのれが手で同じばかりなる野生の馬をとらえたり。二頭の野
牛が馬ともどもに我をばその角によりて持ちあげしことあり。一
頭の鹿の我を角突きしことあり。おおじかの二頭なる内の一つを
ば我は足でふみつぶせしも、他の一頭によりて角突かれしことも
ありき。いのししの我が太ももにきばを立てしことあり。熊の我
が膝なるあんじよくをかみしことあり。猛獸の我が太ももをおそ
いて、馬ともども引き倒せしことあり。されど神は我を害される
ことなく守り給ひぬ。しかして馬から幾度となく落ち、自から二
度に及んで頭を打ち割り、両手、両足をおのが若さにまかせてそ
こね、おのれの生命をおしまず、おのれの頭をかばわざりき。我
が従者の為すべきことを我自から行ひぬ。戦にありても狩にあり
ても、夜も昼も。しかして暑さにも寒さにもおのれに憩いを与え
ざりき。市長にも代官にも頼ることなく、自から必要なることを
なし、指圖を与え、おのが家にありても、斯くの如く振舞ひぬ。

狩人には自から狩の指図をなし、馬丁に就ても斯くなしぬ。塵について小塵についても然り。貧しき奴隷及び貧しき未亡人をば力ある者のはづかしめにはまかさざりき。教会のしきたりと勤行をば我は守りいたり。我が子等よ、或はまた他の者よ、これを読みて我をば非難するなかれ。おのれをも、おのれの勇敢さをも我は誇るにあらず、神をたゞえまつり、神の恩ちよをばたゞえるものなればなり。神は罪ある悪しき我をば幾年にわたりて死の時より守り救い、あわれなる我をば怠け者としては創り給わず、あらゆる人間の事業に向くものとして創り給いたればなり。この教えを読みて、あらゆる良き事業に向い、神と神の聖者たちをたゞえよ。子等よ、死をばおそるべからず。戦いをも、獣をも。男子の義務を果すべし。そは神の汝等に与え給うものなればなり。我は戦によりても、獣によりても、水によりても、落馬によりても、いためられることなかりしかば、汝等の内の誰とて、神の命じ給わざる限り、いためられ或は生命を失うことなからんものを。しかして神よりの死の來るときは、父にせよ、母にせよ、兄弟たちにせよ、汝を死より救い得ることなし。されど、もし、用心するが良きことなれば、神の御守り給うは人間の用心にまさるものと言ひべし。あゝ、我は多いに耐え、あわれなる者なり。心に多くの戦いをなし、我が心に強を勝たしめたり。死すべき者なるに、恐ろしき最後の審判に如何に立つべきかをおもんばかり、悔悟することなく、おのれが内に心やすらぐことなかりしなり。かく言ひしものあり。即ち、神を愛すれどおのれが兄弟を愛せず、いつわりなればなり(ヨハネ伝；Ⅳ，20)と。また言ひしものあり。もしも兄弟に罪を許さざれば、汝等が天なる父も汝等に罪を許し給わず(マタイ伝；Ⅶ，15)と。予言者は言ひ、ずるきことを為すものたちと張り合ふことなかれ。不法をなすものたちをうらやむことなかれ(詩篇；XXXVII，1)と。兄弟たちが共にまとまりて暮すより、より良くうるわしきはなし(詩篇；O XXXII，1)と。しか

らずして、総ては悪魔のたぶらかしなり！ それは、我等が賢明なりし祖父たちの頃にも、善にして祝されたる我等が父たちの頃にも戦はありき。悪魔は人類に善を欲せずして我等を争わすものなり。これを我が汝に書き伝えしは、汝が洗礼し、汝がそばに坐せる我が息子が我に求めたればなり。彼はおのれが家臣をば手紙と共に我につかわして言ひぬ。 // 話し合いて和睦せん。我が兄弟に神の裁きの来たれり。我は汝と復しゆり者にはならずして、彼等二人が神の御前に立つべきを我等は神に願わん。さればルシの国を亡ぼすことなからん // .と。しかして我は、我が息子の心やわらげしを見て、心やわらぎ、神をおそれて言ひたり。 // 彼がおのれが若さと愚かさによりて心やわらげ神に心よせおれど、我はあらゆる人にもまして罪深し // .と。おのが息子の言うを聞きて我は汝に文を書きぬ。汝は彼を良き様にて迎えるや、或はののしりて迎えるや。そを我は汝が文によりて知りたしと。これらの言葉にて我が先んじて汝に告げしは、心なごみて悔惜しつゝ神によりて古きおのれの許しを汝が許されんことを我は待ち望みしことなりき。我等が主は人間にあらずして全世界の神なれば、望み給ひしことは眼をまばたく間に為し給ひ、しかも自からはののしられ、つばされ、打たれつゝも耐え給ひ、生をも死をも支配し給ひつゝ、自からを死に引き渡し給ひ。しかるに我等は何物ぞ。罪深く悪しき人間ならずや？ 今日生くれども明日は死する身にして、今日は栄光と誉れにつゝまれてあれど、明日は棺の中に入りて忘れ果てられ、他の人々は我等が集めし財を分け取らんとす。兄弟よ、我等が父たちを見よ。彼等は何を手に入れしや。彼等にとりて外衣は何するものなりしや？ おのれが魂に為せしことのみ残りたるものを。兄弟よ、先ず汝にはこれらの言葉を以て我に使者をつかわすべかりきなり。我が息子及び汝が息子の殺されし時は、汝が眼は先ず彼の血とうたれし小羊の如く地におちし花の如くしぼみし彼の体を見て、汝は彼のかたわらに立ち、お

のれが魂の思ひを見てかく語りべかりしなり。〃悲しきかな。我は何をなせり？ 彼が愚かさを利し、この洞ろなる世の不正のために、我は我が身に罪をおい、彼の父及び母に涙を与えたり。〃と、汝はダヴィドに見習いて語りべかりしなり。〃我は知る。我が罪は我が前に立つを〃(詩篇；I, 5)と。流血をなせしにあらざるに神聖油を塗られしダヴィドは密通をおこないて、おのれが頭に灰をふり、さめざめと泣きぬ。その時、彼の頭上に神の許しの来たりぬ。しかして神に向いて汝は悔悟すべく、我に向いては慰めの手紙を書き、我が息子の嫁を我に送るべかりしなり。彼女には善も悪もなかりしものなれば、我は彼女をかきいだきて歌うことなく、彼女の夫を泣き、二人の結婚を泣かんとせしものを。我はこの二人の新婚のよろこびを見ず、結婚を見ずざりき。これ我が罪の故か。されば神のために、速かに我のもとへ彼女を最初の使者と共に放免せよ。彼女と共に泣く涙はとどむべくもあらねど、我は彼女をば身近なる場所に住まわせん。彼女は階上部屋の乾きし木の上に坐して嘆かん。さらば我は自から神のもとに慰めを見出さんものを。我等が祖父たち及び我等が父たちはかゝる道を歩みしなり。即ち彼(イジャストラフ)には神より救きの来たりしものにして、汝より来たりしにはあらず。もしも汝がおのれが望みをとげてムロムを手に入れるならば、ロストフをば占めることなく我におくれ。さすれば我等は其処にて話し合はんものを。されど白から判断せよ。汝に使者を我がつかわすべかりしや、或は我に汝が使者をつかわすべかりしやを。もしも汝が我が息子に命じて〃父と相談せよ〃と言わば、我は十度なりとも使者を出ださん。勇士が戦場に倒れるは不思議なりや？ 我々の先祖たちの良きものはかくして死し行けり。されど他人のものを求め望むべからずして、また我を恥と悲嘆にみちびくべからず。おのれに何物かを獲んために従僕は彼をそそのかしたれど、彼にはわざわざを運び来たりぬ。しかしてもし、神の前に悔い、我に対して良

き心を持たば、僧にてもよし、我におのれの使者を立てよ。正義をこめて文書を書け。さすれば、汝は幸いをもつて国をうるべし。我等が心をおのれに向けるべし。しかして以前にもまして我等は幸福に慕せんものを。我は汝の敵にもあらず、復しゆう者にもあらざるなり。我は涙の血をスタロドウブのかたわらに見るを望まざりき。神よ、汝の手によりても、おのれの命によりても、兄弟の誰かによりても、汝の血を見ることをなからしめよ。もしも我がいつわり言うものならば、神は我を載き給わん。我は誓わん。異教徒のために汝に向いてチェルニゴフに進みしは、我が罪にして、我はそれを悔いるものなり。それに就きては、我は我が兄弟たちに悲しみつたえ語りぬ。我は人間なればなり。もしも汝に良ければ彼と共におるもよし。もしも汝に悪ければ、汝の洗礼を受けし息子がおのれの幼き兄弟と坐するもよし。祖父のパンを食いつゝ汝はおのれの位に坐すもよし。これらについて自から話し合ひべし。もしも汝が彼等を殺さんと欲せば、彼等二人は汝のもとにあり。我は兄弟及びルシの国に災を欲せずして幸を欲するものなればなり。汝がもし強奪によりて手に入れと欲すれば、我等は汝をおもんばかりでスタロドウブにも汝の領地を与えんものを。もしも汝を抜きにしては話し合ひを得ざる場合には、我は汝の弟と話し合ひをなさん。神の証人となり給うところなり。しかして我等は如何なる悪もなさざりき。我等が和睦するまで兄弟に使者をおくれとも我等は言わざりき。もしも汝等の内の誰かがキリスト教徒に善と平和を望まざれば、その者の魂はあの世においても神の世界を見る能わざるべし。斯く汝に我が言うは必要によりてにあらず。いかなる災によるにもあらず。神の御心によりて汝自からの耳にし得る所ならん。されど我にとりてはこの世の何物にもまして魂は尊きものなり。最後の審判においては、求刑者なくして自から我が身をあばかん。言々。賢明なる教訓者よ。しかして、知性の教え人よ。愚かなる者たちの教師よ、あわれなる者

たちの守り手よ。主よ、智慧の中に我が心をかため給え。父よ、
汝、我が言葉の才能を与え給え。我が口を以て汝によびかけるを
さまたげされ。あわれみ深きものよ、落ちし者をあわれみ給え！
と。我が望みは神なり。我がかくれ家はキリストなり。我が守り
は聖霊なり。我が望み、我が~~望~~りよ。我をいやしむなかれ。祝福
されし者よ。汝は我が悲しみにおける助力者にして、病にありて
も、あらゆる悪しきことどもにありても。ほめ歌われし者よ！
汝を我はたゞえた。我が神なるを知りて見よ。人の心をためし、
人の思いを知り、事を判じ、罪を焼き、みなしごにも貧しきもの
にも乞食にも裁きをなすは神なる我なり。我が魂よ、頭をたれよ。
汝によりて為されたるおのれの事業を思いみよ。おのが両眼の
前に持ち来たりて、しかしておのれの涙の一滴をそゞげ。明きら
けくキリストの所業と總ての考えを知れ。しかして身心を清から
しめよ。誠実なるアンドレイ、至福なる父よ、クリチの牧者よ！
汝を敬う我々のために祈ることをやめざれ。汝の記念を信仰厚く
なせるものは總て、怒りより、嘆きより、また腐敗より、災より
、まぬがれしめよ。清き母なる乙女よ、おのが町を守り給え。こ
の町は汝によりて誠の内に君臨しているものなればなり。この町の
汝によりて堅固になり、汝に期待し得て、すべての戦に勝ち、敵
を追い払い、敵をして町に従わしめよ。ほめ歌われし母よ。すべ
ての聖者なる聖なる言葉を生み給いし母よ。今なる服従を受け入
れて、あらゆる災より、来るべき苦しみより、汝によびかける者
を救い給え。汝の僕なる我等は汝に祈らん。我等の心の膝折らん。
聖母よ、汝の耳を傾けよ。永遠に悲嘆にせずみし我等を救い給
え。神の母よ、汝の町をばあらゆる敵の捕囚より守り給え。神よ
、汝の継承に慈悲をかけ給え。我等のすべての罪を除き給え。今
、地上において我等汝に祈るものにして、種なくして汝を生みし
大地の恩ちよう^と祈るなり。キリストよ人類に向き給え。救世主よ
、汝を生みし母をば汝の誕生後も腐らざるものとして保ち給いし

者よ。我をいつくしみ給え。しかして、我が所業をさばかんとし
て坐し給うときは、神及び人間をいつくしむ者として罪なく、あ
われみ深くあれ。結婚によりて試されざりし清き乙女よ、神によ
りて喜びを受けし乙女よ、信仰厚きものたちに導きを与え給え。
汝の息子に訴え泣きつゝ亡びんとする我を救い給え。我をあわれ
み給え。主よ。あわれみ給え。汝が裁きを行ふとき、我に火災を
宣告し給わされ。怒りにて我をあばき給わされ。キリストよ、汝
を生みし聖母の、また多くの天使及びじゆん教者の群の汝に祈る
なれば。我が主なるイスス・キリストよ。榮光とほまれにふさわ
しき者よ、父及び子及び聖霊よ、常に、また、今も、永遠にわたり
てありませ』。

さて、この様に『過ぎし年月の物語』の中に織り込まれたヴオ
ロジメル・モノマハの教訓は、ポロヴェツの発生源についての古
文獻を利用した考察の後に位置し、また、ノウゴロド人と年代記
者との話を物語る個所の前に位置している。然し、この長文の全
体が果して一貫した教訓であつたがどうかは一読してすぐに気付
くであろう。即ち、〈Но все дьяволе наученье!〉

『されどこれは総て悪魔のたぶらかしなり』という個所からは、
ヴオロジメル・モノマハがオレグ・スヴィヤトスラヴィチに送つ
た手紙の丸写しなのであり、その手紙は、この長文の末尾五分の
一ほどを残して終つている。この五分の一ほどの最後の部分は、
教訓よりもむしろ、熱い祈りの言葉である。即ち明らかに、この
教訓とても実は三つの部分から成り立つていたのである。その才
一部に当る教訓そのものとても実は、バイブルの言葉の断片を綴
つた信仰をすゝめる部分と、教訓と、ヴオロジメル自身の一生の
所業の回想との三つの部分から成り立つている。一般に教訓と言
われるこの長文が、ヴオロジメル・モノマハの手になつた生の資
料の書き写してあつたとすれば、その資料を自からの手で書いた
はずのヴオロジメル・モノマハは、実は、決してこの長い文章を

通しで書き綴つたのではなかつたであろう。おそらく前半は彼の著作の三つを合わせ、後半には徒弟への手紙と、祈りの心澄した文章とを合計五つ組み合わせて、一つの教訓作品の如くに見せて年代記者（ラヴレンチ一年代記の）が此処に織り込んだものである。文獻的な資料といふことになれば、ヴオロジメル・モノマハの教訓といふ一言でかたづけるのではなくて、彼の少くとも五つの著作が此処には反映していると見なければならぬであろう。

さて、この教訓の後に、『過ぎし年月の物語』は次の様な言葉で記事をつづけている。即ち、『世界が消~~す~~る時に、アレクサンドル大王によつて山の中にとじこめられた不信仰の異教徒たちがこの世にはびこるであろう』と書いた『教訓』以前の話の筋を追つて、今、山にとじこめられている連中を實際に見たノヴゴロド人の話を聞き、その話を此処につなごうとするのである。『此處で、四年前に聞いたことを物語ろう。ノヴゴロド人のギユリヤタ・ロゴヴィチが私に次の様に言つて語つたところのものである』
« Се же хошо сказати, яже слышахъ преже сихъ 4 летъ, яже сказа ми Гюрята Роговичъ Новгородецъ, глаголя сиче: »
そして、その内容は、ほゞ次の様な意味をもつている。『我はおのれの下級従士をペチョラへ、ノヴゴロドに貢税を納める人々のもとへ遣わした。わが下級従士は彼等のもとに行き、そこからユグラに向つた。ユグラ人は理解できぬことを語り、北の國々においてサモヤジ人と接して生活している民族である。ユグラ人がわが下級従士に語つたところによれば、我々は我等が今まで聞いたことのない驚くべき新しい不思議にであつた。しかしてそれは一昨年にはじまつたことである。海の入江に突き出している山々があり、その高さは天にまで達している。それらの山々には高い叫び声と話し声が（ひゞいてゐる）。しかして（人々は）掘り抜こうとして山を掘つてゐる。その山に小さな窓が開けられていて、そこから人々が語つてゐるが、

彼等の言語は理解することができない。しかして（彼等は）鉄を示し、鉄を所望して手を振っている。誰かと彼等に鉄——刀或はオノを与えると、彼等はその代りに獣皮を差し出すのである。これらの山々への道は深淵、積雪及び森林のために通ることができない。だから、いつでも彼等のところまで到着できるというわけにはいかない。少し先の方にも北へ行く道がある」と……」

ノヴゴロドの人が語つた内容とは此処までである。実際それはノヴゴロドの人ギユリヤタが直接の体験を年代記者に語っているのではなくて、実は、ノヴゴロド人が下級従士を地方に派遣し、その従士が行き先でユグラ人から聞いた物語なのである。年代記者の耳に入るまでには、源のユグラ人——→聞き手の下級従士——→主人のノヴゴロド人——→という経路を経ている。およそ、これは、文獻を基盤にした記事ではなかつたであろう。ラヴレンチー、イバーチー等の年代記によれば、この所から、『然し我々は以前に物語つた前の（話）に戻ろう』〈Но мы на предняя возвратимся, якоже бяхомъ преже глаголали〉

という言葉までの間に、年代記者が、そのノヴゴロド人ギユリヤタに説明してやる文章がある。『その時、我はギユリヤタに向つて言つた』〈Мне же рекшу к Гюрятъ〉以下の文章である。『我』〈аз〉という年代記者が、その山中の不思議な民族たちのことを、知つたかぶりにノヴゴロド人に説明してやつている文句である。即ちその不思議な民族を年代記者は「アレクサンドル大王によつて山中にとじ込められた連中である」というのである。

〈Си суть людье закленини Александромъ Македоньскимъ царемъ〉そして年代記者は、なお、この説明にもつたえをつけようとして、明らかに文獻を引用している。即ち、『彼等のことについてパタリヤ（バトル）の人メフオジイが語つているところでは』〈Якоже сказать о нихъ Мефодий Патарийский:〉と述べて引用をはじめている。

その文章は次の様なものである。

и взиде на восточныя страны до моря, наричаемое Солнце место, в виде ту человеки нечистыя, от племени Афетова; их же нечистоту видех: ядяху скверну всяку, комары и мухы, котки, змие, и мертвецъ не погребаху, но ядяху и женьскыя изворогы и скоты вся нечистыя, то видев Александр убоися, еда како умножаться и осквернять землю, и загна их на полунощныя страны в горы высокия; и Богу повелению, сступишася о них горы полунощныя, токмо не ступишася о них горы на 12 локот. И ту створишася врата медяца, и помазашася сунклитом, и аще хотять огнем взяти, не възмогутъ и жеши; вещь бо сунклитова сица есть: ни огонь можетъ вжещи его, ни железо его приметь. В последняя же дни по сих изидуть 8 колен от пустыня Етревьскыя, изидуть и си сквернии языки, яже суть в горах полунощных, по повелению Божию.

『(アレクサンドル大王は)東の國々へ太陽の場所と名づけられている海まで進攻し、其処でアフエト(ヤベテ)の種族から出た不潔なる人々を見た。彼等の不潔さを見たのである。あらゆるいとうべきもの、カヤのみや、しらみを食ひ、死人を葬ることなく食ひ、女の流産したもの及びあらゆる不潔なる家畜を食つていたのである。アレクサンドルはそれを見て、(彼等が)増えて大地をけがすのをおそれた。しかして、彼等を北の國の高い山々の中へ追い込んだ。神の命によつて、彼等の後から北の山々が寄り集つた。彼等の後からはたゞ十二ロコチだけの分がふさがらなかつた。しかして其処には銅の門が造られた。しかして、スנקリト(

сунклит, сонклит, синклитなどという形が考えられる
……筆者註)で塗りつぶされた。しかして、もしも人々が(そ
れに)火をかけようとしても、それを焼くことはできない。ス
クリトの物質は次の様なものであつた。即ち火もそれを焼くこ
とができず、鉄もそれを破ることがない。ところで、最後の日には
これらの者たちよりの八種族がエトリフの荒野より出て来たるで
あろう。北の山々の中にいるこれらの不潔なる種族が神の命によ
つて、出て来るであらう」

年代記者が『バトルのメフオジイの言つている所によれば』と
断る如く、たしかに、この一節は、メフオジイの『告白』〈От-
кровение〉の一節に準拠したものである。世界の終末についで
のメフオジイの言葉なのである。メフオジイの古代スラヴ語訳本
は非常に古くから存在したが、その古代語訳を1940年(レニン
グラード)の『古代ロシア文学部会論文集』が失われた部分をも
含めて再構成している。それによつて、古くからあつたメフオジ
イの古代語による『告白』から、この一節に対応する部分を探し
出すのは容易なことである。メフオジイの文章に年代記者がどれ
ほどに手を加え、或はどれほどを省略して、どの様な形でそれを
此處に書き抜いたかを知るために、対応部分を次に引用しておこ
う。

Филипп же, Александров отецъ, макидонянинъ бе,
и поа жену Хузиту, дщерь Фолову, царя Бфиопь-
ска, от нея же Александр родися... И вшед на
восток уби Дария Меденина, и прия земли многы и
грады, и в едино сътвори землю и прииде воюя до
моря, нарицаемого Солночное место, иде же виде
нечистыя человеки, иже суть Иафетови внуци, их
же нечистому виде: едаяху бо всяк живот, жу-
пеличию тварь, гнусное и скверньное, комары и

мухи, котки, змия, мертвых плъти, женския из-
врагы, еже не съношьши рождено, и всяку тварь
животных гад, не точию же то едино, нъ и скоты
нечистыя; мертвецъ же не погребѣаху, но едѣаху.
Да то все видеъ Александр, бывающаа в них скве-
рны, убояся, еда како доидуть до земли свята
и осквернять ю от скверненых своих един, и мо-
литися нача богу зело, и повеле събрати я, вся
мужа и жены и дети их, и съпроста реши всяко
южичество их и погна я от вѣсточныа земля и гна
я и иде вѣслед их, донележе внидоша в края се-
верския; и несть куду влести я ним, ни излести
от них от востока до запада, и ту абие помолися
богу зело со страхом и послуша бог молитву его
и повеле господь бог северским горам соступите-
ся о них, им же деять нарок Мазы северския; и
съступишася о них, тѣчию 12 лактыма не соступиша-
ся о них. И сотворишася от Бога врата медная и
помазаша быша сунѣклитом. Да аще имуть хотети
железом рассечи врата, но не могут, или ихъ-
жещи огнем не могут. Вець бо есть такова сунѣкли-
това, да ни железо его примет, ни огнь жьжет, ни
ту абие угаснетъ; всяки бо ся хытлости дьвола
ту сократятъ и не успеютъ ничего же. Беси бо
нечист и сквернении и гнусней языци вълшебными
своими злокозненными деды тако утвердиша, да
како любо хытлость не успеетъ ничего же тому,
яко не мощи им ни огнем, ни железом или ким
умышлением таковая искушити врата и отбежати.
В последная же дни по пророчеству Езекиину гла-

голюшу: в последнаа дни на скончание мира излезеть Гог и Магог на землю Израилитьску иже суть цари язычестии, яже закова Александр об ону страну севера.... яже вогнав аки в ограду Александр и заключи о них врата...

『アレクサンドルの父フィリップはマケドニヤ人であつた。しかして、エフィオピヤの皇帝フォルの娘フジタを妻に迎えた。ところで彼女からアレクサンドルは生れた.....しかして(アレクサンドルは)メデニア人のダリイを東方に進攻して殺し;しかして多くの国と町を取つた。しかして国を統一し、戦いながら、太陽の場所と言われている海に来つた。ヤフェトの孫である不潔な人々を進み行きて見た。彼等の不潔さを見たのである。即ち、あらゆる生き物、かぶと虫のたぐい、腐つたもの、けがらわしいもの、カ及びはえ、ねこ、蛇、死せる者たちの体、月足らずして生まれた、女性の排出したたい児、及び、は虫類のあらゆるたぐい、それのみではなくて不潔なる家畜をも、死者たちを葬ることなく食べていたのである。彼等の中のけがらわしいこれら総ての事を見て、アレクサンドルは(彼等が)聖地にまで来たり、おのれのけがられしさによつて聖地をけがすようなことがあるかも知れないと恐れ、熱心に神に祈りはじめた。しかして、彼等、総ての男たち及び女たち及び彼等の子供たちを集めるように命じた。しかして、彼等の一族をすべて簡単に打ちくだき、しかして彼等を東方の国から追いはらつた。しかして彼等を追い、彼等を追求して進んだ。彼等が北方の境に入り込むまで、彼等のいる其処へは入り込む道はなく、東から西まで彼等の所から出て来ることもできなかつた。しかしてそこで(彼は)再び熱心に、恐れる心をもつて神に祈つた。しかして神は彼の祈りを聞き給ひ、主なる神は彼等に向つて北の山々に相集るように命じ給うた。ところで、彼等に対する名前を(人々は)北方のマザということにしている。

しかして（山々は）彼等に向つて相集つた。たゞ十二ロコチだけは彼等に向つて相集らなかつた。しかして神によつて銅の門が造られ、スクリトで以て塗られてしまつた。もしも（人々が）鉄で以て門を打ち割り開き、或は火で以て焼こうとしても、（人々はそれを）できないのである。というのは、スクリトの物質はそういうものだからである。鉄もそれを割り取れず、火も焼くことができない。また火を消すこともできない。というのは、其処では、悪魔のあらゆる奸策は止まず、何も成功しないからである。というのは悪霊が不潔でけがらわしく、しかして腐つた人種をおのれの魔法のたぶらかしの所業でこの様に守り固めたからである。即ち、それに対して如何なる知恵も通用せず、しかして、鉄で以てしても、火で以てしても、また何の企てで以てしても、この様な門を打ちくたさず、逃亡できないように。ところが最後の日にはエゼキイの予言が言つているところによれば、世界の終末にゴグ及びマゴグがイスライリの国に、はい出し来るであろうという。彼等とは異教の王たちであり、アレクサンドルが北の向うの国にとじこめたものどもであり……………アレクサンドルが囲いの中に追い込み、彼等に門の鍵をかけた者たちである』

さて、メフォジイの古代語訳においても、それから取材した年代記者による『過ぎし年月の物語』にしても、山にとじこめられた連中の出口に当る門がスクリト、シンクリトで塗られているという言葉があつた。そして、それを、火も鉄もおがすことができないものだとしていた。実は、スレズネフスキーもその『古代ロシア語辞典資料』の中で（？）印をつけてもてあました言葉であつた。鉄や火によつても冒すことができないような物質を空想的にそういう言葉によつて固定したものであろうが、ギリシア語に *καυρωτος* 即ち『混合されないもの』という言葉があるところを、おそらく、なまつてそのまま用いた言葉であつたであろう

上記の年号以下のところに書き込まれている記事は、6618(1110)年の項の最後に、『聖ミハイルの修道院長セリヴエストルがこの年代記書物を書きあげた』〈Игумень Селивестръ святаго Михаила написахъ книги си летописець〉という言葉があるから、古い文献によるよりも、むしろ、自からが知り、経験し、聞き、手近かにある当世的資料をもとにしてこれらの部分を書きあげたのであろう。

『過ぎし年月の物語』が下敷にした主な文献的資料の考察は大體以上にとどめておいてよいように思われる。

— H —

前項で『過ぎし年月の物語』がその記事の中に多くの古い文献を利用していたことを示した。そして、その折に時によつて、記録的な一連の事件記事が、利用文献の一節を差し込むことによつて途切れていることにも少しふれた。それだけでも分かるように、『過ぎし年月の物語』は何度も何人もの手によつて、関連記事の中に種々のものが後に書き込まれ、書き直され、或は二つ以上の古い記事が時にまとめられて一つに統一されなどして、今日、ラヴレンチー、トロイツキー、イバーチイ等の年代記にみられる形になつたことが推察される。勿論、その加工者或は加筆者の一人がラヴレンチー年代記の6618(1110)年の項の末尾に署名したツリヴエストル(セリヴエストル)〈Селивестръ〉であつたであつたであろう。この人物だけではなくて幾世代にも何人もの手によつて加筆されたものが『過ぎし年月の物語』の現在に伝わる形のものであつたとすれば、その記事における不統一や矛盾は、多くの不器用な加筆の集積の結果だと見ることができよう。或は数多くの物語や記事を無理に一連の話に統一しようとした結果である。この様なつぎはぎによつて創られた『過ぎし年月の

物語』中の典型的な部分は、例えばオリガ女帝に関する物語である。6453(946)年の記事から続く物語として見なければなるまい。其処には次の様な内容が書かれている。オリガの夫のイゴリはドレヴリヤネに一層多くの貢税を求めて出撃したが、兵員が少なかつたために敗れ、且つ殺されて、異郷に埋められてしまった。

イゴリ公の殺された後、その妻オリガは、夫を殺したドレヴリヤネの公から、妻になれと強要される。ドレヴリヤネの使者をオリガは最大の栄誉礼をつくして迎え、船に乗せたまゝ屋敷に運び込んで、あらかじめ掘つておいた大きな穴に船もろとも落して生き埋めにしてしまう。オリガの果たした才一の復しゆうであつた。その後オリガはドレヴリヤネのもとに使者を送り、妻になれという要求を聞くから、迎えの重臣を派遣し来たれと伝える。迎えに来た重臣たちを風呂に入れて戸を閉め、焼き殺してしまふのである。即ち才二の復しゆうである。そして自からは嫁として相手方へ親兵団をつれて出発し、夫の墓前に供養をする。迎える相手方が供養の酒によいづぶれるのを見はからつて、彼女は親兵団に令じて五千人もドレヴリヤネを斬り殺してしまふのである。即ちオリガの果たした才三の復しゆうである。続いて彼女はドレヴリヤネのとじこもつた町を包圍する。包圍戦をしかれたドレヴリヤネの飢えと疲れを待つて、和睦の提案をする。鳩と雀を三羽づゝ各戸ごとに提出するだけでよいというのである。正直にその和睦の条件をのんだドレヴリヤネは、数多の生きた鳩と雀を三羽づゝ各戸から提出する。夕方を待つてオリガはそれらの小鳥の足に火だねをくゝりつけて放つ。その小鳥たちの火だねのために町は丸焼きになつて、完全な勝利をオリガはおさめることができた。即ち、才四の復しゆうである。ところが、この四つの復しゆう物語には面白い矛盾が見出される。即ち、自からドレヴリヤネの公の嫁になると称して敵地に乘込み、夫の墓前に供養をするという口実で

酒を飲ませた末に酔いつぶれたドレヴリャネを五千名斬り殺し、オ三の復しゆりを果したのであつた。ラヴレンチー、トロイツキー、イバーチー各年代記の『過ぎし年月の物語』はこの結びを翌年(6454年)の項にかけて次の様に述べている。

И исекоша их 5000; а Ольга возвратися Киеву,
и пристрой вои на прок их.

Начало Княженья Святославля.

В лето 6454.

Ольга с сыном своим Святославом собра вои многи и храбры, и иде на Дервьвску землю. Изидоша Деревляне противу; сънемъшемся обема подкома на скуп, суну Святослав Деревляны, и копье лете сквозе уши коневу, удари в ноги коневу. Бе бо детеск. И рече Свенедд и Асколд: "князь уже почал; потягнете, дружина, по князе". И победиша деревляны, Деревляне же побегоша.....

『しかして彼らを五千名斬り殺した。ところでオリガはキエフに帰り、しかして彼等の残り(の者たち)に対して戦いを準備した。

スヴィヤトスラフの治世のはじまり。

6454(946)年。

オリガはおのれの息子スヴィヤトスラフと共に多くの、そして勇敢な軍勢をあつめ、しかしてデレヴアの国へ進攻した。デレヴリャネは(これに)向つて出撃した。両軍が合戦にはいつたとき、スヴィヤトスラフはデレヴリャネにヤリを投げた。しかしてヤリは(自分の)馬の両耳のあいだを飛んで(その)馬の足を打つた。というのは(彼は)幼少であつたからである。しかしてスヴェネルドとアスモルドは言つた。"公はすでに(戦い)はじめた。親兵団よ、公につゞいて進め"と。しかして(彼等は)デレヴリャ

ネをうち負かした。ところでデレヴリヤネは逃げた』

先づオ一^{何故}にこの物語が6453年から6454年に年号を改められて中断されたのであろう。そして、中断の折に、何故、『スヴィヤトスラフの治世のはじまり』などと銘打つたのであろう。いくら、スヴィヤトスラフという年少の公が其の時に居たにしても、物語は、この後にも長々とオリガ女帝を中心として展開されているのではないか。彼女が洗礼を受け、キリスト教に帰依するまでの物語は、この後にも長々とつづいているのである。スヴィヤトスラフ公が母をしのぐものとして、或は母と別的人格として登場するのは、もつと後のことである。スヴィヤトスラフ公という特異な人格の、そもそもの芽ばえの物語が、彼の母オリガの復しゅう戦の一節に迷い込んだと見るより仕方あるまい。スヴィヤトスラフが幼少の頃から戦争の陣頭に立つていたという物語を、年代記者は話のつじつまを合わすためにオリガの物語の中に組み込んだのであろう。ところが、そのことによつて、スヴィヤトスラフ公の物語をととのえる目的は達せられたのであるが、オリガ女帝の方の物語が何とも恰好のつかないものになつてしまつた。戦闘開始の指揮を幼少のスヴィヤトスラフにとらせなくても、オリガ女帝その人がいたはずではないか。オ一彼女は勇敢に敵地に嫁といつわつて乗り込み、自から親兵団に命令を下して五千人も斬り殺したほどのつわものではなかつたか。少くとも、彼女の復しゅうの物語はその様に構成されている。種々の物語を書き込み、編集し直している内に、実はこんな形のもので出来上つてしまつたと言わざるを得ない。だから、実際は、『五千人も斬り殺した』という言葉の直後には『(他の)デレヴリヤネは逃げた』〈Древляне же побегоша〉という言葉が続き、且つ、この言葉で一つの完成された物語が終つていたものであろうと思われる。古くから伝えられた女傑オリガの伝承的な物語の一つであつたにちがいない。そして、もし、これだけが一つの物語であつたとすれば、

年代記者は才智を働かせて、支配階級の者たちが殺され或は逃亡したドレヴリャネの国の人々については、『しかして他の人々をあるものは殺し、他のものはおのれの家臣たちに奴隸として引き渡した。ところで彼等の残りは貢税を支払わせるために残した。しかして彼等に重い貢税を課した』〈и прочая люди овыхъ избн, а другія работъ предасть мужемъ своимъ, а прокъ ихъ остави платити дань. И възложи на ня дань тяжьку〉とつゞいて物語はとじられるべきであつたであらう。ところが各年代記の『過ぎし年月の物語』は、そりなつていない。結びであるべき『貢税を課した』という言葉の前に、実は、もう一つの物語が組み込まれてしまつた。即ち、それは、町に立てこもつた敵を包圍して、和睦を申し込みながら、小鳥の足に火だねをつけて夕刻に放ち、町を焼くという物語が組み込まれたのである。だから、結びであるべきこの言葉は、その後へあとまわしになつてしまつているのである。野における戦いと、町に立てこもつたものに対する包圍戦及びそれにつゞく、焼き打ちの策略の物語とは別の物語であつたにちがいない。それらを別々のものだとはせず、順を追つて実行された四つの徹底的なまでの復しゅう物語のように見せようとして、つきはぎに組み込もうとした所に、なめらかでない不細工さが現れたのであらう。

また、別の年号の項を見るがよい。即ち、6479(971)年の項である。其処には、グレキとの間に結ばれた古い条約文の写しと断り書きして、幾個条かの条約文が書きとられている。(———それについては既に前述した———)。ところが、その条約文の直前のところに、グレキと戦つたスヴァイヤトスラフが、既に消耗して数少くなつた親兵団を見て言ひ文句がある。その所から書き抜いて、条約文をとばし、後半へつないでみるがよい。そうすると自然に次の様な文章が連続してつゞられるではないか。

Видев же мало дружины своей, рече в себе: "еда

како прельстивше избъють дружину мою и мене", беша бо многи погибли на полку; и рече: "поиду в Русь, приведу боле дружины".

(これより以下の文章を条約文及びその付随分として省略)

поиде в лодьях к порогом, и рече ему воевода отень Свендел: "поиди, княже, на коних около, стоять бо Печенези в порозех". И не послуша его, поиде лодьях, и

『おのれの親兵団が少いのを見て(彼は)独り言をいつた。"あざむいて(彼らは)我が親兵団および我をも殺さないであろうか"と。というのは戦いで多くのものたちが倒れてしまつてゐたからである。しかして(彼は)言つた。"ルシへもどり、より多くの親兵団をつれて来よう"と。……(条約文関係の文章)……船に乗つて(ドニエブル河の)浅瀬へ向つて出発した。しかして彼に父の軍司令官スヴェンデルが言つた。"公よ、馬に乗つて迂回せよ。というのはベチエネギが浅瀬に布陣しているからである"と。しかして(スヴィヤトスラフは)彼の言うことを聞かず、船で進みはじめた……』

そして、スヴィヤトスラフは、兵員の少いのを見すかしたベチエネギのために、キエフへの道をとざされて、結局、浅瀬で殺されるのである。条約文の個所を除けば、自然のうちに見事ななめらかさで一つの物語が続くのである。とすれば、明らかに文献的な条約文の個所が、この伝承的な面白い物語の途中に組み込まれたと考えざるを得ない。

では、以上二つのことについて、直観と合理性をたよりに、後代の組み込み、加筆による物語の筋の乱れだと思つた結論は、あくまでも直観と合理性による結論に過ぎなくて、何物の傍証も得られないであろうか。ラヴレンチー、トロイツキー、イパーチー各年代記に見られる『過ぎし年月の物語』が、既に、この様な加筆

の末の産物であつたとしたら、加筆されるべき、もとの作品がなければならぬ。想像される『原初の集』〈Начальный свод〉は、現在に伝えられていない。とすれば、『過ぎし年月の物語』よりも、より一層『原初の集』に近い形をとどめているノヴゴロドオ一年代記と比較してみるより仕方あるまい。そこで、上記のオリガ復しゆう物語の個所と、スヴィヤトスラフの物語の条約文の個所とを此処にとり出して、ノヴゴロドオ一年代記のその項に当るところと比較してみよう。

オリガの復しゆうの個所には『しかしてドレヴリヤネは逃げた。しかして(人々は)彼等に重い貢税を課した』〈И побѣдижа Древлѣне; и возложиша на них дань тяжку〉(1950年版; 科学アカデミー出版所; ノヴゴロドオ一年代記; p. 113)という言葉がある。ドレヴリヤネが逃げた——重い貢税を課したという二つの文章の間には、『過ぎし年月の物語』が伝える町の包圍戦と、小鳥による策略の焼き打ちの物語はその影もみとめられない。この二つの文章の間に、『過ぎし年月の物語』が後代に別の物語を加筆した明らかな証拠になるであろう。(各年代記におけるオリガの物語の記事はそのことごとくを『古代ロシア研究』オ五号; p. 107~p. 140に集録しておいた)。では次にスヴィヤトスラフ公のグレキとの条約文が組み込まれている6479(971)年の項に相当するノヴゴロドオ一年代記の記事を見よう。其処(同上; p. 123)にある対応文章とは;

Видев же мало дружине своя, и рече к себе: "да како прельстивше, избють дружину мою и мене"; беша бо мнозе избие на полку. И рече: "пойду в Русь и приведу болши дружине"; и поиде в лодьях. Рече же ему воевода отень Свенедд: "пойде, княже, около на конех; стоять бо Печенеже в порозех". И не послуша его, нь поидоша в

ПОДЪЯХ...

「ところでおのれの親兵団が少いのを見て、しかして独り言を言つた。『あざむいて（彼等は）我が親兵団及び我を殺さないであらうか』と、というのは多くの者たちが戦で殺されていたからである。しかして言つた。『ルンにもどらう。しかしてより多くの親兵団を連れて来よう』と、しかして船に乗つてでかけた。ところで彼に父の軍司令スヴエネルトが言つた。『公よ、馬に乗つて迂回せよ。というのは浅瀬にはベチエネギが陣をしいているからである』と、しかして、彼の言うことを聞かずに（人々は）船で出かけた』

この様にノヴゴロドオ一年代記は、条約文とそれに付随的な文章とを全く含んでいない。『過ぎし年月の物語』よりも古い『原初の集』により近い形だと考えられるノヴゴロドオ一年代記である。ラヴレンチーをはじめとする年代記の『過ぎし年月の物語』が、嘗つて存在した古い文章の中間に、条約文及びその付随文を加筆したものであることはこれで充分証拠立てられるであろう。

ちなみに、ノヴゴロドオ一年代記には、『過ぎし年月の物語』があれほど文献的に引用し、よりかゝつていたハマルトルス年代記からの借用は、その一片さえ見当らない。だから、ハマルトルス年代記から出たと考えられる『過ぎし年月の物語』中の文章も総て『原初の集』を土台とした上加筆されたものであるといえよう。6476(971)年の項の条約文とその付随分は、一つの物語の中間に差し込まれた形で書きとられる年代記とそうでない年代記とがあるのもこのためであろう。『帝室譜系次才書』〈Книга степенная царского родословия〉オ一部オ一段オ五帝にはスヴァイヤトスラフとそのグレキ遠征及び勝利が書きとめられながら一言も条約文にはふれていない。また、プスコフオ一年代記は年号を6480(975)年と変えてスヴァイヤトスラフのグレキ遠征を物語りながら、やはり、一言も条約文にはふれていない。と

ころが、ソフイヤオ一年代記においては、6742(967)年から詳しくスヴイヤトスラフの記事を扱つていて、条約文の差し込みの方法はラヴレンチー、イパーチー等の『過ぎし年月の物語』とほとんど変わらない。たゞこの年代記では年号が6476年ではなくて6479年に変つてゐるだけである。エルモリンスキー年代記では6478年という年号のもとでこの記事を扱いながら、やはり『和を講じた』〈створиша мир〉という言葉を付けただけで、浅瀬へ船で出発する物語を連続させてゐる。ニコン年代記は、ラヴレンチーその他の年代記における『過ぎし年月の物語』のこの個所の文章をやゝ平易に詳しくした形で同じ編集様式をもつてゐる。然し年号は6476年ではなくして6479年としている。その他の年代記のこの項目の取扱いについては省略しておく。

ともあれ、シヤフマトフがその成立の時期を1093年から1095年の間だと推定した『原初の集』を土台として『過ぎし年月の物語』はハマルトルスの年代記をはじめとするビザンチン文献やその訳文、或は条約文的な資料、口碑、その他の伝承、及び年代記者自身の知つてゐた当代の出来事、その他を加筆して創られたものであつたであらう。ノウゴロド年代記が比較的素材に反映し、『過ぎし年月の物語』がより多く加筆編集の手を加えた、もとの『原初の集』が、推定通り1093年以前に創られたものであつたにしても、果して、その『原初の集』が、白紙の上における全くの『原初』のものであつたかどうかは疑わしい。むしろ、其処には既に幾層にもなお古いものが基礎をつとめていたのではなかつただらうか。然し、現在に伝えられてはゐない『原初の集』の論議をするよりも、此処では、『過ぎし年月の物語』の方に問題の重点がある。むしろ、『過ぎし年月の物語』をもう一度詳しく読み直すことによつてこそ、『原初の集』をも含めて、其処に折り重ねられた幾層もの古い層はほぐれ出されるべきであらう。

そこで、ロシア文化史上、ギリシア文明の輸入、キリスト教の

輸入を通じて巨大な足跡を残した画期的な君主ヴラジーミル公（年代記名は東スラヴ的にヴオロジメル公）の記事に立ちかえつてみよう。そのために、筆者は『古代ロシア研究』才六号及び才七号において、あらゆる年代記のあらゆるヴラジーミル記事を古代ロシア語の生の文章のまま集録したのであつた。ラヴレンチー年代記の『過ぎし年月の物語』の年号を以てすれば6494(986)年の長い項を見よう。原始スラヴ宗教を捨て、新しい宗教を取り入れようとするヴオロジメルのもとへ世界の各宗教の代表者が自分たちの教義を説くためにやつて来るという記事である。勿論そんな事実があつたとは考えられない。むしろ、各宗教の教義を並べることによつて、キリスト教の正しくすぐれていることを英雄ヴオロジメルをちなみにして説こうとしたものであろう。ともあれ、其処には、先づ、ボフミト（マホメット）の教えの信仰をもつボルガル人が来る。そして、このボルガル人がヴオロジメルに説いたという形で物語られるマホメット教の教義とは次の様なものであつた。（ラヴレンチー、イパーチー、トロイツキー各年代記による）。

"веруем Богу, а Божмит ны учит, глаголя: обрѣзати уди тайныя, и свинины не ясти, вина не пити, а смерти с женами похоть творити блудную; дасть Божмит комуждо по семидесят жен красных, избереть едину красну и всех красоту възложить на едину, та будеть ему жена; сде же, рече достоить блуд творити всяк; на сем свете аще буде кто убог, то и тамо"; и ина многа леть, ея же не лзе псати срама ради.

『（我々は）神を信仰している。ところでボフミトが我々に教えて言うには、割礼せよ、しかして豚肉を食べず、酒を飲まず、その代り死後には女たちといん慾をなせという。ボフミトは誰

にでも美しい女を七十人づゝ与え、一人の美しい(女)を選び、
総てのものの美しさを(その)一人に与える、そしてその(女)
がその者の妻となろう。この世では、(彼の)言うには、あらゆる
いん蕩をなすべきである。この世で貧しいものはあの世でも(そ
うである)〃と。そしてその他の多くのいつわりが(迷べられ)、
それは恥の故に書くことができない』

酒と女が好きであつたヴオロジメルは、たゞ禁酒と割礼だけを嫌つて、この信仰を拒否したと語られている。続いて、ローマ・カソリックから派遣された者(ネミツイ<Нѣмцы>と複教形を用いている。——現代語でなら『ドイツ人たち』であろうが、此処では一般に言葉の通じ難い外国人の総称であつたかも知れない——)がカソリック教の教義を語つてきかせる。それによると『空と大地と星と月およびあらゆる生物を創り給うた神を礼拝している』<кланяемся Богу, иже створил небо и землю, звѣзды, мѣсяць и всяко дыханье>のであり、教義とは『力に応じて精進寄進することであり、もしも誰かが(酒を)飲み、食べたとしても、そのすべては神の栄光のためである』<пошенье по силѣ; аще кто пьеть или ясть, то все в славу Божию>というのであつた。ヴオロジメルは、今度は自分の先祖たちが、その教えを取らなかつたことを理由に拒否して使者を追い帰すのである。言葉通りに読めば、マホメット教よりも、カソリックの方が余程先にロシアに入つて来ていたということになる。『我々の先祖たちがそれをとらなかつた』<отци наши сего не прияли суть>という言葉は、そうでなければ生れるまい。先祖たちはその教えを知つていたが取らなかつたという意味で読まれるべきである。然し果してそうであつたかどうか。年代記の書き手はギリシア正教の修道僧であることを忘れるべきではない。そしてその修道僧にも、また彼自身が編集せんとする『過ぎし年月の物語』の素材自身

にも、ロシアの古い伝統がしみ込んでいた。父祖たちを以て範とせよという感覚である。内乱と外敵におびやかされる十一世紀末から十二世紀にかけて、過去は栄光にみちたものであり、同時に再建さるべき目標であつた。先祖たちはその信仰を取らなかつたというのは、何にもました拒否のための理由づけになり得た。先祖が為さなかつたから我々も為さないとは、まさに最大級の拒否宣言になり得た。ところが、986年当時は、ローマという西と、ビザンチンという東の宗教の溝は、相手に対して最大級の拒否宣言をしなければならぬほどには深くはなかつたはずである。明らかに、この一節は随分後代になつてから、あたかもヴオロジメルの時代にあつたことのように書き添えたものであろう。

さて、次にヴオロジメルのもとに来たのは、ユダヤ教を信ずるコザルであつた。面白いことに、ローマ・カソリックの拒否されたことを聞いて彼等がやつて来たことになつている。「これを知いて」〈Се слышавше〉となつてゐるからである。これもまた編集者の手によるものであろう。年代記者が最も高くかかげようとするギリシア正教を円の中心にすえて、次にその核心にふれるように、他宗の連中を登場させる手段としては仲々巧妙であつた。その上に、もう一つ、ユダヤ教の使者を此処に登場させて、ローマ・カソリックを非難させようとする術策も含まれていたのであろう。だから、ローマ・カソリックの連中はユダヤ教の連中の側から言わせると、自分たちがはりつけにして殺したキリストを信じているのは不合理であるということになる。ユダヤ教の連中は、アブラハム、イサク、ヤコブの唯一の神を信仰しているのであるところが、このユダヤ教の使者は、ヴオロジメルから、そのおきてを聞かれた時に「割礼をなし、豚肉も、うさぎの肉も食はず、安息日を守るごと」〈обрѣзаться, свинины не ясти, ни заячины, субботу хранити〉と答えるだけである。そして、年代記者は、あらかじめ予定したように、ギリシア正教以外のも

のを非難するために、一度利用したユダヤ教の連中を今度はやり玉にあげる。その時には、別の宗派の者を登場させず、ヴオロジメル公とユダヤ教信者との問答の形式をとる。このあたりの編集手腕は実に見事である。その問答は、あらかじめ予定した落とし穴への誘導を思わせて仲々面白い。ラヴレンチー年代記その他の『過ぎし年月の物語』から引用してみよう。

Он же рече: "то где есть земля ваша?" Они же реша: "в Ерусалиме". Он же рече: "то тамо ли есть?" Они же реша: "разъгневася Бог на отци наши, и расточи ны по странам грех ради наших, и предана бысть земля наша Хрестеяном". Он же рече: "то како вы инех учите, сами отвержени от Бога и расточени? Аще бы Бог любил вас и закон вашь, то не бысте расточени по чужим землям; еда нам тоже мыслите прияти?"

『ところで彼（ヴオロジメル）は言つた。＼それでは汝らの国はどこにあるのか』と。そこで彼らは言つた。『エルサリムに』と。そこで彼は言つた。『それではそこに（今も）あるのか』と。そこで彼らは言つた。『神は我々の父たちに対して怒り給ひ、しかして我々の罪のゆえに我々を国々に散らし給うた。しかして我々の国はキリスト教徒たちにゆだねられた』と。そこで彼は言つた。『それでは汝らはいかにして他の者たちを教えているのか。自分たちが神によつてしごきけられ、散らされているのに。もし神が汝らと汝らのおきてを愛していたならば、（汝らは）他人の国々に散らされることはなかつたであろう。はたして我々も同じように受け入れると（汝らは）思つているのか』と。

何もかも充分前以て知りつくしていた上で、優越した質問者にヴオロジメルを仕立てあげ、相手を完全に穴へ落とす、この手法は、『過ぎし年月の物語』の中で最も傑出した部分である。余程当時

のロシアの神学理論に通じたもの（或は、ものたち）が充分にねり上げた記述であつたと思わなければならない。生のまゝの記述素材をいゝ加減に此処へ織り込んだものではなかつたであらう。だから、その一節の後には、ユダヤ教の側の行動は一切何も語られず、直接、ギリシア正教の哲学者が来るという記述に一転している。あらかじめ予定した落とし穴に、予定通り相手を突き落して、一言のつなぎの言葉もなく、ギリシア正教の側からの哲学者の来訪へ話を移す手腕もまたほめられてよいであらう。修道僧たちが、充分に自分たちの教義の心髓を知りつくしていた上でなければ振ることのできない手法であつたように思われる。実は最大の目的——ギリシア正教の由来と教義を説くこと——の前座的な記述は、前座的であるが故に最も鋭く断ち切らなければならなかつた。ねりにねられた編集方法を我々は此処に見ることが出来る。此処に至るまでには何度にも及ぶ編集のねり直しが重ねられたことであらう。特に年代記者たちにとつて最も親身をギリシア正教の教義の語り出しだつたからでもある。この語り出しをつなぐ編集方法のねり上げの見事さに比べて、語り終りの部分とその後とをつなぐ場合の編集方法はどうであらう。実は、息をつめるほどに真剣に語り出し、語りつゞけた末に、最後に語り終つて、ホツとした時、次の物語との連絡には、もう息がつゞかなかつた。何度か編集し加筆し書き直した記者たちが、誰もかれも、この失敗をやつたらしい。或は失敗を気づかなかつたらしい。いや、それぐらいのものは、もう、どうでもよいと考えていたのかも知れない。だが、我々にとつては、其処にこそ、『過ぎし年月の物語』の面白い秘密をのぞく窓が開いている。

ギリシアの哲学者は、世界創造から説きはじめる。そして、それぞれの区切りごとに、ヴオロジメルの質問を入れて、再びそれに答える要領で次の区切を語りはじめ、その様にして、キリストへの信仰を説き、信ぜざるものが受けるべき永遠の恐ろしい苦し

みの物語を以て説教を終る。その間に實際用いられた文獻的な資料については既に述べたところである。さて、語り終つた時、ギリシアの哲学者はどうしたであろう。『過ぎし年月の物語』はその直後に次の様につづけているのである。

И се рек, показа Володимеру запону, на ней же бе написано судище Господне, показываше ему одесну праведныя в весельи предъидуща в рай, а ошюю грешники идуща в муку; Володимер же вздохнув рече: "добро сим одесную, горе же сим ошюю". Он же рече: "аще хошеши одесную с праведными стати, то крестися". Володимер же положи на сердци своем, рек: "пожду и еще мало", хотя испытати о всех верах. Володимер же сему дары многи вдав, отпусти и честию великою.

『(哲学者は)かく言つて、ウオロジメルにとほりを示した。ところでその上には主の裁きの場面が描かれていた。右手の側によるこびの中で楽園へ進み行きつゝある正しき者たちを、左手の側に苦しみに行きつゝある罪人たちを彼に示していたのである。ところでウオロジメルはため息をついて言つた。"これら右手のものたちは良きかな。これら左手のものたちはわざわいなるかな"と。ところで彼(哲学者)は言つた。"もしも(汝が)右手の方に正しき者たちと共に立つことを望むならば、洗礼を受けよ"と。ところで、ウオロジメルはおのれの心にとどめて言つた。"なおしばらく待とう"と。あらゆる信仰について吟味しようと思つたからである。ところで、ウオロジメルはこの者に多くの贈物を与え、彼を大いなる名誉と共に行かせた』

さて、この結びにもあたり、また次の物語との連絡部分にも当るこの文章はどうしたものであろう。熱をこめて述べられたギリシア正教の詳しい教義——『過ぎし年月の物語』のこの部分は、

輸入直後のギリシア正教の神学の心髄であつたはずである——
についで、最後の審判の図を見せられたヴオロジメルは嘆息さ
えもらしたと書かれているのではないか。当然、すぐに洗礼を受け
たという物語の結びがつかない。ところが、そう
はなつていない。然し実は其処にこそ、面白いからくりがかくさ
れているように思われるのである。此処こそ何等の非常に古い、
そして余り上手ではない編集と加筆の手が加えられていると思わ
れるのである。そのために、『なお総ての信仰を吟味してから』
洗礼を受けようとして心にどよめいて、一応は哲学者を戻させたとい
う話がゆがんで付随して来たのであろう。たゞしに、『あらゆる信
仰を吟味』するにも、もう、その対象は無かつた。別の宗教の教
義やおきての点検の記述など、『過ぎし年月の物語』にもノヴゴ
ロド才一年代記にも全く見当りはしない。当然直結されるべきヴ
オロジメルの洗礼を、こんな下手な理由づけで先にゆばすように
編集し直したのは、ついでに書きとめておきたかつたヴオロジメ
ル伝承と、もう一つ、当時のギリシア正教の本質をまだもつと述
べ立てたかつたからであるにちがいない。武人英雄としてのヴオ
ロジメルの物語を少し宗教的に着色して書きとめることゝ、その
折の隙間をぬつて、新しく入つて来た信仰書の訳本のさわりを是
非書き入れておきたかつたからであらう。そのためには、最も古
くあつた洗礼の物語を、できるだけ先へのばす方が都合がよかつ
た。一處この目的に沿うように編集し直されると、もう、仲々、
洗礼の機会を書きとどめる場面をもち出せず、次から次へと後ま
わしになつて、その間に、予定した以上の多くの伝承的物語と教
義と、そしてその混合された話の教々を書きつけてしまふことにな
つたのである。洗礼の場面をもち出すまでに次々ととどめなく
書き加えた物語とは次の様なものである。

その才一は明らかにブイリーナに詠まれるような素材——
ヴラジーミル公のまわりに集る英雄たちの話——を下敷にして、

貴族や長老たちを登場させる。其処でヴォロジメルが各宗派から入信勧誘の使者の来訪と、特にギリシア正教の信仰内容をかいつまんで説明し、人々に意見を求めるのである。貴族・長老たちは使者を立て、各宗教の勤行儀式を調べさせよと進言するのである。その才二は、使者たちの見聞した各宗教の勤行儀式その他の所業を報告の形で述べるのである。面白いことに使者が調べに行く対象の順番は、先に勧誘に来た者たちの順番と一致している。だから、ギリシア正教を調べて帰つた使者の報告が最も賞讃に満ち華やかであるのに対して、前座的な他宗の調査の結果報告は総て非難がましいものであつた。此処には先の勧誘の折に見られたギリシア正教讚美の目的と手法の同一性がみとめられる。ギリシア正教輸入元の本山讚美が、この世ならぬ美しさと厳かさとおこなわれたのである。

才三は、ギリシアへ派遣された使者の見聞報告を再び貴族や長老の集る席で行わせる物語である。其処では報告する使者の言葉が中心をなす。入信勧誘に来た各宗の場合と同じ順番で、使者は一層くわしく、多宗の人々の実際の所業を物語るのである。公及び貴族・長老たちは聞き終つて結論を出す。ギリシア正教を受け入れることにしよう、公の祖母オリガも洗礼を受けたのだから——という結論である。

さて、実はこれだけでまたヴォロジメル公が洗礼を受けるべき事態が充分にかもし出されてしまうのである。当然、自から出張するなり、僧を招くなりして、洗礼を受けるべき仕儀にならなければ話の筋としておかしいのである。才三の物語の最後に、『ヴォロジメルは言つた。』どこで（我々は）洗礼を受けようか？』と、ところで彼等（長老・貴族たち）は言つた。』汝に好ましい所で』と』。《Володимер рече: „къдѣ крещенье приемъ?” Они же рекоша: „гдѣ ти любо”》とある。話は、直ちに洗礼の場に及ぶべきであつた。ところが、

先づ洗礼をあと廻しにして、中間に入れた三つの物語も、その三つ目の最後が、また洗礼に及んでしまつた。然も、なお、まだまだ多くの物語をヴオロジメルにはになわさなければならなかつた。いや、むしろ、ヴオロジメル公が洗礼を受ける物語が数多くあつたことであらう。もともと、古い年代記は、その一つか、せいぜい二つを何とかつじつまを合わせて書き取つていたことであらう。後に、その書き取られた物語の結末の部分——かくして洗礼を受けたという部分——を切り捨て、別の多くの洗礼物語を書き足し、或は、その間に、年代記者にすればおのれらの宗派の立派さと正当さをほめあげる文章を入れたかつたのであらう。だから、古いものの上に別の物語を繋ぎ足すごとに、洗礼を受けるという結末へ引きづられて来たのである。そして、それにもかゝらず、あくまでもその結末の部分は切り捨て、後へ廻そうとし、再び別の物語を組み入れたものと思われる。洗礼を受けるべき所まで話を進めながら此処でとゞめて、才二次或は才三次的に組み込まれたものが次の物語である。年号だけは一年後の6496(988)年にしている。この様にして再度組み込まれたこの年の物語は、おそらくもともと二つのものであつたであらう。その一つは、コルスニというビザンチン方の町を攻める遠征物語であり、城攻め物語であつたであらう。この町を攻めおとした後の物語は、ヴオロジメルの嫁取りの物語であつた。そして、とりどり、その嫁取りの物語を洗礼と結びつけて、やつと、ヴオロジメルが洗礼を受けるという結果をみちびき出した。当然、もつともつと、以前にみちびき出されていた著の結末をこゝまで切り捨て、引きのばして来た以上、とりどり洗礼を受けるという物語の結末は面白いものでなければなるまい。説教者に勧誘されることによつて、教義を聞き知つた時の感動によつて、勸行儀式の壮麗さを報告されたことによつて、それぞれに洗礼を受けるべき充分な動機と機会があつたはずであり、それぞれの物語ごとに実際に洗礼を

受けたという結末がついていたかも知れない。その結末を捨て、並べた以上最後における結末の導入は以前にもまして迫力があり説得的でなければならぬ。「過ぎし年月の物語」の記者（編者）はこの辺の呼吸だけは見事に心得ていたように思われる。世に流布していた英雄の據取りの説話と疫病治療とをかみ合わせた面白い話を此処にはめ込み、且つ、前後のつじつまを合わせるために幾分かは加筆したのであつた。その物語とは次の様なものである。

и посла Володимер ко цареви Василью и Костянтину, глаголя сиче: "се град ваю славный взях; слюшо же се, яко сестру имата девою, да аще ее не вдаста за мя, створю граду вашему, якоже и сему створих". И слышаста царя, быста печальна, вздаста весть, сиче глаголюща: "не достоить хрестеяном за поганья дати; аще ся крестиши, то и се получиши, и царство небесное примемши, и с нами единовѣрник будеши; аще ли сего не хочеши створити, не можем дати сестры своее за тя". Си слышав Володимер, рече посланым от царя: "глаголите царема тако: яко аз крещюся; яко испытах преже сих дний закон ваш, и есть ми любо вера ваша и служенье, еже бо ми споведаша послании нами мужи". И си слышавша царя, рада быста и умолиста сестру свою, имянем Аньну, и посласта к Володимеру, глаголюща: "крестися; и тогда постеве сестру свою к тебе". Рече же Володимер: "да пришедше с сестрою вашею крестять мя". И послушаста царя, посласта сестру свою, сановники некия и прозвутеры; она же не хоташе ити: "яко

в полон"; рече, "иду, лучи бы ми сде умерети". И реста ей братья: "еда како обратить Бог тобою Рускую землю в покаянье, а Гречьскую землю избавишь от рати; видиши ли колько зла створиша Русь Греком? И ныне, аще не идеши, тоже имуть створити нам". И одва ю принудиша. Она же седьши в кубару, целовавши ужики своя, с плачем поиде чрез море; и приде к Корсуню, и изидоша Корсуняне с поклоном, и въведоша ю в град, и посадиша ю в полате. По Божью же устрою, в се время разболеса Володимер очима, и не видяше ничтоже, тужаше велими; и посла к нему царица, рькуще: "аще хоцши избыти болезни сея, то въскоре крестися, аще ли, то не имаше избыти сего". Си слышав Володимер, рече: "да аще истина будеть, то поистине велик Бог будеть хрестеянеск. И повеле хреститися. Епископ же Корсунский с попы царицины, огласив, крести Володимера; яко възложи руку на нь, абье прозе. Видев же се Володимер напрасное ицеленье, и прослави Бога, рек: топерво уведах Бога истиньнаго". Се же видевше дружина его, мнози крестиса.

『しかしてヴオロジメルは二人の皇帝ヴァンライとコステヤンチンに使者をおくつてかく言つた。『見よ、汝等二人の榮えある町を（我は）取つた。ところで（我は）（汝等二人が）未婚の妹をもつてゐると聞く。もしも彼女を我が妻として与えないならば、汝の町に対して、この町にも我がなした如く、なすであらう』と。（二人の）皇帝は（これを）聞いて悲しみ、知らせを与えてかく言つた。『キリスト教徒には異教徒に嫁がせることはふさわしく

ない。もしも（汝が）洗礼を受けるならば，しからは，これも（汝は）受けるであろう。しかして天国をも受け，しかして我々とも信仰を同じくするものとなるであろう。もしもこのことを為すこと欲しないならば，（我々は）おのれの妹を汝に嫁がせることはできない」と。ヴオロジメルはこれらの者たちの言うことを聞いて，皇帝たちからの使者たちに言つた。「皇帝たちにかく言え。我々は洗礼を受けよう。今より以前に（我々は）汝等のおきてを調べ，しかして汝等の信仰及び勤行は私の気に入っている。というのには，我等によつて使わされた家臣たちが我に物語つたからである」と。これらの者たちの言うことを（二人の）皇帝は聞いて喜び，しかしてアエナという名のおのれの妹に切願した。しかしてヴオロジメルに使者を送つて言つた。「洗礼を受けよ。そうすれば（我々二人は）おのれの妹を汝につかわすであろう」と。そこでヴオロジメルは言つた。「汝等の妹と共に来たり，我を洗礼せよ」と。しかして皇帝たちは聞き入れ，おのれの妹，二三の高官たち，及び長老祭司たちを派遣した。ところで彼女は行くことを欲しなかつた。（彼女は）言つた。「捨虜に行くよりなものだ。我は此処で死ぬ方がよい」と。しかして（二人の）兄たちは彼女に言つた。「神は汝を以てルンの国を悔悟に向わせ給ひ，ところで（汝は）グレキの国を狂暴な軍勢から救うことになるのではなからうか。ルンがグレキに如何ほどの悪をなしたかを（汝は）知つてゐるであろう？ しかして今も，もし（汝が）行かないならば，我等に（彼等は）同じことをなすであろう」と。しかして，やつと彼女を説き伏せた。ところで彼女は船に乗つて，おのれの親戚たちに接ふんし，泣きながら海を渡つた。しかしてコルスニについた。しかして，コルスニ人たちが出て来て挨拶をなし，しかして彼女を町の中へみちびき入れ，しかして彼女を宮殿に坐らせた。ところで神の御心によつて，この時にヴオロジメルは眼を病み，しかして何も見えず，ひどく苦しんでいた。しかして彼

のもとに皇女は使者をつかはして言つた。「もしもこの病からのがれることを欲するならば、いそいで洗礼を受けよ。さもなければ、これからのがれることはできないであろう」と。ヴオロジメルはこれを聞いて言つた。「もしも真実であるならば、キリスト教の神は真に偉大である」と。しかしておのれを洗礼せよと命じた。ところで、コルスニの主教は皇女の僧たちと共に説教をおこなつてヴオロジメルを洗礼した。(主教が)彼の上へ手をのせると、たゞちに(彼は)物が見えた。ところでヴオロジメルは急激な治癒を見て、しかして神をたゞえて言つた。「(我は)真の神を今はじめて見た」と。これを彼の親兵団がみて、多くの者たちが洗礼を受けた。』

この様に、後になつて、手を加え、最後に織り込んだ物語それ自身がこれまた単一ではない物語の編集であつたことは、その内容から見て明らかに推察されるところである。さて、洗礼という話の結末を此処まで引きのばすことによつて、その間に差し込んだ物語が数多く、しかもなお、それ以外にも、まだまだ、グラジーミル洗礼の物語があつたことを、『過ぎし年月の物語』の記者自身が断り書きしなければならなかつた。即ち、自分の占領したコルスニという町で嫁を迎えると共に洗礼を受けたという物語が単に一つの言い伝えにすぎないことを白状するかの様に、『過ぎし年月の物語』は、後に続いて次の様に書きつけているのである。『ところで見よ、本当のことを知らない者たちは(彼が)キエフで洗礼を受けたように言つている。しかしてまた他のものは、ヴァシリフで(洗礼を受けたもののように言い)、またその者たちは、別のことを言つているのである』
« Се же не свѣдуще право глаголють, яко крестилъся есть въ Кіевѣ; и ини же реша: Василичи; друзіи же инако скажуть. » この断り書きをもう一度考え直してみるがよい。もしも、勧誘に来たギリシアの哲学者の説教に嘆息するは

どに感動して、洗礼を受けることに同意した最初の物語が、何の手も加えられなかつたら、直ちに、ウラジーミルは洗礼を受けたという結びであつたであらう。とすると、それは、断り書きの中で言う『キエフにおいて』〈въ Кіевѣ〉ということになる。ところが『過ぎし年月の物語』では、知らない者たちの言うことであるときめつけている。然し、それは、強辯にも似ていて、本当は、別の物語を継ぎ足したことを白状しているにすぎない。

『過ぎし年月の物語』の編者が台本にした『原初の集』、しかもその『原初の集』が準拠した一層古い何等かの書き物の頃から、おそらく、このウラジーミル洗礼の物語は幾重にも重ねられていたのかもしれない。『過ぎし年月の物語』の台本である『原初の集』がなお台本にした古い何等かの書き物があつたことは、『過ぎし年月の物語』の記述が何箇所かでそれを雄辯に物語っている。

例えば、前にも少しふれた6485(977)年の項にオレグ〈Олег〉の死が記述されている。そして『(人々は)オレグをウルチイの町のそばの場所に埋めた。しかして彼の墓は今日に至るまでもウルチイのそばにある』〈И погребоша Ольга на мѣсть у города Вручего, и есть могила его и до сего дни у Вручего〉という言葉がある。『過ぎし年月の物語』はセリウエストルの加筆署名を以て、ラヴレンチー年代記では1110年即ち6618年で終つてゐるから、素直に読めば1110年までウルチイのそばにオレグの墓はあつたはずである。ところが、本当は、それより五十年も以前の1044年即ち6552年の記事に『(人々は)二人の公ヤロボルクとスヴィヤトスラフの子オレグとを掘り起し、二人の骨を洗礼して、聖母教会の中にそれらを安置した』〈Выгребоша 2 князя Ярополка и Ольга, сына Святославля, и крестиша кости ею, и положиша я в церкви святыя Богородица〉とある。だから、実際は『今日に至るまで』の今日とは、少なくとも1044

年以前でなければならぬし、この部分は1044年以前に書かれたものでなければならぬであろう。そして面白いことに、より忠実に『原初の集』を反映したと言われるノヴゴロドオ一年代記の6485(977)年の項にも、同じ内容が古代ロシア語よりもより古代スラヴ語に近い文章で《И пакы погребоша его на мѣсть у града, зовомаго Вручьяго; есть могила его и до сего дне у Вручьяго града》と記されながら、此処には遺骨の掘り起しと洗礼と移転安置の記事は見当たらない。とすると、ノヴゴロドオ一年代記も、『過ぎし年月の物語』も共に準拠した『原初の集』或は、なおそのもとになつた古い書き物の、6485(977)年の項を書いた人は、或はその項が書かれた時代は、1044年、即ち年代記年号によれば6552年以前であつたであろう。そこで、1044年以前であつただろうということをやつと、その年号よりも古い個所だけを見つめてみるのがよいであろう。そこで、この1044年の年号(6552年)の記事から注意深く逆に年代をさかのぼつてみよう。1044(6552)年を末尾として、さかのぼること数年の間には書かれているのは一体何であろうか。特に6545(1037)年の項は注目すべきである。この項は先に断片的に引用したが、明らかに、ヤロスラヴ《Ярослав》公にさへげられた讚美の文章である。そして、そのヤロスラヴ公は、前述の1044年にはいまだ生きて活動している。とすれば、生きて現在活動しつゝけている公に対する讚美の文章であつた。とすれば、最も古い年代記的書き物は、この現帝への讚美で以て終つていたと考えることが合理的であろう。ところが、『原初の集』を『過ぎし年月の物語』よりも忠実に反映したと見られるノヴゴロドオ一年代記には、その様な讚美の記事は全くとどめられていないから不思議である。キエフとノヴゴロドの地域的、或は勢力的相異によるものなのかも知れない。ともあれ、『原初の集』がなお台本にした最古の年代記的書物は大体1037年の項

で終つていたものと推定しておこう。そして、『原初の集』はそれになお書き加えて年号をさげて行つたのだとすれば、それは何年までのことであろう。今度は1044年後の記事へ眼を移してみよう。そこで或る一つ一つの事件の年号を付ける態度を取りあげてみよう。

最も明瞭にその態度の特長が出はじめるのが6569(1061)年である。そして、なお、これに附隨して面白いことは、この年の記事から、ノヴゴロドオ一年代記の記事とラヴレンチー、イパーチー、トロイツキー各年代記における記事とが珍しく寸分ちがわなない形でその文章の隅々まで一致していることである。例えば、ノヴゴロドオ一年代記においても、『過ぎし年月の物語』においても、6569(1061)年の項には次の様によまれるのである。前年(6568年)にトルツイ人が敗退した後について、

В лето 6569. Придоша Половци первое на Русьскую землю воеват, Всеволод же изиде противу им, месяца февраля в 2 (второй) день; и бившимся им, победиша Всеволода, и воевавшие отъидоша. Се бысть первое зло от поганых и безбожных враг. Бысть же князь их Искал.

『6569(1061)年。ボロヴエツがはじめて、戦い取るためにルソの國に来たつた。ところで、フセヴオロドは彼等に対して出撃した。二月の月の三日のことであつた。彼等が戦い合つた時、(ボロヴエツ人たちは)フセヴオロドを打ちまかした。しかして戦いつぶして行つてしまつた。これは異教徒の神を信じない敵たちによる初めての災厄であつた。彼等の公はイiscalであつた。』

ノヴゴロドオ一年代記と『過ぎし年月の物語』とに同文の記事があり、然も、注意して見ると、年号の取り方において相方とも同じ一つの特長をもつている。即ち、記事中に、二月の月の三日のことであると月日の指定をおこなつていることである。それ以

前には、この様な文中での月日の指定は決してなかつた。年号以外にインジクト〈ИНДИКТ〉の何年と年を言いかえることがあつても、それは、あくまでも年号指定の直後においてであり、記事文中においてではなかつた。まして月日までの指定はなかつたのである。この月日の指定(ノヴゴロド才一年代記も『過ぎし年月の物語』も共に同じような)は、何を物語るものであるらうか。ボロヴェツ人來襲の事件が日付まで間違わずに書きとめられていることは、この外敵の侵入の印象が強烈であつたことのみよるのではあるまい。年代記者たちにとつて強烈であるべき印象はこれ以外に余りにも多くあつたはずだからである。むしろ、事件後、間もなく書かれたものであることを物語る証拠であると考えべきところであらう。ということになると、ノヴゴロド才一年代記と『過ぎし年月の物語』の記事が文章の隅々まで一致している以上、その共通の台本であつたと思われる『原初の集』は、1061年の事件の後、余り多くの歳月を経ずしてこのあたりの記事までは書かれていたということになる。最古の台本が先にのべたように、1044年以前に書かれ、それを下敷にして『原初の集』は1061年の後しばらくして書き直され書き足されたということになる。そして、この『原初の集』を、ノヴゴロド才一年代記はより忠実に、『過ぎし年月の物語』は比較的自由に組みかえながら書き直し書きつがれ、ノヴゴロド才一年代記は1447年(委員会写本)、1352年(シノダリ写本)まで、『過ぎし年月の物語』は1110年(ラヴレンチー年代記)まで記事がつゞいたと言える。

さて、1061(6596)年に、今までになく文中に月日の指定をおこなつたということを書述の相異としてあげたのだが、この年から数年間の記事をもう一度ていねいに調べてみよう。この年、(1061年)、ボロヴェツに向つてフセヴォロドが『出撃した』〈изиде〉のは、そして敗退したのは勿論キエフの町がらであつた。記述の場所は明らかにキエフにおいてであつたと思われる。と

ころが、その後記述の場がキエフから動き出している。即ち1064(6572)年から1066(6574)年まではキエフからは遠いトムトロカニ《Тмутрокань》が記述の中心になり、1068(6576)年には筆は再びキエフに戻つて来る。これは何を意味するのであるか。勿論、事件の筋がボロヴェツという外敵との戦いのために遠いトムトロカニという町に移つたことにもよる。然し、それにしても、公の座のあるべきキエフを完全に筆が離れ、その間一度もキエフに立ちもどる筆の運びをしないのはどうしたことであろう。もしもキエフのペチエルスキー修道院《Печерский монастырь》で伝えられるように『過ぎし年月の物語』の古い原稿が書かれたものだとしたら、この修道院自身が、或は修道僧である記者が、数年の間キエフを離れたとでも言うことになるのであるか。或は、キエフの王座からその記者が数年の間、遠くへ（よりたしかにはトムトロカニへ）排除されていたということにもなるかも知れない。そこで、十一世紀末に創られたといわれる『フエオドシイの一代記』《Житие Феодосия》を持ち出して来よう。面白いことに其処には奇妙な一致がみとめられるからである。

即ち、その一代記によれば、大ニコン《Великий Никон》という僧がくしくも1061年の二月初旬にキエフの公（イジヤスラフ《Изяслав》）の怒りをおかして、トムトロカニに逃げ、1066年まで黒海の沿岸で過したという記事がある。しかもその間、年代記の方では記述の場がキエフからトムトロカニに移つていたのである。そして、ニコンが1066年までいたという黒海の沿岸での事件の記事が『過ぎし年月の物語』の1066(6574)年——即ち記述の筆がキエフに戻る前々年——の項に詳しく書かれているのである。しかも、其処には見事に月と日附まで文中に書かれているのである。その月と日附けも一度では無い。三月三日と七月十日との二度にも及んでいる。一年の間に二度までも月

日を指定するとは何事であるか。そんな記事はそれ以前の年号の項には一處もあつてはしない。即ち、その文章とは、これまたノヴゴロドオ一年代記とほとんど同一文で次の様に『過ぎし年月の物語』には読まれるのである。この年の記事もまたノヴゴロドオ一年代記とほとんど同一文であることを重ねて強調しておこう。

В лето 6574. Заратися Всеслав, сын Брячиславль, Полочъске, и зая Новьгород; Ярославичи же трие, Изяслав, Святослав, Всеволод, совокупивше вои, идоша на Всеслава, зиме сущи велице. И придоша ко Меньску, и Меньяне затворипася в град; си же братья взяша Меньск, исекоша муже, а жены и дети вдаша на щиты, и поидоша к Немизе. И Всеслав поиде противу. И совокупишася оboи на Немизе, месяца марта в 3 день, и бяше снег велик, поидоша противу себе; и бысть сеча зла, и мнози падоша, и одолеша Изяслав, Святослав, Всеволод, Всеслав же бежа. Посем же, месяца иуля в 10 день, Изяслав, Святослав и Всеволод целовавше крест честный к Всеславу, рекше ему: "приди к нам, яко не створим ти зла"; он же надеявсья целованью креста, перееха в лодьи через Днепр. Изяславу же в шатер предъидущу, и тако яша Всеслава на Рши у Смолинська, преступивше крест. Изяслав же привед Всеслава Киеву, всади и в поруб с двема сынома.

『ブリヤチスラフの息子であるポロチスクのフセスラフが戦いをはじめた。しかしてノヴゴロドを奪ひ取つた。ところでヤロスラフの子等三人、イジヤスラフ、スヴィヤトスラフ、クセヴオロドは軍勢を集めてフセスラフに向つて進攻した。きびしい冬の時

であつた。しかして(三人は)メニスクに来たり、しかしてメニスクの人々は町に立てこもつた。ところでこれらの兄弟たちはメニスクを占領した。男たちを殺し、女及び子供たちを盾にあたえた(捕虜にした)。しかして(三人は)ネミガ(河)に向つた。しかしてフセストラフは(三人に向つて)出撃した。両軍はネミガ(河)で相会した。三月三日のことであり、しかして深い雪があつた。(人々は)相互に攻撃した。しかして激しい斬り合いがあり、多くの者たちがたおれた。しかして、イジャストラフ、スヴァイヤトストラフ、フセヴォロドが勝ち、フセストラフは逃げた。ところでこの後、七月十日に、イジャストラフ、スヴァイヤトストラフ及びフセヴォロドは聖なる十字架に接ぶんし(約束して)彼に言つた。「我々のところへ来たれ。(我々は)汝に悪をなさないであるから」と。ところで彼は十字架接ぶん(約束)に期待して、舟に乗つてドニエブルを渡つた。イジャストラフが先に立つて天幕に向つたとき、かくして(人々は)十字架(約束)を破つてフセストラフをスモリンスクのそばのルンヤ河のほとりで捕えた。イジャストラフはフセストラフをキエフに連れ来たり、彼を二人の息子と共に牢に入れた。』

この一致を考慮に入れると、先づ1037年から1039年の間に最も古い年代記集が編集され、1060年代のはじめの記事をキエフのベチエルスキー修道院のニコン(Никон)がそれに加筆編集し直して1073年までの記事をつけ、1093年か或はその翌年、翌々年頃に再び誰かの手で加筆編集し直されて、『原初の集』が生まれた。そして、十二世紀はじめ頃に『過ぎし年月の物語』は何回かの加筆の末に創られたという推定が生まれる。

たしかに、大ざつぱにはその通りであつても、この様に度重なる加筆、編集、組み込み等々に際して、それぞれにどんな立場でどんなものが加えられ抜き取られ、ねり直されたかという問題が残るであらう。雑多なものをたゞ雑然と量的にふくらまして来た

だけであつたとは考えられないからである。その意味では、『過ぎし年月の物語』中、年号の新しい記事よりも、初めの頃の年号の古い記事の方が度重なる編集を生き残つたものとして特に面白いであろう。キリスト教輸入前後の原始宗教とキリスト教との混合し合つている時期の記事はその意味でもう一度見直されなければならぬ。その典型的なものはオリガ女帝の記事であろう。そしてまたヴオロジメル大公の記事である。共にそれらの記事については、『古代ロシア研究』才五号(オリガ女帝)才六号(ヴオロジメル大公)才七号(ヴオロジメル大公)に総ての年代記におけるその部分を集録しておいた。

というのは、其処には明らかに大きな二つの要素或は層がみとめられるからである。即ち、その一つは未だキリスト教を知らざる頃の記述——(異教的)——と、キリスト教の洗礼を受けてからの記述——(ギリシア正教的)——との、言いかえれば、古い民族伝承による英雄性と、キリスト教教会による信仰的物語の聖者性との二つの層が重ねられているのである。異教的原始宗教や、異教的人間像を極度に嫌悪した修道僧によつて、こんな二つの層が最初から自然に交錯したまゝの記述がなされる筈がない。オリガ女帝の場合には、ロシアで初めてキリスト教の洗礼を受けた者としての非常に古い、非常に短い、非常に漠然とした信仰伝承が存在していたことであろう。そして、それを記録したものが最初にあつたかも知れない。それは教会内において、どれほど増量してみても、雄大な信仰物語を形成するほどのものではなかつたように思われる。増量するにも、そりすべき素材がほとんどなかつた。増量するとすれば、キリスト教と関係のない異教時代からの古い伝承を利用するより仕方なかつた。だから、オリガ女帝が洗礼を受ける物語は、ヴオロジメルの場合とは異つて、既にその書を出しからして英雄伝承的である。幾度かの増量編集を経て、『過ぎし年月の物語』は奇妙な受け答えの物語を創つ

てしまつた。洗礼を受けるという敬肅さよりも、それはかけ引きの面白さを表面に出した物語になつてしまつた。

В лето 6463.

Иде Ольга в Греки и приде Царюгороду. Бе тогда царь имянем Цемьский; и приде к нему Ольга, и виде ю добру сущю зело лицем и смыслену, удививься царь разуму ея, беседова к ней и рек ей: "подобна еси царствовати в граде с нами". Она же разумевши рече ко царю: "аз погана есмь, да аще мя хоцещи крестити, то крести мя сам; аще ли, то не крещюся". И крести ю царь с патреархом.....

..... И по крещеньи возва ю царь и рече ей: "хоцю тя пояти себе жене". Она же рече. "како хоцещи мя пояти, крестив мя сам и нарек мя дъщерью? А в хрестеянех того несть закона, а ты сам веси". И рече царь: "переклюкала ся еси, Олга"; и дасть ей дары многи, злато и серебро, паволоки и съсуды различныя, и отпусти ю, нарек ю дъщерью себе.....

『オリガはグレキ(の国)へ行き、ツアリゴロドについた。当時その名をツエミスキーという皇帝がいた。しかして彼のもとへオリガは至つた。しかして彼女が、~~彼~~非常にみめよく、聰明であるのを見、皇帝は知恵におどろいて、彼女に話しかけて、彼女に言つた。"(汝は)我と共に(この)町で君臨するにふさわしい"。と、彼女は意味をさとつて皇帝に言つた。"我は異教徒である。もしも(汝が)我を洗礼せんと欲するならば、みずから我を洗礼せよ。さもなければ(我は)洗礼を受けまい"と。そこで皇帝は総主教と共に彼女を洗礼した。.....(この間、

一つの物語省略).....しかして洗礼ののち，皇帝は彼女を呼び，彼女に言つた。「(我は) 汝をおのが葬に迎えんと欲する」と。しかして彼女は言つた。「我をみずから洗礼し，我を娘と呼びながら(汝が) めとろうと欲するはいかに？しかして汝自身知つている(ではないか)」と。しかして皇帝は言つた。「(汝は) 我を(みごと)に あざむいた。オリガよ」と。しかして(彼は) 彼女に多くの贈物，黄金および銀，にしき及び種々の器を与え，彼女をおのが娘と呼んで彼女に行かせた」

この物語の骨組みは一体何であろう。キリスト教と関係ありそうに見える洗礼という言葉を取り除くなり，何等かの別の言葉に代えたら，其処に現れて来るのは，明らかに，オリガがドレヅリヤネに対して実行した策略による教度の復しゆう物語に余りにも類似してしまふ。或はツアリゴロドへ遠征を試みたルシの古い公たちの遠征物語と似てしまふではないか。ロシアの古い遠征物語の伝承と同じく，彼女もまた，黄金と絹織物と銀や或は器を持ち帰つたという。古い英雄伝承以外の何物でもなかつたであろう。男の英雄ではなくて，この場合は女の英雄であつた。おそらくは，女性英雄の伝承がオリガという女帝にまとめられた形で此処に投影されている。然し，年代記者が書きたかつた眼目は，むしろ，キリスト教の洗礼にあつた。そして，そもそもの教会内での年代記作品には，この部分は無かつたであろう。むしろ，最初の年代記作品には一つの完成された短い洗礼物語があつた。それは，上記の引用文及びその訳文中で...印によつて省略した中間の一節と，この引用文の直後につとく物語とをまとめて一貫したものであつたように思われる。その主人公であるオリガに民族的代表者を勤めさせ，英雄性を賦与し，ルシの文明の先駆者に仕立て，ルシ・キリスト教文明の源流者にするためには，異教的伝承を，隆んの少し組み替えて，此処に，はさみ込むことが便利であつた。最も古い年代記作品に，後にこの目的で組み込まれたもの

が、依承から取材した上記引用の一節であつたであらう。そして、最古の年代記作品としては……印で引用文中に省略を示した一節と、引用文直後の一節とをまとめた次の様なオリガ洗礼、及び神への讚美文と信仰説教の文章が編集以前に教会の内には存在していたと思われる。然もその文章は一つではなくて二つであつたであらう。それは次の文の「キエフに歸りついた」〈приде Киеву〉という同じ言葉の二度に及ぶ使用が雄辯に物語るところである。

Просвещена же бывъши, радовашеся душею и телом;
и поучи ю патреарх о вере, рече ей: "благословена ты в женах Руских, яко возлюби свет, а тьму остави; благословити тя хотять сынове Рустии родвнук твоих". И заповеда ей о царковном уставе, о милостыни и о въздержаньи тела чиста; она же поклонивши главу, стояше аки губа напаяема, внимаючи ученья; поклонившись патреарху, глаголющи: "молитвами твоими, владыко, да сохранена буду от сети неприязньны". Бе же речено имя ей во крещеньи Олена, якоже и древняя царица, мати великаго Костянтина. Благослови ю патреарх, и отпусти ю.....

..... Она же хотящи домови, приде к патреарху, благословенья просящи на дом, и рече ему: "людье мои погани и сын мой, дабы мя Бог съблюл от всякого зла". И рече патреарх: "чадо верное! Во Христа крестилася еси и во Христа облечеса, Христос имать сохранить тя; якоже схрани Еноха в первыя роды, и потом Ноя в ковчезе, Аврама от Авимелеха, Лота от Содомлянъ, Моисея от Фараона,

Давыда от Саула, 3 отроци от печи, Данила от зверий, тако и тя избавить от неприязни и от септий его"; благослови ю патреарх, и иде с миром в свою землю, и приде Киеву. Се же бысть, якоже при Соломане приде царица Ефиопская к Соломану, слышати хотяши премудрости Соломани, и многу мудрость виде и знамянья: такоже и си блаженая Ольга искаше доброе мудрости Божьи, но она человечески, а си Божья. Ищущи бо мудрости обрящють. Премудрость на исходящих поется, на путех же дерзновенье водить, на краих же забральных проповедаеть, во вратех же градных дерзаючи глаголеть; елико бо лет незлобивии держатся по правду, не постыдятся. Си бо от възраста блаженая Ольга искаше мудростью все в свете сем, налезе бисер многоценных, еже есть Христос. Рече бо Соломан: желанье благоверных наслаждает душу; и приложиши сердце твое в разум; аз любящая мя люблю, и имеющи мене обрящють мя. Господь рече: приходящаго ко мне не иждену вон. Си же Ольга приде Киеву.....

『(オリガは) 洗礼を受けたので、心も身も喜んだ。しかして総主教は彼女に信仰について教え、彼女に言つた。"汝はルシの女たちの中で祝福されている。光明を愛し、闇をすてたのであるから、ルシの子らは汝の孫たちの末まで汝を祝福するであろう"と。しかして(総主教は)彼女に教会の法規について、祈りについて、および精進について、恩ちよりと身体を清浄に保つことについて教えた。彼女はそこで頭をたれ、ちたかも水を恐むくちびるの如くに教えを聞きながら立つていた。(彼女は)総主教に頭をさげて

言つた。「げい下よ、汝のいのりにより、悪魔の網から我がまもられてあらんことを」と。彼女の洗礼の名はオレナといわれた。いにしへの皇后、コスチヤンチン大帝の母のように、総主教は彼女を祝福し、彼女を行かせた。……………（この間に上記の英雄伝承的物語の後半が差し込まれている）……………

ところで彼女は故郷へ（かえることを）欲し、総主教のもとへ来たり、（家へ（の旅）の祝福を乞い、しかして彼に言つた。「我が民は異教徒であり、また我が息子も（そうである）、我を神があらゆる悪より守り給わんことを」と。しかして総主教は言つた。「信仰あつき子よ、（汝は）キリスト（の名）において洗礼をうけ、しかしてキリストを身にまとつた。キリストは汝を守護するであらう。あたかも太初に（神が）エノフを、しかして後に箱舟のノエを、アヴラムをアヴイメレフから、ロトをソドム人たちから、モイセイをファラオから、ダヴィドをサウルから、三人の少年を罫から、ダニルをけものたちから守り給うたように、その如くに汝を悪魔から、そして、そのおなから救い給うであらう」と。彼女を総主教は祝福した。しかして、（彼女は）無事におのれの国に向い、しかしてキエフに帰りついた。さて、このようなことがあつた。ソロマンの時にエフィオピヤの女王がソロマンの英知恵を聞こうとして、ソロマンの許に来たり、多くの知恵と（その）あかしを見た。そのようにこの祝福されたオリガもまた神のよき知恵を求めていたが、しかしあの女（エフィオピヤの女王）は人間の（知恵を求めたの）だが、この（オリガ）は神の（知恵を求めていたのである）。というのは、知恵は求めるものは見出すものであるから。英知は戸口でうたわれ、道では大胆に声をなし、城壁の端で教えをのべ、城門では大声に述べる（箴言【一21・…・筆者註）。それほど年月^カ善きもの達は義に従つてふるまい、恥じることはないからである。というのは、この祝福されたオリガは、成人してから、この世の中におけるあらゆる英知を求

めていたが、高価な真珠、すなわちキリストを手に入れたのである。ところでソロマンは言つた。信仰あつたものの願ひは魂を楽しませる（箴言ⅩⅢ—19・・・筆者註）、汝の心を理性にそわしめよ。我は我を愛するものを愛し、我を求めるものは我を見出すであろう（箴言Ⅱ—2）〃と。主は言い給うた。〃我の許に来たる者を（我は）追い出さぬであろう（ヨハネ伝Ⅵ—37・・・筆者註）〃と。ところでオリガはキエフに帰りつゐた・・・・・・』

この様に読み直して見れば、オリガが『キエフに帰りつゐた』と先にある前部と、二度目に『キエフに帰りつゐた』とある後部とが、文体も異り、目的も異なる文章であることが分るのである。前部は旧約創世紀からはじまる巨大な物語の物語性の高い部分の要約であり、後部は、より信仰論的な立場からの聖書の抜き書きを中心としたものである。そして、この前部には英雄伝承的なロシアの古い物語をはめ込み、後部の直後には、武勇的な息子がオリガの言うことを聞かず、軍事に走つていたという、これまた英雄伝承的な物語を後続させているのである。この英雄伝承的な要素のある箇所は6477(969)年までつき、其処で再びオリガの死を記する。そしてその折に、キリスト教的説教を兼ねたオリガ讚美・追悼の文章をつとけるのである。然もその讚美・追悼の文章がやはり前部と後部とに分かれ、前部は讚美・追悼をつとめ、後部は再びバイブルによる説教なのである。

『過ぎし年月の物語』或はその台本をなしていた『原初の集』のなのお背後により古い、教会での年代記的作品があつたとしたら、それら宗教的な部分こそがもともとの台本の骨組みであつたであろう。そして、その宗教的な台本のうちで、最もまとまつていた最初の物語が、オリガ女帝に関するものであつた。そのうち、洗礼に関するものが上に引用したものであり、英雄伝承的要素の物語と案外素朴に組み合わされていたのであつた。そして、オリガの死にちなんだものが、異教的英雄行動をつとけていた息子ス

ウイヤトスラフの物語の間に見出されるのである。本来、一つにまとめあげられた宗教的オリガ物語である教会的作品が、少くともこの様に三分されて、それぞれの間には英雄伝承作品がサンドイッチされたのである。そのことによ^りオリガの宗教的側面を教会の記者たちが一層鮮かに浮彫りし得るはずだと考えたからなのであろう。キリスト教的なものの賞讃や宗教的説教や神の栄光への讚美が、一層の効果を求めて断片的にちぎられ、その間に古いロシアの異教的英雄伝承を織り込んだのである。オリガの死に関して、その息子の英雄行動の間に顔を出した最も古い台本と思われる讚美と説教の一節を見なければならぬが、キリスト教を信じようとしぬ息子スウイヤトスラフについては、前以て別の説教をしていたところから先に引用しておくべきであらう。単に古い宗教的台本と異教的英雄伝承とを組み合わせただけではなくて、其処には適当な接着剤を入れたこともあるという編集方法をみとめておくために。

Неверным бо вера хрестьяньска уродство есть; не смыслиша бо, ни разумеша во тьме ходящи, и не ведяты славы Господня, одобльеша бо сердца их, ушима тяжко слышати, очима видети. Рече бо Соломан: дела нечестивых далече от разума; понеже звах вы и не послушасте мене, прострох словеса и не внимасте, но отместе моя въветы, моих же обличений не внимасте: възненавидеша бо премудрость, а страха Господня не изволиша, ни хотяху моих внимати съвет, подражаху же мои обличенья.

(この一節は先に訳文を示したので、再び訳文を付すことはやめておこう)。さて、オリガの死にちなんだ最後の文章とは

Си бысть предътекущая хрестьяньстей земли аки деньница пред солнцем и аки зоря пред светом,

си бо сияше аки луна в нощи, тако и си в неверных человецех светящися, аки бисер в кале; кални бо беша, грех неомовени крещеньем святым. Си бо омыся купелью святаго, и совлечеса греховныя олега ветхаго человека Адама, и в новый Адам облечеса, еже есть Христос. Мы же рцем к ней: радуйся, Руское познанье к Богу; начаток примиренью быхом. Си первое вниде в царство в небесное от Руси, сию бо хвалят Руские сынове, аки началницу: ибо по смерти моляше Бога за Русь. Праведных бо душа не умирают; якоже рече Соломан: похваляему праведному възвеселятся людье, бессмертье бо есть память его, яко от Бога познавается и от человек. Се бо вси человеци прославляють, видяще лежащая в теле на многа лета; рече бо Пророк: прославляющая мя прославлю. О сяко-вых бо Давыд глаголаше: в память вечную праведник будеть, от слуха зла не убоится; готово сердце его уповати на Господа, утвердися сердце его и не подвижется. Соломан бо рече: праведници въвеки живут, и от Господа мзда им есть и строенье от Вышнаго; сего ради примуть царствие красоте и венець доброте от руки Господня, яко десницею покрыеть я и мышцею защититъ я. Защитил бо есть сию блажену Вольгу от противник и супростата дьявол.

(日本語訳省略)

この様な教會的な物語と口頭伝承的な英雄物語との二つの層がオリガ女帝の記述にも、次の偉大なる公ウオロジメルウオロジメルの記述の折

にも、ボリスとグレブの物語の折にも、ヤロスラフ公の記述の折にもみとめられる。そして、その二つの層のうち教會的な物語を上オリガの場合の様に抽出して、それらを総て連結統一したら、其処には完全に一つの単一な宗教書が再構成されるし、反対に英雄伝承的な個所を抽出して集めれば、壮大な叙事詩には成りきらなかつた古いロシアの伝承英雄物語集が形成されるであろう。そして少くとも、上にあげたオリガ記述の教會的物語——彼女の洗礼物語と、もう一つ死を記述する際の讚美の文章の二つ、——ウオロジメル公記述の教會的物語——じゆん教者ヴァリヤギ人の話と哲学者の長い言葉を含めたロシア洗礼の話、——ボリスとグレブの物語、ヤロスラフ公讚美の文章等々は、文体的にも内容的にも明らかに単一な一人の人物の筆になつたものにちがいない。例えば、いままで異教であつたルシの人のうちで、初めて洗礼を受けた少数の人々を『新しい人々』〈новые люди〉という言葉で呼んだが、その呼び方は、上にあげた教會的な物語全般に亘つて必ず一回は用いられる言葉であつた。それ以上に内容的には、分割し難いきづなにそれぞれの物語が結び合わされていた。例えばオリガをルシのキリスト教の夜明けにたとえ、ウオロジメルを展開者に仕立て、ヤロスラフを完成者に仕立て、その間にじゆん教者の話を入れた構成そのものが、雄辯にこれを物語っている。だから、ヤロスラフを完成者に仕立てている以上、当然、この文章が最初に書かれた時代がおそらくはヤロスラフ公の直後であつたことは推察されるだろう。だが、そこまで結論を急ぐ前に、『過ぎし年月の物語』が持つ最もドラマチックなボリスとグレブの物語を検討しておかなければならない。

— 〇 —

6523(1015)年の記事が即ちボリスとグレブの殺害の物語で

である。勿論、この年の記事の前部は先に引用したヴラジミル公の死の記事と、彼への賞讃の文章であつたが、途中から、彼の死後の出来事が書き取られる。面白いことに、『過ぎし年月の物語』は、ラヴレンチー年代記、イパーチー、トロイツキー各年代記とも、わざわざ、先づ『ボリスの殺害について』〈О убьенъи Борисовъ〉と表題をつけてから記述しはじめてゐる。わざわざ記事に表題をつけるこの珍らしい態度は、少くとも、この部分が前後の記事と一貫した平面的なものでないことを言外に物語るものである。さて、その物語の筋は次の様なものである。

父ヴオロジメルの死後、長兄のスヴイヤトボルク〈Святополк〉は、キエフの王座につき、人々を集めて、亡父の財産を分け与えた。然し、その分譲財を入手しても、多くの人々はスヴイヤトボルクに恭順しなかつた。当時、彼の弟ボリス〈Борис〉が遠征中であり、分譲財を入手した人々の一族たちはボリスに従つて出陣中であつたし、より多くは、ボリスをしたつていたからである。ところが、遠征におもむいたボリスの方は敵であるベチエネギ人とは遭遇せず、軍をひきいて帰途についていた。勿論、父の死を知らなかつた。父に最も愛されていたボリスは、この帰途に父の死を知らせる報告を受け取る。リタ河〈Льта〉の岸に軍をとどめ、父の死によつて起る事態に対処して親兵団に相談する。親兵団は、兄スヴイヤトボルクの坐すキエフに進撃せよと提案するが、ボリスの受け入れるところとならず、ボリスから離れ散つてしまふのである。その時の親兵団の提案の言葉と、それに対するボリスの決定返答の言葉とのかみ合わせは非常に面白い。少くとも、十一世紀初頭或はそれ以前の公と親兵団との関係、モラルを非常によく表しているであろう。年代記者は、そのいづれに軍配をあげているのか分らないが、少くとも、身を滅ぼす運命にありながら、なお、モラルを守らうとするボリスの言葉に感動しているようではある。その両者の言い分の好みを撰択する意識

を伝承的な物語の重圧が完全におしつぶしていたかも知れない。

親兵団の提案

« Се дружина у тебе отьня и вои; понди, сяди Кыевѣ на столѣ отци »

『見よ、此処に、汝のもとに父の親兵団としかして戦士たちがいるではないか。行きでキエフの父の座につけ』

ボリスがひきいていた親兵団は父ヴオロジメルの親兵団であつた。父の親兵団は当然、父なるヴオロジメルの王座をつぐべき人を擁立し得たのかも知れない。然し、ボリスはその提案に同意しなかつた。

ボリスの決定返答

« не буди мнѣ възняти руки на брата своего старѣйшаго; аще и отецъ ми умре, то съ ми буди в отца мѣсто. »

『我はわが長兄に手をあげるべきではない。もし父が我に死せりとせば、この者（長兄）が我にとつて父の代りとなるがよい』

提案が受け入れられず、さりとして、ボリスの言う様に長兄スヴィヤトボルクに従うことをいさぎよしとしなかつた『父の親兵団』は、ボリスから多くの軍勢と共に離れ散つた。物語は、然し、離れ散つた親兵団軍勢の行く先や目的を一切語らない。たゞ、物語はボリスに焦点を絞るのである。下級従士団と共に残されたボリスのもとへ兄スヴィヤトボルクから偽りの使者が来る。仲良くし、父の財産をも分け前通り分譲しようという口上である。その使者を出した夜、スヴィヤトボルクはヴイジエゴロド « Вышегород » に出向き、その町の（おそらくは代官である）プトシヤ « Путья » と町の人々を集め、恭順をたしかめてから、この町の人をボリス暗殺に派遣するのである。

暗殺者たちは夜中にリタ河につく、近くに忍びよる。夜明けの勤行を終つて天幕に入り、寝床に横になつたボリスを、暗殺者たち

は外からヤリで突き刺すのである。ウゴル人ゲオルギ〈Георги〉という名の従士が主君ボリスをかばつて、彼の上に倒れ込んだのを、そのまま二人もろともに突き刺して殺した。従者ゲオルギはボリスにことのほか愛され、黄金の首輪をはめていたが、これを抜き取ることができず、首を斬つて首輪を取り、死体を捨て去るのである。勿論、他の従者たちも皆殺しにされる。そして『ボリスを殺して天幕につゝみ、荷馬車にのせて彼を運び出した』

« Бориса же уби́вше . . . , увертв́вше в шатеръ ,
взложивше на кола , повевоша и » .

ところが、此処で物語は奇妙な筋をたどる。即ち、暗殺者たちを派遣したスヴィヤトボルクは、此処でボリスが死んだかどうかを知る由もない筈である。にもかゝらず、ボリスがまだ息絶えていないからということで、二人のヴァリヤグ〈Варяг〉人を再びとどめを刺すために派遣するのである。明らかに、二つの別の物語或はバリエントを結び合わせて一つの物語に仕組んだところが此処にうかゞわれる。

ボリスの息の根を止めるために派遣された二人のヴァリヤグ人のうちの一人が剣を抜いてボリスの心臓を突き、絶命させる。そして、その遺体は、運ばれてヴイシエゴロドの聖ヴァシリイ〈свѣтой Васи́лїи〉教会に安置された。そして物語は再び初めに派遣されたヴイシエゴロドの暗殺者たちがスヴィヤトボルクから賞讃を受け、その名は、プチシャ〈Путьша〉、タレツ〈Талець〉、エロヴィチ〈Еловить〉、リヤシコ〈Ляшько〉であると書きとめるのである。とどめをさすために派遣された二人のヴァリヤグ人には、もう、此処では全く何もふれることがない。明らかに、二つの物語の組み合わせであることが分る。

そして、物語は、つゞいて、グレブの殺害に及ぶ。

父に最も愛されていた弟ボリスを殺し、一人の対抗者を消したスヴィヤトボルクは、もう一人の弟、グレブをも消そうと企むの

である。年代記者はグレブは父に最も従順であつたと説明している。ボリスが父に最も愛され、グレブは父に最も従順であつたという書き方は面白い。スヴイヤトボルクが父の死後、弟たち四人（——もり二人はスヴイヤトスラフとヤロスラフ——）を次々に殺す多くの伝承的物語があつたものと思われる。そして、それぞれにその殺害には個々のバリエーションが付随しながら、或程度の一貫性があつたことであろう。

ともあれ、グレブの殺害の物語は、次の様に展開される。スヴイヤトボルクは、弟グレブ《Глебъ》をあざむいて呼びよせる。父が重病で、会いたがつてゐるというのである。呼ばれたグレブは馬で出かける。此処には非常に古い伝承の影がたゞよつてゐる。ヴォルガ河まで乗つて来た時、突然馬がつまづいて、その為に彼は足をいためるのである。馬が主人の危険をこの様にして知らせるという物語は、数多くのバイリーナ作品に歌われるところだからである。さて、グレブはスモレンスクに来て河舟に乗り、スミヤチナ河にとどまる。ところで、此処でも物語は奇妙な筋の混乱をはじめめる。再び、別々の物語が此処で組み合わされた証拠である。それは、兄に最後まで殺されなかつたヤロスラフが丁度この時に父の死亡の知らせを受けて、兄弟であるグレブに忠告の使者を派遣するという筋である。長兄スヴイヤトボルクに偽られて呼びよせられたグレブのことも、まして、スモレンスクの近くのスミヤチナ河に河舟でグレブがとどまつてゐることも、ヤロスラフは知つてゐる道理がない。だから、父の死の知らせを受けても、ヤロスラフはグレブがだまされて殺されに行くことをやめさせようと使者を立てるはずがない。然も、ボリスが同じように偽られて殺されたことも知つてはゐなかつたであろう。物語がずつと先へ進んでからも、『過ぎし年月の物語』は『ヤロスラフはまだ父の死を知らなかつた』《Ярославу же не въдушо. отъне смерти》と書いてゐるのではないか。だから、此処は完

全に別の物語の差し込み或は重ね合せである。ともあれ、ヤロスラフから、知らずに殺されに行くグレブのもとへ来た使者の口上は、『行くな、汝の父は死に、汝の兄はスヴィヤトボルクに殺された』〈Не ходи, отець ти умерль, а братъ ти убьень от Святополка〉ということであつた。勿論、それを知ってグレブは父の死と兄の殺害を嘆く。ところが、その時、派遣された暗殺者たちがグレブの舟を占領し、彼を斬り殺すのである。面白いことに、此処では実際に彼にとどめをさした者の名前があげられている。即ち、それは、殺されたグレブ自身の料理人トルチン〈Торчин〉であつた。ボリスの場合には、最初の派遣された暗殺者たちの名前が述べられ、とどめを刺しに後に派遣されたヴァリヤグ人はその名を問われていない。今度は派遣された暗殺者の名ではなくて、本当に斬り殺した料理人の名があげられている。この不統一は、やはり、多くの物語の重ね合わせから由来するものであろう。殺されたグレブの死体は一度は捨てられたが、後に、ボリスの場合と同じように聖ヴァシリイ教会に入れられたと記されている。

父の死後、長兄スヴィヤトボルクが偽つて二人の兄弟を殺してしまつたのを知って、残つたもう二人の兄弟のうちスヴィヤトスラフ〈Святослав〉はウゴル人のもとへ逃げるが、途中、山中で派遣された暗殺者に殺される。

三人の弟たちを殺したスヴィヤトボルクは、キエフで君臨しはじめる。兄に殺されることを一番あとまわしにされたヤロスラフの話にまで進むと、以上の兄弟殺しの物語が、いかにつぎはぎのものであるかが暴露される。即ち、ヤロスラフの物語は、先づ、父ヴオロジメルの死を知らなかつたという言葉からはじまる。ノヴゴロドにいたヤロスラフが、はじめて父の死の知らせを受けたのは、キエフにいる姉ベレドスラヴァからである。然も、その知らせの口上には既に父の死と共にボリスも殺され、グレブにも暗

殺囚が送られたという内容もこめられていた。然も、その直後に、もう、ヤロスラフは、二人の兄弟の復しゆう者としてスヴィヤトボルクに向つて進撃している。だまされて殺されに行くグレブに『行くな』という使者を出したなど一切ふれられていない。まして、そのグレブもつゞいて殺されたという報告など受けていない。三人目のスヴィヤトスラフが逃亡する途中に殺されたことについても、一向に此処では問題とされていない。歴史的な事実がどうであつたかということも此処で取りあげていない。物語の構成に統一性がないということも述べたいのである。長兄のスヴィヤトボルクが弟のボリス、グレブ、スヴィヤトスラフを殺す物語、殺してもらした弟ヤロスラフにとむらい合戦をいどまれる物語が、多くの短編的物語の組み合わせであることが分ればよい。その多くの短編的物語は、血生臭い兄弟殺しのすさまじい事件にちなんで、それぞれに伝えられた独立的なものであつたと思われる。それが此処に何とか統合された形で織り込まれたのであろう。

たゞし、以上の物語の筋が連続的に『過ぎし年月の物語』の中に記述されたのではなかつた。むしろ、それぞれの物語の段落ごとに、非常に高調した文体の宗教的正当化、或は宗教的批判説教の文章がはめこまれていた。先にまず兄弟殺しの物語があつて、その段落ごとに説教的文章を織り込み、或は、議の人についてのとむらい文章をはめ込んだのか、それとも、先づさきに説教的文章やとむらい文章があつて、後にその素材をつとめるべき兄弟殺しの物語が詳しく重ね合わされたのかは分らないにしても、ともかく、兄弟殺しの物語の段落ごとにはめこまれている宗教的文章は、その文体からも、内容からも、述べよとする心の構えからも、これは完全に統一的なものであつて、決して、段落ごとのバラバラの文章ではない。いや、むしろ、オリガ女帝をたゞえた文章及びヴオロジメル公の記述に際して長々と書かれた宗教的文章

と全くうり二つの作品である。というよりも、オリガ、ヴォロジメルへの讚美や、宗教的説教と同一人物によつて、同一時期に書かれた一貫した文章であつたように思われる。キリスト教を先駆的に受け入れた人々に就ての一貫した宗教記述文章であつたであらう。それが、ボリスやグレブの殺される物語を詳しく中間に書き込んだために、サンドイツチされて物語の段落ごととに分離したのであつた。

ボリスの死を記した段落の直後に見られるその様な宗教的文章の一節とは、例えば次の様なものである。

И тако скончася блаженный Борис, венець прием от Христа Бога с праведными, причеться с пророки и апостолы, с луки мученичьскими водваряся, Авраму на лоне почивая, видя неизреченьную радость, въспевая с ангелы и веселяся в лику святых.

『かくの如くして至福なるボリスは逝つた。神なるキリストより正義の人々と共に冠を受け、予言者たちや使徒たちに肩をならべ、じゆん教者の群に入りアブラムのふところにいだかれ、言い難い喜びを見つゝ、天使たちと共に讚歌をうたい、聖者たちの仲間に入りて楽しむのである。』

そして一方ではその後、このボリスを殺した連中を非難する。Сини бо слугы беси бывають; беси бо на злое посылаеми бывають, ангели на благое посылаеми. Ангел бо человеку зла не створяеть, но благое мыслить ему всегда, паче же хрестеяном помагають и заступають от супротивнаго дьявола; а беси на злое всегда ловять, завидяще ему, понеже видять человека Богом почьщена, и завидяще ему, на зло слеми скоры суть. (Рече бо: кто идеть прелестити Ахава? И рече бес: се аз иду). Зол бо человек,

тщася на злое, не хужи есть беса; беси бо Бога боятся, а зол человек ни Бога боится, ни человек ся стыдить; беси бо креста ся боятъ Господня, а человек зол ни креста ся боить. (Темже и Давыд глаголаше: аще воистину убо право глаголете, право судите, сынове человечести; ибо в сердцах дедаете безаконие на земли, неправду руки сплетаютъ; учужени быша грешници от ложесн, заблудиша от чрева, глаголаша лжу, ярость их по образу змиину).

『かくの如き下僕たちは悪魔である。というのは悪魔たちは悪を目的に遣わされているのであり、天使たちは善いを目的に遣わされているものである。天使は人間に悪を為すことはなく、常に人間に善いを考えているものなのであり、なおさらキリスト教徒には力添えをなし、敵なる悪魔から守護してくれているのである。ところが悪魔は悪に向つて人間を常に捕らえているのである。というのは、(悪魔は)人間を羨んでいるからである。それは人間が神によつて榮養を与えられているのを知っているからである。人間を羨み、悪を目的に直ちに遣わされている者たちだからである。(以下はイバーチー年代記に見られて、ラヴレンチー年代記にはない文章である……筆者註)(というのは、次の様な言葉がある。誰ぞアフヴをかどわかして行く者ぞ? 悪魔が言つた。見よ、我が行かんと)。悪事に熱中する人間は悪い。悪魔よりも悪いのではないか。(このあたりより最後にかけては詩篇LVIIIの1～5まで対応する……筆者註)。悪魔は神を恐れているのに、悪しき人間は神をも恐れず、人間にも恥じないからである。悪魔は主の十字架をおそれているのに、悪しき人間は十字架をも恐れていないからである(この後の一節はラヴレンチー年代記にはなくて、イバーチー年代記にみられるものである……筆者註)。ダヴィ

ドもまたその様なものに対して言つている。もしも誠に（汝が）
真実をのべているのならば、人の子等よ、真実を裁くがよい。何
となれば（汝等は）心の中で地上では無法をなし、汝等の手は偽
りをおこなつてゐるではないか。罪ある者たちはたい内より遠ざ
けられ、生まれ出ずるより迷いて偽りを言う。彼等の毒は蛇の形
に似ている（詩篇LVIII, 5まで……筆者註）

この様な同質文章はグレブが殺される物語の段落の折にもみと
められる。此処では段落をドラマチックに切つて、殺される直前
にグレブが嘆く言葉にもそれがみとめられる。

"увы мне, Господи! Луче бы ми умрети с братом, не-
жели жити на свете сем; аще бо бых, брате мой,
видел лице твое ангельское, умерл бых с тобою:
ныне же что ради остах аз един? Кде суть сло-
веса твоя, яже глагола к мне, брате мой любимый?
ныне уже не услышу тихаго твоего наказанья: да
аще еси получил дерзновенье у Бога, молися о
мне, да и аз ту же страсть приял; луче бо ми
было с тобою жити, неже в свете сем прелестнем".

これぞ、殺されるべきグレブの口から出た死の直前における祈り
の言葉の形を借りていながら、実は、弟の口を借りた兄ボリスへ
の追悼文ではないか。むしろ、ボリスの死後に書き込まれてもよ
い文章である。

『あゝ、主よ！ この世に生きてゐるよりも、兄と共に死んだ
方が私にはよかつたかも知れない。というのは、我が兄よ、もし
も汝と共に死んだのなら我は汝の天使の如き顔を見ておられたで
あるう。今、何の故に、我一人（この世に）とどまつたのであろ
う。我に語りし汝の言葉（今）いづこにありや？ 我が愛する兄
よ。今、既に再び汝の静かなる教えを（我は）聞くべくもなし。
もし（今）汝が神のもとにて信頼を得たらば、我がために祈れ、

我もまた同じ難を受けんとすと、この奇しき世に生きんより、汝と共に(あの生に)生きん』。

そしてグレブ自身の死後には、上述の物語の運びの粗筋を除き去ると次の様な宗教文章が残つて出て来る………の個所は物語の筋に当るところを省略したものである。

Аки агня непророчно принесеса на жертву Богови, в вою благоуханья, жертва словесная, и прия венець; вшед в небесныя обители, и узре желаемого своего, и радовашеса с ним неизреченною радостью, юже уллучиста братолюбьем своим. Се коль добро и коль красно, еже жити братом вкупе! Оканьнии же възвратишася въспять, якоже рече Давыд: да възвратятся грешници в ад. И паки: оружие извлекаша грешници, напрягоша луку своя истреляти нами и убога, заклали правыя сердцем; оружие их внидеть в сердца их, луци их скрушатся; яко грешници погибнуть, исчезающе яко дым погибнуть………

………

не ведый Давыда глаголюща: что ся хвалиши о злобе, сильный? Безаконье весь день умысли язык твой, яко бритва изострена створил ешь леть; възлюбил еси злобу паче благостыня, неправду неже глаголати правду; възлюбил еси вся глаголы потопныя, язык льстив: сего ради Бог разрушити ти до конца, и вьстерьгнетъ тя от села твоего, и корень твой от земля живущих, якоже и Соломон рече: аз вашей погибели посмеюся, порадую же ся егда грядеть на вы пагуба: темже снедать своего пути плоды, и своя нечести насытятся………

.....

И съвкуплена телом, паче же душама, у Вьладыкы
Всецаря пребывающа, а радости безконечней, во
свете неизреченьнем, подающа ицелебныя дары
Русьстей земли, и инем приходящим странным с
верою даета ицеленье: хромым ходити, слепым про-
зренье, болящим целбы, окованым разрешенье, тем-
ницам отверзенье, печалным утеха, напастным из-
бавление; е еста заступника Русьстей земли, и
светилника сияюща и молящася воину к Владыце о
своих людех. Темже и мы должны есмы хвалити до-
стойно страсотерпца Христова, молящася прилежно
к нима, рекуще: радуйтася, страсотерпца Христова
Русьскыя земля, яже ицеленье подаета приходящим
к вам верою и любовью. Радуйтася, небесная жите-
ля, в плоти быста, единомысленая служителя, вер-
ста единообразна, святым единодушна; тем стра-
жущим всем ицеленье подаета. Радуйтася, Борисе и
Глебе богомудрая, яко потока точита от кладязя
воды живоносныя; истекають верным людем на ице-
ление. Радуйтася, лукаваго змия поправша, свето-
зарна явистася, яко светиле озаряюща всю землю
Русьскую, всегда тму отгоняща, являющася верою
неуклонною. Радуйтася, недреманное око, стя-
жавше душа на свершенье Божье, святых заповеди
примше в сердци своем, блаженая. Радуйтася,
брата вкупе, в местех златозарных, в селех не-
бесных, в славе неундающей, ея же по достоянью
сподобистася. Божьими светлостыми яве облистаеми,
всего мира обиходита, бесы отгоняюща, светилника

предобрая, заступника теплая, суша с Богом, божественными лучами ражизаема воину, добляя страстника, душа просвещающа верным людем: възвысила бо есть ваю светоносная любви небесная, тем красных всех наследоваста в небеснем жити, славу, и райскую нищу, и свет разумный, красныя радости. Радуйтася, яко вся напаяюща сердца, горести и болезни отгонаша, страсти злыя ицеляюща, каплями кровными святыми очервивша багряницу, славная; ту же красно носяща, с Христом царствуета всегда, молящася за новыя люди хрестьяньскыя и сродники своя, земля бо благословися ваю кровью; и мощми лежаща, духом божественным просвещаета: в ней же с мученики яко мученика за люди своя молитася; радуется церкви; светозарное солнце стяжавши, възход всегда просвещает в страданьи, в славу ваю, мучеником. Радуйтася, светлеи звезде, заутра възходящи. Но христолюбивая страсотерпца и заступника наша! Покорита поганья под нозе князем нашим, молящася к Владыше Богу нашему мирно пребывати в совокуплении и в сдравии, избавяща от усобных рати и от пронырства дьяволя. Сподобита же и нас, поющих и почитающих ваю честное торжество, в вся веки до скончанья.

『あたかも小羊の如く、清らかに、神の犠牲として（グレブは）運び来られた。香りよき香に運ばれし言葉あるいけにえは、かくしていま冠を受けた。（彼は）天なる住いに入り、望まれしおのれの兄を見て、彼と共に言い難き喜びをよろこびぬ。その喜びはおのれの兄弟愛によりて（二人が）入手せるものなればなり。』

(二人の)兄弟が共に住むは、見よ、いかによく、いかにうるわしきことか！ 呪われし者たちは、ダヴィドが、「罪人たちは地獄に戻りぬ」と言いし如くに帰り来たりぬ。(この後の一節はラヴレンチー年代記にはない。イパーチー年代記にみられる……筆者註)(またダヴィドの言ひあり)あしきものは剣をぬき、おのれの弓を張りて、苦しむものと貧しきものとを射ち、正しき者たちの心を殺さんとす。(されど)彼等が剣は彼等の胸にさゝり、彼等の弓はこわれるものなり。(詩篇; XXXVI, 14, 15……筆者註)あしきものは亡び、煙の如く消え亡ぶものなり(詩篇, XXXVI, 20……此処までの一節はラヴレンチー年代記には無い)……
……物語の粗筋に当る部分或はその粗筋をつなぐ部分即ち、派遣された暗殺者が戻つてスヴィヤトボルクに暗殺成就を報告する説明句が此処に入れられる……
……そして、宗教的基盤文は其処で今度は非難すべき対象のスヴィヤトボルクをやり玉にあげる……(彼は)ダヴィドが次の様に言つてゐるのを知らない者である。即ち、力強きものよ、(汝は)何故に悪業を自慢するや、汝の舌は終日無法を企てたり。と。(詩篇LII, 1, 2……筆者註)。また(ダヴィドは言ひ)。(これより以下はラヴレンチー年代記にはなく、イパーチー年代記にみられる文章である……筆者註)。鋭きカミソリの如く(汝は)偽りをなせり(詩篇LII, 2……筆者註)。(汝は)善よりも悪をより好み、正しきを言うよりも、偽りを(言うを好みたり)。(詩篇LII, 3……筆者註)。いつわりの舌よ、(汝は)(罪に)沈むべきあらゆる言葉を好みたり(詩篇LII, 4……筆者註)。されば神、とこしえまでも汝をくだき、また汝をおのれの村より捕え抜き、生けるものたちの地より汝の根をも絶やし給わん(詩篇LII, 5……筆者註)。ソロモンも言つてゐる。我は汝等の破滅を笑わん。(詩篇LII, 6……筆者註)。汝等の上に破滅の来たるを(我は)よろこばん。(箴言, I, 26……筆者註)。

なお（人々は）おのれの道の果実を食らい、おのれの不誠実にあぐべし（箴言、I、31……筆者註）……
……死んだグレブがどう扱われたかと言う物語の筋が此處につとく。そして、兄ボリスの横たわる同じ教会に安置されたという物語が終る。再び教會的賞讃祈禱文が此處に始まり、今度は、ボリス及びグレブの二人を主人公にしてたゞえあげる（筆者註）……
……しかして（二人は）肉体を、それにもまして魂を共にしたのである。（二人は）全能なる神のもとに参り、終りなきよろこびにひたり、言い難き光明に浴したのである。ルシの国に恢復の贈物を与え、信仰をもつて來たる他の国々の者たちには（二人は）恢復を与えているのである。足なえたるものには歩むことを、めいしたるものには視力を、病めるものたちには治癒を、いましめられたるものには解放を、とちこめられたるものたちには放免を、悲しめる者たちにはなぐさめを、追われる者たちにはまぬがれることを。（二人は）ルシの国の守護者であり、輝やける光明であり、おのれの民たちを神にとこしえに祈りつとける者である。その故にこそ我々も、キリストの（二人の）受難者をほめたゞえるべく、熱心に二人に祈つて言おう。よろこべ。ルシの国のキリストの受難者二人よ。信仰と愛をもつて汝等に来たる者たちに恢復を与えたる者二人よ。よろこべ。天なる二人の住人よ。（汝等二人は）天使の肉体にありき。心同じき勤行者なりき。同じ形の一對の人なりき。聖なる者に対して心同じ者なりき。その故にまた（汝等二人は）すべて苦しめる者たちに恢復を与えているのである。よろこべ。神の如き知恵あるボリスとグレブよ。汝等二人は生命を遑ぶ水の井戸から流れを汲み出だし、信仰厚き人々の治癒のために流しおるなり。よろこべ。（汝等二人は）ずるき蛇をたゞし、ルシの全土を輝す燈明の如く光輝けるものとして出現せしなり。常に闘を追い払い、不屈なる信仰を以て現れしものよ。よろこべ。まどろまざる眼よ。神の成就

に魂をかたむけて、聖者たちの教えをおのれの心に撰りし、至福なる者たちよ。よろこべ。共にいる兄弟よ。黄金輝く場所におり、天なる村に住み、色あせざる栄光につままれてある者よ。汝はその栄光を占めるにふさわしかりき。よろこべ。神の御光に明るく輝らし出されし者よ。全世界をめぐりし二人よ。悪魔どもを追い払い、病をいやしたる二人よ。この上なく良き燈明にして；暖かき守護者よ。神と共にある者よ。神の光に常に照らされてある者よ。勇敢なる受難者たちよ。信仰厚き人々にそが魂を照し明けしものなり。汝等二人を天なる光ある愛が天に揚げしなり。それ故に天上の生活にありてうるわしきもの総てを汝等二人は受け継ぎしなり。栄光をも、楽園の食べ物をも、知恵の光をも、うるわしき喜びをも。よろこべ。（汝等二人は）総ての心をなごませ、嘆きと病を追い払い、悪し慾望をいやし、聖なる血の滴にて、衣を赤くそめぬ。栄光ある二人よ。そが衣をうるわしくたづさえつゝ、汝等二人はキリストと共に常に君臨し、キリスト教徒の新しき人々及びおのが一族たちのために祈れ。大地は汝等二人の血にて祝福されたればなり。遺体として横たわりし者二人よ、神の靈にて光かよわせ、この教会の中にてじゆん教者としてじゆん教者たちと共におのが民のために祈れ。（これ以下はラヴレンチー年代記にだけはみとめられない一節である……筆者註）。よろこべ、教会を。光輝く太陽を傾け、朝日は常に苦しみの中に輝き、汝等二人のじゆん教者の栄光たらん。（こゝまでラヴレンチー年代記にだけない文章である……筆者註）。よろこべ。明け方に昇る明るき星よ。キリストを愛せしもの、苦難に耐えしもの、我等が守護者よ！ 異教徒たちをば我等が公たちの足下に恭順させよ。我等が主なる神に祈りて、（我等を）一致して健康のうち和平に過せしめよ、内紛の戦いより、悪魔のずるき潜入よりまぬがれしめよ。汝等二人の誠なる勝利をば永遠に世の末まで歌い尊ぶ我等をばよみし給え』

この様な一まとめにし得る文章がドラマチックな物語の組み込

みによつて中断されていた。然し、如何にそれが中断されていて、オリガ、ウオロジメルの記述の折に見られた宗教的内容の文章と語彙や文体の点から余りにも共通点が多いことに気づくはずである。そして、それらの文章が何かある書き物として別個に存在していたもののように思われる。或は教会の内に保存された聖なる過去帳のようなものの最古の形であつたかも知れない。然も、これらの文章は誰か一人の手によつて一気に書きあげられたものであると想像される。然も、それが書かれた時期は『過ぎし年月の物語』自身の記事から多少は推察し得られるのだから面白い。

ボリスを筆頭とする三人の兄弟が兄スヴィヤトボルクに殺された後に、彼等兄弟のうちで一人だけ死をまぬがれた者があつた。即ち、ヤロスラフである。ヤロスラフはノヴゴロドの人々を集めて殺人者である兄に立ち向う。その戦いの模様は兄弟殺しの記述された6523(1015)年の後半と翌6524(1016)年の項に書き取られている。そしてドニエプル河の氷上で氷が割れて敗退したスヴィヤトボルクがリヤヒ人のもとへ逃げ、ヤロスラフがキエフの父の王座についた年も同年であつた。ところで、この6524(1016)年の項の最後には面白い特長がみとめられる。というのは、その時、ヤロスラフは二十八才であつたという締めくくりがついている。よく考えて見ると、これ以前にも、以後にも、王座についた時、或は死亡した時、その他重要な時期に、その人物が何才であつたかというよりの記事は無かつたのである。ヤロスラフについてだけそれがあるとすれば、少くとも、此処に最大の重点が置かれたと考えるより仕方がない。『過ぎし年月の物語』が此処に重点を置いているという速断をしようと言うのではない。『過ぎし年月の物語』が台本にしたいくつもの素材の一つが此処に重点を置いていたと考えるべきなのである。そう考えて『過ぎし年月の物語』に見られるヤロスラフの記述を眺めて見ると多くの符合す

る記述に突き当る。スヴィヤトボルクという悪者を最大限に非難した文章が6527(1019)年の項にみられ、前記の暗殺者たちへの非難文と一対をなし、6545(1037)年にはヤロスラフのキエフ建設、教会建設の物語がつゞき、書物の利と学問のすすめを説き、ヤロスラフの時代こそが『キリスト教の信仰が結実しはじめ、ひろがりはじめ、しかして修道僧たちが増加しはじめ、もろもろの修道院が起りはじめていた』〈начи въбра хрестьяньская плодятся и разширяти, и черноризци почаша множитися и монастыреве починаху быти〉とあるのは6545(1037)年であり、ヴオロジメル¹の建てた聖母教会が主要儀式の場となつたことが書かれているのは6547(1039)年であり、ソフイヤ教会の基礎がおかれた記事は6553(1045)年であり、ペチエルスキー修道院の詳しい記事もまた6559(1051)年、ヤロスラフの死を報じて、彼の教訓を書き取つている年号が6562(1054)年であり、はじめて公に『大』〈великий〉という形容詞を冠したのも此処においてであつた。これらは総てヤロスラフ(大)公にまつわる記事であることに注意し、且つ、その直後には、はじめて外敵ボロヴエツの侵入が記述され、愛国心と内紛停止を呼びかけるような切実な記述がつゞくことに注意しよう。なおまた、ヤロスラフの記事中教訓的な部分が総て先にあげたオリガ、ヴオロジメル、ボリス、クレブ²についての宗教的な文章と余りにも類似することに注意しよう。どうやら『過ぎし年月の物語』が台本にした一つものは、このヤロスラフ記述で終つていたと思われる。そして、ルシの地におけるキリスト教受け入れの先君たちの賞讃と現代へのいましめとを兼ねた機能をもたせていた。『過ぎし年月の物語』は終りの頃に、『私が彼から多くの物語』を聞いて、それを⁵年代記に書き込んだ』と述べているが、その多くの物語を知つていて年代記者に語つたヤン〈Ян〉は、実に、これらヤロスラフの記述の終つた直後に登場して来る。即ち、より術師がキエフに来てヤ

ンがこれに立ち向う記事は 6579 (1068) 年の項である。『過ぎし年月の物語』が先で台本にしたものの一つが何処で途切れていたものであるかと分るであろう。そして、その途切れる最後のあたりの文章こそが、その台本の書かれた目的の最大のもを表わしていた。即ち、ヤロスラフ公への賞讃的記述であり、同時に、キリスト教への熱いすゝめであり、信仰あつき先君たちへの回帰であり、同時に、隆盛をきわめた教会・修道院の栄光保存であつた。『過ぎし年月の物語』とノヴゴロド才一年代記が、最大の台本にしたものが、ヤロスラフ大公の記述までで終つたと考えられるこの台本——それを現在には伝えられていない『原初の集』であると考えてもよかりが——が既に例えばボリスやグレブの記述に宗教的文章と血生臭い殺人物語の筋とを混合していたとすれば、台本そのものが既により古い二つ以上の台本の編集物であつたということになる。ボリスとグレブが殺される物語（『過ぎし年月の物語』の中の）が、実はそれを雄辯に物語つていたのである。『原初の集』の前にあつたと想像されている『キエフの集』にも既にもうボリスとグレブの物語における編集混乱があつたのではなかりか。十二世紀頃の写本を最古のものとして現代に幾つか伝えられているボリスとグレブの受難物語の単一本を対比の素材としながら、（それらの写本が初めて発見されたのは 1849 年であつたが）、『過ぎし年月の物語』及びそれが台本としたより古い年代記的文章の発生源を求めた試みがたゞ一つあるが（Н. Н. Ильин; Летописная статья 6523 года и ее источник; Изд. А. Н. СССР, Москва, 1957.），今更、それを引き合いに出すにも及ぶまい。現存しない台本の想定よりも、現存する『過ぎし年月の物語』その物の精密な読み方こそが此処では求められるべきである。

そこで、再びヤロスラフ公の記述が古い台本の終末部分であつて、その後はそれに書き加える形で継ぎ足されたものだとしたら、『過ぎし年月の物語』にも、その辺から何等かの客観的な証拠が生まれて来なければならぬ。果して、その様なものがあるかどうか？ 既に、年号、月、日の設定の仕方に就ては簡単にふれたことがある。そして、その折に設定の仕方の詳しさに差異のあることに言及した。再び此処で『過ぎし年月の物語』全体についてその点を検討して見ると面白いであろう。勿論、ラヴレンチー、イパーチー、トロイツキー等の年代記に見られるものを中心としてこの点を見てみよう。

『過ぎし年月の物語』が年号を設定する最初は6360(852)年である。6374(866)年には、皇帝ミハイル治世(ビザンチンの皇帝)の才十四年にアスコリドとシルがツアリゴロドに来たという記事が見られるのをはじめとして、時には冬が来たりつゝあつたという様な季節を示す言葉があり、或は朝に、夕刻にという時間を示す言葉さえみられた。それらは、既に引用した『過ぎし年月の物語』の各節からも言えることであるが；さて、年号や時期や時刻ではない月と日を示した記述の仕方は、一体、何年の頃から現れたであろうか。

言うまでもなく、その頃の文章を先に引用した6569(1061)年からである。(二月二日という日付である) 此処で編集態度或は記述態度が変つたことは言うまでもない。だからこの年の後の記述には例えば6573(1065)年には二月三日が、また6574(1066)には二度も月日が示され(三月三日と七月十日である)；6575(1067)年には九月十五日が、つゞいて十一月一日が、6576(1068)年には五月二日が、6581(1073)年には三月二日が、

6583(1075)年には七月十一日が、6584(1076)年には十二月二十七日と一月一日が、6585(1077)年には三月四日、七月十五日、6586(1078)年には四月十日、七月二十三日、八月二十五日と、次々に月と日の指定の密度は増して行く。

月と日の指定までが6569(1061)年を境にして確定的に行われることは、この年号あたりから書き手、或は編集者が異なること、或は、台本の切れ目を表すものだと考えられる。「過ぎし年月の物語」が準拠した台本の書き手が誰であつたかは確定し得ないが、少なくともその人物は、事件の月日までは確定することはなかつたし、記述の関心は事件の事実とその起つた月日になどは集注されていなかつたように思われる。むしろその人物は、おのれの國に起つた種々の事件を記述しながら、その事件の記述にもまして、それに附随して書かれるべき宗教的理念の方に重点を置いていたように思われる。それに対して1061年以後の記事の書き足し手は、むしろ、もつと深く事件そのものを追つたように思われる。そうでなかつたら、事件の起つた月日など書く必要はない。彼自からが編集した古い部分はそれを問題にもしなかつたのだから。そして、もう一つ重要なことは、この記述態度が変る境目以前の部分が多く、台本や伝承の層の寄せ集めであるのに対して、以後の部分は、ほとんど全く正確な当代人による事実記録であり、見聞記録であるといふことである。「過ぎし年月の物語」が文学的に読まれるにしても、歴史資料として読まれるにしても、この境目による読み方の態度の変更は厳に守らなければならぬであろう。

この境目を勤めた書き手が一般に考えられていたようにもしニコン〈Никон〉という僧だつたとしても、その個人的な人間決定を此処で問題にしようというのではない。むしろ、彼が古い部分の編集に際しておこなつたことこそが問題にならなければならぬからである。十一世紀前半以前の古い記事に就ては、その台本

をなす『原初の集』の埋め草に寺伝や僧の一代記などを集め、なお、文献的に不足する部分を、上述した多くの口頭伝承的なもので補つたと考えるべきである。そして、その古い部分の編集を終る頃から、その人物は自からの見聞をも含めて書き継いでいつたのである。然も、その書き継ぎの年代即ち彼の活動した時代こそは、ロシアの歴史にとつて忘れることの出来ないポロヴエツ人の最初の来襲の時代でもあつた。然もニコンの伝記によれば、彼はキエフからトムトロカニ〈Тмуторокань〉に一時その居所を移しているから、6572(1064)年の項以下にみられるこの地での出来事の記事は、まさに彼自身の経験見聞の記録であつたと思われる。キエフにいたものの能く知り得られないようなところがその記述には認められるからである。そして、もつと後に更に後代の年代記者(編集者)が『ヤン』〈Ян〉から多くの物語を聞いて書き込んだと記述しているが、不思議なことに、そのヤンの父ヴイシヤタ〈Вышата〉——— 始めて福音書を古代スラヴ語に訳したというオストロミル〈Остромир〉の息子である——— の名前がこの年号の記事に鮮かな影をおとしている。だから、老令のヤンから多くの物語を聞いて書き込んだ人の一時代前に、このあたりの記事をニコンが書き継いだものであつたであろう。『過ぎし年月の物語』はだから、最も現代に近い時代から数えて、ヤンから物語を聞いてそれを書き加えた人物と、なおそれ以前に、6572(1064)年頃から後の相当部分とを書き加えたニコンの場合と、少くとも二回の編集加筆を経ていることになる。

それはともあれ、先づ十一世紀の後半にニコンが書き加えたと思われる実録の記事とは、次の様な6572(1064)年からのものであつたと思われる。

В лето 6572.

Бежа Ростислав Тмутороканю, сын Володимерь, внук Ярославль, и с ним бежа Порей и Вышата, сын Ост-

ромирь воеводы Новгородского; и пришед выгна
Глеба из Тмутороканя, а сам седе в него место.
Иде Святослав на Ростислава к Тмутороканю, Рос-
тислав же отступи кроме из града, не убоявсья
его, но не хотя противу стрыви своему оружья
взяти. Святослав же пришед Тмутороканю, посади
сына своего паки Глеба, възвратися опять; Ростис-
слав же пришед паки, выгна Глеба, и приде Глеб
к отню своему, Ростислав же седе Тмуторокани. В
се же лето Всеслав рать почал. В си же времена
бысть знаменье на западе,.....

〔6572(1064)年〕

ヴオロジメルの子、ヤロスラフの孫ロスチスラフはトムトロカニに逃げた。しかして彼と共に、ボレイが、及びノヴゴロドの軍司令オストロミルの子ウシヤタも逃げた。しかして(ロスチスラフは)来つてトムトロカニからグレブを追い出し、一方、自分は彼の地位に坐した。スヴィヤトスラフはロスチスラフに対してトムトロカニに進攻し、一方、ロスチスラフは町から、わきへ引き下がつた。彼(スヴィヤトスラフ)を恐れたのではなくて、おのれの叔父に向つて武器を取ることを望まなかつたからである。ところでスヴィヤトスラフはトムトロカニに来たり、おのれの息子グレブを再びすえて、再び引き返した。ところでロスチスラフが再び来たり、グレブを追い出した。しかしてグレブはおのれの父のもとにもどり来たつた。で、ロスチスラフはトムトロカニに坐した。この同じ年にフセスラフが戦争をはじめた。この時代に西方に(天の)前兆があつた.....
.....(天変についての記述と考察が長くつゞく.....筆者註)』。『イーゴリ遠征物語』が血の叫びをあげたのは、この様な内紛への警告であつたことを此処で想起しておこう。トムトロカニで起つた従兄

弟同志の内紛的なこの争いの記述によつて、同じ地で起る事件が翌6573(1065)年にも見られる。その主要部分^は前に引用した、グレキの間者によるロスチスラフ毒殺の物語である。或はまたこの同じ年号の項の後半における、^{コル}ス^ス人によるこのグレキの間者の撲殺の記事である。ロスチスラフがトムトロカニで毒を盛られて死んだのは詳しく二月三日であつたと記されている。これらの記事に続く二十年間ほどの記事は伝承説話的なものも含めてニコンの手になるものであらうと思われる。というのは、『過ぎし年月の物語』がニコンの死を記述しているのは6596(1088)年であるからである。即ち、其処には次の様な記録がある。

В лето 6596.

Священа бысть церкви святаго Михаила монастыря Всеволожа, митрополитом Иваном, а игуменьство тогда держащу того монастыря Лазореви. Том же лете иде Святополк из Новагорода Турову на княженье. В се же лето умре Никон Печерский игумен. В се же лето взяша Болгаре Муром.

『6596(1088)年。

フセヴォロドの聖ミハイル修道院の教会が府主教イヴァンによつて浄められた。ところで、その時にはその修道院の院長職をラソリが占めていたのである。その同じ時にスヴィヤトボルクがノヴゴロドからトウロフに君臨すべく出かけた。この年にベチエルスキー修道院長ニコンが死んだ。この年、ボルガル人がムロムを奪取した。』

だから、この記事はニコンが書いたものではない。勿論、その直前あたりの記事もニコンの筆になるものではなからう。この年号以下の記事については、だから、全く別の才二次、才三次の記者を考えなければなるまい。それに就ては、いづれ、ふれなければなるまいが、それよりも先に、再びニコンに話を戻さなければなるまい。1064年頃以後、このあたりまでをニコンの筆になる

ものとしても、では、そのニコンが1064年以前の古い記事を編集し直したときに、加筆したものがなかつたであろうか。古い記事のうちで、民間その他の伝承説話的な内容の部分が特に注意されなければなるまい。伝承的な物語の部分の総てがニコンの筆による書き加えであるというのではない。少くとも、その中で、ニコンが書き加えたものだと言えそうなものが無いはずはない。

1064年からの記事が、しばらく、トムトロカニという土地に起つた詳しい記事であつたことから、そしてニコン自身が、この地にしばらく腰をすえたことがあつたことから考えて、都キエフでなくて、このトムトロカニにしか伝えられなかつた伝承的物語が、もしも、1064年以前の記事にあれば、それこそ、ニコンの書き加えになるものだと言えよう。では、キエフを離れて、『過ぎし年月の物語』の話題がトムトロカニに移るもの、そして、この土地の伝承らしき物語の記事が、1064年以前の記事にあるかどうか。各年代記の『過ぎし年月の物語』の1064年の記事以前の古い部分には、たしかに、トムトロカニという地名が二度出現している。即ち、6496(988)年の項と6530(1022)年の項である。

前者は、聖ヴオロジメル大公が洗礼を受けた後、十二人いた自分の息子を各地に封ずる記事で、息子たちの最後にあたるミスチスラフ<Мъстислав>をこの地に『封じた』<посади>と述べられている個所である。十二人の一番最後に書き取られているのは、疑えば疑えるであろう。ニコン自身が一時其処に住んだ土地に伝えられた最初の地方公の伝承的な名を、ヴオロジメル大公という巨像の最後の息子として(それもまた伝承の一部であつたかも知れないが)此処に後で書き加えたとも考えられる。

然し、それよりも確信を以て後者の6530(1022)年の記事は明らかに後に加筆された伝承物語であるということが出来るであろう。これは前者の6496(988)年の記事と結び合わせて読むと一層面白い。即ち、トムトロカニに封じられたミスチスラフのその後

の物語なのである。然も6530(1022)年の項は、このミスチスラフの物語からは決して始まつていない。その書き出しは『ヤロスラフがベレスチイに来つた』〈Приде Ярославъ къ Берестно..〉と書き出されている。いや、むしろ、おそらくはこの一行の文章だけでこの年の項の記事は終つていたかも知れない。ちなみに、ノヴゴロドオ一年代記にはこの年号の記事は全くの空白なのである。トムトロカニという土地の最初の地方公をミスチスラフとした当地の伝承であつたことは、かくして容易に推察し得られる。その上に、簡明な別個の記事の直後に書き足されたものであることも推察し得られよう。その証拠に『この年』〈В се же лето〉、『この時』〈В се же время〉などという文句からこの記事は始まらず、いかにも的確な年を伏せるものの如く、『これらの時』〈В си же времена〉と『時』を複数形にして物語を始めているではないか。まさに、その推察通り、『それは今日に至るまでもトムトロカニに立つている』という言葉で結ばれている物語なのである。此処に『今日まで』とは、だから、『過ぎし年月の物語』の終末記事が書かれた時までという意味ではなくて、ニコンの死の記事が書かれた1088年より少し前を『今日』と考へて読まれるべき文章である。トムトロカニに伝えられた物語を『過ぎし年月の物語』の古い部分に加筆して組み込んだ一節とは、再び引用すれば次の様な文章である。

В лето 6530
 В си же времена Мьстиславу сущю
 Тмутороканю, поиде на Касогы. Слышав же се князь
 Касожьскый Редедя, изиде противу тому, и ста-
 вшема обема полкома противу себе, и рече Редедя
 к Мьстиславу: "что ради губиве дружину межи со-
 бою? Но съидеве ся сама борот; да аще одолееши
 ты, то возмеш именье мое, и жену мою, и дети

мое, и землю мою; аще ли аз одолею, то возьму твое все". И рече Мьстислав: "тако буди". И рече Редедя ко Мьстиславу: "не оружием ся бьеве, но борьбою". И ястася бороти крепко, и надолзе борюшемася има, нача изнемагати Мьстислав, бе бо велик и силен Редедя; и рече Мьстислав: "о пречистая Богородица! Помози ми; аще удолею сему, сзижу церковь во имя твое". И се рек удари им о землю, и вынзе ножь, зареза Редедю; шед в землю его, взя все именье его, жену его и дети его, и дань възложи на Касоги. И пришед Тмутороканю, заложил церковь Богородица, и созда ю, яже стоит и до сего дне Тмуторокани.

『この同じ頃にトムトロカニにミスチスラフがいた時、(彼は)カソグ人に向つて進攻した。ところでこれをカソグ人の公レヂエジャが聞いて、その者(ミスチスラフ)に向つて出撃した。しかして両軍が互いに相對してとどまつた時、レヂエジャはミスチスラフに向つて言つた。"何のために(我々二人は)お互いの間で親兵団を亡ぼすのか?むしろ(二人で)相会し自ら戦おうではないか。もしも汝が勝てば、我が財産及び我が妻及び我が子等及び我が土地を(汝は)取るがよい。もしも我が勝てば、汝のもの総てを(我は)取るであらう"と。しかしてミスチスラフは言つた。"そうしよう"と。しかしてレヂエジャはミスチスラフに向つて言つた。"(我等二人は)武器で戦うのではなくて取つ組み合ひで(戦おう)"と。しかして激しく取つ組み合ひはじめた。永い間(二人は)取つ組み合つていた時、ミスチスラフは弱りはじめた。といふのは、レヂエジャは大きく強かつたからである。しかしてミスチスラフは言つた。"おゝ、いと清き聖母よ! 我を助け給え。もしも(我が)この者に勝てば、汝の名において教会を建てよう"と。しかして(彼

は) こう言つて、彼を大地にうちすえた。しかして劍を抜いてレヂエジャを斬つた。彼の国に行き、彼の総ての財産、彼の妻、及び彼の子等を取り、しかしてカング人たちに貢税を課した。しかしてトムトロカニに戻り、聖母教会の基礎をおいた。しかしてそれを建てた。それは今日に至るまでもトムトロカニに立つている』

このまゝの物語の形でトムトロカニ地方に説話として伝えられていたものなのか、或は、英雄の一騎打ちの物語だけがあつたのを、教会創設の話として誰かまとめたものをニコンが書きとつたのか、それとも、ニコン自身が教会創設物語としてまとめて書きとつたものなのか、その点はもう知る由もない。たゞ、この説話は、その後も同地に伝えつゞけられていたものであることはたしかである。というのは、『イーゴリ遠征物語』にその影があるからである。『イーゴリ遠征物語』に詠まれる事件は1185年四月末から五月にかけて起つているし、創られたのは、1187年或は1188年であつたと考えられる。だから、『過ぎし年月の物語』に書き込まれてから百年と少し後の作品である。此処に影がみとめられるというのは、次の様な処である。前置きの導入部分で、伝説的な大詩人バヤン〈Боян〉にあやかつて物語を進めたいと述べられている。そして、そのバヤンという詩人の偉大さと詩的才能による貢献とがしばらく歌われる。其処に次の様な個所がある。下線の部分が即ちトムトロカニでミスチスラフがレヂエジャに勝つた説話の影にあたる処である。

Боян бо вещей, аще кому хотяше песнь творити, то растекашется мыслию по древу, серым вълком по земли, пизым орлом под облакы. Помняшетъ бо, рече, първых времен усобице. Тогда пуцаеть 10 соколовъ на стадо лебедей: которыи дотечаше, та преди песнь пояше старому Ярославу, храброму Истиславу, иже зареза Редедю пред пълкы касож-

БСКЫМИ, красному Романови Святославличю.....

『というのは神智あるバヤンは、もしも誰かに歌を創らうとするときには、思いをはせて木にうつり、灰色の狼になりて大地を馳せ、ぬれば色の鷲となりて雲井に舞う。というの(彼は)速き世々の戦を憶えているからである。その頃には(彼は)十羽の鷹を白鳥の群に放ち、飛び来たりその者が先づ歌をはじめたのである。長老なるヤロスラフに、カソグ人の軍勢を前にしてレヂエジヤを斬りし勇敢なるムスチスラフに、うるわしきロマン・スヴィヤトスラヴィチに.....』

『イーゴリ遠征物語』の中でも面白いことに気づくであろう。賞讃の歌を奉られるヤロスラフやロマンには、決して関係代名詞による説明など行われていない。ところが、ミ(ム)スチスラフだけは「иже」を用いて、わざわざ、その功績の説明をしている。説明しなければ、古き英雄ミスチスラフが何物であるのかが叙事詩の聞き手に伝わらないと考えたからであつたかも知れない。とすれば、ミスチスラフのこの説明に当る一句をも含めた物語は、キエフ地方の有力な伝承ではなくて、この時代にも、いまだ、物語好きな人々の間にしか伝えられなかつた地方伝承であつたと言えよう。ということになれば、これは『過ぎし年月の物語』の該当部分の組み込みの事情と符合することになる。

もしも、中央の都キエフを遠くはなれた土地に伝えられたとおぼしき地方伝承をニコンが『過ぎし年月の物語』の古い年代の個所の編集加筆の際に組み入れたのだとしたら——また、地方伝承にそれほど関心を持つていた人物だとしたら、話はずっと広く展開されなければならないであろう。『過ぎし年月の物語』の古い時代の個所には相当多くの地方的伝承が読み取られるからである。コザル人から貢税を集めていた人に、老人が、貢税として差し出された両刃の剣を見て、コザル人の二心を見抜き、良きことの前兆ではないと忠告する物語なども或はニコンの手によつて組

み込まれたのかもしれない。また、ウオロジメル公の記述の部分では、キエフからわざわざコル地方に場を移して展開される物語があつた。即ち、特にウオロジメルがキリスト教の洗礼を受ける前の行動記述にはそれが多し。然も、それらは余りにも伝承物語的であるように思われる。少くとも、それらの内のいくつかは彼の手になるものかも知れない。トムトロカニという地方のミスチスラフの説話を取りあげたのがニコンであつたとしたら、そして、その記述に、『今日までも〱している』という結びの言葉が用いられていたことに注意するなら、やはり、ウオロジメル公の記述の中で、地方を舞台にし、且つ『今日までも〱している』という結びの記述があれば、少くともそれが説話的でありさえしたら、一応はニコンの手になる加筆部分であると考える方が合理的であろう。その様な部分がたしかに『過ぎし年月の物語』のウオロジメル記事には存在するのである。その典型的な一例が、ウオロジメル洗礼以前の6492(984)年の項である。

Иде володимер на Радимичи. Бе у него воевода Волчий Хвост, и посла и Володимер перед собою, Волчьця Хвоста; сърете е на реце Пищане и победи Радимиче Волчий Хвост; темь и Русь корятся Радимичем, глаголюще: Пищаньци волчьця хвоста бегаютъ. Быша же Радимичи от рода Ляхов; прешедьше ту ся вселиша, и платять дань Оуси, повоз везуть и до сего дне.

『ウオロジメルはラジミチに進攻した。彼のもとには軍司令官のヴォルチー・フヴォスト(狼の尾)がおり、彼をウオロジメルはおのれよりも前につかわした(この)ヴォルチー・フヴォストを。ヴォルチー・フヴォストはピンチャ川のほとりて彼らを迎えうち(この)ラジミチをうち負かした。これによつてルシもラジミチをのしつて言つた

ピンチャナ人たちは狼の尾から逃げる（狼の尾をこわがる）と、ところでラジミチはリヤヒの一族から出ていた。（彼等は）そこに移つて住みついた。しかして貢税をルシに払つており、彼らは今日に至るまで貢税の義務を果している』

この様に、『今日に至るまで』している』という結びの言葉を持つ記事は『過ぎし年月の物語』の中には数個を数えることができる。ヴオロジメル公の記事に限つて、なお且つ、都キエフを離れたコルスニ＝〈Корсунь〉での記事として、見たゞけでも、例えば次の様な一節がある。6496(988)年の項の中程である。

Володимер же посем поем царицю, а Настаса, и попы Корсуньски, с мощи святого Климента и Фифа, ученика его, поима съсуды церковныя, иконы на благословенье себе. Постави же церковь в Корсуне на горе, юже съсыпаша среде града, крадуше присну, яже церки стоять и до сего дне.

『ところでヴオロジメルは（自分の妻に迎えたグレキの）皇女とナスタスとコルスニの僧たちをつれ、聖クリメント及び彼の弟子のフイフの遺体と共に教会の器物及び聖像をおのれの祝福のためにもつて行つた。ところで（彼等は）コルスニの人々が土手をくづして町の中央にきづいた山の上に教会を建てた。その教会は今日に至るまでも立つている』

キエフを離れたコルスニという地方の伝承的物語をこの様にニコンが加筆したものだとすれば、ヴオロジメル公の記事に関するもののうちで、コルスニを事件の場とするその他の物語記事も、また彼の手による加筆であつたと考えてよいかも知れない。それらの記事を此処に引用することはもう省略しておこう。

ところで、ヤン〈Ян〉から多くの物語を聞いて、それを『我は』年代記に『書き込んだ』〈вписал〉とした人物は年代的に見て決してニコンではなかつた。ニコンよりも後に再び年代記を編集加筆

した別の人物であつたことは少し前にふれた。ところで、後に別の人物に多くの昔話を語ることできたヤン《Ян》は、その物語を自分で創作した訳はなかつたであろう。より年配の誰かから聞き知つたものであるはずである。では、そのヤンに語りきかせた者はだれであつたであろう。先づ、ヤン自身の父ヴイシヤタ《Вішата》ではなかつただろうか。ヤンの父は、実に福音書の最初の訳者の子であり、軍司令官であつた。文人的にも武人的にも名門の教養高き人であつたことは前述した。ところで、父ヴイシヤタは、息子ヤンに向つて多くの昔話を語り聞かせる以外にも、多くの人々に、同じように豊かな伝承や説話を聞かせることがあつたと考えるべきである。『過ぎし年月の物語』自体の記述から見て、実はニコンとヴイシヤタとは全く同年輩のように見受けられる。この二人の関係を想定するのは不自然であろうか。ニコンが地方にある伝承説話に関心を持ち、その幾つかを『過ぎし年月の物語』に編集加筆したほどの人であつたとすれば、ヴイシヤタの語る昔話を汲み取らなかつたはずはないと思われる。ニコンとヴイシヤタとは同時代人であり、一方は修道院長、一方は軍司令官であつた。二人は会つたり、話したりしたことが無かつたとは、これまた考えられない。6572(1064)年の項として『過ぎし年月の物語』が、トムトロカニにロスチスラフが逃げたという記事をもつていることを先に述べた。然も、その時にニコンがトムトロカニに居たことも前述した通りである。ところで、『過ぎし年月の物語』のこの年の記事には、トムトロカニに逃げたロスチスラフに従つて共に行動した人物の名をあげていた。ボレイ《Попей》という人物と、もう一人は実にヴイシヤタその人の名である。然も、ヴイシヤタにはわざわざ但し書きをつけたように『ノヴゴロドの軍司令官であるオストロミルの息子』という言葉がつけ加えられている。実際に見物し実際に会つた人物の名をニコンが此処に書き込んだのはたしかであろう。ボレイという名だけが記された人物の方とニコンとは或は陳

遠な仲であつたかも知れない。それに対して、ヴィシヤタの方は父の身分と名まであげて記されている以上、特にニコンが深い注意を払つたためであると思わなければならない。キエフの軍司令官ではなくて、ノヴゴロドの軍司令官であつたオストロミルの息子であつたことに注意しよう。もしこのヴィシヤタが後に息子ヤンに物語つたように、ニコンをとらえて物語をはじめ、或は地方伝承に関心をもつていたニコンが彼をとらえて話を聞いたとすれば、それは、多くノヴゴロドの話であり、ノヴゴロド地方に伝わる物語であつたと思われる。『過ぎし年月の物語』の古い部分及びニコンが死ぬまでの年代の項には、ノヴゴロドを舞台とし、ノヴゴロド人が登場する物語が少くない。即ち、1088年にニコンが死んだという記事以前に、年代設定以前に四回、6370(862)年、6390(882)年、6455(947)年、6478(970)年、6485(977)年、6488(980)年、6496(988)年、6505(997)年、6522(1014)年、6523(1015)年、6524(1016)年、6526(1018)年、6529(1021)年、6532(1024)年、6544(1036)年、6553(1045)年、6560(1052)年、6571(1063)年、6575(1067)年、6579(1071)年、等がある。

これらのノヴゴロド或はノヴゴロド人を記述した『過ぎし年月の物語』の記事の幾分かは、ニコンの手によつて巧みに加筆され組み込まれたものだと考えておいてよいであろう。特に、それら上記の年号項のうちで、物語性の豊かな伝承的な内容のものは、そうだと考えて大過はないであろう。そのうちで、例によつて『今まで～している』という文句を含んで注目される一節がある。6455(947)年の項である。

В лето 6455.

Иде Вольга Новугороду и устави по Мьсте повосты и дани, и по Лузе оброки и дани; ловища ея суть по всей земли, знамянья и места и повосты, и сани ея стоять в Плескове и до сего дне.....

『6455(947)年』

ヴオリガはノヴゴロドに向い、ミスタ(河)の沿岸に陣屋と貢税を(定めた)。彼女の狩場は全国にわたつてある。しかして、(ゆかりの)しるし、場所、陣屋もある。しかしてドニエブルに沿つても、デスナに沿つても、鳥網場がある。しかして彼女の村オリジチも、今日に至るまである……』

その一節は実に面白いことだが、主人公オリガ<Ольга>を此処だけヴオリガ<Вольга>と綴っている。ラヴレンチー年代記その他イパーチー年代記なども、此処だけが<Ольга>ではなくて、<Вольга>と綴り、その前後は総て<Ольга>になつているのである。勿論、彼女の息子のオレグ<Олег>を生格なり対格にして用いる時にその形が<Ольга>となつて、その場合に、或る個所では<Вольга>となるようなことは決してない。ましてオレグの生・対格との混乱をさけるためにオリガを<Вольга>と綴るなら、いづれもそうならなければならぬ。だから、どう考えて見ても、此処における<Вольга>は、明らかに完全に別個の物語の別個の加筆であつたと思わなければならない。他の多くの年代記では、『古代ロシア研究』才五号にオリガ記事を総て取りあげたように<Вольга>と綴ることが皆無であつたわけではない。然し、ラヴレンチー年代記などの『過ぎし年月の物語』ほどに、6455年のこの項のような特殊な別格綴りとして利用することは一度もなかつた。古いプイリーナの中にヴオルガ河<Волга>を主人公にし擬人的に活躍させた作品があつたが、或は、それとの混乱であろうか。そうだとすれば、この項の説話は非常に古いものになる。ともあれ、『過ぎし年月の物語』に、この項が差し入れられたのは、その他のオリガ記事とは全く違つた形においてであつたと思われる。

さて、次に、ノヴゴロド或はノヴゴロド人の登場する記事中で、ニ

コソの加筆になると考えてよさそうなものを、上記の年号列挙中のものからもう一つ求めて見よう。6488(980)年の記事は、ヴオロジメル公がいまだキリスト教を摂取しない以前の物語であつた。キエフにスラヴ原始宗教の主神ペルン《Перун》をはじめとする多くの神々の像をキエフの丘の上に建てたという記事であつた。そして記事は、それらの像を人々が礼拝し、いけにえをささげていたと報じている。そして、その直後には、教会人らしく、その行為が真の神にそむくものであつたのだと説き、神はそれにもかゝわらず、慈悲深く、人を罰せず、むしろ、現在はその地に聖ヴァシリイ教会が立つているようなめぐり合わせを人に与え給うていと述べている。そこまで説明的に記述するのならば、一方、ノヴゴロドにはヴオルホフ河に臨んだ所に、同じペルンの偶像を立てたという後半の記事にも、何等^かのキリスト教的後日たんをつけなければなるまい。ところが、ノヴゴロドに原始異教の主神ペルンの像が立てられたという後半の記事は、人々が礼拝していたという言葉で終るのみである。これまた明らかに後の加筆であつたということになりそうである。原始異教の神への礼拝はいけないのだという説教なり、それでもキリスト教の神は慈悲深いから、古き原始の神の座にさえ教会が今は立つているという説法を書きつけるのなら、キエフとノヴゴロドの両者における偶像建立の記事の後におこなわれて然るべきである。決して、上手な編集や加筆の手段ではなかつた。

ヤン《Ян》の父であり、オストロミール《Остромир》の息子であり、しかも自から軍司令官であり、『過ぎし年月の物語』自身の記事によれば、6551(1043)年の記事にあるようにグレキ遠征の指揮もしたヴァシヤタからニコソが聞き取つた物語は、上に述べたようなノヴゴロドの地方的な物語だけであつたとは考えられない。ヴァシヤタ自身が自分の身の物語をも熱をこめて物語つたとしたら6551(1043)年の項は、これまたそれを聞いたニコソの筆

になるものであつたであらう。或はヴァシヤタの息子ヤンが父の自慢話を語つたのを一世代後の別の人がもう一度、ニコンのこの記事に加筆しているかも知れない。それはともかく、少くとも、ヴァシヤタが軍司令官として、ヤロスラフ公の命によりグレキに遠征し、そして、グレキに捕えられた多くのルシ人と共にビザンチンに連れて行かれ、多くのルシ人が眼をつぶされて盲目にされ（《слепиша Русь много》）たといわれる以上、ヴァシヤタも或は同じように眼をつぶされたかも知れない。そして三年後に《по трехъ же лѣтъхъ》和平が結ばれた時《миру бывшы》「ルシの國へヴァシヤタは放された」《пушень бысть Вышата в Русь》のであつた。ヴァシヤタにとって、このグレキ遠征の苦々しい物語は、決して、物語をなす折に避けては通れなかつたであらう。息子ヤンにも聞かせたであらうし、ニコンにも物語つたであらう。勿論、自分のグレキ遠征にちなんで、過ぎし時代の栄光ある古いグレキ遠征の物語をも引き合いに出したであらう。とすれば、ヴァシヤタが6551(1043)年のこととして語つたと思われるこの年の年号よりも古い総てのグレキ遠征の物語もまた、その根源はヴァシヤタの口から出た物語であり、それを聞いたニコンの筆の先にあつたと考えてよいかも知れない。

この様な物語的な素材以外に、キエフのベチエルスキー修道院にまつわる寺伝の如きものは、完全にその院長であつたニコンの編集によつて『過ぎし年月の物語』の中へ持ち込まれたものである。

ロシアにキリスト教が入つて来たそもそもの事情と、初期頃の巨大な信者やじゆん教者や公たちの信仰物語、及びキリスト教がロシアの地に広まつて行く物語をまとめた、最も根元的な古い作品があつて、その行間にニコンが非常に多くの口頭伝承や政治社会・軍事的な世俗記事を書き込んで、先づ『過ぎし年月の物語』の原型が逐々出来上つたのだとしたら、何故、彼は、宗教的な本来の

作品の中に世俗的な記事をそんなに多く差し込んだのであろう。語彙も文体も内容も全く異質的なものを、これほどやたらに混入させたのは何故であつたであらう。キリスト教的な物語だけに沈潜して、宗教の空気の中だけに生きていることのできない何等かの理由があつたからに相違ない。宗教から世俗への移行があつたからであらう。その原動力は、では一体、何であつたのだらう。我々はニコン自身が自分の時代のこととして書いたと思われる『過ぎし年月の物語』の記事自体からそれを探ることができる。即ち彼が老年を生きた十一世紀六十年代末の事件についての記事に注目したい。

ロシアがギリシア文明を摂取してさかえ、且つ、独立した後、この時期は外敵ボロヴェツの侵入がようやく激しさをます時であつた。月と日とを指定して、最初のボロヴェツの来襲を伝える記事が『過ぎし年月の物語』に現れるのは、6576(1068)年であつたことを注意しておこう。翌々年6571(1063)年にはスジスラフ公が死に、五日間ヴォルホフ河が逆流して悪いことの起るきざしを示し、フセスラフによつて町が焼かれた。次の6572(1064)年には、フセスラフが戦争をはじめ、天には不気味な血の色をした大きな星が現われた。物情騒然たる時代であつた。そして再び6575(1067)年にはボロヴェツの大学侵入が記録されている。そこで、この6575(1067)年の記事には何が書かれていたか。この年の項は月と日まで二度までも指定された記事である。ボロヴェツに敗退した公たちとその後の物語である。

В лето 6575.

Придоша иноплеменьници на Русьску землю, Половци мнози, Изяслав же, и Святослав, и Всеволод изидоша противу им на лето; и бывши ноци, подыдоша противу себе.....
и побегоша Русьскыи князи, и победиша Половци.

.....

Изяславу же со Всеволодом Кыеву побегшю, а Святославу Чернигову, и людье Кыевстии прибегоша Кыеву, и створиша вече на торговици, и реша по-славшеса ко князю: "се Половци росулися по земли; дай, княже, оружье и кони, и еще бьемся с ними".

Изяслав же сего не послуша. И начаша людье говорити на воеводу на Коснячкя; идоша на гору, с вечера, и придоша на двор Коснячков, и не обрете его, стаха у двора Брячиславля и реша: "пойдем, высадим дружину свою из погреба". И разделшася надвое: половина их иде к погребу, а половина их иде по мосту; си же придоша на княжь двор. Изяславу же сядящу на сенех с дружиною своею, начаша претися со князем. Стояше доле, князю же из оконця зрящю и дружине стоящи у князя, рече Туки, брат Чюдин, Изяславу: "видиши, княже, людье възвыли; послы, ать Всеслава блюдуть". И се ему глаголющю, другая половина людей приде от погреба, отворивше погреба; и рекоша дружина князю, "се зло есть; послы ко Всеславу, ать призвавше лестью ко оконцю, пронзуть и мечем". И не послуша сего князь. Людье же кликнуша и идоша ко погребу Всеславлю; Изяслав же се виде, со Всеволодом побегоста с двора, людье же высекоша Всеслава из погреба, в 15 день сентября, и поставиша и среде двора княжа; двор же княжь разграбиша, безчисленное множество злата и сребра, кунами и белью. Изяслав же бежа в Ляхы. Посем же Половцем воюющим по земле Русьстей, Святославу сущю Чернигове,

и Половци воюющим около Чернигова, Святослав же собрав дружины неколико, изиде на нь ко Сновьску. И узреша Половци идущь полк, пристроишася противу; и виде Святослав множество их, и рече дружине своей: "потягнем, уже нам не lze камо ся дети", удариша в коней; одоле Святослав в трех тысячах, а Половецъ бе 12 тысяче, и тако бьеми, а друзии потопоша в Снъви, а князя их яша рукама, в 1 день ноября и възвратися с победою в град свой Святослав. Всеслав же седе Къеве.

〔6575(1067)年

異種族人たちがルシの国に進攻し来たつた。多くのボロヴェツ人たちである。そこで、イジャスラフは、スヴィヤトスラフも、フセヴオロドも、彼に対してリト(河)に出撃した。しかして夜であつた。互いに対立接近した……………しかしてルシの公たちは逃げ、ボロヴェツ人たちが勝つた……………ところでイジャスラフはフセヴオロドと共にキエフに逃げ、一方、スヴィヤトスラフはチエルニゴルフに(逃げた)とき、キエフの人々はキエフに逃げ来て、市場において民会をおこない、しかして(人々は)公に使者をたてて言つた。"見よ、ボロヴェツ人たちが国中に散つた。公よ、武器と馬とを与えよ。しからば(我々は)もう一度彼等と戦おう"と。イジャスラフはこれを聞かなかつた。しかして人々は軍司令官コスニヤチコを非難しはじめた。(人々は)民会から山の手に行き、しかしてコスニヤチコの家敷におしよせた。(人々は)彼を見出さず、ブリアチスラフの家敷のそばにとどまり、しかして言つた。"行つて、おのれの親兵団を牢から解き放たう"と。しかして(人々は)二手に分かれた。彼等の半分は牢に向い、また半分は橋を進んだ。それらの者たちは公の家敷におしよせた。ところでイジャスラフはおのれの親兵団と共に二階広間に坐していたとき、(人々は)公

と争いはじめた。(人々は)下に立ち、公の方は小窓から(外を)ながめ、親兵団が公のかたわらに立っていたとき、チュジの兄弟トウクイがイジャスラフに言つた。「見よ、公よ、人々が叫びをあげた。使者をたて、フセスラフを守らせよ」と。しかしてこれを彼が言つているとき、人々の半分が牢から来たつた。牢を開いてしまつたのである。しかして親兵団は公に言つた。「これは悪しきことである。フセスラフに使者をたて、あざむいて(彼を)小窓のところへ呼びよせ、彼を剣で突きさしめよ」と。しかして、このことを公は聞かなかつた。ところで、人々は叫びしかしてフセスラフの牢に来つた。ところで、イジャスラフはこれを見て、フセヴォロドと共に家敷から逃げた。人々の方はフセスラフを牢から連れ出した。九月十五日のことである。しかして、彼を(人々は)公の家敷の中央にすえた。(人々は)公の家敷を略奪した。金及び銀、貨幣及び獣皮を数限りなく無数に。ところでイジャスラフはリヤヒに逃げた。ところでこの後、ポロヴェツ人たちがルシの国を攻め、スヴィヤトスラフがチエルニゴフにいて、しかしてポロヴェツ人たちがチエルニゴフの近くで攻撃していたとき、スヴィヤトスラフは若干の親兵団を集め、彼等に対してスノヴィスクに出撃した。しかして、ポロヴェツ人たちは進み来る軍勢を見て、戦いの準備をした。しかして、スヴィヤトスラフは彼等が多数であるのを見て、おのれの親兵団に言つた。「攻めようではないか。既に我々には何処に身を置く場所もない」と。(人々は)馬に鞭をあてた。スヴィヤトスラフは三千人を以て打ち勝つた。ところがポロヴェツ人たちは一万二千人であつた。しかして、(彼等は)打ちやぶられ、他の者たちはスズグイ(河)におぼれ死んだ。しかして彼等の公を(人々は)生けどりにした。十一月一日のことである。しかしてスヴィヤトスラフはおのれの町に勝利を納めて戻つた。ところでフセスラフはキエフに坐した』

外敵に対する一応の勝利の記録だとは言えるが、然し、よく読

むと其処には、むしろ、公たちの不一致についての嘆きが読み取られるであろう。実際、この記事の翌年の項には公たちの間の仲間戦争が物語られているのである。外敵にふみにじられ、公たちの不一致に迷わせられていた人々の嘆きと憤りとやり場のない気持が此処にはにじみ出ていないだろうか。宗教的世界の内側にのみあつては、既に、強烈な世俗の出来事には対処し得る筈もなかつた。古い初期のロシア・キリスト教信者たちの物語や、キリスト教がロシアに入りはじめた頃の宗教的物語では、現世に対して全く不足充の違和感があつた。まして、その古い宗教的物語は、輸入もとであるビザンテン(グレキ)を家元と考え、グレキをあがめ、グレキにもたれかゝる姿勢が強く、外敵来襲と支配層の内紛的抗争の乱世には、民族的に生きて機能は果し得なくなつていた。此処で再び家元のグレキにもたれかゝるには、然し、ロシアは既に民族文化を高め、グレキそのものが東方のロシアの内外のうれいの受けとめ手にはなつてくれるはずもなかつた。嘗つて、あこがれ、あがめられたグレキは、ロシアの民族的自立の立場から考え直さるべき対象でなければならなかつた。ポロヴエツ人という外敵及びその外敵の異教、そして、いまだ残るおのれの国の原始異教的要素には、教会人としても、自からの力量で自から戦う能力をもたなければならなかつたと思われる。そのためには、グレキから借りた眼鏡を通した姿においてではなくて、ロシア宗教人独自の肉眼によつて祖國の過去と現在の榮光を定着させなければならなかつた。かくて、グレキは家元の地位から対等の批判対象へ転せられなければならぬし、精神的独立こそが勝ち取られなければならなかつた。その独立精神は権力闘争の内紛に明け暮れる公たちよりも、それらの公たちを下から突き上げる形で、より下級武人たちの行動に現れ、それこそが、また、年代記者である教会人に高く評価された。記してたゞえられるべき行動として受けとめられた。その様にして、上に引用した記述は読まれなければ

ばならないと思ふ。その中でも、特に、キエフの民会での発言とその意気こそは、大書さるべき新しい現象であつただらうし、また、民会に集まる下級者たちのその意気と発言からこそ、新しい統一のロシアは建て直されるべきであるとされたことであらう。即ち、上部を突きあげる下級者のその発言とは、『見よ、ポロヴエツ人たちが國中に散つた。公よ、武器と馬とを（我等に）与えよ。しからば（我々は）もう一度彼等（ポロヴエツ人たち）と戦おう』という言葉である。『過ぎし年月の物語』に非宗教的な世俗事件の記述が数多く組み込まれた目的は、行きつくところ、この発言の精神頭掲のために他ならなかつたように思われる。その発言の精神こそがニヨン当時における最大の倫理であつてほしかつたのである。だから、この発言にまで固まりつくまでには、数多くの準備的記述が必要であつた。その用を達するためのものでこそが世俗的事件の多くの加筆であつた。だから、それらの記述の中には、公を突きあげてでも、下級者たちで戦おうとする意気を示した多くの準備的物語が伏せられていた。例えば、上記の物語を五十年余りさかのぼつて6526(1018)年の記事を見るがよい。(既にこの記事の文章は先に引用したことがある)。其処には、ボレスラフ<Бо-леслав>に敗れたヤロスラフ<Ярослав>を下級者が突きあげる物語が読まれる。敗れたヤロスラフが船で海外に逃亡しようとした時に、ノヴゴロドの人々はどうしたであらうか。彼等は代官コスニヤチンをいたゞいて、ヤロスラフの船を破壊し、彼の逃亡をさまたげた。その時に人々の言つた言葉として書きとめられたのは『（我々は）もう一度ボレスラフと、またスヴィヤトボルクと戦いたく欲する』<хочем ся и еще бити с Болеславом и с Святополком>という言葉であつた。また、これより三年前即ち6523(1015)年の記事を見るがよい。其処には嘗つて引用した如く、父の親兵団がボリスに戦うことを提案した物語があつた。戦うことを肯定しなかつたボリスに対して、親兵団が取つた態度は、彼から離れ散

るという無言のしつべ返してあつたではないか。しかもこのボリスの弟ヤロスラフ公がノヴゴロドの民会に出席した時、民会の人々は、肉親に多くの戦死者を出していたにもかかわらず、何と答えたであろうか。『公よ、たとえ我々の兄弟たちが打ち殺されたとはいへ、(我々は)汝の為に戦うことができる』《аше, княже, братья наша истъчена суть, можем по тобѣ бороти》という言葉であつた。ともに6523(1015)年の頃の記事であつた。

勿論、この下級者たちの覚めた独立精神の意気を大記して顕揚することがニコンの最終目的であつたわけではない。それほどに燃える下級者の立派な精神の上に立つて、最高支配者である公たちに注文がつけられたのであつたのである。もう其処にはビザンチンの教子としての修道僧の姿は克服され、最高知性者、最高道徳者としてのロシア人の自負と識見とがあつた。公たちの内紛への鋭く厳しい非難が此処から響き出すのである。宗教人が宗教の記述を越えた最大の理由であつた。公たちの内紛停止への注文は、『過ぎし年月の物語』の中に、かくして、数多く加筆され織り込まれる結果ともなつた。6562(1054)年の頃の記事として、先に引用した、ヤロスラフ公の息子たちへの遺訓とは、まさにそうしたものの一つであつた。即ち其処に説かれたものこそ、最高知性人がそのまゝ公たち自身に投げかけた注文そのものであつた。その一部を再び次に引用しておこう。外敵を迎えて且つ内紛をくり返す当時(十一世紀末)の公たちに、これほど耳のいたい言葉は他になかつたであろう。まして大先君ヤロスラフ公の遺訓という形をとられてはなおさらのことであつた。

.....сынове мои; имейте в себе любовь, по-
неже вы есте братья единого отца и матери. Да
аше будете в любви межю собою, Бог будетъ в вас,
и покорить вы противныя под вы, и будете мирно
живуще; аще ли будете ненавидно живуще в рас-

прых и которающеса, то погыбнете сами и погы-
бите землю отецъ своих и дедъ своих, иже налезоса
трудомъ своимъ великимъ. Но пребывайте мирно, послу-
шающе братъ брата.....

『我が子等よ。お互いに愛をもて。その故は汝等は同一の父及び母からの兄弟たちなのである。もしも（汝らが）お互いの間の愛の中にあるならば、神は汝らの中にいまし、汝らに敵対するものを汝らのもとに服せしめ給うであろう。しかして（汝らは）平和に暮すであろう。もしも（汝らが）紛争の中に敵意をもつて暮し、相争うならば、（汝ら）みづからは破滅し、且つ、汝らのみづからの父たち及び祖父たちの国をほろぼすことにならう。その国たるや（父及び祖父たちが）偉大なる労苦をもつて獲得したものであるのに。しからずして、兄弟は兄弟の言うことを聞きつゝ仲良く暮すがよい』

この様に、当時の支配層に向つての、血の出るような注文と主張とが、ニコンによつて『過ぎし年月の物語』に強く反映させられていたのである。その準備段階として種々の世俗的軍事的事件の加筆が古い年代項の部分に数多くなされたのであつたと思えばよいであろう。そして、最後の目的であつた注文と主張は、鏡の形で諸所に織り込まれた。ヤロスラフ公の口を借りて、上にあげたような遺訓として書かれたものの他にも、まだ数多くそれを発見することができる。この遺訓の形として述べられた倫理をふみ破ることが如何に悪いことであるかという裏返しので書かれたものが、これまた月と日付とを明記した6581(1073)年の項である。明らかに、ヤロスラフ公の教えという形での倫理の破壊を厳しく非難した文章で、十九年前の年代項即ち上記の6562(1054)年の項との関連の上で読みとられなければならないものであろう。ヤロスラフ公の教えの倫理は、年代記者によれば同時にそれ以上に神の誠律なのであり、それを破ることは大罪であると大記した

のである。即ち、政治的主張と宗教的主張とが、充分ロシヤ流に消化された時代にして、はじめて為し得たほどの文章をニコンは『過ぎし年月の物語』の古い年代項の中に織り込み、新しい当世の出来事を書き足したのであつた。ちなみに、6581(1073)年の項には次の様に読まれるのである。

В лето 6581.

Въздвиже дьявол котору в братьи сей Ярославичих. Бывши распри межи ими, быста с себе Святослав со Всеволодом на Изяслава; изиде Изяслав из Кыева, Святослав же и Всеволод внидоста в Киев; месяца марта 22, и седоста на столе на Берестовом, преступивше заповедь отню. Святослав же бе начало выгнанью братню, желая болшее власти; Всеволода бо прелсти, глаголя: "яко Изяслав сватится со Всеславом, мысля на наю; да аще его не вариве, имать нас прогнати". И тако взостри Всеволод на Изяслава. Изяслав же иде в Ляхы со именем многым, глаголя: "яко сим налезу вои". Еже все взяша Ляхове него, показавше ему путь от себе. А Святослав седе Кыеве, прогнав брата своего, преступив заповедь отню, паче же Божью. Велий бо есть грех преступати заповедь отца своего.....

『悪魔がヤロスラフの子たちのこの兄弟の中に紛争をもちあげた。彼らの間には仲間げんかが起り、スヴィヤトスラフがフセヴォロドと共にイジヤスラフに対抗したのである。イジヤスラフはキエフからのがれ出て、スヴィヤトスラフ及びフセヴォロドがキエフに入った。三月二十二日のことである。しかして、(二人は)父の遺訓をおかしてベレストヴオの王座についた。ところでスヴィヤトスラフは、より大きな権力を望んで兄弟追放のはじめをなしたのであつた。』

いうのは、(彼が)フセヴオロドを元ぶらかして言つたからである。
「イジヤスラフは我ら二人に対抗して企てつゝフセスラフと結んでい
る。もしも(我ら二人が)彼に先んじなければ、(彼は)我らを追い
払うであろう」と。かくしてフセヴオロドをイジヤスラフにけしかけた
のであつた。ところでイジヤスラフは多くの財産をもち、リヤヒ(人
のもと)へ行つた。「これを以て戦士を集めよう」と言いながら。
それらの(財)の総てをリヤヒ人たちは彼から奪い取り、彼をおの
れのもとから追い払つた。一方、スヴイヤトスラフは、父の遺訓、
それ以上に神の(いましめ)をおかして、おのれの兄を追い払いキ
エフに坐した。ところで、おのれの父の遺言をおかす罪は大であ
る。」

ところが、これとは反対に、ヤロスラフ公の教えの形で示された
兄弟愛——即ち、支配層の内紛停止と、統一権力への志向と、
それによる外敵への一致団結した対抗の姿は、種々の年代項の物
語を利用しつゝ『過ぎし年月の物語』の各所に讃美されつゝちり
ばめられたのである。

年号の古い順番からその様に影りの深い文章を二・三引用して
みよう。先づ6527(1019)年の項がそれである。即ち、先にそ
の文章を引用した如く兄弟殺しの悪者スヴイヤトポルクを撃つヤロス
ラフの記事がその前半である。そして後半には、悪者スヴイヤトポ
ルクの兄弟殺しの罪状を激しく暴露し、『今日まで——している』
という例の文章で以て、『今日まで彼の墓は荒野にあり、そ
こから悪しき臭気が発散している』という最大限の非難と、それ
につゞく鋭い説教とを書きつけたのである。その辺の文章は、い
まだ一度も引用しなかつたので、此處に示しておこう。宗教的説
教が支配層への烈しい注文となり、政治論となり、世俗世界での
守られるべき倫理ともなつた一つの典型的な文章であろうと思わ
れる。だからまた、『過ぎし年月の物語』における最も熱つぽい
、最も典型的な、最も骨子となるべき文章なのである。

Есть же могила его в пустыни и до сего дне, ис-
ходить же от нея смрад зол. Се же бог показа на
наказанье князем Русьским, да аще сии еще сице
же створять, се слышавше, ту же казнь примуть;
но и болши сея, понеже ведая се, створить такоже
зло убийство. 7 бо мьстий прия Каин, убив Авеля,
а Ламех 70; понеже бе Каин не ведый мьщенья при-
яти от Бога, а Ламех ведый казнь, бывши на пра-
родителю его, створи убийство. Рече бо Ламех
к своим женам: мужа убих в вред мне, и уношу
в язву мне; темже, рече, 70 мьстий на мне, по-
неже, рече, ведая створих. Се Ламех уби два бра-
та Енохова, и поя себе жене ею; се же Святополк
новый Авимелех, иже ся бе родил от прелюбодеянья,
иже изби братью свою, сыны Гедеоны, тако и съ-
бысть.....

『ところで彼の墓は今日に至るまでも荒野の中にあり、其処か
らは悪しき臭気が発散している。これこそ、神がルシの公たちへ
の教えとして示し給うたものなのである。これを聞いて、もし、
なお同じことを為すものたちは、同じ罰を受けるであろう。否、
これよりもより大きな（罰を受けるであろう）。何となれば、このこ
とを知つていながら同じ悪しき殺人を為すものだからである。
カインはアヴエリを殺して七つの神罰を受けた。ところがラメフ
は七十の（神罰を受けたのである）。というのはカインは神から復しゆ
りを受けるべきことを知らなかつたのに、ラメフは自分の先祖が
受けた罰を知つていながら殺人をなしたからである。ラメフはお
のれの（二人の）妻に言つた。『我は我がいたでのために人を殺
し、しかして、我がきづのために少年を（殺した）。そのために、
我には七十の復しゆうが（来るであろう）。というのは、知りながら

(それを)おこなつたからである」と。(創世紀才四章23の後半~24
.....筆者註)。見よ、かくしてラメフはエノフの二人の兄
弟を殺したのである。しかしておのれに彼等二人の妻をとつた。
ところで、まさにスヴィヤトボルクは新しいアヴィメレフである。ア
ヴィメレフとは姦通により生まれた者で、おのれの兄弟たち、即ち
、ゲデオンの息子たちを殺したのである。この者もまたかくの如く
になつた』

6532(1024)年の項の記事を見るがよい。其処には兄ヤロス
ラフと弟ミスチスラフの争^レが描かれている。然も、弟ミスチスラフが
兄弟愛を心得て、なお、権力者としての協力への自覚をも持つて
いた微妙な心理と、且つまた、民衆が一步先に公としていたゞく
べき人に倫理的注文をつけた消息とが、戦争描写の面白さの中に
鮮かに織り込まれたのであつた。即ち、この年の項の書き出しの
文句は、民衆から出た倫理注文の記述にはじまる。キエフの王座
につくべき兄の『ヤロスラフがノヴゴロドにいたとき、ミスチスラフが
トムトロカニからキエフにやつて来た。しかしてキエフの人々は彼
を迎え入れなかつたので、彼は去つて、チエルニゴフの座についた
。その時、ヤロスラフはノヴゴロドにいたからである』
«Ярославу
суцю Новѣгородѣ, приде Мъстислав изъ Тьмутороканя Къеву,
и не пріяша его Къяне; онъ же шедъ сѣде на столѣ Черниго-
вѣ, Ярославу суцю Новѣгородѣ тогда.» 實は此処には公たちの
倫理による国家統一の念願が伏せられている。公たちの側ではな
くて、民衆や宗教人たちによる熱い念願であつたであろう。権力
闘争に明け暮れる支配層への不満と、あるべき姿への注文とが此
処には重ねられて描かれていた。しかもこの一節がその冒頭と終
末に同じ文句『ヤロスラフがノヴゴロドにいたとき』とあるのは明ら
かな加筆の跡を示すものである。記述はこの直後に、国を乱す
よう術師のスメダリにおける反乱に及び、再びまた兄ヤロスラフと
弟ミスチスラフとの争いに及んでいる。これも、加筆の結末だと考

えられる。兄弟両者が外国の傭兵を先頭に立て、戦う夜間の激戦と、傭兵の隊長ヤクンの英雄的な姿の描き方は、『過ぎし年月の物語』のドラマチズムの一つの頂点を形成している。単なる宗教的目的の記述からは生まれ得ない迫力である。

Ярослав посла за море по Варягы; и приде икун с варягы, и бе икун слеп, луда бе у него золотом исткани. И приде к Ярославу; иде Ярослав с Якуном на Мьстислава, Мьстислав же слышав виде противу има к миствену. Мьстислав же с печера исполчив дружину, и постави Север в чело противу Варягом, а сам ста с дружиною своею по крилома. И бывши ноци, бысть тма, молонья и гром и дождь. Рече Мьстислав дружине своей: "пойдем на не". И поиде Мьстислав и Ярослав противу себе, и сступиися чело Север с Варягы, и трудишася Варязи секуще Север, и посем наступи Мьстислав со дружиною своею, и нача сечи Варяги, и бысть сеча силна; яко посветяше молонья, блещашеться оружие, и бе гроза велика, и сеча силна и страшна. Видев же Ярослав, яко побежаем есть, побеже с Якуном, князем Варяжьским, и Икун ту отбеже луды златое; Ярослав же приде Новугороду, а Икун иде за море. Мьстислав же, с свет заутра, виде лежачие сечены от своих Север и Варягы Ярославле, и рече: "кто сему не рад? Се лежить Северянин, а се Варяг, а дружина своя цела".

『ヤロスラフはヴァリヤギ(人)を迎えに海の彼方へ使者をたてた。しかしてヴァリヤギたちと共にヤクンが来たつた。しかしてヤクンは盲目であつた。彼(の顔)には眼かくしが黄金で織られていた

しかして〔ヤクンは〕ヤロスラフのもとに来たつた。ヤロスラフはヤクンと共にミスチスラフに向つて進攻した。ところがミスチスラフは〔これを〕聞いて、二人に向つてリストヴエン(河)に出陣した。ところで、ミスチスラフは(昨)夕から親兵団を準備し、セヴエル(族)をヴァリヤギ(人)に対して先頭にたて、一方、自分はおのれの親兵団と共に両翼に布陣した。しかして、夜で、暗く、稲妻及び雷鳴及び雨があつた。ミスチスラフはおのれの親兵団に言つた。〃彼等を攻撃しよう〃と。しかしてミスチスラフとヤロスラフは互いに進み、セヴエル族の先頭がヴァリヤギと相会した。しかしてヴァリヤギ(人は)セヴエル族と戦いながら苦戦した。その後、ミスチスラフがおのれの親兵団をひきいて進撃をはじめ、ヴァリヤギ(人)を斬りはじめた。しかして激しい斬り合いがあつた。稲妻がひらめき、武器がかゝやき、しかして大きな雷鳴が(とどろき)、烈しく恐ろしい戦いが行われた。ヤロスラフは打ち負かされているのを見て、ヴァリヤギの公であるヤクンと共に逃げた。しかしてヤクンは其処から逃亡中に黄金の眼かくしを失つた。ところでヤロスラフはノヴゴロドにたどりつき、ヤクンは海の彼方に去つた。一方、ミスチスラフは翌朝早くに、おのれのセヴエル族の及びヤロスラフのヴァリヤギ人が斬られて倒れているのを見て、言つた。〃これを誰がうれしくないものか？ 此処にセヴエル人が、またこゝにヴァリヤギが倒れているのに、我が親兵団は無きつである〃と。

この様に『過ぎし年月の物語』には、戦記文学的に数段高い水準がこれらによつてもたらされた。ニコンの手によつて、文学的に非常に高められたこともさることながら、此処には注目すべき瞻立の特長がある。兄ヤロスラフの方が傭兵ヴァリヤギを集め、先に弟に戦いをしかけた。弟は同じく傭兵セヴエル族を以て、これを受けた。此処で傭兵同志の戦争が描かれ、ルシの兵員については一度もふれられない。むしろ、親兵団は無きつであつたと言わせている。如何にニコンがルシの内紛や仲間割れを嫌ひ、避けよ

うとしたかど此処には読み取られるであろう。然も、この兄弟の戦争をどれほどか苦々しく思つていた気持が、この傭兵同志の衝突という変つた膳立ての中に現れたと考えるべきであろう。

弟ミスチスラフに戦いをしかけた兄ヤロスラフは、迎えうたれて敗退しなければならなかつたという物語を、ニコンは自分たちの主張や倫理や注文に反するものとしてこの様に描いたのである。しかも、実はそれだけにとどまらなかつた。兄に打ち勝つた弟ミスチスラフは、決して兄の逃げたノヴゴロドにまで深追いはしなかつた。いや、むしろ、逆に、兄ヤロスラフに使者を送つて言わしめた日上有る。それこそ、年代記者が声を大きくして言いたかつた言葉なのである。即ちその口上とは、『おのれの(都)キエフ(の王座)に坐せ。汝は長兄なのである』〈сяди в своемъ Киевѣ, ты еси старейшей брат〉まさに、この正義こそ大書してほめられるべきものなのであつた。然るに、その正義の実現は不可能であつた。其処にこの年代記者の憤りと悲しみがあつた。実現を不可能たらしめているものが、他ならぬ仲間割れであり、いとうべき内紛であつた。年代記者はそれをこう書きとめた。『しかしヤロスラフはキエフに行くことができなかつた。和平を講じ合ひまでは』〈и не смяше Ярославъ ити в Киевѣ, дондеже смирится〉即ち、この口上における『行くことが出来なかつた』〈не смяше ити〉という *смяше* に注目しよう。この不完了過去〈*Имперфект*〉にこめられたもどかしさの気持は、そのまま実に年代記『過ぎし年月の物語』に加筆した原動力なのであつた。

6572(1064)年の記事に見られるように、『ロスチスラフは町から外へ退いた。彼を恐れたからではなくて、おのれの叔父に対して武器を取ることを欲しなかつたからである』〈Ростиславъ же отступи кромѣ из града, не убоивъся его, но не хотя противу стрывеви своему оружья взяти〉その様な精神と態度こそが、外敵と内紛のうれいから祖國を救う唯一の道であることを

述べたかつたのである。

— P —

ニコンによつて、『過ぎし年月の物語』は、宗教的なワクを完全にはずされた。宗教の世界から~~世界~~^{現実}の世界へ引き出され、物語や記録の世界から、それを通じての発言の世界へ連れ出された。政治及び軍事の権力者への容赦ない批判書へとその内容を変えた。ビザンチンを家元とする正教から、ロシアの現実に照して生まれ、作用する宗教へとその思想を変えたと言える。この様にして年代記の仕事は急速にその重みを増したのである。かくして、その重みを増した年代記の權威は、教会のワクを出てロシアの現実に一層深くその触手を動かしはじめる。6596(1088)年の項としてニコンの死が記録される頃から後の『過ぎし年月の物語』の記事は、この事情の上に立つて読み取られるべきものである。外敵を防ぐためにも、内紛をおさめて統一した国家を創りたいという悲願は、ますます熱を帯びて来る。そして、その悲願に背く公たちに対する取り扱い方は一層厳しさを増すのは当然であつた。外敵に対する強力な防衛や、遠征の成功を注文することも激しさを増したのである。そして、その立場から『過ぎし年月の物語』は、古い部分を時には、益々、それ向きに脚色加筆されたことである。勿論、その折の記者が単一人物であつたわけではない。むしろ、修道院全体の仕事であり、時には修道院を頂点とした文人たち全体の仕事であつた。

ニコン以後の記事については、だから更めて注意深い読み方が要求されるであろう。宗教の世界からニコンによつて世俗界へおどり出た『過ぎし年月の物語』は、外敵撃退と内紛停止・協力とに背く公たちの所業に対しては、益々厳しい取扱いをはじめめる。その典型的な記事が『過ぎし年月の物語』全体を通じての最大の

悪者スヴィヤトボルク公についての記事である。内紛による国家不統一と外敵による侵入によるおびえとが、この悪者スヴィヤトボルクの記述の前と中と後に、どれほどの空恐ろしい不吉な前兆として書きとられていることであろう。巨大な悪者が出現し、外敵がせまり、内紛はつづのるばかりである時代の、心ある者の不安と絶望と嘆きと、正義実現への待望とが十一世紀末から十二世紀初頭の記事には、数々の前兆という形で、いましめを含みつゝ書き取られている。例えば、6599(1091)年の記事の末尾には次の様な記録が残された。

В се же лето знаменье в солнци: яко погыбнути ему, и мало ся его сота, акы месяц бысть, в час 2 дне, месяца мая 21 день. В се же лето бысть Всеволоду ловы деющу зверинья за вышегородом, заметавшим тенета и кличаном кликнувшим, спаде превелик змий от небесе; ужасошася вси людье. В се же время земля стукну, яко мнзи слышаша. В се же лето волхв явися Ростове, иже вскоре погыбе.

『この同じ年太陽にしろしが(あつた)。即ち、太陽は消えようとし、その僅かゝ残り、あたかも月の如くであつた。五月二十一日午後二時のことであつた。この同じ年にフセヴオロドがウインエゴロドのこう外で野獣狩りをなし、(人々が)網を投げて叫びをあげた時に、天から、いと大きな蛇が落ちた。人々は総て恐怖した。この同じ時に、多くの人々が聞いたところによれば大地が(物に)衝突した(よりの音をたてた)。この同じ年にロストフによう術師が現れた。彼は間もなく薙びた』。

此処で、その記述に、月や日の指定の他に時刻の指定がおこなわれて、以前の記述とその詳細さに差異のあることに注目しておく。つゞく6600(1092)年の冒頭にも同じく不吉な前兆を示

す記録がある。

В лето 6600.

Предивно бысть Полотъске: в мечте ны бываше в ноши тутън, станяше по улици, яко человеци рипюще беси; аще кто вылезяше из хоромины, хотя видети, абъе уязвен будяше невидимо от бесов язвою, и с того умираху, и не смяху излазити из хором. Посем же начаша в дне являтися на коних, и не бе их видети самех, но конь их видети копыта; и тако уязвляху люди Полотъския и его область. Тем и человеци глаголаху: яко навъе бьуть Полочань. Се же знаменье поча быти от Дрютъска. В си же времена бысть знаменье в небеси: яко круг бысть посреде неба превелик. В се же лето ведро бяше, яко изгараше земля, и мнози борове възгаряхуся сами и болота; многа знаменья бываху по местом.....

6600 (1092)年.

ポロツクにおいて、非常に不思議なことがあつた。夜中に我々の幻覚の中で足音が起り、街通りを人間のようゝに悪魔たちがうめきながらかけ廻つた。もしも誰かゝ家からはい出して(それを)見ようとでもしたら、すぐさま悪魔たによつて、眼に見えないうちに傷を負わされ、(人々は)そのため(次々に)死んでいつたのである。しかして(人々は)家から外へは、よう這い出さなくなつていた。ところでこの後に(悪魔は)日中に馬に乗つて現れはじめ、しかして、彼等それ自身は眼に見られず、彼等の馬のひづめだけが見られたのである。かくして彼等はポロツク及びその領地の人々を傷つけていたのである。ために人々は次の様に言つていた。これは死者達がポロツクの人々を殺しているのだと。このしるしはドリ

ユチックから起りはじめたのである。この同じ頃に天にしるしが起つた。天の中央に非常に大きな輪ができたのである。この年に、ひでりがつよいて大地が焼け、多くの松柏林や沼が自から発火したほどであつた。多くのしるしが各所に現れつとけていた……』

そして6602(1094)年には、『いまだかつてルシの地には聞かれなかつた』ほどの『イナゴの大群が八月二十六日にルシの國に襲来して、あらゆる草と多くの穀物を喰らつた』〈придоша пружи на Русьскую землю, мѣсяца августа в 26, поѣдоша всяку траву и многа жита〉と書かれ、翌6603(1095)年にも『八月二十八日にイナゴが襲来して、大地をおおい、見るも恐ろしかつた。草及びキビを食らいながら北の國々へ進んで行つた』〈придоша пружи, мѣсяца августа 28, и покрыва землю, и бѣ видѣти страшно, идяху к полунощным странам, ядуша траву и проса.〉と記録される。つよいて6607(1099)年にも天に不思議なしるしが現れ、『この年の四月にガラジミルの上空にしるしが現れた。二つの輪があり、その中には太陽の如きものがあつて、五時まで続き、また夜中は、あたかも、三つの光の道の如きものが生じて、明け方まで続いた』〈в се же лето бысть знаменье над володимерем, мѣсяца априля: два круга а въ нею аки солнце, и до шестаго часа, а ночь аки три стязи свѣтль, оми до зорь〉(この一節のみはラヴレンチー年代記には書きとめられず、イパーチー年代記、フレブニツキー年代記にみとめられるものである……筆者註)。6610(1102)年の項にも次の様な天変が書きとめられている。

В то же лето бысть знаменье на небеси, мѣсяца генваря в 29 день, по 3 дни: аки пожарная заря от востока и уга и запада и севера, и бысть тако свет всю ночь, аки от луны полны светящся. В то же лето бысть знаменье в луне, мѣсяца февраля в

5 день. Того же месяца в 7 день бысть в солнци:
огородилося бяше солнце в три дуги, и быша дру-
гья дуги хребты к себе.

『この同じ年に天にしるしが三日間あつた。一月二十九日のこ
とである。東から、また南からも、西からも、北からも火事のように
空やけが(あり)、しかしてあたかも満月によつて輝く如き光
が終夜あつたのである。この同じ年に月の中にしるしがあつた。
二月の五日のことである。その同じ月の七日には太陽に(しるしが
あつた)。(即ち、)太陽が三つの弓形でかこわれていたのであり、
他の弓形はお互いに(その)背を(向け合つていた。)]

つゞいて翌6611(1103)年にはイナゴの襲来が記され、次の66
12(1104)年には、

В се же лето знаменье: стояше солнце в крузе, а посреде
круга крест, а посреде креста солнце, а вне круга обапомы
два солнца, а над солнцем кроме круга дуга, рогама на
север; такоже знаменье и в луне тем же образом, месяца
февраля в 4 и 5 и 6 день, в дне по 3 дни, а в ночь в луне
по 3 ночи.

『この同じ年、しるしが(あつた)。太陽が輪の中にあり、輪の
中央には十字架があり、十字架の中央には太陽があつた。しかし
て輪の外には両側に二つの太陽があり、太陽の上の輪の外には両
端を北に向けた弓形があつた。これと同じようなしるしが月の中
にも(現れた)。二月の四日と五日と六日のことである。昼は三日の
間、しかして夜には月の中に三晩にわたつて(現れた)。』

つゞいて6613(1105)年には『尾をもつた星が西方に現れ、し
かして一ヶ月間出ていた』<явися звезда с хвостомъ, на запа-
дѣ, и стоя мѣсяць>と記され、面白いことに翌6614(1106)
年には、多くの物語を語つたヤン<Ян>の死が報ぜられるのであ
る。

これらのしるしは、権力支配層である公の一族の内紛と外敵の侵入という二重の不幸に呼応する形で取りあげられていた。いましめであり警告であつた。例えば、6600(1092)年の記述では、しるしの出現を記した直後に、次の様な文章がつよいていた。『我等の罪』とは即ち内紛を主として指していたものであつたと解すべきであらう。

и рать велика бяше от Половецъ и отвсюду.....
..... В си же времена мнози человеци умираху различными недугы, яко глаголаху продающе корсты, яко продахом корсты от Филипова дне до мясопуста 7 тысячъ. Се же бысть за грехы наша, яко умножишася греси наши и неправды. Се же наведе на ны Бог, веля нам имети покаянье и вьстягнутиися от греха, и от зависти, и от прочих злых дел неприязни.

『しかしてボロヴェツのために大きな戦争が、しかも、至る所から起つていた.....この頃、多くの人々が種々の病気によつて死んでいつた。十字架の売り手たちがフィリップの日(旧ロシア曆十一月十四日.....筆者註)から肉食禁止日(謝肉祭前の日曜日.....筆者註)までの間に七千個も十字架を売つたと言つていたほどである。これは我等の罪の故である。神が我等に下し給うたのである。我々が悔悟し、罪から羨みからも反目の悪しき所業からも身を避け濟めよと命じ給うるのである』

天のしるしを實現するようになり、ボロヴェツは至るところに毎年侵入しては大きい戦いを起していつた。即ち6601(1093)年にスヴィヤトボルモのもとにボロヴェツの使者が和平の談合に来たが、その使者をとじこめたために、却つてロシア側から兵を進めて戦いが起る。その戦いは勿論ロシア側の大打北に終るのである。同年、トルチスクがボロヴェツによつて包圍され、ジエラニ河畔ではまたロシア

ア側が敗北する。6603(1093)年にも，6604(1094)にも，その後毎年ボロヴェツの来襲を報じない記事はない。にもかかわらず，ロシア側の公たちは，この外敵に当面してさえ内紛をやめなかつた。ボロヴェツを迎え打つスヴィヤトボルクは，智恵ある人々に独力による戦いをいましめられ，説き伏せられた形で，やつと弟ヴオロジメルに協力を頼む。ヴオロジメルはその弟ロスチスラフを迎えてスヴィヤトボルクに協力しようとする。三人は聖ミハイル教会に集つて相談するが，『彼等の間には紛争と争論が起つた』〈взяста межн собою распря и которы〉ほどであつた。敵とストウグナ河をはさんで相對した時でさえ，ボロヴェツと和を講じようとするヴオロジメルと河を渡ろうとするスヴィヤトボルクとは意見を異にした。結局，河を越えて戦つたために敗北するのである。敗れたスヴィヤトボルクは再びボロヴェツに戦いを独力でいどみジエラニ河畔で再び大敗する。協力のない内紛と不和のうちに無謀にも進められたスヴィヤトボルクの戦いを年代記者は実に苦々しく思つた。無謀なる戦いと敗戦のために苦しめられる民衆の側の悲惨なる姿を年代記者は『過ぎし年月の物語』の中に怒りをこめて書き込んだ。『過ぎし年月の物語』は始めて此処に至つて，王侯貴族，武人，高級僧以外に，庶民に焦点を合わせる記述を生み出すのである。記述の立場は此処で支配層から庶民層へと大きく移動する。

Створи бо ся плачь велик в земле нашей, опустеша села наша и города наши, быхом бегаючи пред врагы нашими..... лукавии сынове Измаилеви пожигаху села и гумна, и многы церкви запалиша огнем,..... города вси опустеша, села опустеша; преидем поля, идеже пасома беша стада конь, овця и волове, все тоще ноне видим, нивы поростыше зверем жилища быша..... Половци воеваша много..... и изнемогоша людье в граде

гладом, и предашася ратным; Половци же, приимше град, запалиша и огнем, люди разделиша и ведоша в веже к сердоболем своим и сродником своим. Много роду хрестьяньска стражюще: печелни, мучени, зимою оцепляеми, в алчи и в жахи и в беде опустневше лица, почерневше телесы: незнаемою стра-ною, языком испаленым, нази ходяще и боси, ноги имуще сбодены терньем. Со слезами отвечаваху друг к другу, глаголюще: "аз бех сего города", и другиа: "аз из сего села"; тако съупрашаются со слезами, род свой поведающе, и въздышюче, очи возводяще на небо к Вышнему, сведущему тайная.

.....

『我々の国には大いなる泣声が起り、我々の村々及び我々の町々は荒廢し、(我々は)我等の敵の前を逃走しなければならなかつた.....イスマイルの狡い子等が村々及び穀物置場を焼き、しかして多くの教会に火をかけた.....町々は総て廢墟と化し、村々は人氣がなくなつた。(かつては)馬や羊や牛の群が牧されていた野原を(我々が)通り行こうものなら(我々は)すべてこれらを今は空しいものとして見るのである。畑地は草に蔽われ、野獸のすみ家となり果てた.....ポロヴェツ人たちは多くを戦いとつた.....町の中では人々は飢えに弱り果てて敵軍に降つた。ところで、ポロヴェツ人は町を占領し、その町に火をかけて焼き、人々を分配して、おのれの家族及びおのれの一族のいる天幕へ連れて行つた。多くのキリスト教徒は受難したのである。悲嘆し、苦しめられ冬の寒さにかなしばりになり、飢えと渴きと不幸とで顔を茫然たらしめ、体を真黒にしていた。見知らぬ異国にあつて舌はたゞれ、はだかで歩かされ、はだしであつた。足はいばらで傷だらけにしていた。涙ながらに互いに答えて言

つていた。「我はこの町の出である」、また他の者は「我はこの村の出身者である」と、この様に涙ながらに尋ね合い、おのれの出生を語り、たぬいきをはき、神秘を知るいと高き神のいます天へ眼をあげていたのである』

この様な荒廃と不幸をもたらす外敵との戦いは6600(1092)年には、至る所に「отсюда」にあり、6601(1093)年には、ストウグナ河で、トルチエスクで、激しくおこなわれ、6602(1094)年にはチエルニゴフで、6603(1095)年にはベレヤスラヴリで、ユリエフで、6604(1096)年にはキエフのほとりとベレストヴオとベレヤスラヴリで、という具合に、全国の各所はボロヴェツの文字通りの餌食であつた。この不幸の中で『過ぎし年月の物語』は公たちの内紛不和の元兇としてスヴィヤトボルクという悪の巨像を書きとめるのである。そして、その巨像がおとす色濃い影の中に、嘆き深い人物たちの影像を深々と彫りあげたのである。即ち、『過ぎし年月の物語』全体を通じて、最大のドラマチズムをもつた記述が、こゝして生まれた。『過ぎし年月の物語』は此処に至つて、伝承や歴史や宗教物語の記録から、熱烈な文学作品へと変つたのであつた。

この迫力ある物語の記述は6601(1093)年の項より始まると見てよい。この年、『インジクトのオ一年に、ヤロスラフの子にしてヴオロジメルの孫になる大公フセヴォロドが四月の十三日に死去し、十四日に葬られた。それは、受難週(復活祭の前週……筆者註)の最中で……』あつた。ところが、フセヴォロド大公の息子ヴオロジメルは、実に正義の人として、我が身を犠牲にしても事の道理を通すべく、王座継承から身を引くのである。

Володимер же нача размышляти, река: "аще сяду на столе отца своего, то имам рать с Святополком взяти, яко есть стол преже от отца его был". И размыслив посла по Святополка Турову, а сам иде

Чернигову, а Ростислав Переяславлю. И минувшю Велику дни, прешедши праздней недели, в антипаскы, месяца априля в 24 день, приде Святополк Киеву; изидоша противу ему Кияне с поклоном, и прияша и с радостью; седе на столе отца своего и строя своего.

『ところでヴオロジメルは思案しはじめて言つた。『もしも（我が）おのれの父の王座に坐せば、スヴィヤトボルクと一戦交えなければならぬであろう。というのは、王座は以前には彼の父のものだつたからである』と。しかして、思案して、スヴィヤトボルクを迎えにトウロフに使者をたて、自からはチエルニゴフに、ロスチスラフはペレヤスラヴリにおもむいた。しかして、復活祭が過ぎ、復活祭週が過ぎて、アンチバスの日（復活祭後のオ一日曜日……筆者註）、即ち、四月二十四日にスヴィヤトボルクはキエフに来たつた。キエフの人々は礼をつくして彼を迎えに出で、喜びにあふれて彼を受け入れた。（スヴィヤトボルクは）おのれの父、及びおのれの伯父の王座に坐した』のであつた。

ところが、すぐにボロヴェツとの戦いがもちあがつて、スヴィヤトボルクは独力で出陣しようとする。『知恵ある人々』〈смыслени〉はこれをおしとよめて、自から王座を人に譲つたヴオロジメルに相談せよと言ひ。ヴオロジメルは弟ロスチスラフをも伴ひ来たり相談協力しようとする。『知恵ある人々』〈смыслени〉は再び三人の公を前にして忠告する。それほどに、内紛は、既に根が深かつたからであろう。『何故に汝等は相互の間に紛争を起しているのか？ 異教徒たちがルシの國を滅しているのに、相互の調整は後にせよ。今はただ異教徒に向いて進め。』〈почто вы распрямата межн собою ? а погани губять землю Русьскую ; последи ся уладита ; а нонѣ пондита противу поганым,〉そして、この言葉とその理念こそ、『過ぎし年月の物語』の最後の精神

であつた。そして、年代記者は、その考えに立つものを『知恵ある人々』〈смысленни〉とよんだのであつた。

さて、ストグナ河をはさんでポロヴェツと対陣した時、まとも、内紛は意見の分裂という形で現れる。ウオロジメルと、ヤン〈Ян〉と『知恵ある人々』〈смысленни〉は、河をはさんだ所で和を講じようとし、スヴィヤトボルクのひきいるキエフの人々は渡河して戦おうとする。明らかに、此処で年代記者の好意はスヴィヤトボルクから離れるのである。『知恵ある人々』〈смысленни〉の理念に対立する形で彼を描きはじめたからである。

『知恵ある人々』〈смысленни〉の意見を尊重しなかつたスヴィヤトボルクは河を渡つて進み、大敗を喫して、ロスチスラフ公は戦死する。ウオロジメルはチエルニゴフに引き返してしまふ。スヴィヤトボルクは数々の小ぜり合いをポロヴェツとやりながら翌年を迎える。ところが、ウオロジメル、オレグ、スヴィヤトボルクというロシアの公たちは一致協力して外敵に当るべきなのに、全く裏腹なことをするのである。互いに敵と結んで味方を倒そうとするのである。年代記者は怒りをこめて、6602(1094)年の項に次の様にしてしている。

В лето 6602.

Створи мир с Половце Святополк, и поя себе жену дщерь Тугорканю, князя Половецкаго. Том же лете приде Олег с Половци, из Тьмутороканя приде Чернигову, Володимер же затворися в граде, Олег же приде к граду и поже около града, и монастыре поже, Володимер же створи мир с Олгом, и иде из града на столе отень Переяславлю, а Олег вниде в град отца своего. Половци же начаша воевати около Чернигова, Олгови не взбранящю, бе бо сам повелед им воевати. Се уже третъее наведе

поганья на землю Русьскую; его же греха дабы и Бог простил, занеже много хрестьян изгублено бысть, а дружини полонени и расточени по землям.

〔6602(1094)年.

スヴイャトボルクはポロヴェツ人と和を結び、ポロヴェツの公トウコルカンの娘をおのれの妻として迎えた。この同じ年、オレグはポロヴェツ人と共に来つた。トムトロカニからチエルニゴフに来つたのである。ヴオロジメルは町の中にたてこもり、オレグは町に来襲して、町のこり外を焼き、修道院を焼いた。ヴオロジメルはオレグと和を請じ、町から出しておのれの父の、ベレヤスラヴリの王座についた。オレグはおのれの父の町に入つた。ところでポロヴェツはチエルニゴフの近こりを攻撃したがオレグは妨害しなかつた。というのは、(彼が)彼等(ポロヴェツ人)に攻撃するように命じておいたからなのである。これで彼がルシの國に異教徒をみちびいたのは三度目なのである。——彼の罪を神が許し給うように——。というのは、多くのキリスト教徒が(このために)滅ぼされ、またあるものは捕えられ、しかして、各國にまき散されたからである』

外敵の來襲に備えて一致するどころか、互いに、外敵と組んで、仲間を襲おうとする勢いは翌6603(1095)年に及ぶ。即ち、この年にはスヴイャトボルクとヴオロジメルとが組んでポロヴェツを攻めようとしてオレグを仲間に入れようとする。ところが、これを聞いたような顔をしてオレグは二人に協力しないのである。三人で攻撃に行くことを約束し出発しながら、オレグだけは別の途を進むのである。その罰として、オレグが保護していたイトラリの子を殺すか引き渡すかするように命ぜられる。ところが、この注文をさえオレグは聞かない。翌6604(1096)年になつて、オレグはスヴイャトボルク及びヴオロジメルから呼び出される。ところが、『オレグは不遜なる考えと偉張つた言葉を示しつゝ、かく答えた。『主教も、修道院長も、下民も我を裁くべきではない』

と、しかして悪しき助言者に聴従しておのれの（二人の）兄弟たちのもとへ行くことを欲しなかつた』《Олег же въспринимъ смыслъ буйи и словеса величава, рече сице : „несть мене льпо судити епископу, ли игуменом, ли смердом“ ; и не въсхотѣ ити к братома своима, послушавъ злыхъ съвѣтникъ 》
ためにオレグは二人に攻められ、チエルニゴフの町から逃げスタロドゥブに逃げ込み、三十三日間の包囲を受けて投降する。ともにキエフに集つて和を固めようという二人の提案を受け入れたように見せかけ、オレグは、ポロヴェツの再三の侵入のどさくさの内に、まぎれこみ、その約束を破つてスモレンスクに行き、戦士たちを集めてムロムのイジャスラフ公を攻撃するのである。イジャスラフは戦死し、勝利に酔つたオレグは、ロストフ、ベロオゼロ、スズダリ、を手中にして支配する。ところが今度はノヴゴロドからムスチスラフ公に攻められる。オレグはそのため今度はロストフ、スズダリ、ムロムへと逃げる。こゝでクリヤジマ河をはさんで両者の戦いが四日間おこなわれ、オレグは敗退する。

翌6605(1097)年には、ロシアの公たちの仲は、やゝ好転したかに見える。スヴィヤトボルク、ヴオロジメル、ダヴィド、ヴァシリコ、オレグたちがリュベツチに集つて、和講と協力を約束するからである。

ところが、もうその年に、その舌の根の乾かぬ内から、仲間割れが生ずる。ダヴィドが池の水に石を投げるやうなうわさをきくのである。ヴオロジメルがヴァシリコと申し合わせをして、スヴィヤトボルクと自分とはむかうであろうと考える。ダヴィドはスヴィヤトボルクをけしかけて、ヴァシリコとヴオロジメルを打たせようとする。ヴァシリコはたくみな計略に引つかかつて捕えられ、眼をつぶされて盲目にされる。これを聞いたヴオロジメルはヴァシリコのあだを打つべくスヴィヤトボルクを攻撃する。ヴオロジメルと行動を共にしたのは、ダヴィド、オレグであつた。フセヴォロド公の未亡人と府主教

ニコライの仲介によつて、一時は、流血はさけられた。

ところが今度は眼をつぶされたヴァシリコの領地をダヴィドが横取りしようとして、その弟ヴォロダリにさまたげられる。やむなくスヴィヤトボルクを中傷してその場を切り抜けるが、戻つて来た盲目のヴァシリコの弟ヴォロダリは、おのれの仇敵たちの復しゆりに立ち上る。一方、ダヴィドによつてヴァシリコ兄弟に向つて中傷されたスヴィヤトボルクは、腹を立て、ダヴィドを力づくで追放してしまふ。そして、ヴァシリコ兄弟をも滅ぼそうとして、ロジニヤ河に出撃し、今度は反対に二人のために破れて逃亡するのであつた。この後も公たちの仲間争いは永く続くが、以上の争いの中にあつて、特にスヴィヤトボルクがヴァシリコを打つて、その眼をつぶす悪者ぶりが、最も大きく人の印象にやきつく。反対に、眼をつぶされたヴァシリコの嘆きと悔悟とが人の胸を強くえぐるのである。それらの原文は既に先に引用しておいた。文学的物語としては、両眼をつぶされたヴァシリコの切々たる悔悟と、そのドラマチックな物語によつて、スヴィヤトボルクの姿が反対に憎悪を以て浮び上るのかも知れない。十一世紀末のロシアの公たちの最も鮮やかな映像定着であつたであらう。

キエフ・ペチエルスキー教父伝によれば、スヴィヤトボルクは人々に多くの強圧を加え、多くの財を取りあげ、そのことによつて、ロシアの人々を弱らせ、外敵の侵入が多かつたにもかゝらず、彼によつて内紛は助長されたという。

こゝで少し立ちどまつて考えて見る必要がある。ニコンが加筆・編集し終つたところから、このスヴィヤトボルクを悪者に仕立て、影りの深い記事を書いた者は一体誰であつたのか。誰であつたかという個人名の指定よりも、むしろ大切なのは、何故、そういう書き方をしたのか、そして、そう言う書き方をさせるように誰が何故仕向けたのかということであらう。嘗つてニコンが加筆・編集の折にヤンの父ヴィンヤタの物語る話を多く利用したであらうと

と述べたが、今度は、このニコンの後を書きつゞけ編集・加筆した人物に、多くのことを物語つて聞かせた者がいたことに注意しよう。即ち、『私はヤンから多くのことを聞き、それを年代記に書きつけた』という記事があつたのである（前記）。そこで、我々は再びヤン〈Ян〉の記事を詳細に『過ぎし年月の物語』の文章から調べてみよう。ヤンの名が始めて『過ぎし年月の物語』に現れるのは6579(1071)年の項であつた。その記事は嘗つて引用したように、ヤン自身の口から出た物語をニコンの後の編集加筆者が此処に織り込んだものにはちがいない。ペロオセル地方のよう術師退治の物語であつた。スヴィヤトスラフ〈Святослав〉公から派遣されたのである。そして、ヤンはスヴィヤトスラフ公の親兵団員として、キエフに住むようになった。そして、その後、6597(1089)年即ちニコンの死を報じた記事の直後の記事として先に引用した聖母教会の浄めの式が行われた文章によれば、『軍司令官職をキエフの千人頭ヤンが掌握していたとき』〈воеводство державлю Киевскыя тысяща Яневи〉とあるから、フセヴオロド公の時代にはヤンは千人頭の地位にまで昇つていたことになる。ところが、四年後の6601(1093)年の記事をもう一度思い出そう。

其処にはフセヴオロド公は『若い者たちの考えを愛しはじめ、彼等と相談をした。彼等(若い者たち)は、彼(公)をさしておのれの以前の親兵団に不満をいだかしはじめ、しかして、公の正義が人々に依わらなくせしめた……』〈и нача любити смыслъ уныхъ, съвѣтъ створя с ними; си же начаша заводити и негодовати дружины своя первыя, и людемъ не доходити княже правды〉とある。

この『以前の親兵団』〈дружина первая〉の中の一員がヤン自身であつたことは言うまでもないであろう。とすれば、既にもう彼はフセヴオロドの老年には発言の大きな力をもたなくなつてい

た。実力は『若い者』〈уные〉の手に移つてしまつていたということになる。そして、次のキエフの公スヴイャトボルク〈Святополк〉の時代には完全に政治権力の場からは遠ざけられてしまつていたと考えるべきである。其処に彼の不満があつた。そしてその不満は同時に、外敵を迎えて、且つ内紛をつゞける、公の一族に不満をもつた修道院の心ある人の気持にも通じ合つたであろう。時には相談し、時には意見を異にしつゝも外敵にあたるスヴイャトスラフたち同年輩の公たちの記事は、かくして、スヴイャトボルクの坐したキエフから始められるが、その都度、『知恵ある者たち』〈смыслени〉を聞いたとか聞かなかつたとかという言葉が出て来る。『知恵ある人々』とは即ち、当のヤン及び修道院の人たち（——年代記者自身——）のことであつたにちがいない。6601(1093)年の記事中、河をばさんでボロヴエツと対陣した時に、ウオロジメルが和睦しようと言ひ出すところがあつた。その提案に対して、『過ぎし年月の物語』は、『この助言提案に対して知恵ある人々、ヤン及び他のものたちは支持主張したが、キエフの人々は（それを）欲しなかつた』〈присяжы совбру сему смыслении мужи, Янь и прочии, Кіяне же не вс хотеша〉とあるのは、まさにこれを実証するものである。ヤンは当然『知恵あるもの』〈смыслений〉の一員として、年代記者に多くの物語を語り聞かせた。そして、年代記者も、その理念において当世の公たちに同じ不満をもつていた。ヤンと年代記者の主張は、外敵に対抗するに際して自重せよ、力を養え、仲間争いをとゞめよというにあつた。そして、それは、後年の『イーゴリ遠征物語』の主張とも一致するものであつた。『過ぎし年月の物語』には、このヤンと年代記者即ち『知恵ある者たち』〈смыслени〉の主張が幾度も書きとられ、然も多くは若い権力者には余り大した良い効果を奏しなかつた。例えば、その主張の言葉が密度高く繰り返し現れるのが6601(1093)年の次の様な記事である。

В се время поидоша Половци на Русьскую землю; слышавше, яко умерл есть Всеволод, послаша слы к Святополку о мире. Святополк же не сдумав с болшею дружиною отнею и строя своего, но съвет створи с пришедшими с ним, изъймав слы всажа и в истобьку; слышавше же се Половци, почаша воевати. И придоша Половци мнози, и оступиша Торцийский град. Святополк же пусти слы Половецьские, хотя мира; и не всхотеша Половци мира, и ступиша Половци воючи. Святополк же поча сбирати вое, хотя на не. И реша ему мужи смыслени: "не кушайся противу им, яко мало имаши вои". Он же рече: "имею отрок своих 800, иже могут противу им стати". Начаша же друзии несмыслени глаголати: "поиди, княже"; смыслени же глаголаху: "аще бы пристроил и 8 тысячь, не лихо то есть, наша земля оскудела есть от рати и от продажь; но послися к брату своему Володимеру, дабы ти помогл". Святополк же послушав их, посла к Володимер, дабы помогл ему; Володимер же собра вои свои, и посла по Ростислава брата своего Переяславлю, веля ему помагати Святополку. Володимеру же пришедшу Киеву, совокупистася у Святаго Михаила, и взяста межи собою распря и которы; и уладившася, целоваста крест межи собою. Половцем воющим по земли, и реша има мужи смыслени: "почто вы распря имата межи собою? А погании губять землю Русьскую; последи ся уладита, а ноне поидита поганым, либо с миром, либо ратью." Володимер хотяше мира, Святополк же хотяше рати;

.....

『この時、ポロヴェツ人たちがルシの国に向つて進攻した。フセヴォロドが死んだことを聞いて（ポロヴェツ人たちは）スヴィヤトボルクに和平についての使者を派遣した。ところでスヴィヤトボルクは父及び、父の伯父の長老親兵団とは合議せず、自分と共に（トウロフからキエフに）来たつたものたちと相談をして、（ポロヴェツ人の）使者たちを捕えて丸太小屋の中に押し込めた。ところで、このことをポロヴェツ人たちは聞いて戦いをはじめた。しかして多数のポロヴェツ人たちが来たり、トルチエスクの町を包圍した。そこでスヴィヤトボルクはポロヴェツ人の使者たちを放免した。平和を望んだからである。ところがポロヴェツ人たちは平和を望まなかつた。しかしてポロヴェツ人たちは戦いつゝ到来して来た。スヴィヤトボルクは彼等を迎えうつべく軍勢を集めはじめた。しかして彼に知恵ある人士たちは言つた。『彼等に抗することを試みるな。（汝は）軍勢を少ししか持つていないからである』と。ところが彼は言つた。『（我は）おのれの下級従士八百人をもつている。彼等は、彼等（ポロヴェツ人）に対して出動することができる』と。ところで他の知恵なき者たちは言いはじめた。『公よ、進め』と。知恵あるものたちは言つた。『もしも（汝が）彼等を八千人とゞのえるとすれば、それは悪いことではない。我等の国は戦争のために、また罰金のために窮乏しきつてゐる。おのれの兄弟ヴオロジメルのもとに使者をおくり、汝を援助せしめよ』と。スヴィヤトボルクは彼等の言うことを聞いて、ヴオロジメルに、自分を援助するよう、使者をおくつた。ところでヴオロジメルはおのれの軍勢を集め、しかしておのれの弟ロスチスラフを迎えにペレヤスラヴリへ使者をたて、彼にスヴィヤトボルクを援助するよう命じた。ところで、ヴオロジメルがキエフに来たとき（二人は）聖ミハイル（教会）に集つた。しかして（二人は）お互いの間に紛争と争論をもちあげた。しかして和解し、お互いに十字架に接ぶんした。ポロヴェツ人たちが國中を攻めていたときである。しかして知恵あるものたちは彼等（二人）に言つ

に、何故に汝等はお互いの間に紛争をおこしているのか？ 異教徒たちはルシの国を滅ぼしつゝあるのに、互いの話し合いは後廻しにせよ、今は異教徒に向つて進め、平和を以てか、或は戦いを以てかと、ヴオロジメルは平和を欲し、一方、スヴィヤトボルクは戦いを望んでいた。』

いかにも、『知恵ある人士たち』の⁽²¹⁾様には、物語るヤンも、それを書きとめる年代記者も一員として入つてゐるかの如き口ぶりである。そしてまた実際に、ヤンや年代記者のかゝげる内紛停止と相互協力と、國家統一の高い理念は、そのまゝ次の時代の（『イーゴリ遠征物語』の）理念に通ずるものなのであつた。ロシアの文化史の上で、もしも、現状批判を、これほど高い前向きの理念から厳しくおこなつたものがあるとなれば、それは、まさに『過ぎし年月の物語』の少くとも三度目のこの編集加筆を以て最初であるとしなければなるまい。これだけの厳しい批判を年代記者がおこなつた以上、その批判の矢表に立たされた権力者スヴィヤトボルクは、年代記者の所屬するキエフ・ペチエルスキー修道院を心よくは思わなかつたにちがいない。と同時に、既に、それほどまでに、この修道院は公たちに対する巨大な權威ある批判者になつていたとも考えられる。ついにその權威はスヴィヤトボルクの方から折れて出なければならぬほどにまで高まつたと思われる。裏から言えば乱世における公たちの權威の方が地に落ち、苦しむ人々の多くは、公の方にはなくて、修道院の方により多く心を寄せていたということになるのかも知れない。ともあれ、『過ぎし年月の物語』はその頃から、公たちに対する記述のおもむきを変更しはじめた。事實は、修道院の權威ある主張をみとめて、公たちが内紛をととめ、一致協力に向いはじめたからなのであろう。当然、悪者扱いしたスヴィヤトボルクに対する記述にも軟らかさと好意とが入つて来るし、天のきざし、或るしるしに対する不吉さ一点張りの記述もやわらいで来る。例えば、天のしるしは、見る側の人

間の在りようによつて、善にも悪にもとれるのだというような註釈がつきはじめるのである。即ち、6610(1102)年の記事には次の様な一節がある。

И сия видяще знаменья, благовернии человеци со въздыханьем моляхуся к Богу и со слезами, дабы Бог обратил знаменья си на добро: знаменья бо бывають ова на зло, ова ли на добро. На придущее лето вложи Бог мысль добру в Русьские князи, умыслиша дерзнути на Половце и поити в землю их, еже и бысть.

『信仰厚い人々はこれらのしるしを見る際に嘆息をまじえ涙を流して、神がこれらのしるしを良きことに向け給うように神に祈つていたのである。というのは、しるしは或るものは悪に向い、或るものは善に向うものなだからである。翌年には神は良き考えをロシアの公たちに吹き込み給うた。(ロシアの公たちは)ポロヴェツ人たちに対して勇氣にはやり、彼等の國に進攻することを合議したのである。しかして、そのことは実現した』

そして、翌6611(1103)年の項の冒頭にも、『過ぎし年月の物語』は『神がロシアの公たちスヴイャトボルクとヴオロジメルの心によき考えを吹き込み給うた』« Богъ вложн в сердце княземъ Рускымъ мысль благу, Святополку и Володимеру » と記述されるのは ~~6614(1106)年の項である~~。ヤンが実際に死んだ年よりも、数年以前の項からスヴイャトボルクに対する取扱いが軟化好転したこと、ヤン自身はもう九十才に近かつたこと、ロシアの公たちが修道院の權威に身をよせたこと、協力して外敵にあたりはじめたこと、そのために外敵に対して一時優位に立ち得たこと等々の一致は、また、『過ぎし年月の物語』が最終的に創り上げられようとする時期とも一致する。

ヤンの死を報じた6614(1106)年の次の年、即ち6615(1107)

年の頃には、既に、スヴィヤトボルクが修道院に頭を垂れ、修道院の權威にひれ伏し、修道院を心のより所とする記事が書き取られているのである。

Святополк же приде в Печерський монастирь, на заутреню, на Успенье святых Богородица, и братья целоваша и с радостью великою, яко врази наша побезени быша, молитвами святых Богородица и святого отца нашего Феодосия. Так бо обычай имевше Святополк: коли идяше на войну, или инамо, ноли поклонивься у гроба Феодосьева и молитву взем у игумена, ту сушаго, тоже идяше на путь свой.

『ところでスヴィヤトボルクはペチエルスキー修道院へ聖母昇天祭の朝勤行に来つた。しかして僧団は大いなる喜びを以て彼に口づけした。聖母と我々の聖なる父フエオドシイの祈りによつて我々の敵が打ちまかされるように。というのは、スヴィヤトボルクがこの様に習慣をもつていたからである。即ち、もしも戦争に、或は他の場所に行くような時には、フエオドシイの棺に礼拝し、その時にいる修道院長の祈りを受けて、おのれの道に出発したのであつた』

勿論、スヴィヤトボルクがペチエルスキー修道院を公家及び國家の公式最古寺院として認め、その權威によりかゝり、或は種々の行事や行動の正当化をこの修道院に求めていたことになる。そして、この修道院で引きつがれて記録されて来た年代記を是認し、年代記者の主張に近づき、そのことによつて、年代記に権力者の側からの權威づけをもおこなつたことにならう。それはまた、年代記者の筆先が、反政府的に走ることをくいとめたことにもなる。年代記はこの様にして次第に公の権力と教會の主張及び精神的權威を期せずして一致させていつた。この様な推移は數年にして固

まつたものの様である。6608(1100)年の頃からの記述では盛んに公たちの相互間の和解の記事が好意的に増えはじめるからである。そして、ラヴレンチー年代記と例えばイパーチー年代記とでは6618(1113)年の項からその記述を喰い違いさせてくる。即ち『過ぎし年月の物語』は、この年即ち6618(1113)年の頃に、この年の項までが書かれて最終的に完成したもののよう考えられる。その折に、冒頭に『これは、ルシの国がどこから出たか、誰がキエフにおいて先づはじめに治めはじめたか、そして、どこからルシの国が始まつたのかの(ペチエルスキー・フエオドシー修道院の修道僧の)年毎の物語である』〈Се повѣсти временныхъ лѣтъ (черноризца Федосьева монастыря Печерьскаго), откуда есть пошла Руская земля, кто в Киевѣ нача первѣе княжити и откуда Руская земля стала есть〉という前書きが書かれ、その記者が即ちネストル〈Нестор〉であつたと言われるのである。そして、ラヴレンチー年代記はその記述の最後に書き示されているように、6624(1116)年に聖ミハイル教会の修道院長〈игумен〉セリヴェストル〈Селивестръ〉がキエフの公ウオロジメルの際に再度書き直して、『過ぎし年月の物語』〈Повести временныхъ лет〉をとどめたのである。だから、1113年頃に、おそらくはネストル〈Нестор〉によつて書きあげられた形のまゝでの『過ぎし年月の物語』は、どの年代記の中にも原型のまゝで伝えられてはいないのである。例えばラヴレンチー年代記は、ネストルの数年後にセリヴェストルが書き直しているが、その署名に見られるように、彼は、ペチエルスキー修道院の所屬者ではなくて、自から書きつけたように聖ミハイル教会の修道院長であつた。そのために、ネストルの名前は容赦なく消し去つてしまつたものと思われる。ネストルの名前を『過ぎし年月の物語』の冒頭の前書きにとどめているのは、僅かにフレブ=コフの写本だけである。(『古代ロシア研究』才一号：P. 1. 参照)

そこで、ネストルが加筆したと思われる主要な部分を取りあげて考えてみなければならない。

ノヴゴロドオ一年代記と比べてみると、『過ぎし年月の物語』（ラヴレンチー、トロイツキー、イパーチー各年代記等に見られる）の冒頭の導入部分が全く異なることに直ちに気づくであろう。ノヴゴロドオ一年代記が年代を設定するのは6362(854)年で、この年をルシの国のはじまりとするが、この年代設定以前の導入部分は、どことして『過ぎし年月の物語』の導入部分に一致する個所はない。また年代を設定して後も少しの間はその記述法がノヴゴロドオ一年代記と『過ぎし年月の物語』とでは随分異なるのである。それは全く別個の見解からなされた大きな加筆であつたと思わなければならない。ちなみに、ノヴゴロドオ一年代記では、年代設定以前の導入部分は次の様に書かれている。

Временник, еже есть нарицается летописание князей и земля Руския, и како избра страну нашу на последнее время, и грады почаша бывати по местом, преже Новгородская волость и потом Киевская, и о поставлении Киева, како во имя назвася Киев.

Якоже древле царь Рим, назвася и во имя его город Рим; и паки Антиох, и бысть Антиохиа великаа; и паки Селевки, и бысть Селевкиа; и паки Александри, и бысть в имя его Александриа; и по многая места тако прозвани быша грады и имена царев тех и князей тех; тако ж и в нашей зван бысть град великим князем во имя Кия, его же нарицають тако перевозника бывша; иней же: ловы

деяше около города. И тако бо есть промысл божи, еже яве в последня: куда же древле погании жряху бесом на горах, ныне же паки туды святых церкви златьверния каменозданныя стоят, и монастыреве велицы поставлени быша, и черноризец в них исполнено бысть, безпрестани славяще бога в молитвах, в бдении, в посте и в слезах, их же ради молитв мир стоит. Аще бо к святым сым прибегнем, перквам, тем велику ползу примет души и телу. Мы же паки на последование возвратимся, глаголюще сие о начале Русьския земля и о князех, како откуду быша. Вас молю, стадо христово, с любовью приклоните уши ваши разумно: како быша древни князи и мужи их, и како отбараху Руския земле, и ины страны придаху под ся; теи бо князи не збираху многа имения, ни творимых вир, ни продаж вьскладаху люди; но оже будяше правая вира, а ту возмя, дааше дружине на оружье. А дружина его кормяхуся, воюще ины страны и быющесе и ркуще: "братие, потягнем по своем князе и по Руской земле"; глаголюще: "мало есть нам, княже, двусот гривен". Они бо не складаху на своя жены златых обручей, но кожаху жены их в сребряных; и расплодили были землю Русьскую. За наше насытоство навел Бог на ны поганья, а и скоты наши и села наша и имения за теми суть, а мы своих злых дел не останем. Пишет бо ся: богатество неправдою собираемо извеется. И паки: собирает, и не весть, кому собирает я. И паки: лучше малое праведнику, паче богатства грешных многа. Да отселе братия

моя возлюбленная, останемся от несытства своего, нь доволни будете уроки вашим, яко и Павел пишеть: емуже дань, то дань; ему урок, то урок; никому же насилья творяще, милостиною оцветуше, страннолюбием, в страсе божи и правовернии свое спасение слеваючи, да и zde добре поживем и тако вечней жизни причастьници будем. Си же таковая. Мы же от начала Рускы земля до сего лета и все по ряду известно да скажем, от Михаила цесаря до Александра и Исакья.

『(これは)公たち及びルシの国の年代記と言われている編年記である。いかに神が最後に我々の国を如何に選び給ひ、しかして町々が各地に、先づノヴゴロドの領地がしかしてその後キエフの領地が、いかにして在りはじめたか、しかしてキエフが建てられたことについて、キエフがいかにその名を呼ばれたかについての(編年記である)。

昔、皇帝リムの故に、その名にちなんでリムの町が呼ばれ、またアンチオフによつて、大アンチオヒアが、またセレフキによつてセレフキアが、また、アレクサンドリによつてアレクサンドリアがその名をえたのであつた。しかして多くの年の後にも、町々はその皇帝及びその公たちの名によつて呼び名をえたのである。それと同じように、我が国においてもまた、町が大公キーの名をえて呼ばれた。ところで彼が渡し守であつたとも(人々は)言つている。また他の者たちは町のちかくで狩獵をしていた(と言つている)。しかして、後の時代に起つたことは、まさしく神の御心なのである。即ち、昔、異教の人々が山の上で悪魔にいけにえを捧げていたその場所に今は石造りの、塔頂が黄金の、聖なる教会が立ち、偉大なる修道院が建てられ、しかしてその中には僧が満ち、たえまなく祈りの中で、終夜勤行で、精進で、涙ながらに、神をたゞえてい

るのである。彼等の祈りによつて平和がたもたれている。もしも聖なる教会にはせ参ずる者あらば、魂と体に大きな利益を受けるであらう。ところで我々は再び話のつゞきに戻つて、ルシの国のはじまりについて、公たちについては何処から来たかということについて物語ろう。キリストの羊群よ、汝らに（我は）願う。愛をこめて汝等の耳を賢くかたむけよ。昔の公たち及びその家臣たちが如何にあつたか、いかに（人々が）ルシの国が敵に対していたか、他の国々を平定したかということに。それらの公たちは多くの財を集めはしなかつた。殺人賠償金を取り立てず、人々に税をもかけなかつたのである。然し、正当なる罰金を求めるべきは取り、親兵団に武器代として与えていた。しかしてその親兵団は育てられ、他の国々を戦いとり、辛勞し、こう言つていたのであつた。『兄弟たちよ。おのれの公とルシの国のために貢献しよう』と。また次の様にも書かれている。不正によつて集められた富は四散すると。また、（富を）集めながら、それらを誰のために集めているのかを知らないと。また、多くの罪人たちの富よりも、正しき者の少い富がまさると。しかしてこのことよりして、我が愛する兄弟たちよ。おのれの食慾を離れよう。汝等の分際に満足せよ。バツエルも書いている。賈物を求める者には賈物を、税を受けるべきものには税を納めよ。（ロマ書；オ十三章；7・・・筆者註）誰に対しても強制をなさず、温情と巡礼好遇にみちよ。神のおそれと正しき信仰にあつて、おのれの救いを求めよ。この世にて正しく生きるものはあの世にて永遠の生命を受けるものになるう。かくの如くである。ところで我々はルシの国のはじめから今日の年まで、しかして総てを順番に詳しく物語ろう。ミハイル帝からアレクサンドル及びイサキまで。』

そして、ノヴゴロドオ一年代記は、すぐに年号を6362(854)年と設定してルシの国のはじめとし、キー、シチエク、ホリフの三人兄弟の話をはじめているのである。

この導入部分と、ルシの国の始まりを書き出す姿勢には、たとえば、町の呼び名が古い皇帝や公の名によつて起つた昔話として外国の地名や皇帝の名が出て来るとしてもたゞそれだけのことで決して、広い世界的・全人類的な態度はみとめられない。宗教的理念による倫理的主張と、それに根ざしたルシの国のことだけしか視野になかつたように思われる。全人類なり、全世界なりの中で、おのれのルシの国が如何なる図表に位置するのかという広い視野でのとらえ方をしようという構えはこの導入部分には全く見受けられない。おそらくは、ノヴゴロドオ一年代記が色濃く反映している『原初の集』がその様なものであつたからであろう。ところが、ネストルは、この導入部分を全く別の見地と全く別の目的と、全く別の構えとで以て、ほとんど独創的なものと入れ替へてしまつたように思われる。入れ替へただけではなくて、非常に詳しく永い記述を比処に織り込んだのである。それは一口にして言えば、全世界的な視野におけるルシの国の位置づけであつた。だから『過ぎし年月の物語』の大部の導入部分は決してルシの国の物語からは始まつていない。中世的世界観による世界史のはじまりから物語られはじめるのである。ノアの洪水の後にその三人の息子が国を分け、先づシムが手に入れた東の国の列挙がなされる。

Персида, Ватрь, тоже и до Индикия а долготу, и в ширину и до Нирокрия, якоже речи от въстока и до полуденья, и Сурия и Мидия по Ефрат реку, Вавилон, Кордуна, Асуряне, Мисопотамира, Аравия Старейшая, Алмаис, Инди, Аравия сильная, Кулии, Комагины, Фриникия вся.

『ベルシダ(ベルシア)、ウアトリ(バクトリヤ——ヘンドウクシの西部とアム・ダリア川の間)、長さではインジキイ(インド)まで、巾ではニロクリク(リノクリア)までにも及ぶ。言わば、東から南まで(すなわち)、スリア(シリア)もエフラト川(ユーフラテス川)までのミジア

(メディア)も、ウアヴィロン(バビロン)、コルドウナ(コルドウエナ——チフリス川の上中流)アスリヤネ(アツシリア人)、ミソボタミラ(メソボタミア)、いと古きアラビア、エルマイス(コーカサス山脈の東端地方か?)インジイ(インド)、強きアラビア、クリイ(シリア南部)、コマギヌイ(シリア北部)、フイニキア全土(フェニキア)。

ハムが手に入れた南の国々の列挙がこれにつづく。

Египет, Ефиопья, прилежащая ко Индом, другая Ефиопья, из нея же исходить река Ефиопская Чермна, текущи на вьсток, Фива, Ливия прилежащи до Киринаия, Мариния, Сурите, Ливуи другая, Нумидья, Масурия, Мавританья противу суши Гадире; сущим же ко востоком имать Киликию, Памфилию, Писидию, Мосию, Лукаонию, Фругию, Камалию, Ликию, Карию, Лудью, Масию другую, Троаду, Болиду, Вифунию, старую Фругию; и острова неки имать: Сарьдани, Крит, Купр, и реку Геону, воземую Нил.

『エニベト(エジプト)、インドに面したエフイヴオビア(インドより紅海に面したあたりまで)東へ流れているエフイオビア・チエルムナ河がそれから発している。もう一つのエフイオビア、フイヴア(ナイル川中流のエジプトの古都)、キリニア(キヌレナイカ)にまで接するリヴイア(リビア)、マリニア(マウレタニヤ)、スリテ(シドラ湾とガベス湾に接する地方)、他のリヴイ(リビア西部)、ヌミジア(ヌミディア)、マスリア(マウレタニアの東の地方)、ガジレに向つてあるマヴリタニア(マウレタニア)である。東に向つては、キリキア(小アジアでキプロスの対岸)、バムフィリア(パンフユリア)、ビシジア、モシヤ(ミュシヤ)、ルカオニヤ(リュカオニヤ)、フルギア、ガマリア、リキア、ガリア、ルジア、もう一つのマシヤ(大ミュシヤ)、トロアダ(トロイヤ)エオリダ(アイオリス)、古きフルギア(小フリユギア)を取ることになる。そして、他の島々をも取ることになる。すなわち、サルダニ(サルジニア島)、クリト(

クレタ島), タブル(キプロス島)ニル(ナイル川)と呼ばれるゲオナ川である。

最後のアフエトは北の国と西の国を取るのである。即ち、次才に自分の国の地名に近づきつゝ、次の様に書かれる。

Мидия, Альванья, Армения малая и великая, Кападокия, Фефлагони, Галат, Колхис, Боспори, Меоти, Дереви, Сармати, Тавриани, Скуфия, Франци, Макидонья, Далматия, Молоси, Фесалья, Локрия, Пеления, яже и Полопонис наречесе, Аркадия, Ипирония, Илюрик, Словене, Лухития, Аньдриакия, Оньдрейтиньская пучина; имать же и острова: Британию, Сицилию, Евю, Родока, Хиона, Лезвона Кофирана, Закуньфа, Кефалинья, Ифакину, Керькуру, часть Асийския страны, нарицаемую, Онию, реку Тигру, текущую межю Миды и Вавилоном; до Понетьского моря на польнощныя страны, Дунай, Дънестр, и Кавкаисинския горы, рекше Угорьски, и оттуде доже и до Днепра; и прочая реки: Десна, Припеть, Двина, Волхов, Волъга, яже идетъ на восток на часть Симову.

『ミジア(イラン), アリヴァニア(アルバニヤ), 大小のアルメニヤ(東西アルメニア), カパドキア, フェフラゴニ(バフラゴニア), ガラド(ガラティア), コルヒス(黒海東岸), ヴオスポリ(バンテイカパイオン), メオチ(アゾフ海東岸), ジエレヴイ, サルマチ(サルマティア), タヴリアニ(クリミヤ), スクフイア(スキティア), フラツイ(エーゲ海北岸), マキドニア(マケドニア), ダルマチヤ, モロシ(エベロイス), フェサア(テッサリア), ロクリア, ポロボニスとも呼ばれるベレニア, アルカジア, イピロニア(エピルス), イリユリク(アドリア海東岸), スロヴェネ(スラヴ人), ルヒチア(?), アニドリア(アドリア), オニドレアチン海(マド

リア海)である。また、次の島々をも持つことになる。ブリタニア、シキリア(シチリア)、エヴイア(エウボイア)、ロドカ(ドロス)、ヒオナ(キオス)、レスヴオナ(レスボズ)、コフィラナ(キユテラ)、ザクニファ(ザキコントス)、ケフアリア(ケフアレニア)、イフアキナ(イタカ)、ケリクラ(コルキユラ)、アジア(アジア)の地域のオニア(イオニア)と呼ばれる部分、ミド(ユーフラテス川の分流メデイア)とヴァウイロンの間を流れているチグラ川。ポネチ海(黒海)に至る北の国々には、ドウナイ、ドネストル、およびカフカイン山脈(カルパチヤ山脈)つまりウゴリ(山脈)、そして、そこからずつとドニエプルまで。そして他の川も、すなわち、ジエスナ、ブリベチ、ドヴィナ、ヴォルホフ、東方シムの部分へ流れているヴォルガも。

この様にしてロシア(ルシ)の国と民族に話を近づけて来る。勿論、この記述は『古代ロシア研究』才三号; p. 72~ p. 78 に示されたように、明らかにハマルトルスの年代記を台本にしたのであつた。では、何故、ネストルが、こんなことを『過ぎし年月の物語』の導入部分に書き込んだのであろう。それ以前の古い年代記(僅かにノヴゴロド才一年代記にそれらしい影があるだけで、現在には伝えられていない)には、全く、自国及び自国民族の位置づけなどなかつたのである。明らかにネストルは自国の『物語』を、その物語だけ、自国内だけ、或は宗教的範囲内だけ、では見つめようとしなかつた。もつと視野を広げて全世界的な立場からこれを眺め、位置づけようとしたからに他ならない。だから、『過ぎし年月の物語』に初めてルシ<Русь>という民族名が出現する際にも、ネストルはアフエトの種族の内の一つとしてヴァリヤジ<Варязи>、スヴェイ<Свен>、ウルマネ<Урмане>、ゴート<Готъ>としてルシ<Русь>と五番目に書きならべ、その後になお八個の民族名を加え、且つ、その他のものたちと並べ終るのである。あくまでも、多くのものの中の単なる一つに過ぎないという立場を守り、決して、ルシを特別扱いしない所から『過ぎし年月の物語』を始めようとして

いる。

この様にして、当時の民族を地理的に配置し、自国民族ルシの位置づけを終つた後に、ネストルは、此處でも直ちにルシの歴史に入ることをなさず、再び、世界的な視野において、全人類の歴史——即ちノアの息子たちの話に立ちもどつて、語りはじめるのである。そして、その全人類的・世界的な歴史の一こまとしての〔(ルシ)→(スラヴ)→(ボリヤネ)→(スロヴエネ)という〕自国民族の歴史の糸口にたどりつくのである。あくまでも、多くの物の内の一つにすぎないことを強調しているかのようであり、また、ビザンチンだけが唯一無二の文明大国ではないことを示そうとするかのようにもうかどえる。即ち旧約聖書から素材をとりつゝ一方、広い地理的説明を加えながら、次の様に書いている。

Сим же, Хам, и Афет, разделивше землю, жребьи метавше не преступати никомуже в жребий братень, живяху кождо в своей части. Бысть язык един, и умножившемся человеком на земли, помыслиша создати столп до небес, в дни Нектана и Фалека; и собращася на месте Сенар поли здати столп до небес и град около его Вавилон, и создаша столп за 40 лет, несовершен бысть. И сниде Господь Бог видети град и столп, и рече Господь: се род един и язык един. И съмеси Бог языки, и раздели на 70 и 2 языка, и разсея по всей земли. По размешеньи же язык, Бог ветром великим разруши столп; и есть останок его промежю Асура и Вавилона, и есть в высоту и в широту локот 5433, и в лета многа храним останок. По разрушеньи же столпа и по разделеньи язык, прияша сынове Симови вѣсточныя страны, а Хамови сынове

полуденныя страны, Афетови же приша запад и
полунощныя страны. От сих же 10 и 2 языку бысть,
язык Словенск от племени Афетова, Норци, еже
суть Словене. По мнозех же временех сели суть
Словени по Дунаеву, где есть ныне Угорьска зем-
ля и Болгарьска. От тех Словен разидоша по зем-
ле и прозвашася имени своими, где седше на кото-
ром месте; яко пришедше седоша на реце имянем
Морава и прозвашася Морава, а друзии Чеси наре-
кошася; а се ти же Словени Хрвате Белии, и Хор-
утане. Волхом бо нашедшем на Словени на дунайския,
седшем в них и насиляшем им, Словени же ови при-
шедше седоша на Висле и прозвашася Ляхове, а от
тех ляхов прозвашася Поляне, ляхове друзии Лути-
чи, ини Назовшане, ини Поморяне. Также и ти
Словене пришедше и седоша по Днепру, и нареко-
шася Поляне, а друзии древляне, зане седоша в
лесех; а друзии седоша межю Припетью и Двиною,
и нарекошася Дреговици; инии седоша на двине и
нарекошася Полочане, речки ради, яже втечеть в
двину, имянем Полота, от сея прозвашася Полочане,
Словени же седоша около езеря Илмеря, прозвашася
своим имянем, и сделаша град, и нарекоша и Новь-
город; а друзии седоша по десне, и по Семи, по
Суле, и нарекошася Себер. Тако разидеся Словень-
ский язык; темже и грамста прозвася словеньская.
Поляном же жившим особе горам сим, бе путь из
Варяг в Греки; и из Грек по Днепру, и верх Днепра
волок до Ловоти, по Ловоти внити в Илмерь озеро
великое, из него же сзера потечеть Волхов и въ-

течь в озеро великое Нево, того озера видеть устье в море Варяжское, и по тому морю ити до Рима, а от Рима прити по тому же морю ко Царю-городу, а от Царягорода прити в Понт море, в не же втечь Днепр река. Днепр бо потече из Оковьскаго леса, и потечеть на полдне; а Двина из того же леса потечеть, а идеть на полуношь, и видеть в море Варяжское; из того же леса потече Волга на вѣсток, и втечь семьдесят жерел в море Хвалисьское. Темже и из Руси может ити в Болгарыи в Хвалисы, на вѣсток дойти в хребий Симов; а по Двине в Варяги, из Варяг до Рима, от Рима до племени Хамова. А Днепр втечь в Понетское море жерелом, еже море словеть Русское, по нему учил святыи Ондрей брат Петров. Якоже рече, Ондрей учашю в Синопии и пришедшю ему в Корсунь, увиде, яко из Корсуны близъ устье Днепрское, вѣсхоте поити в Рим и приде в устье Днепрское; оттоле поиде по Днепру горе, и по приключашю приде и ста под горами на березе. Заутра вѣстав и рече к сущим с ним учеником: "видите ли горы сия? яко на сих горах возсияеть благодать Божья, имать град велик быти, и церкви многи Бог въздвигнути имам". Вѣшед на горы сия, благослови я, постави крест, и помоливься Богу, и сълез с горы сея, идеже послеже бысть Киев, и поиде по Днепру горе. И приде в Словени, идеже ныне Новьгород; и виде ту люди сущая, како есть обычай им, и како ся мьють, хвоцюся, и удивися им. Иде в Варяги и приде в Рим, исповеда, елико

науци и елико виде, и рече им: "дивно видех Словенскую землю, идучи ми семо видех бани древены, и пережгутъ е рамяно, совлокуться и будутъ нази, и облекутся квасом усияным, и возмутъ на ся прутье младое, бьются сами и того ся добьютъ, егда влезутъ ли живи, и облекутся водою студеною, тако оживуть; и то вторять по вся дни немучими никимъже, но сами ся мучать, и то творять не мовенья себе, а мученья". Ты слышаще дивляхуся; Онъдрей же быв в Риме, приде в Синопию.

この文章のうちで、オンドレイ《Онъдрей》がキエフの地に当る所で古くキリスト教の布教をしていたという物語は『過ぎし年月の物語』のうちで、はじめての宗教関係の題材であるが、これとても、民間か或は教会人の深くに埋もれていて、『原初の集』には書かれていなかつたものを此処に組み入れたのであろう。そのため、後々の記述との間に幾つかの前記したような矛盾が起つたものと思われる。それよりも、ネストルがこれを書き入れた頃の時代風潮が一つの主張のようになって、にじみ出て来た文句が此処には見出される。それは、公たちの内紛をいましめようとする事、祖国統一の熱望をのべることであつた。その気持が自然のうちに、ノアの三人の息子が仲良く暮していたという記述に現れたのであろう。上の引用文及び下の日本語訳文に下線をほどこした部分が即ちそれである。

『シムは、そしてハムも、アフエトも、土地を分けて、兄弟の分前は誰にもふみ込むべきではないとして、サイを投げ、それぞれ自分の部分に住んでいた。言葉は一つであつた。そして、地上に人々が増えた時、ネクタンとフアレクの時代に、塔を天に至るまで建てようと考えた。そして、塔を天に至るまで建て、そしてそのまわりにサアヴィロンの町を建てるべく、セルナの野に共に集つ

た。そして四十年にわたつて塔を建てた。できあがらなかつた。そして主なる神が町と塔を見るべく天降り給うた。しかして神は言い給うた。「見よ。民は一つであり、言葉は一つである」と。しかして神は言葉をかき乱し給うた。しかして七十と二の民族に分け給うた。全土にまき散らし給うた。言葉のかく乱の後に、神は大いなる風をもつて塔を破壊し給うた。そしてその残がいはいアシユル(アツツリア)とヴァウイロンとの間にある。しかして高さ及び広さにおいて5433ローコチ(ヒジから中指の先までがローコチ)ある。しかして多年の間、残がいはい保たれた。塔の破壊の後、そして言葉のかく乱の後に、シムの息子たちは東の諸国を取つた。ところでハムの息子たちは南の諸国を、アフエトのは西および北の諸国を取つた。これらの七十と二の民族のうちには、アフエトの種族から出たスロヴネの民族、すなわちノルツイがあつて、それはスロヴエネであつた。(この一節、『古代ロシア研究』才一号; p. 18参照)。多くの年月の後、ドゥナイ(河)に沿つてスロヴエネが住んできた。そこには現在ウゴル(ハンガリー)とボルガル(ブルガリア)の國がある。それらのスロヴエネから、(人々は)地上にひろがり、住んでいた場所を自分の名として呼ばれた。すなわち、たとえばモラヴァという名の川のほとりに来たり住んだ(人々は)モラヴァと呼ばれた。ところで他の(ものたちは)、チエヒ(チエコ)と名づけられた。ところで、さて、白いフロヴァチエ、セレビも、ホルタネも、同じスロヴエネ(人)である。というのは、ヴォルフヴァがドゥナイ(河)のスロヴエネを攻撃し、彼らの間に住み、彼らを迫害したのでスロヴエネ人たちは、あるものはヴィストラ(河)のほとりに来たり住み、リヤホヴエと呼ばれた。ところで、これらのリヤホヴエの内(あるものは)ポリヤネと呼ばれた。他のリヤホヴエはルチツチ、別のものはマゾフシヤネ; また別のものはポリヤネと(呼ばれた)。同様にこれらのスロヴエネも、ドネブル(河)の流域に来たり、そして住んだ。そして、ポリヤネと呼ばれた。ところが他の(ものたちは)ドレヴリヤネと(呼

ばれた)。というのは、森の中に住んだからである。ところで、他のものは、プリベチ(河)とドヴィナ(河)との間に住んだ。そしてドレゴヴィチと名づけられた。別のものたちはドヴィナ(河)のほとりに住んだ。そしてポロチヤネと名づけられた。ドヴィナに流れ込むポロタという名の小川のためである。その川からポロチヤネと呼ばれたのである。スロヴェネはまた、イリメリ湖の周辺に住み、その名で呼ばれた。しかして町を造つた。そして、それをノヴゴロドと名づけた。ところで他のものは、ジエスナ(河)の流域に住み、また、セミ(河)、スラ(河)の流域にも(住み)、セウエルと名づけられた。かくして、スロヴェネの民族が別れた。それによつて文字もスロヴェネの(文字)と呼ばれた。これらの山々(ウゴル即ちカルパチヤ山脈)に別々にポリヤネが住んでいたところ、ウアリヤギからグレキへの道があつた。そしてグレキからドネブルによつて、そしてドネブルの上流はロヴオチまでの連水陸路がある。ロヴオチによつて大いなる湖イルメリへ入る。その同じ湖からヴォルホフが流れ出し、そして大いなる湖ネヴオ(ラドガ湖)へ流れ込んでいる。その湖の出口(ネヴア河)がウアリヤギ海へ入り、そして海によつてリム(ローマ)まで来た。ところが、リムからその同じ海によつて、ツアリゴロド(コンスタンチノーボル)まで至る。ところが、ツアリゴロドからポンド海に至るその海へはドネブル河が流れ込んでいる。というのは、ドネブルは、オコフスキ森林から流れ出し、南の方へ流れ出ているからである。ところが、ドヴィナ(河)は、その同じ森林から流れ出しており、ところで北の方へ行きウアリヤギ海へ入つている。その同じ森林からヴォルガ(河)が東の方へ流れ出した。そしてフヴァリス海へ七十の河口となつて流れ込んでいる。この様にしてルンからボルガルおよびフヴァリスへ行き、東の方シムの領域にまで達し得る。ところでドヴィナによつてはウアリヤギへ、ウアリヤギからリムまで、リムからハムの種族まで(行くことができる。)ところでドネブルはボネチ海(ポントス海、黒海)へ河口となつて流れ込ん

でいる。この海はルシ（の海）と言われ、その海のほとりで、ベトル（ベテロ）の兄弟聖オニドレイが布教していた。（人々が）言つた所によれば、シノビアにおいてオニドレイが布教し、そして彼がコルスニへやつて来たとき、コルスニから近くにドネブルの河口があることを見てとつた。リムへ出かけようという望みをおこし、そしてドネブルの河口へ到着した。そこから、ドネブルによつて上流へ出かけ、そして、たまたま、山々のふもとの岸に来たり、そして、とどまつた。翌朝、起きて、彼と共にいる弟子たちに言つた。「これらの山々を見るか？ これらの山々の上に神の恩ちようが輝いているのを。おおいなる町が起り、そして多くの教会を神が建立するであろう」と。これらの山々に登り、それらを祝福し、十字架を建て、そして神に向つてしばし祈つた。そこに後にキエフが起つた。（彼は）この山から下り、そしてドネブルによつて上流へ出かけた。そしてスロヴェネに着いた。そこには今ノヴゴロドがある。そして、そこにいる人々を見た。彼らのならわしがいかなるものであるか、そして、いかに身体を洗い身をたゞくかを（見た）。そして彼らにおどろいた。（彼は）ヴァリヤギへ行き、リムに着いた。どれほど説教をし、どれほど見たかを語り、そして彼等に言つた。「スロヴェネの地を見ておどろいた。私がこちらへ来る途中で木の風呂を見た。そして（人々は）過度にそれをもやした。服をぬぎ裸になると、なめしクロスを我が身にふりかけた。そして若い枝を我が身にとりあげ、自分で我が身を打ち、そして生きてはい出せるかどうかのところまで我が身を打ちすえ、そしてつめたい水を浴び、かくして生気づくのである。そして、それを毎日行つたのである。誰によつて苦しめられるのでもなく自分自身を自分で苦しめるのである。そして、それは自分に、入浴しているのではなくて、苦業をしているのである」と。それらを聞いて（人々は）おどろいたものである。オニドレイはリムにしばらくいて、シノビアへ到着した」。

この様に、ネストルは、アフエトに属した北及び西の諸国をとりわけ詳しく述べ、各民族の中におけるルシの位置づけに進もうとするのである。ルシと呼ばれる以前のスラヴ族の地名的な呼び名が詳しく書き取られているのである。そして、続いてネストルは地理的説明に移った。ルシの国と他の諸国との交易路を詳しく示して、ついに当時の世界を一周したのである。一周することによつて、彼はルシの国が世界の一部であり、且つ、自分たちの生活圏が世界に通じていることを示した。この様に世界的拡がりによる下地を先づ『過ぎし年月の物語』の冒頭に書き加えてから、ネストルは、初めて、おのれの民族と国家との古い建国的説話に移るのである。即ち、それは、キー〈Кий〉とシチエク〈Щек〉とホリフ〈Хорив〉の三人兄弟及びその妹ルイベジ〈Лыбедь〉の物語であつた。その物語を、ネストル以前の年代記はルシの国の始まりだとして、例えば、ノヴゴロドオ一年代記は、わざわざこの説話を以て、6362(854)年と年号を設定し、しかも『ルシの国のはじまり』〈Начало земли Рускои〉という見出しまでつけていた。ところが、ネストルは、この古い説話に年号など設けることなく、単に多くの民族の内の一つの民族の古い物語としてしか取り扱わないのである。各地にちらばつているスラヴ民族の一つの、しかも、キエフの町にまつわる単なる説話に過ぎないことをネストルは充分知つていた。だから、彼は、むしろ、その話に何気なく触れただけで、むしろ、彼の筆の勢いは別の方向を向いていた。多くは各地の地名によつて呼ばれたロシアの種族の古い相互関係を續いて書くことの方が彼には重要であつた。具体的な生活の様式、法やおきての古い形をネストルは追求するのである。或は古いロシアの先祖たちが接していた隣接諸民族との関係にふれるのである。ノヴゴロドオ一年代記がキーの物語の直後にルシのギリシア遠征の物語を書きつけるのとは大きな相違である。ノヴゴロドオ一年代記のよりに、個人名のないルシの連中がグレキに遠征したというよ

物語を『過ぎし年月の物語』は書くことなく、自分たち同族の古い配置図とそれぞれの暮らし向きの様相を書き取るのである。此処でロシアの文献は始めて詳しい昔の民族図を展開するのである。

И по сих братьи держати почаша род их княженъе в Полях; в Деревлях свое, а Дреговичи свое, а Словени свое на Новгороде, а другое на Полоте, иже Полочане. От них же Кривичи, иже седять на-верх Волги, и наверх Двины и наверх Днепра, их же град есть Смоленск; туда бо седять Кривичи, таже Север от них. На Белеозере седять Весь, а на Ростовском озере Меря, а на Клищине озере Меря же; по Оце реце, где потече в Волгу, Мурома язык свой, и Черемиси свой язык, Морьдва свой язык. Се бо токмо Слевенск язык в Руси: Поляне, Деревляне, Ноугородьци, Полочане, Дреговичи, Север, Бухане, зане седоша по Бугу, послеже Вельняне. А се суть инии языци, иже дань даютъ Руси: Чюдъ, Меря, Весь, Муром, Черемись, Морьдва, Пермь, Печера, Ямь, Литва, Зимигола, Корсь, Норова, Либь; си суть свой язык имуще, от колена Афетова, иже живутъ в странах полуношных.

『しかし、これらの兄弟たちの後に彼らの氏族がポリヤネの中で統治権をもちはじめた。ジエレグリヤネにおいては、それ自からの、またドレゴヴィチたちはそれ自からの、スロヴエニはノウゴロドにおいて自からの（統治権をもつた）。ところで他の（統治権）がポロタのほとりにあつた。そして彼らはポロチャネであつた。彼等からクリヴィチが出た。彼らはヴォルガの上流およびドヴィナの上流、およびドネブルの上流に住んでいた。彼等の町はスモレンスクである。

つまり、そこへはクリヴィチが住み、彼らから後のセヴェルが出た。ペロオゼロのほとりにはヴェシが、ところでロストフ湖のほとりにはメリアが、また、クレシチノ湖のほとりには同じくメリアがいる。ヴォルガに流れるオカ河に沿つてムロマが自分の言葉を（もち）、チエレミシもまた自分の言葉を（もち）、モルドヴァが自分の言葉を（もつている）。というのは、たゞこれだけがルンにおけるスロヴェネの言葉を（もつているのである）——ポリヤネ、シエレウリヤネ、ノヴゴロド人、ポロチャネ、ドレゴヴィチ、セヴェル、ブジヤネ。なるとなれば彼らはブグに沿つて住んでいたから、後に（彼らは）ヴェルイニヤネであつた。ところで、これらは他の種族である。彼らはルンに貢物をさへげている——チュシ、メリア、ヴェシ、ムロマ、チエレミシ、モルドヴァ、ベルミ、ベチエラ、ヤミ、リトヴァ、ジミゴラ、コルシ、ノヴァリビ。これらは自分の言葉をもつている。（彼らは）アフエトの子孫から出たもので、北方の国ぐくに住んでいる』

この様にルンとルンに最も近い関係にあつた種族の名を地理的に書き込み、つゞいて、次にこの地を攻めた多くの民族の往来を書きしめるのである。歴史的叙述とも言えよう。ネストルが主として当時の古い伝承によつて加筆したものであることは、その内容から明らかであると思われる。ちなみに、オブリの話は勿論、これに相当すると思われる個所はノヴゴロドオ一年代記には全くない。

Дунай, придоша от Скуф, рекше от Козар, рекомии Болгаре, седоша по Дунаеви, населници Словеном быша. Посем придоша Угри Белии, наследиша землю Словеньску; си бо Угри почаша быти Ираклии цари, иже находиша на Хоздроя царя Перьскаго. В си же времена быша и Обри, ходиша на Ираклия царя и

мало его не яша; си же Обре воеваху на Словенех и примучиша Дулебы, сушая Словены, и насилье творяху женам Дулебским: аще поехати будяше Обрину, не дадыше въпрячи коня, ни вола, но веляше въпрячи 3 ли, 4 ли, 5 ли жен в телегу и повезти Обьрена; тако мучаху Делубы. Быша бо Обьре телом велици и умом горди, и Бог потреби я, помроща вси, и не остана ни един Обьрин; есть притыча в Руси и до сего дне: погибоша аки Обре. Их же несть племени, ни наследька. По сих же придоша Печенези; паки идоша Угри Чернии мимо Киев, послезе при Олзе.

『(我々が)既に述べたように、スロヴエネの民族がドウナイのほとりに住んでいたとき、スクフイ(スキタイ)から、すなわちコザレからボルガレと言われるものがやつて来てドウナイに沿つて住んだ。スロヴエネに対する征服者であつた。その後白いウグリが来て、スロヴエネの土地を受けついで。なんとなれば、これらのウグリはイラクリイ皇帝(ヘラクレイオス)のときに現れたのである。彼はベルシアのホズドロイ(ホスロエ)皇帝を攻撃した。この時代に、また、オブリも現われ、イラクリイ皇帝を攻撃し、彼をすんでのところで捕えるところであつた。これらのオブリはスロヴエネたちに対して戦いを(しばしば)いどみ、スロヴエネであるドレブイを苦しめた。そしてドレブイの女たちに暴行を加えた。もしも(一人の)オブリにとつて乗つて出かけることが必要であれば、馬も牛もつなぐことを許さず、三人なり、四人なり、五人なりの女を馬車につないでオブリを選ぶように命じたのである。かくの如く、ドレブイを(彼らは)苦しめたのである。オブレは体が大きく、心がたけだけしかつたので、神が彼らをほろほし給うた。ことごとく死に、一人のオブリも残らなかつた。今日に至るまでも、ルン

には「オブレのようにほろびた」というたとえがある。彼らの種族も子孫もない。これらの後にベチエネギがやつて来た。ふたたび黒いヴグリが、後にオレグの時代にキエフのそばを通りすぎた』

ルシを圧する他民族の来襲や圧政をこの様に取りあげたネストルは、結局、それでもルシは生き残り兇悪なオブリの様な敵も最後には滅ぶことを愛国的な姿勢で書き込みたかつたのであろう。ひとたび伝承をたよりに歴史的な物語へ移行しはじめると、筆の勢いは、これだけにとどまらず、なお、伝承的物語の加筆をつづけるのである。特に、ラジムとヴヤトコの二人の兄弟から種族名が生まれたという物語は、ネストル以前の『原初の集』に含まれていたと思われる。キーたち三人の兄弟とキエフという町の名との物語と対比して面白いであろう。

Полянном же живущем особе, якоже рекохом, суще от рода Словеньска, и нарекошася Поляне, а Древляне же от Словен же, и нарекошася Древляне; Радимичи бо и Вятичи от Ляхов. Бяста бо 2 брата в Лясах, Радим, а другой Вятко; и пришедъша седоста, Радим на Съзю, прозвашася Радимичи, а Вятъко седе с родом своим по Оце, от него же прозвашася Вятичи. И живяху в мире Поляне, и Древляне, Север, и Радимичи, и Вятичи, и Хрвате. Дулеби живяху по Бугу, где ныне Вельняне, а Улучи, Тиверьци седяху по Днестру, приседяху к Дунаеви; бе множество их, седяху бо по Днестру оли до моря, суть гради их и до сего дне. Да то ся зваху от Грек Великая Скуфь.

『ところで、ポリヤネは、はなれて住んでいたが、既に述べたようにスロヴェネの氏族から出たものであり、ポリヤネと名付けられた。ところで、ドレウリヤネもスロヴェネから出ており、そして

ドレヴリヤネと呼ばれた。ところが、ラジミチとヴヤチチはリヤホヴエから出ている。またリヤヒには二人の兄弟がいた。ラジムともう一人はヴァトコである。しかして（彼ら二人は）来り住んだ。ラジムはソジ（河）のほとりに（住み）、ラジミチと呼ばれた。一方ヴァトコはおのれの氏族と共にオカに沿つて住んだ。彼（の名）からヴヤチチと呼ばれたのである。しかしてポリヤネ、ジエレヴリヤネ、セヴエル、ラジミチ、ヴヤチチ、フルヴァチは（互いに）平和に暮していた。ドウレビはブグ（河）に沿つて暮していた。そこには現在ヴェルイニヤヴが（いる）。ところでウリチ、チウエリチはドネストル（河）に沿つて住んでおり、ドウナイ（河）にまでひろがつていた。彼らは多数であり、ドネストルに沿つて海に至るまで住んでいた。彼らの町々は現在に至るまで残つている。それで、それはグレキから大いなるスクフイ（スキタイ）と呼ばれていたのである』

この様に書きつゞける節々にネストルは、例えば『（互いに）平和に暮していた』〈живяху в мирѣ……〉という句を書き入れるのである。同時に世相への熱い呼びかけが此処にも読み取られるのである。その様にしてネストルは当時の世相への語りかけをおこないつゝ、地理的及び歴史的な諸族の説明を終り、ロシア大地に住んだそれら諸族の習慣やおきての記述に移るのである。各種族が各々それぞれの父祖伝来の習慣やおきてによつて暮していることをネストルは強調する。そして、それらを平列して見た上で、自分たち~~自分たち~~の属するポリヤネたちが、いかにすぐれた文明の創造者であるかを言いたげなのである。勿論、最後に、彼は当時の最大の敵ボロヴエツの風習を取りあげることもしなかつた。そして、その間には、自分の説を一層確保するために、前に述べたハマルトルスの年代記からの一節を引用するのである。ハマルトルスの一節を省略して、『過ぎし年月の物語』の記述を次に引出しておこり。（ラヴレンチー年代記より）。此処にはキエフの町を中心とした者たちの種族ポリヤネの自慢話にも似たほどの優越感が読み取

られるであらう。

Имяху бо обычай свои, и закон отець своих и преданья, кождо свой нрав. Поляне бо своих отець обычай имуть кроток и тих, и стыденье к снохим своим и к сестрам, к матерем и к родителем своим, к свекровем, и к деверем велико стыденье имеху; брачныи обычай имяху: не можаше зять по невесту, но приводяху вечер, а завьтра приношаху по ней, что владуче. А Древляне живяху звериньским образом, живуще скотьски: убиваху друг друга, ядаху вся нечисто, и брака у них не бываше, но умыкываху уводы девиця. И Радимичи, и Вятичи, и Север один обычай имяху: живяху в лесе, якоже всякий зверь, ядуще все нечисто, срамомловье в них пред отьци и пред снохами; браци не бываху в них, но игрища межю селы. Схожахуся на игорища, на плясанье, и на вся бесовьская игрища, и ту умыкаху жены себе, с нею же кто съвещашеся; имяху же по две и по три жены. Аще кто умряше, творяху трызну над ним, и посем творяху кладу велику, и възложяхуть и на кладу мертвеца, сожжаху, а посем собравше кости, вложяху в судину малу и поставяху на столпе на путех, еже творять Вятичи и ныне. Си же творяху обычая Кривичи, прочии погании, не ведуще закона Божья, но творяще сами себе закон.

.....
Якоже се и при нас ныне Половци закон держать отець своих, кровь проливати, а хвалящеся о сих, ядуще мерьтвечину и всю нечистоту, хомеки и су-

солы; поймають мачехи своя, ятрови, и ины обы-
чая отець своих творять. Мы же христиане, елико
земль, иже веруютъ в всякую Троицу, а едино кре-
щенъе, в едину веру, закон имама единый, елико во
Христа крестихомся и во Христа облекохомся.

『(彼らは)おのれの慣習と、おのれら父祖たちのおきてと、言
い伝えを持ち、各々おのれの習慣を持つていた。ポリヤネはおの
れの父祖たちの温和で静かな慣習を持つている。そしておのれの
子の嫁たちおよび姉妹たち、母たち、およびおのれの父たちに対
して敬意を、そして姑たち、および夫の兄弟たちに対しては大い
なる敬意をもつていた。(彼らは)結婚の慣習をもつていた。すな
わち花むこは嫁を迎えには出でず、前夜に(嫁を人々が)連れ来た
り、翌朝、与えられるものを(人々が)嫁のためにもつて来るので
あつた。ところでドレグリヤネは家畜のように住みつゝ、野獣のよ
うな暮らし方をしていた。すなわち互いに殺し合い、あらゆる不潔
なものを食べていた。彼らには婚礼はなく、略奪によつて娘たち
をかすめ取つたのである。ラジミチもヴァチチも、セヴエルも同じ慣
習をもつていた。すなわち、あらゆる不潔なものを食べながら、
すべての野獣のように森の中で暮しており、彼らには父たちおよび
嫁たちの前での醜い言葉使いがあつた。彼らには婚礼はなくて
村落の間の集団遊技があつた。(彼らは)集団遊技に、舞いおど
りに、そしてあらゆる悪魔的な集団遊技に集まり、そしてそこで誰
とでも合意に達した女たちを、おのれのために連れ去つたのであ
る。(彼らは)二・三人づつの妻を持つていた。もしも、誰かが死
ぬと、彼のために異教供養をなし、そしてその後、大きな木組み
を作り、まさにその木組みの上に死者をのせ、横たえて撈いたので
ある。ところでその後、骨を集めて小さな器に入れ、(十字)路
にある柱の上においたのである。それをヴァチチは現在もおこなつ
ている。神のおきてを知らず自分たちでおのれにおきてをこしら

えているクリヴァイチ、その他のいむべき者たちは、この同じ習慣を行つてゐるのである。……ハマルトルス年代記よりの一節省略……このように我が現代においてもポロフツイはおのれの父祖たちのおきてをまもつてゐる。(すなわち)血を流し、これらのものたち(流血者)について自慢し、死体の肉およびあらゆる不浄なもの、山ねずみや地ねずみを食べてゐる。おのれの義母、義姉妹をめとり、おのれの父祖の他の慣習をおこなつてゐる。ところで我らキリスト教徒は、聖なる三位一体、一つの洗礼、一つの信仰を信じてゐる。大地のある限り、一つのおきてを持つてゐるのである。キリストの名において洗礼を受け、キリストを身にまもつてゐるかぎり』。

ネストルが如何に自己の属するポリヤネという種族を文明人として高くかかげたかをこの一節から知ることができる。其処には彼の愛国心を読み取ることができるであらう。その愛国心がネストルに思い出させたものは、自己種族の受けた古い受難の物語であつた。おそらくは、この種族に伝えられた最も古くからの伝承であつたであらう。即ちコザレによるポリヤネ王政の物語である。自分たちの種族がコザレに両刃の剣を貢税として納めたという物語であつた。古くは他の種族に貢税を納める立場であつた自分たちが、今は見事に独立し盛え、そして才一の文明人になり得てゐることを強調するように、ネストルは最後にこの古い伝承物語をわざわざ持ち出して来たのである。しかも、ネストルは『過ぎし年月の物語』の導入部分を此処で終るのである。苦難の歴史を背負つたことが度々あつたけれども、我々は見事にそれを乗り切り、なお且つ栄光へ進むものであることを示そうとして。この叙述の姿勢こそが実はネストルの編集態度であり、主張点であり、それはまた内紛と外敵に苦しむ当時のロシアに対しての『過ぎし年月の物語』の意義なのであつた。

此処に来て、ネストルは初めて年号を設定して詳しく年代記を書

きはじめるのである。ネストルによる年号の示し方が一段と細分化されたことをノヴゴロドオ一年代記と比較しながら、此処に注目しておかなければならないであろう。同時にそれは記事内容の精密化とも重り合うものなのであるから。

— T —

ノヴゴロドオ一年代記がルシの国の始まり〈Начало земли Рускои〉を事もなげに6362(854)年と設定し、その年号の下に、キー、シチエク、ホリフの三人兄弟の物語、ミハイル帝の時代にルシがツアリゴロド(コンスタンチノーポリ)に遠征した物語、ポリヤネがコザレに両刃の剣を貢税として納めていた物語、ウアリヤギを迎えに行く物語、リュリツクが支配者になつた物語、アスコリドとジルの物語、等々を一挙にまとめあげているのに対して、『過ぎし年月の物語』は、そんな粗雑な記述には満足しない。

ノヴゴロドオ一年代記がルシの国の始めとした6362(854)年よりも二年前、即ち、6360(852)年から『過ぎし年月の物語』の年号設定がはじまる。そして東ローマ皇帝ミカエル三世(在位842~867.....ロシア年代記名ミハイル)が治世しはじめた時、『ルシの国』〈Руска Земля〉が呼びはじめられたと記すのである。勿論、此処には明らかに852年と842年との十年の読みちがひがある。ギリシアの年代記に誌されているルシのツアリグラド遠征(——ノヴゴロドオ一年代記では854年の項——)の記事をよりどころに、この年から年号を設定しようとしている。そして、アダムから算定して、ギリシアのミハイル帝の即位までを十年の間違ひを含めたまゝ詳しく計算し、ミハイル帝の即位の年からもう一度ルシの国の出来事へ計算を運び移して、オレグ、イゴリ、スヴィヤトスラフ、ヤロボルク、ウオロジメル、ヤロスラフの各ロシアの公たちの在位期間を詳しく算定するのである。結局、6360(852)年の項は

この年号設定の正当化とその理由の詳しい記述で埋めつくされ、6361, 6362, 6363, 6364, 6365の五年間は空白のまま残される。然し、ノヴゴロドオ一年代記が6362年の項から実に56年間も飛び越えるのと比べれば、五年間の飛び越えの如きは物の数ではないであろう。ではノヴゴロドオ一年代記が6428年のイゴリのツアリグラド遠征の記事まで飛び越えた56年の間を『過ぎし年月の物語』は一体何で以て埋めているのであろう。この埋め草については非常に重大な一つの問題が伏在する。

6366年の項にはミハイル帝がボルガルを攻めた記事があるが、これは明らかにギリシアの文献からの書き抜きであつたであろう。ところが、それによつて6367年の項と6370年の項(6368, 6369兩年の項は空白である)からの記事が実は非常に問題である。ネストルが最も苦心し、且つ、最後まで充分には解き明かすことのできなかつた問題があつたかも知れない。即ち、それはヴァリヤグとルシの問題なのであつた。多くの歴史家は、この伝承記事の読み方に常にひつかかるのである。大体、ネストルは、スラヴ民族の各種族をポリヤネを中心として非常に多く書き出し、且つ、それぞれの呼び名を地名や河などによる由来と共に説明していたのだが、ルシ〈Русь〉という呼び名については、実は一度も、何の説明もなしてはいない。まして、ルシとヴァリヤグとの関係などについては、もてあました結果、はじめから伝承の口うつしにあづきつている感がある。さて、具体的に6367年の記事に立ち戻つて話を始めよう。其処には先づ次の様にある。

Имаху дань Варязи из заморья на Чюди и на Словенех, на Мери и на всех Кривичех; а Козари имаху на Полянех, и на Северех, и на Вятичех, имаху по беле и веверице от дыма.

『ヴァリヤグが海の向うからチユジおよびスロヴエネ、メリヤおよび総てのクリヴィチに貢税を課した。ところがコザレはポリヤネ及び

セヴェルヤグヤチチに (貢税を) 課し, 一戸より銀貨とリスの毛皮を課した』。

そしてネストルは, 二年間の空白の後, 6370 (862)年の項として, 問題の伝承を書きつけるのである。

Изъгнаша Варяги за море, и не даша им дани, и почаша сами в себе володети; и не бе в них правды, и вѣста род на род, быша в них усобице, и воевати почаша сами на ся. Реша сами в себе: "поищем себе князя, иже бы володел нами и судил по правду". Идоша за море к Варягом к Руси. Сице бо ся зваху тѣи Варязи Русь, яко се друзии зовутся Свое, друзии же Урмане, Анъгляне, друзий Гѣте; тако и си. Реша Руси Чюдъ, Словени и Кривичи: "вся земля наша велика и обилна, а наряда в ней нет; да поидете княжит и володети нами". И избрашася 3 брата съ роды своими, пояша по себе всю Русь, и придоша; старейший Рюрик седе в Новеграде, а другий Синеус на Белеозере, а третий Изборъте Трувор. От них прозвася Руска земля, Новугородъци; ти суть людье Ноугсродъци от рода Варяжьска, преже бо беша Словени. По дву же лету Синеус умре, и брат его Трувор, и прия власть Рюрик; и раздая мужем своим грады, овому Полотеск, овому Ростов, другому Белеозеро. И по тем городом суть находници Варязи; а первии насельници в Новеграде Словене, Полотъски Кривичи, в Ростове Меря, в Белеозере Весь, в Муроме Мурома. И теми всеми обладаше Рюрик. И быста у него 2 мужа, не племени его, но боярина, и та испроси-стася ко Царюгороду с родом своим. И поидоста

по днепру, и идуче мимо, и узреста на горе гра-
док и упрашаста, реста: "чий се градок? Они
же реша: "была суть 3 брата, Кий, Щек, Хорив,
иже сделаша градок ось, и изгибоша, и мы седим
платяче дань родом их Козаром. Асколд же и дир
остава в граде сем, и многи Варяги скуписта, и
начаста владети Польскою землею.....
.....

『(スラヴの諸種族たちは) ヲアリアギを海の彼方へ追いほらい、
彼等に貢税を納めず、自分たちが自分たちの中で治めはじめた。
したがつて彼らの中には正義がなく、氏族は氏族に対して事を
構え、彼らの中には内紛があり、自から互いに戦いはじめた。
彼らは自から自分たちの中で言つた。"我々を統治し、法によつ
てさばくような公を自分たちのために探し求めよう"と。彼らは
海の向うの、ヲアリアギのルシのもとへ行つた。というのは、そ
のヲアリアギは、このように、ルシと自からを呼んでいたからで
ある。或るものたちがスウオエと呼ばれ、或るものはウルマネ、ア
ングリヤネ(と呼ばれ)、あるものがグテ(ゴート)と(呼ばれている)
ように、そのようにこれらも(そうである)。ルシにチユヂ、スロヴ
エネおよびクリウイチが言つた。"我々の全土は大きく豊かである
が、その中には秩序がない。(我々に)君臨し、我々を支配する
ために来たれ"と。三人の兄弟が自分の氏族と共に選出され
、ルシ全部を引き具して到着した。長兄リユリクはノヴゴロドに、
次のシネウスはベロオゼロに、三番目のトルヴオルはイズボルスクに
(それぞれ)居を定めた。それらの者たちから、ルシの國が呼び名
を得たのである。ノヴゴロド人。これらの人々はヲアリアギの氏族
から出たノヴゴロド人である。というのは、以前には(ノヴゴロド
人は)、スロヴエネであつたからである。二年後に、シネウスが死に
、彼の弟トルヴオルもまた(死んだ)ので、リユリクが権力を振つ

だ。そして自分の家の子に町々を，或る者にはポロテスクを，或る者にはロストフを，他のものにはペロオゼロを，分かち与えた。そしてその町々にとつては，ヴァリヤギは外来者であつたが，ノヴゴロドにおける最初の住民はスロヴエネであり，ポロツクにおいてはクリヴァイチ，ロストフではメリア，ペロオゼロではヴェシ，ムロムではムロマであつた。そして，それらすべてをリュリクが統治していたのである。しかして，彼のもとには二人の家臣がいた。彼の一族ではなかつたが貴族であつた。しかして，これら二人は自分の一族をともなつて，ツアリゴロドへ（行く）許しを得た。そしてドネブルに沿つて出発し，通りすがりに山の上に小さな城市（があるの）を見てとり，尋ねて言つた。「これは誰の城市か」と。人々は言つた。「かつて三人の兄弟，キー，シチエク，ホリフがいた。彼らがこの町を造り，滅亡した。だから我々は彼らの一族であるのに，ユザレに貢税を払いながら住んでいる」と。アスコルドは，そしてまたシルも，この町にとゞまり，多くのヴァリヤギをあつめ，ボリヤネの地を統治しはじめた。ノヴゴロドではリュリクが君臨しているときであつた。』

ネストルはルシという言葉の由来や，最古のロシアの支配者としてのリュリク——一言にして言えばヴァリヤギ招への伝説をこの様にまとめ上げたのである。これがあくまでも伝承であり，しかも，ネストルがまとめた形のものであることを我々は充分承知しておかなければならない。勿論，ネストルは，この記事を書くに際して，より古い文献を参照したことであろう。即ち，ノヴゴロドオ一年代記に反映している『原初の集』を土台にしたことであろう。ノヴゴロドオ一年代記では，このヴァリヤギ招への物語は，次の様な形で反映しているのである。兩者の相異を充分注意しよう。

И въсташа Словене и Кривичи и Меря и Чюдь на
Варягы, и изгнаша я за море; и начаша владети

сами себе и города ставити. И вѣсташа сами на
ся воеват, и бысть межи ими рать велика и усобица,
и вѣсташа град на град, и не беше в них правды.
И реша к себе: "князя поищем, иже бы владел нами
и радил ны по праву". Идоша за море к Варягом и ркоша: "земля наша велика и обилна,
а наряда у нас нету; да поидете к нам княжити и владети нами". Избрашася 3
брата с роды своими, и поиша со собою дружину многу
и предивну, и приидоша к Новугороду. И седе старейшии
в Новегороде, бе имя ему Рюрик; а други седе на Белеозере,
Синеус; а третей в Изборьске, имя ему Трувор. И от тех Варяг,
находник тех, прозвашася Русь, и от тех словет Руская
земля; и суть новгородстии людие до днешняго дни от
рода варяжьска.

『しかしてスロヴエネ及びクリウイチ及びメリヤ、及びテユジがウアリヤギに対して蜂起した。しかして彼らを海の彼方に追い払つた。しかして(人々は)自からおのれで統治し、町々を建てはじめた。しかして(人々は)自からお互いに戦うべく蜂起し、しかして彼らの間には大いなる戦いと内紛とがあり、町は町に対して立ち、しかして彼らの中には正義がなかつた。しかして人々は自からの中で言つた。『公を探そう。我々を統治し、秩序によつて我々をととのえることのできるような』と。しかして(人々は)海の彼方ウアリヤギのもとへ行きしかして言つた。『我々の土地は大きく、しかして豊かである。しかし我々には秩序がない。我々に君臨し我々を統治するために我々のもとに來たれ』と。(ウアリヤギたちは)おのれの氏族と共に三人の兄弟を選び出し、しかして(三人は)多くの親兵團をおのれに具してノヴゴロドに來たつた。

しかして（三人の内の）最年長者がノヴゴロドに坐した。彼の名はリユリクであつた。しかしてもう一人はペロオゼロに坐した。シネウスである。ところで三人目がイズボリスクに（坐した）。彼の名はトロヴオルである。しかしてそれらのヴァリヤギたち即ちそれらの新来者たちからルシが呼ばれた。しかしてそれら（の者たち）からルシの国が名をえた。しかして、ノヴゴロドの人々は今日に至るまでヴァリヤギの氏族から出ている』

此処では長兄がノヴゴロドに坐したとあるところだけからも、これが明らかに、ノヴゴロド地方の伝承であつて、キエフ地方の伝承でないことが分かるであろう。然も、ネストルが記述したのとは、余程その趣きを異にしている。ヴァリヤギを招へいするために出かけたとあつても、そのヴァリヤギがルシであるとは言っていない。まして、ルシと言われるヴァリヤギを招へいしに人々が出かけたというような文句は一言も見出せない。招へいされて来た新来者であるヴァリヤギが即ちルシと言われる者たちであつたというような結論めいた言い方の個所は、だから、非常に細心な読み方が必要である。訳文のその部分に下線をほどこしておいた。招へいされて来たヴァリヤギたちが、当時のロシアをルシと呼んだという意味に解すべきなのか？ そうだとすれば、ルシとヴァリヤギとの等式は成立しない。招へいされて来たヴァリヤギたちがルシであつたために、それが原因でノヴゴロドその他がルシと呼ばれたというのなら、ヴァリヤギ即ちルシであるという等式は成立しよう。ルシが、そして、ルシの国が名をつけられて呼ばれたにはちがいないが、ヴァリヤギによつて呼ばれたのか、或はヴァリヤギが原因でそう呼ばれたのか、《от тех Варяг》という古代ロシア語をいくら、これだけで考えつめて見ても、何の結論も出てこない。この簡潔な伝承を、ネストルは、ヴァリヤギが即ちルシであつたから、招へいされて来たそのルシによつて、ルシという名が初めて起つたと理解して記述したにすぎない。ヴァ

リヤギ，或はヴァリヤギの特定の部分の連中がルシであつたという
ような読み方が正当であるという証拠はノヴゴロドオ一年代記の
中にはどこにもない。ヴァリヤギたちからルシが呼ばれたとある
ノヴゴロドオ一年代記の記事中，『何々から』〈от……生格〉と
いう古代ロシア語は何を一体表現していたのであろう。

ロシアの最古の文献であるオストロミールの福音書は，そのオ
十六章八節を〈отышдыша бѣжаша отъ гроба〉『棺より出でて逃
走した』と訳している。即ち① отъとは，出発の場所を示す前置
であつた。ところが，同じ福音書のヨハネ伝オ一章十三節には
〈Иже ни отъ крѣви, ни отъ похоти……, нь отъ Бога ро-
дися〉『それらは血によりてでもなく，色欲によつてでもなく……
神によつて生まれた』とある。だから，②発生の原因を示す前置で
あつたとも言えよう。また同じくルカ伝二十四章二十七節によ
れば，〈Начнь отъ Моусеа〉『モーゼをはじめとして』とあるか
ら③事物や順序の始めを示したこともある。また同じくルカ伝
二十四章十三節に〈Дѣва отъ нихъ бѣста идяша……〉『彼等
のうちの二人が行つた』とあり，④部分の出所を示す時もあり，
〈отъ многихъ лѣтъ〉『多くの年月の昔より』という古代ロシア語
に流布した言葉から見られるように⑤時の指定にも用いられ，
『過ぎし年月の物語』の911年の項にみられるように，〈По-
слани отъ Олга великаго князя Рускаго〉『ルシの大公オレグ
から派遣されたものたち』とあるように⑥現代語なら造格のみを以
て示されるような，『なんによつて……何々される』という受
動形表現の折の根元者を表す前置詞でもあつた。だから此処か
ら発展して⑦原因や理由を表す時にも用いられることもあつた。
その他，отъという前置詞の詳しい分類をあげればきりがな
いであらう。スズネフスキーは，これらを十一ほどに分類していた
のである。そのうち，⑧として挙げた読み方の場合には，ノヴゴ
ロドオ一年代記は，『ヴァリヤギたちによつて（ノヴゴロドその他の地が）

ルシと呼ばれた』と解釈し得るし、⑦として挙げた読み方の場合には『ヴァリヤギたち(がルシであつた)から(それが原因になつて)ルシという名が起つた』と読めるであろう。だからノヴゴロドオ一年代記に反映していた古い伝承をネストルが⑦として挙げた読み方をした結果が『過ぎし年月の物語』の記事であつたとは言えるであろうが、それ以上に深く進んで、ヴァリヤギが本当にルシであつたのか、或は、ヴァリヤギがロシアに来てからその地をルシと呼びはじめたのか、その辺の決定までを、ロシアの文献で実施しようというのは、根本的に無謀な話である。たゞ重要なことは、『過ぎし年月の物語』がヴァリヤギ招へいに関する記事として、ネストルの主観的な読み方、或は受け取り方を伝えているということであつて、伝承そのものへの理解の仕方は、その他にも数多く考えられるということなのである。『過ぎし年月の物語』の記事の内容が、伝承に立脚し、なお、その伝承の解釈の一つだけを示しているものであることを忘れてはなるまい。この様なものを唯一重大な資料と見立て、ルシに関する歴史的な事実追求の理論構成をなそうというには、最初から、たよるべきこの文献は余りに不安定である。最近見出された古いウステュグ年代記もまた『過ぎし年月の物語』よりも古い内容を反映しているが、実は其処にも、ノヴゴロドオ一年代記とほとんど同じような記事がある。そして、やはり、素直に読むとすれば、招へいされて来着したヴァリヤギたちが、ロシアの地をルシと呼んだと解すべきであるように思われる。(『古代ロシア研究』オ五号; p. 90~p. 91参照)。ルシとヴァリヤギの等式が成立するか否かの問題よりも、実際は、ネストルが何故、等式の成立するような受け取り方なり理解の仕方なりを『過ぎし年月の物語』に書きとどめたかということの方が、比較にならないほど重要な問題であろう。大体、ノアの息子が三人、キエフの町の創立者キーの兄弟が三人、来着したヴァリヤギの兄弟が三人というよりな、完全な伝承の中に歴史事実の反

映を筆者は真面目に求めようなどとは思わない。それよりも、ネストルがその伝承を何故『過ぎし年月の物語』のような形に組み替えたかという問題の方が面白いであろう。

ネストルがこの『過ぎし年月の物語』を最終的に書きあげようとした時代は、前述したように、外敵におびえ、しかも公たちが内紛に明け暮れた時代であつたことを想起しよう。彼の国家的・政治的關心や、支配層への注文が、内紛停止による統一国家をめざし、ポロヴェツ撃退にあつたことはいふまでもない。このような時代に、このような意図で書きあげられたのが『過ぎし年月の物語』であつたとすれば、おのずから、ネストルによるヴァリヤギ招へいの説話の書き取りの意味もその意図の線上で考えられなければなるまい。国土は大きく、且つ豊かであるが其処には秩序がない。正義がない。だから、人々が相談して、秩序をもたらし、正義によつて政治をおこなう公を探し求めて、それに適する者たちを招いたという説話の意味をネストルは重要だと考えたのである。相互に相対立しながら、それぞれに内紛を繰り返していた時に、正しく國を統一するためにこそ招かれたものが初代の公であつたのだというのを、この説話から、ネストルは当時の公たちに進言したかつた。その初代の公の民族的な出身などは、当面の問題ではなかつた。即ち、公がロシアに公としてあるのは、そもそもの國のはじめから、相互対立と秩序の乱れを正すためのものであり、人々がその手段として招へいたものにすぎないことをネストルは言いたかつたのであろう。しかも、招かれた初代の公（リニリク）が三人兄弟でロシアに招かれて来て、それぞれ各地の公になつたという物語は、この際、一層便利であつた。即ち、内紛をくり返し、外敵に統一抗争しない当時の公たちに向つて、そもそもの公たちのはじまりは、仲良き兄弟であつたことを示したのである。もしもこの伝承がノヴゴロドの伝承であつたとすれば、なおさら、面白い。ノヴゴロドには古くから民会があつた。そして、

公たちは常に民会によつて選ばれ、支持され、或は迎えられた。しかも、このしきたりは、『過ぎし年月の物語』完成以後にも形をかえて伝えられ、例えば、後のアレクサンドル・ネフスキー公なども、その手腕を期待されて招かれた君主なのであつた。だから、この伝承は、当時の仲間割れする公たちに向つての絶好の教訓素材であつた。国のはじまりの物語として一層教訓的比重を増したことであろう。ネストルはそれを期待していた。しかも、招かれて来た初代の公たちが、来着した国の名をルシと呼んだとはせずに、公たち自身がルシであつたとした方が、当時の公たちに、より重き国家責任の意識をになわし得たと思われる。思えば、ネストルのこの伝承組替え手段の鮮やかさは、心憎いばかりであると言わなければならない。然も、ネストルがこの様に組み替えて書きとめた伝承には、なお、もう一つの目的が彼によつて重ねられていた。ネストル当時、たとえ、国家及び中心的支配層の出身がノルマンであつて、はえぬきのスラヴではないとしたところで、既に、もう、それが、どれほどの波紋をも投げるような事態は起さなかつた。当時のロシア国家はポロヴェツという外敵を受けて苦勞してはいたが、北方ノルマンから危害を受けるような心配を人々はしていなかつた。ロシアの当時の精神的支柱や傾斜はビザンチンであつた。人々の心の傾きは、北方ノルマンではなくて、南方ビザンチンであつた。と同時に、ビザンチンは宗教と共に政治の面でも、ロシアに対しておのれの風下に立つべきことを要求する態度であつた。ビザンチンの側からすれば、ロシアの国は自己の配下であつた。ロシアの君主である公は、ビザンチンに本山をもつ教会によつて正当化されなければならない以上、ロシアの国家的支配権力とは、ビザンチンの側からロシアに与えてやつたものであつた。まして年代記者の属する修道院にあつては、その力と階位の関係は総てビザンチンから出ていた。ところが面白いことに、ベチェルスキー修道院は一般の教会とは少し異つて、

特にビザンチンの代辯者の如きキエフの府主教には対立していた。ロシアの公たちの出所がビザンチンであるとは口がまがつても言いたくなかつた。ロシアがビザンチンから出たものの如く振舞う態度への最も有効な反対手段は、公たちの出身をビザンチンでもなく、当のロシアでもなくて、ノルマンのヴァリヤギであるとする説話こそ、最もうつてつけであつた。ロシアの出所が南方のビザンチンではなくて、北方のノルマンであるという、キリスト教撰取以前の物語は、本来、ロシアはビザンチンから独立的なものであつたことを説くためにも、実に有効であつたであろう。ネストル当時に、支配的上層権力者たちが、自己の民族出身ではなくて、他民族の出身であるとする説は、中世のどの世界でもありふれた現象であつた。別に民族の恥でもなく、むしろ、かけはなれた民族からの出身者であるとする説ほど、却つて、当時にとつては有効で面白かつたかも知れない。物事は自己民族内の自然的発生によるとするよりも、別世界から持ち来られた現象であるとする方が、より一層あがめられ、重んぜられた。中世の一般的風調であつたにすぎない。その風調を利用しつつ、ビザンチンからの精神的独立の主張と、公たちへの教訓的注文とを三重にかさねて、ネストルは古い伝承を組み替えつつ此処にうまく利用したのであつた。だから、ヴァリヤギとルシとを等式で結べるような記事を書いてるのは、ネストル及びその文章の写し手たちだけであつて、多くの古い年代記では、むしろ、明らかにヴァリヤギとルシとは別物であることが示されている。例えば、『過ぎし年月の物語』よりも古い最初の年代記的文集を反映していると思われるソフィヤオ一年代記の6551(1043)年の項と、ネストルの『過ぎし年月の物語』の同年の項とを比較してみるがよい。ネストルが、ヴァリヤギとルシの等式を成立させるような記事を冒頭の所に書き出したために、本来、ソフィヤオ一年代記に見られるように書かれていた記事を、つじつまを合

わせるために、ネストルが『過ぎし年月の物語』の中では、どれほど省略して避けて通らなければならなくなつたことが、特に次に引用するソフィヤオ一年代記の下線の部分に注意して、それと『過ぎし年月の物語』の同一個所とを比較してみたい。

В лето 6551.

Паки на весну посла великий князь Ярослав сына своего Володимера на Греки, дав ему вой многи, Варяги, Русь, и воеводство поручи Вышате, Яневу отцю. И поиде Володимер на Царьград в лодиях, и прошедше пороги, и приидоша к Дунаю. Рекоша Русь Володимер: "станем зде на поли"; а Варязи ркоша: "поидем в лодиях под город". И послуша Володимер Варяг, и от Дуная поиде Володимер к Царюграду с вой в лодиях.

〔6551(1043)年。〕

再び春に向つて、ヤロスラフ大公はおのれの息子ヴオロジメルをダレキに派遣した。彼に多くの軍勢、ヴァリヤギとルンを与え、軍司令官職をヤンの父ウインヤタに委任した。しかしてヴオロジメルは船でツアリグラドに向つた。しかして浅瀬を越え、ドナイに(人々は)到着した。ルンがヴオロジメルに言つた。『此処の野にとどまる』と。ところがヴァリヤギが言つた。『船で町の近くまで進もう』と。しかしてヴオロジメルはヴァリヤギの言うことを聞いた。しかしてドナイからヴオロジメルは船に軍勢をのせてツアリグラドへ出かけた』。

ソフィヤオ一年代記では明らかにルンとヴァリヤギは別物であり、むしろ、対立的でさえある。ネストルはヴァリヤギ招へいの物語の折にヴァリヤギとルンとの間に等式を成立させるような組み替え記事を書いたものだから、ソフィヤオ一年代記のこの部分に当る記事を『過ぎし年月の物語』において取り扱う時に、非常に

困つたことであろう。そのために、ネストルは、『過ぎし年月の物語』の中では、その困る部分だけ避けて通らざるを得なかつた。その結果、この部分を削除して、次の様な記事に仕立ててしまつたのである。(ラヴレンチー年代記による)。

В лето 6551.

Посла Ярослав сына своего Володимера на Греки,
и вда ему вой мног, а воеводство поручи Бышате,
отцю лневу. И поиде Володимер в лодьях, и при-
доша в Дунай, поидоша Царюграду;

『6551(1043)年。

ヤロスラフはおのれの息子ウオロジメルをグレキに派遣した。しかし彼に多くの軍勢を与え、ヤンの父、ウイシヤタに軍司令官職を委任した。しかしウオロジメルは船に乗つて出かけた。(人々は)ドナイに到着し、しかしツアリゴロドに向つた』。

何人かの手によつて加筆され編集し直されたために『過ぎし年月の物語』の中には、前後の相矛盾する記述があつたことを幾度か指摘して前述してきた。ところが、この6551年の項は冒頭のウアリヤギ招へいの記事とは一向に矛盾しないように造り変えられているのである。如何にネストルが、ウアリヤギ招へいの物語の組み替えに力を入れたかと、此処から逆に推察され得るであろう。

この様にして、ウアリヤギ招へいの記事を終つたネストルは、ハマルトルスの年代記を下敷にし、またより古い年代記集をもとにして適当にロシアの伝承とつちつまを合わせて、アスコルドとジルの物語を書きしるすのである。ロシアの地からのツアリグラド遠征の物語は、ビザンチンの文獻(ハマルトルスの年代記)の記事を符合させながら、多くの伝承を彼は組み込んでいつたのである。例えばアスコルドとジルの記事に就ては面白い組替えがみとめられる。ノヴゴロドオ一年代記によれば、ウアリヤギ招へいの記事の直後に次

の様を一節がある。

По двою же лету умре Синеус и брат его трувор,
и прия власть един Рюрик, обою брату власть, и
нача владети един. И роди сын, и нарече имя ему
Игорь. И възрастьшю же ему, Игорю, и бысть хра-
бор и мудр. И бысть у него воевода, именем Олег,
муж мудр и храбор. И начаста воевати, и налезос-
та Днепръ реку и Смолнеск град. И оттоле пои-
доша вниз по Днепру, и приидоша к горам, и при-
идоша к горам киевським, и узреста город Киев,
и испыташа, кто в нем княжить; и реша: "два бра-
та, Асколд и Дир". Игорь же и Олег, вторящася
мимоидуша, и потаистася в лодьх, и с малою
дружиною излезоста на брег, творящася подугорь-
скими гостьми, и съзваста Асколда и Дира. Сле-
зъшима же има, выскакаша прочии воины з лодей,
Игоревы, на брег; и рече Игорь ко Асколду: "вы
неста князя, ни роду княжа, нь аз есмь князь, и
мне достоить княжити". И убиша Асколда и Дира;
и абие несъше на гору, и погребоша и Асколда на
горе, еже ся ныне Угорьское наричеть, идеже есть
двор Олмин; на той могыле постави Олма цер-
ковь святого Николу, а Дирева могыла за святого
Ириною. И седе Игорь, княжа, в Кыеве;

『ところで二年の後にシネウスが死んだ。しかして彼の弟トル
ヴォルも。しかしてリユリクは支配権、即ち二人の弟の支配権を一
人で握つた。しかして一人で支配しはじめた。しかして息子を
生んで彼の名をイゴリと名づけた。彼即ちイゴリが成人した時
、(彼は)勇敢で賢がつた。しかして彼にはその名をオレグとい

り軍司令官がいた。賢くて勇敢な男であつた。(イゴリとオレグの)二人は征伐をはじめ、ドネプル河及びスモレンスクの町を手に入れた。しかしてこゝから(人々は)ドネプルを下つて進み、キエフの山についた。しかして(二人は)キエフの町を見て、誰がその中で公としてあるかをたづねた。しかして(人々は)をつた。『二人の兄弟アスコルドとジルである』と。そこで、イゴリ及びオレグは通り抜けていく恰好をし、しかして船の中にかくれた。しかして少数の親兵団と共に岸にあがり、ウゴルの国の近くに住んでいる商人のような恰好をしてアスコルドとジルを呼んだ。ところで(アスコルドとジルの)二人が(山の上の町から)下りて来たとき、イゴリの他の戦士たちが船から岸へとび出した。しかしてイゴリはアスコルドに向つて言つた。『汝等は公ではない。公の一族でもない。然らずして我が公である。しかして公としてあるのは我にこそふさわしい』と。しかして、アスコルド及びジルを(人々は)殺した。しかして、直ちに、山の上に運び、現在ウゴルと呼ばれている山の上にアスコルドを埋めた。其処には(今)オルマの家敷がある。その墓の上にオルマが聖ニコラ教会を建てたのである。しかしてジルの墓は聖イリナ(教会)の裏にある。しかしてイゴリはキエフに坐して君臨した』

この一節が非常に古い叙事詩の一節であつたのは、例えば、イゴリを『勇敢』<храбор>で『賢い』<мудр>とし、その軍司令官オレグを同じ形容詞で以て、たゞ、その順序を変えただけで、同じように賢くて勇敢であつたとした個所からだけでも推察されるところである。特に、一時は横を向いて通り抜けるような恰好をしながら、船にかくれ、飛び出して交易商人<гость>といつわつて、だまし打ちにするという物語のテーマは、現在もなお、ブイリーナの各所に反映しているところである。勿論、これが叙事詩であつたとすれば、その伝承地はキエフではなくて、ノヴゴロドであつたはずである。

ところが、このノヴゴロドオ一年代記の記事の少し前にイゴリとオレグに殺されたアスコルドとシルの出身由来を書きとめているのである。

И по сих, братии той, приидоста два Варяга и нарекостася князема; одному бе имя Асколд, а другому Дир; и беста княжаша в Киеве, и владеюща Полями; и беша ратнии с Древляны и с Улицы.

『(キエフの町の創設者キーの三人兄弟を指して)、この者たち、この兄弟の後に、二人のヴァリヤギが(キエフに)来たり、(二人の)公と言われた。一人の名はアスコルドで、もう一人の(名)はシルであつた。(二人は)キエフに公として君臨していた。しかしてポリヤネを支配していた。しかしてドレヴリヤネ及びウリツイと抗戦していた』。

先づ、この部分を『過ぎし年月の物語』はより詳しく解説的に補足記入するのである。年はノヴゴロドオ一年代記の方がそのことごとくを6362(854)年とするのに対して、こちらは、実に詳しく6370(862)年から6374(866)年の四年間にひきのばしている。このノヴゴロドオ一年代記のこの項の年号と『過ぎし年月の物語』のこの項の年号との十年の差額は、面白い問題を含んでいるであろう。それはともあれ、『過ぎし年月の物語』ではラヴレンチー年代記によれば次の様な記事になつている。ギリシア遠征の主人公にまで育てゝいる所が面白い。

..... и теми всеми обладаша Рюрик. И бяста у него 2 мужа, не племени его, но боярина, и та испросистася ко Царюгороду с родом своим. И подоста по Днепру, и идуче мимо, и узреста на горе градок и упрашаста, реста: "чий се градок?" Они же реша: "была суть 3 братья, Кий, Щек, Хорив, иже сделаша градок ось, и изгибоша, и мы седим

платяче дань родом их Козаром. Асколд же и Дир
остава в граде сем, и многи Варяги скуписта, и
начаства владети Польскою землею. Рюрику же кня-
зю в Бовегороде,.....
.....

..... иде Асколд и Дир на Греки, и придоша в 14
лето Михаила царя.

この古代ロシア文の日本語訳は既に先に記しておいたので此
処では省略しよう。一読して実に奇妙なことに気づくであろう。
ノヴゴロドからアスコルドとジルがドネプル河を下つてキエフに着い
た。実はその目的はギリシア遠征なのであつた。途中、キエフを
見て二人は人々に向つて誰の町かと尋ねているのである。ドネプ
ルを下る途中で見つけたキエフの町について、ノヴゴロドオ一年
代記ではイゴリとオレグが同じ条件で同じことを尋ねていたでは
ないか。このあたりは、切紙細工の様に編集された明白な跡で
ある。だから、本当にアスコルドとジルがイゴリに殺される記事
（『過ぎし年月の物語』の）では、イゴリは、決して、これは一体誰
の町か、公は誰かなどとたづねていない。二度も同じ場面を設
定するのは気がひけたのであろう。ノヴゴロドのリュリクの家臣で
あつたと言うアスコルドとジルが、リュリクの許しをえてギリシア
遠征に行く途中に、ふと見出したキエフの町を占領して、自己の
ものにしたのが本当なら、そしてまた、ミハイル帝の時代にビザ
ンチンに遠征したのが本当なら、その十六年後、即ち6390(88
2)年に、リュリクの息子イゴリとオレグが、再びドネプルを下降
してキエフを見つけた時、この町は何者の物なのかと尋ねるのは
いかにも不自然である。だから、『過ぎし年月の物語』ではその
個所を前に持ち出して此処では省略してしまつた。勿論、それほ
ど気をつけて、つちつまを合わせたにしても、やはり、だまし打
ちにして殺すくたりに不自然さをまぬがれないであろう。アスコ

ルドとジルにまつわる伝承がノヴゴロドとキエフとのどちらか一方にだけあつたと考えるのは合理的ではないであろう。或は、その伝承物語がバリエーションのない唯一のものであつたと考えるのも合理的ではない。伝承物語をどの様にこね上げて、もつともらしい歴史記録めいた書きものにまとめあげるかについては、時代的にも、或はノヴゴロドとキエフという地理的な意味でも、また、ノヴゴロドとキエフの町及び修道院の性格の差の点からも、それぞれにちがつて来たであろう。アスゴルドとジルのギリシア遠征などノヴゴロドオ一年代記には無かつた。ではそのノヴゴロドオ一年代記が書きとめていたアスゴルド・ジル殺害の記事は『過ぎし年月の物語』ではどう変つているであろう。ラヴレンチ一年代記をはじめとするトロイツキー、イパーチー、ヴォスクレセンスキー各年代記等々には大体同文で次の様にある。(ノヴゴロドオ一年代記では軍司令官であつたオレグが此処では幼き公イゴリを押しつけて表面に出ているところが面白い。これもまた実は、その素材が本来は伝承的なものであつたことを意味しているであろう)。

Поиде Олег, поим воя многи, Варяги, Чюдь, Слове-
ни, Мерю, Вель, Кривичи, и приде к Смоленську с
Кривичи, и прия град, и посади мужь свой. Оттуда
поиде вниз, и взя Любець, и посади мужь свой.

Придоста к горам к Киевским, и увиде Олег, яко
Асколд и Дир княжита, похорони воя в лодьях, а
другия назади остави, а сам приде нося Игоря
детьска. И пришлу под Угорьское, похоронив воя
своя, и присла ко Асколду и Дирови, глаголя:

"яко гость есмь, идем в Греки от Олга и от Игоря
княжича; да придета к нам к родом своим". Асколд
же и Дир придоста; выскакав же вси прочии из
лодья, и рече Олег Асколду и Дирови: "вы не ста
князя, ни рода княжа, но аз есмь роду княжа",

вынесоша Игоря, "и се есть сын Рюриков". И убиша Асколд и дира, несоша на гору, и погребоша и на горе, еже ся ныне зоветь Угорьское, кде ныне Ольмин двор; на той могиле поставил Ольга церковь святаго Николу, а дирова могила за святою Ориною. Седе Олег в Киеве.....

『6390(882)年. オレグが多くの軍勢, ヲアリヤギ, チユジ, スロヴエネ, メリヤ, ヲエシ, クリヴイチをひきつれて出発し, クリヴイチと共にスモレンスクに到着した. しかして町を手に入れ, おのれの家臣を据えた. そこから下流へ進み, リユベツイを奪い, おのれの家臣を据えた. (二人は)キエフの山に到着し, オレグはアスコルドとジルが君臨しているのを見て, 船の中に軍勢をかくし, 他のものを後に残し, 自分は幼少のイゴリをかゝえて到着した. しかしておのれの軍勢をかくしてウゴリスコエ(山)のふもとにこぎつけた. しかして, アスコルドとジルに使者をつかわして言つた. // (我々は)商人であるから, オレグと公子イゴリのもとからグレキに行く途中である. おのれの民族なる我々のもとに来たれ//と. そこで, アスコルドとジルが来たつた. すべての他のものたちは船からとび出し, しかして, オレグはアスコルドとジルに言つた. // 汝ら(二人)は公ではない, 公一族でもない. しからずして, 我こそが公の一族である//と. イゴリをさし出して // これこそリユリクの子である// (と言つた). しかして(人々は)アスコルドとジルを殺し, 山へ運び, 彼ら(二人を)山に埋めた. それは現在ウゴリスコエと呼ばれ, そこには現在オルマの家敷がある. その墓の上にオルマが聖ニコラの教会を建てたのである. ところで, ジルの墓は聖オリナ(教会)の裏にある. オレグはキエフに君臨しつゝ坐した』.

『過ぎし年月の物語』におけるアスコルドとジルの物語, ノヴ

ゴロドオ一年代記における同じ物語 —— この二つの間の差を埋め継ぐ面白い年代記がある。ウステュグ年代記である。ノヴゴロドオ一年代記では、キエフの創設者キーたち三人兄弟の死後、アスコルド兄弟がヴァリヤギから来てキエフに坐して君臨したとある。そして、そのことは、ヴァリヤギ招へいよりも先の出来事として記述されていた。ところが『過ぎし年月の物語』では、ヴァリヤギ招へい後の出来事として記述され、且つ、アスコルド兄弟はリュリクの家臣であつて、グレキ遠征をリュリクに願ひ出て、遠征途中にキエフに立ち寄り、遂にキエフの公として坐してしまつたという物語になつている。ところが、ウステュグ年代記では、この中間を取りあげて、ヴァリヤギ招へいの際にアスコルド兄弟がリュリクたちと共にロシアにやつて来たことになつている。然もリュリクが家臣にロシアの町々を分け与える際に、その贈与を受けられなかつた三人は、その埋め合わせの如くにビザンチン遠征の許しを得て、その遠征の途中キエフに坐してしまつたという内容になつている。最も伝承叙事詩らしい組み立てになつていて面白いのがこのウステュグ年代記の記事である。然もこの年代記にはキーの三人兄弟が再び取りあげられ、物語としての起伏を多くしている。即ち、次の如くである。

И беста с ним пришли из варяг 2 человека: имя единому Аскольд, имя другому Дир; ни племени княжа, ни боярска, и не даст им Рюрик ни града, ни села. Асколд же и дир испросистася у Рюрика ко Царюграду итьти с родом своим и поидоша из Новаграда на Днепр реку и по Днепру вниз мимо Смоленск и не явистася в Смоленску, зане град велик и мног людьми, и приплыста под горы Киевския и узреста на горе град мал и вопросиста ту сущих людей: "чи исть градок сей?" Они же реста

им: "были у нас зде 3 брата: Кии, Щок, Морив да сестра их Лыбедь, иже зделаша град сеи и изомроша; мы же седим зде и даем дань козаром". Асколд же Дир рекоста им: "и мы есмя князи варяжские", и седоста в городке том княжити, и многи варяги совокуписта, и начаша владети Полянскую землю и беша ратьми со древляны и со югрецы.

『彼（リュリク）と共にヴァリヤギから二人のものが到着した。一人の名はアスコルド、もう一人の名はシルといつた。公の一門ではなく、貴族の（一門）でもなく、そしてリュリクは彼らに町をも、村をも与えなかつた。そこでアスコルドとシルは自分の氏族と共にツアリグラドへおもむく許しをリュリクからえて、ノヴゴロドを出発し、ドネプル河に向い、ドネプルをくだりスモレンスクのそばを（過ぎ）たが、スモレンスクには入らなかつた。というのは、町は大きく、多くの人々がいたからである。そして、キエフの山の下までこぎよせ、山の上の小さな町を見て、そこにいた人たちに、"この町はだれのものか"とたづねた。そのものたちは彼らに言つた。"我々の所にはキー、シチエク、ホルフという三人の兄弟と、その妹ルイベジがいた。彼らがこの町をつくり、死にたえた。我々はこゝに住みコザレに貢税を納めている"と。そこでアスコルドとシルは"われらこそヴァリヤギの公である"と彼らに言つて、君臨するためその町にとどまり、多くのヴァリヤギを集め、ポリヤネの国を治めはじめ、ドレヴリヤネ及びユグレットイと戦をおこなつた』

そして、今度は、このアスコルドとシルが殺される物語のくだりも、ウステュグ年代記は、その書き出しから、余りにも物語的である。特に、幼少のイゴリとオレグの進む途中での詳しい説明が面白い。軍勢を進めてキエフに到着した時に、イゴリとオレグは、キエフの町にアスコルド兄弟が君臨していることを聞き知つ

たと書かれているのが、ノヴゴロド才一年代記や『過ぎし年月の物語』である。ところが、ウスチユグ年代記によれば、ノヴゴロドを出発する時からキエフにアスコルド兄弟が君臨していることを知っていた。そして軍勢を進める目的の一つもアスコルド征伐なのであつた。それにもかゝらず、キエフに到着したイゴリとオレグは、其処の人々に向つて『誰が君臨しているのか?』と尋ねた挙句に、それがアスコルド兄弟であることを知るといふ記事になつている。(『古代ロシア研究』才五号; p. 95~p. 98 参照)。そして、もしブイリーナの物語の内容を思い起すとすれば、おそらくは、ウスチユグ年代記の記事が一番それに近いように思われるのである。アスコルド兄弟をうまくだまして殺す物語は大體三者ともよく似ているが、このだまし打ちのくだりで、非常に面白い内容を加えているのが、ニコン年代記である。軍勢を船にかくして、平和な商人だといつわり、アスコルド兄弟を町からおびき出すのに加えて、ニコン年代記では、もう一つ、病気だといつわつて相手を安心させている。即ち、

В лето 6389.

Олгово княжение.

Поиде Олег из Новагорода, поим с собою Игоря, и прииде к Смоленьску, и приа град, и посади в нем мужи свои. А оттуду поиде вниз по Днепру, и прииде к горам Киевским; и уведе Олег, яко Асколд и Дир княжита в Киеве. Игорь же и Олег творящася мимоидуша, потаистася в лодиах, и неким дружине своей повеле изыти на брег, сказав им дела тайная, а сам творящеся болезнуа, и ляже в лодии. И посла ко Асколду и Диру, глаголя: "гость есмь Подугорский, и иду в Греки от Олга князя и от Игоря княжича, и ныне в болезни есмь,

и имам много великаго и драгаго бисера и всякого узорочна; еще же имам и усты ко устом речи глаголати ваша к вам, да без коснения приидите к нам". Пришедшим же им скоро в мале зело дружине, и в лодию влезшим видети болнаго гостя, и рече им: "аз есмь Олег князь, а се есть сын Рюриков Игорь княжичь". И в той час убиша Асколда и Дира, и несша их на гору, погребоша ю, еже ся ныне нарицаеть Угорьское, идеже есть двор Олмин; на той могиле постави Олма церковь святого Николу, а дирева могила за святою Ириною. И седе Олег княжа в Киеве.....

〔6389(881)年.

オレグの統治.

オレグは自分にイゴリをともない、ノヴゴロドから出発し、しかし、スモレンスクに到着し町を手に入れた。しかしその中におのれの家臣たちを封じた。ところで其処からドネブル(河)に沿つて下り行き、キエフの山に着いた。オレグは、アスコルドとジルがキエフに公として君臨しているのを知つた。イゴリは、しかしオレグも通過する恰好をよそおつて船の中にかくれた。しかしおのれの一部の親兵団におのれのひそかなる仕事を伝えて岸へあがるように命じた。一方、自分は病気をよそおつて船の中に横たわつた。しかし、アスコルドとジルに使者をたてて言つた。
「(我は)ウゴリの近くの商人である。しかし公なるオレグ及び公の子なるイゴリから(派遣されて)グレキへ行く途中である。しかし今、(我は)病気であるが(我は)多くの大いなる、しかし高価なる真珠及びあらゆる装飾品をもつている。なおこの上は貴下に向つて直接口から口への会談をおこないたい。すみやかに我々のもとに来たれ」と。ところで、間もなく非常に少数

の親兵団を組んで彼らがやつて来て、病気の商人を見ようと船の中へ入つたとき、(オレグは)彼らに言つた。「我は公のオレグであり、これはリュリクの子の公子イゴリである」と。しかしたゞちにアスコルドとジルを殺し、彼らを山の上へ運んで埋めた。そこは現在ウゴルスコエと呼ばれている。其処にはオルマの家敷がある。その墓の上にオルマが聖ニコラ教会を建てたからである。ところでジルの墓は聖イリナ(教会)の裏にある。しかしオレグはキエフに君臨しつゝ坐した……」

アスコルドとジルの物語がどれほど多くのバリエーションをもつていた伝承であつたかがこれだけで充分判明することであろう。その伝承は各地に、また各時代において種々の色合いのちがいをもち、生み、そして伝えられたことであろう。ネストルは単にそのバリエーションの一部分を『過ぎし年月の物語』の中に編集して書き込んだものにすぎない。キーの兄弟、アスコルドの兄弟、そしてロシアに招かれたリュリクの一族たち、それらの伝承物語がロシアの中心的な種族——例えばポリヤネ——によつて、同一地域で起つたものであり、一連の歴史事実の反映であると強辯する証拠は何処にもない。それぞれの伝承が発生した時代も地域も、伝承したグループ或は社会的階層も多くは異つたものであつたことであろう。たゞその一部分が、幾層かに積み重ねられ、適当に省略編集されて『過ぎし年月の物語』の中に書きとめられたにすぎないであろう。勿論、キエフという町を中心にして、これらの物語が『過ぎし年月の物語』の中にまとめられた以上、キエフという町の文化の古い層が既にその頃、もう二重・三重に重ねられていたかも知れない。キエフが考古学的な発掘によつて、もしも、幾層かの文化層の跡を示すとすれば、この問題はまた面白いであろう。別の角度から見ると、ノヴゴロドの公が商人と称してキエフの権力者をおびき出したという物語から、既に、キエフではなくて、ノヴゴロドの方が高い交易

活動の町であつたという見方も成り立つであろう。しかし、それらの歴史事実の反映を求めるのが此処での目的ではない。

6374(866)年の項にアスコルドとジルがビザンチンへ遠征したという記事があつたが、ハマルトルスの年代記にロシア軍の侵入を伝えている記事を利用して、それがアスコルド兄弟の仕業であつたという風につじつまを合わせたものである。としたら、アスコルドとジルは、オレグとイゴリによつて征伐される物語とは別に、一代の英雄であつたという伝承がネストル当時何処か別のところにあつたはずである。この様にヴァリヤギからリユリク一族がまねかれ、アスコルドとジルが殺されるまでの様々の伝承物語が様々に伝えられていたことであろう。そのことを最も有力に証明するのがニコン年代記である。其処には、ネストルが書き取つて題材以外にも、例えばヴァジム〈Вадим〉が殺される話まで含めて取りあげられているからである。ニコン年代記には6367年の項として、ヴァリヤギを招へいしようという相談の記事がみとめられ、6369年の項には招へいの折の使者の口上が書かれて、此処ではルンとヴァリヤギの等式が成立される。ところが、6389年の項で殺されるアスコルドとジルの物語よりも17年も以前の6372年の項では、アスコルドの息子が殺される記事があり、同時にヴァジムも殺されるのがこの同じ年だとされている。或はアスコルドの息子の名がヴァジムであつたというつもりなのだろうか？

В лето 6372.

Убиен бысть от Болгар Осколдов сын.

Того же лета оскорбихася Новгородци, глаголюще:

"яко быти нам рабом, и много зла всячески пострадати от Гюрика и от рода его". Того же лета уби Гюрик Вадима храбраго, и иных многих изби Новгородцев съветников его.

〔6372(864)年。〕

オスコルドの息子がヴォルガレのために殺された。

この同じ年にノヴゴロドの人々がはづかしめを受けて言つた。「リユリク及び彼の一族によつて我々は奴隷にされ、あらゆる多くの災いを受けなければならぬ」と。その年に、リユリクは勇敢なるヴァジムを殺し、しかして、他の多くのノヴゴロド人である彼（ヴァジム）の相談相手たちを殺した』

この記事は、ノヴゴロド才一年代記にも、多くの年代記の『過ぎし年月の物語』にも見られないのである。ニコン年代記はつゞいて6373年の項にアスコルドとシルがポロチヤネを征伐して多くの悪をなしたと記し、6374年の項では二人のビザンチン遠征の消息を伝え、且つ6375年の項ではビザンチン遠征から戻つたアスコルド兄弟がキエフにとどまつて多くのベチエネギを殺し、一方ノヴゴロドからは盛んにキエフへの逃亡者が増加したと伝えている。このことも、勿論『過ぎし年月の物語』は伝えていないのである。『過ぎし年月の物語』の該当部分というのは、いづれにしても、ネストルの主観的な編集によつて多くの伝承物語のほんの一部が記録されたものにすぎないことは推察されるであらう。

『過ぎし年月の物語』の6390(882)年の項の最後にみられるオレグの支配成就と安定もそれらの伝承の一つであつたと思われる。また、6411(903)年の項にみられるオリガという名の妻を迎える記事も、勿論、伝承によつたものである。プスコフから人々がオリガを連れて来たとあるのが面白い。先にあげた6415(907)年の項のオレグのビザンチン遠征は、最も鮮やかに伝えられた英雄伝承であつた。オレグの一度目の遠征とそれによつて二度目の遠征も、イゴリの死の記事もまたその様な伝承であつた。ネストルはそれらを年号に配列しつゝ如何にも歴史事実らしく見せるために、ハマルトルスの年代記及びその続編の訳本からの記事を織り込んだのである。何処からか新しく入手

したビザンチンとの条約文もその際に利用していた。『過ぎし年月の物語』全体を通じて見て、非常に多くの伝承物語が此処に織り込まれていたことは既に前述したが、その主要なものは、ほとんどネストルの手になつたものであると考えてもよいかも知れない。

オレグの支配権確立を示す『過ぎし年月の物語』（ラヴレンチー；トロイツキー、イパーチー各年代記）の6390年の項とは、次の様な文章である。

Седе Олег княжа в Киеве и рече Олег: "се буди мати градом Руским". Беша у него Варязи и Словени, и прочи прозвашася Русью. Се же Олег нача города ставити и устави дани Словеном, Кривичем и Мери; и устави Варягом дань даяти от Новгорода гривен 300 на лето, мира деля, еже до смерти Ярославле даяше Варягом.

『オレグは君臨しつゝキエフに座した。しかしてオレグは言つた。〃(汝こそ)ルシの町々の母たれ〃と。彼のもとにはヴァリヤギとスロヴエニが居り、他のものはルシと呼ばれた。さて、オレグは町々を配置しはじめ、スロヴエネ、クリヴイチ、およびメリヤに対して貢税を定めた。しかしてヴァリヤギに貢税としてノヴゴロドから一年に三百グリヴナを、平和のために与えるよう定めた。これはヤロスラフの死に至るまで、ヴァリヤギに与えていたものである』

ちなみに、この文章でルシという言葉に注意してみると面白い。ネストルがヴァリヤギとルシの等式を成立させ、それ以後の年代記者たちがそれを何気なく踏襲していたが、その当のネストルが、この一節におけるルシをヴァリヤギ或はリュリク一派の連中とどのように関連させて考えていたのであろうか。それから、もう一つ、此処では、明らかに、キエフが全ロシアの主権的都市になり

、北方のノヴゴロドの権力を配下におさめたことになつていると考えられよう。としたら、少くともこの一節のもとになつた伝承は、ノヴゴロドではなくてキエフの伝承であつたということになる。そして、その主領は、ノヴゴロドに伝えられたと思われるリユリク一派の直系ではなくて、リユリクの幼少の子イゴリの軍司令官オレグという傍系的人物であつた。ノヴゴロドの伝承を直線的に引きのばして伝えているものではなくて、此處ではキエフの伝承を組み入れている。だから、反対にノヴゴロドオ一年代記は、決して、オレグを主領としては登場させていないのである。即ちキエフに公として坐した人物はオレグではなくて、イゴリであつた。ノヴゴロドオ一年代記では、だから6362(854)年の項の最終部分に、イゴリを主領とした次の様な類似記事がみとめられる。

И седе Игорьъ, княжа, в Киеве; и беша у него Варязи мужи Словене, и оттоле прочии прозвашася Русью. Сеи же Игорьъ нача грады ставити, и дани устави Словеном и Варягом даяти, и Кривичем и Мерям дань даяти Варягом, а от Новагорода 300 гривен на лето мира деля, еже не даютъ.

『しかしてイゴリは君臨しつゝキエフに坐した。しかして彼のもとはヴァリヤギ、家臣のスロヴエネがあり、それにより、他のものたちはルシと呼ばれた。ところで、このイゴリは町々を配置しはじめ、スロヴエネ及びヴァリヤギに貢税を納めるように定めた。クリヴィチもメリヤも、ヴァリヤギに貢税を納めるように(定めた)。ところで、ノヴゴロドからは平和のために一年に三百グリヴナを(納めるように定めた)。それを(ノヴゴロドの人々は)納めなかつた』

主領の名前だけが差し違つていだけのように見えるながら、『過ぎし年月の物語』の記事との間には非常に大きな差がある。

であろう。例えば、ルシと呼ばれた連中の内容、或はヴァリヤギと書かれているものの実体、そして、貢税を誰が誰に向つて納めるのかという内容等々である。種々の伝承を一つにまとめてネストルが『過ぎし年月の物語』の記事のような形にまとめたものとしたら、その記事を唯一重要な手がかりとする歴史家は早計のそしりをまぬがれないであろう。ニコン年代記は『過ぎし年月の物語』の記事を踏襲し、ソフィヤオ一年代記も同じ踏襲を見せながら、ネストルの取りあげ方を一層強く確認するかの如く、例えば、ルシの呼び名についても、『彼（オレグ）のもとには家臣のヴァリヤギ、スロヴェネがあり、しかして、それによつて他の者たちもまたルシと呼ばれた』〈и быша у него мужи Варязи, Словѣни, и оттоль прозвашася и прочии Русью〉となつている。

この様にネストルはその当時流布していた伝承の数々を集め、或は先人が既に利用していた伝承を再編集したのであつた。だから、それ以後の年代記者たちは、おおむね、ネストルの『過ぎし年月の物語』に準拠するよになつていつた。先人が集めたり利用したりした伝承ではなくて、ネストルが自分で当時の伝承を利用して書きつけた典型的なものを此處で求めるとしたら、それは、先に引用したことのある、6500(992)年の記事であろう。即ち、それはペレヤスラヴリという町の名の由来を物語る話であつた。ベチエネギとロシア軍が対立していた時、敵方からの提案によつて、一騎打ちをし、その勝負を以て全軍の勝負に置きかえようという物語である。ロシアのヴオロジメルが探し出した青年がベチエネギの偉丈夫を打ちまかせその名誉を祝してこの町の名が起つたという話である。これはネストルの手によつて6500(992)年のヴオロジメル公の記事のエピソードとして組み入れられているが、実は、はるかそれよりも以前、即ち84年も昔の6415(907)年の記事にペレヤスラヴリという町の名前が堂々と出

ているのである。然もその記事は、ネストルの勝手な文章ではなくて、明らかに彼が何処からか見つけ出して来たビザンチンとの条約文の写しの一節なのである。月決め糧目を受け取るべき町の出身者を先づキエフの人だとした後に、チエルニゴフ〈Чернигов〉の人と続き、三番目にベレヤストラヴリの出身者とあつて、つづいて、その他の町々という文章がみとめられる。外国との条約文に既に出現している町の名が、それから84年も後になつて、ヴオロジメル時代に始めて名づけられたのだというようにな、とんでもない話をネストルはやつてのけている。勿論、ベレヤストラヴリという町の名にちなんだ英雄一騎打ちの物語がネストル当時存在していたにはちがいない。そしてその伝承はおそらくベレヤストラヴリの地方そのものに伝えられていたものであろう。然し、その伝承がヴオロジメルという大公にちなんだものであつたかどうかは至つて疑問である。少くともネストルがその伝承をヴオロジメル大公の記事のエピソードに利用したことだけはたしかである。その際に、ヴァリヤギ招へいと、ルシの呼び名についての説話を書き取る折ほどの細心な関心深さをネストルが持たなかつたために、84年間も前に出現した町の名を忘れてしまつていた。とんでもない矛盾をおかしてしまつたものである。というよりも、ヴァリヤギ招へいとルシの呼び名の記事だけが余りにも細心に用心深く組み立てられたものであつて、その他の多くの記事は前後矛盾してもほとんどは不用心に見のがされて来たのであつた。

古い伝承や文獻によらずに、ネストルが自分で経験し、自分で見聞し、或は事件の立ち合い人として、生の事件を直接自分の手で書き加えたと思われる部分に就て検討してみよう。勿論、それは、『過ぎし年月の物語』の終末近くの部分である。其処にはネストルの手になつたと思われる独特の一人称物語が少くとも三個はみとめられるであろう。即ち、6599(1091)年の項に

おけるフエオドシイの遺体を運び移す物語，6604(1096)年の項にあるベチエルスキー修道院へのボロヴェツの来襲の物語，6615(1107)年のスヴィヤトボルクの遠征の成功の物語である。この三者のうち最初の6599(1091)年の項の文章は先に引用しておいた。即ち，一人称で記者自身が直接顔を出す文章である。ノヴゴロドオ一年代記は至つて手短かに『修道院長フエドシイを(人々が)ベチエラ(洞穴)から修道院へ運び移した』〈Пренесоша игумена фелосна ис Печеры в монастырь〉という記事があるに過ぎない。それに対して、『過ぎし年月の物語』では，ノヴゴロドオ一年代記にみられる図式的な一般記述法則を破つて，余りに詳細に事の次才を書きつとつたのであつた。夜中，ひそかに洞穴の中のフエオドシイの棺を掘り起し，協力者とシャベルを交互にふるい，つかれ果てゝ洞穴の前で寝込んでしまふ。修道院で朝の拍子木が打たれるのに気づいた協力者がネストル(〈我〉—〈я〉)にそれを告げた時，まさにその時に棺を掘りあてたとあるのである。そして，その時の神秘的なおそれをネストルは生々しく書き伝えていたのである。年代記の記述に際して，記者の主観は勿論度々其処に侵入していたことであろう。また，主観によつて多くの素材を整理編集することは当然であつたであろう。然し，記述文そのものは，至つて，図式的・公式的なものが多く，一人称で『我』として登場する記者が自己の心理的体験を生々しく語るのは，この記事において初めてであつた。その態度が，今度は『我』という単数形ではなくて，複数形の『我々』〈мы〉として顔を出すのが，6604(1096)年の項である。ノヴゴロドオ一年代記にはこの年の項は全く空白なのである。『過ぎし年月の物語』はこの年の項に実に長い記事を納めている。その幾つかは既に引用したところであるが，ネストルの筆致が一人称でほとぼしるところは，ベチエルスキー修道院へのボロヴェツ来襲の記事である。直接の体験でなければ書けない文章であり，同時に，年代記々述の公式を全く無

視した書き方でもある。即ち、其処には次の様な文章が読まれる。

И в 20 того же месяца, в пяток, приде второе Боняк безбожный, шелудивый, отдай, хыщник, к Киеву внезапно, и мало в град не въехала Половци, и зажгоша болонье около града, и възвратися в монастырь, и възгоша Стефанечь монастырь, и деревне, и Германечь. И придоша в монастырь Печерский, нам сущим по кельям почивающим по заутрени, и кликнуша около монастыря, и поставиша стяга два пред враты монастырскими, нам же бежащим за дом монастыря, а другим възбегшим на полати. Безбожные же сынове Измаилеви высекоша врата монастырю и поидоша по кельям, высекающе двери, и износаху аще что обретаху в кельи; посем възгоша дом святыя Владычине нашея Богородице, и придоша к церкви, и зажгоша двери еже к угу устроении, и вторыя же к северу; влезше в притвор у гроба Феодосьева, емлюще иконы, зажигаху двери и укараху Бога и закон наш. Бог же терпяше, аще бо не скончался бяху греси их и безаконья их; тем глаголаху: "где есть Бог их? Да поможеть им и избавить я", и ина словеса худная глаголаху на святыя иконы, насмихающеся, не ведуще, яко Бог кахеть рабы своя напастми ратными, да явятся яко злато искушено в горну: хрестьяном бо многыми скорбыми и напастыми внити в царство небесное, а сим поганым и ругателем на сем свете примшим веселье и просторонство, а на оном свете примуть муку с дьяволом, угото-

ВАННИ ОГНЮ ВЕЧНОМУ.....

『この同じ月(六月)の二十日、金曜日に、神を信ぜざる、い
どうべき、肉食獣のボニヤクが、ひそかに、再度キエフに来襲し
た。ボロヴエツたちは、ほとんど町の中へ侵入せんばかりで、町
のほとりの底地に火を放ち、修道院へ向つてとつて返し、ステエ
フアンの修道院及び村々、及びゲルマンの(修道院)を焼き払つた。
しかして、ベチエルスキー修道院へ攻め来たつた。我々が朝の
勤行の後に各庵室で眠つていた時のことである。(ボロヴエツたち
は)修道院の近くで叫び、修道院の門の前に二本の旗を立てた。
我々は修道院の家のうしろへ逃げ、また別の人々は二階へ逃げ
あがつたのである。神を信じないイズマイルの子等は修道院の門
を打ちこぼち、各庵室に散り入り、戸をこわし、しかして庵室
において(彼等が)見つけたものがあれば(それを)ことごとく持
ち出していた。その後、我々の神の母なる聖母の教会を焼き、し
かして教会に来たり、南向きにつくられているとびら及び北向
きの才二のとびらを焼いた。彼等は玄関のフエオドソイの棺のそ
ばに侵入し、聖像を取りはづしてとびらを焼き神及び我々のおき
てをそしつた。神が(これを)耐え給うたのは、いまだに、彼等
の罪及び彼等の無法が終つていなかつたからである。そのとき
(ボロヴエツたちは)言つたものである。＃どこにこの者どもの神
がいるのか？この者どもを助け、この者どもを許してやればよい
のに＃と。しかしてまた別の悪しき言葉を聖像に向つて語り、あ
ざけり笑つていた。(彼等は)神がおのれの奴隷たちを戦争の災
厄によつて罰し給うていることを知らなかつたからである。(人
々が)炉の中で試された黄金のようになるためなのである。キリ
スト教徒は多くの悲嘆や攻撃を経てはじめて天なる王国に入るこ
とができるからである。ところで、これらの異教徒たち及び侮辱
者たちはこの世では喜びと満足が手に入つていても、あの世では

悪魔と共に苦しみを受け、永遠の業火にやかれる運命なのである。……』

この一節をいかに、年代記の当然の記事のように見せようとしても、それが、およそ、年代記には不向きな個人的な文章であることを、ニコン年代記は見抜いていたのであろう。ニコン年代記にはボニヤグのキエフ来襲を伝える公式的な記録文章があるのみで、この文章はその影だけに投影していない。ソフィヤオ一年代記にも一言葉もそれらしい文章は書かれていない。

ネストルのこの様な個人的体験や見聞による記事は『過ぎし年月の物語』の終る6618(1110)年の項を最後としそれ以前の数年間の記事が、おそらく、全部それに当ると考えてよいであろう。たゞ、その終末近くの文章はその後数年して修道院長セリヴエストルによつて、もう一度、書き直されているから、本当にネストルの手になつたまゝの文章が現在に伝えられているかどうかは分らない。ノヴゴロドオ一年代記、ソフィヤオ一年代記、或はブスコフオ一年代記その他多くの年代記と比較して見て、ラヴレンチー、トロイツキー、イバーチー各年代記の『過ぎし年月の物語』の記事の相違点を求めれば、ネストルの筆になつた部分は或程度まで明らかになるはずである。それらについての一々の検討は、もう此處では省略しよう。

ネストルという人物が多くの伝承を聞き知つて、それらを数多く『過ぎし年月の物語』の中に埋め込み、且つ、自己の体験や見聞をも書き込んだことは、彼の広汎な記述態度のもたらすものであつた。彼の記述態度が広かつたこと以上に、また、文献的にも非常に博学であつたと思われる。ハマルドルスの年代記及びその続編の古代語訳、多くの聖者伝、或は政治的文書、等々を充分に読みつくしていたことは、『過ぎし年月の物語』の記述態度にも充分うかゞい知ることができた。それらは今まで筆者が引用して来た数々の文章を通じても知ることが出来る。例

えば、ハマルトルスの年代記は812年まで、その続編は948年まで、またニキフォルの編集した編年記は828年まで書かれていたし、新ヴァシリイ〈Василий Новый〉伝はイゴリのビザンチン遠征の記事を含んでいたし、その他、数々のビザンチンから入った文献の訳本を利用していたことであろう。それらについては、更めて『古代ロシア研究』誌に今後詳しく発表されて行くことであろう。そして、その際には、それらビザンチンからの文献に書かれている文章をネストルがどれほど祖国びいき、身びいきに着色したかも明らかにされることであろう。勿論、セプタギンタを中心とする聖書の文句は随所に引用されていた。

ともあれ、かくして、最終的にはネストルの手によつて、既に現代ラヴレンチー年代記などに伝わる『過ぎし年月の物語』の姿が固定されたと考えられる。それが如何に多くの素材と、如何に多くの年月とををかけて此処までの形に形成されて来たかという検討は、既にこれで終つてよいであろう。この様にして一応の固定化と完成を見た『過ぎし年月の物語』は、その後のロシアで眼もくらむほどに巨大な量の各種各様の年代記の手本になり、出発点になつていつたのである。そのことは、実に1826年に勅命による出版が始められて才一巻が出されてから、今日1965年に才三十巻が出されるまでの各年代記の巨大な量そのものに示されているところである。

- V -

『過ぎし年月の物語』の記事の中で、特に記録的な部分や物語的な部分のみに就て今まで検討を進めて来た。然し、『過ぎし年月の物語』は、その様な部分だけによつて埋めつくされているのではない。記録的な部分や物語的な部分の記述には、多くの場合、年代記者(たち)による解説・説明或は正当化の文章

が加えられていたのである。勿論、その解説的な文章が一人の人物の一貫した立場からなされたものでないことは、記録的な文章の場合と同様であつたであらう。然し、記録的な文章に比べて、解説的な文章は、より多く、或種の主観的な統一の立場へ向つてまとめられ勝ちである。言いかえれば十二世紀初頭におけるロシアのギリシア正教的世界観という統一的な一点から多くの事件は解説されたことであらう。例えば、年号を設定する以前の記事で『というのは、オブレ(人た)は体が大きく、心が高慢であつた。しかして神は彼等を亡ぼし給ひ、ことごとくが死に絶えた』〈Быша бо Обръть тѣломъ велици и умомъ горди, и Богъ потреби я, помроша вси〉とある記事のうちで、少くとも、『神が彼等を亡ぼし給ひた』〈Богъ потреби я〉は、記事としては余計な解説であつたかも知れない。心が高慢であつたことを踏まえての半ば教訓的な、半ばは当時の世界観から導かれる当然の説明的な文章であつたであらう。だから、ロシアに輸入され、やゝ定着しはじめた頃のギリシア正教の骨組みは、この様な解説的記事によつて探り出すことができるであらう。その骨組みの最も素朴なものは、多くの種族の風習を記録し終るに際して、『しかるに我々、あらゆる土地のキリスト教徒は……』〈Мы же християне, елико земля〉と大きく開き直つて、自分たちのことを述べる折に充分顕現していた。それは〈в святую Троицу, в едино крещенье, в едину вѣру〉『聖なる三位一体を、唯一の洗礼を、唯一の信仰を』信ずることであり、〈законъ имама единъ〉『唯一のおきてをもつている』ことであつた。その骨組みが、多くの具体的な事件の記述の際にどう顕現していたかを、『過ぎし年月の物語』そのものの示す年号順にあとづけて見ることは無駄ではないであらう。というのは、我々は西歐のカソリック的精神土じようをロシアには求め得ないし、ギリシア正教の鮮やかな跡は、もうロシアのこの

ような文献にしかないからである。然もそれがロシアの精神士じよりの最も重要な要素を成すものでありながら、全く無視されて来たからである、なおまた、その点が無視している限り、『過ぎし年月の物語』をはじめとする古代ロシア文学作品の精神構造は把握し難いと思われるからである。

6420年の項で『過ぎし年月の物語』はオレグの死を報じていた。占師の予言通り、オレグの愛した馬のために生命を落す物語である。そして、占やよう術と神の信仰とのかみ合いの議論を、その直後に長々と書き加えていたのである。その両方の文章は、一方が伝承であり、他方は古い文献からの抜き書きであつたとして、既に引用しておいた。そして、6463年の項では、オリガの洗礼を受ける物語について、洗礼とは即ち悪魔から身を守るてだてであると主教に語らせ、本当の英知とは洗礼によつて生まれるものであることを長々と説くのであつた。オリガは息子スヴィヤトスラフに洗礼を受けることをすゝめたのであるがスヴィヤトスラフは母のすゝめに耳をかさない。年代記者はそのことを批判して次の様に書きとめていたのである。洗礼を受け、英知をもち、そして悪魔をしりぞけた者の最初の理想像が此處にかいま見られるであらう。

Се же ктому гневашеся на матерь. Соломан бо рече: кахай злыя приемлеть себе досаженье, обличай нечестиваго проречеть себе; обличенья бо нечестивым мозолье суть; не обличай злых, да не възненавидяты тебе. Но обаче любяше Ольга сына своего Святослава, рькущи: "воля божья да будеть, аще Бог хочеть помиловати рода моего и земле Русские, да възложить им на сердце обратитися к Богу якоже и мне Бог дарова". И се рекши, моляшеся сына и за люди по вся ноци и дни, кормящи с своего до мужьства его и до возраста его.

『なおその上に彼は母に腹を立てた。というのは、ソロマンは言つたからである。』悪しきものを罰するものは、おのれに立腹をうけるであろう。心正しくないものを指弾するものは、おのれに侮辱をうけるであろう（箴言；オ九章；七節……筆者註）というのは、非難は心正しくないものにとつては苦しみであるからである。悪しきものを非難することなかれ。さすれば（彼らは）汝をにくまないであろう（箴言；オ九章；八節……筆者註）』と。それにもかゝらず、オリガは、おのれの息子スヴイヤドスラフを愛していたので言つた。『神の意志のあらわれんことを。もし神が我が一族およびルシの国に恩ちようをたれ給うならば、我にも神がなし給うたよりに、彼らの心に神に向う（気持を）起させ給うであろう』と。しかして、こう言つて、（オリガは）昼も夜もつゞけて息子と家臣のために祈り、おのれの息子を彼が成年に達し一人前になるまでやしなつた』。此処には記者の主観を通じての、理想の、母親と統治者と、そして信者との三つの像が重ねられている。続く6477(969)年の項でオリガの死を報じ、ひきつゞいて書きあげたオリガ女帝への讚美の言葉も、またその様なものであつた。ところが、これと反対に、年代記者がきびしく非難して書きとめた文章がある。それは、6488(980)年の記事である。其処にはヴオロジメルがボロツクの公ログヴオロドの娘ログネジを妻にしようとして断わられる物語が書きとめられた。ログネジはヴオロジメルよりもヤロボルクの方へ心を傾けていたのであつた。ヴオロジメルはログネジの父や兄弟を殺し、強引に妻として、ヤロボルクに向つて進攻した。ヤロボルクはキエフにたてこもつた。ヴオロジメルはヤロボルクの軍司令ブルドに使者を送つて裏切りをすゝめるのであつた。ブルドは自分の公のヤロボルクを裏切つて、ヴオロジメルに味方し主人殺害に荷担するのである。年代記者は此処で、裏切りについて怒りをぶちまけるよりの感情的な記述をしたのである。『過ぎし年月の物語』全体

を通して、この個所ほどの激しい非難表明の文章は多くない。その文章がオリガ女帝への讀美の文章の、しばらく後に出現していることも見落せないであろう。讀美と批判、賞讃と非難の激しい文章の交替は、このあたりの記述に『過ぎし年月の物語』が非常に気を配り、力を注いでいることを証明するものである。オリガ女帝及びヴオロジメル大公の記述とは、実に、ロシアにキリスト教が受け入れられた最初の支配者の記述なのであつた。最も集約された強い力が此処にこめられたのも当然であろう。ところで、このブルドの主人裏切りについての非難的記述とは次の様なものである。

О злая леть челоуецьска! Якоже давид глаголетъ:
ядый хлеб мой възвеличил естъ на мя леть. Се бо
лукавъствоваше на князя своего летью. И паки:
язьки своими льстяхуся; суди ми, боже, да от-
падутъ отъ мысли своих, по множьству нечестья их
изрини я, яко прогневахаша тя, Господи. И паки то
же рече давид: мужь в крови льстив не прищловить
дний своих. Се естъ съвет зол, иже свещевають на
кровопрлитъе; то суть неистовии, иже приемше от
князя или отъ господина своего честь, ли дары, ти
мыслять о главе князя своего на погубленье, горь-
ше суть. бесов. таковии: якоже блуд преда князя, и
прим отъ него чьти многи, се бо бысть повинен
крови той.

『おゝ、人間の悪しき偽まんよ！ ダavidが言つた如く、
我がパンを食ひし者が我に対して大いなる偽をなした、』とい
うのは、これはおのれの公に対して偽をもつてあざむいたからであ
る。しかして、またさらに『おのれの言葉で（彼は）あざむいた
・神よ、彼らを裁き給え。（彼らをして）おのれの思いを捨てさせ

給え、なお、彼らの不信の多き故に、彼らを見捨て給え。主よ、汝を（彼らは）怒らせたが故に」（——詩篇；五十四章；二十四節——筆者註）。しかして、さらに、ダヴィドは同じく言つた。「血において偽まんの的である男は、おのれの一生の半ばを全うしないであろう」と。これは流血をたくらむ悪しき陰謀である。すなわち、おのれの公或は主人がち榮譽或は贈物を受けながら、おのれの公の生命を奪うことをたくらむよりな連中は、残忍であり、そのような連中は悪魔よりも冷酷である。その如く、彼から多くの榮譽を受けながらブルドはおのれの公を裏切つた。この故に（流された）その血に対して彼（ブルド）は責められるべきであつた』。

ヴオロジメル公に就ての記事には、彼が、いまだキリスト教を摺取しない以前の行状が数多く書き取られていて、例えば、キエフの岡の上にスラヴ原始宗教の主神ペルンをはじめ数多くの神像を建て、犠牲をささげていた様子が書きとめられている。そして年代記者は、その様な異教的な振舞いにかゝわらず、神はヴオロジメルを罰し給わず、むしろ、大きな恩ちによつて次の時代にはその岡の上にキリスト教の教会が建つように世情を導き給うたと述べるのである。『罪人に対しても至善なる神は死を望み給わず、その岡の上には現在教会が建つていて、後に述べるように、聖ヴァシリイ（教会）なのである』〈Но преблагий Богъ не хотя смерти грѣшникомъ; на том холмѣ нынѣ церкви стоять, святаго Василья есть, якоже последи скажемъ〉『過ぎし年月の物語』は引きつゞいてヴオロジメルが幾百人の妾たちをたくわえていたことを記述するが、其処ではじめて、女に就ての深い議論をはじめめる。大体、『過ぎし年月の物語』は例えばオリガ女帝の記事に女性を登場させたものの、それはあくまで英雄としての女性であるにすぎなかつた。『物語』全体を通じて、女についての議論を書きしるじたのは、後にも先にもヴオロジメ

ル記事の中だけにおいてとあつた。古いロシアのキリスト教撰取直後の女性論の唯一のものであり、また、同時に、当時の宗教的感覚における女性観の唯一のものであつた。その記述は妾を数多くたくわえたヴオロジメルを同じく多くの妾をもつたソロモンに対比して書き終つた直後に出現する。ソロモンの箴言三十一章才十節から才三十二節までの言葉を盛んに織り込みながら、唯一の女性論を次の様に宗教的いましめを含みつゝ展開するのである。

Велий Господь, и велья крепость его, и разуму его несть конца! Зло бо есть женская прелесть, якоже рече Соломан покаявся о женах: не вънимай зле жене; мед бо каплетъ от уст ея, лены любодейци, во время наслаждаетъ твой гортань, последи же горчае золчи обрящутъ; прилепляющеся ей смерть в ад; на пути бо животыня не находитъ, блудная же теченья ея, неблагосразумна. Се же рече Соломан о прелюбодейцах, о добрых женах рече: драгыни есть каменя многоценна; радуется о ней мужь ея, деетъ бо мужеви своему благо все житье; обретши волну и лен, творить благопотребная рукама своима; владаеть яко корабль, куплю деючи, и собираетъ особь богатство; и въстав и от ноши, и даетъ брашно дому и дела рабьям; видевши стяжанье куповаше, от дел руку своєю насадить тяженье; препоясавши крепко чресла воя, и утверди мышцу свою на дело; и вкуси, яко добро есть делати, и не угасаетъ свѣтильник ея всю ночь; руке свои простираетъ на полезная, локъти своя устремляеть на вретено; руке свои простираеть

убоному, плод же простре нишему; не печется мужь
ея о дому своем, егда где будеть вси свои ея оде-
ни будуть; сугуба оденья створить мужеви своему,
очервьлена и багряна себе оденья; взорен бываеть,
во вратех мужь ея, внегода аще сядеть на сонмици
с старци и с жители земли; опоны створи и отда-
еть в куплю; уста же свои отверзе смыслено, в
чин молвить языкъм своим; в крепость и в лепоту
облечеса; милостыня же ея въздвигоша чада ея и
обогаиша, и мужь ея похвали ю; жена бо разум-
лива благословена есть, боязнь бо Господню да
похвалить; дадите ей от плода устьяну ея, да
хвалять во вратех мужа ея.

『主は偉大であり、しかして、彼（主）の強さは偉大であり、その英知には限りがない』ソロマンが女たちについて後悔して言つた如く、女のミ力は悪であるからである。『悪い女に関心をよせるな。というのは彼女の、すなわち、いん乱な女の口からは蜜がしたたり、一時は汝の喉をよるこばせるが後程には苦いたん汁を（人々は）見出すであろうからである。彼女（いん乱な女）に身をまかすと、地獄への死がある。というのは、生きる道へふみ出さず、また、彼女のいん乱な生活は愚かであるからである』。この様にソロマンは非常にいん乱な女たちについて言つた。良き妻たちについては（次の様に）言つた。『（良き妻は）宝石よりも尊い。彼女の夫は彼女をよるこび（良き妻は）おのれの夫に全生涯を通じて幸をおこなうものである。毛と亜麻を手に入れて、おのれの手で有益なものをつくり出すものである。あきないをなす船をあやつる如く（家政を）なし、しかして、おのれのために富をあつめるものである。しかして、夜の明けぬうちに起き、しかして、家人に食物を、女奴隷たちには仕事を

与えるものである。(自分の)財産を考えて物を買ひ、おのれの両手の働きで畑に植付けをなすものである。おのれの胸には固く帯をつけ、しかして仕事に向つては、おのれの力をつくし、働くことは良いことだと感じ、彼女の灯を一夜中消さないのである。自分の手を有益なことに向けひろげ、おのれの両ひじを紡すいに向け、おのれの両手を貧しきものにさしのべ、果実を貧しきものに与えたのである。彼女の夫はおのれの家のことを心配しない。いつどこにあるうとも、彼女の家のものたちは皆、着せられてあるであろうから。彼女はおのれの夫に二倍の着物をつくり、自分は赤い衣服を(つくる)。もしも集会場でその土地の長老たちや住民たちと共に坐ることがあれば、彼女の夫は常に門の所にみられるものである。(彼女は)織物を造つて売り出す。おのれの言葉でしゃべる時には、おのれの口を思慮深く開くのである。丈夫に、しかも美しくよそおつた。彼女の慈愛が彼女の子供たちをはげまして豊かにした。しかして、彼女の夫は彼女をほめた。と。いうのは、賢い妻は祝福されているからである(彼女は)主へのおそれをほめたゝえるであろうから。(汝ら)彼女に彼女の口の果実を与えよ。門のところで彼女の夫はほめられるべし』

この文章を以て、年代記者は6488年の項の記事を終つてゐるのだから、年代記者が此処に一つの大きな締めくくりと、特別な倫理教訓を示そうとしたことは充分推察し得るであろう。これに続く6489(981)年の項以下は再びヴオロジメルの軍事行動の記録なのである。そして、再び6494(986)年の項では、グレキの哲学者の論述という形で、世界創造からキリストまで、そしてキリストの宗教の本質までを長々と書きしるすのである。『過ぎし年月の物語』は何等かの事件に関して記録し、それを解説し或は説明し、時にはその事件にちなんで説教をすることが普通であつたが、ヴオロジメルのキリスト教撰取の記事においてだけは、ほとんど独立的に、バイブルの創世記以下の要約を書きとめてゐるの

である。それは『過ぎし年月の物語』の記述の基本的姿勢を示すものであつたかも知れない。

さて、事件の記述に際しての解説的な文章に話をもどそう。

ヴオロジメルが、いまだスラヴ原始宗教の神に犠牲をさへけていた頃に、ヴァリヤギ人の身も心も美しい青年がくじに当つて犠牲者にされたことがあつた。其処では、この身も心も美しい青年がくじに当つた理由を年代記者は次の様に解説していた。『この(青年の)上に、悪魔の羨望によつてくじが当つた。悪魔はすべての人々に対して権力をもつており、我慢がならず、このこと(身も心も美しい青年がいること)は悪魔にとつては心の中のいばらの如くであつた。呪われた悪魔は、(この青年を)なきものにしようとして、人々をそゝのかしたのである』〈на сего паде жребий по зависти дьяволн. Не терпящеть бо дьявол, власть имы надо всеми, и се бящеть ему аки тернь въ сердци, тышатся потребити оканьный и наустн люди〉 この記事は6491(983)年の項に見られ、おそらくは、キリスト教徒としてのロシアでの最初のじゆん教者の物語であつたと思われるが、この様な悪魔を解説的素材にする記事は、6523(1015)年の記事の冒頭にも出て来る。即ち、ヴオロジメルが自分の言うことに従順でない息子ヤロスラフに向けて進攻しようとした際に、彼は重病におかされて、それを果さなかつたという記事がある。親が子に軍勢をすゝめる如きことは、悪魔のそそのかしてであり、悪魔の喜ぶ所であると考えたに相違ない。年代記者は、病のためにそれを果さなかつたことを述べて、『しかし、神は悪魔に喜びを与え給わなかつた』〈но Богъ не власть дьяволу радости〉と述べたのである。

6568(1060)年の項にはロシアの公たちが協力してトルキ〈Торкы〉に進攻する記事があつた。ロシア軍に圧倒されて敗退するトルキたちを、半ば説明的に年代記は次の様な文章で伝えて

いる。『しかして神の怒りに追ひ立てられ、或者は冬のために、他のものは飢えのために、また別の者は病と神の裁きのために、逃去の途中で死んだ。かくの如く神はキリスト教徒を異教徒から解放し給うたのである』《и помроша бѣгаючи, Божьимъ гнѣвомъ гонимы, овнѣ отъ зны, друзин же гладомъ, ннн же моромъ и судомъ Божьимъ. Тако Богъ избави хрестьяны отъ поганыхъ》。

また、6581(1073)年の項にはヤロスラフの子等の中の内紛の記事が読まれるが、今度はその記事の終りの部分ではなくて、反対に冒頭に説明的文句が書かれ、『ヤロスラフのこの子等に悪魔は紛争をもちあげた』《Въздвиге дьяволъ котору въ братьи сей Ярославичих》とある。おそらくは、この項のこの部分の加筆者が他の項の書き手とは異つていたために、冒頭にこんな文句を入れたのであつたらう。神と悪魔を素朴に対置した説明的記述はこの後にも数多く見られるところである。悪魔にそゝのかされたという説明を避ける折には、自主的な悪業と見立てゝ、その者は神の前に責任を負うべきものであるとするされるのであつた。例えば、6586(1078)年の項には、七月二十三日と、八月二十五日の二つの出来事の記事がみられ、続いて、オレグとボリスがチエルニゴフに来て民衆に悪業をふるつたという記事がある。そして其処では次の様に厳しい裁きの言葉が書きつゞられるのである。『オレグは、そしてボリスもチエルニゴフに来たつた。(おのれ達が)勝利を得たと考えて、ルシの地に多くの悪をなし、キリスト教徒の血を流した。この血のつぐないを神が彼等の手から取り給うであらう。しかして、キリスト教徒のほろぼされたる魂に対する責任を彼等は負わなければならないであらう』《Олеги же и Борисъ придоста Чернигову, мняще одолѣвше, а земля Русьскей много зло створше, проливше кровь хрестьянскую, ея же кровь взищеть Богъ отъ руку ею, и отвѣтъ дати има

за погубленье душа хрестьяньскы ». そしてその神とは、
『傲慢なるものには逆らい給ひ、温順なる者には助力を送り給
ひ』 <Богъ гордымъ противится, смѣреннымъ даетъ благодать>
(同年項)なのであつた。そして、この年の項には、年代記者が
理想と考えた人間像を書きつけたのである。自からは多くの悪
を人から受けながら、その悪に悪を以てむくいることをしな
かつたイジヤスラフ公への賞讃を以て、次の様に、この年の記事
をしめくくつたのである。『過ぎし年月の物語』の主張の最大
のものの一つであつたと思われる。

Бе же Изяслав муж взором красен и телом велик,
незлюбив нравом, криваго ненавиде, любя правду;
не бе бо в нем лсти, но прост муж умом, не вздая
зла за зло. Колико бо ему створиша Кияне! Самого
выгнаша, а дом его разграбиша, и не взда противу
тому зла; аще ли кто дееть: "высечець исече", то
не съ то створи, но сын его. Паки же брата его
прогнаста и, и ходи по чужей земли, блудя; и се-
дящю ему паки на столе своем, Всеволоду пришед-
шо побежену к нему, не рече ему: "колико от ваю
приях? не вдасть зла за зло, но утеши, рек: "ел-
ма же ты, брате мой, показа ко мне любовь, введе
мя на стол мой и нарек мя старейшину себе, се аз
не помяну злобы первыя, ты ми еси брат, а я тебе,
и положю главу свою за тя", еже и бысть; не рече
бо ему: "колико зла створиста мне, и се ноне то-
бе ся сключи", не рече, "се кроме мене", но на
ся перя печаль братню, показая любовь велику,
овершая Апостола глаголюща: утешайте печальныя.
По истине, аще что створил естъ в свете сем е-

теро согрешенье, отдасться ему, занеже положи главу свою за брата своего, не желая большее волости, ни имениа хотя болша, но за братню обиду. О сяковых бо Господь рече: да кто положить душу свою за други своя. Соломон же рече: "братья в бедах пособива бываютъ, любви бо есть выше своего. Якоже Иоан глаголетъ: Бог любви есть, пребываяи в любви, в дозе пребываетъ и Бог в нем пребываетъ; о сем свершается любви, да достоянье имама к день судный, да якоже он есть, и мы есмы в мире сем; боязни несть в любви, но свершена любви вон изменеть боязнь, яко боязнь мученье имать, бояйхеса несть свершен в любви; аще кто речеть: люблю бога, а брата своего ненавижда, ложь есть, не любяи бо брата своего, его же видеть, бога, его же не видеть, како можетъ любить? Сию заповедь имама от него, да любяи бога любить брата своего". В любви бо все свершается: любви ради и греси разсыпаются, любви бо ради сниде Господь на землю и распятъся за ны грешныя, взем грехы наша, пригвозди на кресте, дав нам крестъ свой на прогнанье ненависти бесовское; любви ради мученици прольаша крови своя; любви же ради сий князь проля кровь свою за брата своего, свершая заповедь Господню.

『イジャスラフは顔が美しく、しかして体が大きな人物であつた。人となりは悪意がなく、ゆがんだことは憎み、正義を愛した。ずるさは彼にはなかつた。心が素朴な人物で、悪に対して悪を以てなすことはなかつた。それなのに、キエフの人々は彼

にどれほどの(悪)をなしたことであろう。(人々は)彼自身を追放し、なお、彼の家を略奪したのだつたが、(彼は)それに対して悪を以てむくいることはなかつた。たとえ、誰かど、〃戦士たちを殺した〃と言ひにしろ、これは彼のなしたことでなくて、彼の息子のなしたことなのである。ところでまた彼の(二人の)兄弟が彼を追放し、しかして(彼は)異郷をさまよひ歩きまわつたのである。しかして彼が再びおのれの王座に座し、打ち負かされたフセヴオロドが彼のもとに来たつた時には、(イジャスラフは)彼(フセヴオロド)に向つて〃汝等から(我は)いくばくの(苦しみを)受けたことであろう?〃とは言ひなかつた。悪にむくいるに悪をもつてせず、かえつて(彼を)なくさめて言つたのである。

〃我が弟よ、汝は、我に対して愛を示し、我を我が王座にみちびき、しかして我をおのれの長兄と呼んだが故に、我は、見よ、以前の悪を思い出さぬであらう。汝は我にとつて弟なのであり我は汝にとつて(兄である)。しかして(我は)汝のためにおのれの生命をすてるであらう〃と。しかしてその通りになつた。(イジャスラフは)彼(フセヴオロド)に向つて、〃いくばくの悪を(汝二人は)我に対してなしたことか、しかして、見よ、今や汝に(その同じことが)起つたのである〃とは言ひなかつた。〃これは我の関知せぬことである〃とも言ひなかつた。しからずして、弟の悲しみを我が身に引き受け、大いなる愛を示し、〃悲しむ者たちをなくさめよ。〃という使徒の言葉を実行したのであつた。まことに、たとえ(彼が)この世で何らかの罪をおかしたことがあつたにもせよ、(それは)彼には許されることであらう。何となれば、より多くの権力をも望まず、より多くの財産をも望まず、おのれの弟のために、弟の恥に報いるために、(彼は)おのれの生命をおとしたからである。かゝる者たちについて主は言ひ給うたのである。〃おのれの友のためにおのれの生命をおとせし者〃と。ソロモンも次の様に言つた。〃災の中にありて互い

に助け合ひ兄弟たち」と、というのは愛は何物にもまして尊いからである。また同じくイオアンは言つている。『神とは即ち愛なり。愛の中にある者は神の中にある者なり、しかして神はその者の中にいますなり』と、裁きの日には高き位を（我等が）持ち得るように、彼（イジャスラフ）の如くに我らもまたこの世においてあらんがために、愛はこの様に完全であらなければならない。愛の中に恐怖はない。完全なる愛は恐怖を除き去るものである。恐怖は苦しみなのである。恐怖するものは愛において完全ではないのである。誰かどもし『神を我は愛する』と言つて、一方ではおのれの兄弟を憎むのであれば、（これは）偽りである。というのは眼の前にみているおのれの兄弟を愛さないものは、眼の前には見えない神をば、いかに愛することができようか？この教えをば、（我々は）彼（イジャスラフ）から得ているのである。神を愛する者はおのれの兄弟をも愛すべきである。（下線の部分はヨハネ第一書；第一四章；十六節以下この章の終末までの文章とほとんど同じである……筆者註）。というのは、愛の中においてこそ総てが実現されるからである。愛のおかげで罪も消え、愛の故にこそ主は地上に降り給いて、我々罪深きものたちのために自から十字架にかゝり給ひ、我々の罪を負ひ給いて十字架に我が身を釘づけ、我等に十字架を与え給うたのである。十字架によつて悪魔の憎惡を追い払わんがためである。愛の故にじゆん教者たちはおのれの血を流したのである。また愛の故にこそ、この公（イジャスラフ）は主の教えを実行しつゝおのれの弟のためにおのれの血を流したのである』

ロシアの公たちが内紛を繰り返していた時代にあつて、まさにこの文章は、厳しい警告であると共に、記者の深い宗教的立場の吐露であつた。言いかえれば、これこそ、『過ぎし年月の物語』の成立の基本精神であり、基本的な思想的内容であり、姿勢なのであつたと言えよう。祖国を思ひて内紛をとどめよ、

兄弟の間の権力争いをやめよ，心して生活を送れという主張は，キリスト教と無関係な古い英雄叙事詩的伝承の素材を組み上げることによつて，その具体的な典型教訓をつくり上げ，その上に，もう一つ，この深い宗教的愛の精神の血をしみ込ませることによつて，『過ぎし年月の物語』は，なまなましい聖典になつたと言えるのである。記録された事件の解説や正当化や批判のために，年代記者がギリシア正教的な思想を，つぎ足して述べたものではないし，また，ギリシア世教の思想を広め，伝導するために，その道具として，多くの世俗的事件を書きつけたものでもなかつた。6594(1086)年の項の後半に書かれている，ヤロポルク公を評価する文章もまた全くその様なものである。こゝには，一人の人間として，悪にほろほろされたものに対する年代記者自身の宗教的な温和な愛の深い姿が映し出されている。同時にそれはまた記者が考える悪なるものによる犠牲者へのとむらひの姿勢でもあつた。

многы беды приим, без вины изгоним от брата своего, обидим, разграблен, прочее и смерть горкую прият; по вечней жизни и покою сподобися. Так быше блаженный съ князь тих, кротък, смирен и братолюбив, десятину дая святей Богородици от всего своего имения, по вся лета, и моляше Бога всегда, глаголя: Господи боже мой! Приим молитву мою, и дажь ми смерть, якоже двема братама моима Борису и Глебу, от чужю руку, да омыю грехы вся своею кровью, избуду суетнаго сего света и мятенжа, сети врахий; его же прошенья не лиши его благый Бог, въприя благая она, ихже око не виде, ни ухо слыша, ни на сердце человеку не взиде, еже уготова Бог любящим его.

『多くの不幸を受け、故なくしておのれの兄弟たちによつて追放され、辱しめられ、略奪され、あげくには悲しき死を受けたのである。しかしながら、永遠の生命と平安とを得たのである。かくの如くこの至福なる公は、物静かで、温和で、温順で、兄弟愛の人であつた。毎年、おのれの総ての財産から聖母（教会）に十分の一をさしげ、常に神に祈つて言つたものである。』
「我が主なる神よ！我が祈りを受け入れ給え。しかして、二人の兄弟ボリスとグレブに（与え給ひし）如く、我にも他人の手による死を与え給え。おのれの血によつて総ての罪を洗い、この空虚にして反逆的な世から、敵のわなからまぬがれんとするが故なり」と。彼の願うところを神は見捨て給わなかつた。彼は、如何なる眼も見ることなく、いかなる耳も聞くことなく、人間の如何なる心も予感しなかつたような、さいわいを受け取つたのである。それぞ、彼を愛し給う神が用意し給うたものなのであつた。』

年代記者が賞揚した人間の良き資質とは、だから、温順、柔和、愛の深さ、悲しみへの深い反応等々であり、それこそが、彼等の宗教の正当なる現世的顕現でなければならなかつた。

6597(1089)年に府主教ヨアン<Иоан>の死を書きしるした年代記者は、続いて彼の立派な人となりを次の様にほめたのであつた。

бысть же Иоан муж кытр книгам и ученью, милостив убогим и вдовицам, ласков же ко всякому (огату и убогу, смирен же кроток, молчалив, речист же, книгами святыми утешая печалныя, и сякого не бысть преже в Руси, ни по нем не буде сяк.

『ヨアンは書物及び教えに通じた人物で、貧しき者たち及び寡婦たちに対して恵み深く、あらゆる者——富める者にも貧しきものにも親切であり、温順であり柔和であり、言葉数は少く、

同時にまた雄辯でもあつた。聖なる書物によつて悲しみをもつ人々をなぐさめていたのである。かゝる人物は以前にはルンにいなかつたし、彼の後にもかゝる者は出現しないであらう。』

反対に、心が猛く、無慈悲で、自己主張が強く、協調さや温和さがない時には内紛が起り、その機会に外敵が侵入すると考えた年代記者は、外敵侵入による不幸こそ、実は、神が不遜なる悪徳人たちにくだし給うた罰であると説いたのである。その最もよい例が6601(1093)年の記事である。外敵ポロヴエツ人によつて、時あたかも祭日に、散々に打ちひしがれた光景を描いた記者は、そのなつた理由を次の様に説いているのである。不幸の日が祭日であつたこともまた因縁浅からざる由を考証しながら。

бысть плачь в граде, а не радость, грех ради наших великих и неправды, за умноженье безаконий наших. Се бо на ны Бог испусти поганым, не яко милуя их, но нас кажа, да быхом ся востягнули от злых дел. Сим казнить ны нахоженьем поганых, се бо есть батов, да негли востягнувшеся вспомянемся от злаго пути своего. Сего ради в праздники Бог нам наводит сетованье: якоже ся створи в се лето первое зло на Възнесенье Господне, еже у Трьполя, второе же в праздник Бориса и Глеба, еже есть праздник новый Русьскыя земля. Сего ради Пророк глаголаше: преложю праздники ваша плачь и песни ваша в рыданье. Створи бо ся плачь велик в земле нашей, отпустеша села наша и города наши, быхом бегаючи пред врагы нашими. Якоже Пророк глаголаше: падете пред врагы вашим, поженуть вы ненавидящи вас, и побегнете никому женуцю вас; скрушу руганье гордыни вашея; и будеть в

тщету крепость ваша, убоен вы приходяй мечь,
будеть земля ваша пуста, и двори ваши пусти
будуть; якоже вы худи есте и лукави, и аз поиду
к вам яростью лукавою, тако глаголетъ Господь
Бог Израилев. Ибо лукавии сынове Измаилеви по-
жигаху селя и гумна, и многы церкви запалиша
огнем, да не чюдится никтоже о сем: идеже мно-
жество грехов, ту виденья всякого показанье.....

『我々の大いなる罪と不正のため、我々の無法さのつゝのりたることの故に、町には喜びではなくて、悲嘆があつた。といふのは、これは、神が異教徒たちを放ち給うたのである。異教徒たちに恵みをかけ給うたのではなくて、我々を罰し給うたのである。我々が悪しき所業から離れるように、異教徒のこの来襲によつて（神は）我々を罰し給うたのである。これは、（我々が）おのれの悪しき道から離れられるようにとの神の鞭である。この故にこそ、神は我々に祭日に悲しみを下し給うたのである。この年の昇天祭にトリボリであつた最初の不幸が起り、才二の（不幸は）ルシの国の新しい祭であるボリスとグレブの祭日に（起つた）。この故に予言者は言つていたのである。『汝等の祭日を悲嘆に変らせ、汝等の歌をなげきに（変らせよう）』と。（アモス書；才八章；十節……筆者註）。我々の国において大いなる悲嘆がおこり、我々の村々及び我々の町々は荒廃し、我等の敵の前で（我々は）逃走しなければならなかつたのである。予言者が（次の様に）言つていた如くである。『（汝等は）汝等の敵の前で倒れるであらう。汝等を憎む者が汝等を追い立てるであらう。しかして誰一人として汝等を追い立てる者がいないのに汝等は逃げるであらう（レビ記；才二十六章；十七節……筆者註）。（我は）汝等が偉張つて誇りとしているものをほろぼすであらう。（レビ記；

才二十六章；十九節……筆者註）。汝等が力を用いることはいたづらなことであろう。（レビ記；才二十六章；二十節……筆者註）。外敵の剣が汝等を殺すであろう。しかして汝等の国は荒れ、汝等の家数はほろびるであろう。（レビ記；才二十六章；三十三節……筆者註）。汝らが愚かで、ずるがしこい故に、我もまた、ずるい怒りをこめて汝等に向うであろう。（レビ記；才二十六章；四十～四十一節……筆者註）//とこの様に主なる神はイスライリに言い給うているのである。何となればイスライリのずるき息子たちは村々や穀物置場を焼き多くの教会を火にかけて焼いたのである。このことは誰一人として不思議に思うはずのものではない』

この様な徹底した恭順の精神で『過ぎし年月の物語』が書かれ、その精神が賞揚され、その姿勢で多くの警世的な発言がなされていたことは、実は、年代記者の理想とするところからは遠い事態が数多く発生していたことをも意味するであろう。特にキエフよりも北部或は東部の地域においては、まだまだ異教的な要素の強かつたことに対する年代記者たちの悲嘆さえもが其処には聞きとれるかも知れない。古代スラヴ民族の魔法使い〈волхв〉たちが『過ぎし年月の物語』の中に登場して来るのは、その最もよい証拠であろうと思われる。オレグが自分の死に方の様子を前以て尋ねた相手（6420（912）年）にはじまつて、6494（986）年の項にも、翌6495（988）年にも、6552（1044）年にも、6579（1071）年にも、6599（1091）年にも、6605（1097）年にも、異教的魔法使い〈волхв〉の影が色濃く投影していたのである。上にあげた年号記事以外に6532（1024）年の項にはスズダリ地方での魔法使いの記事が見られる。

В се же лето вьсташа вълъсви в Суждали, избиваху старую чадь по дьяволю наученью и бесованью, глаголюще, яко си держать гобино. Бе мятежь велик и голод по всей той стране; идоша по Волзе вси •

людье в Болгары, и привезоша жито, и тако ожи-
ща. Слышав же Ярослав волхвы, приде Суздалю; изъ-
ймав волхвы, расточи, а другыя показани, рек сице:
"Бог водить по грехом на куюждо землю гладом, или
мором, ли ведром, ли иною казнью, а человек не
весть ничтоже".

『この同じ年にスズダリで魔法使いたちが蜂起した。(彼等は)悪魔及び悪鬼のそゝのかしによつて老いたる人々を打ち殺し、これらの人が富をもつていゝと言つたものである。その地方全体に大いなる叛乱とききんがあつた。あらゆる人々はヴォルガ河に沿つてボルガル人のもとに行き、はだか麦を運び来たり、しかしてかくして、よみがえつた。ところで、ヤロスラフは魔法使いたちのことを聞き、スズダリに来たつた。魔法使いたちを捕え、流刑に処し、他の者たちはこれを処刑して、かく言つた。"神はそれぞれの土地に、罪に対する罰として或は飢がを、或は疫病を、或はかんばつを、或は別の刑罰を下し給うのであり、人間は何も分らないのである"と。』

明らかにスズダリ地方での飢きんの折に異教的占術者たちの指導による民衆暴動が起つたこと、及び、その暴動が大きかつたために、わざわざ一時は、ノヴゴロドからヤロスラフ公が鎮圧に出向かなければならなかつたことを報じた一節である。異教的占術者たちによる民衆への大きな影響力のあつたことを雄辯に物語るものである。そして、その影響力を受けたのは、いまだキリスト教化されない地方的庶民だけではなかつた。キリスト教を受け入れ、然も、都市或はその近辺に住み、なおその上に、支配階級に連らなる人々の間にさえ、否定されるべき異教的迷信は根強く残つていた。その根強さを魔法使いたちが度々刺激して、事を起そうとしたのであつた。地方ではない中央の、然も公の一族にまで、その刺激が及ぶこともあつた。例えば、655

2(1044)年の記事を取りあげて見るがよい。其処には、嘗つてキリスト教を受け入れないままで死んだ『二人の公、ヤロボルクと、オレグ(スヴィヤトスラフの子)の骨を掘り出して、彼等の骨を洗礼し、それを聖母教会に安置した』《Выгребоша два князя Ярополка и Ольга, сына Святославля, и крестиша кости ею, и положиша я в церкви святыя Богородица.》とある。既に埋葬された公たちの骨まで洗礼して教徒として祭るほどにギリシア正教への信仰は厚く、深かつた。だが、その直後に書きとめられている記事を見るがよい。その様な時代に、その様な公たちの一族にさえも、一体、どんな考えが併存していたことであろう。

В се же лето умре Брячислав, сын Изяславль, внук Володимерь, отец Всеславль, и Всеслав, сын его, седе на столе его; еге же роди мати от вълховованья, матери бо родивши его, бысть ему язвено на главе его, рекоша бо волсви матери его: "се язвено, навяжи на нь, да носить е до живота своего", еже носить Всеслав и до сего дне на себе. Сего ради немилостив есть на кровьпролитье.

『この同じ年にイジャスラフの子、ヴォロジメルの子、フセスラフの父であるブリヤチスラフが死去し、しかして、その息子フセスラフが父の王座に即いた。ところで彼を母が魔法使いの業によつて生んだのである。母が彼を生んだとき、彼にはその頭にはれものがあつた。ところで魔法使いたちが彼の母に言つた。"見よ、はれものを、彼にほうたいをせよ。(彼に)それを生涯身につけさせるがよい"と。それをフセスラフは今日に至るまでもおのれの身につけている。それ故に彼は流血に対して非情なのである』

この様な原始宗教的な、異教迷信に対する戦いが年代記者た

ちの属する修道僧団の大きな一つの目的であつたにちがいない。ボリス、グレブ、ヤロスラフ、そして古くはヴオロジメル各公に対する賞称は、まさに、その姿勢から書かれたのであつた。そして、他者への好作用としてギリシア正教が持つべき態度は、その賞称文の中に見られた通り柔和、温順、兄弟愛というものであつた。その理想像がボリスでありグレブであつた。その理想像に近づき、迷信を遠ざけ、ギリシア正教を身にまとい、神に近づくことの良き手段を具体的に示したものが、先に引用した6545(1037)年のヤロスラフ公にまつわる記事なのであつたと言えるであらう。迷信を遠ざけ、強力にギリシア正教を一般化するためには、もう既に古くから数多く建てられた修道院内だけの活動では間に合わなかつた。或はまた、偶然にもギリシア正教に入信した権力者の半ば物好きさによる寄進によつて生まれた修道院や教会が、たゞ建てられているということだけでは、もはや間に合わなかつた。むしろ、求められるべきは、古来異教時代からの英雄的猛々しさを消し去り、心をなごませ、兄弟愛を深め、恭順温和なる心の姿勢を説くことであつた。その心の姿勢で一般世間へ発言することであつた。『過ぎし年月の物語』の大きな一つの目的が其処にもあつたのである。例えば、その証拠に6559(1051)年の項に、次の様な文章がみられるのも、明らかにこのことを物語るものであらう。修道院を建てる公に就てさえ、その心がけの悪さを説くに至るのである。

Изяслав же постави монастырь святого Дмитрия, и выведе Варлаама на игуменьство к святому Дмитрию, хотя отворити вышний сего монастыря, надеяся богатству. Мнози бо монастыри от царь и от бояр и от богатства поставлени, но не суть тацци, кацци суть поставлени слезами, пощеньем, молитвою,

бленью: АНТОНІЙ бо не име злата, ни сребра, но
стяжа слезами и пошеньем, якоже глаголах.

『ところでイジャストラフは聖ドミトリイ修道院を建て、しかして
ヴァラムを聖ドミトリイ（修道院）の修道院長として移した。修
道院をこの（ベチエルスキー）修道院以上のものにしようと望み、
富力に希望をかけていたのである。というのは、多くの修道院
が皇帝たちによつて、貴族たちによつて、しかして、富力によ
つて建てられた。しかしながら、涙と齋戒と祈りとそして戒心
とによつて建てられたものとはその趣きを異にするものなので
ある。アントニイは黄金も銀も持つていながつたが、しかし、私
が言つた如く、涙と齋戒とによつて（すべてを）獲得したのであ
る』

此処には、年代記者の所属するベチエルスキー修道院の優越さ
を示そうとする心が、勿論、働いていたにはちがいない。或は
、権力者の権力と富力とから疎遠になつたことに対する不満を
裏返しに述べたのであるとも考えられよう。しかしながら、そ
れ以上に、今までの様な修道院のあり方や活動では、もう間に
合わないと見た年代記者のけい眼を我々は読み取るべきであろ
う。間に合わないと考えられたからこそ、年代記——『過ぎし
年月の物語』は一つの新しい活動手段として書き出されたので
あつたと思われる。英雄的業積、権力、富力、外的活動へ向つ
ていた多くの人々の心を、特に、権力者たちや、権力者に保護
されていた凡俗な僧たちの心を、一転して、心それ自身の恭順
にして柔和なる愛の完成へ向わせるための大転換を、『過ぎし
年月の物語』はフエオドシイという高僧の物語を以て企てようと
したと考えられる。だからこそ、それだけの力がフエオドシイ伝
には集注されていたのである。

『過ぎし年月の物語』の書かれた姿勢は、だから、幾重もの
目的をもつていたのである。祖國の尊嚴なる歴史を書きとどめ

ようとする目的もあつただろうし、公たち権力者に注文をつけようとする目的もあつただろうし、また、既成の教団への批判もあつたことであろうし、何にもまして、人々の心を恭順へ向わせつゝ、ギリシア正教の真髓を示そうとし、それによつて祖国統一と外敵防衛をなそうとしたであろう。或はまた、原始異教にとどめをさそうともしたであろう。ところが、庶民の原始宗教的感覚へは容易に作用を及ぼし得なかつた。先に魔法使い《ВОЛХВ》の登場する記事の一つを引用したが、その《ВОЛХВ》が現代にまで残るバイリーナの中ではヴォルフ《Волх》という英雄の名前として活躍することを見てもこの消息は充分推察し得るところである。そして其処には如何に原始異教的な要素が強く残りつゞけていたことであろう。フセスラフ《Всеслав》をその母が魔法使いの業によつて生んだとは先にあげた 6552 (1044) 年の記事であつたが、バイリーナでは鮮かにこの記事と呼応して、その主人公の名はヴォルフ・フセスラヴィエヴィチ《Волх Всеславьевич》であり、しかも、母が彼を生むいきさつも、また、『過ぎし年月の物語』の記事と呼応する如く、母が蛇をふみ、蛇に太ももまで入り込まれた為に身ごもつたとある。原始異教的な風情を多分に織り込んでバイリーナの冒頭には次の様に歌われているのである。

По саду, саду по зеленому ходила, гуляла
Молода княжна Марфа Всеславьевна;
Она с каменю скочила на лютото на змея.
Обвивается лютый змей около чебота зелен сафьян,
Около чулочика шелкова, хоботом бьет по белу стегну.
А втапору княгиня понос понесла,
А понос понесла и дитя родила.
А и на небе просвета светел месяц,
А в Киеве родился могуч богатырь,

Как бы молоды Волх Всеславьевич.

Подрожала сыра земля,

Стряслось славно Индейское,

А и синее море сколыбалось

Для-ради рожденья богатырского

Молода Волха Всеславьевича.

Рыба пошла в морскую глубину,

Птица полетела высоко в небеса,

Туры да олени за горы пошли,

Зайцы, лисицы по чащицам,

А волки, медведи по ельникам,

Соболи, куницы по островам.

『緑なす園を若き公女マルファ・フセ斯拉ヴィエヴナがそゞる歩きしていた。彼女は石から飛んで残忍な蛇を踏んだ。残忍な蛇は(彼女の)靴の山羊皮に、絹の長靴下のあたりに巻きついて、その長鼻をもつて白き太もものあたりを突いた。その時に、公夫人は下痢をはじめた。下痢をはじめて子供を生んだ。ときに空には明るい月が輝き、キエフには強き勇士が生まれたのである。言ひならば若きヴォルフ・フセ斯拉ヴィエヴィチである。大地はふるえ、栄えあるインドの帝国はふるえ、青海原は揺れ動いた。若き英雄ヴォルフ・フセ斯拉ヴィエヴィチの誕生の故である。魚は海の深みに逃げ、鳥は高く大空に飛び、野牛と鹿は山の彼方に去り、うさぎときつねは森の茂みに、狼と熊はもみの林に黒てんとてんは島々に(逃げた)』

成長するに及んでヴォルフが習つた術もまた原始異教の色濃いものであつた。

А и будет Волх десяти годов,

Втапору поучился Волх ко премудростям:

А и первой мудрости учился-----

Обвертываться ясным соколом;
Ко другой-то мудрости учился он, Волх, -----
Обвертываться серым волком;
Ко третьей-то мудрости учился Волх -----
Обвертываться гнедым туром золотые рога.

『ところでヴォルフが十才になつた、その時に、ヴォルフは術を習いはじめた。先づ最初に学んだ術とは——鮮やかなタカに身を変えることであつた。かのヴォルフが学んだ才二の術は——灰色なる狼に身を変えることであつた。ヴォルフが学んだ才三の術とは——黄金の角ある鹿毛なる野牛に身を変えることであつた。』

ブイリーナは、この後に一九七行に及ぶヴォルフの種々の英雄的活躍を描き出しているのである。この原始異教な英雄物語でも、実はなお、多くの庶民にすれば格調の高いものであつたことであろう。こんなブイリーナの内容よりも、もつともつと、反ギリシア正教的な物語や風物が『過ぎし年月の物語』のネストルによる成立当時には存在していたにちがいない。年代記者にすれば、それは当然否定されるべきものでありながら、その根強さは不気味さまでも加味されて、民間に生きつゞけていたことを無視することはできなかつた。6572(1064)年の項の記事にみられた奇妙な子供の死体は、漁師が網で引きあげたものであつたが、その醜悪さは、再び人々をしてその死体をセトムリ河に捨てさせたほどであつたという。即ち、顔に恥づべき器官があつて、その他諸々のいまわしい語り種が生まれてきた。年代記者は、それを、『余りに恥がしいために口にすることができない』〈нелзѣ казати срама ради〉として筆をおつたほどである。もとより、人々に喧伝され、世をさわがしていた物語であつたにちがいない。そして、それに引きづられた年代記者自身が、昔エルサレムに起つたという数々の無気味な現象を書きしる

すほどであつた。それほどまでに、一般の人々には深々と迷信的なものが根を張りつめていた。だからこそ、年代記者は、誠にいまましいほどの筆の運びを以て、6575(1067)年の項に厳しい非難の文章を書かなければならなかつたのである。即ち、修道僧〈черноризец〉、世捨人〈единец〉、ぶた〈свинья〉に途中で出くわすと縁起をかついで家引きかえしたり、くしやみ〈сахыканье〉が頭の健康によいと信じたりすることを悪魔のたぶらかしによるとして厳しく批判していたのである。また、大道芸人〈скоморох〉、ラツパ〈труба〉、琴〈гусли〉による異教的娯楽を批判し、ルサリイ〈русальи〉(スラヴの原始的祭り)や、或は人々が押し合いへし合いして足踏みおどりをしていることをいましめ、それでは神からの罰を受けるのも当然であると書いているのである。

それらの悪魔をよるこばすような所業に対する最も尊敬なギリシア正教のしるしこそ、まさに十字架であつた。神を信ずる者は、だから、十字架に口づけをして約束のしるしとしたのである。『十字架に口づけする』〈цѣловати крестъ〉とは『約束する』ことなのであつた。この厳肅であるべき行為さえも、実は、当時、他ならぬ公たちによつて破られたことがあつた。年代記者が最も非難の声を大きくして書きとめたのは、だから、公による仲間の裏切りと合わせて、それ以上に十字架への裏切であつた。公たちが、そんなことをしているから、外敵が襲来するのだと述べ、それこそ、神の下し給う罰であると記録したのであつた。十字架に口づけして約束しながら、イジャスラフはフセスラフを捕えて牢につないだ。このことを非難しつつ、一方では、心正しく十字架の教えに従つたフセスラフをほめて、年代記者は、6575(1067)年の項に次の様に書いたのである。

всеслав же седе Къеве. Се же Бог яви силу крестную, понеже Изяслав целовав крест, и я и; тем-

же наведе Бог поганья, сего же яже избави крест честный. В день бо Въздвиженья Всеслав въздхнув рече: "о кресте честный! Понеже к тебе веровах, избави мя от рва сего". Бог же показа силу крестную на показанье земле Русьстей, да не преступят честнаго креста, целовавше его; аще ли преступитъ кто, то и zde приметъ казнь, и на придушемъ баце казнь вечную. Понеже велика есть сила крестная: крестом бо побежени бывають силы бесовскыя, крест бо княземъ в бранехъ пособитъ, в бранехъ крестомъ согражаеми вернии людье побежають супростаты противныя, крест бо вскоръ избавляетъ отъ напастейъ призывающимъ его верою; ничтоже ся боятьъ беси, токмо креста, аще бо бывають отъ бесъ мечтанья, знаменающе лице крестомъ прогоними бывають.

『ところでフセスラフはキエフに坐した。さて、神は十字架の力を示し給うた。というのは、イジヤスラフは十字架に口づけしながら、彼（フセスラフ）を捕えたからである。それ故に神は異教徒たちを来たらしめ給うたのである。そして明らかにこの者（フセスラフ）を聖なる十字架が救つたのである。聖十字架祭の日にフセスラフは歎息して言つた。"おお、聖なる十字架よ！（我は）汝を信じていたのであるから、我をこの牢より救い出せ"と。ところで神は十字架の力を示し給うたのである。（人々が）十字架に口づけしながら、聖なる十字架を犯さぬよう、ルシの国への教えとして。もし誰か（十字架への口づけの約束を）破るならば、（その者は）この世においても罰を受け、来るべき世においても永遠の（罰を受けるであろう）。十字架の力は偉大であるからである。というのは、十字架によつて悪魔の力は打負かさ

れ、十字架は戦争において公たちを助け、戦争において十字架に守られている信仰厚き人々は抗なう敵に打ち勝つのであり、信仰を以て十字架に切願する者たちの不幸を速かにまぬがれしめるのである。たゞ十字架以外には、悪魔たちは何も恐れはしないのである。もしも悪魔たちによる幻影が起るなら、顔を十字架で被うだけで、(悪魔たちは)退散させられるのである』

この十字架への口づけと、その宗教的・精神的意味は、大きく実際の生活を支配していたようである。それを証拠立てる記事は数多いが、その中でも、6605(1097)年の記事は引用に値するであろう。

Святополк же прогнав давыда, нача думати на Володаря и на Василка, глаголя: "яко се есть волюсть отца моего и брата". И поиде на ня. Се слышав Володарь и Василко, пойдоста противу, вземше крест, его же бе целовал к нима на сем, яко "на давыда пришел есм, а с вама хочю имети мир и любовь". И преступи Святополк крест, надеяся на множество вой. И сретошася на поли на Рожни, исполнившимся обoим, и Василко възвыси крест, глаголя: "яко сего еси целовал, се перьвее взял еси зрак очью моею, а се ныне хочещи взяти душу мою; да буди межи нами крест съ". И поидоша к себе к боеви, и сступишася полци, и мнози человерица благовернии видеша крест над Василковы вой, възвышьяся велми. Брани же велице бывши и мнозем на падающим от обою полку, и видев Святополк, яко люта брань, и побеже, и прибеже Володимерю;....

「ところでスヴィヤトポルクはダヴィドを追放して、ウオロダリ及びウアシルコを討とうと考えはじめ、かく言つた。「これは我が

父及び兄弟の領地である」と、しかして彼等（二人）を討つべく進攻した。ヴオロダリとヴァシルコはこれを聞いて、迎え出撃した。（その折に二人は）十字架をたずさえた。その十字架と言うのは（スヴィヤトボルクが）彼等（二人）に「我はダヴィドに向つて（攻め）来たつたのであつて、汝等（二人）とは平和と愛とを持ちたいと思つている」と（言つて）、それに口づけした（約束した）その十字架なのであつた。しかしてスヴィヤトボルクは多くの戦士を得んことを期待して十字架（誓い）を犯したのである。彼等はロジニヤ（河）のほとりの野に相会した。両軍が戦いの準備を整えた時に、ヴァシルコは十字架をさし挙げて言つた。「これに汝は口づけした。見よ、最初に（汝は）我が両眼を奪ひ取り、しかして、今、また我が生命を奪わんと欲している。我等（と汝と）の間にこの十字架をして在らしめよ」と。しかして、（彼等は）互いに兵を進め、両軍は相会した。しかして多くの信仰厚き人々はヴァシルコの戦士たちの頭上に極めて高くかけられた十字架を見た。ところで戦いは激烈であつた。しかして両軍の多くのものたちが倒れた。スヴィヤトボルクは戦いが激しいのを見て、逃げた。しかして、ヴオロジメルに逃げ来つた」……

ヴオロダリとヴァシルコは、この様にしてスヴィヤトボルクに勝つたのであつた。其処には、信仰厚いヴァシルコたちと、そしてこれを描く年代記者が、十字架の意味するギリシア正教の信仰正義を顕揚しようとする意気が読み取られるであろう。そして、実はそれこそ、『過ぎし年月の物語』の基本的な姿勢に他ならなかつたのである。だからこそ、外敵ボロヴェツに押され通したロシア軍が久しぶりに勝利をおさめた時には、6611(1103)年の項であるが、その勝利を年代記者は、日付けを大きく文頭に書き出しつゝ『四月八日に神は大いなる救いをおこない給ひ、我々の敵どもに対する大いなる勝利を与え給うたのである』〈Дни 4 апреля мѣсяца велико спасенье Богъ створи, а на врагы

наша дасть победу велику >と書き、しかも、あらかじめ、その戦いの始まる寸前の記述の折に、諸公たちが敬けんに神に祈つたこと、祈りに際して教徒にふさわしく、このましい態度をとつたことを書きしめたのである。それこそ、事々にそうあつてほしいと願つた年代記者の心にかなりものであつた。即ち、次の様にしるされていたのである。『ところでルシの公たち及び総ての戦士たちは神に祈りつゞけていた。しかして、或者は蜜飯によつて、或者は貧者たちへの施しによつて、また別の者たちは修道院への寄進によつて、神及び聖母に祈り誓つていたのである』 <Русскіѣ же князи и вои вси моляхуть Бога, и обѣты вздаяху Богу и Матери его, овъ кутьею, овъ же милостынею убогымъ, инни же монастыремъ требованья >このように、あらかじめ、神への深い心の傾斜があつたからこそ、そして、その傾斜が一時的なものではなくて、二度も使用された動詞インパーフェクト形に示される如く、永続的なものであつたからこそ、神は助け給うたのであることを年代記者は大書したかつたのであろう。そして、その折の勝利の翌年6612(1104)年には、太陽と十字架が重なつたような天空のしるしが出現したことを書きとめたのであつた。面白いことに、『彼から私も多くの物語を聞き、彼から聞いたことをこの年代記に(私は)書き込んだ』 <от него же и аз многа словеса слышахъ, еже и вписахъ в лѣтописаньи семь отъ него же слышахъ >と年代記者が書いた。その語り手ヤンが死んだのは、実にその翌々年6614(1106)年のことであつた。然もそのヤンのとは、年代記者の言葉によれば、『敬けんで、柔和で、温順な人物で、あらゆる(悪しき)事柄を避けた人』 <мужъ благъ, и кротокъ, и смѣренъ, огребаяся всякою вещи >であつたのである。同時に、この人物像は年代記者の基本的姿勢の顕現のようにも思われるのである。『過ぎし年月の物語』は、このヤン

の死を報じた後、たゞ僅かに数年の記事を綴つて終るのである。ヤンの姿勢と年代記者の姿勢とが重なり合つていたことが、このことからまた推察されるであろう。ラヴレンチー、イパーチ一等の年代記で『過ぎし年月の物語』が完了する年号、6618(1110)年の項には、この年代記者の姿勢が、修道院を通じて神及び天に向ひ形で示され、神への深いおそれとなつている。そしてそれを以て結びの言葉としてゐるように思われる。その結びの言葉とは、神へのおそれひたつた心が見た超自然的な現象なのであつた。これが結びの言葉である以上、その現象へのおそれと、天使の解説と、そして、天使を通じての神への信仰姿勢こそが、『過ぎし年月の物語』を貫く大きな精神の柱の一つであつたことは間違いないであろう。これを単に落雷の記述として読み流すことはできないように思われる。

Том же лете бысть знаменье в Печерьстем монастыре, в 11 день февраля месяца: явися столп огнен от земля до небеси, а молнья осветиша всю землю, и в небеси погрене в час 1 ноци; и весь мир виде. Се же столп первее ста на трапезници каменей, яко не видети бысть креста, и постояв мало, съступи на церковь и ста над гробом Феодосьевым, и потом ступи на верх, акы ко востоку лиць, и потом невидим бысть. Се же беаше не огненный столп, но вид ангелеск: ангел бо сице являється, ово столпом огненным, ово же пламенем. Икоже рече давид: творя ангелы своя духы и слугы своя палящь, и шлем суть повеле-нием Божьим, аможе хоцеть Владыка и Творець всех. Ангел бо приходитъ кде благая места и молитвенный домове, и ту показаютъ нечто мало

виденья своего, яко мощно видети человеком; не мощно бо зрети человеком естества ангельскаго, яко и Моиси великий не возможе видети ангельскаго естества, водяшетъ бо я в день столб облачен, а в нощи столп огнен; то се не столп водяше их, но ангел идяше пред ними в нощи и в дне. Тако и се явленье некоторое показываше, ему же бе быти, еже и бысть: на 2-е бо лето не се ли ангел вождь бысть на иноплеменники и супостаты, якоже рече: ангел пред тобою предидеть, и пакы: ангел твой буди с тобою? Яко пророк давид глаголетъ: яко ангелом своим заповесть о тебе схранить тя. Якоже пишетъ премудрый Епифаний: к коей же твари ангел приставлен: ангел облаком и мъглом, и снегу и граду и мразу, ангел гласом и громом, ангел зимы и знови, и осени и весны и лета, всему духу твари его на земли, и тайныя бездны, и суть скровены под землею, и преисподнии тмы, и сущи во безднах, бывшия древле верху земля, от нея же тмы, вечер и ношь, и свет и день, ко всим тварем ангели приставлени. Такоже ангел приставлен к которой убо земли, да соблюдаютъ куюждо землю, аще суть и ногани; аще Божий гнев будетъ на куюлюбо землю, повелевая ангелу тому на куюлюбо землю бранью ити, от оной земле ангел не воспротивится повеленью Божью. Яко и се бяше и на ны навел Бог, грех ради наших, иноплеменники поганья, и побежахуть ны повеленьем Божьим: они бо бяху водими ангелом, по повеленью Божью. Аще ли

кто речеть, яко ангела несть у поганных, да слы-
шить, яко Олександрю Макидоньскому на Дарья, и
пошедшу ему и победившу землю всю от вѣсток и до
запад, и поби землю Егупетьскую, и поби Арама, и
приде в острова морьскыя; и врати лице свое взы-
ти в Ерусалим, победити Жиды, занеже бяху мирни
со дарьем, и поиде со всеми вои его, и ста на
товарищи и почи, и приспе ночь, и лежа на ложи
своем посреде шатра, отверз очи свои, види мужа
стояща над ним, и мечь наг в руке его, и обличие
меча его яко молонии, и запряже мечем своим на
голову цареву, и ужасеся царь велми и рече: не
бий мене, и рече ему ангел: посла мя Бог уйма-
ти царе великии пред тобою и люди многи, аз же
хожу пред тобою, помагати ти; а ныне ведай, яко
умерши, понеже помыслил еси взити в Ерусалим,
зло створити ереем вожьим и к людем его, и рече
царь; молю тя, о господи, отпусти ныне грех раба
твоего; аче не любо ти, в ворочюся дому моему. И
рече ангел: не бояся, иди путем твоим к Иерусали-
му, и узриши ту в Иерусалими мужа в обличеньи мо-
ем, борзо пади на лица своем и поклонися мужу то-
му, и все еже речеть к тебе створи, не преступи
речи ему; в онъ же день преступиши речъ его, и
умреши, и вѣстав царь, иде в Ерусалим, и пришед
вѣспроси ереев: иду ли на дарья? и показаша ему
книги Данила пророка, и рекоша ему: ты еси ко-
зел, а он овен, и потолчеши и возмеша царство
его. Се убо не ангел ли вожаше Олександра? не
погани ли побешаше, и вси Елини кумиролужбници?

Тако и си погании попушени грех ради наших. Се же ведомо буди, яко в хрестьянех не един ангел, но елико крестисяся, паче к благоверным князем нашим: но противу Божью повеленью не могут противитися, но молятъ Бога прилежно за хрестьяньскыя люди. Якоже и бысть: молитвами святаго Богородица и святаго ангела умилосердися Бог, и посла ангелы в помощь Русьским князем на поганья, якоже рече в Моисееви: се ангел мой предъидеть предъ лицем твоим, якоже рекохом преже. Знаменье се бысть мѣсяца февраля в 11 день, исходящу сему лету 18.

『その同じ年、二月の十一日にベチエルスキー修道院にしろしがあつた。火の柱が大地から天にまで現れ、稲妻が地上全体を照し出し、しかして天には夜の一時に雷鳴があつた。しかして総ての世の人が見たのである。この柱は最初に石造の僧院食堂の上に立ち、十字架が見えないほどであつた。しかして、しばらく立ち現れてから教会の上へ進み、フェオドシイの墓の上に立つた。しかしてその後、(教会の)上に進み、東方に顔を向けている如くであつた。しかして、その後、見えなくなつた。ところで、これは火の柱ではなくて、天使の出現なのであつた。というのは、天使はこの様にして現れるものなのである。或は火の柱として、或はまた炎として。ダヴィドが(次の様に)言つている如くである。"(神は)風をおのれの天使となし給ひ、炎の出づる火をばおのれのしもべとなし給う"。(詩篇;一〇四篇;四節。……筆者註) 主にして万物の創造者なる神はその望み給う所へ(天使たちを)神の命によりてつかわし給う。天使たちは敬けんなる場所及び祈りの家々のある所に来り、しかして、おのれの出現を、人間たちが見得る程度のかすかな何らかのものとして

其処に示すのである。人間たちには天使の本来の姿は見る事ができない。偉大なモイセイさえも天使の本来の姿を見る事ができなかつたのである。日中には雲の柱が彼等をみちびき、夜中には火の柱が（彼等をみちびいた）。だが、これは彼等を柱がみちびいたのではなくて、天使が夜も昼も彼等の前を進んでいたのである。この様にこの（天に現れた）しるしは、当然出現することになつていた。そして実際に出現した或る現れを示していたのである。というのは、二年目に異種族たち及び敵に対する指導者として現れたのは、これは天使なのではなかつただろうか。『天使が汝の先に立つている』と言われているではないか。また、『汝の天使が汝と共にあるように』とも言われているではないか。（……これ以下の文章は主としてイバーチ一年代記による。……筆者註）予言者ダヴィドが言つている如くである。『おのれの天使たちに汝（が歩む諸々の道）に関して汝を守るより命じ給う』（詩篇；九十一篇；十一節……筆者註）至賢なるエピファニイも（次の様に）書いている。『いかなる創造物にも天使はつけられている。天使は雲にも霧にも、雪にも、あられにも、嚴寒にも、天使は顔にも雷鳴にも、天使は冬にも、暑さにも、秋にも春にも、夏にも、地上のあらゆる生命ある創造物にも、大地の下にかくされた神秘な淵にも、淵の中にあるものにも、穴の闇にも、以前に大地の上であり、そのために、闇と晩と夜と光と昼とが起つている総てのものに、総ての創造物に天使たちはつけられている』と。その様に天使は、その土地を守るために、どの地にも付けられている。たとえ、その土地が異教の土地であつてもである。もしも神の怒りが或る何処かの国に向けられ、或る何処かの国へその天使に命じて軍勢を向け給うとすれば、その国の天使は神の命令に抗し得ないであろう。今やこれと同じことがおこつたのであり、我々の罪の故に神は異教の異種族を我々の上へ導き給うたのである。しかして（異種族たちは）

神の命令によつて我々を打ちまかしたのである。どいうのは、彼等は神の命令によつて天使たちに導かれていたからである。もしも誰かど、異教徒たちのもとには天使たちは居ないと言るのであれば、マケドニアのアレクサンドル(大王)がダリイに向つて武装し、彼に向つて遠征し、東から西まで(その)全国を勝ちとり、エジプトの国をほろぼし、アラムを殺し、海の島々に来たつたことを聞かせるがよい。彼はエルサレムを占領してユダヤ人を打ちまかすために——ユダヤ人たちはダリイと和を結んでいたのであるが——エルサレムに向つた。しかして、おのれの総ての軍勢をひきいて進み、陣營をしいてとどまり、しかして、憩つた。夜になつて彼は天幕の中のおのれの床に横たわつた。おのれの両眼を見開いて見ると、自分の上に立つている一人の人物に気づいた。披身の劔を片手にもつていたが、その劔の姿はあたかも稲妻のようであつた。しかして(その人物は)おのれの劔を皇帝の頭上に振りはじめた。皇帝は非常におどろいて言つた。「我を殺すな」と。しかして天使は彼に言つた。「汝の前に強き帝たち及び多くの人々を服せしめんとして神は我を遣わし給うたのである。我は汝の前を進み、汝を助けている。されど、今は、(汝が)死するものと知れ。何となれば、汝はエルサレムに入り、神のユダヤ人たち及び神の人々に悪をなさんと企てたからである」と。しかして皇帝は言つた。「おゝ、主よ、汝に我は祈る。汝の僕なる者のこの罪を許せ、もしも汝に(それが)好ましくなければ、我は我が家に戻るであらう」と。しかして天使は言つた。「恐れるな。エルサレムへの汝の道を進め。しかしてエルサレムにおいて、我が姿をなせる(一人の)人物を見たらば、その人物の前に、おのれの顔を深く垂れて礼拝せよ。しかしてその人物が汝に言うところの総てを実行せよ。その人物の言葉を犯すべからず。その人物の言葉を汝が犯すその日の内に汝は死すであらう」と。しかして皇帝は立ち上り、エルサレム

に進んだ。到着してユダヤ人たちに（彼は）尋ねた。『（我は）ダ
リイに向つて進むべきか？』と。しかして（彼等は）予言者ダリイ
の書を彼に示して、彼に言つた。『汝は雄山羊で、彼は羊である
。（汝は）打ちくだきて、彼の王国を入手するであろう』と。こ
のように、アレクサンドルを導いたのは天使ではないだろうか？
逃亡したのは異教徒ではないだろうか？総ての異教偶像礼拝者
たちではなかつただろうか？この様に、またこれらの異教徒た
ち（ボログエツ）も、我々の罪の故に（神によつて）（我々に）放た
れたものなのである。キリスト教徒の中にあつては、単に一人の
天使のみならず、洗礼を受けた者たちの数だけの天使がおり、な
おそれ以上に我々の信心深い公たちには天使が多くいることが
明らかでなければならぬ。然しながら、神の命令には、天使
たちは、抗し難いものであり、（天使たちは）キリスト教徒の人々
のために熱心に神に祈るものであることを知るべきである。即
ち、神は聖母及び聖なる天使たちの祈りによつて、神は心をど
ませ給ひ、ロシアの公たちに異教徒征伐の助けとして天使たち
を遣わし給うたのである。（神が）モイセイに言い給う所によれ
ば、『これは我が天使の汝に先だちてみちびくものなり』とある
。我々が先に述べた如く、このしるしは、この（66）18年のは
じまる二月十一日にあつたことである。』

敬けんに神へ向うこの様な姿勢には、外敵を前にして燃え上
る祖国統一と国内勢力の相互和解との熱望が伏せられていたに
ちがいない。その内で、神へ向う心と相互和解とは直線的に連
なるであろうが、祖国ロシアの統一の念願については、年代記
者の宗教性を離れたところに立つて、もう一度、見直しておか
なければならぬであろう。

祖国統一の念願とは、祖国の統一のない所に起るものである。むしろ、祖国の統一の無さを痛々しく描くところに、統一の念願は読み取られるであろう。実に『過ぎし年月の物語』とは一面において一貫して分裂抗争の痛々しい物語であつたとも言える。この分裂抗争の痛々しさを、如何に年代記者が祖国統一の念願によつて蔽いかくそうとしても、かくしきれぬものではなかつた。

『過ぎし年月の物語』は初めて年号 — 6360 (852)年 — を設定してから数十年後にルシの公として、イゴリ<Игорь>の行動を書きとめている。そして、此处で、スヴェネリド<Свенельд>という武将らしき人物が登場する。然し、このスヴェネリドという人物に就ては、非常に奇妙な記述がうかゞわれる。先づ、6453 (945)年の記事に、はじめて彼が登場する個所には次の様に書かれているのである。

В лето 6453.

В се лето рекоша дружина Игореви: "отроци Свеньльжи изоделися суть оружием и порты, а мы нази; поиди, княже, с нами в дань, да и ты добудеши и мы". Послуша их Игорь, иде в Дерева в дань, и примышляше к первой дани, насилыше им, и мужи его; возъемав дань, поиде в град свой.

『6453 (945)年。

この年に親兵団がイゴリに言つた。「スヴェネリドの下級従士は武具装束をつけているが、我々ははだかである。公よ、我々と共に貢税をとりに行け。しかるときは汝も獲物を得るであろう。しかして我々も」と。イゴリは彼らのいうことを聞き、ジエレヴァ(の国)へ貢税をとりに行つた。しかして(イゴリは)以前の貢税に増税したり、彼らに乱暴を働いたりした。彼の家臣たちもまた(そのようにした)。(イゴリは)貢税をとつておのれの町へ

帰途についた。』

明らかに、此処では、スヴェネリドはイゴリの権力の支配下にはない。イゴリの親兵団が無装備であるのに、スヴェネリドの場合は、下級従士たちでさえ、武具装束をつけていたのである。当時のルシの公イゴリは、明らかに、同じルシの中に対立者をもつていた。少くとも実質的には統一君主ではなかつたように読み取られる。ところが、此処で面白い記述が続けられるのである。イゴリは貢税をより多く集めるために深入りし過ぎて、遂に遠征先で殺されるのである。イゴリの妻オリガはその時に幼少の息子スヴィヤトスラフと共にキエフにいた。その幼少のスヴィヤトスラフの養育係がアスムド〈Асмуд〉で、『軍司令官はスヴェネリドであつた』〈воевода бѣ свѣнелдъ〉と書かれているのである。同じ6453(945)年の記事である。イゴリの実質的な対抗者ほどにも見なされたスヴェネリドが何故、そのイゴリの幼少の息子の軍司令官であつたのだろう。しかし『過ぎし年月の物語』は実際に翌6454(946)年の記事として、幼少のスヴィヤトスラフをいたゞいて、オリガと共にイゴリの仇伐ちに出かける記事をのせている。そして、なお面白いことに、その後二十六年経て、6480(972)年の項には、このスヴェネリドは、自分の君主であつた管のスヴィヤトスラフがベチエネギの公クリヤに殺されると、すぐさま、都キエフのヤロポリクのもとに戻つている。そして、三年後、6483(975)年には、スヴェネリドの子が森で狩をしていた時に、オレグがこれを見つけて殺したと記され、オレグの兄ヤロポリクの輩下にいたスヴェネリドは息子の仇としてオレグを憎み、ついに、オレグはこのためにヤロポリクに殺されたのであつた。スヴェネリドが息子の仇であるオレグの死をたしかめた記事は、6485(977)年の項に見られるのである。『過ぎし年月の物語』が伝えるスヴェネリドとは、この様な人物であつた。『過ぎし年月の物語』は、まさに、この様に着色し、解釈

して、この人物を記録したが、それは、『過ぎし年月の物語』の着色と解釈であつたに過ぎないであろう。ために、ウオスクレヘンスキー年代記の6420(912)年の項、及びツフイヤオ一年代記の6422(914)年の項にほぼ同一文章で見られる記事をたしかめて見るがよい。其処では、スヴエネリドは初めからイゴリの軍司令官となつてゐるのではないか。然し、それでいながら、イゴリの完全な部下の人物ではなかつた。

Иде Игорьъ на деревляны, и победи я, и възложи на ня дань болши Олговы. И бе у него воевода именем Свентелд, и премучи Углицы, и възложи на них дань Игорьъ и власть Свентелду; и не владяшется един град, именем Пересечен, и седе около его 3 лета, и едва взя и. И беша сядяще Углицы по днепру вниз; и посем приидоша межи во Днепр, и седоша тамо. И дасть же и дань деревскую Свентелду, имаше же по черне куне от дыма; и реша дружина Игоревы: "се дал еси единому мужу много".

『イゴリはジエレウリヤネに進攻し、しかして彼等を打ちまかした。しかして彼等にオレグの(貢税)よりも一層大きな貢税を課した。しかして、彼のもとにはその名をスヴエネリドという軍司令官がいた。しかして、ウグリチたちを大いに苦しめ、イゴリは彼等に貢税を課してスヴエネリドに与えた。しかして、ベレセチエンという名の町だけは与えられなかつた。イゴリはその町の近くに三年間坐し、ほとんどその町を手に入れた。しかしてウグリチたちはドニエプル河に沿つて下流に暮してゐた。しかして、この後、ドニエブルの中流に来たり、其処に定住した。しかして、一戸から黒テン(の皮一枚づつ)を取り、(イゴリは)スヴエネリドにジエレウアの貢税をも与えた。しかして、イゴリの親兵団は言つた。『見よ、(汝は)一人の男にだけ多くを与えた』と。』

『過ぎし年月の物語』や、ソフィヤオ一年代記、ウオスクレセンスキー年代記等の記事から見て、スヴエネリドは明らかに巨大な富と権力をもつた人物^{であつた}がいない。独自の親兵団を公の親兵団よりも多くきらびやかに維持し、それをさへる富も、独自に貢税を集める権力を獲て可能であつた。そして、実にそのことへの反目が、公及びその近側に起つたことを『過ぎし年月の物語』は伝えていたのであつた。都キエフにおいてさえ、実は、その様な権力の散開が認められたのである。まして、都と離れた所においてはなおさらであつた。イゴリの妻オリガが夫の死後、ジエレヴの国の公マル〈Мал〉から嫁に來いと強要される折にも、その使者の口上には、我々の『公たち』〈князи〉と明らかに複数形が用いられてゐたのではないか。だから、この公たちが、リュリク〈Рюрик〉の子孫たちであつたもの達をも含めて、お互いに勢力争いをしてゐたことは想像にかたくない。『過ぎし年月の物語』は、その事実を、公の一族ではない、単なる軍司令官という名のスヴエネリドの原因に帰して、公の兄弟争いの責任を彼とその殺された息子のせいにしてしまつたのであつた。そのことによつて、公の血統には兄弟争いの責任を持たせないでおこうという記者の作意が働いてゐなかつたと言えようか？ そして、その公の兄弟争いに終止符を打ち『独りでキエフに君臨し』〈княжити в Кіеве один〉た人物こそ、キリスト教を輸入したヴオロジメル公であつたと『過ぎし年月の物語』は書きとめたのであつた。そして本来、公の一族には争いの責任はなく、然も、キリスト教的名君ヴオロジメル公によつて、ルシの国は統一されたという物語に仕立てゝしまつたのである。明らかに此処には、キリスト教の信仰に生きる修道僧年代記者らしい、祖国統一の念願と宗教信仰の一体化した理想の投影が読み取られるであらう。

ヴオロジメル公の時代をキリスト教攝取とキエフ統一国家の様相

を、そうあつてほしい理想として高くかゝげたかつたのが年代記者(たち)の念願であつたであらう。だが、それは、あくまでも、理想的な念願でありつゞけた。実際は、血縁の公たちの痛々しい内紛流血が絶えなかつたし、統一国家など実現しはしなかつた。『過ぎし年月の物語』は実に、理想や念願とは裏腹な血生臭い物語を痛々しく書きつゞけなければならなかつた。たしかに、『過ぎし年月の物語』は、ヴオロジメルがヤロポルクに勝つてからは、実に三十五年間に及んで内戦を書きとめていない。それだけに、ヴオロジメルの時代は、先づ、回帰すべき統一国家像として書きとめられ易かつたのであらう。そして、統一国家の念願に答えてくれるような平和は、時の公を賞讃の的にかけながら、高く評価して書きあげられたものであつた。つゞいてヴオロジメルの息子たちの間に火を吹いた内戦は、ヤロスラフ公とミスチスラフ公が国を分割することによつて終りを告げ、五十年ばかり内戦を見なかつた。ヤロスラフ公への年代記者の好意的な大傾斜の所以である。だからこそ反対に、公たちの内紛が公の一族によつてではなくて、家臣たちの不心得から油をそゝがれるような事態を記録する場合には、その不心得者に対しては、年代記者のありつたけの憎悪がこめられたのであつた。6488(980)年の記事に見られたブルド<Блуд>の主人裏切の行爲は、まさにその典型的なものであつた。『かくの如きものは悪魔どもよりも、えげつない』<горыше суть бесов таковни>とののしられたのであつた。そして、そのののしりの姿勢は、奇しくも、キリスト教的モラルと一致したのであつた。そして、キリスト教的モラルの姿勢を以てする統一国家の待望とは、決して、武力による専制者の出現を望む形のものではなかつた。むしろ、兄弟愛によつて公たちが協力し合い、若きは老令者に従うという形での国家の出現なのであつた。或は、もし、それが不可能ならば、せめて、最少限度、お互いの分野を犯さないと

いう協調なのであつた。『過ぎし年月の物語』が、その冒頭に、ノアの三人の息子が、互いに相手の領分に踏み込まずに暮していたと言いたのも、その願いの現れであつたと見るべきである。スヴィヤトボルクが、ボリスとグレブを殺した記事では、殺された側のボリスとグレブは高き兄弟愛に生きた犠牲者として深く嘆かれたが、勝ち誇つたスヴィヤトボルクが『おのれの兄弟を全部殺し、ルシの権力を一人で我がものにしよう』〈Изобью всю братью свою и прииму власть Русьскую един〉と語るのを書きとめる折には、その様な形での統一者ならば、決して待望していないとする年代記者の憎悪が込められていたのである。だからこそ、年代記者は、このスヴィヤトボルクに度々『呪われたる』〈окаянный〉という形容詞を冠していたのであつた。そして、『過ぎし年月の物語』が至賢なる名君とほめあげたヤロスラフ公こそは、実に、このスヴィヤトボルクを打ち負かした人物なのであつた。だから年代記者には、このヤロスラフ公の時代の空気が、その理想への望ましい才一段階の見本として映じていたように思われる。かくあつてほしいという希望に近いものとして、ヤロスラフ公の時代の出来事は、だから、明るく、楽しげに、賞讃を交えて書きとめられたように読みとれるのである。ためしに、ヤロスラフに関する『過ぎし年月の物語』の記述を追つてみるがよい。

スヴィヤトボルクを相手とする永い戦いの後にヤロスラフが勝利をおさめたのは6527(1019)年のことであつた。その年の項の終りには、『ところでヤロスラフはキエフに坐した。おのれの親兵団と共に汗をふき(労苦を終つてがいせんし)、勝利と大いなる功績を示した』〈Ярославъ же съде Кыеве, утеръ пота съ дружиною своею, показавъ побѣду и трудъ великъ〉と書かれた。そして翌々年6529(1021)年には、ブリヤチスラフ(ヴォロジメルの孫、即ちイジヤスラフの息子)がノヴゴロドを攻略したのを

、ヤロスラフは出撃して取り返し、ほとんど平和な統一国家の姿に時代は近づくかに見えた。ところが、6531(1023)年に、この名君ヤロスラフをトムトロカニのミスチスラフ《Мъстислав》が襲うのである。ところが此處で、『過ぎし年月の物語』はその書きぶりを大きく変えているのである。即ち、その時、ノヴゴロドにいたヤロスラフの留守に、ミスチスラフが都キエフに入城しようとして、キエフの人々に受け入れを拒否されたと大言したのである。さてミスチスラフの軍とヤロスラフの軍はリストヴエナ河で相会した。その折の記述は既にその文章を引用したが、ともかく、結果的にはヤロスラフ公が敗北したのであつた。ところが、この6532(1024)年の記事の終末部分から翌々6534(1026)年にかけての記述は、特に注目すべきである。というのは、年代記者の念願が叶えられるほどの事態が、兄弟愛の思想のもとで実現したからである。年代記者が、祖国の姿は、せめても、かくあつてほしいと願つた事態が実現したからである。その記述の筆の運びの喜ばしげであることを我々は読み取りたい。同時に、十二世紀初頭の年代記者が、この時代への回帰を人々に訴えたいとする姿勢もまた読み取られるべきであろう。ラヴレンチー、イバーチー等の年代記の『過ぎし年月の物語』には、次の様に書きとめられている。

И посла Мъстислав по Ярославѣ глаголя: "сяди въ своемъ Кыевѣ, ты еси старейшей братъ, а мнѣ буди си сторона"; и не смяше Ярославъ ити въ Кыевъ, дондеже смирилася. И сядяше Мъстиславъ Черниговѣ, а Ярославъ Новогородѣ, и бѣяху Кыевѣ мужи Ярославли. Въ томъ же летѣ родися у Ярослава другой сыноу, и нарече имя ему Изяславъ.

Въ лето 6534.

Ярославъ совокуни вой многы, и приде Кыеву, и

створи мир с братом своим Мъстиславом у Городьца. И разделиста по Днепр Русьскую землю: Ярослав прия сю сторону, а Мъстислав ону; и начаста жити мирно и в братолюбьстве, и уста усобица и мятежь, и бысть тишина велика в земли.

В лето 6535.

Родися 3-й сын Ярославу, и нарече имя ему Святослав.

В лето 6536.

Знаменье явися на небеси, яко видети всей земли.

В лето 6537.

Мирно бысть.

『しかしして、ミスチスラフ（勝利者である弟……筆者註）は、ヤロスラフ（負者である兄……筆者註）を迎えに使者をたてゝ言つた。『おのれのキエフに（公として）坐せ。汝は長兄であるからである。しかししてこの国は我に与えよ』と。しかしして、二人が和解するまでは、ヤロスラフは敢えてキエフには行き得なかつたのであつた。しかししてミスチスラフはチエルニゴフに、ヤロスラフはノヴゴロドに坐していて、キエフにはヤロスラフの家臣たちがいたのであつた。（この間、都キエフにはどの公も居なかつたことになる。平和のない時には、かく、都にさえ居り難いことを、年代記者は強調したかつたのであろう……筆者註）。この年に、ヤロスラフのもとでは才二の息子が生まれ、彼の名をイジヤスラフと呼んだ。

6534（1026）年

ヤロスラフは多くの軍勢を集めてキエフに来たり、おのれの弟ミスチスラフとゴロデツツのほとりで和を結んだ。しかしして（二人は）ルシの国をドネブル河に沿つて分けた。ヤロスラフは此方の側を、ミスチスラフは彼方の側を受け取つた。しかしして二人は、平和に兄弟愛の内に暮しはじめた。しかしして、内紛と反乱は止み、

ルシの国には大いなる平安があつた。

6535(1027)年。

ヤロスラフに才三の息子が生まれ、その名をスヴィヤトスラフと呼んだ。

6536(1028)年。

天にしろしがあつた。国中から望見された。

6537(1029)年。

平和であつた。』

父の軍勢をひきい、父に最も愛され、軍勢に信頼されていたボリスが、父の急死後、『キエフに行つておのれの父の王座につけ』〈пойди, сяди кыеве на столе отни〉と親兵団にすすめられながら、『おのれの長兄に向つて我は手をあげることをなすべきではない。もしも我が父が死んだのなら、この者(長兄 スヴィヤトボルク……筆者註)が我にとつて父の代りになるべきである』〈Не буди мне възняти руки на брата своего старейшего; аще и отец ми умре, то съ ми буди в отца место〉と答えたのも、まさに、年代記者の、かくありたいと願う姿に一致するものであつた。然し、実にその信念のために、ボリスは遂に暗殺されるのであつた。同じように、『父に対して従順であつた』〈бе бо послушлив отцо〉グレブもまた、そのこと故にスヴィヤトボルクに殺されたのであつた。其処には年代記者自身の願望の踏みつけられる悲憤と、踏みつける者への憎悪とがこめられていたのである。年代記者の願望は、実は、この様に、裏返しになつた形でしか表明されないことの方が多かつた。直接に表明されるためには、具体的な事件を離れなければならぬような内紛状態ばかりが続いていた。例えば、その典型的なものが、ヤロスラフの息子たちへの遺訓という形で述べられた言葉であつた。既に引用したことのある6562.(1054)年の記事はそうであつた。その遺訓の結びとして、『過ぎし

年月の物語』は、その冒頭にかゝげたノアの息子たちの話を此処でもまた反すうしていたと思われる。即ち、先に引用した遺訓は、実に次の様な言葉で結ばれていたのである。『しかし（ヤロスラフは）彼等（息子たち）に町々を分ち与え、彼等に兄弟の領分をおかさず、（兄弟をそれぞれの領分から）追い出さぬように遺訓し、（長子の）イジヤスラフに向つて言つた。『もしも何者かが、汝の兄弟をばづかしめようと懲ずるならば、汝は、ばづかしめられるものに助力せよ』と。かくの如く、彼はおのれの子等に愛の中にあるように教訓したのである』 <И тако раздѣли имъ грады, заповѣдавъ имъ не преступати предѣла братня, ни сгонити; рекъ Изяславу : «аще кто хоцетъ обидѣти брата своего, то ты помогай его же обидать». И тако уряди сыны своя пребывати въ любви. >

然し、実際の動きは、この教訓と全くうらはらであつた。弟たち——スヴィヤトスラフとフセヴォロドは6581(1073)年には早くもキエフの王座から長兄イジヤスラフを追い出し、追い出されたイジヤスラフは弟たちに対抗するために西方の外国の勢力にさえ頼るのであつた。この様なルシの国の状態が続く限り、草原の外敵ボロヴェツの恰好の飼食になることは火を見るよりも明らかであつた。そして、心ある年代記者がこの悲痛な状態から抜け出す道を苦しみつゝ探し求めたのは当然であつた。然し、その探索を年代記者はあくまでも具体的な事件の中に求めようとした。その事件が、どれほど自分の願望を裏切るような質のものであろうとも、決して、虚構を『過ぎし年月の物語』の中へ組み入れようとはしなかつた。そして、ヴオロジメルやヤロスラフの時代を、公がキエフの王座にあつてルシの国全体を深い愛の内に統治した時代だと考えて、『過ぎし年月の物語』に記述しつゝも、その時代へ再び戻り得るものだとは少しも期待はしていなかつたかに見える。その様な過去への回帰よりも一層焦眉

な問題があつた。外敵ボロヴェツに對抗することであり、そのためには、ともかくも、内紛を停止することであつた。むしろ、その一つの目標として、ヴオロジメルやヤロスラフの物語が後で書かれたのであつて、その物語の内容に当るものが先に実在したのではなかつた。より適確に言うならば、理想的なルジの統一国家と言ひ得るようなものは、一度も実在などしなかつたのである。そのことを百も承知の上でなければ、統一の熱い願望に燃える年代記者が、最後まで血生臭い実際の事件を追求することとはできなかつたであらう。むしろ、願望に押されて、虚構の中へ逃げ込んだはずである。『過ぎし年月の物語』は、そうならなかつたところにその大きな価値を保有し続けられる理由がある。

さて、ヴオロジメルやヤロスラフの時代の記述にみられた、年代記者の願望の照り返しではなくて、実際に願望通りの事実が生まれそりになつたことを『過ぎし年月の物語』はその終末近くになつて、うれしげに書き残しているのである。即ち、6605 (1097)年の記事の冒頭である。

В лето 6605.

Придоша Святополк, Володимир, Давыд Игоревичь, и Басилко Ростиславичь, и Давыд Святославичь, и брат его Олег, и сняхася Любичи на устроенье мира, и глаголаша к собе, рекуще: "почто губим Русьскую землю, сами на ся котору деюще? А половци землю нашу несуть розно, и ради суть, оже межю нами рати; да ноне отселе имемься в едином сердце и блюдем земли, кождо да держить отчину свою: Святополк Киеву Изяславу, Володимир Всеволою, Давыд и Олег и Ярослав Святославу; а им же роздаля Всеволод города, Давыду Володимерь,

Ростиславицема Перемышль Володареви, Теревовль Василкови". И на том целоваша крест, "да аще кто отселе на кого будеть, то на того будем вси и крест честный"; рекоша вси: "да будеть на нь крес честный и вся земля Русьская", и целовашеся поидоша всояси.

『スヴィヤトボルク、ヴオロジメル、イゴリの子ダヴィド、及びロスチスラフの子ヴァシルコ、及びスヴィヤトスラフの子ダヴィド、及びその弟オレグが来たり、和平締結のためにリコベチに集まつて、互いに語つて言つた。//何のために（我々は）お互いに紛争を事として、ルシの国を破滅させているのか？一方、ボロヴエツたちは我々の国を不和にみちびき、我々の間に戦争があるのを喜こんでいる。今後は心を一つにしてルシの国を守ろうではないか。各自がおのれの世襲領地を保有することにしよう。即ち、スヴィヤトボルクはイジャスラフの（世襲領地）キエフを、ヴオロジメルはフセヴオロドのそれを、ダヴィド、オレグ及びヤロスラフはスヴィヤトスラフのそれを（保有し）、また、フセヴオロドが町を分け与えた者たち——即ちダヴィドがヴオロジメリを、ロスチスラフの子等はベレムイシリをヴオロダリが、テレボグリをヴァシルコが（保有することにしよう）』と、しかして（彼等は）このことを約して十字架に口づけした。//もしも誰かと誰かに齒向つて立つならば、皆が、そして聖なる十字架も、その者に向つて立つであろう』と、しかして全員が言つた。//その様な者に対しては、聖なる十字架及びルシの国の全体が向うように』と、しかして、互いに口づけし合つて帰途についた。』

此処には、ほとんど全部の有力な公の一族が集つたことになる。そして、その頃社会的に形成された世襲領地の保全を話し合つたことになる。ノアの息子の手本は此処に至つて実現したかに見えた。相互にその領分をおかさないうで、協力しながら平

和に暮そう、協力して外敵に当らうと言うのである。然しながら、この考えは、むしろ、公たちの内紛の結果に、やむなく生まれたものであろうし、一時は、この原則によつて、内紛を抑制し得たかも知れないが、実は、其処には大きな理想の消滅という犠牲があつた。即ち、キエフを都とし、王座を此処に設定しようという大きな統一国家の待望の破棄であつた。更にこれこそ、本当は、最年長の公が国家主領であるべしとする古い理想の消滅なのであつた。年代記者は果してそれをわきまえていたであろうか？。最も高くかゝげたい理想を一度はおろして見て、次善の願望をかゝけて見たとき、理想とは既に古びた古代社会の生み出したものに他ならず、次善の願望とは十一世紀末ロシア社会がやむなく創り出した統治手段に他ならなかつたことを、年代記者は深くは、わきまえていながつたようにも思われる。ノアの子等の物語を冒頭に持ち出して『過ぎし年月の物語』を始めようとする姿勢がそれを物語っているであろう。次善の願望であつた分割統治手段こそは、一皮むけば、余りに悲惨な矛盾を自からの内に秘めているものであることを、年代記者は見通していながつたように思われる。国家統一をますます困難にし、却つて内紛の温床をなしていたものこそ、次善の統治手段であつた。この夢が破られる事件を書きとめる折には、だから、『過ぎし年月の物語』の筆の運びは益々痛々しさを増すのであつた。その後の各年代項の事件の記事はまさにその様なものであつた。ヴァシコが両眼をつぶされる物語は、その内でも最も痛々しい記事であつた。内紛は終止符を打たれるどころか反対に益々激しさを増して行つたのであつた。この矛盾の袋小路へ入り込んだ時に、『過ぎし年月の物語』は非常に面白い記事を書きとめるのである。即ち、もう一度次元を高めた国家統一理念の生産である。其処には或はネストルを超えたセリヴェストルの筆の跡があるかも知れないが、6605(1097)年の記

事の中にみられる、フセヴオロドの未亡人と府主教ニコライの忠告の言葉である。兄弟間の内紛に明け暮れて、外敵に攻められ、父祖の国を滅そうとするのかという忠告の言葉である。そして、それを聞いたヴオロジメル of 態度であつた。そして、また『過ぎし年月の物語』の最終的な理想態度とは、ヴオロジメル of 遺訓に現わされた宗教的姿勢による國家統一理念であつた。その理念は、今度は、約束履行の義務を負うべしという考えにさへえられていたのである。ヴオロジメル・モノマハ《Володимир Мономах》の教訓にはその点が強く表面に押し出されていたのである。ロスチスラフの子等を追放して、その領地を奪おうとする、自分の兄弟たちからの提案の使者を迎えた時、彼はその提案に同調はしなかつた。彼は答えているのである。『もしも汝等がたとえ怒ろうとも、（我は）十字架（約束）を犯して汝等に同調することはできぬ』《Аще вы ся и гневаете, не могу вы я ити, ни креста переступить》と。また、これと同じ考えが自分の子等に遺訓をなす折の言葉にも展開されるのである。『もしも汝等が兄弟たち或は誰かに向つて十字架に口づけ（約束）するよりのことがあれば、……守りて、犯すべからず……』《Аще ли вы будете крестъ целовати к братьи или к кому, ……блюдете, да не приступни, ……》この二つは、突は『過ぎし年月の物語』が終つた後、数年後、即ち6633（1125）年の項として、各種の年代記に書き取られている文章であつた。だが、『過ぎし年月の物語』は、このヴオロジメル・モノマハの生存中に完結していることを考え合わせるとよい。また、『過ぎし年月の物語』そのものの中にも、この思想は鮮やかに反映している。それは、ヴオロジメル・モノマハが敵との約束をさえどれほど重要視したかを物語る一節としてある。即ち、6611（1103）年に、久しぶりにポロヴェツ人たちに勝ち戦のなし得た物語を伝える文章が終るところに、ヴオロジメル・モノマハが敵

の捕虜を扱つた物語がある。約束の背反を厳しく問いつめる彼の姿として描かれているではないか。

И убиша ту в полку князий 20: Урусобу, Кчия, Аръсланапу, Китаонпу, Кумана, Куртка, Ченегрепу, Сурьбаря, и прочая князий их; а Белдюзя яша. Посем же седоша братья, победивше врагы своя, приведоша Белдюзя к Святополку, и нача Белдюзь даяти на собе злато и сребро, и коне и скот; Святополк же посла и к Володимеру. И пришедшу ему, нача впрашати его Володимер: "то веде, яла вы рота? Многожды бо ходивше роте, воевасте Русскую землю; то чему ты не казаше сынов своих и роду своего не преступати роты, но проливашеть кровь хрестьяньску? Да се буди кровь твоя на главе твоей". И повеле убити и, и тако расekoша и на уды...

『しかして、(ボロヴェツたちに勝つたロシアの公たちは...・筆者註) その時、戦闘において(ボロヴェツの公たち)二十人を殺した。即ち、ウルソバ、クチイ、アルスラナバ、キタノバ、クマン、クルトク、チエネグレバ、スリバリ、及びその他、彼等の公たちを...ところで、(ロシアの公たちは)ベルジュジを捕えた。この後、おのれの敵どもを打ち破つた公兄弟たちは停戦し、ベルジュジをスヴイヤトポルクのもとへ連れ来たつた。しかしてベルジュジはおのれの身代金として金、銀、馬及び家畜を差し出しはじめた。ところで、スヴイヤトポルクは彼をヴオロジメル(モノマハ)のもとへ送つた。しかして、彼が到着したとき、ヴオロジメルは彼を問いたゞしはじめた。"これは、誓いが汝等を打ちまかしたということではないか!" というのは、(汝等は)幾度か誓いをたてながら、やはりルシの国を攻めたからである。ところで、何故に、汝は、おの

れの子等及びおのれの一族に誓いを破らぬように指示しなかつたのか？ キリスト教徒の血を流さぬようにせしめなかつたのか？ 今こそ、汝の血が汝の首に流れるがよい」と。しかして、ヴオロジメルは彼を殺すように命じた。かくして（人々は）彼を寸断した。』

かくして、年代記者は、遂に、祖国統一の根底に、『信義を重んずる』ことを探し当てたのである。そして、それを具現してくれそうな統治者として、当時、一方の有力者であつたヴオロジメル・モノマハに期待したのであつた。そして、実は其処で『過ぎし年月の物語』は終るのである。

ともあれ、公たちの間に起つた、そして、当時、起り続いていた内紛は、『過ぎし年月の物語』の記者にとつては、誠に愚かな、粗野な、いまわしい出来事の連続であつたにちがいない。だからこそ、その内紛の原因の多くを、『悪魔のたぶらかし』〈кознь дьявола〉によるものだと説明し、公たちの『争い』〈котора〉を、サタン〈сотона〉の奸策によると説いたのであろう。そして、反対に、ノアの三人の息子たちが、そりしたように、『兄弟の領分を誰も犯さない』〈не преступати никому же в жребий братьев〉ことは、同時に神の教えであり、父祖の遺訓であり、人間としての信義であるべきだとした。だから、例えばスヴイヤトボルクのように兄弟たちを殺し、或は両眼をつぶし、或は追放して、独りキエフの王座についたような記事は、この理念によつて裁かれるように記録されているのである。『スヴイヤトボルクはおのれの兄弟を追放し、父祖の遺訓を、それ以上に神の教えを犯して、キエフに坐した。というのは、おのれの父の遺訓を犯すことは極めて（重い）罪であり……他人の境界を犯すことは良くないからである』〈Велий бо есть грехъ преступати заповедь отца своего……, не добро бо есть преступати предела чужего〉6581(1073)年の記事であ

る。そのスヴィヤトポルクに両眼をつぶされ、結局は、なぶり殺しに殺されたヴァシルコが、嘗つて、スヴィヤトポルクと戦つて旗色が良かつた時、どうしたであろうか。『過ぎし年月の物語』が気高いじゆん教者として賞讃するヴァシルコは、相手に打ち勝つても、決して、他人の領分にまでは押し入ろうとしなかつた。そう言う形で、書きとめられているのではないか。『ヴオロダリとヴァシルコは（スヴィヤトポルクに対して）勝利を得て後、其処にとどまつて、かく言つた。〃我等は我等の境界内にとどまらねばならぬ〃と。しかして何処へも兵を進めなかつた』6605（1097）年の記事である。〈Володарь же и Василко победивша, стаستا ту, рекуща: „довлѣтъ нама на межи своей стати“, и не идоста никаможе.〉

年代記者によれば、公はおのれの世襲領地内にとどまり、しかも、なお、全ルシの広い視野に立つべきであつた。むしろ、おのれの分限の中におりながら、ルシの統一國家へ向つて協力の姿勢を取るべきなのであつた。ヴァシルコはその姿勢の人であつたために、年代記者によつて、ルシ最高のじゆん教者にまつり上げられたのであろう。この視点から書かれた最も典型的な記事がある。6586（1078）年の記事である。スヴィヤトスラフの子オレグとヴィヤチエスラフの子ボリスとが、自分たちの二人の叔父を攻撃する。これを書きとめた年代記者はたゞちに、神が二人に責任を問ひ給うてあろうと批判したのであつた（原文引用は既に終つた）。打ち負かされたフセヴオロドが援助を求めて長兄のイジヤスラフに身を寄せたとき、イジヤスラフは自分もかつて王座を追われて異國をさまよつたと語り、彼をなぐさめ、協力を約束するのであつた。そして、その約束を彼は見事に守り通したのである。自からの生命を捨て、年代記者は、その故にこそ、永い、うるわしい彼への賞讃文を書き綴つて『過ぎし年月の物語』の中に組み込んだのであつた。修道僧であつた年代記者が、公

たち政治支配者に向つて、教訓ともなるべき調和統一の理想の形を示そうとしたとき、修道院の模様を持ち出して来るのは自然の勢いであつた。政治的支配者たちも、自分たちを見習つてほしいと言わんばかりに書き込んだものこそ、実は、ペチエルスキ修道院の物語であつたと思われる。其処には、次の様なうろわしい情景が読み取れるからである。即ち、フエオドシイの死後の物語である。

Стефану же предержашю монастырь, и блаженное стадо, еже совокупили Феодосий, такы черньце яко светила в Руси съяють: ови бо бяху постници крепкий, ови же на бденье, ови на кланянье коленьное, ови на пошенье чрез день и чрез два дни, ини же ядуше хлеб с водою, ини зелье варено, друзии сыро. В оюбви пребывающе, меншии покаряющеся старейшим и не смеюще пред ними глаголати, но все с покореньем и с послушаньем великым; такоже и старейшии имяку любовь к меньшим, наказаху, утешающе, яко чада възлюбленая. Аще который брат в етеро прегрешенье впадаше, утешаху и епитемью единого брата разделяху 3 ли, 4, за великую любовь: такова бо бяше в братьи той, вздержанье велико. Аще брат етер выидяше из монастыря, вся братья имяку о том печаль велику, посылаючи по нь, призываху брата к монастырю; шедше вси кланяхуся игумену, и моляху игумена, и приимаху брата в монастырь с радостью.

↑ところでステエファンが修道院を治め、フエオドシイが集めた至福なる(僧たちの)群を治めたとき、それらの修道僧たちは、燈明の如くルシにおいて輝いていたのである。というのは、或

者たちは厳しい精進にはげみ，或者たちは不眠通夜にはげみ，或者たちは膝を折つて礼拝にはげみ，或者たちは一日或は二日の断食修業にはげみ，他の者たちは水だけでパンを食べ，また他の者たちは煮た野菜を，或は生の野菜を食べていたのであつた。（全員が）愛の中にあつた，下級者は上級者の言うことを聞き慎しみ，上級者の前では敢えて口さえきくことをしなかつた。然し常に従順さをもち，偉いなる恭順さをもつていた。また同様に上級者たちは下級者たちに愛情を以て向い，いつくしむ子供たちの如くに下級者たちをいつくしみ教えたのである。もしも，或る兄弟（僧）が何等かの罪におちるようなことがあると，（僧たちは）（その者を）なくさめ，一人の兄弟（僧）の罰金を三人或は四人で分担してやつていたのである。偉大なる愛の故である。この兄弟僧たちの愛はかくの如くであつた。節制もまた立派であつた。もしも，或る兄弟（僧）が修道院を去ると，兄弟僧たち全員はそのことについて大いなる嘆きを抱き，彼を呼びに人を派遣し，兄弟（僧）を修道院へ戻りもどしていたのである。全員が修道院長のもとへ行つて頭を垂れ，修道院長に切願して，（逃げた）兄弟を喜びと共に修道院へ迎え入れていたのである。」

政治的支配者である公たちも，また，内紛をやめて，このような長幼の序と深き愛に生きてほしいと言いたかつたのであろう。もし，そうでなければ，ロシアは永遠に統一できないと年代記者は考えていたのであろう。然し，實際は，当のベチエルスキ修道院においても，その様な理想的な人間関係は実現されてはいなかつた。修道院の中においてさえ，派閥の争いは絶え間がなかつたのである。キエフ・ベチエルスキ教文伝によれば，此処に登場したステエファンという修道院長とて，実は，フェオドシイの生存中にフェオドシイの意志に反して仲間が擁立した人物でありフェオドシイを院長の座から追つたのであつた。それにもかかわ

らず、年代記者は、その争いには一言もふれず、虚構と思えるほどの理想的な人間関係図を『過ぎし年月の物語』の中に定着させてしまつたのである。とりもなおさず、争いなき平安な祖国の統一を年代記者が夢み、その手本を公たちに示して見せたかつたという熱意を思わせる一節として、これは、読み取られなければならないであろう。この様に理想への熱意の故に、事実以上に着色され、或は時に虚構をまことしやかに書き立てた個所が、だから、『過ぎし年月の物語』には数多くあることであろう。この作品が、古代ロシアの単なる歴史記録だとして受け入れられ、取り扱われることの危険な所以である。勿論、一般に、古い時代の歴史書とは、概して、そのようなものであつたであろう。後代の年代記者たちが、『過ぎし年月の物語』を最も尊重し、其処に書かれた内容を本当の事実だと受け取つたのは当然であつた。そして、最も大切なことは、後代の年代記者たちが、其処に書きあげられた内容と、それ以上に、書きあげる際の精神の構えを高く評価したことを注目しなければなるまい。ロシア諸年代記への『過ぎし年月の物語』の影響は、だから、書きつがれた記録の内容よりも、むしろ、その書き方の構えにあつたと言えるであろう。

— X —

ネストルが総まとめをした『過ぎし年月の物語』はそのまゝの形では現存はしていないが、例えば、ラヴレンチー年代記の『過ぎし年月の物語』の結語では、セリウエストル〈Селивестрь〉がもう一度書き直したものとして、その年号を6624年とし、〈а иже четь книги сія, то буди ми в молитвах.〉『これらの書（『過ぎし年月の物語』を決して単一の書物だとは見なさなかつたことを複数形で示したのである。…… 筆者註）を読むものをして我が祈り

の中にあらしめよ』とある。このラヴレンチー年代記における結びの言葉だけを取りあげるならば、セリヴエストルは、『過ぎし年月の物語』を宗教的な面からだけ取りあげて書き直したかの様にも受け取れよう。然し、宗教的な面はあくまでも背景的立場であるに過ぎなかつた。その背景の上に突出したいくつかの主張があつた。その主張の姿勢は、実に、ネストルのそれと全く同一であつた。というのは、ニコン年代記の6624年の項に、ラヴレンチー年代記が簡素化したと思われる、もとの全文が書きあげられているからである。其処には、如何にルシの国全体に視野をひろげ、統一の希望に燃えていたかと読み取れるであろう。『全ルシ』〈вся Русь〉が一度と『ルシの国』〈Русская земля〉が二度も用いられ、一方には『全』〈вся〉が、一方には『祖国』〈отечество〉が冠せられていることは、そのまゝ、ネストルの姿勢の何よりの顕現であつたであろう。即ちニコン年代記の6624年の項には次の様にある。

В лето 6624.

Се аз грешный инок Селивестр, игумен святого Михаила, написах книги сия, глаголемыя Греческим языком хранограф, Русским же языком тлъкуется временник, еже есть летописецъ, во священно и божественно священноначалства господина Никифора митрополита Киевскаго и всея Руси, во обладание державы Киевския православнаго и благочестиваго великаго князя Владимиреа Каномаша, сына Всеволожа, внука Ярославля, правнука великаго и равнаапостольнаго святого Владимиреа, нареченнаго во святем крещении Василиа, крестившаго всю Русскую землю. Писа же вся сия любви ради Господа Бога, и пречистыа Богородици, и святых его, и своего ради отечества Русския земли,

во спасение и пользу всем, и мол всех прочитающих
книги сия, да помолятся о мне во святых своих мо-
литвах, да сладостный и радостный глас слышу от
Господа Бога в день он суда великаго, и избавлен
буду безконечных мучений, и обещанных благих от
Господа получю, молитвами пречистыя Богородици и
всех святых, аминь.

自分が来世で救われたいという、むき出しの願望が此処には読
み取れるほどの文章でありながら、其処には、特に前半にネスト
ルと同じ構えが読み取れるのは、さすがであると言わなければ
なるまい。ちなみにこのニコン年代記の文章の意味は次の通りで
ある。

『6624(1116)年。

聖ミハイル(修道院)の修道院長である、我、罪深き修道僧セリヴ
エストルが、これらの書物を書いた。グレキの言葉ではフロノグラ
フ<хронограф>と言われ、ルシの言葉では年代記<льтописець>
である編年記<времник>と訳されているものである。キエフ
及びルシ全土の府主教ニキフォル様の神聖なる教会権力をたゞえ
る為であり、フセヴオロドの息子にして、ヤロスラフの孫、そして
ヴァシリイの聖なる洗礼において名を受け、ルシ全国を洗礼した
偉大にして且つ使徒にもたとうべき聖ヴラジミルの曾孫であるヴ
ラジミル・マノマハなる正教の敬けんなる大公のキエフ国家統治の
為なのである。すべてこれらの書物を書いたのは、主なる神及び
聖母及び神の聖者たちの愛故であり、またおのれの祖国ルシ
の国の故であり、万人の救いと益の為である。しかして、これ
らの書物を読む総ての人々は、願わくば、それぞれおのれの聖
なる祈りにおいて我が為に祈つてほしいのである。かの偉大な
る裁きの日に主なる神の甘美にして楽しい御声を私が聞き得ま
すように、そして、私が無限の苦しみからまぬがれ得るように、

そして、神によつて約束された幸をば、聖母及び総ての聖者たちの祈りによつて私が受け得るように。アーメン。』

セリウエストルがネストルの『物語』を書き直し、書き加えた際にも、だから、実際は、ネストルのレールの上を動いて、多少、その先を伸ばしたに過ぎなかつたであろう。古代ロシア文学の金字塔である『イーゴリ遠征物語』が、理念的にも（——宗教的色調だけは別として——）、或は比喩に用いる題材の上からも、『過ぎし年月の物語』に強い影響を受けていたことは言うまでもない。その『イーゴリ遠征物語』や『過ぎし年月の物語』が叫び警告していた、内紛の停止が実現しないまま、古代ロシアは、外敵のボロヴエツに痛めつけられ、果ては、タタールの大軍に押しつぶされて、遂に、所謂三百年に及ぶ暗黒時代を迎えなければならなかつた。そして、踏みつぶされた古代ロシア国家が再び蘇生するのは、管つての栄光に輝いたキエフの都や、富み栄えたノヴゴロドの町においてではなくて、遙か東のモスコにおいてであつた。次才にタタールの重圧をはねのけて、祖国の栄光を取りもどして行くモスコ公国が、『過ぎし年月の物語』の理念を再び呼び戻したのは当然のことであつた。だから、巨大な量に及ぶロシア年代記の中にあつて、特に、モスコ年代記が、最も強烈に、『過ぎし年月の物語』の影響下にあることは当然と言わなければなるまい。モスコ年代記は、その記事の年号の古い部分をほとんど『過ぎし年月の物語』からの引き写しで埋めている以外に、例えば、6636(1128)年の記事の如きは、ウオロジメル公がキリスト教を摂取する以前の行状を反すうして、『過ぎし年月の物語』の6488(980)年の項を再構成したものであつた。そして、その翌年、6637(1129)年に、ボロヴエツに打ち勝つたムスチスラフ〈Мъстиславъ〉の記事を、『ウオロジメル・(モノマハ)が自からドン河のほとりに立ち、神を信ぜざるものどもを追い払い、ルシの国のために多くの汗を拭いた(多くの勞

苦をなした』〈Володимеръ бо самъ собою постоя у Дону и прогна безбожныя и много пота утеръ за Русскую землю〉ことを回想して今度の事件もそれと同じであるとし、『かくして、神はルシの国を異教徒たちから救い給うた』〈И тако избави богъ Русскую землю от поганыхъ〉と書きしるしたのは、『過ぎし年月の物語』の記述姿勢と全く同一であつた。

この記事から、時代が百年ほどさがつて、6720(1212)年の記事にまで来たつても、同じように、僧としての年代記者の顔が記事の間にのぞき出ている。6737(1229)年、6738(1230)年の記事とても同じである。この傾向は、それ以後二百年ほどの年号記事にあつても大きくは変わらない。特に、外敵の侵入を受け、内には不幸が相つぐ折には、『過ぎし年月の物語』の姿勢の反すうがはげしくなつて来る。例えば、6916(1408)年の項の記述はその典型と考へてよいであらう。フスコフの国に〈Псковскую землю〉にネムツイ〈Немцы〉が大軍〈велика сила〉で来襲〈Приходиша〉したと伝え、イヴァン公〈князь Иван〉がタタールと共にフヨードル公〈князь Федоръ〉を攻めて、両公国を我がものにするという内紛の不幸を伝える。この二人の公が和睦すると、その直後には大火〈пожаръ великъ〉がロストフの町に起り、人と富が焼失する。それを境にして、各地の公たちが一致協力の姿勢を取りはじめると、今度は各地に悪疫〈моръ〉が流行して人々をなやますのであつた。公たちは再び相互に軍を進めあつて分紛をくり返す。ところが、その冬に、巨大な外敵がルシの国に侵入して来たのである。モスコ年代記集は以上の前書きについで、この不幸を次の様に書きしるしている。この年の冬、ブラト帝〈Булат царь〉の命によつて、エジダイ公〈князь Едигей〉がルシの国に攻め来たつた。上記の帝の息子四人とその他の公十人が同行していたのである。ヴァシリイ大公〈князь великы Василен〉は、これを聞いてタタール軍に対抗することなく、

コストロマ《Кострома》に退去した。十二月一日にエジケイは大軍をひきいてモスコに攻め来たつた。『（彼等は）悪しき狼の如く全国に散じ、あらゆる町々にも、あらゆる地方にも、郷にも村にも（あふれ）、タタールのいないような場所は一箇所も残らなかつた。』《Разсыпашася по всей земли, акы злии волци, по всем градом и по странам и по волостем и по селом, и не остана таково место, иде же не были Татарове》のである。モスコの近くに布陣したエジケイは使者をイヴアン大公《князь великы Иван》に派遣する。協力してモスコを攻め落そうとするのである。然し、イヴアン大公は、タタールと組んで祖国の都を攻め落そうとはしなかつた。外敵と組んで同族を裏切り、権力を利己的に伸そうとする如き行為は、『過ぎし年月の物語』において、しばしば、厳しく批判されたところであつた。年代記者は充分それを承知して、『イヴアン公はこれを為すを欲しなかつた』《Князь же Иван не хотъ сего сотворити,》と書き、『過ぎし年月の物語』と同じ言葉で、『十字架への接ぶんを、しかして以前よりの和平と友愛とを裏切ること』《ни изменить крестного целованна и давного мира и любви》を欲しなかつたと書き直すのであつた。そしてイヴアンはモスコへ出かけるふりをして途中で引き返してしまふのである。その間、『モスコの町は敵軍にとりかこまれて、大いなる悲しみの中にあり、人々はたてこもつていた』《Град же Москва в печали велице бысть вои обьстонмъ, а людие в немъ затворишася》のである。このモスコに立てこもつた公の名前を年代記は三人書きあげ、それに加えて、貴族たち、主教たち、あらゆる階級の僧たち及び『多数の民衆』《мноее множество народа тмо-числено》であつたと述べている。『大いなる悲しみに取りつかれ、何処からの助力をも見出し得ず』《Скорбыю же великою одержими бяху ни откуду пособья обретающе》と書かれてい

る。そして、この言葉に続いて、『過ぎし年月の物語』が、教父伝的文章を駆使した如く、用語も文体も、発想法も、ほとんど、その文章の影響のまゝに、次の様に綴られているのである。(ロシア年代記集才二十五卷；p. 238 —— 十四世紀末モスコ年代記集才三三三葉～才三三四葉)。

точью от единого бога помощи получить прашаху и пречисте матери его молящися, скорой в бедах помощницы христианьскому роду, и пост и молитву створиша, мольбы же и моления приносящи с слезами и въздыханием и покаяние же чисто от душа кождо положиша, от грех очищающися и смерти ожидающе. Всеблагый же и милостив и человеколюбець бог услыша скорбь людей своих и молитв и моления и въздыхания их не презри, но обычным своим человеколюбием помилова люди своя, от безбожных Измаилтян избави.

『ただただ、唯一なる神よりの助けをえんとして(人々は)乞い求めつゞけていた。しかして、神のいと清き母に、不幸の中なるキリスト教徒一族の速かなる助け人として祈つたのである。しかして、精進と祈りとをおこない、涙とため息とを交えつゞ、祈りと願いをあげ、各人その心から清き悔悟をなし、罪より清められつゞ、死を待ち望んでいた。至福にして慈悲深く、人間を愛し給う神は、おのれの民たちの悲嘆をきこしめし給い、民たちの祈りをも、願いをも、溜息をも軽んじ給わなかつた。(神は)おのれの常なる人間愛もておのれの民をいつくしみ給い、神を信ぜざるイズマイルの輩どもより(我等を)まぬがれしめ給うたのである』

そして、タタールがモスコの近辺を荒し廻つて引きあげる情景を描く折にも、『過ぎし年月の物語』で年代記者が主観的に顔を出して、ふみつけられた祖国の人々の痛々しい悲嘆を述べ、

その筆の裏では、悲壯なほどの祖国愛を神の愛を説いたように、此処でも、その記述の呼吸は全く同一であつた。即ち、

Отшедшим же Татаром с множеством полона и всякого товару и всякого узорочья наивавшеся, полона же только множество ведяху, яко тысяща число превъсхождаше. Жалостно же бе видети, достойно слез многих, яко един Татарин до четьредесяти христьян ведяше с нужею повязавши, многое же множество исъсечено, инии же от мраза изомроша, друзии же гладом и жакею умираху. Отци и матери плакаху, зряще чад своих разбиваемых и умерьщвяемых, тако же и чада рыдаху разлучения от родителей своих, и не бысть помилующаго, ниже избавляющаго, ни помогающаго. И бысть тогда в всей Руской земли всем христьяном туга велика и плачь неутешим и рыдание и кричанье, вся бо земля пленена бысть начен от земли Рязаньские и до Галича и до белазера, вси бо подвизашася и вси смутишася, многы бо напасты и убыткы всем человеком здешася и болшим и меншим и ближним и далним, и не бысть такова, иже бы без убытка был, но вси в тузе и скорби мнозе и печалью одержими. Сию же скорбь за много времени неци от книжник провозвестиса, глаголюще: "яко в придущее лето будет скорбь людем". Еже и збытсся в время се. Во многих же местах от святых икон миро исхожаше, а от иных и кровь идяше на показание нам грешным, преже бо казненья бывають знамения и прещенья, да аще не покаемся, тогда по том казнь божья приходит на ны за наша прегрешения.

『ところで、タタールたちが、多くの捕虜及びあらゆる物資及びあらゆる高価な物を奪つて引きあげた時、捕虜の教だけでも、優に幾千を上廻るほどのものを引きつれて行つたのである。一人のタタールが四十人に及ぶキリスト教徒を強制的にしばりあげて引きつれていくのを見るのは、悲しく、多くの涙をさそつたのである。余りにも多くの人々が斬り殺され、また他の者たちは寒さのために凍死し、また他の者たちは飢えと渇きのために死んでいつたのである。おのれの子供たちが打ちさいなまれ、殺されて行くのを見て、父たち及び母たちは泣き、また子供たちは、おのれの親から引きさかれることを泣きさげんでいた。しかして、(その子等に)情をかけてやるものも、なくさめてやる者も、助けてやるものとてもなかつた。しかして、その時には、ルシの国土全体にわたつて、総てのキリスト教徒たちに、大いなる衷傷と、てい泣はとどめようとしてなく、泣き叫びの声は満ちあふれていた。というのは、全土が、リヤザンの國からガリチまで及びペロオゼロまでも捕囚されていたからであり、総ての人々は苦しみ、すべてのものは動乱し、多くの災難と損害があらゆる人々に、年長者にも年少者にも、近き者たちにも遠き者たちにも、ふりかゝり、損害を受けないようなものは一人もいなかつたからである。総ての人々が悲嘆にくれ、深い悲しみに沈み、嘆きにとりつかれていたのである。この悲嘆をば、遙か以前から学者の或者たちは『來たるべき年には人々に悲嘆がおとずれるであろう』と述べ伝えていたのであつた。それがこの時代に実現したのである。多くの土地においては、聖なる聖像から聖油が流れ出て、また他の(聖像)からは血が流れ出ていたのは、実に罪深き我々に(これを)示さんが為なのであつた。というのは、前兆及び恐るしききざしとして(神の)罰が現れ、もしも(我々が)悔悟しないならば、その後、神の罰は我々の罪の故に我々の上に來たるのである』

外敵の侵入及びその侵入による不幸を、年代記者は、神が罪の故に下し給う罰であると受けとめ、且つ、そうなるまでには、数々の前兆があつたと書きとめる姿勢は、まさしく『過ぎし年月の物語』の伝統であつた。そして、正視し得ないほどの悲惨な場面を、深い嘆きを突き抜けた、透明な筆致で書きあげ、却つて、そのことによつて、鋭い愛国的主張を言外に燃えさせたのは、これまた、『過ぎし年月の物語』が外敵ポロヴエツの侵入による悲惨な場面を書きとめた筆の運びと寸分違わないのである。モスコ年代記集の、この一節は、そのまゝの形で、ウオロゴドスコ・ベルムスキー年代記、ニカノロフスキー年代記等にも読み取られるのである。

このエジゲイ〈Едигей〉を主領とするタタールの侵入を取り扱つたロシア諸年代記中で、その記事が最も詳しく、然も、『過ぎし年月の物語』を最も鮮かに反映しているのは、何といつても、パトリアルフ或はニコン年代記〈Патриаршая или Никоновская Летопись〉であろう。其処では、『過ぎし年月の物語』のネストルの直後の編集者セリヴエストル〈Селивестр〉の名前さえ明記して、(ロシア年代記全集才十一巻；二一一頁)この記事が6917(1409)年の項で書きあげられているのである。その長文の記事に眼を通しつゝ、『過ぎし年月の物語』の姿勢や理念の反映する個所は、特に、原文引用をおこないつゝ、次に取りあげて見よう。

上に述べた数個の年代記と同じく、ニコン年代記も、この年6917(1409)年の項を冬に至るまでの記事で埋めた後、『その冬に』〈Тоя же зимѣ〉として『十二月二十日に』〈мѣсяца Декабря в 20 день〉と指定して、エジゲイがルシの国に來襲したことを詳しく伝えている。エジゲイのひきいる将たちの名前も詳しく列挙している。つゞいてヴァシリイ大公がエジゲイの來襲を聞いて悲しみに沈む記事があるが、悲しみ、なやまなけ

ればならない理由説明が此処では書きとられているのである。即ち、タタールたち——ニコン年代記では、タタールと呼び、時には、異教徒外敵を一つに称して、イズマイルのやから《Измаилтяне》と呼んでいるが——は、ずるくて、最初から偽りの和平をヴァシリイ大公と結んでいたからであるという。ニコン年代記は、此処で異教徒外敵についての一般論を展開し、統一さるべき祖國を望みつゝ、内紛不和をくり返すルシの公たちをも引き合いに出して来る。ルシの公たちの不和の種をまき、或はその不和を利用する外敵への憎しみを書きつけ、これを悪魔の故であるとするのである。

Никогда же бо Измаилтяне истинну глаголют христианом: аще убо когда немнози обрящутся Измаилтяне, тогда лестно и злоковарно и мир и любовь сотворяют, и честь дают, и тем злохитрство свое крыют и яд свой тайно имеют, и мир глубок обещавают, и таковым пронырьством Русских князей друг в другом враждуют, и от любви их отлучают, и особную рать меж их составляют, и в той разности сами втайне подкрадают их, злии волцы христианом обретаются научением отца их сатаны. Икоже и ныне во дни сия случится;.....

『というのは、異教徒外敵は絶対にキリスト教徒に対して真実を語ることはないのである。もしも、多少の異教徒外敵が居合わせるならば、その時には、人をだましてずるがしこく、和平と交友を結び、また、贈物をさしげ、榮譽を（人に）与え、その様にして、おのれの悪がしこいことをかくし、おのれの毒をひそかに持ちつゞけるのである。しかして、深く和平を約束し、しかして、その様なずるさを以て、ルシの公たちを互いに敵対させ、公たちの友愛を分離させ、公たちの間に特に戦争を起さ

せ、しかして、その不和につけ込んで、自分たちは、ひそかに、彼等をかすめ取つてゐるのである。キリスト教徒に（かゝる）悪しき狼が見られるのは、彼等（異教徒外敵）の父なる悪魔のそそのかしによるのである。全くそれと同じようなことが、今日もまた起つたのである……』

そして、年代記者は、『過ぎし年月の物語』と同じく、神を持ち出して愛國の情に燃えて、説き進めているのである。

Но Господь Бог своею благодатию и пречистаа Его Мати Богородица безделны советы разоряху; и егда вмале попустит им Бог ратовати нас, и мы тогда от дел и обычаев греховных отступити обещаваемся, и Бог милостию своею и пречистаа Его Богородица тишину нам дасть и благоданьство, и мы тогда в забвѣе приходим, от правды заблужаем, и друг друга ненавидим, и брат брата ратуем, и чужаа возхищаем, и лукавствуем; и того ради Господь Бог возставляеть на нас враги наша и посещает жезлом безакониа наша и ранит: многи бо, рече, раны грешному. Злочестивии же Агаряне, яко волны ухищряюще, подкрадают нас, да неколи князи, надеющиеся, с ними истинно мирующе, и любовно пребывающе, безстражни от них будут, да обретше они время удобно себе,.....

『しかしながら、主なる神は、おのれの恩ちようにより、いと清きその母なる聖母も彼等（敵ども）の無益な相談を打ちくさき給うていたのである。しかして時に、敵どもに神がほんの少し我々を撃たせるよう仕向け給うような時には、我々はその時になつて、罪深い日頃の所業や習慣から離脱することを誓うのである。そうすると神はおのれの恩ちようを以て、またその母なるいと清き聖母も、我々に平和と平安を与え給うるのである。しかし

て、その時になるとまた我々は、(それを)忘れてしまい、正義から迷い離れ、相互に憎しみ合い、兄弟が兄弟に戦いをしかけ、他人のものをかすめ取り、ずるい行いをくり返しているのである。そのために、主なる神は我々に向つて我々の敵を立たしめ給ひ、我々の無法を杖をもつてたづね給ひ、打ち給りののである。罪あるものには、きず多しと言われている通りである。兇悪なる異教徒たちは、あたかも狼の如くに奸策をめぐらして我々に近づき、もしも一時、公たちが期待して彼等と本当に和睦し、平和に時を過し、彼等に何の警戒もせずにいるなら、彼等は、おのれに都合のよい時を見出して………』

敵を信用して、和を結び、敵との和平締結によつて、味方同志の公たちの間に却つて内紛が起る。それこそ、実は敵の望むところであることを年代記者は強調しようとする。敵と通じて、味方の公たちを裏切り、自己の勢力を拡大しようとする愚かさを熱烈にいましめるのであつた。にもかゝらず、タターのエジゲイは、おのれの全軍を統率した上で、ヴァシリー大公に偽りの和を講じ、多くの贈物を以て彼に榮譽を与えた。そして他のロシアの公たちの権力を協力して打ちくだき、ヴァシリー大公をロシア全土の最大権力者にしようと言をもちかけて来たのであつた。ところがその頃、この言をもちかけられたヴァシリー大公は、自分の妻の父〈Теть〉であるリトアニアの公と不和状態にあつた。リトアニア及びキエフの國を妻の父が支配していることが気に入らなかつたからである。ヴァシリー大公は、エジゲイと協力することによつて、自己勢力の拡大を計らうとしたのであつた。それを見抜いていたエジゲイは全面的にヴァシリー大公に協力することを申し出るのである。ニコン年代記は、此處まで説明的に書いて来て、記述の筆にドラマテズムを盛るべく、エジゲイの言葉を組み込むのである、『他のルシの公たちは、我と汝との和平協力を見てとり、汝に向つては事を構えず温順になり、汝

をおそれるであろう。というのは、我が全帝国を以て汝に協力しているからである。その故に汝は、おのが地位を高め、万人をふるえ上らせることができるであろう』《да и прочии увидятъ князи Русстии любовь нашу с тобою, и мирни и кроутии тебѣ будутъ и устрашатся тебя, яко мнѣ царством помогающу тебѣ, и того ради вознесешся, и устразиши всѣхъ》しかも、このエジゲイは、ロシアの公たち同志を戦わせようとして、一方ではトリアニヤ公にも使者を送つて、ヴァシリイ大公への憎悪をあふり立てようとするのである。ニコン年代記の記述は、このあたり、直接に使者口上の形などを利用して、物語の起伏を激しくしている。ヴァシリイ大公と協力を約束しながら、一方ではヴァシリイ大公を撃てといわんばかりの使者をトリアニヤ公に送つたエジゲイの口上として、ニコン年代記は、それを詳しく次の様に作文している。其処にも、また、『過ぎし年月の物語』が利用していた古い使者口上の素朴な形式の投影を見ることができるとであろう。

Ты мне буди друг, а яз тебе буду друг; а зяти своего князя Василья Дмитреевича Московскаго познавай, яко желателен бе в чюжиа пределы вступатися и не своя восхищати, и се убо и тебе подвизается ратовати и твоя пределы восхищати; блюдися убо от него, понеже и словеса мне многа глаголаше на тебя таковаа и таковаа, и сребра и злата много посылаетъ ко мне и ко царю, чтобы или аз сам, или царя увещал со всею Ордою поити ратью на тебя и пленити и жеци землю твою, и чтобы ему засести грады твоя: сице убо он въздвизает нас на вражду к тебе, моя же любовь к тебе не угаснет никогдаже; сия же вся моя словеса в себе точию имей и никомуже повеждь.

『汝は我が友たれ。しかして我は汝の友となろう。しかして、汝の娘のムコなるモスコのヴァシリイ・ドミトレーヴィチを知れ。即ち（彼は）他人の領域に踏み込むことを望み、他人のものを奪おうと望んでいたのである。だから、見よ、今（彼は）汝に向つて、戦い且つ汝の領域を奪い取らんとして軍を進めつゝあるのである。彼を警戒せよ。（彼は）我に向つて汝への多くの（悪しき）言葉を繰り返して告げ、多くの銀と金を我及び帝に贈り来たり、時には我自からが、また時には帝を説きふせて、我が全軍と共に（彼は）汝に進攻しようとし、汝の国を奪い焼こうとしたのである。汝の町々を彼が入手しようとしたためである。かくして、彼は、我等を汝への敵意に燃えさせているが、一方、汝に対する我が友情は決して消えることはないであらう。この総ての我が言葉をおのれの心に正しくとどめ、誰にも口外することのないようにせよ』

この口上によつて、ロシアの公たちの中の~~内~~紛が大きい燃えあがることを、ひそかに望んで、エジゲイは得意であつたと記されている。そして、ニコン年代記の記述は、その折のエジゲイの心を、彼の独り言として書きとめていゝ。さて、この口上を受けたヴァシリイ大公は自分の貴族や家臣たちを集めて、その口上を伝える。モスコの連中はそれを大いに喜び、エジゲイの友情を『モスコ全体が喜んだ』〈вся Москва веселяшеся〉のであつた。そして、モスコの連中は、タタールの軍隊と結んで先づリドヴァ〈Литва〉を攻めるが、『多くの血が流れた』〈кровь многа проливашеся〉のだが、捕虜を手に入れ、財を奪うことによつて太つたのはタタールであつた。そしてまた、そのことを、モスコの連中は喜んでいたのだが……と、年代記者は書いてから、然し、『若いし長老たちはこのことを良しとせずして、言つた』〈старцы же старые сего не похвалиша, глаголюще〉と記し、その長老の厳しい批判の言葉を書き取つていゝのである。

其処には『過ぎし年月の物語』の主張の一つが、そのまゝの形で反映しているのである。

несть добра дума бояр наших, иже приводят на помощь себе Татар, наимуше их серебром и златом; не таких ли ради преже сего Киеву и Чернигову напасти и беды многи прилучишяся, имеюше брани межи собою, поднимающе Татар на помощь, и воююще брат брата и смерти предающе, и братние пределы восхищающе, а Половцы разсмотривше Русский наряд и все воинство и крепость князей наших оных, и воеваша всех и соодолеша всем; егда и ныне такова хотят быти?

『我々(の国)の貴族たちの考えは良くない。彼等は銀及び金を以てタタールをやとい、おのれのために援軍としてタタールを招き来ているのである。かゝるものたちのためにこそ、先づ、キエフ及びチエルニゴフに不幸と禍の多くが起つたのではなからうか。(かゝる者たちは)相互に争いをなし、タタールを応援に立たせ、兄弟が兄弟に向つて戦い、死を与え、兄弟の領域をうかがい取つている間に、一方では、ボロヴエツたちがルシの軍備を、我が国の或る公たちの堅固さとあらゆる軍力とを、調べ知り、しかして、総てを戦い破り、且つ、総てに打ち勝つて来たのではないか。しかるに、今もまたかゝるものにならうとするのか?』

そして、年代記者は書きつゞける。即ち、ところでヴァシリイ・ドミトレエヴィチ大公は、おのれの妻の父なるヴイトフト・ケストウチエヴィチ・トリアニア大公と戦い、(人々は)つかれ果て、しかして、戦闘停止を受け入れた。しかしながら、両者の間の怒りは増大し、多大なる苦しみと損耗とを双方は受けた。モスコに、長老の貴族たちがおらず、若い者たちが総てのことについて相

談し、和平破壊と戦と流血とを喜こんでいたのが原因であり、彼等の中には多くの支配秩序が乱れつゞけていたからなのである。一方エジゲイは兩者のものたちの間に争いを絶えず起させていた。それというのも、一方は妻の父であり、一方は娘の夫であるという（二人の）近親関係から、ともに、戦いを（二人は）大して欲してはいないこと、及び流血を望まないこと、平和と交友とを望んでいることを知つた上でのことなのである。彼（エジゲイ）はこの二人を絶え間なくけしかけて争わせ、ルシの軍備を調べ、ルシの軍勢事情を観察し、ルシを戦いとろうとして、自分に都合のよい時機をうかゞつていたのである。ところが、この時、スシヴァイトリガイロ・オルゲルドヴィチ公がモスコのヴァシリ・ドミトレエヴィチ大公に使臣をつかわして、二人で一方的にヴァイトフトを（攻めようと）欲したのである。ところが、実は、スシヴァイトリガイロは信仰上はリヤフ人であつたが、攻撃については勇敢で、防衛については堅ろうな気質の人物であつたので、この者のことを、大公はその全貴族と共に喜び（迎え）、彼に多くの町々を与えた。（それは）ほとんどモスコ大公國の半分にも及ばんとしたほどであり、栄光あるツオロジメル町も、その中の黄金の頂をもつたと言われている『いと清き聖母昇天』大教会も含まれていた。この教会は、黄金の五つの頂きをもち、その中には、多くの奇跡としるしをなし、異教徒をおそれさせるいと清き聖母の驚嘆すべき聖像が（安置されて）あつたのである。しかして、このようなものが、外来者のリヤフ人に与えられ、そのためこそ、多くの禍が我々を捕えたのであり、かの勇敢なる公スシヴァイトリガイロ・オルゲルドヴィチ自身も、その勇敢なる軍勢も、エジゲイの来襲の折には弱輩の少年のように、混乱を起し恐怖してしまい、逃走に向わざるを得なかつたのである。……と年代記者は書きつゞけるのだが……………此処には、長老たちの尊重さるべきこと、若年者たちが國をあやまる危険性の多

いこと、神をおそれ、尊ばないような折には、明らかな天罰の
下ること……等々、そして、何よりも、仲間割れは敵に乗ぜ
られるものとして、最も警戒されるべきことについての、『過
ぎし年月の物語』の思想反すうが明らかに読み取られるのであ
る。

さて、年代記者は、ヴァシリイ大公とヴァイトフトが共にウグラ河
《Угра рѣка》に来たつた時、しばらく対峙して、和睦したと
書きしるすが、その用語を『(彼等は)古の流儀にのつとつて和
を撰つた』《взяша миръ по старинѣ》とし、且つ、『過ぎし年
月の物語』の締めくくりの言葉と全く同様に『各々帰途につ
いた』《разыдошася каждо во свояси》とその用語とシンタクス
まで踏襲したのであつた。

これにつゞく記述によれば、この年の事件は次の様に展開す
る。

ルンの人々が戦いにつかれ果てている機会を利用してエジゲイ
は、ヴァイトフトを攻める為だと称してヴァシリイに援軍を要求する。
その使者の口上の真偽の判定に迷い、問い合わせの使者をルン
の側から立てて、その返事を待つている間に、エジゲイは出陣し
てしまつたのである。ところが、待ちぼうけのモスコに向つて、
実はエジゲイが進軍しつゝあつたのである。あわてたヴァシリイは
妻子だけを伴つてコストロマに逃がれ、モスコは包圍されてしまつ
た。町の中では、反乱が起り、人々は恐れて逃亡しはじめ、盗
人が横行した。町に火がつけられ、炎は音をたてゝ上り、四方か
らタタールは押しよせた。かくして、エジゲイは、反抗する者とな
くなつたところへ軍勢を進めてコロメンズクの郡をも手に入れた
のであつた。——年代記者は『過ぎし年月の物語』と同じ
手法で書きつゞける。『かくして主なる神は、我々の敵どもの
前に我等を押ししづめ給うた。我々の罪の故である』《И тако
смири насъ Господь Богъ предъ враги нашими, грѣхъ ради

наших: >もしも一人のタタールが出現すると、ルシの人々の多数がその一人のタタールに抗することができず、もしも二人或は三人のタタールが出現すると多くのキリスト教徒たちは妻や子を捨てたまゝ逃げ出すような状態であつたと記されている。タタールの軍勢は各地を攻略し、多くの人々を捕虜にし、ペレヤスラヴリを攻めて火をかけ、ロストフ、ドミトロフ、セルブホフ、ヴレヤ、ニージニイ・ノヴゴロド、ゴロジエツ、その他の町や村を押えては火をかけ、ふみつぶした。その他に、多くのキリスト教徒たちが凍死した。厳しい冬であり、寒風が吹きすさんだ季節だつたためである。エジゲイは逃げたヴァシリイを求めて手下を各地に派遣したが、彼を求め得なかつた。それでも、モスコだけは、やゝ、まともに残つたのは『神によつて守られていた』〈Богомъ съхранень бысть〉であり、『いと清き主の聖母の祈りによつた』〈молитвами пречистыя Его Матери Богородици〉であつた。エジゲイ自身はモスコの町に入らず、いつでもこの町を入手できるとして、その近くで越冬しようとしていたのである。エジゲイは此処でトヴエリのイヴァン・ミハイロヴィチ〈Иван Михайлович〉公に武器と軍勢を共にして協^々をよと使者を立てる。ヴァシリイ大公を裏切ることも、エジゲイの求めを拒んで怒りを買うことも彼は欲しなかつた。ところが、あたかもこの時に、タタールのブラト帝〈Булат〉が別にルシの地に侵入し、エジゲイをまどつかせたのである。弱気になつたエジゲイは、残つたモスコ市民と和を講じ、三千ルーブルだけ入手して引きあげたのであつた。勿論、多くの捕虜を引きつれていた。これこそ、年代記者によれば、『人間を愛し給う神のお情けであり、聖母と全ルシのピョートル大府主教の情のおかげ』〈Человѣколюбца Бога мнлость и пречистыя Его Матери Богородици и великаго чудотворца Петра митрополита всея Русии〉なのであつた。『神がタタールたちをおそれさせ、追い払い給うた』〈Господь Богъ устрашилъ

ихъ и отгналь > のである。

さて、モスコから退去したエジゲイは、ヴァシリイ大公に使者を立て、双方の協力体制をつくらうとする。ニコン年代記は此処で、甘言と術策と巧妙な言い廻しによつて綴られた非常に長い使者の口上を書きとめるのである。読者でさえその術策の巧妙さに乗りそうなほどの長い口上文を以て人々の倫理感をかき乱した後に、ニコンの年代記記者は、一転して、『過ぎし年月の物語』の鮮やかな倫理感に立ち戻るのである。『過ぎし年月の物語』の影響の跡が最も鮮やかに反映する個所は実は此処であつた。其処には、ネストルの直後の編集者セリヴエストルの名さえ読み取ることができる。即ち、上記の口上文よりは少し短い形で次の様な文章を読み取ることができる。

Нам же разумети подобает, откуда Агаряне тако возсташа на нас: не яве ли есть, яко за грехи наша попускаеть их на нас Господь Бог, да обратимся и покаемся? Много бо суть в нас неправды, зависти, ненависти, гордости, разбой, татбы, граблениа, насилованиа, блуды, пьянства, объядениа, лихоиманиа, ложь, осужение, смех, плесание, позорища бесовьскаа, возвышение, възвысящееся на разум Божий, и всяко непокорение закону Божию, и заповедей Господних презрение, и таковых ради грядет гнев Божий на сыны непокорения. И аще от зла обратися и покаемся, помиловани и спасени будем от человеколюбца Бога; аще ли не обратимся и не покаемся, супротивнаа обрящем. Сиа вся написаннаа аще и нелепо кому видится, иже толико от случившихся в нашей земле несладостнаа нам и неуласканнаа изглодавшим, но възустителнаа и к ползе обретающаася и возставляю-

шаа на благаа и незабытнаа; мы бо не досажаше, ни поношающе, ни завидяше чти честных, таковаа вчином, якоже бо обретаем началнаго летословца Киевскаго, иже вся временнобытства земскаа, не обинуяся, показуеть; но и пръвии наши властодръжцы без гнева повелевающе вся добраа недобраа прилучившаася написовати, да и прочим по них образы явлени будутъ, якоже при Володимере Маномасе оного великаго Селивестра Выдобыжскаго, не украшая пишушаго, да аще хоцещи, прочти тамо прилежно, да почет почиши. Всяко бо благаа и спасенаа настоящаго и будущаго века не во гнѣве и гордости и щашлении обѣтаются, но в простоте и умилении и смиреннии; смиреннем бо вся благаа обрѣтаются, без него же ничтоже бывает. Темъже и преже начялнии отцы безгневием и простотою и смиреннем вся благаа и настоящаго и будущаго века обрѣтоша и нам предаша, мы же, сим учящеса, таковаа вся прилучившаася во дни наша не преминухом наших дозрящих сих и прилежно внимающих, да таковымъ вѣщемъ разсужение разсудно да разсужают, и лутчаа и благаа да избирают, юннии же старцев да почитают и сами един без искуснейших старцев всякого земскаго правления да не самочинъствуют. Красота убо граду старыа мужи, и честна дума с старыми и белыми сединами сущих; есть же и старость немноголетнаа, а четсна, по Соломану, седины бо есть, рече, мудрость человеком, и възраст старости житие нескверно; но убо всяко от всех слышится, яко красота граду есть старчество, понеже и Богом по-

чено есть старчество; глаголетъ бо Писание: во-
проси отца твоего и возвестит ти, и старца твоа и
рекут ти.

『異民族たちが何処から我々に向つてこの様に襲い立つたの
かを、我々は知ることが必要である。我々に向つて主なる神が
彼等を我々の罪の故に放ち給ひ、我々が心を正し、悔悟するよ
うになし給ひのは、明らかなことではないであろうか？。我々
の間には、不正、羨望、憎悪、慢心、内紛、盗み、略奪、強制
、いんどう、飲酒、飽食、収賄、虚偽、誹謗、非難、嘲笑、おど
り、悪魔的な見せ物が多くはびこり、神の知恵にまで登らんと
するあらゆる思いあがりがあり、神の法には従おうとする心が
全くなく、主のいましめを軽蔑しているのである。かかること
どもの故に、恭順ならざる息子たちに対して神の怒りが来たる
のである。もしも（我々が）悪から心を正し、悔悟するならば、
人間を愛し給ひ神により（我々は）愛され、救われるであろう。
もしも（我々が）心を正さず、悔悟しないならば、敵するものた
ち（我々は）当面するであろう。この様に誓いて来たことは、
我々の国に生まれ合わせた限りの者にとつて、たとえ、心にそ
まないように思われ、我々にとつて快くなく、語り述べた者
にとつても、心のなごむようなものではないにしても、然し（実
は）望ましいものであり、利益になることであり、幸を呼び起
すものであり、忘れるべからざるものなのである。我々は（人
を）辱かしめることもなく、軽蔑することもなく、誠実な人々
の誠実さをねたむこともなく、かゝる（教訓）を説き述べたので
ある。即ち（我々が）キエフの源初の年代記者に見出したような
ことがらである。その年代記者は、あらゆる時折りの地上の出
来事を非難することなく示しているのである。然し、我々の最
初の時代の君主たちは、怒り止揚して、事件のあらゆる善と不

善を伝え尋くように命じていたのであり、それ以後の者たちにとつては、この態度こそ明らかな手本にならなければならない。ウゴロジメル・モノマハの時代に、かのウイドブイジスキー・大セリグエストルが、(物事を)飾り立てることなく書いたような(態度である)。もしも欲するならば、熱心にそれを読むことによつて、(人は)尊敬の念にかられるであろう。現在及び未来の世の、あらゆる幸と救いは、怒りや、高慢さや、華美の中には見出されるものではなくて、素朴さと、なごやかさと、恭順の中に見出されるものなのである。恭順さによつて、あらゆる幸は見出され、恭順さなくしては何一つ在り得ないのである。それだからこそ、昔にあつても、初期の父たちは、怒りなき心と素朴さと恭順によつて、現在及び未来の世の、あらゆる幸を見出し、しかして我々に伝えて呉れたのである。我々もまた、これらに学び、我々の時代に起つたあらゆるかゝる事柄をのべるに際しては、これらの洞察力あり、深く心を至す我々の先達たちを決して避けては通らなかつた。かゝる賢明なる者によつて物事の判断は行われるべく、しかして、人々もそれにならつて判断を行うべきである。しかして、良き幸を(人々は)見出すべく、年若きものも老令なるものを(先人を)尊らうべく、最も優れた長老者たちを除外しては、おのれら自からだけではこの地上のあらゆる采配はふるえないものと知るべきである。老令なる人士は町の美であるといふべく、老令にして髪白い者たちとの相談こそは、ほめられるべきである。老令といふのは単に年を重ねた以上に誠実なものなのである。ソロマンによれば、白髪とは、人間の英知であり、老いた年令とはけがれなき生活であるといふ。誰もが誰もがから耳にしている如く、長老の動きは町の美であり、それは神によつて祝福されているからなのである。聖書も言つている。汝の父に問え。(父は)汝に答えるであろう。汝の長老に(問え)、(長老は)汝に語るであろう。と』

この年の記事は、ほとんど此処で終る。この後に教行書き加えられた文章は、別の事件（—— ヴォルガ河とカマ河でのタタールとの戦いのために、ノヴゴロドの代官アンファル〈Анфаль〉が捕えられて連れ去られた ——）の記録にすぎない。

さて、『過ぎし年月の物語』が此処で特に反すうされた条件として、タタールが都モスコを荒したという民族的な不幸を示しておかなければならないであろう。民族のたい頭とその民族に蔽いかぶさる不幸とが重なつた時に、少くとも、修道院の出身者らしき年代記者たちが、年代記記録の姿勢を求めて回帰して行く先が、『過ぎし年月の物語』であつたことを、我々は此処で知ることができる。そしてまた、嘗つて、『過ぎし年月の物語』が当時のルシの支配者の政治や軍事の動行に向つて、批判と主張とを持つていたのと同じように、此処でも、同じ姿勢の批判と主張とをもちつゞけていたように思われる。それほどまでに、『過ぎし年月の物語』の記録姿勢は巨大な残映を持ちつゞけていたと思われる。

だからこそ、実に十七世紀に至るまで後に参考文献に示すような年代記が書きつがれ、或は書き直される間に、古い時代の記事は勿論のこと、その時折の事件の記録に際しての姿勢や理念もまた、『過ぎし年月の物語』の強烈な残映の上に組み立てられたのであつた。それこそが、ロシアの独自の年代記文学の基盤であつたように思われる。

人名索引
(Указатель личных имен)

- Август Кесари 263, 266, 285, 286,
Авель 189, 190, 298, 305, 379, 555,
Авиа 262, 265, 373, 383,
Авимелех 273, 283, 299, 503, 505, 555, 556,
Авраам 262, 265, 269, 270, 272, 273, 283,
Аврам 253, 262, 265, 273, 283, 296, 301, 321,
352, 398, 400, 401, 503, 505, 516,
Авриан 277, 287,
Аврилиан 264, 267,
Автухи 393, 395,
Агай 276, 286,
Агамемнон 359,
Агафон 393, 395,
Адам 261, 262, 263, 265, 266, 271, 272, 276, 278,
277, 280, 281, 282, 285, 286, 287, 288, 289,
290, 291, 352, 378, 380, 388, 425, 508,
Аданаи 397, 399,
Адриан 264, 267,
Аепа 438,
Азариа 262, 265, 273,
Азгугуй 438, 457,
Аир 273, 283,
Аклан 438,
Александр 263, 266, 277, 280, 286, 288,
Александр(царь византийский) 38, 40, 286, 287,
353, 420,
Александр Дмитриевич 281, 291,
Александр Македонский 263, 266, 269, 270, 274,
284, 424, 426, 465, 467,
469, 470, 582, 584, 678,
Александр Мамал 264, 267,
Александр Невский 107, 396, 616,
Алеша Попович 75, 77,
Аманати 273, 283,
Амартол 240, 241, 245, 249, 252, 257, 261, 268,
347, 351, 358, 359, 360, 361, 363, 377,

379, 380, 402, 403, 426, 589, 602, 619,
631, 632, 640, 641,
Амесия 262, 265, 273, 283,
Амон 423, 424,
Амос 262, 266, 273, 284,
Анастасий 253, 255, 264, 264, 267, 278, 299, 288,
Анастасие Артемь 264, 268,
Анастасий (царьградский) 393, 395,
Анатолий 333,
Андрей Юриевич 281, 290,
Андрей Ярославич 281, 291,
Андрьян 276, 286,
Анни 20, 27,
Анолинарий (Александрийский) 393, 395,
Антиох 213, 214, 274, 275, 285, 284, 298, 305,
582, 584,
Антоний (игумен) 330, 331,
Антоний 28, 277, 286, 310, 311, 317, 321, 322,
664,
Антоний Пороский 338, 343,
Антонин Галп 277, 286,
Антонин Ивир 277, 286,
Анфаль 722,
Аньна 489, 491,
Аод 273, 283,
Апа 438, 456,
Аполлониян 253, 255,
Арам 675, 678,
Арий 278, 287, 394,
Арисох 263, 266,
Аркадии 264, 267, 278, 287,
Арсам 263, 266,
Артаван 274, 284,
Артаксеркс 263, 268, 274, 284,
Артаксеркс (долгорукий) 274, 284,
Арфаксад 262, 265, 272, 282,
Архилай 275, 285,
Арьсланапа 694,
Асадук 435, 435, 454,
Асинь 436,
Асколд 35, 59, 92, 126, 249, 250, 528, 606, 619,
620, 621, 622, 623, 624, 626, 627, 628,
629, 630, 631, 632,
Асколд (воевода) 473,
Асмуд 681,

Афет 241, 242, 243, 244, 272, 282, 466, 467, 469,
588, 589, 590, 591, 593, 594, 597, 598, 599,
Ахазь 262, 265, 273, 274, 283,

Багубарс 436, 438, 454, 457,

Белдюзь 694,

Белкатгин 436, 454,

Беренди 148,

Блуд 645, 646, 684,

Болеслав 79, 81, 80, 82, 550,

Боняк 437, 438, 455, 456, 640,

Борис Василкович 281, 291,

Борис Владимирович 111, 112, 113, 114, 115, 116,

117, 118, 119, 280, 290, 294,

298, 299, 302, 305, 346, 401,

437, 453, 455, 509, 510, 511,

512, 513, 514, 515, 516, 518,

520, 521, 522, 523, 526, 527,

551, 651, 657, 685, 688,

Борис (князь Болгарский) 352,

Борис Вячеславич 696,

Борис (князь Ростовский) 281, 291,

Бохмит 480,

Боян 194, 536, 537,

Брячислав Изяславич 546, 547, 662, 685,

Будый 80, 81,

Булат (царь) 703, 717,

Бурчевич 438,

Вавильи 279, 289,

Вадим 631, 632,

Валаам 253, 256,

Валтасарь 262, 266, 274, 284,

Варак 273, 283,

Варда Фока 259, 260,

Варлам 663, 664,

Варух 274,

Варяжько 79,

Василей 703,

Василий 279, 280, 288, 290, 429, 447, 512, 514,

Василий Дмитриевич Московский 708, 709, 711, 712,

713, 714, 715, 716,

717, 718,

Василий Казимирович 75,
 Василий Новый 363, 364, 367, 368, 641,
 Василко Костянтинович 281, 291, 489, 490,
 Василко Ростиславич 143, 144, 145, 146, 147, 148,
 149, 150--159, 161, 162, 164,
 174, 572, 573, 670, 671, 690,
 691, 696,
 Василь 174, 175, 195,
 Велмуд 38, 40,
 Вигилий 393, 395,
 Витофт 714, 715, 716,
 Володарь 573, 670, 671,
 Володимер (князь былин) 184,
 Володимер Давыдович 184, 206,
 Володимер Игоревич 184, 185,
 Володимер Всеволодович 28, 30, 31, 106, 107, 139,
 143, 144, 145, 149--159,
 161, 162, 163, 165, 174,
 205, 280, 290, 324, 422,
 426, 445, 463, 464, 568,
 569, 570, 576, 577, 578,
 579, 690, 691, 693, 694,
 695, 700, 701, 719, 721,
 Володимер Святославич 54, 55, 79, 82, 83, 84, 85,
 86, 87, 89, 95, 101, 111,
 169, 171, 181, 182, 190,
 197, 198, 199, 200, 201, 202,
 208, 224, 225, 270, 271, 280,
 289, 290, 291, 298, 305, 346,
 349, 368, 369, 370, 373, 374,
 375, 376, 381, 382, 384, 388,
 390, 392, 395, 396, 400, 401,
 404, 416, 417, 480, 481, 482,
 483, 484, 485, 486, 487, 488,
 489, 490, 491, 492, 493, 500,
 508, 510, 511, 516, 526, 533,
 538, 539, 543, 568, 606, 635,
 636, 644, 645, 646, 647, 649,
 650, 662, 663, 683, 684, 685,
 689, 630, 692, 700, 701, 702,
 Володимер Ярославич 12, 13, 14, 28, 421, 422, 530,
 531, 618, 619,
 Волх(герой былин) 63, 64, 65, 665, 666, 667,
 Волчий Хвост 198, 538,

Вольга (герой былин) 61, 65, 66, 67, 70,
 Всеволод Изяславич 280, 290,
 Всеволод Костянтинович 281, 291,
 Всеволод Олгович 290,
 Всеволод Святославич 184, 185, 696,
 Всеволод Ярославич 83, 99, 100, 101, 185, 186, 190,
 211, 407, 416, 417, 421, 435,
 495, 498, 499, 546, 547, 548,
 553, 554, 561, 568, 574, 576,
 577, 652, 654, 689, 700, 701,
 Всеволод Юрьевич 281, 290,
 Всеслав Брючиславич 15, 21, 138, 139, 185, 186,
 211, 338, 435, 453, 498, 499,
 546, 547, 548, 662, 665, 668,
 Вятко 601, 602,
 Вышата Остромирович 12, 13, 14, 16, 22, 24, 33,
 34, 35, 82, 119, 120, 221, 530,
 540, 541, 543, 544, 573, 618,
 619,
 Гаие 264, 267,
 Гал 277, 287,
 Галв 276, 286,
 Ган 277, 287,
 Гедеон 273, 283, 423, 424, 426, 555, 556,
 Гедивон 385, 389,
 Георги (сын Угърский) 113, 114, 512,
 Георгий (царьградский) 393, 395,
 Глеб Василкович 281, 291,
 Глеб Володимирович 111, 112, 115, 116, 117, 204,
 280, 204, 281, 290, 291, 294,
 300, 302, 346, 401, 402, 437,
 438, 455, 456, 509, 512, 513,
 514, 515, 518, 520, 521, 522,
 523, 526, 527, 531, 657, 658,
 659, 663, 685, 688,
 Глеб Святославич 20, 27,
 Глеб Юрьевич 281, 290,
 Гог 469, 470,
 Гордии 277, 286,
 Горислава 85, 86,
 Горасер 115, 116,
 Гофил 262, 265, 273, 283,
 Григорий 286,
 Григорий (Богословец) 393, 394,

Григорий (чудотворец) 227, 286,
Гюрии 438, 456,
Гюрята Рогович 345, 464, 465,

Давыд 262, 265, 273, 282, 283, 298, 305, 460,
504, 505, 517, 519, 645, 673, 676, 674,
677,

Давыд Владимирович 164, 165, 174, 175, 176,
Давыд Игоревич 144, 145, 146, 149, 150--159,
161, 162, 163, 670, 671, 690,
691,

Давыд Святославич 141, 142, 144, 145, 147--159,
437, 438, 455, 456, 572, 473,
690, 691,

Дамас (римский) 393, 394,

Данил 274, 284, 504, 505,

Данил Александрович 187,

Дарие 263, 266,

Дарии 262, 266, 274, 284, 675, 678,

Дарии Иарсаманин 274, 284,

Дарии Македонин 467, 469,

Дарий Остапьянин 274, 284,

Девора 273, 283,

Декие 264, 267,

Деместиян 253,

Демьян (презвутер) 325, 326, 327,

Дикии 277, 287,

Диоклитиян 264, 267, 277, 287,

Диоскор 278, 287,

Дионисие 263, 266,

Дир 35, 59, 92, 126, 249, 250, 528, 606, 619,

620, 621, 622, 624, 628, 629, 630, 631, 632,

Дмитрий Александрович 281, 291,

Дмитрий Борисович 281, 291,

Дмитрий (святой) 38, 40, 312, 321,

Добрыня (герой былин) 70, 71, 72, 73, 74, 75, 77,
89,

Добрыня (воевода Владимира) 79, 82, 84, 85, 86,
87, 88, 89,

Доментиян 276, 286,

Доместиян 264, 267,

Домнин (Антиохийский) 393, 395,

Евга 379, 384, 388,

Еввер 262, 265, 272, 282;
 Еввергет 263, 266,
 Евтуз 278, 287,
 Едикей 703, 704, 708, 711, 712, 713, 715, 716,
 717, 718,
 Езекии 262, 266, 273, 283, 468, 470,
 Елена 370,
 Елизар 275,
 Елисей 262, 265, 273, 283,
 Еловить 512,
 Елом 273, 283,
 Емерей 274,
 Енос 261, 265, 271, 272, 282, 299, 306,
 Енох 299, 306, 262, 265, 272, 282, 505, 503, 555,
 556,
 Епифан 263, 266,
 Еремя 326, 327,
 Ерина 265, 268,
 Есевон 293, 283,
 Ефтем 338, 343,
 Ефтан 273, 283,

 Захарии 278, 288,
 Зеноб 9,
 Зинов 278, 288,

 Иакий 329, 330, 331, 332, 333, 334,
 Иаков 262, 265, 273, 283,
 Иан 28
 Иапси 279, 288,
 Иаред 261, 265, 272, 282,
 Иван 275, 285,
 Иван (епископ) 28,
 Иван (князь) 703, 704,
 Иван Михайлович 717,
 Иван Порфирогент 280, 290,
 Иван (царь греческий) 239,
 Игнат 276, 286,
 Игорь Рюрикович 37, 39, 42, 43, 44, 45, 47, 55,
 59, 66, 92, 101, 127, 168, 177,
 179, 194, 237, 257, 270, 271, 280,
 288, 353, 356, 358, 359, 360, 361,
 362, 368, 472, 606, 607, 620, 621,
 623, 624, 625, 627, 628, 629, 630,
 632, 634, 641, 680, 681, 682, 683,

Игорь Святославич 128, 184, 185,
 Игорь Ярославич 211,
 Иезекий 229,
 Иехиониа 262, 266, 284,
 Измаил 423, 424, 425, 426, 556, 567, 638, 639,
 705, 709,
 Изяслав Владимирович 85, 86, 181, 145, 312, 318,
 321, 331, 662, 685, 686, 687,
 Изяслав Давыдович 108,
 Изяслав Мстиславич 281, 290,
 Изяслав Ярославич 134, 137, 138, 140, 185, 186,
 190, 191, 211, 227, 280, 290,
 407, 434, 436, 452, 453, 454,
 460, 497, 498, 499, 546, 547,
 553, 554, 572, 652, 653, 654,
 655, 668, 669, 686, 687, 689,
 696,
 Илия 262, 265, 283, 273,
 Илии(жрец) 273, 283,
 Илья(ерусалимский) 393, 395,
 Илья(герой былин) 68, 69, 70, 75, 77,
 Иоаким 262, 266, 274, 284,
 Иоан 275, 283, 286, 387, 653, 655,
 Иоан(богослов) 276, 286,
 Иоан(игумен) 335,
 Иоан(магистр) 259, 260,
 Иоан(митрополит) 28, 532, 657,
 Иоан Черниговский 338, 343,
 Иоасафат 262, 265, 273, 283,
 Иоаф 262, 265, 273,
 Иоахаз 262, 266, 284,
 Иорамь 262, 265, 283, 293,
 Иосиа 285,
 Иосие 262, 266, 273, 284,
 Иосиф 276, 383, 386, 387,
 Иполит 277, 286,
 Ираклии 264, 268, 278, 288, 599, 600,
 Ирина 279, 288,
 Ирод 275, 282, 283, 285, 286, 402,
 Исаий(епископ) 28,
 Исаак 262, 265, 273, 283,
 Исаия 293, 294, 298, 305,
 Исакий 420,
 Искал 495,

Исус навгик 273, 283,
Иуалентиан 264, 267,
Иивиань 264, 267,
Иид 262, 266,
Иулиан(преступник) 264, 267, 278, 287,
Иуль Кесарь 263, 266, 275, 285,
Иустин(богослов) 286,
Иустин 264, 268, 278, 288,
Иустин(нетии Устьяна) 278, 288,
Иустин Фракс 264, 268,
Иустинин 278, 288,
Иустиниян 264, 268, 279, 288,
Иулии Август 275, 276, 285, 286,
Июда 253,
Ияков 276, 286,
Кааф 262, 265, 273, 283,
Каин 189, 190, 298, 299, 305, 307, 378, 379, 555,
Кианан 261, 262, 265, 272, 282,
Кайафа 253, 256,
Камбуси 272, 284,
Камвись 263, 266,
Карин 277, 287,
Карь 264, 267, 277, 287,
Карл 38, 40,
Каур 9,
Кий 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 34, 36, 56, 57, 58, 61,
62, 249, 582, 584, 585, 597, 606, 609, 610,
622, 623, 627,
Кир 262, 266,
Кирилл Туровский 98,
Китаонна 694,
Клавдии 264, 267, 276, 277, 286, 287,
Клеопатра 263, 266, 275, 285,
Клестин 393, 394, 395,
Климент 337, 342, 539,
Коксусь 438,
Колчи 161, 162,
Комод 277, 286,
Коноб 20, 27,
Косньчятин 550,
Коснячько 546, 547,
Костянтий 264, 267, 277, 287,
Костянтин 264, 267, 277, 280, 290,
Костянтин Борисович 281, 291,

Костянтин(царь Византийский) 237, 264, 267, 269,
 270, 271, 347, 351,
 352, 356, 358, 369,
 370, 397, 489, 490,
 Костянтин(иконоборец) 213, 215, 264, 268, 269,
 Костянтин(сын Львов) 279, 288,
 Костянтин(сын Ираклиев) 264, 268, 278, 288,
 Костянтин Всеволодович 281, 291,
 Костянтин(посадник) 80, 81, 82,
 Костянтин(внук Иракилиев) 278, 288,
 Костя 264, 267, 211, 287,
 Куман 694,
 Курил(Александрийский) 393, 395,
 Курил(Ерусалимский) 393, 394,
 Куртк 694,
 Курь 78, 79,
 Куря 681,
 Кчий 694,
 Кюр 274, 284, 288,
 Кюриной 285,

 Лавдон 273, 283,
 Лазарь 174, 175,
 Ламех 262, 265, 272, 282, 299, 306, 555, 556,
 Ларион 308, 309,
 Лев 268, 279, 280, 288,
 Лев(великий) 264, 267,
 Лев(византийский) 236,
 Лев Конон 264, 268, 279, 288,
 Лев(сын Константинов) 264, 268,
 Левгий 262, 265, 273, 283,
 Левонтий 393, 395,
 Леон(великий) 38, 39, 40, 41, 251, 252, 278, 288,
 Леон(малый) 278, 288,
 Леон(отец Костянтина иконоборца) 213, 215,
 Леонид 277, 286,
 Леонтий 279, 288,
 Лихачев 89, 364, 367,
 Лот 296, 301, 424, 503, 505,
 Лука(епископ) 28,
 Лыбець 4, 5, 597, 627,
 Маврикий 213, 215, 264, 268, 288,
 Магог 469, 470,
 Мадияне 273, 283,

Макарии 279, 288,
 Максемьян 277, 287,
 Максим 277, 286,
 Максимин 264, 267,
 Мал 194, 683,
 Малелейл 261, 265, 271, 272, 282,
 Мамврий 20, 27,
 Манамах Юрий Владимирович 281, 290,
 Манасия 262, 266, 273, 284,
 Мануил 281, 290,
 Маркиан 264, 267, 278, 287,
 Маркин 277, 286,
 Марко 276, 286,
 Марие Юрьевский 338, 343,
 Мария (Богородица) 383, 382, 386, 387,
 Мария (жена Яеова) 29, 30, 338, 343, 344,
 Марфа Всеславна 665, 666,
 Матфей 328,
 Мафусал 262, 265, 272, 282,
 Менандр 254, 267,
 Ментей 9,
 Мефодий 352,
 Мефодий Патарийский 345, 346, 423, 424, 425, 426,
 465, 467, 470,
 Мелетий 393, 394,
 Михаил 2, 65, 268, 269, 270, 279, 288, 289,
 Михаил (святой) 146, 324, 471, 532,
 Михаил (царь царьградский) 35, 250, 420, 584, 585,
 606, 607, 623,
 Михаил (зять Ставракиев) 279, 288,
 Михаил Трибекович 327,
 Михайло (герой былин) 70,
 Михайло Юриевич 281, 290,
 Митрофан 393, 394,
 Моах 423, 424,
 Мойсей 20, 27, 262, 265, 269, 270, 273, 283, 380,
 503, 505, 613, 674, 676, 677, 679,
 Михей 262, 265, 283, 273,
 Мстислав Владимирович 140, 204, 207, 208, 209,
 281, 290, 533, 534, 535,
 536, 537, 538, 556, 557,
 558, 559, 572, 684, 686,
 687, 702,
 Навузардан 268, 266, 274, 284,

Навуходоносор 257, 262,
 Наста(десядинный) 80, 82,
 Настас 539,
 Нахор 262, 272, 282,
 Неврод 379,
 Невронь 271, 281,
 Немерьян 277, 287,
 Нектан 590, 593,
 Нерон 264, 267, 276, 286,
 Неруи 264, 267, 276, 286,
 Нестор 2, 218, 228, 230, 291, 324, 339, 341, 581,
 589, 597, 599, 601, 602, 605, 606, 608, 610,
 612, 614, 616, 617, 618, 619, 631, 632, 633,
 635, 636, 637, 640, 641, 692, 699, 702, 718,
 Несторий 278, 287,
 Никанор 274, 284,
 Никифор 265, 268, 279, 288, 700, 701,
 Никифор(патриарх) 269, 351, 352, 641,
 Николай 573, 693,
 Никола(митриполит) 100,
 Никон 2, 497, 499, 529, 532, 533, 534, 536, 537,
 538, 539, 540, 541, 543, 544, 551, 553, 558,
 559, 560, 574,
 Никон(игумен) 329,
 Нои 241, 242, 262, 265, 272, 282, 379, 385, 389,
 503, 505, 586, 590, 614, 689, 695,
 Свчи 438,
 Октавин 275, 285,
 Олег 37, 39, 38, 40, 41, 42, 93, 94, 95, 101, 194,
 234, 236, 252, 269, 270, 271, 280, 288, 289,
 352, 353, 354, 355, 358, 601, 606, 620, 621,
 623, 624, 625, 627, 628, 631, 632, 633, 635,
 643, 660,
 Олег Святославич 139, 140, 141, 142, 144, 145, 146,
 147, 148, 149, 150, 151, 152, 153,
 154, 156, 155, 157, 158, 159, 371,
 372, 437, 438, 453, 455, 463, 493,
 570, 571, 572, 651, 662, 681, 690,
 691, 696,
 Олена 277, 287,
 Олма 620, 621, 629, 630,
 Ольга 82, 90, 91, 92, 101, 117, 127, 176, 177, 179,
 280, 288, 368, 369, 370, 472, 473, 474, 477,

487, 500, 501, 502, 504, 505, 506, 507,
509, 515, 516, 526, 541, 542, 632, 543,
644, 645, 681, 683,

Ольский 280,
Ондрей 347, 348, 349, 350, 592, 593, 596,
Ондрейн(римский) 359, 393, 395,
Орест 359,
Оригеон 277, 278, 286, 288,
Остромир 2, 14, 32, 204, 221, 530, 531, 541, 543,
613,
Офон 276, 286,
Офонаси 393, 394,
Оховия 283,
Оховиа 262, 265, 273, 283,
Охония 274, 284,
Охось 263, 266,

Павел 276, 285, 286, 420,
Памьфил 43, 45,
Памьфил(деместик) 362, 363, 364, 366,
Передслава(сестра Ярославля) 225, 515,
Петр 276, 286,
Петр(александрийский) 393, 395,
Петр Гугнивый 393, 395,
Петр(брат Ондрей) 592, 595,
Петр(архиепископ) 717,
Перун 198, 199,
Пилат 383, 387,
Пилат(александрийский) 393, 395,
Перей 530, 531, 540,
Поромон 226,
Провь 264, 267,
Прол 277, 287,
Протинакс 277, 286,
Птоломей 263, 266, 274, 275, 284,
Птоломей Евергетъ 263, 266,
Птоломей Сотир 263, 266,
Птоломей Филадерфъ 263, 266,
Птоломей Филопатор 263, 266,
Путша 112, 114, 511,

Рагял 262, 265, 272, 282,
Радим 601, 602,
Редедя 207, 208, 209, 534, 535, 536, 537,

Рим 582, 584,
 Рогнеда 79, 644,
 Ровоам 262, 265, 283, 273,
 Рогволод 84, 85, 644,
 Роман 280, 288, 298, 305,
 Роман (князь Новгородский) 197,
 Роман Ростиславич 281, 290,
 Роман (царь византийский) 237, 256, 358, 359, 360,
 368,
 Ростислав Владимирович 183, 530, 532,
 Ростислав Всеволодович 28, 30, 31, 422, 427, 436,
 445, 455, 540, 559, 569,
 570, 576, 577, 693,
 Ростислав Мстиславич 281, 290,
 Юрик 279, 289, 606, 608, 609, 610, 611, 612, 620,
 622, 623, 625, 626, 627, 629, 630, 632, 633,

 Сакзь 436,
 Сал 262, 265, 272, 282,
 Самагар 273, 283,
 Самоил 273, 283,
 Самсон 273, 283,
 Сарра 269, 301,
 Саул 253, 256, 273, 283, 435, 454,
 Славк Скордятич 434,
 Свендел 77, 78,
 Свеналд 78, 79, 239, 473, 477, 478, 680, 682, 683,
 Святогор 61, 67, 68, 69, 70,
 Святополк Изяславич 15, 21, 31, 55, 99, 100, 139,
 143, 144, 145, 146, 147, 148,
 149, 150--159, 161, 162, 165,
 215, 421, 422, 637, 670, 671,
 690, 691,
 Святополк Ярополкович 79, 80, 81, 82, 112, 113,
 111, 115, 116, 117, 188,
 189, 203, 204, 270, 292,
 293, 294, 295, 296, 297,
 298, 299, 300, 301, 302,
 304, 305, 307, 402,
 Святополк Ярославич 280, 290, 421, 422, 435, 436,
 438, 453, 455, 456, 498, 510,
 511, 512, 513, 514, 515, 522,
 525, 526, 532, 546, 547, 548,
 550, 554, 555, 556, 561, 565,
 566, 568, 569, 570, 571, 572,

573, 575, 577, 578, 579, 580,
 685, 688, 694, 695, 696,
 Святослав Владимирович 112, 229, 292, 293, 294,
 297, 305, 331, 510, 514,
 515, 575,
 Святослав Всеволодович 124, 281, 291,
 Святослав Игоревич 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54,
 55, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 65,
 66, 77, 78, 92, 101, 119, 120,
 195, 196, 222, 223, 224, 239,
 270, 280, 289, 473, 474, 475,
 476, 477, 507, 606, 643, 644,
 681,
 Святослав Ярославич 16, 17, 18, 21, 24, 79, 81,
 211, 227, 228, 229, 231, 407,
 423, 452, 498, 499, 546, 547,
 688, 689,
 Севгир 287,
 Севир 277, 286,
 Седекие 262, 266, 274, 284,
 Селевк 274, 284, 582, 584,
 Селивестр 2, 160, 324, 325, 471, 493, 692, 699,
 700, 702, 708, 718, 719, 721,
 Селивестр(Римский) 393, 394, 581, 582,
 Семеон(Болгарский) 358, 359,
 Семеон(Греческий) 251, 252, 416,
 Семец 436, 454,
 Серух 262, 265, 272, 282,
 Сидирит 263, 266,
 Сим 241, 242, 243, 244, 262, 265, 272, 282, 586,
 590, 593, 594,
 Симон 20, 26, 254, 257,
 Синеус 279, 289, 608, 609, 620,
 Сиф 261, 265, 271, 282,
 Скева 253, 256,
 Сновид Изечевич 148,
 Соловьев 32,
 Соломон 262, 265, 269, 270, 273, 283, 401, 405,
 504, 505, 506, 508, 519, 522, 643, 644,
 647, 648, 719, 721,
 Софония 274, 284,
 Срезневский 470, 613,
 Ставуг Торятич 437, 452,

Ставракии 265, 268, 279, 288,
Стеמיד 38, 40,
Стефан (византийский) 237, 356,
Стефан (Володимерский) 237, 356,
Стефан (епископ) 337, 342,
Стефан (игумен) 229, 697,
Стефан (первомученник) 276, 285,
Стефан (черноризец) 329,
Сурьбарь 694,
Сусьвитригаило 715,

Таким 277, 287,
Тарасий 393, 395,
Тивелии 263, 267, 276, 278, 286, 288,
Тивелии Апсимар 264, 268,
Тивелий Иапсии 288,
Тимофей (Александрийский) 394, 395,
Тит 264, 267, 276, 286,
Тит Антонин 264, 267, 276, 286,
Триан 264, 267,
Торчин 514,
Триверии 264, 268,
Троян 276, 286,
Трувор 279, 289, 608, 620,
Тугоркан 437, 455,
Тур 87, 88,
Турыак 174, 175,

Уалентиниан 264, 267,
Уаль Гратиан 264, 267,
Увалениян 278, 287,
Увалентиян (новый) 278, 287,
Увалерьян 277, 287,
Увеналий (Ерусалимский) 393, 395,
Успаниян 364, 367,
Улан 161, 162,
Улемардах 262, 266, 274, 284,
Улисиян 277, 287,
Урусоба 694,
Успасьян 276, 286,
Устьян 278, 288,

Фалек 262, 265, 272, 282, 590, 593,
Фар 262, 265, 272, 283,

Фарлоф 39, 40,
Федор 43, 45,
Федор(князь) 703,
Федор(стратилат) 362, 363, 364, 366,
Федор (Антихохийский) 393, 395,
Федосии 279, 288,
Фекла 279, 289,
Феодор 258,
Феодосии 28, 29, 30, 229, 230, 264, 268, 280,
290, 313, 321, 326, 327, 329, 332, 335,
336, 337, 338, 339, 340, 341, 342, 343,
344, 345, 406, 413, 497, 580, 637, 638,
639, 664, 673, 676, 697, 698,
Феодосий(великий) 264, 267, 278, 287,
Феодосий(малый) 267,
Феодора 279, 289,
Феофан 43, 45, 258, 259, 260, 262, 363, 364,
Феофан (Антихохийский) 393, 395,
Феофил 279, 289,
Феофил Трофурь 265, 268,
Фефел 239,
Филиппик 264, 268,
Филикс 279, 288,
Филип 264, 267, 274, 277, 284, 286,
Филипп(отец Александра Македонского) 467, 469,
Филомитор 263, 266,
Фиск 263, 266,
Фиф 539,
Фока 43, 45, 264, 268, 278, 283,
Фока(патрекий) 632, 363,
Фол 467, 469,
Фола 273, 283,
Фотьи 35, 36,

Хам 241, 242, 243, 244, 272, 282, 587, 590, 593,
594,
Хереан 9,
Хоздрои 278, 288, 699, 600,
Хорив 4, 5, 9, 58, 585, 597, 606, 609, 610, 622,
623, 627,
Хузита 417, 469,

Цемский (Иван) 289,
Цемский(царь греческий) 239, 501,

Целий 286,

Ченегрепа 694,

Шахматов 426, 479,

Шаркань 438, 457,

Щек 4, 5, 9, 58, 585, 597, 605, 609, 610, 622,
623, 627,

Юрий Всеволодович 281, 291,

Якун 557, 558,

Ян Бышатич 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 53,
54, 55, 56, 221, 406, 530, 539, 540,
544, 564, 570, 573, 574, 575, 578, 618,
619, 672, 673,

Ярополк Владимирович 281, 290,

Ярополк Изяславич 15, 21, 181, 436,

Ярополк Святославич 78, 79, 84, 86, 87, 88, 270,
271, 280, 289, 299, 371, 372,
436, 454, 455, 493, 606, 644,
656, 657, 662, 681, 684,

Ярослав Владимирович 10, 12, 13, 14, 15, 21, 79,
80, 81, 82, 83, 87, 115, 116,
133, 135, 188, 189, 203, 204,
207, 208, 210, 224, 225, 226,
270, 280, 290, 295, 296, 298,
299, 300, 301, 302, 303, 305,
307, 308, 309, 319, 402, 403,
406, 416, 417, 426, 438, 445,
494, 509, 513, 514, 515, 525,
526, 527, 528, 534, 536, 537,
543, 544, 550, 551, 552, 553,
554, 556, 557, 558, 559, 568,
606, 618, 619, 633, 650, 651,
660, 661, 663, 684, 685, 686,
687, 688, 689, 690, 700, 701,

Ярослав Всеволодович 281, 291,

Ярослав Святославич 145,

(конец)

参 考 资 料

- Лаврентиевская летопись 1846 г.
 Троицкая летопись 1846 г.
 Отрывок из хронографа Георгия Амартола 1846 г.
 Отрывок из Софийского харатейного номоканона 1846 г.
 Отрывок из харатейного Паремейника 1846 г.
 Отрывок из Патерика Печерского 1846 г.
- Ипатиевская летопись 1843 г.
 Густинская летопись 1843 г.
- Новгородская первая летопись 1841 г.
 Новгородская вторая летопись 1841 г.
 Роспись, или краткий летописец Новгородских владык 1841 г.
 Отрывок из разряда Новгородских летописей 1841 г.
 Новгородская третья летопись 1841 г.
 Извлечение из рукописи об осаде Тихвинского монастыря Шведами, в 1613 году. 1841 г.
- Новгородская четвертая летопись. 1848 г.
 Псковская первая летопись 1848 г.
- Псковская вторая летопись 1851 г.
 Софийская первая летопись 1851 г.
- Софийская первая летопись 1853 г.
 Софийская вторая летопись 1853 г.
 Отрывок летописи по Воскресенскому повоиерусалимскому списку 1853 г.
- Воскресенская летопись 1856 г.
 Средний текст летописи Нестора 1856 г.
 Воскресенская летопись 1859 г.
 Патриаршая или Никоновская летопись 1862 г.
 Патриаршая или Никоновская летопись 1885 г.
 Патриаршая или Никоновская летопись 1897 г.
 Патриаршая или Никоновская летопись 1901 г.
 Патриаршая или Никоновская летопись 1904 г.

- Дополнения к Никоновской летописи 1906 г.
 Так называемая Царственная книга по списку москов-
 ской синодальной Библиотеки № 449. 1906 г.
 Повесть о честном житии царя и великого князя Фе-
 дора Ивановича всея Руси. 1910.
 Новый летописец 1910 г.
- Летописный сборник, именуемый Тверскою летописью
 1863 г.
- Летописный сборник, именуемый летописью Авраамки
 1889 г.
- Западнорусские летописи 1907 г.
- Симеоновская летопись 1913 г.
- История о Казанском Царстве (Казанский летописец)
 1903 г.
- Львовская летопись (Первая часть) 1910 г.
 Львовская летопись (Вторая часть) 1914 г.
- Книга степенная родословия (Первая часть) 1908 г.
 Книга степенная родословия (Вторая часть) 1913 г.
- Русский хронограф (Первая часть) Хронограф
 редакции 1512 года 1911 г.
 Русский хронограф (Вторая часть) Хронограф
 западно русской редакции 1914 г.
- Ермолинская летопись 1910 г.
- Типографская летопись 1921 г.
- Летопись по Уваровскому списку 1949 г.
 Начало летописи по Эрмитажному списку 1949 г.
 Тексты летописи основного Уваровского списка,
 восстанавливаемые по Эрмитажному списку
 1949 г.
- Вологодско-Пермская летопись 1959 г.
 Окончание Синодального списка 1959 г.
 Окончание Академического списка 1959 г.

Окончание Воронцовского списка	1959 г.
Повесть о Мамаевом побоище по Лондонскому списку	1959 г.
Сказание об иконе Владимирской божьей матери и нахождении Темир-Аксака по Лондонскому списку	1959 г.
Варианты по Лондонскому списку	1959 г.
Никаноровская летопись	1962 г.
Сокращенный летописный свод 1493 года.	1962 г.
Сокращенный летописный свод 1495 года	1962 г.
Летописный свод 1497 года	1963 г.
Дополнение к летописному своду 1497 года	1963 года.
Летописный свод 1518 года (Уваровская летопись)	1963 г.
Дополнение к летописному своду 1518 г. по Синодально- ному списку № 645.	1963 г.
Летописец начала царства царя и великого князя Ивана Васильевича	1965 г.
Александр-Невская летопись	1965 г.
Продолжение Александро-Невской летописи	1965 г.
Владимирский летописец	1965 г.
Новгородская вторая (Архивская) летопись	1965 г.
Новгородская первая летопись старшего извода (Синодальный список)	1950 г.
Новгородская первая летопись младшего извода	1950 г.
Летопись по Лаврентьевскому списку. Повесть вре- менных лет	1962 г.
Суздальская летопись по Лаврентьевскому списку	1962 г.
Суздальская летопись. Продолжение по Академиче- скому списку	1962 г.
Ипатьевская летопись	1962 г.
Патриаршая или Никоновская летопись	1965 г.
Новгородская харатейная летопись	1964 г.

- Н. К. Гудзий: Хрестоматия по древней русской литературе 9-17 веков. ГУПИ, Москва, 1962 г.
- С. М. Соловьев: История России с древнейших времен ИСЭЛ, Москва 1959 г.
- В. Н. Татищев: История Российская. ИАНК СССР, Москва-Ленинград, 1962 г.
- Академия НК: История русской литературы. Москва 1958 г.
- Н. К. Гудзий: История древней русской литературы Москва 1956 г.
- Д. С. Лихачев: Культура Руси. Москва-Ленинград 1962 г.
- Н. Г. Бережков: Хронология Русского летописания Москва 1963 г.
- Б. А. Рыбаков: Древняя Русь Москва 1963 г.
- Г. П. Федотов: Святые Древней Руси Нью-Йорк 1960 г.
- Академия Наук: Исследования и материалы по Древне-русской литературе. Москва, 1961 г.
- Севернорусские сказки в записях А. И. Никифорова. Москва, 1961 г.
- В. Я. Пропп и Б. Н. Путилов: Былины. Москва, 1958 г.
- Академия Наук: Былины Печоры и Зимнего Берега. Москва, 1961 г.
- Академия Наук: Очерки по истории философской и общественно-политической мысли народов СССР. Москва, 1955 г.
- И. И. Срезневский: Материалы для словаря древне-русского языка том 1-3 Санктпетербург, 1893 г.
- Я. С. Спринчак: Очерк русского исторического синтаксика. Москва, 1960 г.

- Д. С. Лихачев: Повесть временных лет. ИАН СССР.
Москва-Ленинград 1950 г.
- Н. Н. Ильин: Летописная статья 6523 года и ее
источник. Москва 1957 г.
- Исследования и материалы по древнерусской литера-
туре. ИАН СССР. Москва 1961 г.
- И. И. Смирнов: Очерки социально-экономических
отношений Руси 12-13 веков.
Москва 1956 г.
- Труды отдела древнерусской литературы
том 12-Том 20.
Москва-Ленинград 1956 г. -- 1964 г.
- М. Ю. Брайчевский: Когда и как возник Киев
Киев 1964 г.
- В. Д. Королук: Западные славяне и Киевская Русь.
Москва 1964 г.
- Библиография Русского Летописания АН СССР
Москва-Ленинград 1962 г.
- Н. В. Водовозов: История древней русской литера-
туры. Москва 1958 г.